

下淵名塚越遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

（第一分冊）

本文編

1991

建設省
群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	財文藏理群	01-330
	業團保管	17-1
No. 3-157	平成 3 年 6 月 14 日	(5)

SIMO HUTI NA TUKA GOSI
下淵名塚越遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

（第一分冊）

本文編

1991

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県深谷市と本県の前橋市を結ぶ一般国道17号線のバイパスである上武道路は、既に、新田郡尾島町の国道354号線から前橋市今井町の国道50号線までの区間が開通・供用されており、通過市町村の産業経済の発展に大きく貢献しています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が分布しています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会及び当事業団により行われています。

本書は、昭和52年度～53年度に発掘調査をしました下淵名塚越遺跡の報告書ですが、古墳時代から平安時代に至る竪穴住居跡280軒、古墳13基等の貴重な調査成果が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、境町教育委員会、地元関係者等から種々ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願ひ序とします。

平成3年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 清水一郎

例 言

1. この報告書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に先行して行われた下淵名塚越遺跡の発掘調査の記録である。この遺跡は事業名称を「J K10 下淵名遺跡」として呼称していたが、その後遺跡名の適性化が図られ、遺跡所在地の大字・小字名を併記する方法をとることになった。その結果、本遺跡については、「下淵名塚越遺跡」という名称に変更している。

2. 下淵名塚越遺跡は、群馬県佐波郡境町下淵名に所在するが、現状は上武道路となっている。

3. 上武道路は建設省関東地方建設局が事業主体であり、これに伴う発掘調査は当初群馬県教育委員会が実施し、昭和53年度からは（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が引き継いで発掘と整理作業を実施した。

4. 調査、整理体制および期間は次のとおりである。

〈発掘調査〉昭和52年11月～昭和53年7月

群馬県教育委員会 [調査担当者] 井上唯雄、右島和夫、若月省吾、古郡正志

[事務局] 磯貝福七、森田秀策、白石保三郎、阿久津宗二、
飯塚喜代子、女屋等志

昭和53年7月～昭和54年2月

（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 [調査担当者] 右島和夫、飯田陽一、古郡正志

[事務局] 磯貝福七、森田秀策、阿久津宗二、飯塚喜代子、国定 均

〈整理作業〉昭和63年10月～平成2年3月

[整理担当者] 飯田陽一、原 雅信、大木紳一郎

[整理従事者] 浅井良子、大友美代子、小淵トモ子、笠井初子、金子吉江、
神谷順子、串渕すみ江、霜田恵子、関口貴子、高橋千代子、
田中晚美、田村紀子、土田三代子、新平美津子、萩原由美子、
橋爪美頼、馬場信子、藤井輝子、増田政子、徳田澄子、皆川正枝

[遺構写真撮影] 井上唯雄、右島和夫、飯田陽一、若月省吾、古郡正志、大木紳一郎

[遺物写真撮影] 佐藤元彦

[遺物保存処理] 関 邦一、北爪健二、小村浩一

[事務局] 白石保三郎、邊見長雄、松本浩一、田口紀雄、上原吾己、神保侑史、
桜場一寿、能登 健、住谷 進、笠原秀樹、小林昌嗣、須田朋子、
吉田有光、柳岡良宏
並木綾子、野島のぶ江、今井もと子、松井美智子、角田みづほ

5. 石器等石材の鑑定は、飯島静男氏（群馬地質研究会）、土器胎土分析は（株）パレオ・ラボと群馬県工業試験場に依頼している。

6. この報告書を作成するに際しては、次の方々に指導、助言を受けている。改めて感謝の意を表したい。

（故）尾崎喜左雄氏、金子規矩男氏、近藤義雄氏、坂爪久純氏、峯岸純夫氏、（故）山崎 一氏

7. 遺構名称は、原則として発掘調査時のものを踏襲するが、重番や欠番等による混乱を避けるため、一部修正しており、本文にこの旨を記した。

8. 報告書の編集は飯田陽一、大木紳一郎が担当し、執筆は「第1分冊 本文編」が大木紳一郎、「第2分冊 遺物観察表編」は飯田陽一が主体となり、他に各項目の執筆者については目次と文末に記した。

9. 本遺跡の記録保存資料および出土遺物は、現在群馬県埋蔵文化財調査センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管、仮管理されている。

10. 「本文編」に関する凡例は以下の通りである。なお「遺物観察表編」「写真図版編」の凡例は各冊の巻頭に掲げたので参考されたい。

〔遺構分類〕遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳、土墳墓、土器集積跡、館跡(堀)、道路跡、溝、方形竪穴遺構、柱穴列、井戸跡、土坑の種類別に分類し、検出位置の区域毎に順を追って記述した。それぞれの分類理由や特徴については各節でふれた。

〔遺構番号〕番号は竪穴住居跡、溝、井戸、土坑は各区毎、掘立柱建物跡、古墳、土墳墓、土器集積跡、道路跡、方形竪穴遺構は調査区全体の通番号とした。

〔位置〕遺構検出位置は、区とグリッド名で示し、全体の配置等については、各節のはじめに全体図を掲げて示した。

〔平面形〕見かけ上の形状から、大まかに方形、長方形、円形、楕円形、不定形に分類しており、これに隅丸、正、不整等を付して個々の特徴を表したもので、厳密な基準は設けていない。

〔規模〕検出面での長さ、幅、深さ等の最大値を計測して記した。ただし竪穴住居跡については各辺の長さを示してある。

〔方位〕挿図中の方位記号と本文記述はすべて国家座標上の北を基準としている。

〔遺物〕出土遺物のうち図示できるものについては可能な限り掲載し、掲載出来なかったものについては本文中に概要を記した。

〔重複遺構〕調査段階での所見をもとに、各遺構の新旧関係について記したが、明らかに矛盾するものについては、整理段階での再検討により変更を加えたものもある。

〔略称〕重複する遺構名については、スペースの関係で「1号竪穴住居跡」を「1号住」、「2号掘立柱建物跡」を「2掘立」、「ピット3」を「P3」のように用いているので注意されたい。

〔縮尺〕遺構は、竪穴住居跡1/60、掘立柱建物跡1/80、井戸・土坑1/40、カマド1/30を原則とし、古墳と溝については一定していないので挿図中のスケールを参照されたい。遺物は、大形土器1/4、小形土器・石器・鉄器・磁石1/3、石塔類・石臼1/6、内耳土器・瓦1/5、縄文・弥生式土器拓影1/2、その他小形品1/1~1/2を原則とした。

〔網掛け・黒潰し〕遺構図で使用した網掛け部分は焼土、粘土、灰の分布範囲を示す。遺物図の網掛け部分は灰釉、緑釉などの釉掛け部分、縄文土器における繊維混入を示し、また断面図の黒潰し部分は遺物の種類や質とは無関係である。

目 次 (第一分冊 本文編)

序

例 言

第 I 章 調査の経過 …………… 1

第 1 節 遺跡調査に至る経緯 ……………飯田 周一 1

第 2 節 調査の方法と経過 ……………飯田 周一 1

第 3 節 調査日誌抄 ……………飯田 周一 3

第 4 節 整理作業の経過 ……………飯田 周一 3

第 5 節 成果の報告と遺跡名 ……………飯田 周一 3

第 II 章 遺跡をとりまく環境 …… 4

第 1 節 遺跡周辺の地形 …………… 4

第 2 節 周辺の遺跡 …………… 6

第 III 章 検出された遺構と遺物 …… 11

第 1 節 竪穴住居跡 …………… 11

(1) I・II 区の竪穴住居跡 …………… 11

(2) III 区の竪穴住居跡 …………… 150

(3) IV 区の竪穴住居跡 …………… 221

(4) V・VI 区の竪穴住居跡 …………… 242

(5) VII 区の竪穴住居跡 …………… 256

第 2 節 掘立柱建物跡 …………… 278

第 3 節 古墳と埴輪 ……………右島 和夫 294

第 4 節 古墳時代の土壌墓 ……………右島 和夫 339

第 5 節 土器集積跡 …………… 344

第 6 節 中世館跡 …………… 353

第 7 節 道路跡 …………… 386

第 8 節 溝 …………… 389

第 9 節 方形竪穴遺構 …………… 418

第 10 節 柱穴列 …………… 422

第 11 節 井戸跡 …………… 426

第 12 節 土 坑 …………… 476

第 13 節 遺構外の遺物 …………… 521

(1) 旧石器～縄文時代の石器 ……岩崎 泰一 521

(2) 縄文時代の耳飾と土器 ……原 重信 526

(3) 弥生時代～古墳時代初頭の遺物 …… 528

(4) 古墳時代～平安時代の遺物 …… 535

(5) 中世・近世の遺物 …… 535

第 14 節 土器胎土分析 …………… 542

(1) 分析の目的 …………… 542

(2) 分析資料について …………… 542

下瀬名塚越遺跡の胎土分析—パレオ・ラボ

株式会社 …… 543

第 IV 章 結 語 …………… 550

第 1 節 出土遺物について ……………飯田 周一 550

第 2 節 集落の変遷 ……………大木 伸一郎 553

第 3 節 古墳群と埴輪 ……………右島 和夫 556

第 4 節 胎土分析結果について ……大木 伸一郎 566

挿 図 目 次

第 1 図 上武道路と調査区域…………… 2	第 36 図 II17号住居跡出土遺物及び出土位置… 33
第 2 図 遺跡の位置…………… 5	第 37 図 II19号住居跡及び出土遺物…………… 34
第 3 図 周辺地形区分図…………… 5	第 38 図 II19号住居跡出土遺物…………… 35
第 4 図 周辺の遺跡…………… 7	第 39 図 II20号住居跡カマド検出状況…………… 36
第 5 図 調査区域と関連遺跡…………… 9	第 40 図 II20号住居跡…………… 36
第 6 図 I・II区壑穴住居跡位置図…………… 12	第 41 図 II20号住居跡出土遺物及び出土位置… 37
第 7 図 I 2号住居跡カマド検出状況と復元図 13	第 42 図 II21号住居跡及び出土遺物…………… 38
第 8 図 I 1号・2号・3号住居跡…………… 14	第 43 図 II22号住居跡及び出土遺物…………… 39
第 9 図 I 1号住居跡出土遺物…………… 15	第 44 図 II23号住居跡…………… 40
第 10 図 I 2号住居跡出土遺物…………… 15	第 45 図 II25号住居跡出土遺物…………… 40
第 11 図 I 3号住居跡出土遺物…………… 15	第 46 図 II26号住居跡出土遺物…………… 40
第 12 図 I 4号住居跡及び出土遺物…………… 16	第 47 図 II25号・26号住居跡…………… 41
第 13 図 II 1号住居跡…………… 17	第 48 図 II28号住居跡及び出土遺物…………… 42
第 14 図 II 1号住居跡遺物(2)出土状況…………… 17	第 49 図 II29号住居跡出土遺物…………… 43
第 15 図 II 1号住居跡出土遺物…………… 18	第 50 図 II29号住居跡…………… 44
第 16 図 II 2号・3号・4号・5号住居跡…………… 19	第 51 図 II32号住居跡…………… 44
第 17 図 II 2号住居跡出土遺物…………… 20	第 52 図 II32号住居跡出土遺物…………… 45
第 18 図 II 3号住居跡出土遺物…………… 20	第 53 図 II33号住居跡及び出土遺物…………… 45
第 19 図 II 4号住居跡出土遺物…………… 21	第 54 図 II34号・35号・36号・37号・38号住居跡… 46
第 20 図 II 6号住居跡…………… 21	第 55 図 II34号住居跡出土遺物…………… 46
第 21 図 II 6号住居跡出土遺物…………… 22	第 56 図 II35号住居跡出土遺物…………… 47
第 22 図 II 7号住居跡及び出土遺物…………… 22	第 57 図 II36号住居跡出土遺物…………… 47
第 23 図 II 8号住居跡…………… 23	第 58 図 II37号住居跡出土遺物…………… 48
第 24 図 II 8号住居跡出土遺物…………… 24	第 59 図 II38号住居跡出土遺物…………… 49
第 25 図 II 9号住居跡…………… 24	第 60 図 II40号住居跡…………… 49
第 26 図 II 9号住居跡出土遺物…………… 25	第 61 図 II40号住居跡出土遺物…………… 50
第 27 図 II10号住居跡及び出土遺物…………… 26	第 62 図 II41号住居跡…………… 50
第 28 図 II11号住居跡…………… 26	第 63 図 II41号住居跡出土遺物…………… 50
第 29 図 II12号住居跡及び出土遺物…………… 27	第 64 図 II42号住居跡及び出土遺物…………… 51
第 30 図 II13号住居跡及び出土遺物…………… 28	第 65 図 II43号～45号住居跡及び遺物出土位置 52
第 31 図 II14号住居跡及び出土遺物…………… 29	第 66 図 II43号住居跡出土遺物…………… 52
第 32 図 II15号住居跡及び出土遺物…………… 30	第 67 図 II44号住居跡出土遺物…………… 53
第 33 図 II16号住居跡…………… 31	第 68 図 II45号住居跡出土遺物…………… 53
第 34 図 II16号住居跡出土遺物…………… 31	第 69 図 II46号住居跡…………… 54
第 35 図 II17号住居跡…………… 32	第 70 図 II46号住居跡出土遺物…………… 55
	第 71 図 II47号住居跡及び出土遺物…………… 56
	第 72 図 II48号住居跡及び出土遺物…………… 57
	第 73 図 II49号住居跡出土遺物…………… 57

第74図	II49号・50号住居跡……………	58	第112図	II80号住居跡出土遺物……………	83
第75図	II50号住居跡出土遺物……………	58	第113図	II81号住居跡及び出土遺物……………	84
第76図	II51号住居跡……………	59	第114図	II82号住居跡……………	85
第77図	II51号住居跡出土遺物……………	60	第115図	II82号住居跡出土遺物……………	86
第78図	II52号住居跡……………	60	第116図	II83号・84号・86号住居跡及び重複関係 模式図……………	87
第79図	II52号住居跡及び4号古墳周堀出土遺物……………	61	第117図	II83号住居跡出土遺物……………	88
第80図	II60号住居跡……………	62	第118図	II84号住居跡出土遺物……………	88
第81図	II60号住居跡カマド検出状況……………	62	第119図	II85号住居跡出土遺物……………	88
第82図	II60号住居跡出土遺物……………	63	第120図	II85号住居跡……………	89
第83図	II61号住居跡及び出土遺物……………	64	第121図	II86号住居跡出土遺物……………	89
第84図	II62号・63号住居跡……………	65	第122図	II88号住居跡……………	90
第85図	II63号住居跡伊付近遺物出土状況……………	66	第123図	II88号住居跡出土遺物……………	90
第86図	II63号住居跡遺物出土位置……………	66	第124図	II90号住居跡……………	91
第87図	II63号住居跡出土遺物……………	67	第125図	II91号・92号住居跡……………	91
第88図	II64号住居跡……………	68	第126図	II91号住居跡出土遺物……………	92
第89図	II64号住居跡カマド検出状況……………	68	第127図	II92号住居跡出土遺物……………	92
第90図	II64号住居跡出土遺物……………	69	第128図	II93号住居跡……………	93
第91図	II65号住居跡及び出土遺物……………	70	第129図	II94号住居跡……………	93
第92図	II65号住居跡遺物出土状況……………	70	第130図	II94号住居跡出土遺物……………	94
第93図	II66号住居跡及び出土遺物……………	71	第131図	II95号・96号住居跡及び95号住居跡出土 遺物……………	94
第94図	II67号住居跡及び出土遺物……………	72	第132図	II96号住居跡出土遺物……………	95
第95図	II68号住居跡……………	72	第133図	II97号住居跡及び出土遺物……………	95
第96図	II68号住居跡出土遺物……………	73	第134図	II98号住居跡及び出土遺物……………	96
第97図	II69号・70号住居跡及び出土遺物……………	74	第135図	II98号住居跡貯蔵穴遺物出土状況……………	96
第98図	II71号住居跡……………	75	第136図	II99号・100号住居跡及び99号住居跡出 土遺物……………	97
第99図	II71号住居跡出土遺物……………	75	第137図	II100号住居跡出土遺物……………	97
第100図	II72号住居跡……………	76	第138図	II101号住居跡及び遺物出土状況……………	98
第101図	II72号住居跡出土遺物……………	77	第139図	II101号住居跡出土遺物……………	98
第102図	II73号・75号住居跡……………	78	第140図	II102号住居跡……………	99
第103図	II73号住居跡出土遺物……………	78	第141図	II102号住居跡柱穴配置……………	100
第104図	II74号住居跡……………	79	第142図	II102号住居跡出土遺物……………	100
第105図	II74号住居跡出土遺物(1)……………	79	第143図	II103号住居跡……………	101
第106図	II74号住居跡出土遺物(2)……………	80	第144図	II103号住居跡出土遺物……………	101
第107図	II75号住居跡出土遺物……………	81	第145図	II105号・106号・107号住居跡……………	102
第108図	II76号住居跡及び出土遺物……………	81	第146図	II106号住居跡出土遺物……………	103
第109図	II77号住居跡及び出土遺物……………	82			
第110図	II79号住居跡及び出土遺物……………	82			
第111図	II80号住居跡……………	83			

第147図	II 107号住居跡出土遺物	103	第184図	II 138号住居跡	123
第148図	II 108号住居跡出土遺物	103	第185図	II 138号住居跡出土遺物	124
第149図	II 108号・109号・110号住居跡	104	第186図	II 139号住居跡及び出土遺物	124
第150図	II 109号住居跡出土遺物	104	第187図	II 140号住居跡	125
第151図	II 111号・117号住居跡	105	第188図	II 141号住居跡及び出土遺物	125
第152図	II 111号住居跡出土遺物	106	第189図	II 142号・143号住居跡	126
第153図	II 113号住居跡	107	第190図	II 142号住居跡出土遺物	126
第154図	II 113号住居跡出土遺物	107	第191図	II 143号住居跡出土遺物	126
第155図	II 114号住居跡及び出土遺物	108	第192図	II 144号・158号住居跡及び144号住居跡 出土遺物	127
第156図	II 115号住居跡	108	第193図	II 145号住居跡	128
第157図	II 115号住居跡出土遺物	109	第194図	II 145号住居跡出土遺物	129
第158図	II 116号住居跡及び出土遺物	109	第195図	II 146号住居跡及び出土遺物	130
第159図	II 117号住居跡出土遺物	110	第196図	II 147号住居跡及び出土遺物	131
第160図	II 118号住居跡及び出土遺物	111	第197図	II 148号・149号住居跡及び148号住居跡 出土遺物	131
第161図	II 119号住居跡	111	第198図	II 149号住居跡出土遺物	132
第162図	II 119号住居跡出土遺物	112	第199図	II 150号住居跡	132
第163図	II 120号住居跡	112	第200図	II 150号住居跡出土遺物	132
第164図	II 120号住居跡出土遺物	113	第201図	II 151号住居跡	133
第165図	II 122号住居跡	113	第202図	II 151号住居跡出土遺物	133
第166図	II 122号住居跡出土遺物	113	第203図	II 152号住居跡カメラ検出状況	134
第167図	II 123号住居跡	114	第204図	II 152号住居跡	135
第168図	II 123号住居跡出土遺物	114	第205図	II 152号住居跡出土遺物	136
第169図	II 124号住居跡	114	第206図	II 153号住居跡及び出土遺物	137
第170図	II 124号住居跡出土遺物	115	第207図	II 154号住居跡	138
第171図	II 125号住居跡	115	第208図	II 154号住居跡出土遺物	139
第172図	II 125号住居跡出土遺物	115	第209図	II 155号住居跡	139
第173図	II 126号・127号住居跡及び126号住居跡 出土遺物	116	第210図	II 155号住居跡出土遺物	140
第174図	II 178号住居跡及び出土遺物	117	第211図	II 156号住居跡	140
第175図	II 129号住居跡及び出土遺物	118	第212図	II 158号住居跡出土遺物	141
第176図	II 130号住居跡	119	第213図	II 159号住居跡出土遺物	141
第177図	II 131号住居跡及び出土遺物	119	第214図	II 159号住居跡	142
第178図	II 132号住居跡	120	第215図	II 160号住居跡	143
第179図	II 132号住居跡出土遺物	121	第216図	II 160号住居跡出土遺物	143
第180図	II 134号住居跡及び出土遺物	121	第217図	II 161号・164号住居跡及び161号住居跡 出土遺物	144
第181図	II 135号住居跡及び出土遺物	122	第218図	II 162号住居跡	144
第182図	II 136号住居跡	122			
第183図	II 137号住居跡	123			

第219図	II 162号住居跡出土遺物	145	第257図	III17号住居跡及び出土遺物	173
第220図	II 163号住居跡及び出土遺物	146	第258図	III18号住居跡	174
第221図	II 164号住居跡出土遺物	146	第259図	III18号住居跡出土遺物	174
第222図	II 165号住居跡	147	第260図	III19号住居跡	175
第223図	II 167号・168号住居跡	147	第261図	III19号住居跡出土遺物及びカマド遺物 出土状況	176
第224図	II 168号住居跡出土遺物	148	第262図	III20号住居跡及び出土遺物	177
第225図	II 169号住居跡	148	第263図	III21号住居跡出土遺物	178
第226図	II 170号・171号住居跡	149	第264図	III22号住居跡	178
第227図	II 172号住居跡	149	第265図	III13号・23号住居跡	178
第228図	III区竪穴住居跡位置図	150	第266図	III13号・23号住居跡出土遺物	179
第229図	III1号住居跡及び出土遺物	151	第267図	III24号住居跡及び出土遺物	179
第230図	III 2号住居跡	152	第268図	III25号住居跡及び出土遺物	180
第231図	III 2号住居跡出土遺物	152	第269図	III25号住居跡カマド検出状況	180
第232図	III 3号住居跡出土遺物	153	第270図	III26号住居跡カマド検出状況	181
第233図	III 3号住居跡	154	第271図	III26号住居跡	181
第234図	III 4号住居跡カマド検出状況	155	第272図	III27号住居跡及び出土遺物	182
第235図	III 4号住居跡及び出土遺物	155	第273図	III28号住居跡及び出土遺物	183
第236図	III 5号住居跡及び出土遺物	156	第274図	III29号住居跡	184
第237図	III 5号住居跡カマド検出状況	156	第275図	III29号住居跡出土遺物	185
第238図	III 6号住居跡貯蔵穴遺物出土状況	157	第276図	III30号住居跡	186
第239図	III 6号住居跡	158	第277図	III30号住居跡出土遺物(1)	187
第240図	III 6号住居跡出土遺物(1)	159	第278図	III30号住居跡出土遺物(2)	188
第241図	III 6号住居跡出土遺物(2)	160	第279図	III31号住居跡及び出土遺物	189
第242図	III 7号住居跡出土遺物	160	第280図	III32号住居跡	190
第243図	III 7号住居跡	161	第281図	III32号住居跡(上)と33号住居跡(下)	190
第244図	III 8号住居跡	162	第282図	III33号住居跡及び出土遺物	191
第245図	III 8号住居跡出土遺物	163	第283図	III34号住居跡及び出土遺物	192
第246図	III 9号住居跡カマド検出状況	163	第284図	III35号住居跡及び出土遺物	193
第247図	III 9号住居跡及び出土遺物	164	第285図	III36号住居跡及び出土遺物	194
第248図	III10号住居跡	165	第286図	III37号住居跡及び出土遺物	195
第249図	III10号住居跡出土遺物	166	第287図	III37号住居跡出土遺物	196
第250図	III11号住居跡及び出土遺物	167	第288図	III38号住居跡	196
第251図	III12号住居跡及び出土遺物	168	第289図	III38号住居跡出土遺物	197
第252図	III14号・15号住居跡	169	第290図	III39号住居跡検出状況と出土遺物	197
第253図	III15号住居跡出土遺物	170	第291図	III39号住居跡	198
第254図	III15号住居跡遺物出土状況	170	第292図	III40号・41号住居跡	199
第255図	III16号住居跡出土遺物	171	第293図	III40号住居跡出土遺物	200
第256図	III16号・21号住居跡	172			

第294図	Ⅲ41号住居跡出土遺物	200	第331図	Ⅳ3号・5号住居跡	226
第295図	Ⅲ42号住居跡及び出土遺物	201	第332図	Ⅳ3号住居跡出土遺物	227
第296図	Ⅲ43号住居跡	202	第333図	Ⅳ3号住居跡カマド遺物出土状況	228
第297図	Ⅲ43号住居跡出土遺物	203	第334図	Ⅳ3号住居跡灰軸皿出土状況	228
第298図	Ⅲ44号住居跡	204	第335図	Ⅳ4号住居跡カマド遺物出土状況	228
第299図	Ⅲ44号住居跡出土遺物	205	第336図	Ⅳ4号・7号住居跡	229
第300図	Ⅲ45号住居跡	206	第337図	Ⅳ4号住居跡出土遺物	230
第301図	Ⅲ45号住居跡出土遺物	206	第338図	Ⅳ5号住居跡	230
第302図	Ⅲ46号住居跡及び出土遺物	207	第339図	Ⅳ5号住居跡出土遺物	231
第303図	Ⅲ47号住居跡	208	第340図	Ⅳ6号住居跡出土遺物	231
第304図	Ⅲ48号住居跡	208	第341図	Ⅳ6号住居跡	232
第305図	Ⅲ48号住居跡出土遺物	209	第342図	Ⅳ8号住居跡及び出土遺物	233
第306図	Ⅲ49号・50号住居跡	209	第343図	Ⅳ9号住居跡	234
第307図	Ⅲ49号住居跡出土遺物	210	第344図	Ⅳ9号住居跡出土遺物	234
第308図	Ⅲ51号住居跡	210	第345図	Ⅳ10号・14号住居跡	235
第309図	Ⅲ52号住居跡	210	第346図	Ⅳ10号住居跡出土遺物	236
第310図	Ⅲ52号住居跡出土遺物	211	第347図	Ⅳ11号住居跡及び出土遺物	237
第311図	Ⅲ53号住居跡	211	第348図	Ⅳ12号・13号・18号住居跡	238
第312図	Ⅲ53号住居跡出土遺物	212	第349図	Ⅳ12号・13号・18号住居跡出土遺物	239
第313図	Ⅲ54号住居跡出土遺物	212	第350図	Ⅳ14号住居跡出土遺物	239
第314図	Ⅲ54号住居跡	213	第351図	Ⅳ15号住居跡遺物出土状況	240
第315図	Ⅲ55号・56号住居跡及び55号住居跡出土遺物	214	第352図	Ⅳ15号住居跡及び出土遺物	240
第316図	Ⅲ56号住居跡出土遺物	215	第353図	Ⅳ16号住居跡	241
第317図	Ⅲ57号住居跡	216	第354図	Ⅳ12号・18号住居跡遺物出土状況	242
第318図	Ⅲ57号住居跡出土遺物	216	第355図	V・VI区堅穴住居跡位置図	243
第319図	Ⅲ58号住居跡	216	第356図	V1号住居跡及び出土遺物	244
第320図	Ⅲ60号住居跡	217	第357図	VI1号住居跡	245
第321図	Ⅲ60号住居跡出土遺物	218	第358図	VI2号住居跡	245
第322図	Ⅲ61号住居跡出土遺物(1)	218	第359図	VI3号・4号住居跡及び出土遺物	246
第323図	Ⅲ61号住居跡	219	第360図	VI5号住居跡カマド及び出土遺物	247
第324図	Ⅲ61号住居跡出土遺物(2)	220	第361図	VI5号住居跡	248
第325図	Ⅳ区全景	221	第362図	VI6号住居跡	249
第326図	Ⅳ区堅穴住居跡位置図	222	第363図	VI7号住居跡	249
第327図	Ⅳ1号住居跡及び出土遺物	223	第364図	VI7号住居跡出土遺物	250
第328図	Ⅳ1号住居跡検出状況	223	第365図	VI8号住居跡	250
第329図	Ⅳ2号住居跡出土遺物	224	第366図	VI8号住居跡出土遺物	251
第330図	Ⅳ2号住居跡	225	第367図	VI9号住居跡	251
			第368図	VII10号住居跡	251

第369図	VII0号住居跡出土遺物	252	第407図	2号掘立柱建物跡	281
第370図	VII2号住居跡	252	第408図	3号掘立柱建物跡	282
第371図	VII2号住居跡出土遺物	253	第409図	4号掘立柱建物跡及び出土遺物	283
第372図	VII3号住居跡	254	第410図	5号掘立柱建物跡	284
第373図	VII4号住居跡	254	第411図	6号掘立柱建物跡	285
第374図	VII5号住居跡	255	第412図	7号掘立柱建物跡出土遺物	286
第375図	VII5号住居跡出土遺物	255	第413図	8号掘立柱建物跡出土遺物	286
第376図	VII6号住居跡	256	第414図	9号掘立柱建物跡出土遺物	286
第377図	VII区全景	256	第415図	7号掘立柱建物跡	287
第378図	VII区竪穴住居跡位置図	257	第416図	8号掘立柱建物跡	288
第379図	VII 1号住居跡及び出土遺物	258	第417図	9号掘立柱建物跡	289
第380図	VII 2号住居跡及び出土遺物	259	第418図	10号掘立柱建物跡出土遺物	290
第381図	VII 3号住居跡	260	第419図	10号・11号掘立柱建物跡	291
第382図	VII 3号住居跡出土遺物	260	第420図	12号掘立柱建物跡	292
第383図	VII 4号住居跡及び出土遺物	261	第421図	13号掘立柱建物跡	292
第384図	VII 5号住居跡及び出土遺物	262	第422図	14号掘立柱建物跡	293
第385図	VII 6号・7号住居跡	263	第423図	15号掘立柱建物跡	293
第386図	VII 6号住居跡出土遺物	264	第424図	古墳位置図	294
第387図	VII 7号住居跡出土遺物	264	第425図	1号古墳出土遺物	295
第388図	VII 8号住居跡出土遺物	265	第426図	1号古墳及び遺物出土状況	296
第389図	VII 8号・9号住居跡	266	第427図	1号古墳出土地輪	297
第390図	VII10号住居跡及び出土遺物	267	第428図	2号古墳周堀土層断面図	298
第391図	VII11号住居跡	268	第429図	2号古墳	299
第392図	VII11号住居跡出土遺物	268	第430図	2号古墳出土遺物	300
第393図	VII12号住居跡	269	第431図	3号古墳	302
第394図	VII12号住居跡カマドと復元図	270	第432図	3号古墳出土地輪(1)	303
第395図	VII12号住居跡出土遺物(1)	270	第433図	3号古墳出土地輪(2)	304
第396図	VII12号住居跡出土遺物(2)	271	第434図	3号古墳出土遺物	305
第397図	VII12号住居跡出土遺物(3)	272	第435図	4号古墳	306
第398図	VII13号住居跡及び出土遺物	273	第436図	4号古墳出土地輪(1)	307
第399図	VII14号住居跡出土遺物	274	第437図	4号古墳出土地輪(2)	308
第400図	VII14号住居跡	275	第438図	4号古墳出土遺物	309
第401図	VII15号住居跡	276	第439図	5号古墳出土地輪	310
第402図	VII15号住居跡出土遺物	277	第440図	5号古墳	311
第403図	VII16号住居跡	277	第441図	6号古墳出土遺物	312
第404図	掘立柱建物跡位置図	278	第442図	6号古墳	313
第405図	2号掘立柱建物跡出土遺物	279	第443図	6号古墳出土地輪	314
第406図	1号掘立柱建物跡	280	第444図	7号古墳	315

第445図	7号古墳出土遺物と出土状況	316	第483図	2号土器集積跡出土遺物3)	350
第446図	8号古墳	318	第484図	2号土器集積跡出土遺物4)	351
第447図	8号古墳主体部検出状況	319	第485図	2号土器集積跡出土遺物5)	352
第448図	8号古墳主体部粘土被覆状況図	319	第486図	館跡全体図	353
第449図	8号古墳埋葬主体部	320	第487図	館跡推定図	353
第450図	8号古墳石柵展開図	321	第488図	VI 1号溝	355
第451図	8号古墳出土刀子	321	第489図	VI 1号溝出土遺物1)	356
第452図	8号古墳主体部埋葬過程模式図	322	第490図	VI 1号溝出土遺物2)	357
第453図	8号古墳出土遺物	323	第491図	VI 1号溝出土遺物3)	358
第454図	9号古墳	324	第492図	VI 1号溝出土遺物4)	359
第455図	9号古墳出土埴輪	325	第493図	VI 1号溝出土遺物5)	360
第456図	11号古墳出土遺物	326	第494図	VI 1号溝出土遺物6)	361
第457図	10号古墳	327	第495図	VI 2号・3号・4号溝・VII 6号溝	362
第458図	10号古墳周堀土層断面図	328	第496図	VI 2号溝出土遺物	363
第459図	10号古墳出土埴輪	329	第497図	VI 3号溝出土遺物1)	363
第460図	11号古墳	330	第498図	VI 3号溝出土遺物2)	364
第461図	12号古墳	332	第499図	VI 4号溝出土遺物	364
第462図	13号古墳	333	第500図	VI 5号溝	365
第463図	遺構外出土埴輪1)	334	第501図	VI 5号溝出土遺物1)	366
第464図	遺構外出土埴輪2)	335	第502図	VI 5号溝出土遺物2)	367
第465図	遺構外出土埴輪3)	336	第503図	VI 5号溝出土遺物3)	368
第466図	遺構外出土埴輪4)	337	第504図	VI 5号溝出土遺物4)	369
第467図	遺構外出土埴輪5)	338	第505図	VI 5号溝出土遺物5)	370
第468図	1号土墳墓検出状況	339	第506図	VI 5号溝出土遺物6)	371
第469図	1号土墳墓検出位置図	339	第507図	VI 5号溝出土遺物7)	372
第470図	1号土墳墓検出状況	340	第508図	VI 6号溝出土遺物	372
第471図	1号土墳墓掘り方	340	第509図	VI 6号~13号溝	373
第472図	2号・3号・4号土墳墓位置図	341	第510図	VI 7号溝出土遺物	374
第473図	2号土墳墓	342	第511図	VI 8号溝出土遺物	375
第474図	3号土墳墓	342	第512図	VI 9号溝出土遺物	375
第475図	4号土墳墓及び掘り方	343	第513図	VII 1号溝	376
第476図	1号土器集積跡	344	第514図	VII 1号溝出土遺物1)	377
第477図	1号土器集積跡出土遺物1)	345	第515図	VII 1号溝出土遺物2)	378
第478図	1号土器集積跡出土遺物2)	346	第516図	VII 1号溝出土遺物3)	379
第479図	1号土器集積跡出土遺物3)	347	第517図	VII 1号溝出土遺物4)	380
第480図	2号土器集積跡出土遺物1)	348	第518図	VII 1号溝出土遺物5)	381
第481図	2号土器集積跡	348	第519図	VII 1号溝出土遺物6)	382
第482図	2号土器集積跡出土遺物2)	349	第520図	VII 2号溝出土遺物	383

第521图	VII 4号溝出土遺物(1)·····	383	第559图	V 5号溝出土遺物(2)·····	415
第522图	VII 4号・5号溝·····	384	第560图	V 5号溝出土遺物(3)·····	416
第523图	VII 4号溝出土遺物(2)·····	385	第561图	VIII 1号溝·····	417
第524图	VII 5号溝出土遺物·····	385	第562图	方形竪穴遺構位置図·····	418
第525图	道路推定図·····	386	第563图	IV 1号方形竪穴遺構·····	419
第526图	1号道路跡·····	386	第564图	V 1号方形竪穴遺構·····	419
第527图	1号道路側溝出土遺物·····	387	第565图	V 2号方形竪穴遺構·····	419
第528图	2号道路側溝出土遺物·····	387	第566图	V 3号方形竪穴遺構·····	419
第529图	2号道路跡·····	388	第567图	V 1号方形竪穴遺構出土遺物·····	420
第530图	I 3号溝出土遺物·····	389	第568图	V 2号方形竪穴遺構出土遺物·····	420
第531图	I 3号・4号溝·····	389	第569图	V 4号方形竪穴遺構·····	420
第532图	II 1号溝出土遺物·····	390	第570图	VI 1号方形竪穴遺構及び出土遺物·····	421
第533图	II 1号・2号溝·····	391	第571图	柱穴列全体図·····	422
第534图	II 2号溝出土遺物·····	392	第572图	1号柱穴列·····	423
第535图	IV 1号・2号・4号・6号溝·····	393	第573图	2号柱穴列·····	425
第536图	IV 1号溝出土遺物·····	394	第574图	I・II・III区井戸跡位置図·····	426
第537图	IV 2号溝出土遺物(1)·····	395	第575图	IV・V・VI・VII区井戸跡位置図·····	427
第538图	IV 2号溝出土遺物(2)·····	396	第576图	I 2号井戸跡及び出土遺物·····	428
第539图	IV 2号溝出土遺物(3)·····	397	第577图	II 1号井戸跡·····	428
第540图	IV 2号溝出土遺物(4)·····	398	第578图	II 2号・3号・4号井戸跡·····	429
第541图	IV 4号溝出土遺物·····	398	第579图	II 5号井戸跡·····	429
第542图	IV 3号溝出土遺物·····	399	第580图	II 6号井戸跡·····	430
第543图	IV 3号・5号・7号・8号溝·····	400	第581图	II 7号・8号・9号・10号・11号井戸跡·····	431
第544图	IV 5号溝出土遺物·····	401	第582图	III 1号・2号・3号井戸跡·····	432
第545图	V 1号・2号溝·····	401	第583图	III 4号・5号・6号井戸跡·····	433
第546图	V 4号溝遺物出土状況·····	402	第584图	IV 1号・2号・3号井戸跡·····	434
第547图	V 3号・4号溝·····	403	第585图	IV 4号井戸跡及び出土遺物·····	435
第548图	V 3号溝出土遺物·····	404	第586图	IV 5号・6号・7号・8号井戸跡·····	436
第549图	V 4号溝出土遺物(1)·····	405	第587图	IV 9号・10号井戸跡·····	437
第550图	V 4号溝出土遺物(2)·····	406	第588图	IV 11号井戸跡及び出土遺物·····	437
第551图	V 4号溝出土遺物(3)·····	407	第589图	IV 12号井戸跡及び出土遺物·····	438
第552图	V 4号溝出土遺物(4)·····	408	第590图	IV 13号井戸跡·····	438
第553图	V 4号溝出土遺物(5)·····	409	第591图	IV 14号井戸跡及び出土遺物·····	439
第554图	V 4号溝出土遺物(6)·····	410	第592图	IV 15号・16号・17号井戸跡·····	440
第555图	V 4号溝出土遺物(7)·····	411	第593图	IV 18号井戸跡及び出土遺物·····	440
第556图	V 4号溝出土遺物(8)·····	412	第594图	IV 19号井戸跡及び出土遺物·····	441
第557图	V 5号・6号・7号・8号溝·····	413	第595图	IV 20号井戸跡·····	441
第558图	V 5号溝出土遺物(1)·····	414	第596图	V 1号井戸跡及び出土遺物·····	442

第597図	V 2号井戸跡及び出土遺物	442	第635図	VI32号井戸跡	466
第598図	V 3号井戸跡	443	第636図	VI32号井戸跡出土遺物	466
第599図	V 3号井戸跡及び出土遺物	443	第637図	VI33号井戸跡出土遺物	467
第600図	V 4号井戸跡及び出土遺物	444	第638図	VI34号井戸跡出土遺物	467
第601図	V 5号井戸跡及び出土遺物	444	第639図	VI33号～37号井戸跡	468
第602図	V 6号井戸跡及び出土遺物	445	第640図	VI38号井戸跡	469
第603図	V 7号井戸跡	445	第641図	VI38号井戸跡出土遺物(1)	469
第604図	V 7号井戸跡出土遺物	446	第642図	VI38号井戸跡出土遺物(2)	470
第605図	V 8号・9号井戸跡	446	第643図	VII 1号井戸跡	470
第606図	V10号・11号・12号井戸跡	447	第644図	VII 1号井戸跡出土遺物	471
第607図	V13号井戸跡及び出土遺物	448	第645図	VII 2号井戸跡及び出土遺物	471
第608図	V14号井戸跡	448	第646図	VII 4号井戸跡出土遺物	472
第609図	V14号井戸跡出土遺物(1)	449	第647図	VII 3号・4号・5号・6号井戸跡	473
第610図	V14号井戸跡出土遺物(2)	450	第648図	VII 7号井戸跡及び出土遺物	474
第611図	V15号井戸跡及び出土遺物	451	第649図	VII 8号井戸跡	475
第612図	V16号井戸跡及び出土遺物	452	第650図	I・II・III区土坑位置図	476
第613図	VI 1号井戸跡及び出土遺物	453	第651図	IV・V・VI・VII区土坑位置図	477
第614図	VI 2号井戸跡	453	第652図	I 1号土坑出土遺物	478
第615図	VI 3号井戸跡及び出土遺物	454	第653図	I 2号土坑出土遺物	478
第616図	VI 3号井戸跡出土遺物	455	第654図	I 3号土坑出土遺物	478
第617図	VI 4号井戸跡	455	第655図	I 1号～6号土坑	479
第618図	VI 4号井戸跡出土遺物	456	第656図	I 4号土坑出土遺物	480
第619図	VI 5号・6号井戸跡	457	第657図	II 1号土坑出土遺物	481
第620図	VI 7号・8号・9号・14号井戸跡	458	第658図	II 1号～6号土坑	482
第621図	VI 8号井戸跡出土遺物	459	第659図	II 7号～11号土坑	483
第622図	VII14号井戸跡出土遺物	459	第660図	II 7号土坑出土遺物	484
第623図	VII10号・11号・12号・13号井戸跡	460	第661図	II 9号土坑出土遺物	484
第624図	VII15号井戸跡出土遺物	460	第662図	II12号土坑出土遺物	484
第625図	VII15号・16号・17号・18号井戸跡	461	第663図	II12号～17号土坑	485
第626図	VII19号井戸跡	462	第664図	II13号土坑出土遺物	486
第627図	VII19号井戸跡出土遺物	462	第665図	II18号土坑出土遺物	487
第628図	VI20号・21号井戸跡	462	第666図	II18号～21号土坑	488
第629図	VI22号井戸跡	463	第667図	II26号土坑出土遺物	489
第630図	VI22号井戸跡出土遺物	463	第668図	II27号土坑出土遺物	489
第631図	VI23号井戸跡出土遺物	464	第669図	II22号～27号土坑	490
第632図	VI26号井戸跡出土遺物	464	第670図	II31号土坑出土遺物	491
第633図	VI27号井戸跡出土遺物	464	第671図	II32号土坑出土遺物	491
第634図	VI23号～31号井戸跡	465	第672図	II33号土坑出土遺物	491

第673図	Ⅱ28号～33号土坑	492
第674図	Ⅱ36号土坑出土遺物	493
第675図	Ⅱ39号土坑出土遺物	493
第676図	Ⅱ34号～39号土坑	494
第677図	Ⅱ44号土坑出土遺物	495
第678図	Ⅱ40号～44号土坑	496
第679図	Ⅱ45号～48号土坑	498
第680図	Ⅱ50号～54号土坑	500
第681図	Ⅱ55号～60号土坑	501
第682図	Ⅱ61号～63号土坑	503
第683図	Ⅱ64号～67号土坑	504
第684図	Ⅱ64号土坑出土遺物	505
第685図	Ⅱ65号土坑出土遺物	505
第686図	Ⅱ67号土坑出土遺物	505
第687図	Ⅱ68号～71号土坑	506
第688図	Ⅲ1号～4号土坑	508
第689図	Ⅲ5号～10号土坑	509
第690図	Ⅲ11号土坑及び出土遺物	511
第691図	Ⅲ12号～19号土坑	512
第692図	Ⅲ19号土坑出土遺物	513
第693図	Ⅲ20号～26号土坑	515
第694図	Ⅳ1号土坑	516
第695図	V1号～6号土坑	517
第696図	V7号～13号土坑	519
第697図	Ⅵ1号・2号土坑	520
第698図	Ⅶ1号土坑	520
第699図	旧石器時代の石器	521
第700図	縄文時代の石器(1)	523
第701図	縄文時代の石器(2)	524
第702図	縄文時代の石器(3)	525
第703図	遺構外出土球状耳飾	526
第704図	遺構外出土縄文式土器	527
第705図	遺構外出土弥生式土器(1)	529
第706図	遺構外出土弥生式土器(2)	530
第707図	遺構外出土弥生式土器(3)	531
第708図	遺構外出土弥生式土器(4)	532
第709図	遺構外出土弥生式土器(5)	533
第710図	遺構外出土外来系土器(1)	534

第711図	遺構外出土外来系土器(2)	535
第712図	遺構外出土土瓦	536
第713図	遺構外出土遺物(古墳～平安時代)	537
第714図	遺構外出土遺物(白磁・青磁)	537
第715図	遺構外出土遺物(中世～近世)	538
第716図	遺構外出土遺物(中世～近世)	539
第717図	遺構外出土遺物(中世～近世)	540
第718図	遺構外出土古銭	541
第719図	胎土分析資料	542
第720図	8世紀の遺構	553
第721図	下淵名古墳群出土の円筒埴輪	556
第722図	下淵名古墳群出土円筒埴輪のヘラ描き	558
第723図	赤穂町地蔵山古墳群全体図	562
第724図	粕川村白藤古墳群全体図	563
第725図	遺跡全体図 (巻末)	567

表 目 次

表 1	1号柱穴ピット規模一覧表	424
表 2	2号柱穴ピット規模一覧表	424
表 3	縄文土器集計表	526
表 4	分析試料の記載	544
表 5	胎土分析結果	546
表 6	分析結果の主な特徴	548
表 7	下淵名古墳群調査古墳一覧	560
表 8	群馬県の主要初現期群集墳	564

第I章 調査の経過

第1節 遺跡調査に至る経緯

昭和46年、建設省は上武道路(国道17号バイパス)建設計画を発表した。これをうけて、群馬県教育委員会は予定路線地域内の埋蔵文化財の分布調査を実施し、昭和48年4月には建設省と群馬県教育委員会との間で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が取り交わされ、新田郡尾島町から前橋市二之宮町までの約22キロメートルの区間内において、埋蔵文化財の発掘調査が実施されることになった。本遺跡はこの路線内の南側から10番目の遺跡として、「下瀧名遺跡」と命名され、JK10の遺跡番号が付けられることとなった。本調査地区は昭和46年群馬県教育委員会発行の「群馬県遺跡台帳(東毛編)」に周知の遺跡として次のように記されている。

「早川右岸と丘陵の間にあつて台地上に位置している。東沼の北にある。桑畑、畑。須恵器片と土師器片が多数散布している。当分の間、現状のまま保存されるとみられる。」

また昭和45年度には上武道路建設計画との調整を図るために希望路線を中心とした幅2キロメートルの分布調査を実施しており、本調査区域については大國神社東方台地上での土器散布が認められ、更に中世館跡の存在が知られると記録されている。これらの記録は表面採集による分布調査を元にしたもので、遺跡の範囲や内容について詳細を欠くが、台地の東側にはきわめて広い範囲にわたる遺跡の存在が予想されたのであった。なおこれらの分布調査で古墳についての記載は特に見られないが、昭和10年の県内一斉調査によってこの地域で「采女村6号墳・52号墳・53号墳」の3基が確認されており、発掘調査によって検出される可能性は充分予想された。

当初、上武道路の埋蔵文化財調査を実施したのは群馬県教育委員会文化財保護課であった。昭和48年

度の新田町下江田遺跡や翌年度の歌舞伎遺跡、50年7月から佐波郡境町西今井遺跡・三ツ木遺跡・小角田前遺跡等の調査を経て、昭和52年11月より本遺跡の調査が実施されることとなった。調査期間は昭和54年2月までの16ヶ月を要して行われた。調査対象地区は、最も密な遺物散布を示す大國神社東側を中心に、低地との境から北北西方向に約800mの範囲(上武道路建設用中心杭430~470)とし、面積は約28000㎡に及んだ(第1図)。

なお、昭和53年7月には財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の発足にともない、発掘調査は同事業団に引き継がれることとなり、この時点で調査担当者の交替も行われた。

第2節 調査の方法と経過

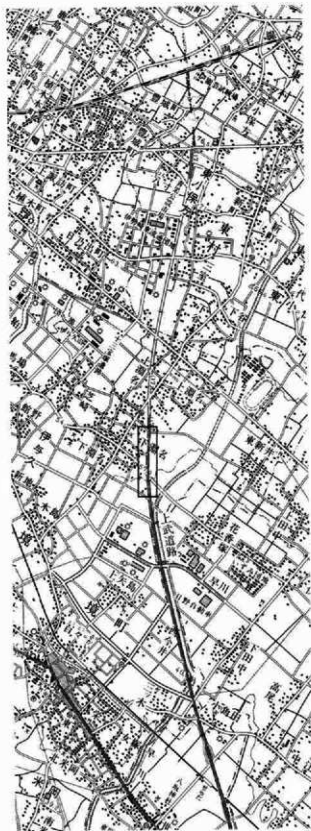
調査に先行して、計画路線内に配置されていたセンター杭を用いて100メートルを1区画として、調査範囲を8区に分割し、南東側よりⅠからⅧ区と命名した。

発掘調査は、まず掘削機械(バックホー)により約10メートル間隔のトレンチを入れ、遺構の範囲と種類を確認した。この結果、調査範囲の南東隅の沖積地では遺構が検出されず、本調査の範囲から除外した。表土除去にもバックホーを用いた。

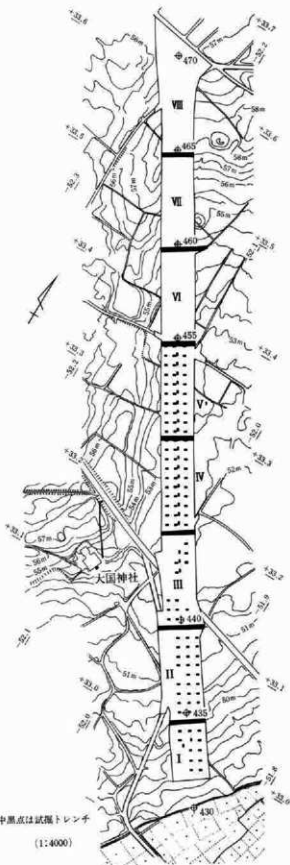
遺構確認用の測量用杭は、上記センター杭を用いて4メートルメッシュのグリッドを設定した。ただし、路線が直線でないため、Ⅱ区の両端を両センター杭を基準とした開放トラバースとしたので、これら以外のセンター杭は、グリッド杭と必ずしも一致していない。

遺構の平面実測は、このグリッド杭を使用して、平板測量を行った。1/20の縮尺を基本としたが、古墳や溝には1/40の縮尺を用いたものもある。

第1章 調査の経過



国土地理院発行 1:50000 「湯谷」「高崎」「前橋」
「観生及び足利」より作成



図中黒点は試掘トレンチ
(1:4000)

第1図 上武道路と調査区域

第3節 調査日誌抄

- 昭和52年11月 バックホーによるトレンチ調査開始。I区からV区までの表土除去。III区で住居跡80軒、古墳、掘立柱建物跡等を確認。III区中心に遺構の掘り下げに着手。
- 12月 引き続きIII区を中心とする遺構掘り下げと遺構測量。
- 昭和53年1月 II・III区を主体に住居跡の調査、後半は古墳調査を開始。
- 2月 主に4号墳付近を調査。
- 3月 I・II区の遺構平面測量を開始。
- 昭和54年4月 II区の遺構確認作業。新たに住居跡40軒、掘立柱建物跡7棟を確認。
- 5月 V～VII区で遺構確認作業。VII区で中世館跡と見られる堀を確認。
- 6月 III区の遺構精査終了。V区の遺構掘り下げ開始。
- 7月 IV・V区の遺構精査。
- 8月 IV区古墳精査。V区調査終了。
- 9月 IV区古墳精査。
- 10月 IV区調査終了。VI・VII区の遺構確認作業。
- 11月 VI・VII区の遺構精査。
- 12月 VI・VII区の遺構精査。遺構平面測量開始。
- 昭和55年1月 VI・VII区の遺構測量。

- 2月 VIII区で溝の調査。調査終了に伴い埋めもどし。

なお遺物の洗浄と注記、写真アルバムの整理は一部を引き続き行われた上瀬名裏神谷遺跡の調査期間中に行なった。

第4節 整理作業の経過

昭和63年10月より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団において整理事業に着手した。発掘調査終了から長い期間を経過したため、図面類の紛失や、遺

物注記の剥落など、不測のトラブルもあった。作業は主に遺構図面や写真等記録類の台帳作成と住居跡出土遺物を中心に復元、実測を行った。

平成元年4月より、整理班を2班に増班し、整理担当者2名、整理補助員13名のスタッフで作業を実施することとなった。

遺物の復元作業の石膏入れは、実測・写真撮影に耐えられる最小限の範囲とし、着色も行わなかった。遺物実測は等倍を原則に行った。写真撮影、金属器保存処理、図版トレース等、総ての作業を当事業団で実施した。

平成2年3月の本遺跡整理期間の終了後は、上瀬名裏神谷遺跡の整理班が、校正作業等を引き継いで行った。

第5節 成果の報告と遺跡名

下瀬名塚越遺跡の調査成果については本報告書をもって正式報告とするが、既に一部については1978年3月にその概要を報告してある〔群馬県教育委員会「上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報V」〕。これには各時期を代表する7軒の住居跡と掘立柱建物跡群について報告し、この時点で推察される下瀬名塚越遺跡の性格について若干のまとめを行っている。ここで分析は資料整理が不十分な段階で行ったものであったが、整理終了後の現在でも改革の必要はほとんど認められない。なお概報以外では、本遺跡で検出された古墳について1979年「考古学ジャーナル」157号のなかで「下瀬名古墳群」として調査担当者の右島和夫が既に紹介しているので、あわせて参考にして頂きたい。

当初、本遺跡の名称は前述の建設省との「協定書」以降大字名をとって「下瀬名遺跡」としていたが、下瀬名地区にはこれ以外にも2～3の遺跡が知られており、また地元の境町教育委員会で調査された隣接地も同名称を用いていたために、混乱を招く恐れがあった。これを解決するために遺跡名の変更が検討され、昭和62年以降は小字名を付して現在の「下瀬名塚越遺跡」に改称された。

第二章 遺跡をとりまく環境

第1節 遺跡周辺の地形

遺跡の位置 本遺跡は東経139度15分、北緯36度18分にあり、関東平野北西部の利根川北岸に位置する。距離的には北方の赤城山、足尾山地と南西方の秩父山地のほぼ中間にあたる(第2図)。

大間々扇状地 本遺跡の立地は大間々扇状地Ⅰ面のの上・下瀝名集落をのせる南北に細長い台地の南東縁部にあたる(第3図)。大間々扇状地は大間々町付近を扇頂にして渡良瀬川によって形成され、新旧2期に形成時期が分けられる。西半のⅠ面(桐原面)は中部ローム以上をのせる古期面にあたり、早川等の中小河川による解析が進んで、幾筋もの南北に細長い谷地が入り込んでいる。一方東半に形成された新期のⅡ面(藪塚面)は上部ロームをのせ、扇端部に僅かな解析が見られるだけの典型的な扇状地形を残している。このⅡ面の扇端部には標高60m前後を中心に湧水池が密に分布している。

赤城山南面 大間々扇状地の西側は赤城山の火山堆積物で構成されており、中小河川による谷地が多数解析する。瀝名の集落をのせる台地と谷を挟んだ西側の台地は赤城南面地形に区分される。

洪積台地 大間々扇状地Ⅱ面の南側、木崎の集落をのせる台地は大間々扇状地よりも形成時期が古く、中部ロームに覆われ、その下には粘土層がある。

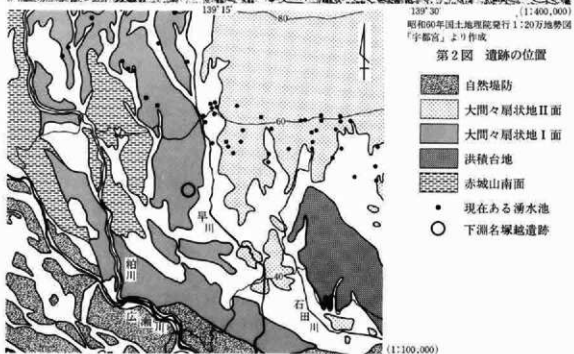
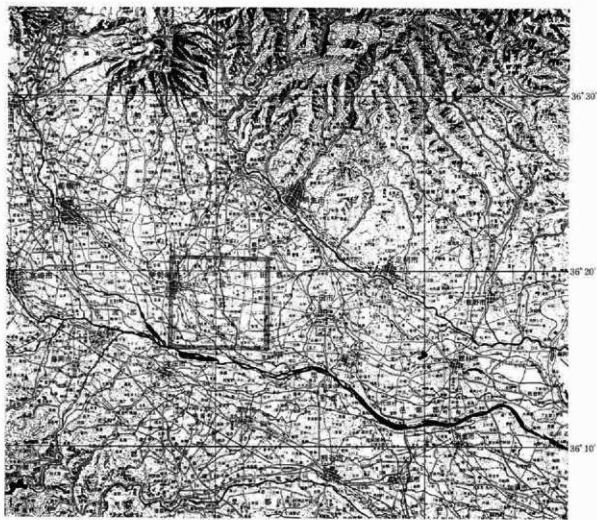
自然堤防 大間々扇状地の南方、利根川の左岸には古利根川の堆積によって形成されたと考えられる自然堤防が東西に細長く分布する。近年尾島地域での遺跡調査で、6世紀代の榛名山噴火に伴う河川氾濫によって、厚さ2mにも達する大量の土砂が堆積していることが確認されている(1988年財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報7」)。

低地 主に台地を解析して形成された谷底平野と大間々扇状地の南側に展開する沖積低地とからなる。早川流域の谷は幅20~100mと比較的狭小な解析

平野となっており、これに合する支谷は扇状地Ⅰ面の中位付近まで達し、谷頭には湧水池が存在する。本遺跡の南東から大間々扇状地Ⅱ面の南側へ連続する沖積低地は遺跡の周辺地域のうちでも有数の面積を誇る水田地帯となっている。この低地には扇状地礫層が厚く堆積しており、その上に薄く沖積層が覆う構造になっている。この地域の尾島工業団地遺跡では現在水田となっている場所でも微高地上には古代の集落跡や古墳の存在したことが判明している。このことから原始・古代における低地部分は現景観よりもやや小規模であったと考えられる。

河川 早川は大間々扇状地扇頂付近を源として扇状地を南流し、扇端部を抜けたあたりで南東方向に流路を変えて利根川に至る。大間々扇状地周辺の水田灌漑等には欠かせない重要な用水源であるが、乏水性のため自然流水だけでは流域を十分に潤すだけの安定した用水供給は得られなかったらしい。なお下流域では台地を横断する不自然な流路をとるため、時期は不明であるが灌漑が行われた可能性もある。早川の東側には大間々扇状地端部の湧水池から源を発する石田川が早川とほぼ並行して沖積低地を南流する。また大間々扇状地西端を南流する粕川は現在台地を切って古利根川流路を流れる広瀬川に合流するが、瀝名の台地の南に旧河道と思われる細長い低地部分がみられることから、過去にここから扇状地南側の沖積低地に流入していた可能性もある。

湧水池 大間々扇状地Ⅱ面扇端部には多量の湧水池が帯状に分布しており、沢口 宏によればこれらは皆自然湧出と考えられている(1984年「第一章 新田荘の自然環境」『新田町誌 第四巻』)。水の得にくい本地域においては、これらの湧水池も重要な灌漑用水源であったと考えられている。なお本遺跡の東側にある下瀝名東沼は台地が小さく侵食された部分にあり、湧水池をせき止めたと考えられる。



第3図 周辺地形区分図

第2節 周辺の遺跡

概要

本遺跡の所在する境町を中心に、伊勢崎市東部から新田町西部、佐波郡東村の南部にかけての地域における遺跡分布を史的に概観する。

旧石器時代および縄文草創期の遺跡は、大間々扇状地南西の縁辺部と新田町の木崎集落をのせる洪積台地（以後「木崎台地」と呼称する）の西から南にかけての縁辺部で分布が認められる。発掘調査によって出土層位が確認されたのは伊勢崎市権現山遺跡、中江田B地点遺跡で、他は表面採集品かそれに近い状態で出土したものである。

縄文時代の遺跡は大間々扇状地Ⅰ面の西から南にのびる部分と木崎台地に濃い分布が見られる。本遺跡の立地する台地（以後「淵名台地」と呼称する）ではわずかに確認されない。なお新田町の木崎台地では早期から後期まで見られるが、一方の大間々扇状地を主とする境町域の遺跡では分布調査の結果、早・前期が少なく、中・後期が多いとの指摘がある（1986年境町教育委員会「境町の遺跡」）。

弥生時代の遺跡は大間々扇状地や洪積台地の縁辺部に点在するが、ほとんどが断片的資料で、遺跡の内容を知るものはない。時期は後期にほぼ限定されるが、単独遺跡の所産ではなく古墳時代初頭の集落に伴う遺物の可能性がある。

古墳時代に入ると大間々扇状地南側の沖積低地周辺の台地縁辺部に定住集落が形成される。前期古墳は見られないが、境町三ツ木遺跡では古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されている。後期に至ると遺跡数が激増し、各地に大規模な集落が形成されるようになる。特に淵名台地では低地に面した南東部のほぼ全域にわたって遺跡の分布が認められ、本地域における中核的な村落の存在したことが想定される。こうした集落の増大と呼応して古墳群も多く見られる。淵名台地では、集落と同じく台地南東部に沿って、佐波郡東村下谷から境町上淵名にかけての長大な地域に下谷・淵名古墳群が存在する。また境町南

西部の粕川と利根川合流点北側には武士古墳群が見られ、新田町では木崎台地北部に六供古墳群、南西部の中江田付近には新田郡尾島町の小角田古墳群に続く古墳群が知られる。

奈良・平安時代の遺跡分布は古墳時代後期の状況と大きくは変わらないようである。淵名台地南東部における分布密度は他を凌駕しており依然としてこの地が中核的な位置を占めていたことを窺わせる。この時期の特筆すべき遺跡としては、境町伊与久の佐位部跡跡あるいは寺院址と推定される十三宝塚遺跡があげられる。なお「和名類聚抄」に見られる「淵名郷」は本遺跡のある上・下淵名地区に比定されており、この地域における集落の具体的な解明によって「郷」の実態に迫れる可能性がある。12世紀代には仁和寺の寄進系荘園である「淵名荘」が成立したと推定されており、大間々扇状地を東西に横切る大規模な用水路として開削された女堀や牛堀は、この荘園開発との関連で解釈されている。

中世の遺跡としては、主に館跡があげられ、淵名台地を主とする本遺跡の周辺地域では東方の新田荘域に比べて堀や土塁が現存するものはないが、台地東半の数カ所で堀の一部が検出されており、館跡の存在が推定されている。また本遺跡の東方約3.6キロメートルの東田遺跡では14～15世紀の屋敷跡が検出され注目をあびている。

調査地区周辺の遺跡

淵名台地において、昭和52年の本遺跡発掘調査開始以前に遺跡として知られていたのは下谷古墳群、淵名古墳群と采女小学校校庭遺跡、下淵名明神遺跡、出口遺跡等の比較的小規模な発掘調査によって明らかとなった数カ所の集落遺跡だけであった。本遺跡の調査対象となった下淵名地内の上武道路予定地は土師器の散布地として周知されており、また1938年編纂『上毛古墳総覧』に記載されている采女村6号墳、同52号墳、同53号墳が隣地に存在する（第5図）ことが判明していた。このほかに現在は見られないが、「堀込」の字名の残る場所で「大畑山」と呼称される堀と土塁が存在していたことから山崎 一は館



昭和59年国土地理院発行 1:25,000地形図「伊勢崎」上野地より作成

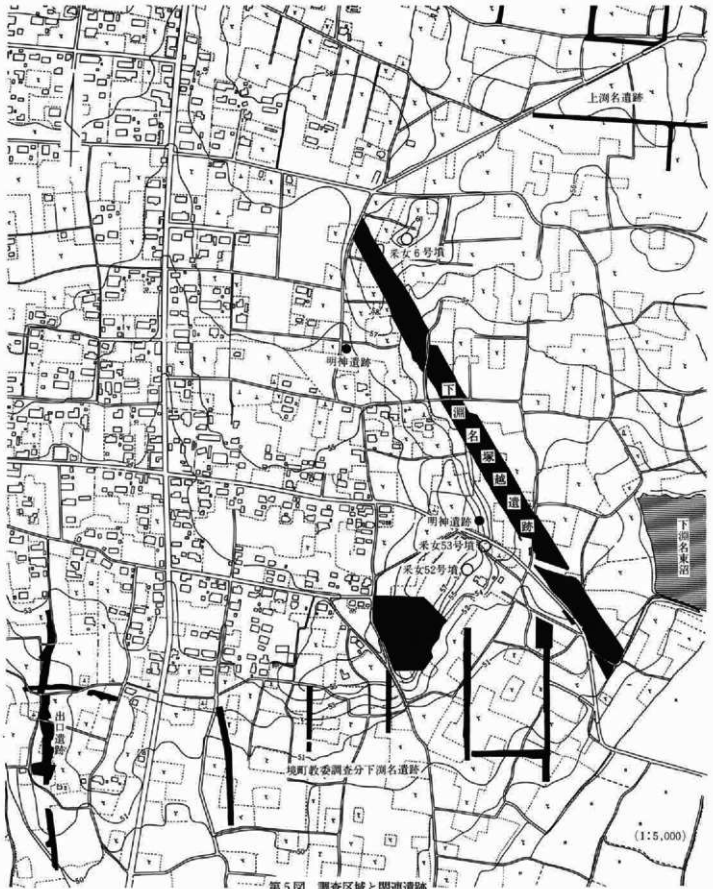
第4図 周辺の遺跡

跡の存在を想定し(第487図)、中世にこの地を支配した瀧名氏の伝承と結び付けてこれを「瀧名館」と命名した(1971年山崎「群馬県古城址の研究上巻」)。なお昭和48年には瀧名台地と中川の谷を挟んだ西方に対面する台地上で、十三宝塚遺跡の調査が行われた。ここからは「瀧」の字を含む郷名を記した瓦が出土しており、本遺跡を中心とした瀧名台地東半の集落遺跡群との関連が注目される。本地域で上武道路関連の発掘調査が開始された昭和50年代からは境町教育委員会をはじめとする瀧名台地周辺の遺跡発掘が増加し、その成果によってそれまで点としてしか捉えられなかった遺跡を面的な広がりで把握することがある程度可能になってきている。本遺跡の調査地区は遺跡密度の高い台地南東部縁辺の

ほぼ中央を貫通しており、この西側には延喜式内社である大国神社が鎮座する。現在瀧名集落は台地中央を南北方向に分布するが、尾崎喜左雄は延喜式内社の背後に集落のあるこの景観を不自然とし、本来神社の南東にあった集落が移ったものと推定(1976年尾崎喜左雄「瀧名」『群馬の地名 下巻』)した。これは本遺跡や境町教育委員会による下瀧名遺跡の調査の結果、大規模な集落跡の存在が確認されたことで立証されることとなった。この集落跡は地域や時期的な偏在性を見せながらも台地の南東部から南端の出口遺跡にまで1キロメートル以上にもわたることが想定される。一方台地東半の北側にあたる上瀧名地区でも古墳～平安時代の集落跡や中世館跡が検出されており、本遺跡との関連が注目される。

主な周辺遺跡一覧

- 1 下瀬名塚遺跡 本遺跡調査地区。
- 2 下瀬名遺跡（境町調査分） 平安時代主体の住居107軒、古墳、掘立柱建物跡、土坑等を検出。
- 3 出口遺跡 古墳～平安時代の住居57軒、祭祀跡を検出。直弧文勾玉が出土。
- 4 上瀬名遺跡 古墳～平安時代の集落、中世館跡。ナイフ形石器、金属製帯金具等が出土。
- 5 土橋遺跡第5地点 古墳時代初頭～平安時代の集落。
- 6 下谷・瀧名古墳群 本地域最大規模の前方後円墳である雙見山古墳を含む大古墳群で、かつては70基以上を数えたという。角閃石安山岩使用石室が多く7世紀代が主体と推定される。
- 7 下谷遺跡 縄文時代の包蔵地。
- 8 十三安塚遺跡 旧石器（黒曜石製尖頭器）、A地区は佐位郡衙跡あるいは寺院跡と推定される。B地区は佐井郡集落跡に推定される。方形回廊、基壇建物、掘立柱建物跡、5～10世紀代の竪穴住居、小鍛冶、井戸、大溝等を検出。佐位郡の跡名瓦、奈良三彩、釘、瓦塔等が出土。
- 9 牛 堀 8～11世紀代に機能していたと推定される用水路跡。一部に土樋が確認される。
- 10 雷電神社古墳 角閃石安山岩を使用した石室で、7世紀代と推定される。
- 11 権現山遺跡 故相沢忠洋によって掘り発、尖頭石器等が発見され、前期旧石器論争の嚆矢となる。
- 12 権現山北・権現山・権現山南古墳群 6～7世紀代の古墳群で、かつては100余基を数えた。
- 13 伊勢崎・東流通団地遺跡 竪穴住居653軒を数える古墳時代初頭～平安時代の集落跡。方形周溝墓、製鉄遺構等を検出。
- 14 下海老遺跡 縄文中期の集落跡。
- 15 羽黒古墳群 角閃石安山岩の石室が多いが、2号墳は河原石小口積の石室で6世紀代と想定される。
- 16 保泉古墳群 「総覧」に6基が記載。詳細は不明だが、武士古墳群に含まれる可能性あり。
- 17 保泉遺跡 古墳時代初頭の住居跡を検出。
- 18 武士古墳群 保泉から武士にかけて広範囲に分布する。前方後円墳5基を含む107基があったとされる。
- 19 上矢島遺跡 古墳時代初頭～平安時代の集落跡。「布」の墨書土器出土。
- 20 西今井遺跡 平安時代を主とする集落跡、住居跡軒数は200軒を超える。
- 21 三ツ木遺跡 古墳時代初頭～平安時代の集落跡。竪穴住居235軒、方形周溝墓等を検出。
- 22 梨子木遺跡 旧石器、縄文早～後期土器、弥生後期土器、8世紀前～中葉の瓦出土。
- 23 下田中遺跡 古墳時代初頭を主とする住居跡40軒。掘立柱建物跡7棟等を検出。
- 24 下曲輪西遺跡 縄文中～後期の土器出土。
- 25 六供古墳群 30m級の前方後円墳である兵庫塚古墳を含む10基ほどからなる古墳群。
- 26 新屋敷前遺跡 縄文後期、住居跡を検出。古墳時代初頭の土器出土。
- 27 一丁田遺跡 縄文中期後半の土器出土。
- 28 江田館跡 新田氏一族の江田氏の居館。周辺には古墳の分布も見られる。
- 29 西田遺跡 古墳時代後期・平安時代の住居跡25軒を検出。
- 30 東田遺跡 弥生後期、土坑を検出。古墳時代中葉の住居跡3軒。15～16世紀代の屋敷跡を検出。
- 31 台 遺跡 旧石器、縄文前～後期。
- 32 中江田A遺跡 旧石器、縄文草創～中期、平安時代集落。
- 33 中江田B遺跡 旧石器、縄文草創～中期。中江田A遺跡に続く。



第5図 調査区域と関連道跡

第II章 遺跡をとりまく環境

- 34 矢ノ原遺跡 早川の東方から延びる牛堀の一部と推定される。
- 35 矢太神沼遺跡 縄文後期住居跡を検出。
- 36 矢太神遺跡 縄文早～後期。後期の住居跡を検出。古墳時代初頭の土器出土。
- 37 重殿遺跡 旧石器、縄文前～後期。古墳時代初頭～後期の住居跡56軒、奈良・平安の住居跡13軒を検出。

参 考 文 献

- 1938 群馬県「上毛古墳総覧」
- 1976 尾崎喜左雄「群馬の地名 下巻」
- 1977 境町教育委員会「土橋・三ツ古屋・出口・島海戸遺跡発掘調査概報」
- 1978 境町役場「境町の動向 別冊 境町古代遺跡」
- 1978 境町教育委員会「下刈名遺跡発掘調査概報」
- 1980 境町教育委員会「上刈名遺跡 第1次発掘調査概要」
- 1981 「群馬県史 資料編3 原始古代3 古墳」
- 1981 境町教育委員会「上刈名遺跡 第2次発掘調査概要」
- 1982 境町教育委員会「上刈名遺跡 第3次発掘調査概要」
- 1983 境町教育委員会「上刈名遺跡 第4次発掘調査概要」
- 1984 沢口 宏「第一章 新田荘の自然環境」『新田町誌第四巻』
- 1985 五十嵐富夫「因説 伊勢崎・佐波の歴史」
- 1985 坂爪久純「境町・牛堀。遺跡について」『群馬文化』203
- 1986 坂爪久純他 境町教育委員会「境町の遺跡」
- 1987 「新田町誌 第二巻 資料編(上)」
- 1987 新田町教育委員会「東田遺跡」
- 1987 「伊勢崎市史 通史編1 原始古代中世」
- 1987 境町教育委員会「土橋遺跡第5地点」
- 1989 能登 健 峰岸純夫編「よみがえる中世5 浅間火山灰と中世の東国」

第III章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

概要

本遺跡では総計265軒の竪穴住居跡が検出されたが、遺構相互の重複や埋没後の掘削等によって滅失したのも予想されることから、実数は270軒を越えると思われる。時期は古墳時代初頭から10世紀代にわたっており、各時期毎に軒数や立地に偏りが見られる。以下各地区毎に竪穴住居跡の概要と個別の所見を述べる。なお竪穴住居跡の番号は発掘調査時点での登録番号をそのまま採用したため、その後の検討により竪穴住居跡として認めるのが不適当なものは欠番とした。

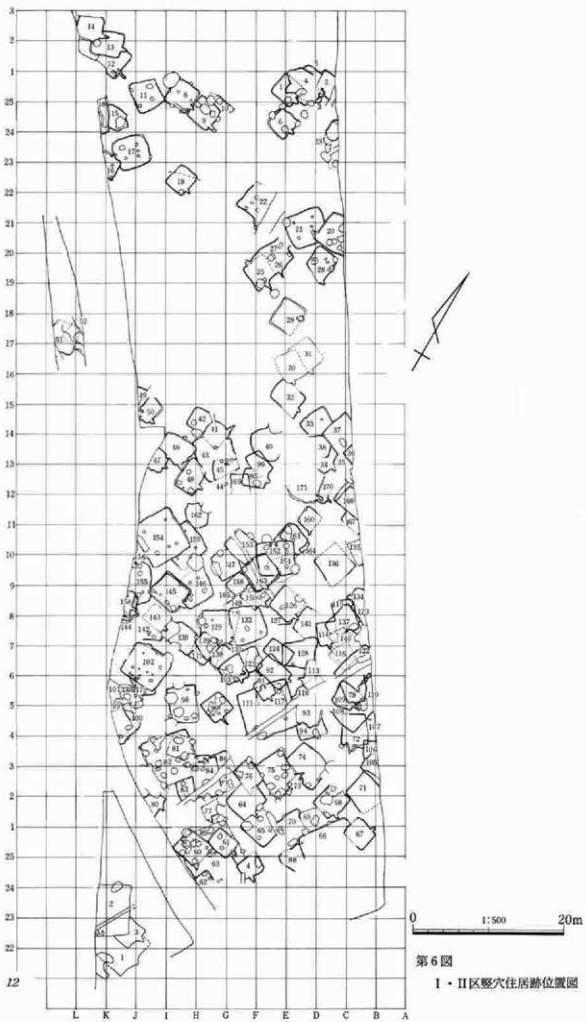
(1) I・II区の竪穴住居跡

概要

I区は調査区域の南東端にあたり、南流する早川の氾濫原である。この地点では表土掘削に先立つトレンチ調査が行われ、河川の侵食作用によって台地縁辺が削り取られたため遺構の存在しないことが確認された。しかしII区66号住やII区88号住のように侵食によって過半が失われたと考えられる住居跡も見られることやこの地区における住居跡の密集度から、竪穴住居跡の分布がより南東方向に展開していたのは間違いない。II区は本遺跡で最も竪穴住居跡が集中している地区で、I区とあわせて157軒を検出した。これを時期別に見ると、古墳時代初頭の4世紀代が26軒、古墳時代の5～6世紀代が12軒、7世紀後半以降は89軒、時期不明が30軒である。B-6・7グリッドに見られるように、特に住居跡が密集する部分では7～8軒の重複が確認されている。このことから本地区では古墳時代～平安時代の全時期にわたって断続的に集落の営まれたことが推測される。

なお15～23グリッド付近では竪穴住居跡の分布が周囲に比べて希少であるが、これはこの地点に4号古墳が存在するためである。ただし、古墳を避けて竪穴住居跡を構築したか、あるいは墳丘上に構築されたものが後世に削平されたかは不明である。

またL-16～20グリッドでは古墳時代初頭～平安時代の土器が集中して出土したことから、これらを住居跡出土遺物と想定し、分割した群ごとにそれぞれ53～59号住居跡と命名して調査が進められたが、壁や床等が確認出来なかったため欠番とした。この地点からはほぼ完形の後期弥生式土器（第705図-1）が出土しており、この時期の住居跡の存在が推定される。この他にも第4節で土器集積遺構として扱ったものもある。



I 1号住居跡 (第8・9図 PL. 63)

位置 I・J・K-21・22

平面形・規模・方位 不明。

壁 東側でわずかに地山部分との段差を確認したのみで、詳細は不明。

床面 ほぼ平坦な面として確認されたが、西半は遺構重複と削平によって不明であった。

カマド 東壁中央部付近でわずかな焼土の分布からカマドの存在が推定される。形状や規模等の詳細は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 埋土から8世紀代を主体とした杯、甕等が出土。

重複遺構 I区2号・3号住居跡、1号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。



I 2号住居跡 (第7・8・10図 PL. 3・63)

位置 J・K-22・23・24

平面形 方形と思われる。

規模 主軸方向で約6.75mを測る。

方位 不明。

壁 土層断面の所見から北側で高さ10cmの壁が確認されたが、遺構重複や削平等で大部分は不明確。

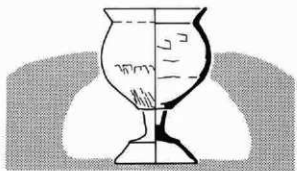
床面 中央部へ北半で遺存する。部分的に貼り床が認められた。

カマド 南東壁付近に付設されるが、壁との関係は不明確。焼土の存在から燃焼部底面のみが明らかで、袖部や煙道部は検出されなかった。規模は幅40cm、奥行き70cmで、平面槽円形を呈する。燃焼面中央部に脚部を欠損した高杯を倒置させており、支脚として用いたらしい。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 カマド周辺から大形土器片が出土しており、ほぼ古墳時代中葉のものが主体。

重複遺構 I区1号・3号住居跡、4号溝、2号・3号土坑と重複し、4号溝より古い他は新旧関係は不明である。



第7図 I 2号住居跡カマド検出状況と復元図

I 3号住居跡 (第8・11図 PL. 3・63)

位置 I・J-22

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 わずかな段差から推定されるが、詳細は不明。

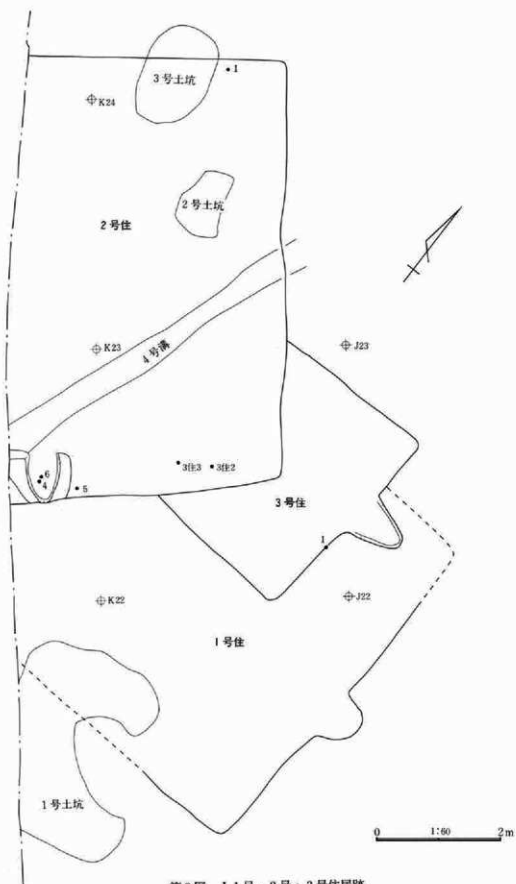
床面 不明確。

カマド 東壁で燃焼部を検出。袖部は認められない。平面三角形状で、幅50cm、奥行き60cmを測る。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 プラン内から古墳時代と8世紀代の土器片が出土しているが、重複する1号住居跡、2号住居跡との帰属関係が不明であり、本住居跡に伴う遺物は抽出できない。

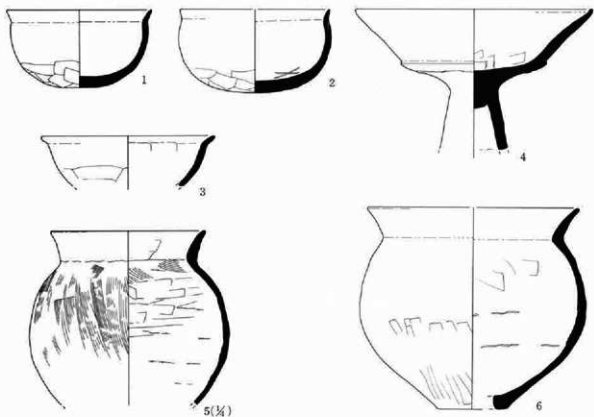
重複遺構 I区1号・2号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



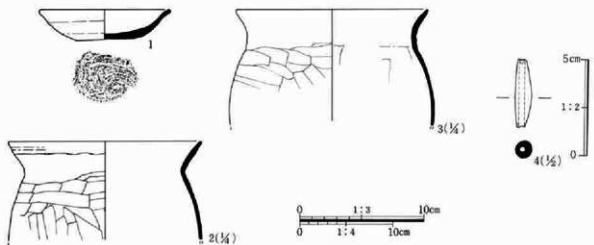
第8図 11号・2号・3号住居跡



第9圖 I 1号住居跡出土遺物



第10圖 I 2号住居跡出土遺物



第11圖 I 3号住居跡出土遺物

14号住居跡 (第12図 PL. 3・63)

位置 E・F-24

平面形 北半がやや膨らむ横長長方形。

規模 東辺(3.2)m、西辺(3.4)m、
北辺(2.7)m、南辺2.10m

方位 N-140°-E

壁 カマド右脇で30cm前後の高さを測る。北壁と南壁は崩落が見られる。

床面 ほぼ平坦。北西部は不明瞭。

カマド 東壁南寄りで壁外に張り出す燃焼部を検出。袖部は不明瞭だが、地山の壁をそのまま利用したことも考えられる。幅50cm、奥行き60cmを測り、底面は焚口から煙道部方向へ緩く傾斜する。

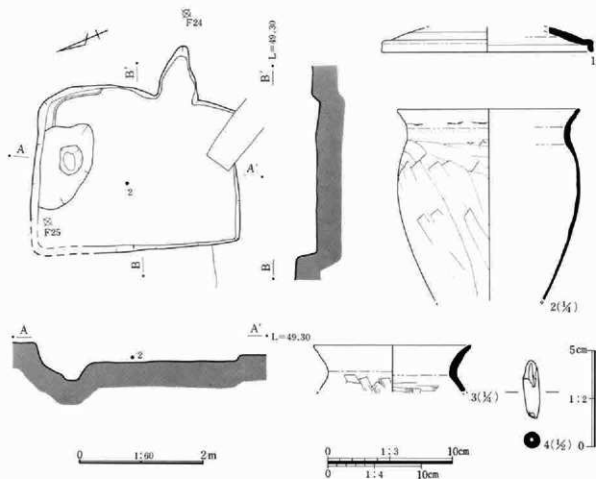
周溝 南東部隅で幅10cm前後、浅い凹み状の周溝を検出。

土坑 北壁際で1.4×0.8m、深さ30cmの不整楕円形の落ち込みが検出された。埋土や床面との関係は不明であるが、壁に沿った形状を示すことから、本住居跡に伴うと考えられる。

柱穴 検出されなかった。

遺物 埋土及び土坑内から土器片が散在して出土しており、時期は古墳時代初頭～平安時代が混在する。土坑内からは比較的大形の10世紀代瓦破片が出土している。その他に土鍾1点が出土。

重複遺構 II区63号・85号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第12図 14号住居跡及び出土遺物

II 1号住居跡 (第13・14・15図 PL. 3・63)

位置 D・E-25

平面形 方形と思われる。東から北側にかけては不明である。

規模 東辺(3.15)m、西辺3.15m

南辺3.60m、北辺(3.35)m

方位 N-123°-E

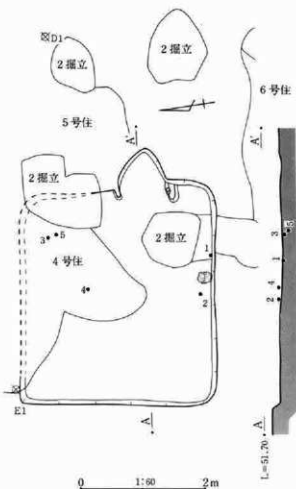
壁 全体に遺存状況が悪く、高さは西側中央で14cmを測る。比較的直線状。

床面 中央部がややくぼむ。軟質で貼り床の有無は不明であった。北半部は遺構重複により床面の存在が不明確となっている。

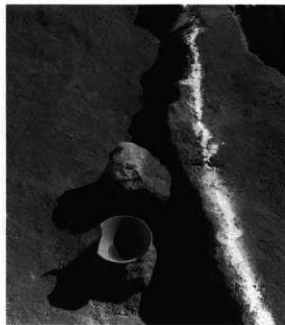
カマド 東辺の南寄りで袖部と燃焼部を検出。袖部は遺存状況が悪いが、竪穴内に張り出す形状と思われる。なお右袖部先端には楕円形の自然礫を直立させて補強としている。燃焼部は平面が丸みをもつ三角形状で幅70cm、奥行き75cmを測る。火床面は不明瞭だが、底面はほぼ平坦で高低差は少ない。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 軽石(給源不明)、ローム粒を含む灰褐色土が下位に堆積する。



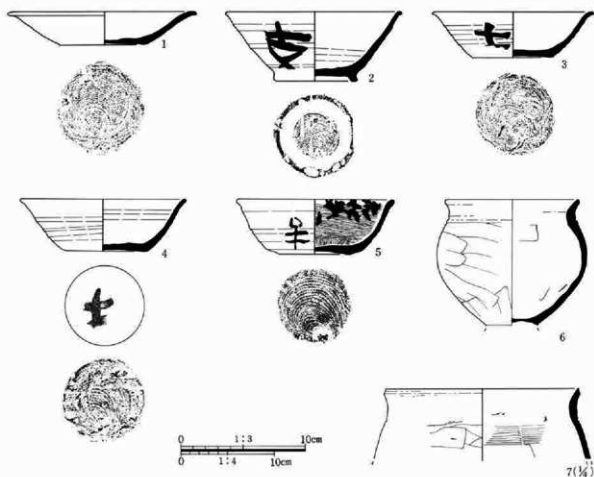
第13図 II 1号住居跡



第14図 II 1号住居跡遺物2出土状況

遺物 カマドから破片、床面付近の埋土から杯が出土しており、いずれも平安時代に属する。杯(第15図-1・2・4・5)は3号・4号・5号住居跡との重複部分から出土しており、帰属関係が不確実であるが、いずれもほぼ同レベルで出土しており年代観も矛盾しないことから、本住居跡に伴う可能性が高いと考えられる。なお杯5点のうち4点が墨書なのは注目される。

重複遺構 II区の4号・5号住居跡、2号掘立柱建物跡と重複しており、いずれよりも新しいと推定されるが、土層断面等での確認はできなかった。



第15図 II 1号住居跡出土遺物

II 2号住居跡 (第16・17図 PL. 64)

位置 C-25

平面形 方形と思われるが、検出部分はやや歪む。

規模 西辺 (2.70) m、他は不明。

方位 不明。

壁 北壁は比較的遺存状況は良好。他の部分は遺構重複のため不明瞭。高さは39cmを測る。

床面 北半はほぼ平坦。他は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 鉄分凝集が多い灰褐色砂質土が堆積。

遺物 床面及び床から2~3cm浮いた位置から出土しており、時期は8世紀代が主体。重複するII区3号・4号住居跡に伴う可能性もあり。

重複遺構 II区の3号・4号・5号住居跡より新しく、1号溝より古い。

II 3号住居跡 (第16・18図 PL. 64)

位置 C-25

平面形 カマドのみ検出のため、不明。

規模・方位 不明。

壁 南東隅で35cmを測る。

床面 不明。

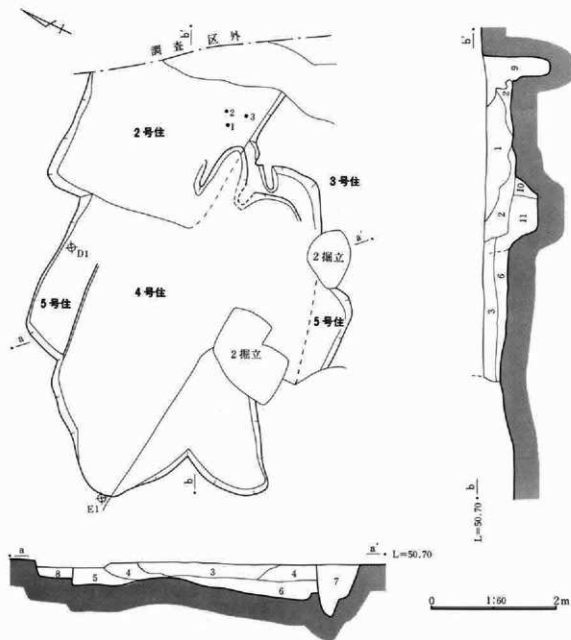
カマド 右半分が検出され、袖部は壁穴内に40cm張り出す。燃焼部は平面三角形形状。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 淡灰褐色土が堆積。

遺物 カマド右袖脇から杯が出土する他に7世紀後半~8世紀代前半の土器片が出土するが、帰属関係が不明確。

重複遺構 II区の1号・2号住居跡、2号掘立柱建遺跡より古く、4号・5号住居跡より新しい。



土層説明

2号住居跡埋土

1 灰褐色土 砂質で、鉄分の凝集が見られる。

2 黒褐色土 砂質でやや硬質。

3号住居跡埋土

3 灰褐色土 砂質で、硬質。

4 黒褐色土 砂質で、浮石を多く含む。

5 黒褐色土 2層に近似する。

6 黄褐色土 ロームを主とし、粘土の埋土。

7 黒褐色土 ロームブロックを含む、2号柱立建物跡柱穴埋土。

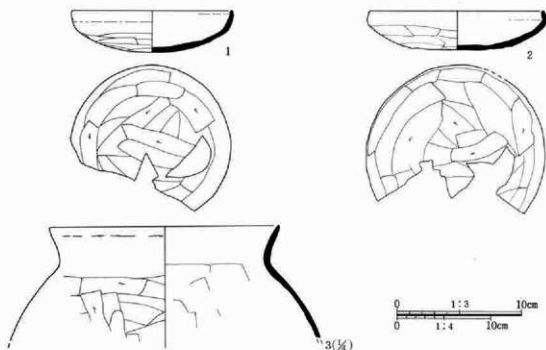
8 黒褐色土 焼土を含む、5号住居跡埋土。

9 黒色土 ローム粒を含む、溝状遺構の埋土。

10 黒褐色土 ローム粒、黒色土ブロックを含む。

11 黒褐色土 ロームブロックを含む、床下ピットか。

第16図 II 2号・3号・4号・5号住居跡



第17図 II 2号住居跡出土遺物

II 4号住居跡 (第16・19図 PL. 64)

位置 C・D-25

平面形・規模・方位 不明。

壁 東壁と西壁の一部を検出したが、遺構重複のため不明瞭。

床面 凹凸が多く、平坦な硬化面は不明瞭。

カマド 3号住居跡床面下で確認。袖部は50cm張り出し、燃焼部は幅50cm、奥行き80cmを測る。

遺物 埋土からの出土で、帰属の確定できないものが多く、時期も限定できない。

重複遺構 II区1の1号・2号・3号住居跡、2号掘立柱建物跡より古い。

II 5号住居跡 (第16図)

位置 C-25、III区D-1

平面形・規模・方位 不明。

壁 北壁の一部を検出。北西隅で高さ26cm。

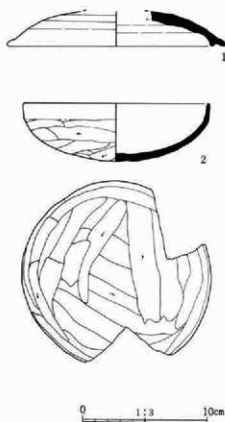
床面 2号・3号住居跡より30cm高く、ほぼ平坦。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

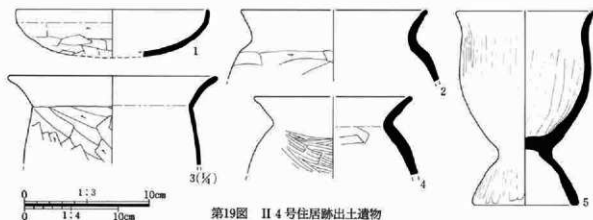
埋土の特徴 黒色砂質土が堆積。

遺物 埋土から古墳時代後期の燧石片が出土。

重複遺構 3号住居跡より古い。



第18図 II 3号住居跡出土遺物



第19図 II 4号住居跡出土遺物

II 6号住居跡 (第20・21図 PL. 3・64)

位置 D・E-24

平面形 隅丸正方形。

規模 東辺3.45m、西辺2.95m

北辺3.40m、南辺3.45m

面積 (8.8) m²

方位 N-130°-E

壁 南と西壁で高さ28cmを測り、北壁は壁線がかなり歪んでいる。

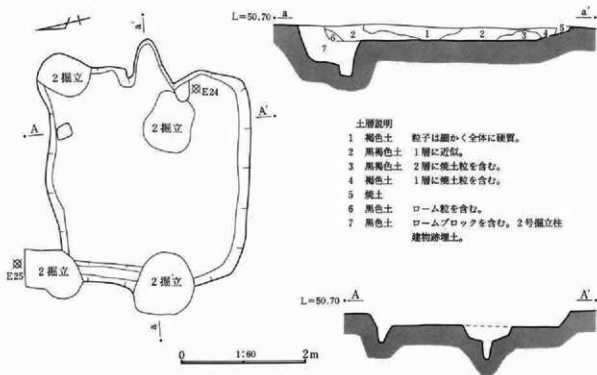
床面 中央がやや高く、周辺に約3cmの比高差で傾斜する。

カマド 東壁中央部で検出。袖部は竪穴内に30cmほど張り出す。燃焼部は平面三角形で幅60cm、奥行き80cmを測る。底面は比較的急角度で煙道部へ外傾する。

周溝 西壁に沿って、幅20cm、深さ7~9cmの溝状施設が検出されたが、重複する2号掘立柱建物跡の柱穴間溝の可能性もある。

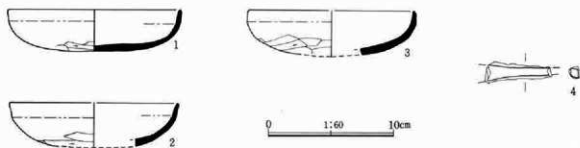
遺物 床付近から杯が出土しており、時期は8世紀代が主体。

重複遺構 2号掘立柱建物跡より新しい。



第20図 II 6号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第21図 II 6号住居跡出土遺物

II 7号住居跡 (第22図 PL. 64)

位置 C-22・23

平面形・規模・方位 不明。

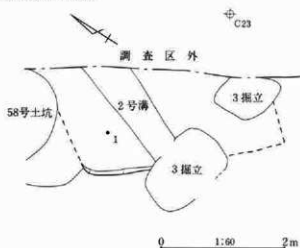
壁 南西部がわずかに遺存し、高さ14cmを測る。

床面 遺構重複により不明確。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 主に古墳時代初頭の土器片が埋土から出土。

重複遺構 II区の3号掘立柱建物跡、58号土坑、2号溝と重複するが新旧関係は不明である。



II 8号住居跡 (第23・24図 PL. 3・64)

位置 G-25、H-24・25

平面形 方形と思われる。

規模 東辺3.90m、西辺3.95m

北辺(3.35)m、南辺3.45m

面積 (12.03) m²

方位 N-121°-E

壁 乱れは少なく、ほぼ直線的に掘り込まれる。

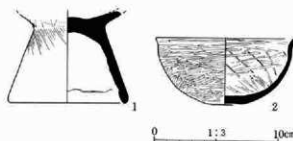
高さは西側で23cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、貼り床の有無は不明。

カマド 東壁南寄り検出。右袖部は堅穴内に35cm張り出す。燃焼部は平面三角形で火床面は焚口付近よりやや高い。規模は幅60cm、奥行き80cmを測る。煙道部は検出されなかった。

ピット 堅穴中央主軸線上に2基、北壁際に3基が検出された。性格は不明。

貯蔵穴 南東隅カマド右脇で検出。円形を呈し、直径40cm、深さ22cmを測る。



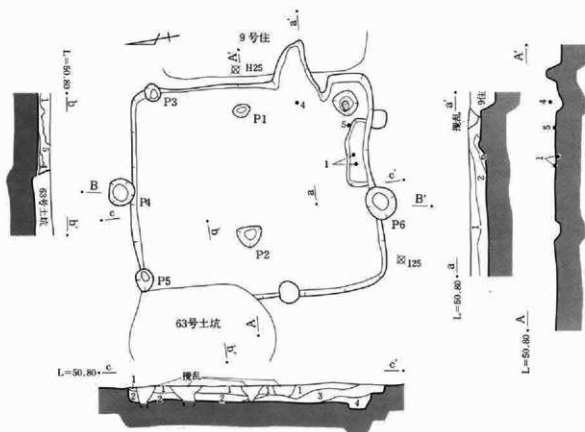
第22図 II 7号住居跡及び出土遺物

その他 南壁の中央部分に沿って長さ110cmの溝状ピットを検出。幅30cmで深さ20cmを測る。埋土は壁の崩落土である。入り口施設に関連するか。

埋土の特徴 ロームブロックが多いことから人為的埋土の可能性あり。

遺物 カマド焚口と南壁際から杯が出土。9世紀代が主体。

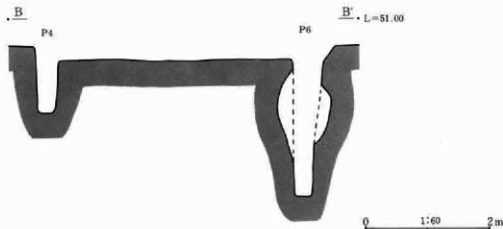
重複遺構 9号住居跡、63号土坑と重複し、9号住居跡よりは新しい。



土層説明

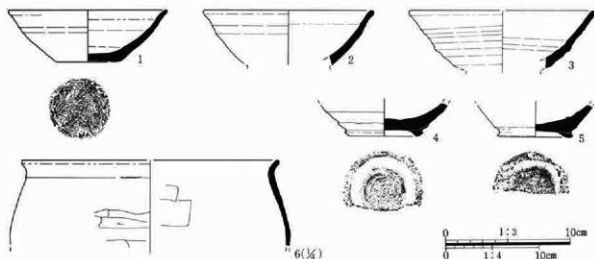
- 1 褐色砂質土 浅間A軽石を含む。
- 2 黒褐色砂質土 ローム粒、焼土粒、炭化物含む。
- 3 黒色粘質土 ロームブロックを含む。
- 4 ローム粒を主とする。
- 5 黄褐色砂質土 ロームブロックを含む。
- 6 焼土

cm	上端径	下端径	深さ
P 1	30×20	15×8	10
P 2	40×33	15	11
P 3	27×25	15×10	27
P 4	43×40	25×20	109
P 5	35×27	13×10	30
P 6	54×48	26	237



第23図 II 8号住居跡

第III章 検出された遺構と遺物



第24図 II 8号住居跡出土遺物

II 9号住居跡 (第25・26図 PL. 3・64)

位置 G-24・25、H-24

平面形 隅丸正方形。

規模 東辺3.40m、西辺3.35m

北辺3.75m、南辺3.80m

面積 (11.31) m²

方位 N-124°-E

壁 ほぼ垂直で、高さは南側で36cmを測る。

床面 南際はやや低い。他は不明確。

カマド 東壁南寄りて検出。袖部は竪穴内に25cmほど張り出すが、本体の大部分は竪穴外の地山を掘って構築する。燃焼部はやや細長い楕円形で、幅40cm、奥行き80cmを測る。

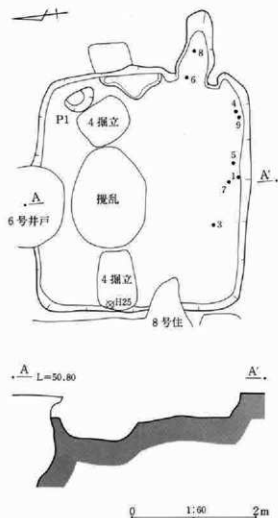
ピット 北東隅で径45×33cm、深さ40cmのピット1基を検出したが、性格は不明。

その他 東壁中央、カマド左側で長さ50cm、幅15~35cm、深さ13cmの不整形の落ち込みを検出。

埋土の特徴 ロームブロックから人為的埋土か。

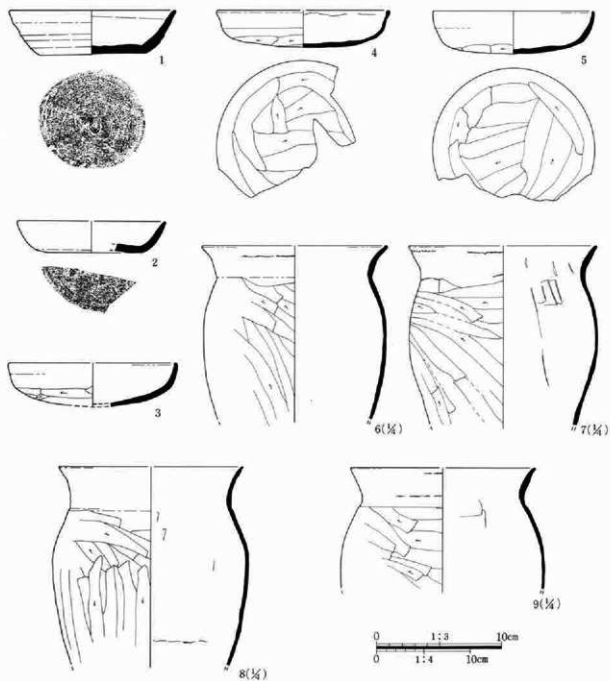
遺物 カマド燃焼部から2個体分の瓦破片、南壁際に偏在し、時期は8世紀代末~9世紀代前半のものが主体。

重複遺構 II区の8号住居跡より古く、6号井戸より新しい。4号掘立柱建物跡、10号住居跡との新旧関係は不明である。



第25図 II 9号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第26図 II 9号住居跡出土遺物

II 10号住居跡 (第27図)

位置 F-24、G-24・25

平面形・規模・方位 不明。

壁 北壁の一部のみ検出。遺存状況悪く、高さは11cmを測る。

床面 ほぼ平坦。貼り床の有無は不明。重複する9号住居跡より30cmほど高い。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から須恵器蓋、甕、埴輪等が出土しており、時期は限定できない。

重複遺構 II区の9号住居跡、4号掘立柱建物跡、6号井戸と重複するが新旧関係は不明である。



第27図 II10号住居跡及び出土遺物

II11号住居跡 (第28図 PL. 4)

位置 I-24・25、J-25

平面形 台形状に歪む方形。

規模 北東辺3.25m、北西辺4.05m

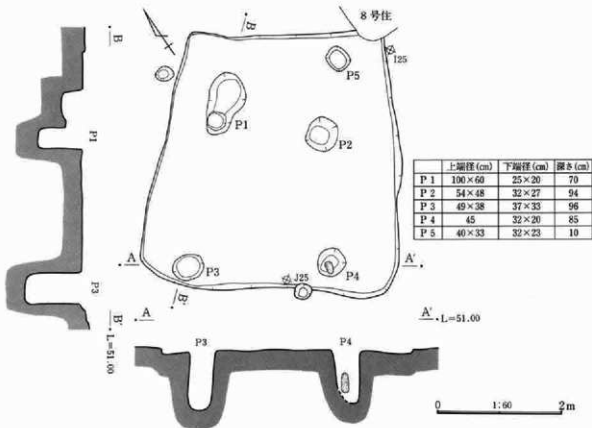
南東辺4.25m、南西辺4.10m

方位 N-33°-E

面積 14.46㎡

壁 削平により遺存する部分はわずかで、詳細は不明。北東隅で高さ8cmを測る。

床面 凹凸は少なく、中央部が壁際より7cmほど高い。



第28図 II11号住居跡

第1節 竪穴住居跡

ビット 竪穴内から5基のビットが検出されており、そのうちP1~P4は規模と配置から主柱穴の可能性が高い。またP4内から検出された長さ50cm大の礫は柱の根固めと思われる。

その他 カマド、炉、周溝等は検出されなかった。

遺物 埋土から40点ほどの小土器片が出土しており、時期は古墳時代初頭から8世紀代のものが混在する。

重複遺構 II区8号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

II12号住居跡 (第29図 PL. 4・64)

位置 J-25、III区J・K-1

平面形 方形と思われる。

規模 東辺3.85m、北辺(3.75) m

南辺3.75m、西辺不明

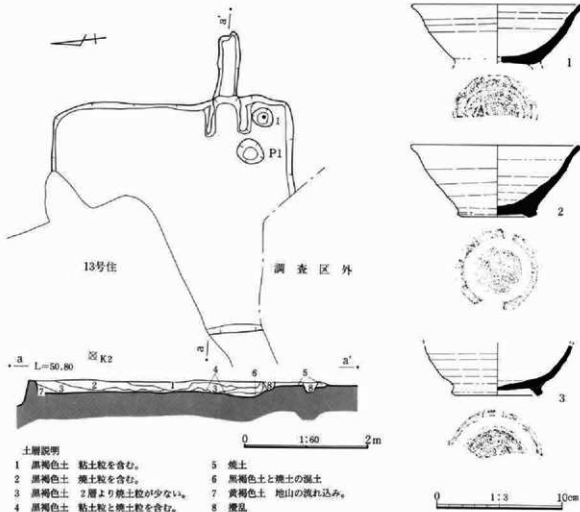
方位 N-97-E

壁 東半が遺存し高さは21cmを測る。ほぼ直線的な掘り込み。

床面 中央部がやや高い。

カマド 東壁の南寄りで検出。燃焼部は竪穴内に構築され、袖部は45cm張り出す。燃焼部は平面方形状で、幅35cm、奥行き40cmを測る。火床面は床面よりも5cmほどくぼむ。煙道部は火床面から9cmの段差で地山に掘り込まれ、幅20cm、長さ100cmでほぼ水平に延びる。

ビット カマド右袖部手前で1基を検出。径43×38cm、深さ19cmを測る。



第29図 II12号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴 南東隅で検出され、平面は円形で径36×25cm、深さ18cmを測る。

埋土の特徴 ローム粒を含む黒褐色土が堆積し、その状況から自然堆積と思われる。

遺物 ほとんどが埋土から出土しており、時期は9世紀代が主。

重複遺構 II区13号住居跡と重複し、新旧関係は不明である。

II13号住居跡 (第30図 PL. 4・64)

位置 III区J・K-1・2

平面形 縦長長方形。

規模 東辺3.15m、西辺(3.15)m

南辺4.05m、北辺(4.15)m

方位 N-95°-E

壁 ほぼ直線状、高さは東側で30cm。

床面 中央部高く、壁際との比高差は5cm。

カマド 本体は竪穴外に地山を掘り込んで構築。平面三角形で幅50cm、奥行き80cmを測る。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 ロームブロックを多く含む人為的埋土。

遺物 埋土から20点ほど出土しており、時期は限定できない。

重複遺構 II区12号・14号住居跡と重複し、14号住居跡よりは古い。

II14号住居跡 (第31図 PL. 4・65)

位置 III区K-2

平面形 縦長長方形。

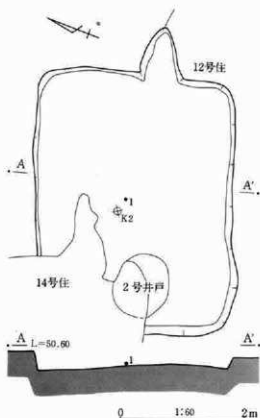
規模 東辺3.35m、西辺(3.50)m

北辺3.85m、南辺(4.00)m

方位 N-100°-E

壁 やや乱れるがほぼ垂直。高さは38cmを測る。

カマド 東壁南寄り検出。竪穴外の地山を掘り込んで構築。燃焼部は三角形で、幅70cmを測る。そのままほぼ同レベルで煙道部が30cmほど延びて終わる。



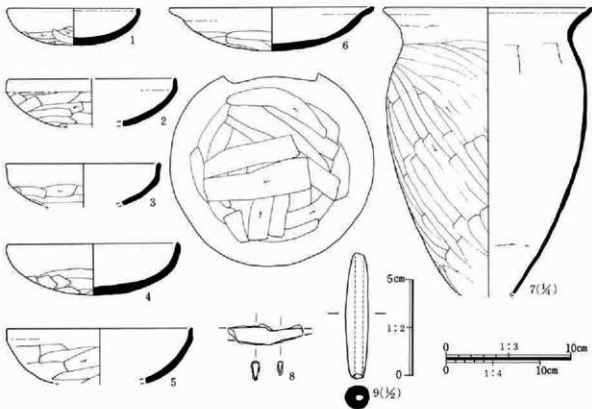
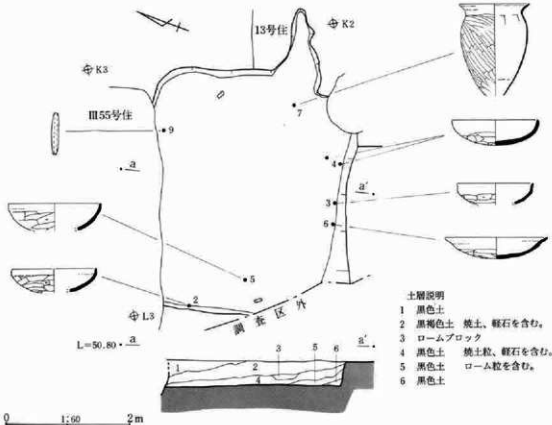
0 1:3 10cm

第30図 II13号住居跡及び出土遺物

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 黒褐色土が主で、自然堆積と思われる。
遺物 壁際から多く出土しており、時期は8世紀代が主。

重複遺構 II区13号住居跡、III区55号住居跡と重複し、II区13号住居跡よりは新しい。

第1節 竪穴住居跡



第31図 II14号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II15号住居跡 (第32図 PL. 65)

位置 J・K-24

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 東辺2.55m、西辺(2.50)m
北辺(3.15)m、南辺(3.20)m

方位 N-112-E

壁 崩落部分が多く乱れる。高さは北側で30cmを測る。

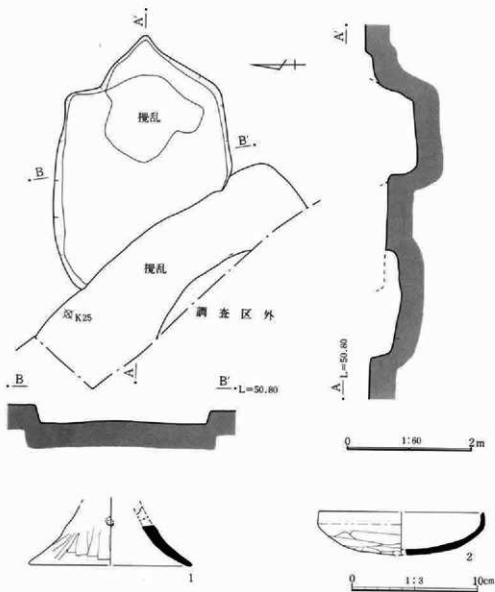
床面 中央部がくぼみ、周辺とは5cmの比高差がある。

カマド 東壁中央で燃焼部下底面のみ検出。原形を止めず詳細は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 ローム粒や炭化物を含むしまりのある黒褐色土で、自然堆積と思われる。

遺物 埋土から8世紀代を主とした杯、甕等が出土。

重複遺構 攪乱によって切られる以外はなし。



第32図 II15号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II16号住居跡 (第33・34図 PL. 4・65)

位置 J-22・23

平面形 方形と思われる。

規模 東辺2.70m、北辺 (3.25) m

方位 N-31°-E

壁 崩落が大きく遺存状況は悪い。

床面 小さな凹凸が多い。

カマド 北壁中央で検出。燃焼部は壁線付近に構築

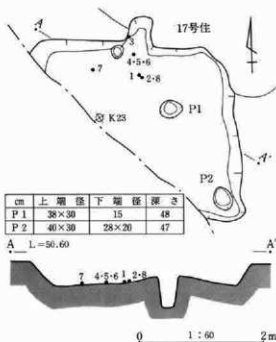
され、幅45cm、奥行き60cmを測る。煙道部は不明。左袖部に竊と思われる補強材の抜き穴。

ピット 中央と南東隅で2基を検出。P2は貯蔵穴か。

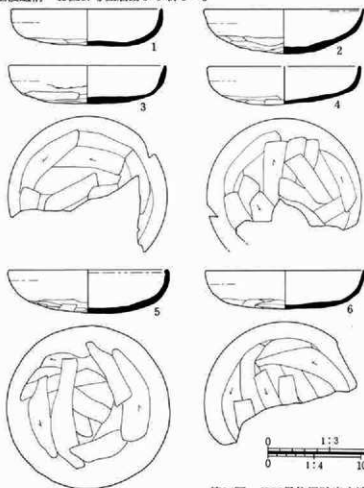
埋土の特徴 ローム粒やカマド崩落の焼土や粘土の小塊を含む暗褐色土。

遺物 カマド燃焼部に集中。8世紀末～9世紀初頭が主体。

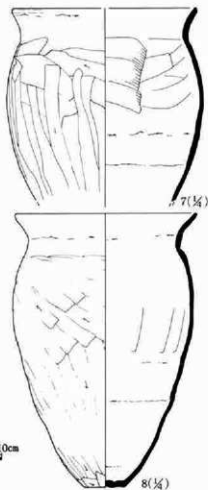
重複遺構 II区17号住居跡より新しい。



第33図 II16号住居跡



第34図 II16号住居跡出土遺物



II17号住居跡 (第35・36図 PL. 4・65・66)

位置 I・J-22・23

平面形 隅丸方形。

規模 北東辺4.00m、北西辺4.50m

南東辺4.25m、南西辺4.10m

面積 (16.32) m²

方位 N-41°-E

壁 崩落部分が多く、壁線もかなり乱れる。高さは南東隅で16cmを測る。

床面 ほぼ水平で平坦。

炉 中央より西寄りの位置でP1とP3の間で検出。特に掘り込みは認められず、床面と同レベルで硬化した火床面が遺存。範囲は35×25

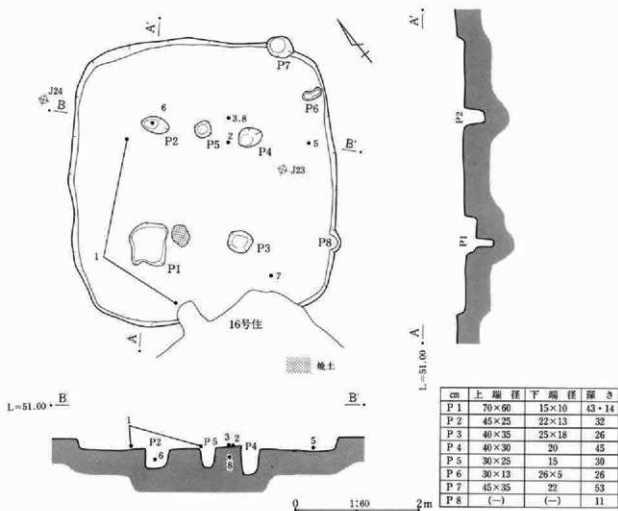
cm。

ピット 8基検出されたピットのうちP1~P4は主柱穴。P6~P8は壁際に位置し、壁柱穴の可能性が考えられようか。

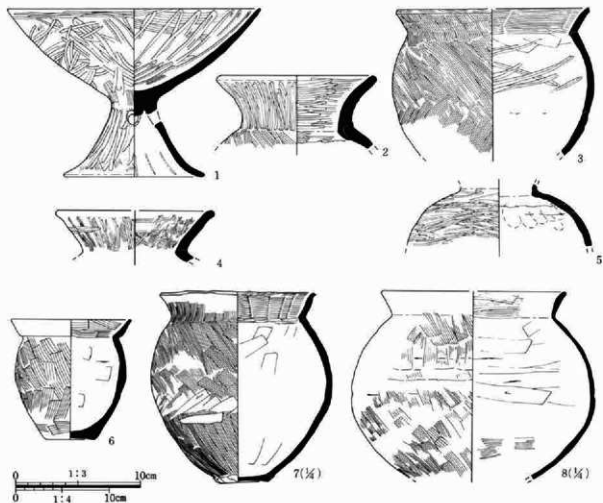
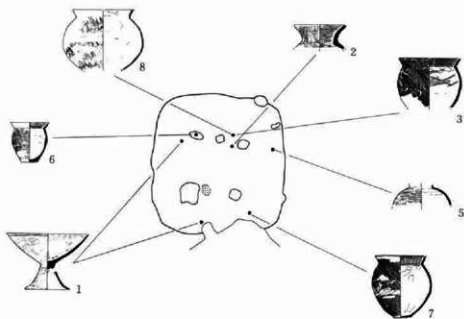
埋土の特徴 下位に15cmほどの厚さでロームブロックを多量に含む褐色土が堆積。人為的な埋土と思われる。

遺物 古墳時代初頭の土器片が床面全体に散在する。また柱穴のP2とP4からは大形破片や完形品が出土しており、柱の抜き取り後に投棄されたと考えられよう。

重複遺構 南西部をII区16号住居跡に切られる。



第35図 II17号住居跡



第36図 II17号住居跡出土遺物及び出土位置

第三章 検出された遺構と遺物

II18号住居跡 (擾乱と判明したため欠番)

II19号住居跡 (第37・38図 PL. 5・66)

位置 H-22

平面形 横長長方形。

規模 東辺3.45m、西辺3.35m

北辺2.60m、南辺2.55m

面積 9.35㎡

方位 N-100°-E

壁 やや外傾し、部分的な崩落が見られる。高さは南壁で30cmを測る。

床面 凹凸は少なく東側が西側に比べ10cmほど低い。カマド手前以外は軟質。貼り床は確認されなかった。

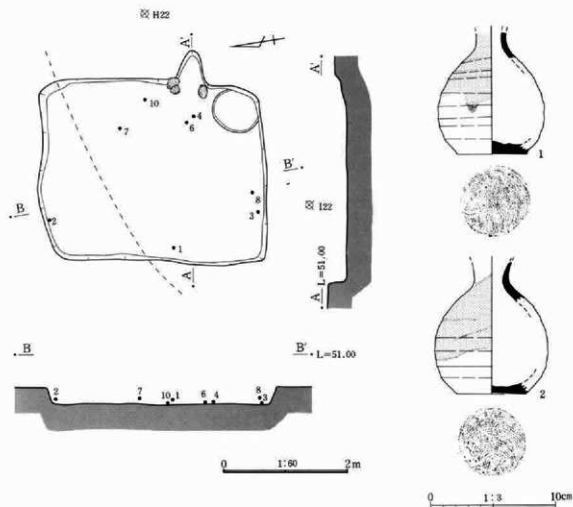
カマド 東壁南寄りで検出。燃焼部は竪穴外の地山を掘り込んで構築され、幅35cm、奥行き55cmを測る。火床面は床面レベルと同じ。袖部は円礫を直立させて補強としている。

貯蔵穴 南東隅で楕円形の掘り込みを検出。径75×65cm、深さ5～6cmを測る。

埋土の特徴 黒褐色土が主体で、カマド流れ込みの後西側からの自然堆積と思われる。

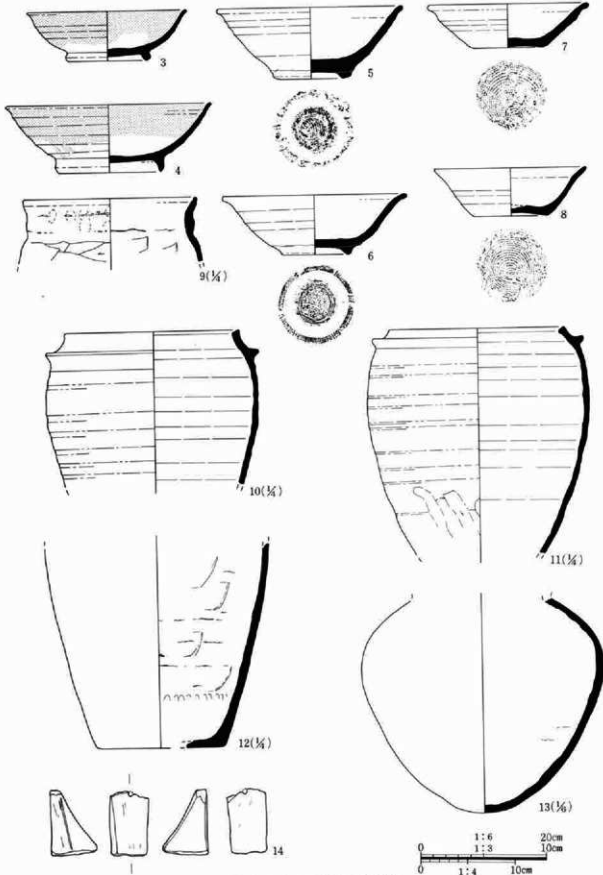
遺物 カマド主体に床面から遺存状況の良い土器が多量に出土しており、時期はほぼ10世紀代に限定される。

重複遺構 4号古墳周堀上に構築される。



第37図 II19号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡



第38圖 II19号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II20号住居跡 (第39～41図 PL. 5・66)

位置 C-20・21

平面形 やや歪んだ方形と思われる。

規模 西辺4.65m、他は不明。

方位 N-63°-W

壁 崩落部分が多く、遺存状況は不良。高さは北西隅で23cmを測る。

床面 中央部がややくぼみ、壁際との比高差は4cmを測る。

カマド 西壁北隅で検出。燃焼部は地山を掘り込んで構築され、幅30cm、奥行き70cmを測る。袖部から側壁にかけて箱輪片を立て掛けて補強材とする。火床面は緩く傾斜して立ち上がり、煙道部に続く。

ピット 検出された6基のうち、P1とP2は床面出土と同時期の土器片が出土するので、本住居跡に伴うものだろう。またP3以外は柱穴と考えにくいのが、小鍛冶施設の可能性もある。

その他 北西半で垂木と思われる炭化材が放射状にひろがって検出された。厚さは10cm前後で長



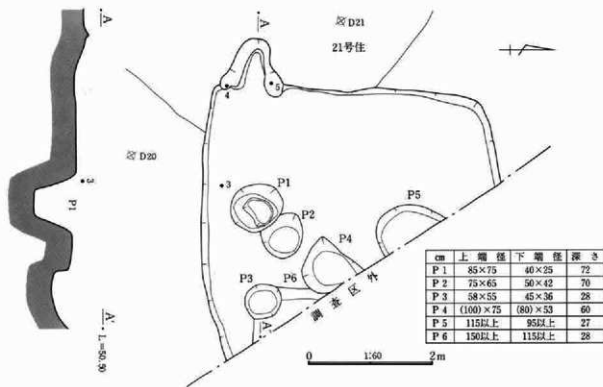
第39図 II20号住居跡カマド検出状況

さは最長120cmを測る。出土レベルは床面とほぼ同じで間層はほとんど見られない。また西壁際中央付近では「茅」と思われる炭化物が炭化材の下に重なって検出された。

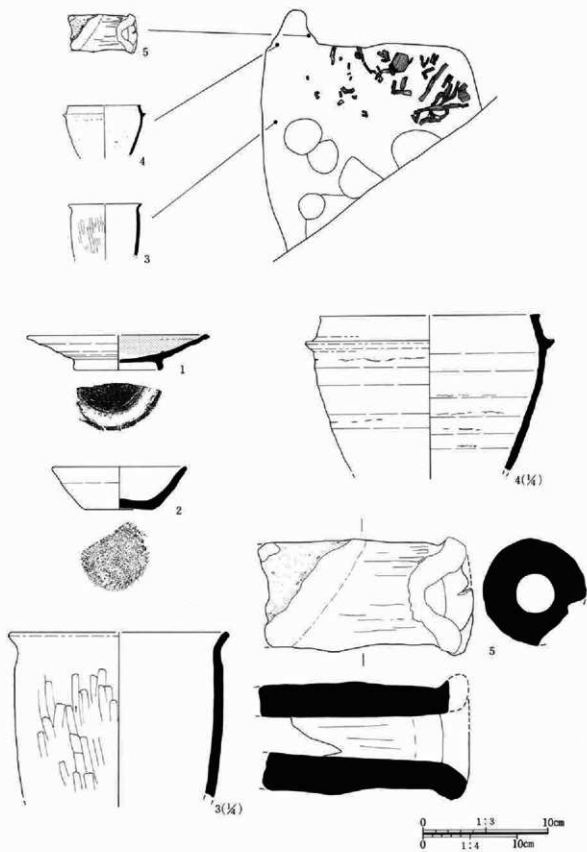
遺物 床面および埋土から投棄されたと想定される状態で土器片、羽口、鉄滓等が出土する。

土器は10世紀代が主体である。

重複遺構 II区21号住居跡を切る。



第40図 II20号住居跡



第41図 II20号住居跡出土遺物及び出土位置

第三章 検出された遺構と遺物

II21号住居跡 (第42図 PL. 6・67)

位置 C・D-20・21

平面形 長方形。

規模 北東辺 (4.40) m、北西辺 (5.15) m
南東辺 (4.90) m、南西辺4.30m

方位 N-38°-E

壁 削平により遺存する部分はわずかで、高さは10cm前後を測る。

床面 中央部がやや高く硬質。壁付近は軟質でややくぼむ。

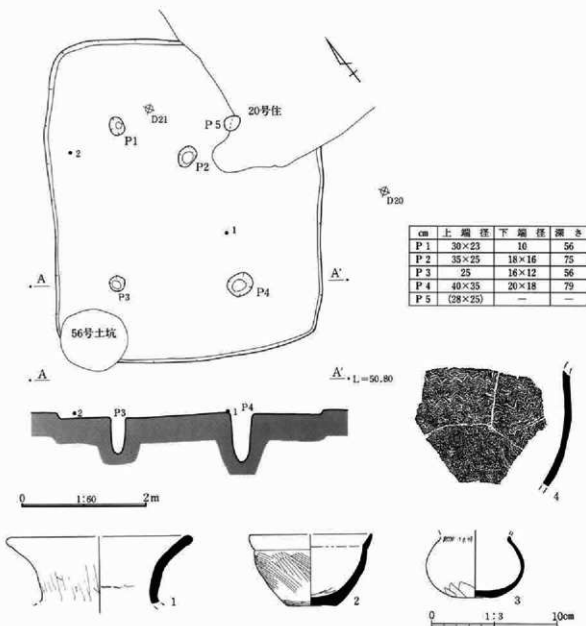
ピット 5基が検出され、P1とP3~P5の4基は配置から主柱穴と思われる。

その他 炉、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 土器片が埋土から散在して出土しており、時期は古墳時代初頭と10世紀代が混在する。

前者が本住居跡に伴い、後者は重複するII区20号住居跡のものと思われる。

重複遺構 東半部分をII区20号住居跡に切られる。



第42図 II21号住居跡及び出土遺物

II22号住居跡 (第43図)

位置 E・F-21・22

平面形 方形と思われるが、東半は不明。

規模・方位 不明。

壁 遺存状況は極めて悪く、南西半にわずかに残る。高さは13cm。

床面 南西部で平坦面が確認されたが、不明確。

ピット 竪穴プラン内で7基が検出されたが住居との関係は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代初頭と平安時代のものが混在。数量的には古墳時代初頭が勝る。

重複遺構 東半でII区1号・2号溝と重複し、これらに切られる。

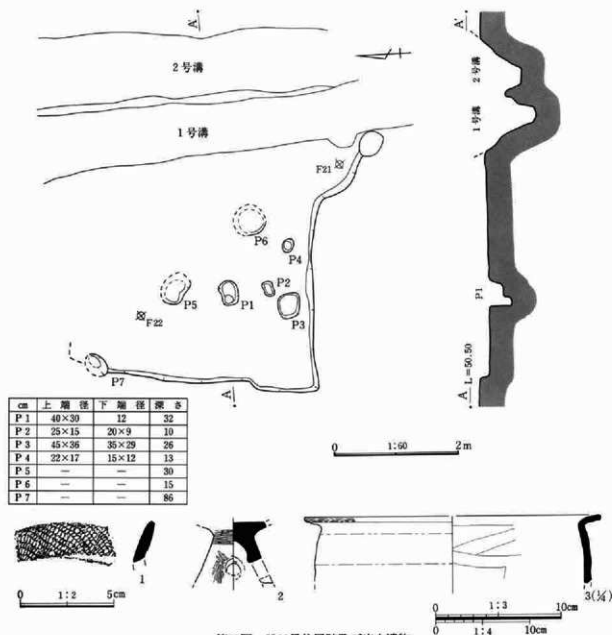
II23号住居跡 (第44図)

位置 C-23・24

平面形・規模・方位 不明。

壁 西部のみ検出されたが、遺構重複で不明。

床面 北と南のわずかな部分で検出された。



第43図 II22号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 なし。

重複遺構 II58号土坑と重複し、新旧関係は不明。

II24号住居跡(欠番)

II25号住居跡(第45・47図 PL. 6・67)

位置 E-18、F-18・19

平面形 長方形と思われる。

規模 主軸方向3.6m前後。

方位 不明。

壁 重複するII区26号住居跡との境界が不明瞭。南壁はほぼ垂直で、高さ19cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、26号住居跡との判別が困難。

カマド 東壁と西壁で2基が検出され、両者とも地山を掘り込んで構築。形状や付設方向から前者が本来的なカマドと考えたい。後者は袖部近似の形状と焼土を残すのみ。前者の燃焼部は幅60cm、奥行き50cm前後を測りほぼ同レベルで煙道部が続く。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 床面付近から土器片、土鏝、砥石、埴輪等20点ほど出土しており、時期は限定できない。

重複遺構 II区26号住居跡、9号・10号井戸と重複し、井戸よりは古いと思われる。本住居跡は調査時点で2カ所のカマドから2軒重複と予想し他を27号住居跡としたが、存在が不鮮明なためこれを欠番とした。

II26号住居跡(第46・47図 PL. 6・67)

位置 D・E-19・20

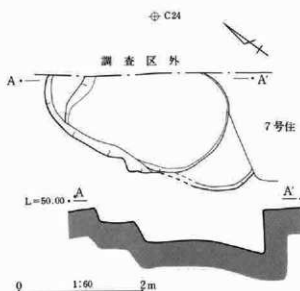
平面形 横長長方形と思われる。

規模 主軸方向3.1m前後。

方位 N-135°-E

壁 遺存状況悪く南半では遺構重複のため不明。高さは東壁で10cmを測る。

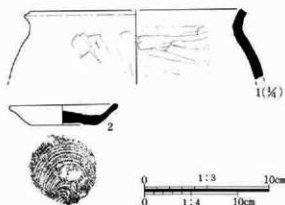
床面 中央部がやや高く、凹凸は少ない。重複するII区25号住居跡とはほぼ同レベル。



第44図 II23号住居跡



第45図 II25号住居跡出土遺物

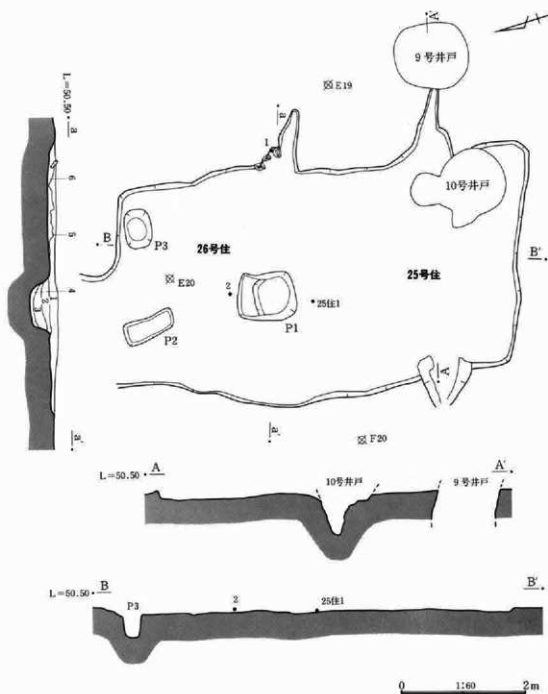


第46図 II26号住居跡出土遺物

カマド 東壁南寄りで検出。燃焼部は不明瞭。壁に補強材と思われる礫が3点出土。煙道部は燃焼部底面からほぼ同レベルで延びる。

ピット 3基のうちP3は貯蔵穴、P1とP2は新旧関係をもつ別遺構の可能性あり。

第1節 竪穴住居跡



土層説明

- 1 黒褐色土 鉄分凝集による斑文あり。
- 2 黒色土 焼土粒を含む。
- 3 黒色土 炭化物を含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黒褐色土 浅間B軽石を含む。
- 6 焼土を主とする。

cm	上端径	下端径	深さ
P 1	95×77	57×50	34
P 2	82×36	73×26	19
P 3	62×42	35×29	44

第47図 II25号・26号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

遺物 10世紀代が主体。

重複遺構 II区25号住居跡との新旧関係は不明。

II27号住居跡(欠番)

II28号住居跡(第48図 PL. 6・67)

位置 C-19・20、D-19

平面形 横長長方形。

規模 東辺(3.90)m、南辺3.65m

西辺3.20m、北辺3.65m

方位 N-124°-E

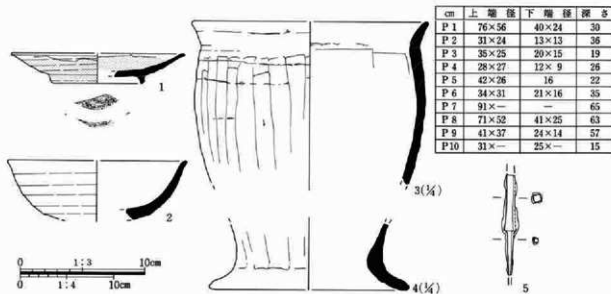
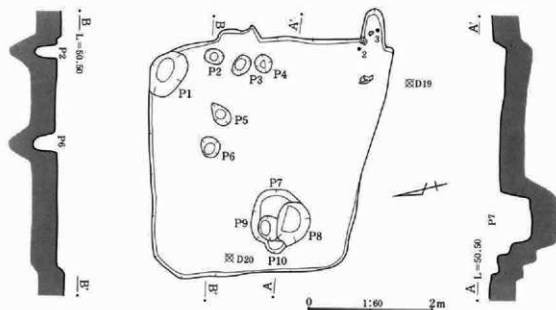
面積 (12.4) m²

壁 遺存状況は不良で、高さ12cmを測る。南壁は不明確。

床面 ほぼ平坦。北側でロームの堅版な部分あり。

カマド 東壁南端で燃焼部を検出。袖部は粘土で構築し、竪穴内に張り出す。燃焼部は楕円形を呈し、幅40cm、奥行き55cmを測る。

ピット 10基のうち柱穴と考えられるものはない。



第48図 II28号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡

遺物 カマド周辺から10世紀代の大形土器片が出土。

重複遺構 なし。

II29号住居跡 (第49・50図 PL. 67)

位置 D・E-17・18

平面形 横長方形。

規模 東辺(4.00)m、西辺4.00m、北辺3.35m

方位 N-91°-E

面積 (13.4) m²

壁 ほぼ垂直の面が残る。高さ28~31cmを測る。

床面 ほぼ平坦。

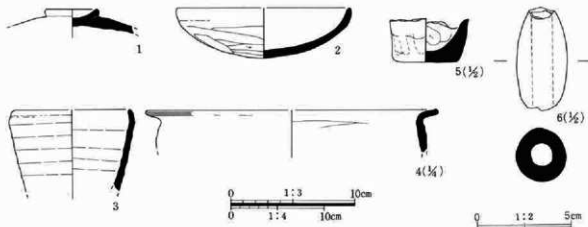
カマド 東壁の北寄りで検出。袖部は竪穴内に大きく張り出す。燃焼部は底面がややくぼみ、奥壁では急角度で立ち上がり煙道部に続く。

周溝 カマド部分を除き、壁に沿って全周する。幅8~22cm、深さ3~8cmを測る。

埋土の特徴 下位に焼土と炭化物を含む褐色土、中位以上はロームブロックを含む黄褐色土が堆積しており、人為的埋土の可能性はある。

遺物 埋土全体から350点ほどの土器片が出土するが、古墳時代初頭から10世紀代のものが混在しており、时期的な限定はできない。

重複遺構 なし。



第49図 II29号住居跡出土遺物

II30号住居跡 (第50図)

位置 D・E-15・16

平面形 縦長方形。

規模 東辺(3.25)m、北辺(3.95)m

方位 N-144°-E

壁 遺存状況は不良で高さは南壁で15cmを測る。

床面 遺存状況不良で平坦面を確認した以外詳細は不明。

カマド 東壁南寄りで検出。燃焼部は平面馬蹄形に地山を掘り込んで構築し、袖部は短く竪穴内に張り出す。燃焼部幅は40cm、奥行き60cm前後を測る。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 古墳時代初頭~10世紀代の小土器片が70点ほど出土。主体は10世紀代と考えられる。

重複遺構 II区31号・32号住居跡と重複するが新旧関係は不明。

II31号住居跡

位置 C-16、D-16・17

平面形 縦長方形。

規模 東辺(3.65)m、南辺4.20m

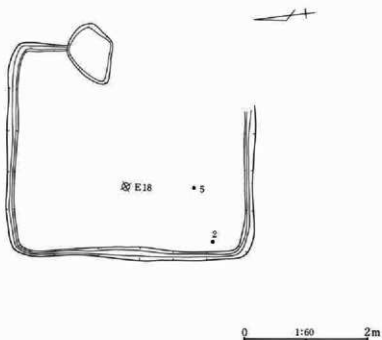
西辺(3.30)m、北辺(4.00)m

方位 N-137°-E

面積 (14.0) m²

壁 削平により遺存状況悪く、高さは13cm。

床面 ほぼ水平。



第50図 II29号住居跡

カマド 東壁で地山を掘り込んだ燃焼部を検出。幅50cm、奥行き65cmを測り、火床面はくぼむ。その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。遺物 古墳時代～10世紀代の土器片が混在する。重複遺構 II区30号住居跡と重複し、新旧関係不明。

II32号住居跡 (第51・52図 PL. 67)

位置 D・E-14・15

平面形 縦長長方形。

規模 東辺 (3.30) m、南辺4.55m

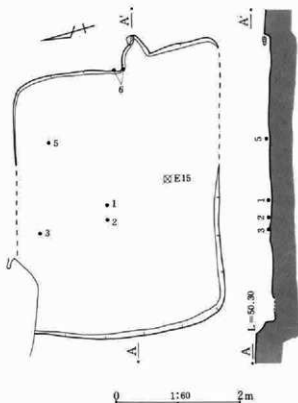
北辺4.15m、西辺 (3.35) m

方位 N-126°-E

面積 (13.2) m²

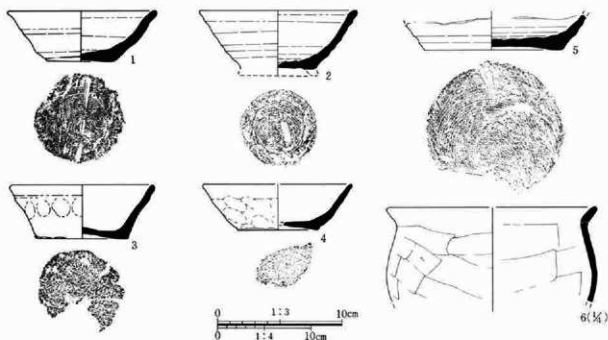
壁 南北の壁は不明確。壁線はやや歪み、23cmの高さを測る。

カマド 東壁南寄りて検出。燃焼部は地山を掘り込んで構築し袖部は不明。燃焼部の平面は馬蹄形で幅40cm、奥行き50cmを測る。



第51図 II32号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第52図 II 32号住居跡出土遺物

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
 遺物 本住居跡に伴うのは10世紀代が主体。
 重複遺構 II区30号住居跡と重複し、新旧関係は不明。

II 33号住居跡 (第53図)

位置 C・D-14

平面形 やや重む長方形と思われる。

規模 西辺4.00m、他は不明。

方位 不明。

壁 遺存する部分は少なく、西側でわずかに7cmを測る。

床面 中央部がやや高く硬質。東半は不明。

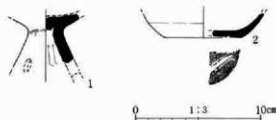
ピット 中央のやや北寄りで1基が検出された。規模が小さく、柱穴とは考えにくい。

遺物 古墳時代～10世紀代の土器片が出土し、主体は古墳時代初頭と思われる。

重複遺構 II区37号・38号住居跡と重複し、いずれよりも古い。



cm	上端径	下端径	深さ
P 1	28×22	9×8	10



第53図 II 33号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第54図 II34号・35号・36号・37号・38号住居跡

II34号住居跡 (第54・55図 PL. 67)

位置 C-12・13

平面形 北半が不明だが方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 壁線としてはかなり乱れており、本来の住居壁とは考えにくい。高さは南東隅で17cmを測る。

床・面 カマド付近で平坦面を検出したが、他は不明確である。

カマド 東壁と思われる位置で燃焼部を検出。平面楕円形に地山を掘り込んで構築する。重複する遺構に切られて詳細は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 8～10世紀代の土器が混在し、埴輪片も加わる。重複遺構が多いため本住居跡に伴うものは判別できない。また南壁際と思われる部分から割れた7点の礫が出土する。

重複遺構 II区の35号・37号・38号・170号・171号住居跡と重複しており、いずれとも新旧関係は不明である。



第55図 II34号住居跡出土遺物

II35号住居跡 (第54・56図 PL. 67)

位置 B-12、C-12・13

平面形・規模・方位 不明。

壁 南西の直線部分を検出。

床・面 凹凸があり、一様ではない。重複する住居跡の床面との判別が困難。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 床面および埋土と思われる位置から10世紀代を主とした土器片が出土するが、帰属は不明確である。

重複遺構 II区34号・36号・37号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

II36号住居跡 (第54・57図 PL. 67)

位置 B・C-13

平面形 南西隅のみの検出だが、方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 ほぼ直線的で比較的整っている。

床面 ほぼ平坦で、レベルは重複する住居跡の中で最も低い。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代～10世紀代の土器小破片が出土し、時期は限定できない。

重複遺構 II区35号・37号住居跡と重複し、37号住居跡よりは新しい。

II37号住居跡 (第54・58図 PL. 6・67)

位置 B・C-13・14

平面形 方形と思われる。

規模 西辺4.50m、他は不明。

方位 N-110°-E

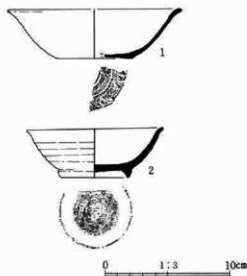
壁 ほぼ直線状で、立ち上がりも垂直。高さは西壁で33cmを測る。

床面 炭化物、焼土、ロームブロックを含む黒褐色土を埋めて貼り床とする。ほぼ平坦。

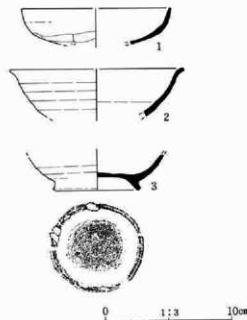
ピット 南東寄りで1基検出。楕円形を呈し、規模は径120×70cm、深さ50cm前後を測る。性格は不明。他に北壁下で1基検出。

遺物 8世紀代を主とした土器片約1000点が出土するが、帰属の不明確なものが多い。

重複遺構 II区33号・34号・35号・36号・38号住居跡と重複し、埋土の所見から36号・38号住居跡より古く、33号住居跡より新しいことが判明している。



第56図 II35号住居跡出土遺物



第57図 II36号住居跡出土遺物

II38号住居跡 (第54・59図 PL. 68)

位置 C-18

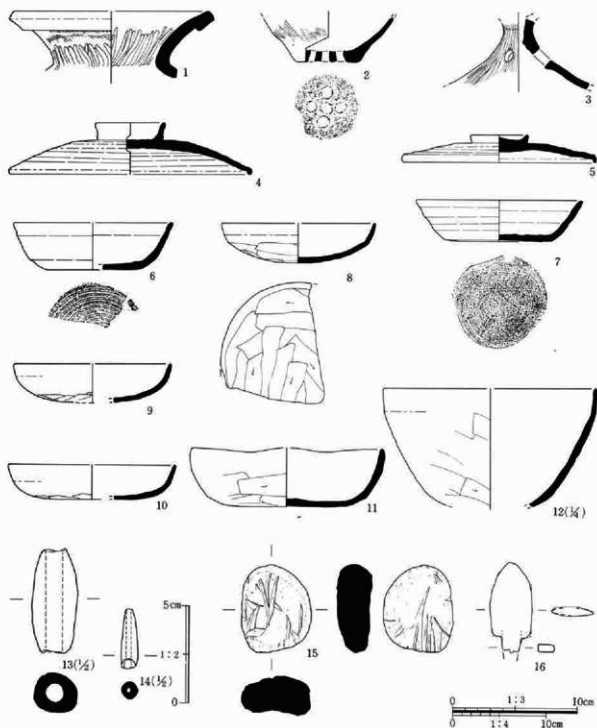
平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 重複する住居跡を掘り込んだ東壁と北壁の一部を検出したが、大部分は不明確。

床面 ほぼ平坦。重複する住居跡のなかで最も深い。

第三章 検出された遺構と遺物



第58図 II37号住居跡出土遺物

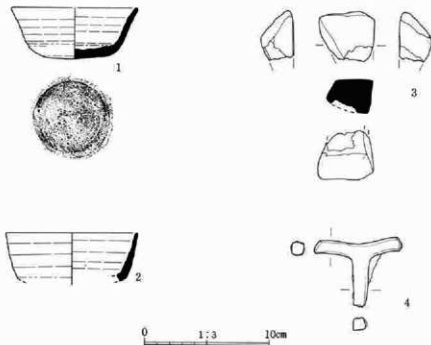
その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 ロームブロックの多い黒褐色土が堆積しており、人為的埋土と考えられる。

遺物 古墳時代初頭～10世紀代の土器片約700点が出土するが、数量的に時期を限定できない。

重複遺構 II区33号・34号・37号住居跡と重複しており、37号住居跡より新しい。

II39号住居跡(欠番)



第59図 II38号住居跡出土遺物

II40号住居跡 (第60・61図 PL. 68)

位置 E・F-13・14

平面形 不整形円形。遺構本来の形状としては疑わしい。

規模・方位 不明。

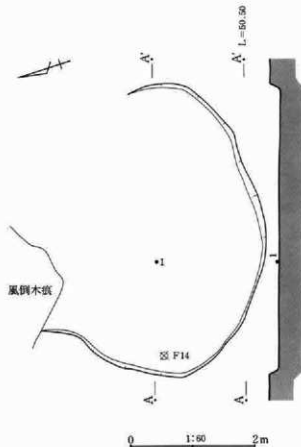
壁 西から南にかけて約15cmの高さで検出された。西側は大きく湾曲して張り出していることから遺構重複か崩落の可能性はある。

床面 ほぼ水平な平坦面を呈する。貼り床の存否や硬軟の状態は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

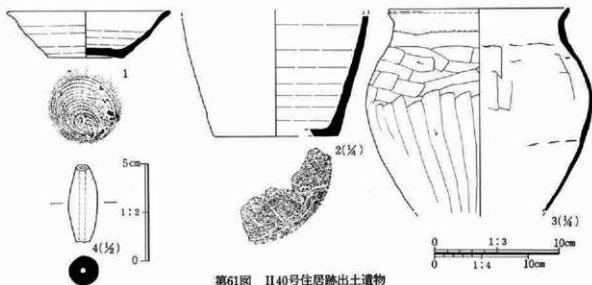
遺物 古墳時代初頭～10世紀代の土器片が出土しており、数量的には新しい時期のものが主体となる。

重複遺構 II区96号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第60図 II40号住居跡

第III章 検出された遺構と遺物



第61図 II40号住居跡出土遺物

II41号住居跡 (第62・63図 PL. 6)

位置 F・G-13・14

平面形 南半が不明だが、方形と思われる。

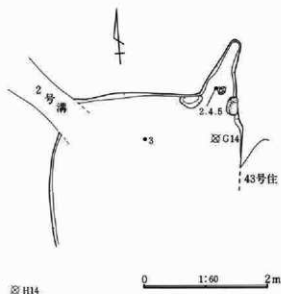
規模 北辺 (2.95) m, 他は不明。

方位 N-32'-E

壁 遺構重複のため良好な遺存状況を示す部分は少ない。北壁は高さ13cmを測る。

床面 ほぼ水平で、凹凸は少ない。

カマド 北壁中央東寄りで検出。燃焼部は平面楕円形で地山を掘り込んで構築。規模は幅50cm、奥行き100cmを測る。袖部に自然礫を直立させており、この抜き取り穴が左袖部に認められる。燃焼部中央には13cmの高さで支脚用の礫を直立させる。

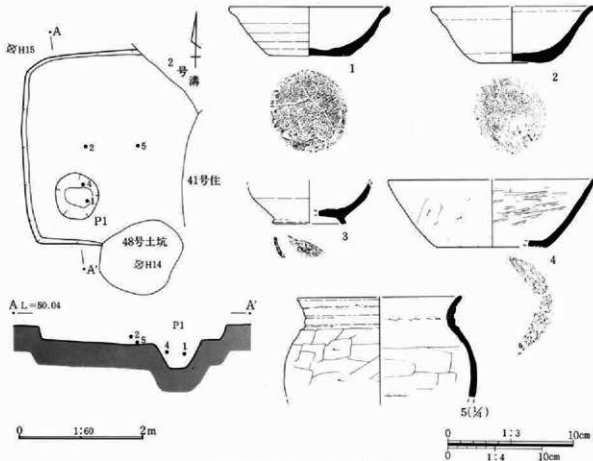


第62図 II41号住居跡



第63図 II41号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡



第64図 II42号住居跡及び出土遺物

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 下位にロームと焼土を含む黄褐色土、
上位に黒褐色土が堆積する。

遺物 9世紀代に主体があり、古墳時代初頭や8
世紀代のものが混入する。

重複遺構 II区42号・43号住居跡よりは新しく、2
号溝との新旧関係は不明である。

II42号住居跡 (第64図 PL. 6・68)

位置 G・H-14

平面形 方形と思われる。

規模 西辺2.70m、他は不明。

方位 N-88°-E

壁 東壁は遺構重複のため不明。西側で高さ26
cmを測る。

床面 西側にやや低く傾斜するが、ほぼ平坦。

ピット 南西寄りの位置で不整形のピット1基を
検出。上端径75cm、下端径45×30cm、深さ46
cmを測る。

埋土の特徴 全体にロームブロックが多く、人為的
埋土の可能性はある。

遺物 9世紀代を主とする杯、甕が出土。

重複遺構 II区41号住居跡、2号溝、48号土坑と重
複し、41号住居跡よりは古い。

II43号住居跡 (第65・66図 PL. 68)

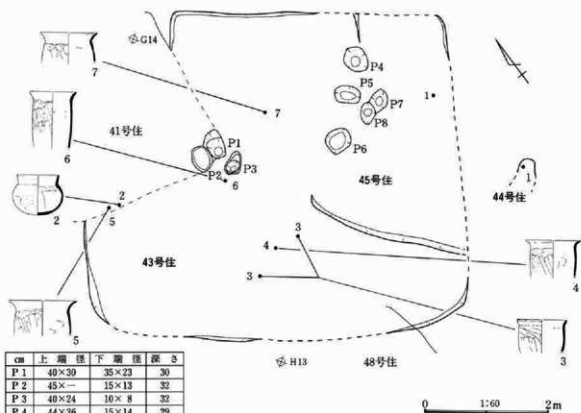
位置 F・G-12・13

平面形・規模・方位 不明。

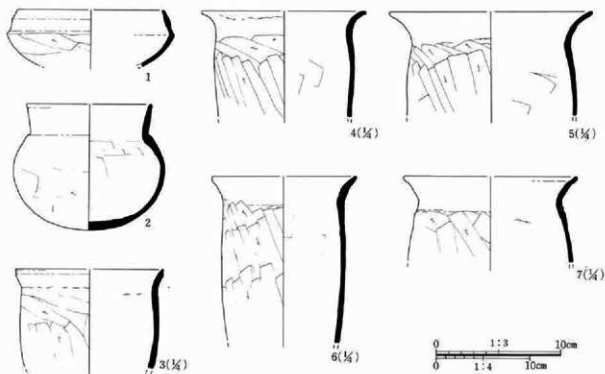
壁 北東部分で直線的な壁が検出された。高さ
は18cmを測る。

床面 東側に緩く傾斜した平面を検出したが、
重複住居跡床面との境界が不鮮明。

第三章 検出された遺構と遺物



第65図 II43号～45号住居跡及び遺物出土位置



第66図 II43号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

ピット 8基が北西と東に偏って検出されたが、配置から柱穴とは考えにくく、本住居跡との関係は不明。

遺物 中央部床面から古墳時代後半の大形土器片が出土する。

重複遺構 II区41号住居跡よりは古いが、II区45号・48号住居跡、2号溝との新旧関係は不明。

II44号住居跡 (第65・67図)

位置 F-12

平面形・規模・方位・壁・床面 不明。

カマド 東壁と想定される位置で燃焼部の一部分を検出。焼土が確認されるが詳細は不明。

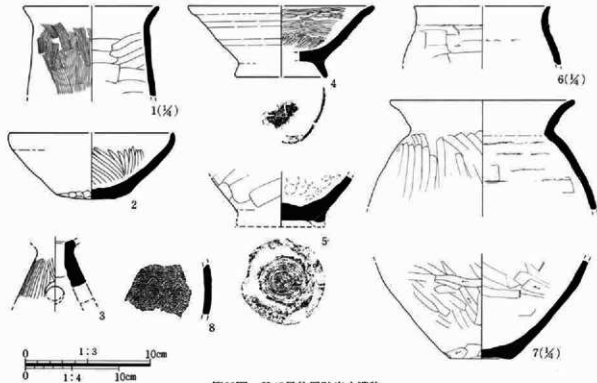
遺物 カマド内から壘1点が出土したのみである。

重複遺構 II区43号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

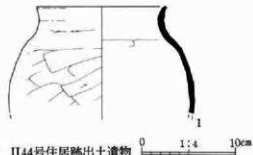
II45号住居跡 (第65・68図 PL. 68)

位置 F・G-12・13

平面形・規模・方位 不明。



第68図 II45号住居跡出土遺物



第67図 II44号住居跡出土遺物

壁 西壁と思われる部分が重複する位置で検出された。高さは重複するII区43号住居跡床面から12cm掘り込む。

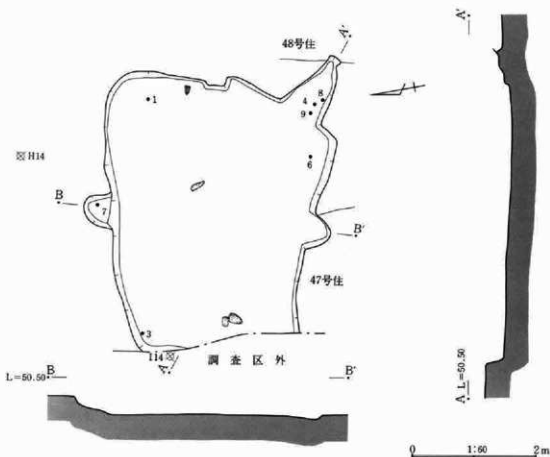
床面 西側以外では43号住居跡床面との比高差がなくなり、境界が不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 ローム、炭化物、焼土を含む黒褐色土が堆積する。

遺物 数量的には古墳時代初頭が主体。9～10世紀代の土器片も見られる。住居プランが確定しないために伴出遺物の抽出はできない。

重複遺構 II区43号住居跡の下から検出されており、また出土土器の傾向から、これよりも古い可能性が高い。



第69図 II 46号住居跡

II 46号住居跡 (第69・70図 PL. 7・68)

位置 H-12・13・14、I-13

平面形 東辺の長い台形状に歪む長方形。

規模 東辺3.75m、西辺(2.50)m、北辺4.35m

方位 N-96°-E

壁 東壁は比較的遺存状況が良好で高さ10~26cmを測る。壁線は崩落等で検出が困難であったため、本来の壁としてはやや疑わしい。

床面 ほぼ水平で整っている。重複するII区47号住居跡より2~3cm低い。

カマド 東壁南端に地山を掘り込んで構築した燃焼部を検出。規模は幅65cm、奥行き110cmを測る。カマド軸線は住居跡主軸から東偏しており東壁にほぼ直行する。火床面は床面とほぼ同レベルで煙道部へは階段状に外傾して移行する。

ピット 北壁と南壁の中央部に張り出し状のピットが一对検出された。規模は両者とも径50cmほどで、深さは北側のものが床面より10cmほど高く、南側は床と同レベルである。柱穴とは考えにくく、性格不明。

埋土の特徴 ローム粒、ロームブロック、焼土、炭化物を含む黒褐色土が堆積する。

遺物 カマド付近から集中して出土しており、時期は10世紀以降にほぼ限定できる。

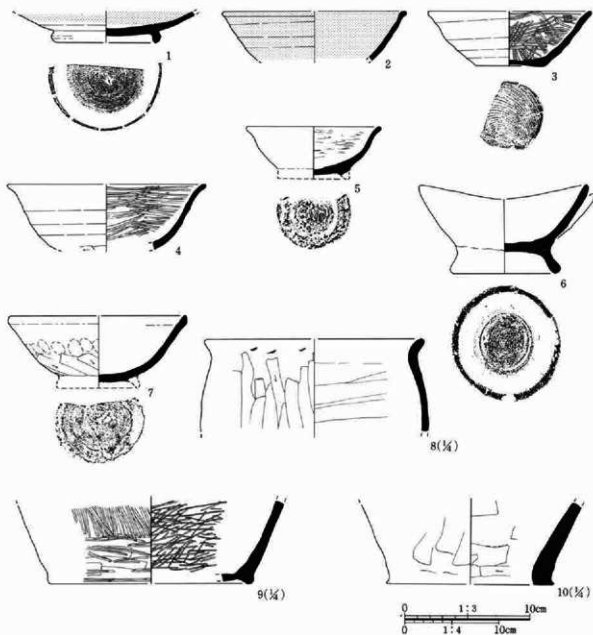
重複遺構 II区47号・48号住居跡と重複しており、いずれよりも新しい。

II 47号住居跡 (第71図 PL. 7・68)

位置 H・I-12・13

平面形 丸みを持った南東隅部が検出されたが、全形は方形と思われる。

第1節 竪穴住居跡



第70図 II46号住居跡出土遺物

規模 不明。

方位 N-109°-E

壁 南壁の遺存状況が比較的良好で高さ17cmを測る。

床面 カマド前面がややくぼみ、硬質。中央部は後世の攪乱により乱れている。

カマド 東壁中央付近で地山を掘り込んで構築された燃焼部が検出された。規模は幅40cm、奥行き60cmを測る。火床面は床面とほぼ同レベル

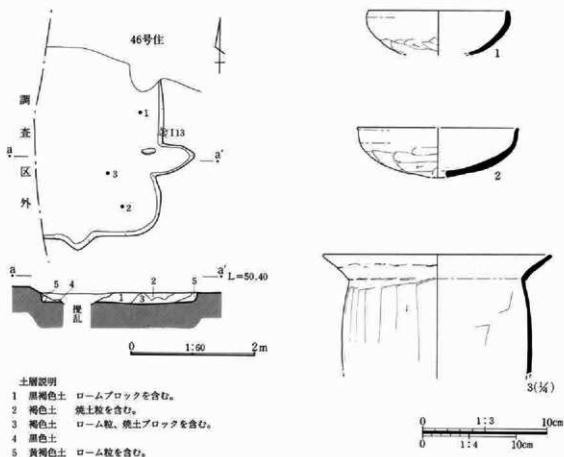
である。袖部は不明確であるが、壁を掘り込んだ位置から15cmほど内側で20cm大の礫が検出されており、補強材の可能性が高い。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。埋土の特徴 主にカマドの焼土を多く含む。

遺物 カマド周辺から8世紀代の土器片が集中して出土。

重複遺構 II区46号住居跡と並列して重複し、これよりも古い。

第三章 検出された遺構と遺物



第71図 II47号住居跡及び出土遺物

II48号住居跡 (第72図)

位置 G-12、H-12・13

平面形 北辺が開く台形状。

規模 東辺 (3.70) m、南辺3.00m

北辺2.85m、西辺 (4.00) m

面積 (10.64) m²

壁 北壁は遺構重複のためやや不明瞭。他は直線的で、掘り込みも垂直に近く遺存する。高さは南壁で25cmを測る。

床面 西側が高く10cmの比高差で東側に傾斜する。

カマド 東壁中央で地山を掘り込んで構築した燃焼部を検出。規模は幅50cm、奥行き75cmを測る。焚口に近い火床面は床面より9cmほどくぼんだ部分がある。壁を掘り込んだ位置で補強と思われる礫が掘えられた状態で検出されてい

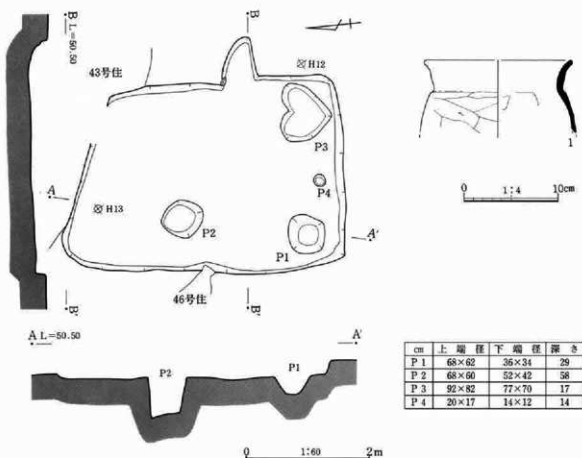
ることから、袖部が堅穴内に張り出すことはなかったと考えられる。

ピット 南東と南西の間隔と中央部西寄りで4基が検出された。柱穴としては規模が大きく浅いと思われ、貯蔵穴や床下土坑の可能性がある。

埋土の特徴 ロームを含む黒褐色土、黄褐色土が堆積しており、人為的埋土の可能性がある。

遺物 古墳時代初頭～10世紀代の小土器片が出土しており、数量的には10世紀代のものが多い。

重複遺構 II区43号・46号住居跡と重複しており、43号住居跡より新しく、46号住居跡より古い。



第72図 II 48号住居跡及び出土遺物

II 49号住居跡 (第73・74図)

位置 I-14・15

平面形・規模・方位 不明。

壁 遺構重複のため大部分が不明確。

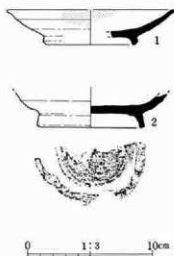
床面 ほぼ水平。遺存状況不良。

カマド 東壁と思われる位置で2号溝に切られた燃焼部と煙道部の一部が検出された。形状や規模は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 カマドから主に10世紀以降の土器片が出土。

重複遺構 II区50号住居跡、4号古墳、1号溝と重複しており、4号古墳より新しく、1号溝より古い。50号住居跡との新旧関係は不明である。



第73図 II 49号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II50号住居跡 (第74・75図 PL. 7・68)

位置 I-14・15

平面形 西半は遺構重複のため不明確だが、やや歪む長方形と思われる。

規模 東辺3.05m、他は不明。

方位 N-129°-E

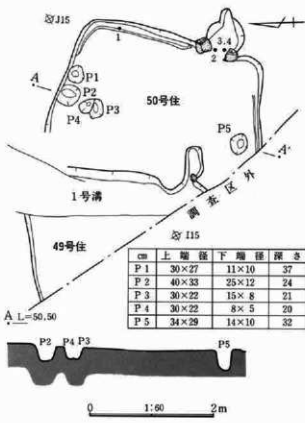
壁 崩落や削平のため遺存状況は不良で、壁線も乱れる。高さは南壁で18cmを測る。

床面 中央部がくぼみ、周縁部と5cmの比高差。

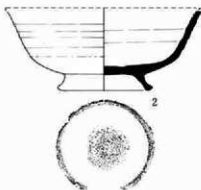
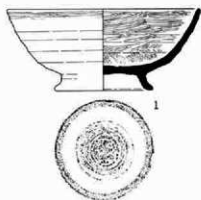
カマド 東壁南寄りて検出され、比較的遺存状況は良好。燃焼部は地山を掘り込んで構築し、平面は楕円形で、規模は幅40cm、奥行き40cmを測る。袖部には20cm大の礎を据えて「鳥居」状の焚口構造を構成している。煙道部不明。

ピット 5基が検出され、P1~P4とP5は南北の壁に接した相対位置にあることから棟持柱跡か。

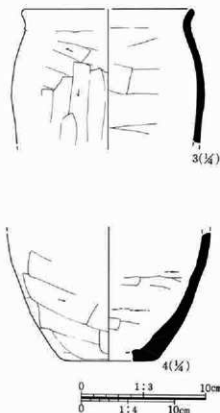
周溝 北東隅から東壁カマド脇までの壁に沿って検出され、幅5~10cm、深さ3~8cmを測る。

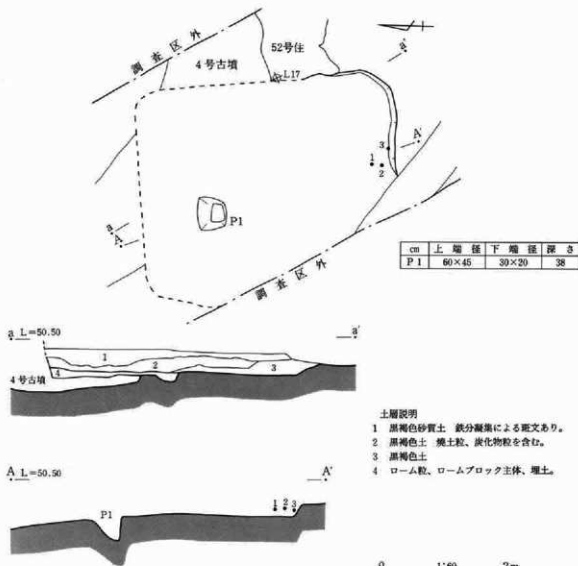


第74図 II 49号・50号住居跡



第75図 II50号住居跡出土遺物





第76図 II51号住居跡

遺物 カマド付近から10世紀以降の碗、土釜、甕等が出土。埋土出土土器片は重複する49号住居跡との判別が困難。

重複遺構 II区49号住居跡との新旧関係は不明、1号溝よりは古い。

II51号住居跡 (第76・77図 PL. 69)

位置 L-16・17

平面形 隅丸形状の南東部を検出。

規模・方位 不明。

壁 外傾する不整な壁面を検出。高さは17cmを測る。

床面 南側がやや低く、ほぼ水平。4号古墳の周堀を掘り込んでロームを含む土を埋填して貼り床を築く。

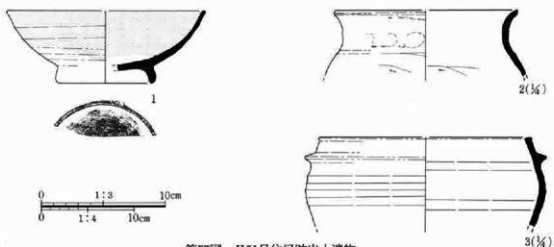
ピット 北西部で1基検出されたが、本住居跡との関連は不明。

埋土の特徴 全体に黒褐色土が堆積しており、層序の所見から、南から北にかけての堆積方向が主と考えられる。

遺物 8世紀代と10世紀代の2時期のものが混在する。出土位置は南壁際に多い傾向がある。

重複遺構 II区52号住居跡、4号古墳と重複し、いづれよりも新しい。

第三章 検出された遺構と遺物



第77図 II51号住居跡出土遺物

II52号住居跡 (第78・79図 PL. 7・69)

位置 K-16・17

平面形・規模・方位 不明。

壁 南壁の一部のみ検出され、高さは20cmを測る。

床面 大部分が4号古墳周堀と重複するため検出が困難で明確な床面は検出できなかった。

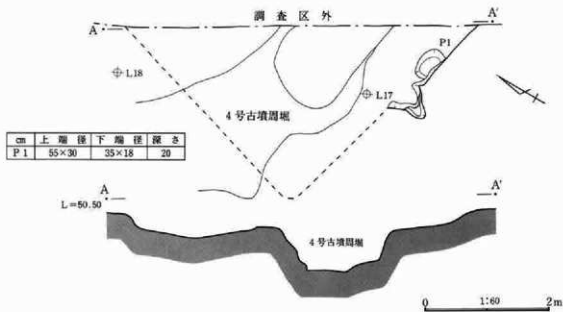
カマド 南壁に構築された燃焼部を検出。規模は幅40cm、奥行き30cmを測る。袖部は不明瞭だが、

焼土の痕跡から壁穴内に張り出す形状と思われる。

ピット カマド左脇で壁に沿って1基検出。掘り方あるいは周溝の一部とも考えられる。

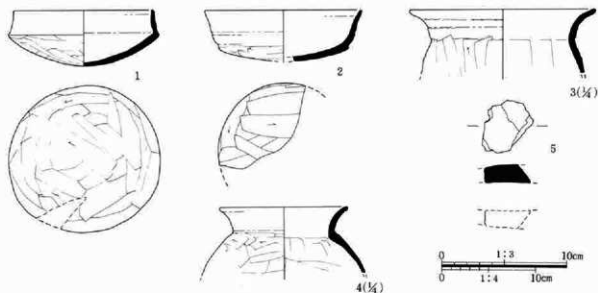
遺物 古墳時代後半の土器にほぼ限定されるが、重複する4号古墳周堀出土土器と大差がないため、帰属は明確でない。

重複遺構 II区51号住居跡より古く、4号古墳との新旧関係は不明。



第78図 II52号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第79図 II52号住居跡及び4号古墳周堀出土遺物

II53号住居跡（1号土器集積跡に変更）

II54号住居跡（1号土器集積跡に変更）

II55号住居跡（2号土器集積跡に変更）

II56号～59号住居跡（欠番）

II区4号古墳調査時点で遺物分布やわずかな平坦面から周堀と重複する住居跡を仮称して命名。調査の結果明確な住居跡の痕跡が確認できなかったため、これらを欠番とした。

II60号住居跡（第81～83図 PL. 7・69）

位置 I区G・H-24・25

平面形 縦長長方形。

規模 東辺(3.60)m、南辺4.30m

西辺3.50m、北辺(4.35)m

方位 N-126-E

壁 遺構重複のため南西部のみが明確に遺存しており、高さは南壁で19cmを測る。

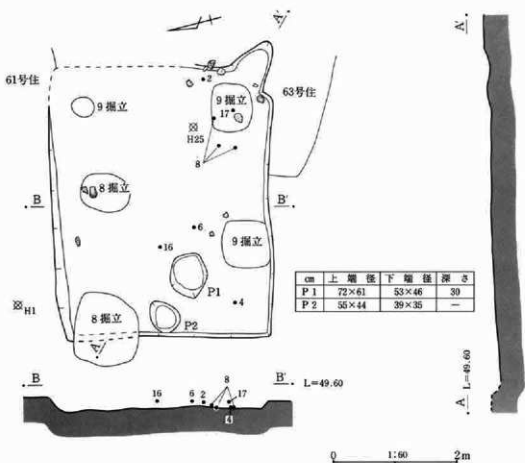
床面 カマドのある東側がやや高く、西側に比高差5cmで傾斜する。

カマド 東壁南隅部で検出。燃焼部は地山を掘り込んで構築され、側壁に埴輪片を並立させて補強としている。平面は三角形で、幅55cm、奥行き60cmを測る。袖部は壁をそのまま使用し、竪穴内へは張り出さないようである。煙道への移行部分は燹破片を外傾させて据える。軸線は南方向に偏る。

ピット 西壁際で2基検出されたが位置、規模ともに柱穴としてはふさわしくない。

遺物 住居跡全体に散在して10世紀代の土器、埴輪片が出土する。

重複遺構 II区の61号・63号・85号住居跡、II区8号・9号竪穴建物跡と重複しており、いずれよりも新しい。

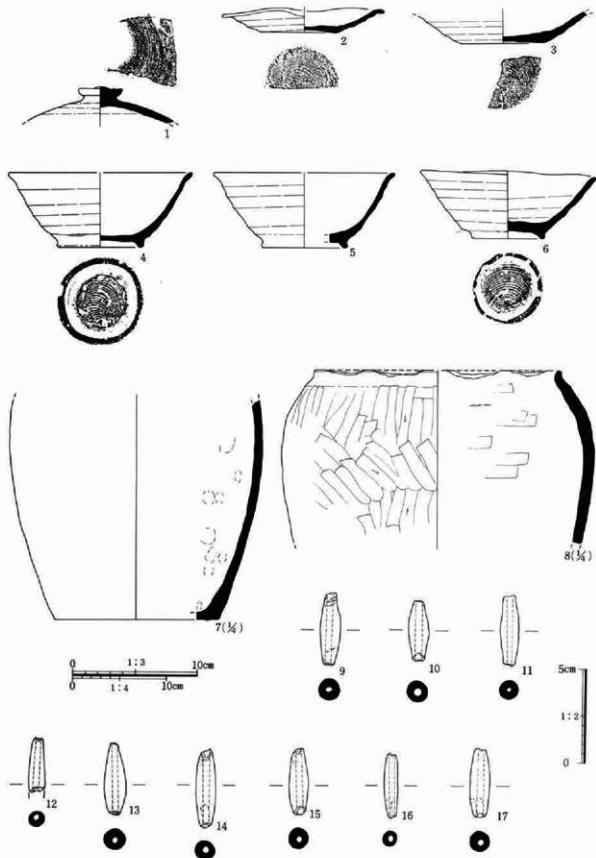


第80図 II60号住居跡



第81図 II60号住居跡カマド検出状況

第1節 壓穴住居跡



第82回 II60号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II61号住居跡 (第83図 PL. 7・69)

位置 I区F・G-25

平面形 縦長長方形。

規模 東辺3.00m、南辺3.55m

西辺2.80m、北辺不明

面積 9.36㎡

方位 N-131°-E

壁 西側部分が最も良好に遺存しており、高さ24cmを測る。

床面 貼り床が見られ、埋土には小ロームブロックを含む黒褐色土を用いる。

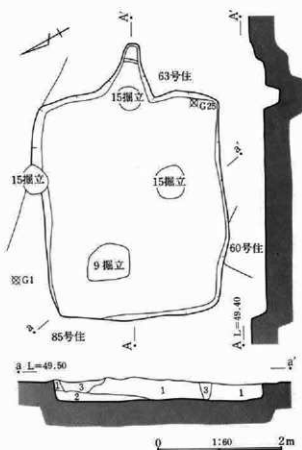
柱穴 カマド焚口と床面中央付近で深さ25cm前後のピット2基が検出されたが、いずれも重複する掘立柱建物跡の柱穴と考えられ、本住居跡には伴わないことが判明した。

カマド 東壁中央付近で燃焼部下部が検出された。地山を掘り込んで構築しており、袖部は不明瞭。平面は台形状で、規模は幅70cm、奥行き60cmを測る。燃焼部奥壁中位から煙道が斜めに掘り込まれる。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 全体にロームブロック、ローム粒を多く含む黒褐色土が堆積しており、その状況から人為的埋土あるいは短時間で埋没したと考えられよう。

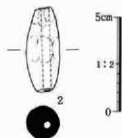
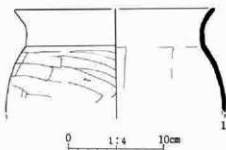
遺物 カマド内から甕片、埋土からは土鏝1点が出土している。図示した以外で、高杯、蓋等の破片が出土している。時期は、8世紀後半代のものである。

重複遺構 II区60号・63号・85号住居跡、II区9号・15号掘立柱建物跡と重複しており、土層断面の所見から63号住居跡、9号掘立柱建物跡よりは新しいと考えられる。

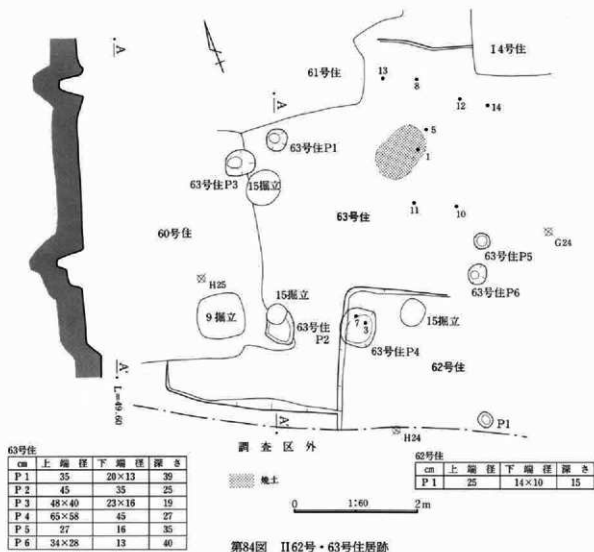


土層説明

- 1 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む。
- 2 黒色粘質土 ローム粒を含む。
- 3 後世の覆土



第83図 II61号住居跡及び出土遺物



第84図 II62号・63号住居跡

II62号住居跡 (第84図)

位置 I区G・H-23・24
 平面形 西北部のみの検出だが方形と思われる。
 規模・方位 不明。
 壁 II区63号住居跡と重複する部分で7cmの高さで確認された。ほぼ垂直。
 床面 地山のロームを床とする。西から東側へ比高差5cmほどで傾斜する。
 ビット 南東部分で1基検出されたが、性格不明。
 遺物 埋土から古墳時代初頭と10世紀代の2時期の土器片が出土。帰属は限定できない。
 重複遺構 II区63号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

II63号住居跡 (第84~87図 PL. 7・69・70)

位置 I区F・G-24
 平面形 方形と思われる。
 規模 東西方向(6)m
 方位 N-116'-E
 壁 北西と東で直線的に掘り込まれた壁の一部を検出。高さは18cmを測る。
 床面 遺構重複が多く本住居跡床面の検出は困難。地山を床とする。
 炉 住居跡中央部よりやや北寄りで見出。火床面は不明。焼土の分布範囲は90×60cmを測る。位置としては東壁に平行する柱間を利用したと考えられる。

第三章 検出された遺構と遺物

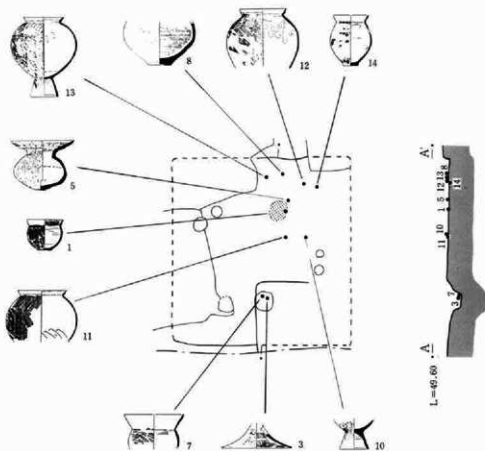
ピット 本住居跡に伴うピットとして6基が検出され、このうちP1とP2は西壁に平行する柱穴と思われる。P5とP6は規模や位置から出入り口に伴う痕跡か。

遺物 住居跡床面全体に分布。時期は古墳時代初頭が主体。

重複遺構 II区60号・61号・62号・85号住居跡、9号・15号掘立柱建物跡、I区4号住居跡と重複し、このうちI区4号住居跡・II区60号・61号住居跡よりは古く、他との関係は不明。

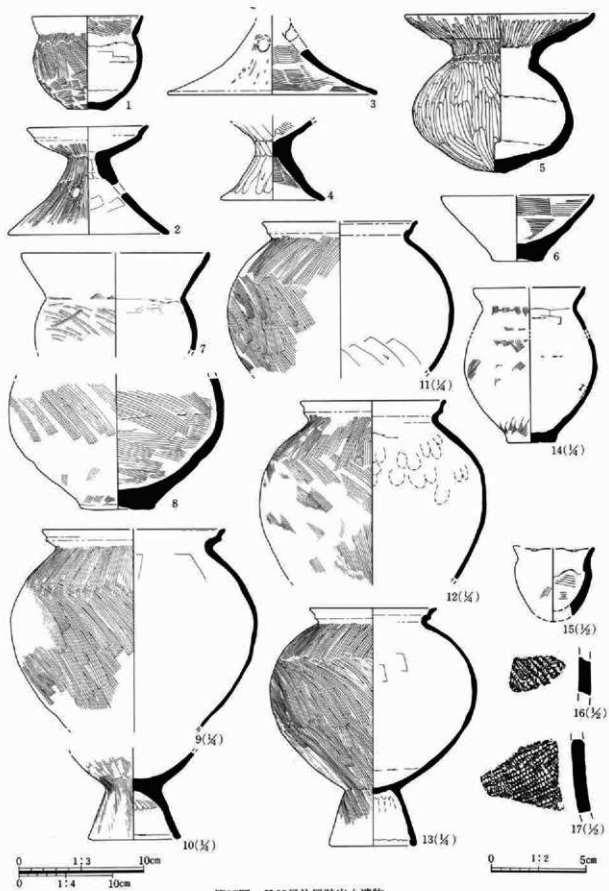


第85図 II63号住居跡炉付近遺物出土状況

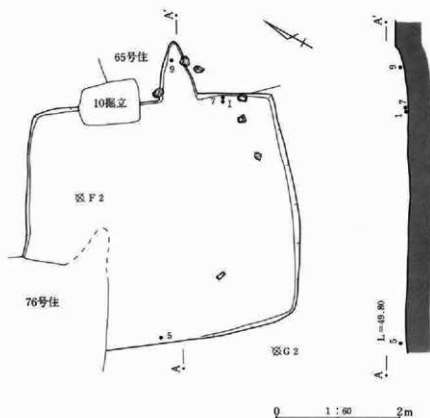


第86図 II63号住居跡遺物出土位置

第1節 竪穴住居跡



第87圖 II63号住居跡出土遺物



第88図 II64号住居跡

II64号住居跡 (第88～90図 PL. 7・70)

位置 E・F-1・2

平面形 西辺の長い方形。

規模 東辺4.05m、南辺3.65m

方位 N-130°-E

壁 ほぼ直線状で垂直に掘り込まれているが、遺存状況は悪く、高さは北壁で21cmを測る。

床面 ほぼ平坦で水平。

カマド 東壁中央よりやや東寄りで、地山を掘り込んで構築された燃焼部を検出。平面は三角形状で幅50cm、奥行き80cmを測る。袖部は張り出さず、左側には補強と思われる礎が検出されている。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 ロームを多く含む黒褐色土がブロック状に堆積することから、人為的埋土の可能性が高い。

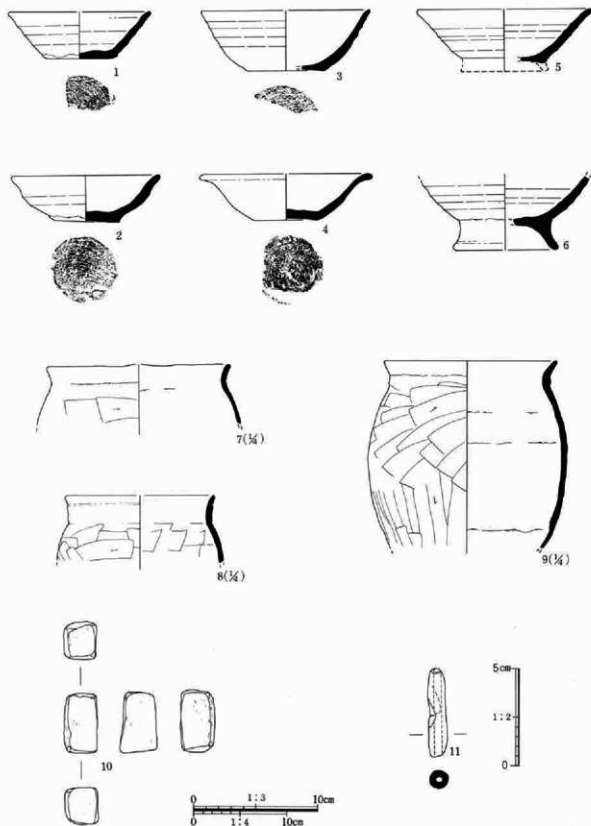
重複遺構 II区65号・76号住居跡、II区10号・11号

掘立柱建物跡と重複しており、65号住居跡より新しく、76号住居跡より古い。掘立柱建物跡との新旧関係は不明。



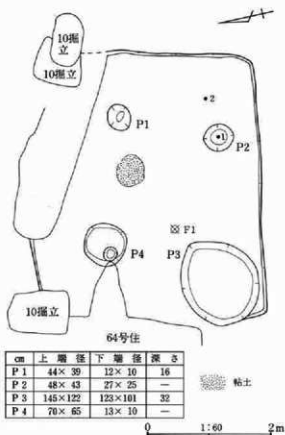
第89図 II64号住居跡カマド検出状況

第1節 竪穴住居跡



第90圖 II64号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



II65号住居跡 (第91・92図 PL. 8・70)

位置 I区E・F-25、II区E・F-1

平面形 方形と思われる。

規模 南辺4.25m、西辺3.65m

方位 N-96°-E

壁 良好な遺存状況を示す東側で高さ6cmを測る。

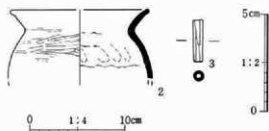
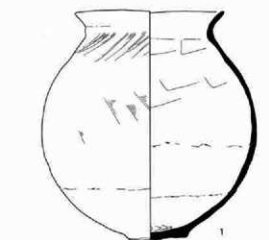
床面 暗褐色土を床としており、ほぼ平坦。

炉 中央部よりやや東寄りで明らかに火を受けた粘土塊が検出された。原初的なカマドの可能性はあるが、崩落が激しく詳細は不明。

ピット 4基が検出され、そのうちのP1・P2・P4は配置から主柱穴の可能性はある。P3は規模が大きすぎることから、掘り方あるいは重複遺構と考えられる。

遺物 炉、ピットP2内、南東隅から古墳時代初頭の大形土器片が出土している。

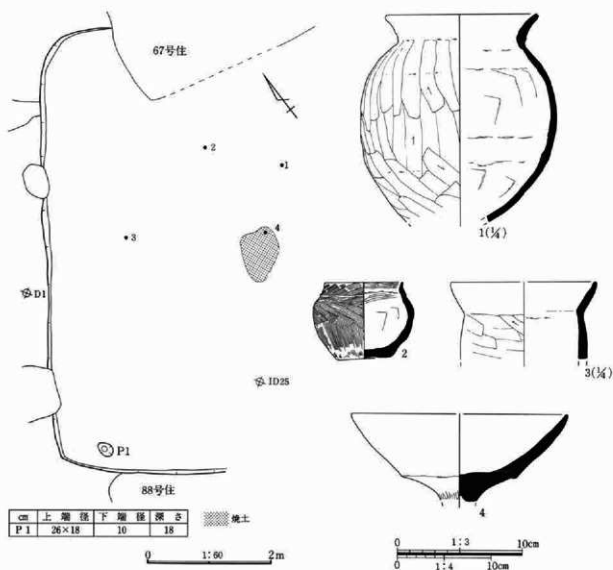
重複遺構 II区64号住居跡、II区10号掘立柱建物跡と重複しており、64号住居跡より古い。



第91図 II65号住居跡及び出土遺物



第92図 II65号住居跡遺物出土状況



第93図 II66号住居跡及び出土遺物

II66号住居跡 (第93図 PL. 8・70)

位置 I区C・D-25、II区C-1

平面形 方形と思われる。

規模 西辺7.00m、東辺・北辺・南辺不明。

方位 N-35°-E

壁 遺存状況不良。高さ17~18cm。

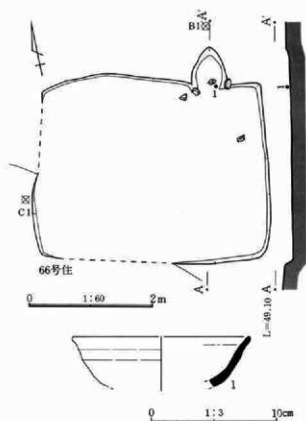
床面 暗褐色土を床とし、全体にほぼ平坦。南東半については不明瞭。

炉 住居のほぼ中央部と思われる位置から、径90×50cmの範囲で焼土が検出されている。硬

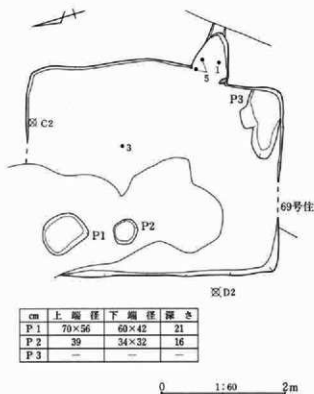
化面は確認されなかった。

遺物 床面あるいはやや浮いた状態で、古墳時代初頭の高杯、甕などが出土している。甕はS字状口縁台付甕も含まれる。なお第93図-2は住居床レベルより下から出土しているが、本住居跡に伴うものと考えたい。

重複遺構 II区67号・69号・88号住居跡、II区10号掘立柱建物跡と重複しており、いずれ新旧関係は不明。



第94図 II67号住居跡及び出土遺物



第95図 II68号住居跡

II67号住居跡 (第94図 PL. 8)

位置 I区B・C-25、II区B-1

平面形 横長長方形。

規模 東辺2.80m、南辺3.80m

西辺 (2.90) m、北辺 (3.55) m

面積 (10.18) m²

方位 N-36°E

壁 遺存状況は不良。高さは5~11cm。

床面 暗褐色土を床面としており、比高差7cmで南側に傾斜する。

カマド 北辺の東寄りで燃焼部が検出された。袖部は竪穴内に10cm程張り出しており、補強材に用いられたと思われる礫が出土している。燃焼部は竪穴外に地山を掘り込んで構築され、規模は幅55cm、奥行60cmを測る。

遺物 古墳時代初頭~10世紀代の土器片が出土しているが、本住居跡に伴うのは平安時代のものであろう。

重複遺構 II区66号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

II68号住居跡 (第95・96図 PL. 8・70)

位置 B-1、C-1・2

平面形 横長長方形。

規模 東辺4.10m、南辺3.00m

西辺 (3.95) m、北辺 (3.35) m

面積 (12.65) m²

方位 N-132°E

壁 東壁はやや歪み、カマドを境にして壁線がずれる。高さ5~17cm。

床面 暗褐色土を床面としており、遺存する部分についてはほぼ平坦。

カマド 東辺の南寄りで見出。竪穴外の地山を掘り込んで構築。規模は幅60cm、奥行65cm。II区66号住居跡と重複する部分で煙道の一部が見出された。

ピット 西壁にそって北寄りに2基、南東隅に1基

が検出された。いずれも柱穴とは考えにくくP1、P2は掘立柱建物跡の可能性がある。P3は掘り方か。

遺物 カマド内から甕の破片が出土。住居全体に散在する土器片は10世紀代のものが主。

重複遺構 II区66号・69号住居跡、溝状の攪乱坑と重複しており、新旧関係は不明である。

II69号住居跡 (第97図)

位置 I区C・D-25、II区C・D-1

平面形 方形と思われる。

規模 不明。

方位 不明。

壁 西側のみ検出され、高さは15cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、II区68号住居跡よりも2～5cm、II区66号住居跡より20cm程高い。

ピット 東半部で2基検出されているが、遺構の重複が多く、住居の範囲も不明瞭なため本住居跡に伴う施設とは断定しがたい。

その他 カマド、周溝、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物 古墳時代初頭や弥生式土器の破片が多く出土。また、南寄りの位置で長さ30cmほどの炭化材が2点出土している。

重複遺構 II区66号・68号・70号住居跡、II区10号掘立柱建物跡と重複し、新旧関係は不明である。

II70号住居跡 (第97図)

位置 I区D・E-25、II区D・E-1

平面形 方形と思われる。規模・方位 不明。

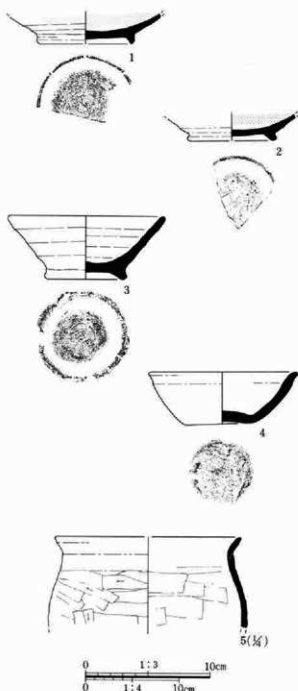
壁 北西部のみ検出され、高さは14cmを測る。

床面 II区66号住より15cmほど高く、南西へ傾斜。

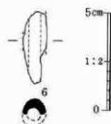
その他 住居跡付施設は検出されなかった。

遺物 主に古墳時代初頭の土器片が散在する。

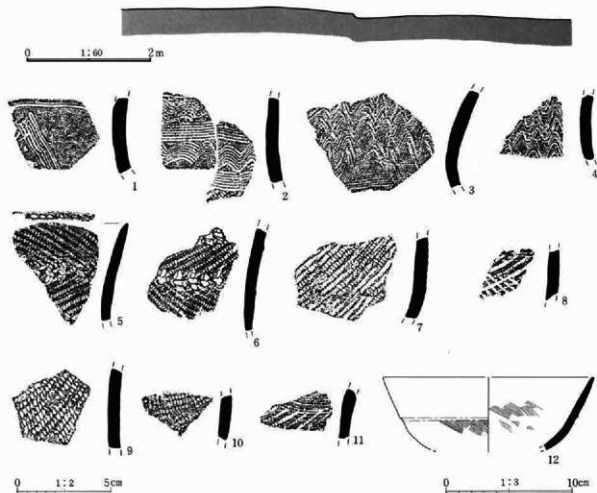
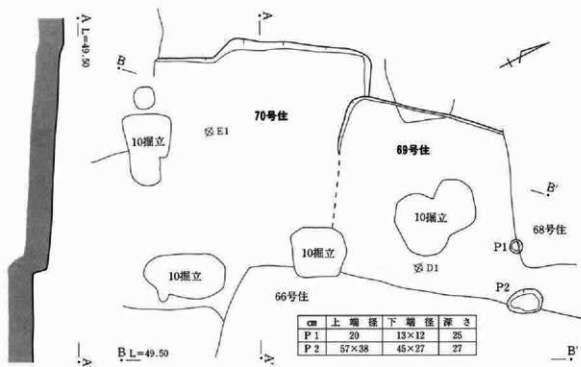
重複遺構 II区65号・69号・88号住居跡、II区10号掘立柱建物跡と重複、新旧関係は不明。



第96図 II68号住居跡出土遺物



第三章 検出された遺構と遺物



第97図 II69号・70号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II71号住居跡 (第98・99図 PL. 8・70)

位置 B・C-1・2

平面形 長方形と思われる。

規模 西辺3.70m、東辺・北辺・南辺不明。

方位 N-103°-E

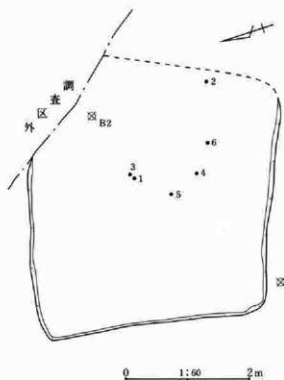
壁 東壁は不明。遺存する部分での高さは4
~12cm。

床面 西側から東側へやや傾斜する。

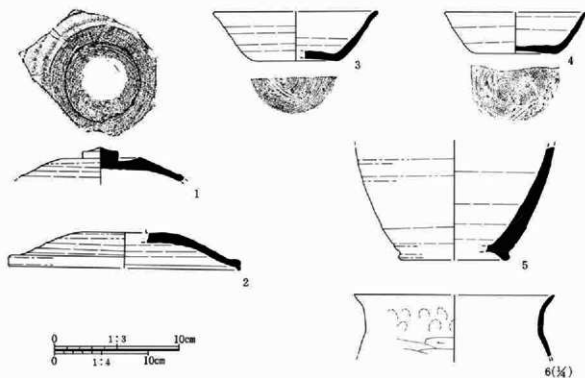
その他 本住居跡に付随するカマド、炉、貯蔵穴、
柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物 杯、甕、蓋などの破片が住居内に散在する
が、ほとんどが床面から浮いた状態で出土し
ている。

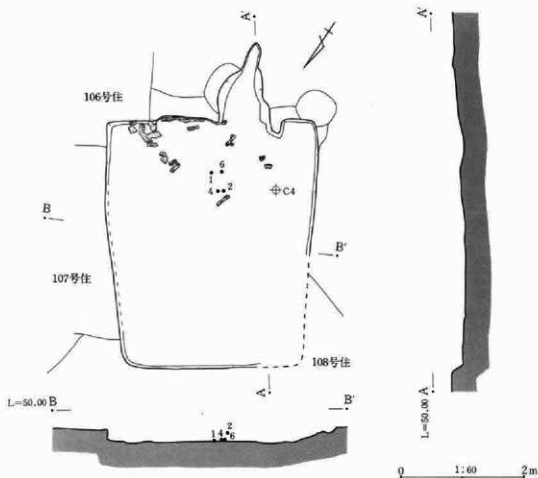
重複遺構 なし。



第98図 II71号住居跡



第99図 II71号住居跡出土遺物



第100図 II72号住居跡

II72号住居跡 (第100・101図 PL. 8・9・70)

位置 B・C-3・4

平面形 縦長長方形。

規模 北東辺3.95m、南東辺3.40m、
南西辺 (3.95) m、北西辺 (2.85) m

面積 (11.81) m²

方位 N-171°-E

壁 遺存状況の良い部分で、高さ18cm。

床面 重複する住居の埋土を床面としており、やや凹凸がある。

カマド 南東壁の西寄りに構築されており、燃焼部と煙道部が検出されている。袖部右側が残存しており竪穴内に30cm程張り出し、燃焼部は幅100cm、奥行100cmを測る。煙道部は燃焼部

奥壁からそのまま緩い傾斜で立ち上がる。

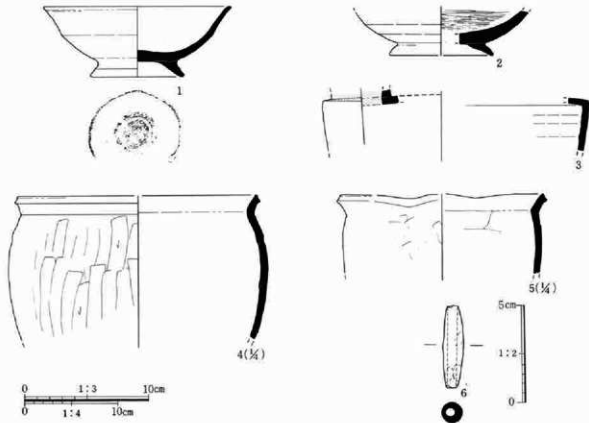
その他 貯蔵穴、周溝、ピットなどは検出されなかった。

埋土の特徴 焼土、炭化物を含む暗褐色砂質土が堆積する。

遺物 カマド前面を中心に土器片が散在して出土しており、また南東壁付近で炭化した上屋根材が検出されている。なお炭化材の脇の床面レベルで銅製と思われる用途不明品が出土する。遺物の出土状況は投棄あるいは流れ込みによるものと考えられる。

重複遺構 II区106号・107号・108号住居跡と重複し、本住居跡が最も新しい。

第1節 竪穴住居跡



第101図 II72号住居跡出土遺物

II73号住居跡 (第102・103図 PL. 9・70)

位置 D・E-2

平面形 縦長方形と思われる。

規模 東辺(4.30)m、北辺2.65m

面積 (10.25) m²

方位 N-46°-E

壁 西壁は不明。遺存状況の良好な東壁で高さ20cmを測る。

床面 他の遺構との重複が多く、明確な床面の検出はできなかった。

カマド 北壁の東寄りで検出。袖部は竪穴内に張り出し、その長さは左側が20cm、右側は40cmを測る。燃焼部は幅85cm、奥行60cmで、底面からそのまま続いて幅20cmの煙道が立ち上がる。なお燃焼部中央の火床面に高台碗が伏せた状態で検出されていることから、支脚として用いられた可能性がある。

ピット 2基が検出されたが、柱穴とは考えられな

い。P2は南東隅にあり貯蔵穴の可能性がある。

遺物 カマド南燃焼部から10世紀代の土器片が出土。

重複遺構 II区74号・75号住居跡、II区10号・11号・12号掘立柱建物跡と重複し、74号住居跡より新しい。

II74号住居跡 (第104～106図 PL. 9・71)

位置 C・D-2・3

平面形 長方形。北東隅部は不明。

規模 西辺3.45m、南辺(5.40)m

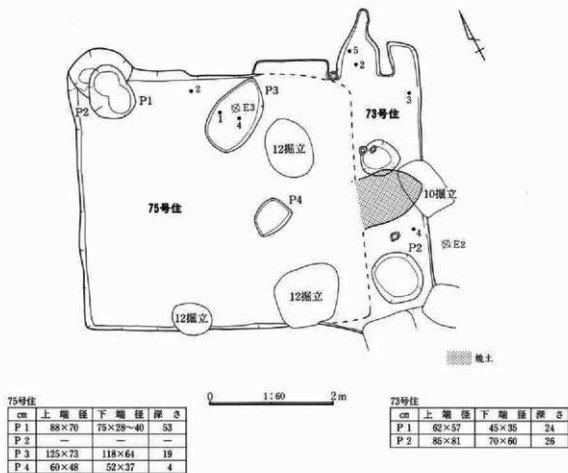
面積 (19.58) m²

方位 N-105°-E

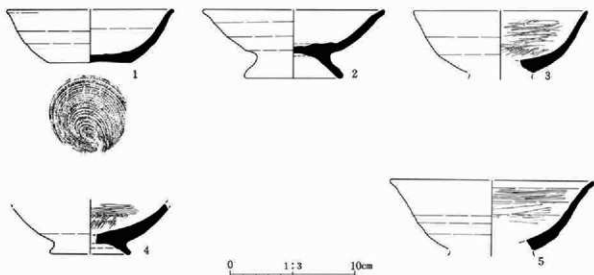
壁 良好な遺存状況を示す西壁で高さ14cmを測る。なお北壁は弱く湾曲している。

床面 西側から東側へ比高差7cmで傾斜する。重複するII区73号住居跡より12～18cm程高い。

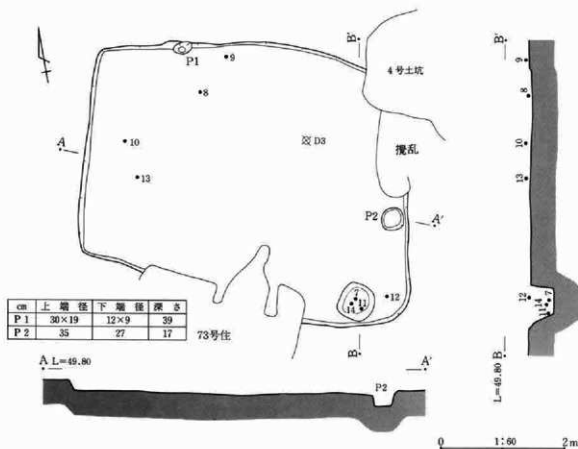
第三章 検出された遺構と遺物



第102図 II73号・75号住居跡



第103図 II73号住居跡出土遺物



第104図 II74号住居跡

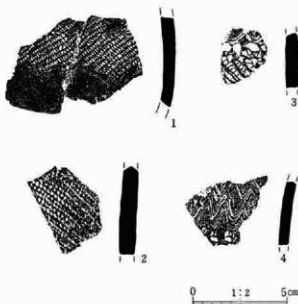
貯蔵穴 南東隅で検出。丸みを持つ方形で、規模は58×55cm、深さ35cmを測る。

ピット 北壁の西寄りと東壁際中央でそれぞれ1基づつ検出された。いずれも柱穴とは考えられない。

炉 検出されなかった。

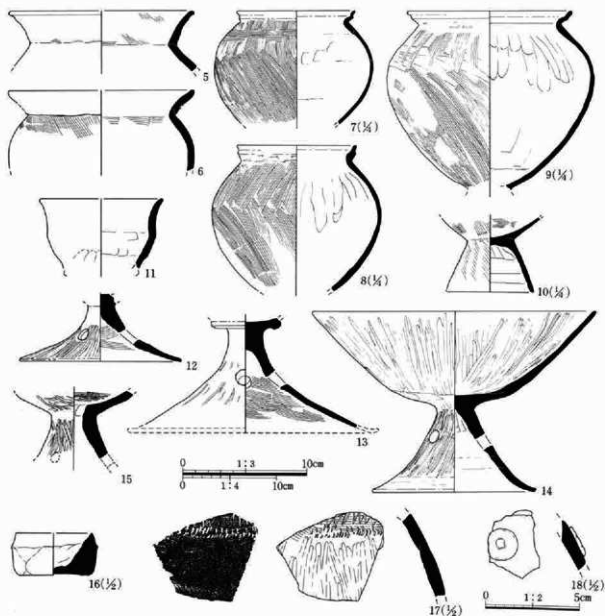
遺物 貯蔵穴とその周辺、北西部の床面から多くの土器片が出土。完形品はなく、住居廃絶以後に投棄されたものと考えられる。古墳時代初期のものが主体を占める。また西隅で住居上屋の一部と見られる炭化材が出土している。

重複遺構 II区73号住居跡、II区4号土坑と重複しており、73号住居跡より古い。



第105図 II74号住居跡出土遺物(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第106図 II74号住居跡出土遺物(2)

II75号住居跡 (第102・107図 PL. 9・71)

位置 D・E-2・3

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 西辺4.15m

面積 (16.93) m²

方位 N-139-E

壁 西壁と北壁で高さ22~25cmを測る。東壁はII区73号住居跡と重複するため、不明確。

床面 ほぼ平坦で、II区73号住居跡と同レベル。

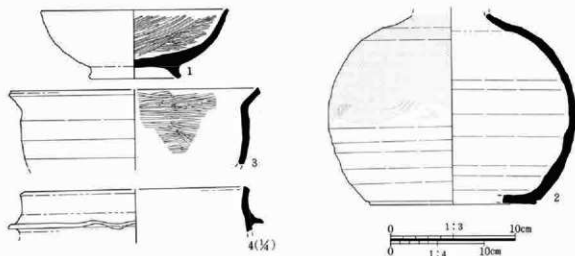
カマド II区73号住居跡と重複する東壁に相当する

部分で、焼土が検出されておりカマドであった可能性があるが、規模や形状は不明確。

ピット 北西隅で2基、中央で2基が検出されるが、いずれも柱穴とは考えられない。

遺物 P3堀土から羽釜片が出土。

重複遺構 II区73号住居跡とは南北の壁が連続する位置で重複しており、また床面もほぼ同レベルであること、更に出土土器がほぼ同時期であることから、両者は本来1軒の住居であったとも考えられる。



第107図 II75号住居跡出土遺物

II76号住居跡 (第108図 PL. 9)

位置 E-2、F-2・3

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 東西軸長3.50m

方位 N-107°-E

壁 西壁の遺存状況が比較的良好で、高さ15cmを測る。

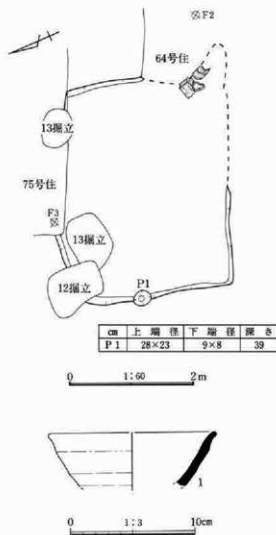
床面 ほぼ平坦。北側に比高差6cmで傾斜する。

カマド 東壁の南端で補強材として用いられた埴輪が検出された。形状と規模は不明である。埴輪は使用時の状態をとどめていないが、袖部に直立させたとと思われる。これは形象埴輪の臺部で縦方向にほぼ半割し、割れ口に簡単な調整を加えて、握えやすい25cmの大きさに整形したものである。器面は直接露出していたようで、わずかだが中央部に火熱を受けた痕跡を残す。

ピット 西壁の中央部で1基検出された。深さは確認面から90cm以上を測り、位置が上屋の軸線上に推定されることから、棟持柱であった可能性がある。

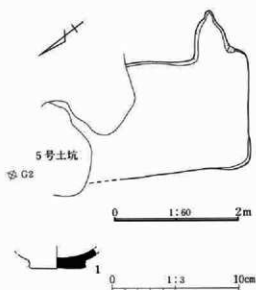
遺物 土器の小破片がほとんどで、時期は10世紀代のものが主体。

重複遺構 II区64号・75号住居跡と重複し、カマドの遺存状況から64号住居跡よりは新しい。

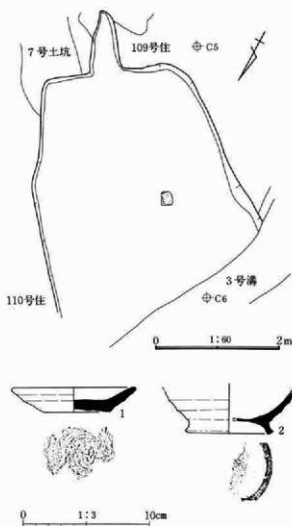


第108図 II76号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第109図 II77号住居跡及び出土遺物



第110図 II79号住居跡及び出土遺物

II77号住居跡 (第109図 PL. 9)

位置 G-1

平面形 横長長方形と思われる。

規模 南辺1.90m、西辺2.50m以上

方位 N-150°-E

壁 東壁の一部と南西隅のみ検出され、高さは6cm前後を測る。

床面 凹凸が激しい。比高差5cmで西側から東側へ傾斜する。

カマド 東壁の南端で検出。竪穴の壁を袖部とし、燃焼部は地山を掘り込んで竪穴外に構築する。燃焼部の規模は幅60cm、奥行60cmを測る。燃焼部の奥壁には煙道へ移行する部分がわずかに確認された。

遺物 10世紀代のものが主。

重複遺構 II区8号・9号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明。

II78号住居跡 (欠番)

II79号住居跡 (第110図 PL. 10・71)

位置 B-5

平面形 北西半は不明。台形状に至む部分が検出されたが、縦長長方形と思われる。

規模 南東辺2.55m、その他不明。

方位 N-171°-E

壁 比較的遺存状況良好な部分は南東辺で、高さ13cmを測る。

床面 ほぼ平坦。

カマド 南東壁の中央部で三角形を呈する燃焼部だけが残る。規模は幅55cm、奥行95cmを測る。

埋土の特徴 下層にAs-B軽石が堆積する。

遺物 埋土から皿、碗、甕、羽釜などの小破片が出土する。10世紀代のものが主体。

重複遺構 II区108号・109号・110号住居跡、II区7号土坑、I区3号溝と重複し、108号・109号・110号住居跡のいずれよりも新しく、それ以外は不明。

第1節 竪穴住居跡

II80号住居跡 (第111・112図 PL. 10・71)

位置 I-1・2

平面形 横長長方形と思われる。

規模 北辺 (2.25) m

方位 N-117-E

壁 遺存良好な西壁で高さ23cmを測る。

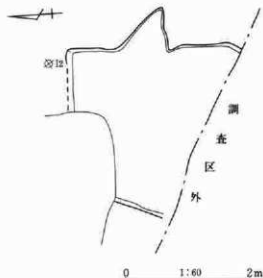
床面 ほぼ平坦で、南側に緩く傾斜する。

カマド 東壁で三角形を呈する燃焼部が検出され、

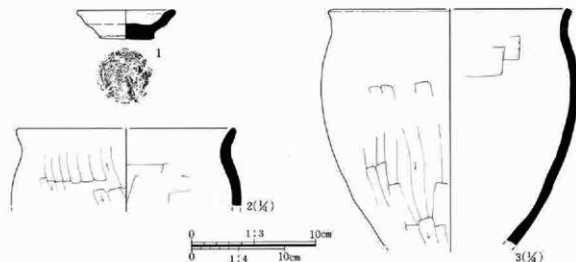
規模は幅90cm、奥行60cmを測る。

遺物 カマド内より瓦破片が出土。

重複遺構 後世の擾乱に切られる。



第111図 II80号住居跡



第112図 II80号住居跡出土遺物

II81号住居跡 (第113図 PL. 10・71)

位置 H-3

平面形 北半は不明だが、横長長方形と思われる。

規模 東辺 (3.15) m、南辺 (2.60) m

西辺 (3.30) m、北辺 (2.80) m

方位 N-100-E

壁 比較的遺存状況の良好な南西隅部で、高さ6cmを測る。

床面 重複するII区82号住居跡の埋土を床とする。

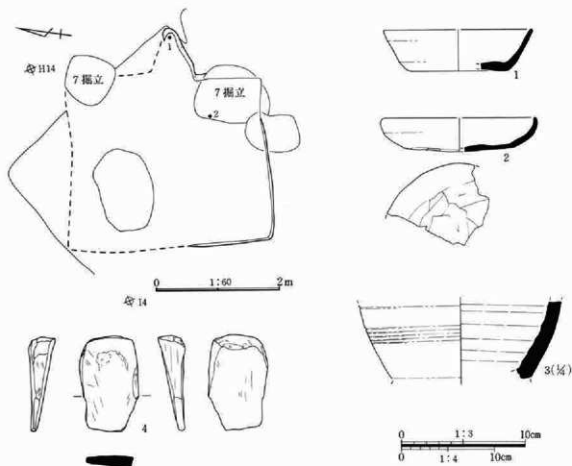
カマド 東壁のほぼ中央と思われる位置で燃焼部の

南半を検出。袖部は壁を掘り込んだ部分を利用してはいると思われる、竪穴内への張り出しは検出されなかった。燃焼部の規模は幅 (90) cm、奥行 (60) cmを測る。燃焼部底面は焚口から煙道部にかけて緩い角度で立ち上がる。

遺物 カマド出土の遺物から8世紀後半～9世紀前半が主体と考えられる。なお土器のほか埋土から砥石が1点出土している。

重複遺構 II区82号住居跡より新しく、II区7号掘立柱建物跡との新旧関係は不明。

第三章 検出された遺構と遺物



第113図 II81号住居跡及び出土遺物

II82号住居跡 (第114・115図 PL. 10・71)

位置 H-2・3・4、I-2・3

平面形 正方形と思われる。

規模 北東辺 (6.30) m、南東辺 (6.60) m
北西辺6.20m、南西辺 (6.60) m

方位 N-65°-E

壁 ほぼ直線に掘り込まれ、崩落などによる乱れは少ない。比較的遺存状況の良い北東部で高さ33cmを測る。

床面 周辺部に比べ中央部はやや高い。

カマド 北東壁の南東寄り検出。本体の大部分は壁穴内にあり、袖部は60cm張り出す。燃焼部の規模は幅70cm、奥行55cmを測る。また煙道部は燃焼部奥壁の底から30cm程の高さでほぼ水平に30cmの長さで地山をくりぬき、そこか

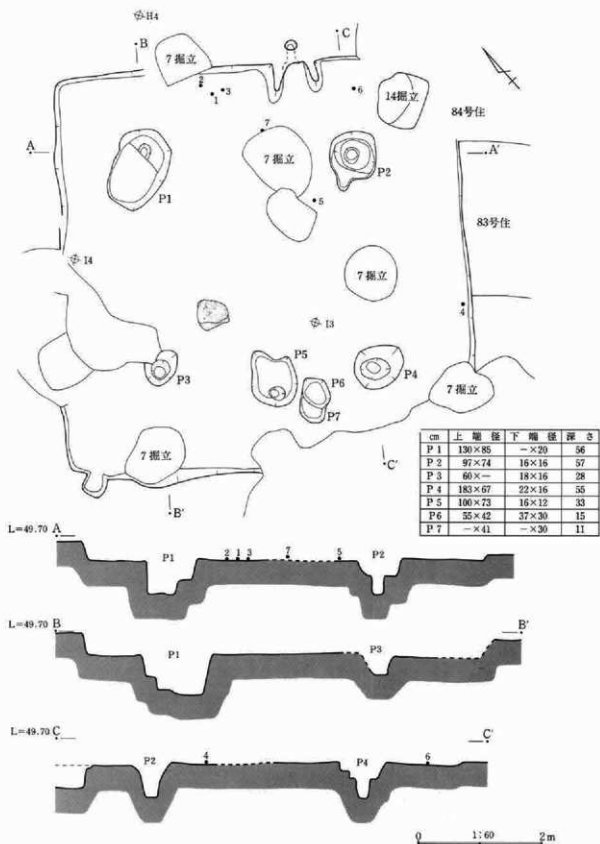
ら上方に開口する。燃焼部の天井は遺存しないが、開口部の大きさは30cmを超えることはないと思われる。

柱穴 P1~P4の4本の主柱穴が検出されている。配置はやや菱形を呈するが、対角線上に位置し柱間寸法も3.3m程でそう。

貯蔵穴 東隅で検出。長方形あるいは楕円形を呈し、規模は長さ85cm、幅75cmを測る。

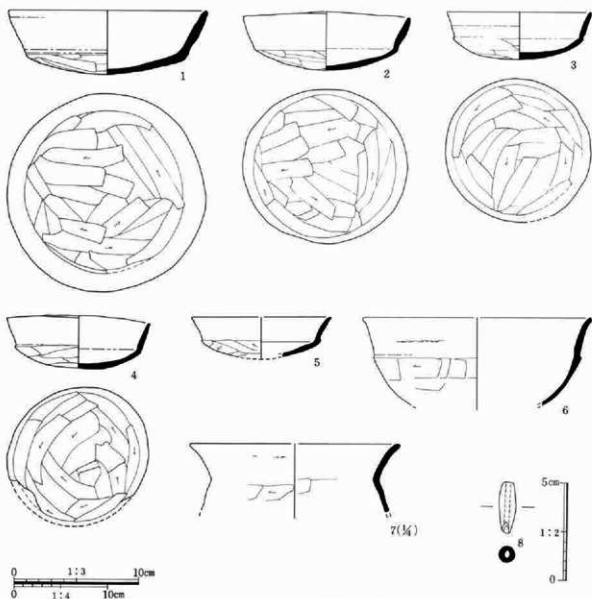
遺物 カマド左脇の床面上より杯が3個体出土したが、破砕状況から投棄されたものと考えられる。古墳時代後期に限定されよう。

重複遺構 II区81号・83号・84号住居跡、II区7号掘立柱建物跡と重複しており、81号住居跡より古いが、その他との新旧関係は不明である。



第114図 II82号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第115図 II82号住居跡出土遺物

II83号住居跡 (第116・117図 PL. 71)

位置 G・H-1・2・3

平面形 北西辺と南西辺の一部が検出されたが、形状は不明。

規模 北西辺 (5.55) m、南西辺 (5.35) m

方位 不明。

壁 遺存状況の良好な部分で、高さ16cmを測る。

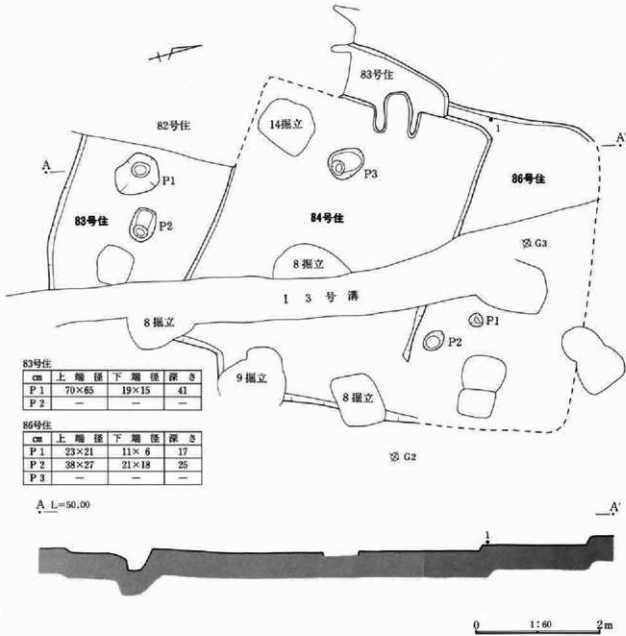
床面 小さな凹凸が多く、重複するII区84号住居跡の床面より10cm程高い。

ピット 南西壁から1m離れて2基検出された。P2は南隅の柱穴となる可能性がある。

その他 カマド、炉、周溝、貯蔵穴などの施設は検出されなかった。

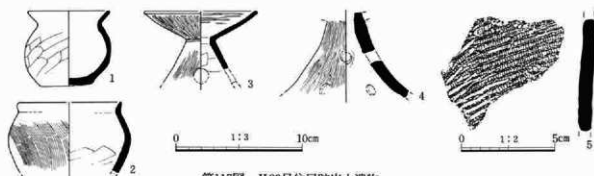
遺物 本住居跡に伴う遺物は非常に少なく、その中でも古墳時代初頭のものが主体を占める。

重複遺構 II区82号・84号・86号住居跡と重複し、カマドの遺存状況から84号住居跡より古いと思われる。



第116図 II83号・84号・86号住居跡及び重複関係模式図

第三章 検出された遺構と遺物



第117図 II83号住居跡出土遺物

II84号住居跡 (第116・118図 PL. 10・71)

位置 G-2・3、H-2

平面形 縦長方形と思われる。

規模 主軸方向長(4.50)m、直行軸長3.65m

方位 N-4°-W

壁 遺構重複が多く、不明確な部分が多い。高さは13cm前後を測る。

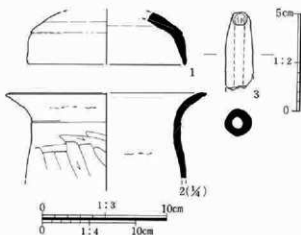
床面 暗褐色土を床とし、ほぼ平坦。

カマド 北西壁の中央部で燃焼部下半が検出された。袖部は竪穴内に45cm張り出し、燃焼部の規模は幅35cm、奥行70cmを測る。軸線は住居跡の主軸方向よりやや西に傾く。

その他 貯蔵穴、柱穴、周溝などの施設は検出されなかった。

遺物 南半部で集中して出土したが、重複遺構に帰属する可能性も強い。古墳時代後半が主体と思われる。

重複遺構 II区82号・83号・86号住居跡、II区8号・14号独立柱建物跡と重複し、83号住居跡よりは新しいが、その他の新旧関係は不明である。



第118図 II84号住居跡出土遺物

ピット 遺構の範囲内から6基が検出されている。

ただし住居形態に相応する柱穴は見当たらず、本跡に伴わない可能性もある。

その他 カマド、貯蔵穴、周溝などの施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代初頭の土器が主体。

重複遺構 II区60号・61号・63号住居跡、II区8号・9号・15号独立柱建物跡と重複。60・61号住居跡より古い。

II85号住居跡 (第119・120図)

位置 I区F・G-25、II区G-1

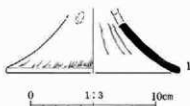
平面形 方形と思われる。南西、南東半は不明。

規模 不明。

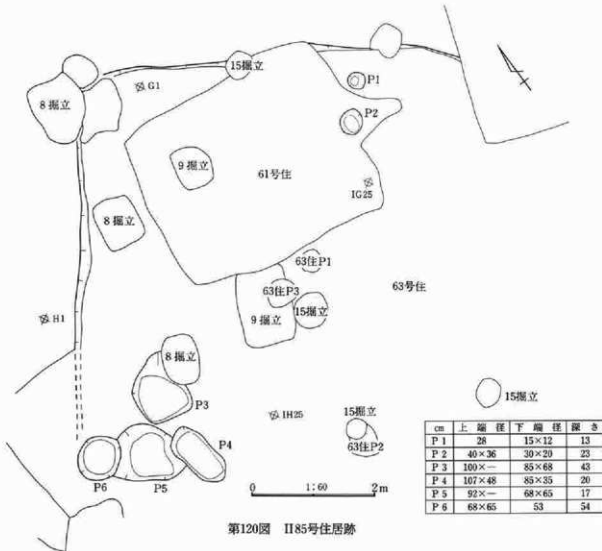
方位 N-36°-E

壁 北西壁で高さ19cmを測る。

床面 遺構重複が多く、良好な床面は見られない。



第119図 II85号住居跡出土遺物



第120図 II85号住居跡

II85号住居跡 (第116・121図)

位置 F・G-2・3

平面形 長方形と思われる。

規模 短辺5.10m

方位 不明。

壁 遺存状況の良好な南東壁で高さ23cmを測る。

床面 西側から東側へ10cmの比高差で傾斜する。

ピット 南東半で2基、北西半のII区84号住居跡と重複する部分で1基が検出された。対角線上の位置からP1とP3は柱穴と考えられる。

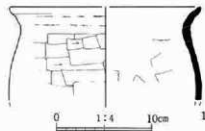
その他 カマド、貯蔵穴、周溝などの施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代後期のものが主体と思われる。

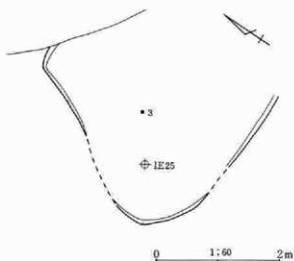
重複遺構 II区83号・84号住居跡、II区8号・14号

掘立建物跡、I区3号溝と重複し、それぞれの新旧関係は不明である。

II87号住居跡 (欠番)



第121図 II86号住居跡出土遺物



第122図 II88号住居跡

II88号住居跡 (第122・123図 PL. 71)

位置 I区D・E-24・25

平面形 楕円形状を呈するが、東半部は不明。

規模・方位 不明。

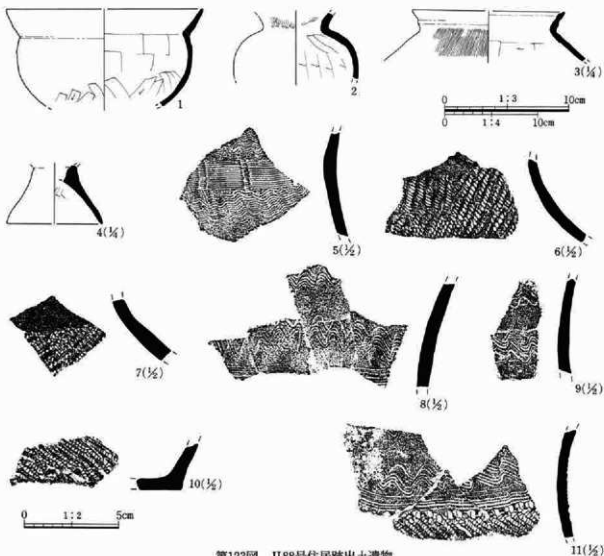
壁 遺存状態が不良で高さは8cm前後を測る。

床面 不明確。

その他 炉、貯蔵穴、柱穴などの施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代初頭を主とする土器片が散在する。他に樽式、赤井戸式、二軒屋式の弥生土器が出土する。

重複遺構 II区66号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第123図 II88号住居跡出土遺物

II89号住居跡 (欠番)

II90号住居跡 (第124図 PL. 10)

位置 F・G-4・5 平面形 正方形。

規模 東辺3.35m、南辺3.15m

西辺3.15m、北辺3.05m

面積 9.38㎡ 方位 N-134°-E

壁 遺存状態不良、西端部で高さ9cmを測る。

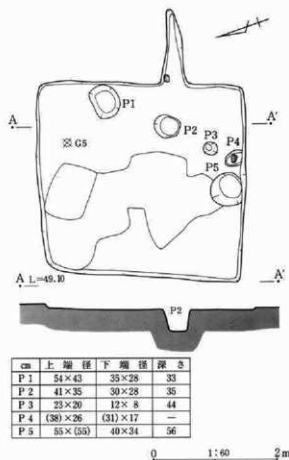
床面 東側から西側に比高差7cmで緩く傾斜する。

カマド 東壁の南寄りで検出。左側の袖部で補強に使用されたと思われる礎を検出。平面形は細長く、燃焼部の幅45cm。煙道部へは緩く傾斜して続く。煙道末端までの長さは115cm。

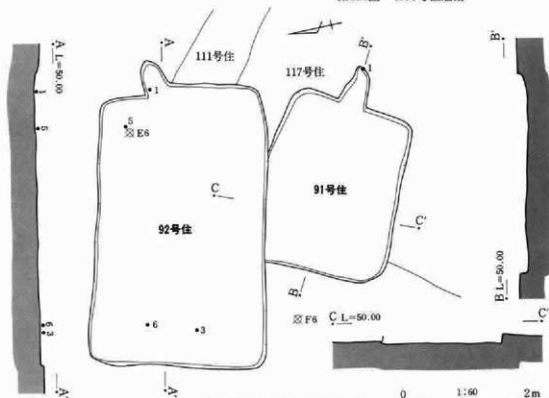
ピット 南東部分で5基が検出された。P4は浅いくぼみで南壁に接することから出入口に伴う施設かとも考えられる。

遺物 羽釜等の10世紀代を主とする土器片が出土するが、遺構重複により不明。

重複遺構 掘立柱建物跡柱穴と重複の可能性あり。



第124図 II90号住居跡



第125図 II91号・92号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

II91号住居跡 (第125・126図 PL. 11・71)

位置 E-5 平面形 縦長長方形。
規模 東辺2.05m、南辺2.70m
西辺(2.25)m、北辺2.85m
面積 (5.73) m² 方位 N-139'-E
壁 掘り込みはほぼ垂直で、深さは10~19cm。
床面 ほぼ平坦で、西から東へ比高差5cmで傾斜する。II区111号・117号住居跡埋土を床とする。
カマド 東辺の中央部に地山を掘り込んで構築された燃焼部を検出した。規模は幅45cm、奥行55cmを測る。
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝などの施設は検出されなかった。

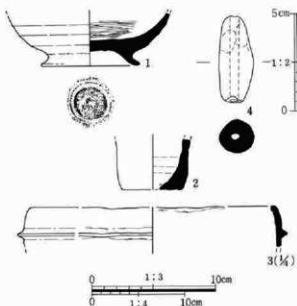
埋土の特徴 主に黒褐色土が堆積する。

遺物 出土量は少ないが、10世紀代の碗、羽釜、土鍬などが見られる。

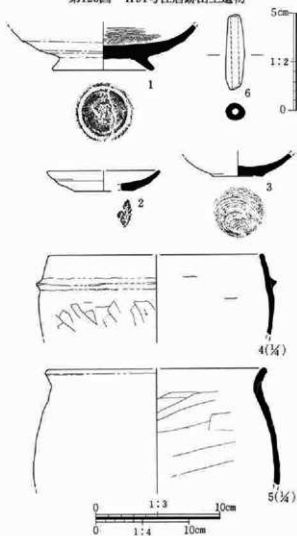
重複遺構 II区92号・111号・117号住居跡と重複し、111号・117号住居跡より新しく、92号住居跡より古い。

II92号住居跡 (第125・127図 PL. 11・71)

位置 E-5・6 平面形 縦長長方形。
規模 東辺2.70m、南辺4.50m
西辺2.85m、北辺4.25m
面積 11.37m²
方位 N-127'-E
壁 掘り込みは浅く、高さ8cmを測る。
床面 ほぼ水平、平坦で、重複するII区91号住居跡より10cm程高い。
カマド 東辺のやや北寄りに地山を掘り込んで構築された燃焼部を検出した。軸線は住居跡主軸よりもやや北東に傾く。このため袖部の位置が左右でずれる。規模は幅40cm、奥行45cmを測る。
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝などは検出されなかった。



第126図 II91号住居跡出土遺物



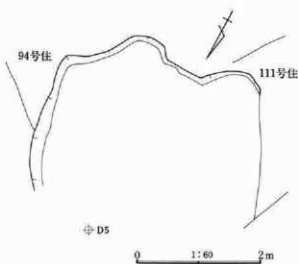
第127図 II92号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

埋土の特徴 焼土、炭化物を含む土層が初期に埋積しており、焼失家屋の可能性がある。

遺物 少量であるが床面上及び埋土中より10世紀後半の椀、羽釜、鉄滓、土鍾などが出土。

重複遺構 II区91号・111号・117号・124号・125号住居跡、II区19号・20号土坑よりも本住居跡が新しい。



第128図 II93号住居跡

II93号住居跡 (第128図)

位置 D-4・5

平面形 やや歪んだ方形か。

規模 南東辺(5.25) m

方位 不明。

壁 他遺構との重複が激しく良好な遺存状況を示す部分が少ない。北東部での高さ49cmを測る。北西半は不明。

床面 下位にある倒木痕の埋没土を床土としており、ほぼ平坦。

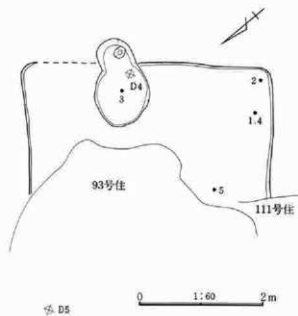
カマド 南東辺の東寄りで燃焼部らしき掘り込みを検出。規模は幅80cm、奥行き50cmを測る。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝などは検出されなかった。

埋土の特徴 炭化物と粘土粒を含む暗褐色土が堆積する。

遺物 本住居跡に伴うものは見られない。

重複遺構 II区94号・111号住居跡、I区3号溝と重複し、3号溝より新しい。



第129図 II94号住居跡

II94号住居跡 (第129・130図 PL. 11・72)

位置 C-4、D-3・4

平面形 方形と思われる。

規模 東辺4.00m

方位 N-129°-E

壁 遺存状況は不良で、高さは南隅部で12cmを測る。

床面 北西半は不明。地山をそのまま床土とする。

貯蔵穴 南東辺際で検出。楕円形を呈し、竪穴外に掘られたピットと重複する。規模は径が100×

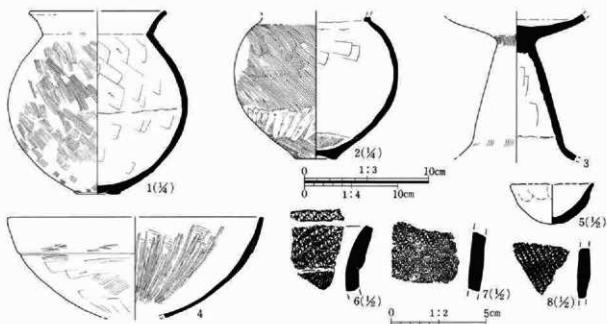
90cm、深さ43cmを測る。底面は浅いすり鉢状をなす。

その他 カマド、炉、柱穴、周溝は検出されなかった。

遺物 南隅及び貯蔵穴内から大形の土器片が出土しており、古墳時代前半が主体。

重複遺構 II区93号・111号住居跡と重複し、新旧関係は不明。

第III章 検出された遺構と遺物



第130図 II94号住居跡出土遺物

II95号住居跡 (第131図 PL. 11)

位置 E・F-12 平面形 縦長方形。

規模 東辺(2.40)m、西辺2.30m

北辺3.25m、南辺2.95m

面積 (7.14)㎡ 方位 S-16°-E

壁 遺存状態不良。高さ6cmを測る。

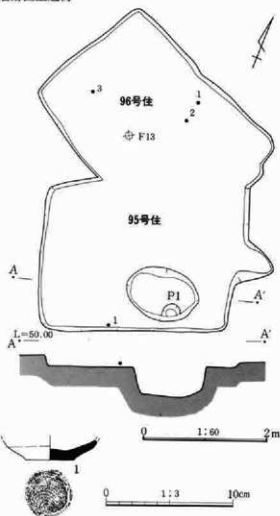
床面 ほぼ平坦。

カマド 東辺の中央部で燃焼部底面を検出。規模は幅70cm、奥行き50cmを測る。底面は住居の床面レベルよりやや高く、水平。

ピット 南半のやや西寄りで1基検出された。規模は径115×85cm、深さ45cmを測る。底部の西脇には径30cm、深さ18cmの小ピットがある。

遺物 埋土より杯片出土。

重複遺構 II区96号・169号住居跡と重複。96号住居跡より新しいと思われる。



第131図 II95号・96号住居跡及び95号住居跡出土遺物

II96号住居跡 (第131・132図 PL. 11・72)

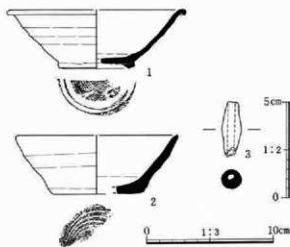
位置 E・F-12・13

平面形 (縦長方形)

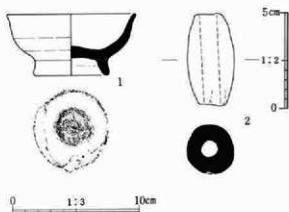
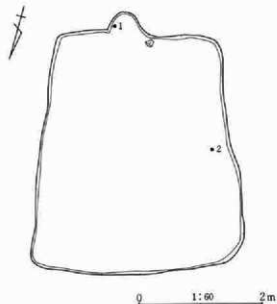
規模 北東辺3.20m、北西辺2.25m

方位 N-23°-E

第1節 竪穴住居跡



第132図 II96号住居跡出土遺物



第133図 II97号住居跡及び出土遺物

壁 遺存状況不良で北東壁の高さ9cmを測る。
 床面 北側から南側へ比高差5cmで傾斜。
 カマド 検出されなかったが、II区95号住居跡と重複する南東辺に付設されたと思われる。
 遺物 北東半部の床面上より杯、甕の破片が10cm大の礫と共に出土。10世紀代が主であるが古墳時代の混入品も見られる。
 重複遺構 II区40号・95号住居跡と重複し、95号住居跡よりは古いと思われる。

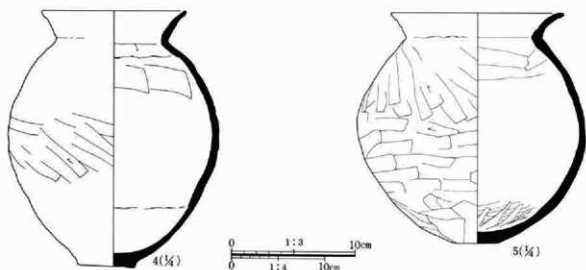
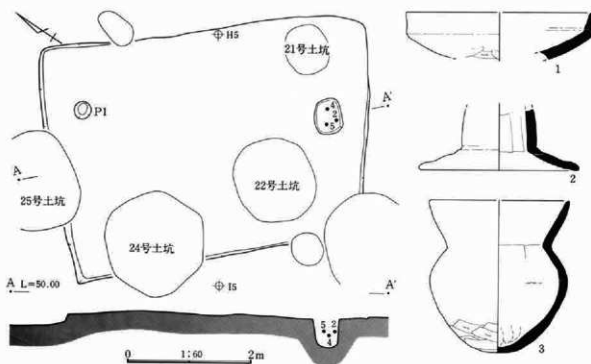
II97号住居跡 (第133図 PL. 11・72)

位置 不明。
 平面形 縦長長方形。
 規模 東辺3.80m、西辺3.70m
 北辺(3.10)m、南辺2.75m
 面積 10.67㎡
 方位 S-20°-E
 壁 遺存状況不良で、北壁でわずかに高さ6cmを測る。
 床面 南側から北側へ比高差8cmで傾斜。
 カマド 南辺中央部に燃焼部底面を検出。規模は幅65cm、奥行き30cmを測る。右袖部からは補強材に使用された可能性のある15cm大の礫が出土している。
 遺物 わずかに10世紀代の杯、甕片が出土。
 重複遺構 住居跡と重複するが新旧関係は不明。

II98号住居跡 (第134・135図 PL. 11・72)

位置 H-4・5
 平面形 長方形。
 規模 北東辺(5.30)m、南東辺(3.60)m
 北西辺3.75m、南西辺4.80m
 面積 (17.6)㎡
 方位 N-41°-W
 壁 遺存状況不良で高さは南西壁で14cmを測る。
 床面 北側から南側へ比高差10cmで傾斜。
 炉・カマド 検出されず。

第III章 検出された遺構と遺物



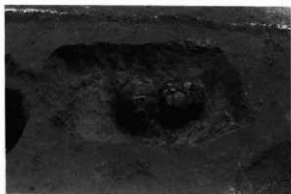
第134図 II98号住居跡及び出土遺物

貯蔵穴 南東壁から40cmほど離れて検出された。隅丸長方形を呈し、規模は長軸58cm、短軸46cm、深さ36cmを測る。

ビット 北隅部で1基検出され、規模は径28cm、深さ32cmを測る。形状は柱穴にふさわしいが、対応する他の柱穴は不明。

遺物 貯蔵穴内から甕と高杯片が出土。古墳時代中葉が主と思われる。

重複遺構 II区21・22・24・25号土坑との新旧不明。



第135図 II98号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第136図 II99号・100号住居跡及び99号住居跡出土遺物

II99号住居跡 (第136図 PL. 11・72)

位置 J-4

平面形 方形と思われる。南西半不明。

規模 北東辺 (3.00) m

方位 不明。

壁 北東辺にわずかに残り、高さ8cmを測る。

床面 南東半は乱れており、不明瞭。

ピット 東隅で浅い皿状のピットが検出された。規模は径92×55cm、深さ18cmを測る。性格は不明。

その他 カマド、周溝、柱穴などは検出されなかった。

埋土の特徴 焼土、炭化物を含む黒色土。

遺物 南東半で羽口、杯、甕、羽釜、椀、土鍾、40cm大の糠などが出土するが、大部分は床面から浮いており本住居跡に帰属する可能性は少ない。

重複遺構 II区100号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

II100号住居跡 (第136・137図 PL. 11)

位置 I・J-4 平面形 不明。

規模 東辺 (3.9) m 方位 不明。

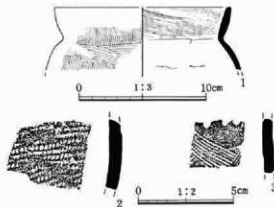
壁 比較的遺存状況の良い北東隅で高さ13cmを測る。

床面 やや凹凸あり。南半は乱れて不明。

ピット 南隅で3基検出された。規模、位置からP3は柱穴の可能性はある。

遺物 埋土より古墳時代初頭の土器片が多く出土。

重複遺構 II区99号住居跡、II区29号土坑と重複し、新旧関係は不明。



第137図 II100号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II101号住居跡 (第138・139図 PL. 12)

位置 J-5

平面形 方形と思われる。

規模 東辺2.40m、他は不明。

方位 N-118°E

壁 比較的遺存状況の良い北壁で、高さ19cmを測る。

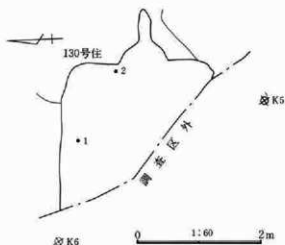
床面 地山の暗褐色土を床土とし、西側から東側へやや傾斜する。

カマド 東壁のほぼ中央部で燃焼部と煙道部が検出された。燃焼部は半円形に掘り込んで構築され、規模は幅80cm、奥行き30cmを測る。煙道部は燃焼部底面より5cm程高く、ほぼ水平に50cmのびる。

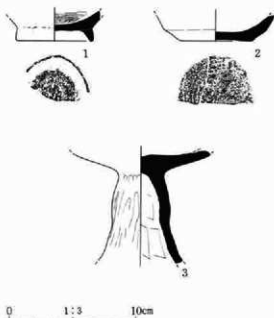
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 古墳時代中葉～10世紀代の土器片が見られる。なお床面直上から灰軸陶器の皿が出しており、本跡の時期推定の根拠となる。

重複遺構 II区130号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。



第138図 II101号住居跡及び遺物出土状況



第139図 II101号住居跡出土遺物

II102号住居跡 (第140～142図 PL. 12・72)

位置 I-5・6、J-6

平面形 ほぼ正方形。

規模 東辺(5)m、西辺4.95m

北辺(5.5)m、南辺5.25m

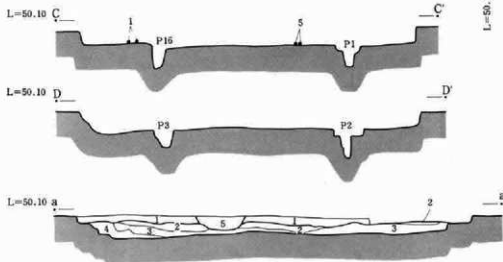
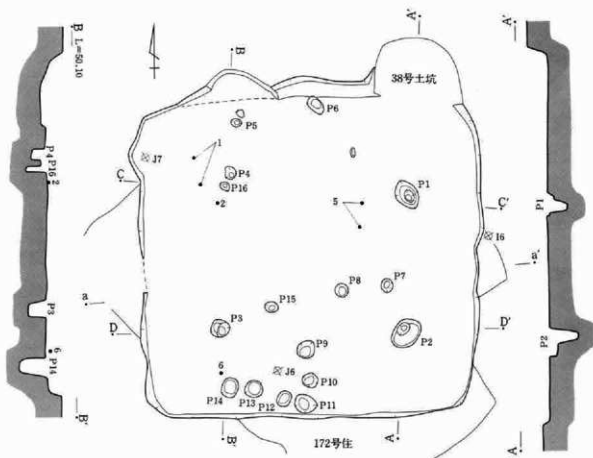
面積 (25.9) m²

方位 N-1°E

壁 遺構重複が多いため本来の壁高は不明だが、周囲の住居跡に比べて最も深く、東側で24cmを測る。北側と西側では重複遺構との判別が難しく、遺存状況の良い南壁はほぼ垂直で直線的に掘り込まれている。

床面 ほぼ平坦。

炉 位置、形状は不明だが、炉石として用いられたと思われる10cm大の焼けた楕円形の礫が2点北側で出土している。



土層説明

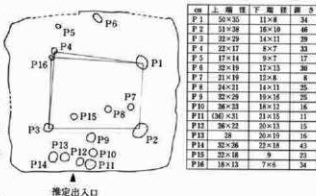
- 1 褐色土 As-B を含む。
- 2 黒褐色砂質土 ローム粒を含む。
- 3 黒褐色土 炭化物、ローム粒を含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 5 擾乱

0 1:60 2m

第140図 II102号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

ピット 竪穴内から16基のピットが検出されており、このうちP1、P2、P3、P4、P16は主柱穴と考えられよう。この場合の柱間寸法は南北間より東西間のほうが50~100cm長いことから、東西方向に棟をもつ建物であった可能性が大きい。又南壁際に集中するピット群P9~P14はP14を除いて床面から10~15cmの深さを測る浅いもので、出入口施設に伴う支柱穴あるいは時期の異なる重複遺構の可能性もある。



第141図 II102号住居跡柱穴配置

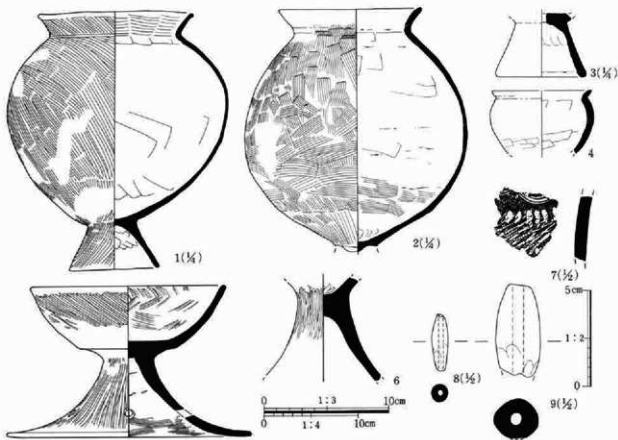
その他 周溝、貯蔵穴は検出されなかった。

埋土の特徴 壁際に壁土の崩落と思われる地山の土塊が埋積し、下層に炭化物を多く含む黒褐色土、上層に砂質土が堆積する。この堆積状況から自然堆積による埋没と思われる。

遺物 床面直上から古墳時代初頭の台付壺、高杯などが出土する。これらはすべて破片であり、住居廃棄以後に投棄されたものだろう。また

中央からやや北寄りにかけて上層材と思われる炭化物が検出されたが、遺存状態が悪く復元は不可能である。なお埋土からは土鏝、椀その他に須恵器などが出土するが、本跡に伴うものではないだろう。

重複遺構 II区172号住居跡、II区38号土坑と重複しており、新旧関係は不明。



第142図 II102号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II103号住居跡 (第143・144図 PL. 12・72)

位置 F・G-5・6

平面形 ゆがんだ台形で、南西辺が短い。

規模 北東辺3.45m、北西辺3.65m
南東辺3.35m、南西辺2.70m

面積 10.30m²

方位 N-142°-E

壁 南側で高さ10cmを測る。

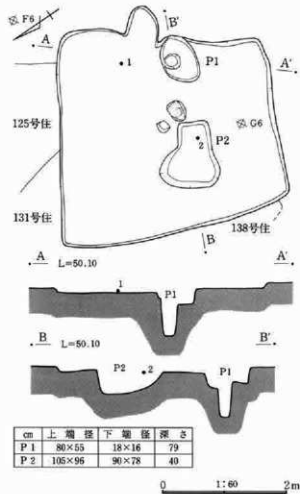
床面 遺構重複が激しく、良好な遺存状況を示す部分は少ない。

カマド 南東辺のほぼ中央部で検出され、燃焼部底面と小規模な袖部が残る。燃焼部の幅は55cm、奥行き50cmを測る。袖部は地山を掘り残して15cmほど竪穴内に張り出す。燃焼部の底面レベルは焚口部床面より3~5cmほど高い。

ピット カマド右袖脇と中央のやや西寄りで2基検出された。P1は2段になっており、床から75cmと深い円形で掘り込みは柱穴だろう。P2は3基の円形ピットの重複と思われる。この2基は住居の主軸と同方向に並ぶことから、棟を支える柱穴とも考えられよう。

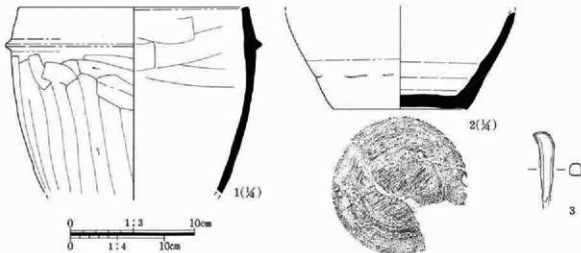
遺物 カマド焚口部分から羽釜、P2より遊底破片が出土。その他土土の土器片は10世紀代が主体。なお床面中央部から40cm大の礫が検出されたが、その性格については不明。

重複遺構 II区125号・131号・138号住居跡と重複す

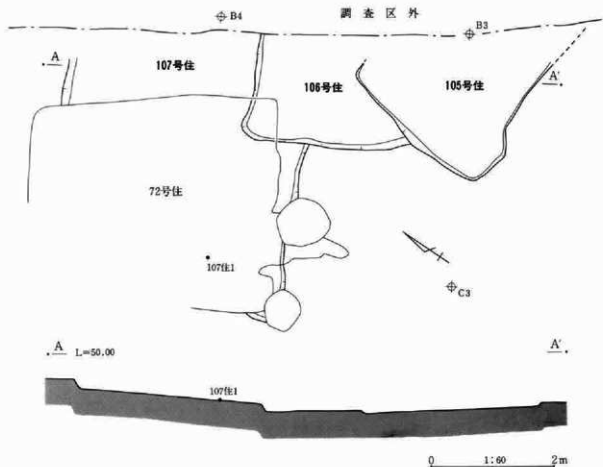


第143図 II103号住居跡

るが、131号住居跡より新しいことは判明している。



第144図 II103号住居跡出土遺物



第145図 II105号・106号・107号住居跡

II 104号住居跡 (II92号住居跡誤記のため欠番)

II 105号住居跡 (第145図)

位置 B-2・3

平面形 方形と思われる。

規模 西辺2.55m、他は不明。

方位 N-98°-E

壁 南壁はゆがんで段状になり、高さは8cmを測る。

床面 明らかな床面は検出されなかった。

その他 住居に伴う付随施設は検出されなかった。

遺物 目立つ遺物はない。

重複遺構 II区106号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

II 106号住居跡 (第145・146図 PL. 12)

位置 B-3

平面形 方形と思われる。

規模 不明。

方位 N-59°-E

壁 高さ20cmを測り、部分的に崩れて歪む。

床面 中央部分がくぼむ。

その他 住居に伴う付随施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代初頭の高杯、甕片が出土。

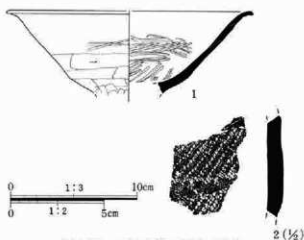
重複遺構 II区72号・105号・107号住居跡と重複し、72号住居跡よりは古い。

II 107号住居跡 (第145・147図 PL. 12・72)

位置 B・C-3・4

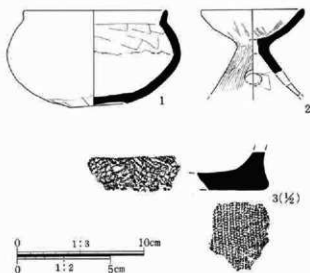
第1節 竪穴住居跡

平面形 方形と思われる。 規模 不明。
 方位 不明。
 壁 ほぼ垂直の掘り込みで、高さは11cmを測る。
 床面 ほぼ平坦。
 その他 住居に伴う付随施設は検出されなかった。
 遺物 古墳時代初頭～平安時代の土器片が出土するが、重複遺構の混入品が多い。床面直上から古墳時代中葉の跡が正立位で出土。
 重複遺構 II区72号・106号住居跡と重複し、72号住居跡より古い。



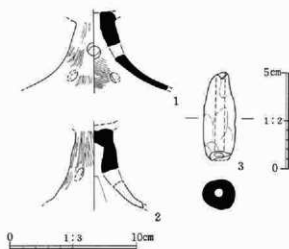
第146図 II106号住居跡出土遺物

II108号住居跡 (第148・149図 PL. 12・73)
 位置 B・C-4・5
 平面形 方形と思われる。
 規模 推定一辺6m前後。
 方位 N-11°-E
 壁 重複のない南側で高さ16cmを測る。
 床面 ほぼ平坦で南側はやや乱れる。
 その他 住居跡付随施設は検出されなかった。
 遺物 南隅で古墳時代初頭～平安時代の土器片が出土。この部分はII区72号・107号住居跡と重複しており、出土遺物の帰属は不明。
 重複遺構 II区72号・79号・107号・109号・110号住居跡、I区3号溝と重複し、72号・109号住居跡、3号溝より古い。

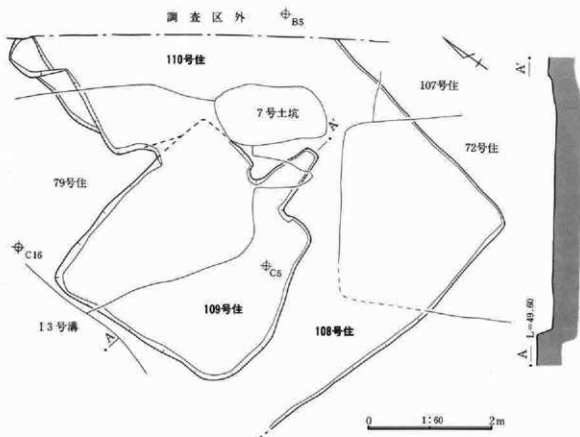


第147図 II107号住居跡出土遺物

II109号住居跡 (第149・150図 PL. 12・73)
 位置 B-4・5、C-5
 平面形 歪んだ縦長方形。
 規模 東辺(2.8)m、西辺3.30m
 北辺3.50m、南辺2.95m
 面積 (8.8) m² 方位 N-120°-E
 壁 やや外傾し、崩落による小さな凹凸が多い。
 床面 ほぼ平坦で、北西側に緩く傾斜する。
 カマド 東辺のやや南寄りで検出された。袖部は地山を掘り残して竪穴内に15cm程張り出す。燃焼部は幅75cmを測り、底面は次第に外傾して煙道部に続く。焚口～煙道端は115cmを測る。



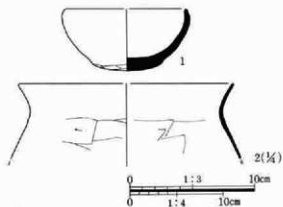
第148図 II108号住居跡出土遺物



第149図 II108号・109号・110号住居跡

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
遺物 ほとんどが埋土からの出土で、8世紀代の
ものが多い。

重複遺構 II区79号・108号・110号住居跡と重複し、
108号住居跡より新しい。



第150図 II109号住居跡出土遺物

II110号住居跡 (第149図)

位置 B-5

平面形・規模・方位 不明。

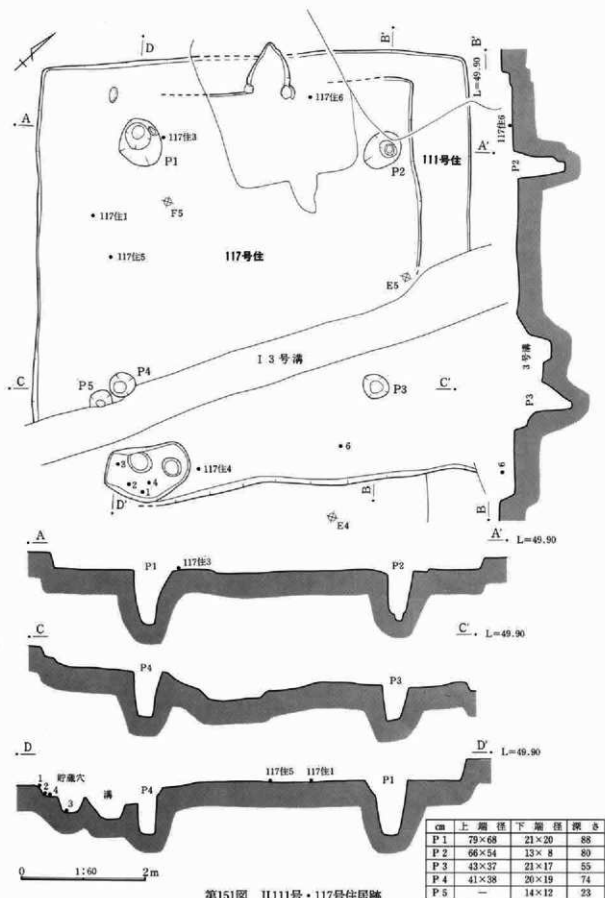
壁 周辺の住居跡に比べて最も深く、確認面ま
での高さ22cmを測る。

床面 ほぼ平坦だが、明瞭ではない。

その他 北西辺に2段の張り出しがみられるが、本
跡に伴うかあるいは重複遺構か定かでない。

遺物 出土していない。

重複遺構 II区79号・108号・109号住居跡と重複す
るが、新旧関係は不明。



第151图 II111号・117号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

II111号住居跡 (第151・152図 PL. 13・73)

位置 D・E・F-4・5

平面形 ほぼ正方形と思われる。

規模 北東辺6.50m、北西辺6.80m

方位 N-49°-W

壁 西隅部で高さ25cmを測る。ほぼ直線的で乱れは少ない。

床面 遺存する部分のみを限り凹凸が多い。レベルは重複するII区117号住居跡とほぼ同じ。

貯蔵穴 南隅で重んだ楕円形の掘り込みを検出。規模は径135×90cm、深さ38cmで、さらに深さが15cmと20cmのピットがある。

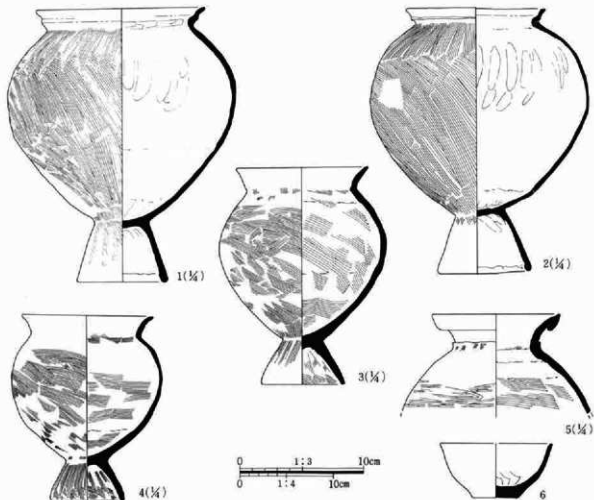
柱穴 堅穴プランの対角線上にのって4基検出された。なおP1～P4は深さがほぼそろっているが、P5はそれより30cmほど浅く、またP4

の外側に位置することから隅垂木の支柱と考えられようか。

埋土の特徴 黒褐色土が堆積するが、堆積状況は明らかでない。

遺物 貯蔵穴に落ち込む状況で古墳時代初頭の壺、甕が出土している。これらはほぼ完形に復元出来ることから、貯蔵穴脇に置かれていたものが住居廃棄時に落ちたと解釈できる。また古墳時代後期の土器も多く出土していることから別の遺構が重複している可能性もある。

重複遺構 II区91号・92号・117号住居跡と重複し、91号・92号・117号住居跡より古いと思われる。



第152図 II111号住居跡出土遺物

II112号住居跡 (欠番)

II113号住居跡 (第153・154図 PL. 13)

位置 C・D-5・6

平面形・規模・方位 不明。

壁 最も遺存状況の良い西側部分で高さ12cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、壁際は乱れる。

カマド 西辺の南寄りで見出。右袖部は10cmほど竪穴内に張り出す。燃焼部は浅い「皿」状の火床面で幅60cmを測る。煙道部は燃焼部から緩く立ち上がり30cm程水平にのびるが、時期不明のピットに切られる。

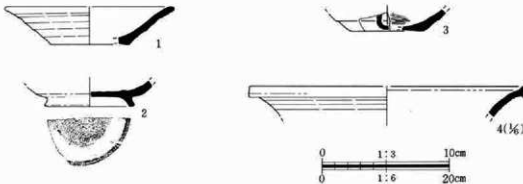
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 主に埋土中から出土しており、10世紀代のものが主体。

重複遺構 II区118号・128号住居跡、I区3号溝と重複し、新旧関係は不明。



第153図 II113号住居跡



第154図 II113号住居跡出土遺物

II114号住居跡 (第155図 PL. 13・73)

位置 C-7

平面形 縦長長方形。

規模 南東辺 (2.50) m、南西辺3.20m

方位 N-165°-E

壁 ほとんど遺存せず。南西側で確認面までの高さ8cmを測る。

床面 遺構の重複が多く、不明確。

カマド 南東辺のほぼ中央部で地山を掘り込んで構

築された燃焼部の底面が検出された。規模は幅55cm、奥行き60cmを測る。袖部は壁をそのまま利用したと思われる。

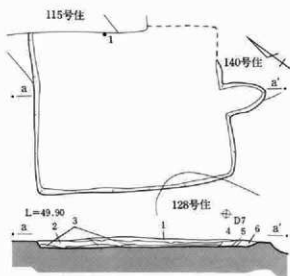
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 下位にロームブロック、炭化物を含む層がほぼ水平に堆積しており、人為的埋土の可能性はある。

遺物 古墳時代初頭～10世紀代の土器片が埋土より出土。カマド内からは平安時代の高台碗の

第三章 検出された遺構と遺物

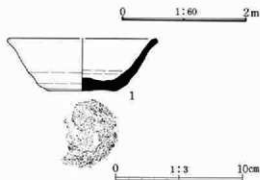
破片が出土。

重複遺構 II区115号・128号・137号・140号・141号
住居跡と重複し、137号・140号住居跡よりは
新しい。



土層説明

- 1 褐色砂質土 As-Aを含む。
- 2 褐色砂質土 ローム、炭土を含む。
- 3 褐色土 炭化物を含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 5 黒色土 擾乱
- 6 黒色砂質土 糞土、炭化物を含む。



第155図 II114号住居跡及び出土遺物

II115号住居跡 (第156・157図 PL. 13・73)

位置 B・C-7・8

平面形 縦長長方形。

規模 北東辺4.45m、北西辺2.90m

南東辺(3.20)m、南西辺(4.45)m

面積 (12.40) m²

方位 N-162°-E

壁 遺構重複が激しく壁の遺存状況は不良で、
高さは東隅部で11cmを測る。

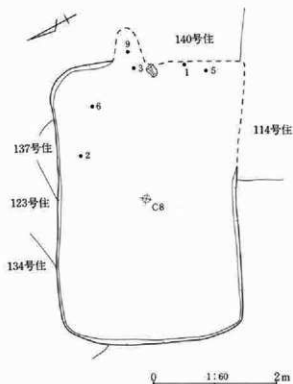
床面 重複する住居跡の埋土を床土としており、
西隅でわずかに平坦面が残る。

カマド 南東辺で底面が検出されたが、規模と形状
は不明確。右袖部には補強材に用いられたと
思われる25cm大の礫が立位で出土している。

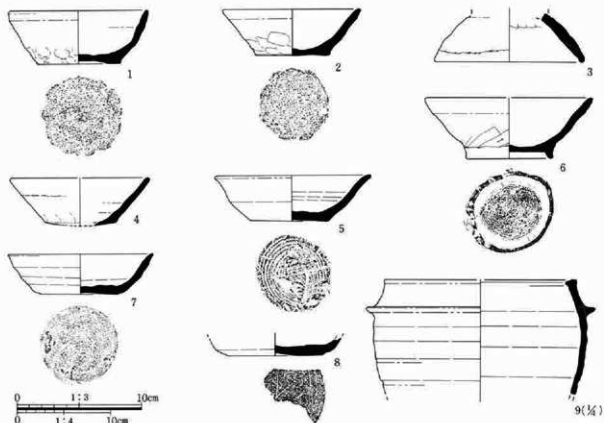
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 主にロームブロックを含む褐色土が堆
積し、最下層には炭化物が混じる。

遺物 大部分が投棄された出土状況を示すが、カ
マド右側の南東壁付近から出土した杯2点は
床に据え置かれた状態とも考えられる。10世
紀後半が主体。

重複遺構 II区114号・123号・134号・137号・140号
住居跡と重複しており、137号住居跡よりは新
しい。



第156図 II115号住居跡



第157図 II115号住居跡出土遺物 140号住

II116号住居跡 (第158図 PL. 73)

位置 B・C-6

平面形 縦長方形と思われるが、不明瞭。

規模・方位 不明。

壁 大部分が削平されわずかに西壁の一部が残る。高さは14cmを測る。

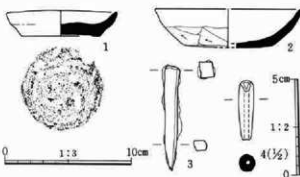
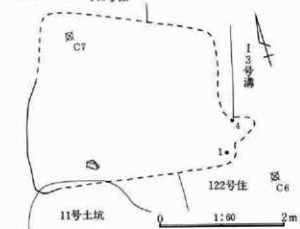
床面 中央部が高く、周辺部がやや低い。

カマド 東辺の南隅で底面が検出されたが、規模と形状は不明瞭。

埋土の特徴 自然埋没の黒色砂質土が堆積。

遺物 古墳時代～11世紀代のものが混在しておりしかもその多くが埋土出土のため、本住居跡に帰属する遺物を分離するのは困難。

重複遺構 II区122号・140号住居跡、I区3号溝と重複し、カマドの遺存状況から3号溝よりは古いと思われるが、他の住居跡との新旧関係は不明である。



第158図 II116号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II117号住居跡 (第151・159図 PL. 13・73)

位置 E-4・5

平面形 長方形と思われる。

規模 不明。II区111号住居跡よりは小さい。

壁 北西壁、北東壁が遺存し、重複するII区111号住居跡の床面から8cmの深さを測る。

床面 東側がやや低いが、西側はII区111号住居跡の床面とほぼ同レベルになり識別は困難。

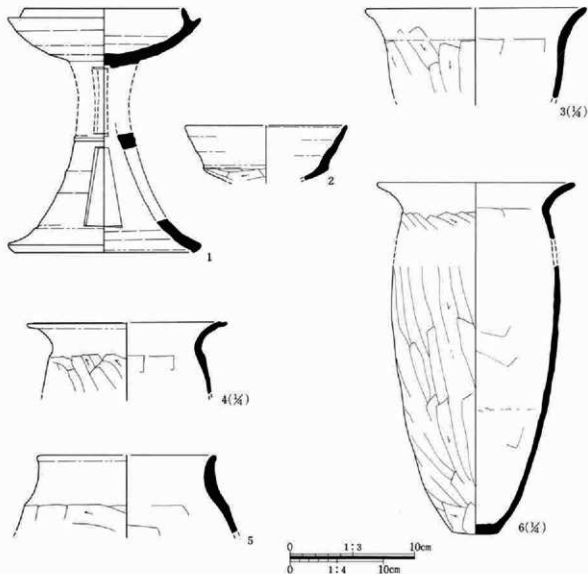
カマド 北西辺の南西寄りで検出。壁をそのまま袖とし、ここから補強材に用いられた土器片が検出された。燃焼部は馬蹄形で、幅53cm、奥

行き75cmを測る。燃焼部底面は焚口から奥にわかって次第に高くなる。煙道部は燃焼部奥壁の一段高いところから掘り込まれるらしい。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 カマドの袖部と右脇から本跡に伴うと思われる土器が出土。埋土出土のものはII区111号住居跡の可能性もある。

重複遺構 II区91号・92号・111号住居跡と重複し、91号・92号住居跡よりも古く、111号住居跡より新しい。



第159図 II117号住居跡出土遺物

II118号住居跡 (第160図 PL. 14)

位置 D・E-5

平面形・規模・方位 不明。

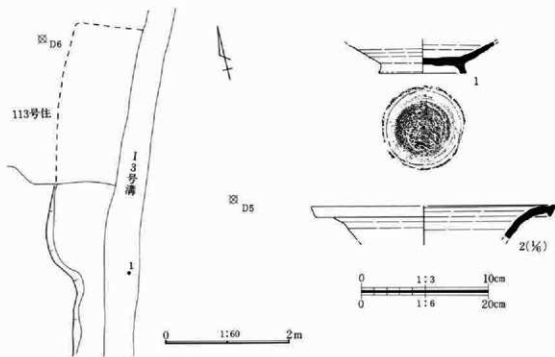
壁 西壁の一部が残るが、凹凸が多く歪んでおり本来の形状を示していない。

床面 良好な面は残らない。重複するII区113号住居跡と床面レベルがほぼ同じで、判別は困難。

カマド・柱穴・貯蔵穴・周溝 検出されず。

遺物 ほとんどが埋土出土の土器片で重複遺構との帰属関係を判別するのは困難。数量的には10世紀代が主。

重複遺構 II区113号住居跡、I区3号溝と重複し、新旧関係は不明。



第160図 II118号住居跡及び出土遺物

II119号住居跡 (第161・162図 PL. 14・74)

位置 G・H-6・7

平面形 横長方形と思われる。

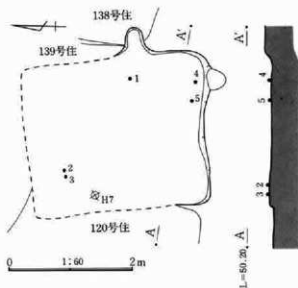
規模 南辺2.50m、他は不明。

方位 N-110°-E

壁 削平のためほとんど遺存しないが、南東隅では高さ11cmを測る。

床面 重複する住居跡の埋土とロームブロック混じりの土を床土とする。ほぼ平坦。

カマド 東辺のやや南寄りて燃焼部の底面を検出。規模は幅40cm奥行き35cmを測る。なお焚口付近から出土した12cm大の礫は袖部の補強に用いられた可能性がある。



第161図 II119号住居跡

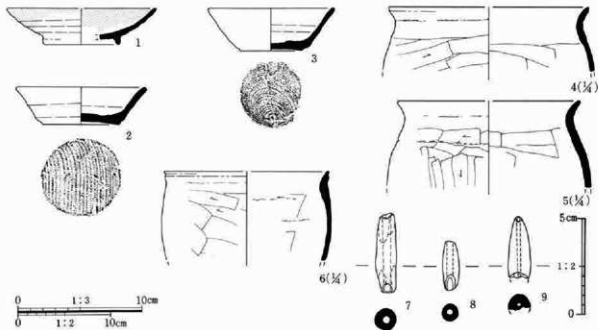
第三章 検出された遺構と遺物

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 ほぼ水平にロームブロックを含む褐色土が堆積することから、人為的埋土の可能性
がある。

遺物 床面よりやや浮いた状態で出土するものが
多いが、他の遺構と重複しない部分で10世紀

後半～11世紀のものが主体を占めており、こ
れらは本住居跡に伴うと考えられる。

重複遺構 II区120号・129号・138号・139号住居跡
と重複し、いずれよりも新しいと考えられる。



第162図 II119号住居跡出土遺物

II120号住居跡 (第163・164図 PL. 14・74)

位置 H-6・7

規模 不明。

方位 N-95°-E

壁 北壁と南壁の一部が残っており、凹凸が多い。高さは25cmを測る。

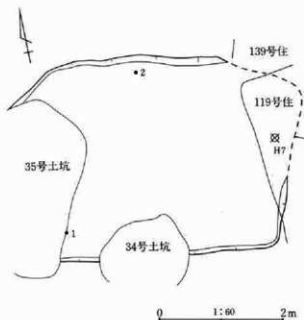
床面 北半は地山を床としており、ほぼ平坦で安定する。

カマド・柱穴・貯蔵穴・周溝 検出されず。

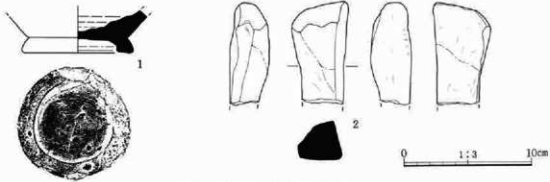
埋土の特徴 最下層に焼土と炭化物を含む黒褐色土、その上にロームブロックを含む黒褐色砂質土が堆積する。人為的埋土か。

遺物 10世紀以降の土器片が主。全て埋土出土。

重複遺構 II区119号・139号住居跡、II区34号・35号土坑と重複し、119号住居跡、34号・35号土坑より古い。



第163図 II120号住居跡



第164図 II120号住居跡出土遺物

II121号住居跡 (欠番)

II122号住居跡 (第165・166図)

位置 B-5・6、C-6

平面形 方形と思われる。東半は削平及び他遺構との重複により不明。

規模 西辺5.85m。他は不明。

方位 N-16°E

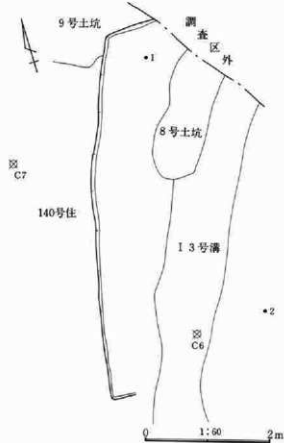
壁 西壁がわずかに遺存し、高さは11cmを測る。

床面 重複するI区3号溝の西側でほぼ水平な面が検出された。暗褐色土を床土とする。

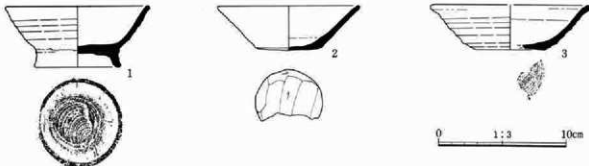
カマド・柱穴・貯蔵穴・周溝 検出されず。

遺物 出土数は少量で、古墳時代初頭の壺と9世紀代の杯、碗がみられる。本住居跡に帰属する遺物は判定しがたい。

重複遺構 II区79号・140号住居跡、II区8号・9号土坑、I区3号溝と重複し、3号溝よりは新しい。



第165図 II122号住居跡



第166図 II122号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II123号住居跡 (第167図)

位置 B-7・8

平面形・規模・方位 不明。

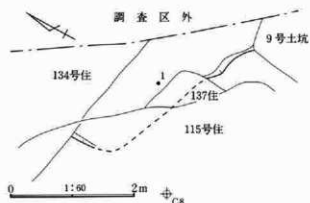
壁 西側と南西側にわずかに検出され、高さは南西側で13cmを測る。

床面 地山を床面とする部分のみ検出された。

カマド・柱穴・貯蔵穴・周溝 不明。

遺物 埋土から古墳時代～10世紀代の土器片がわずかに出土しているが、本住居跡に帰属するものを判別するのは困難。

重複遺構 II区115号・134号・137号住居跡、II区9号・10号土坑と重複、新旧関係は不明。



第167図 II123号住居跡

II124号住居跡 (第168～170図 PL. 74)

位置 D-6、E-6・7

平面形 (横長方形)

規模 東辺2.30m、西辺2.25m

北辺3.70m、南辺3.80m

面積 (8.15) m²

壁 大半は削平及び他遺構との重複により明確でない。高さは南西部で13cmを測る。

床面 西側から東側へ比高差5cmで傾斜。

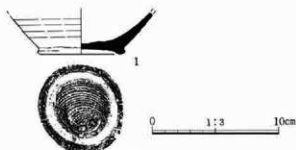
カマド 南辺の東寄りで燃焼部底面らしき痕跡を認めたが、規模、形状などについては一切不明。

柱穴・貯蔵穴・周溝 検出されず。

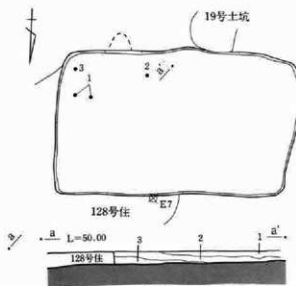
埋土の特徴 褐色砂質土が主で、堆積状況から自然埋没と思われる。

遺物 すべて破片で埋土からの出土であるが、時期は10世紀代に限定される。

重複遺構 II区92号・128号住居跡、II区19号土坑と重複し、92号住居跡より古く、128号住居跡より新しいことが判明。



第168図 II123号住居跡出土遺物



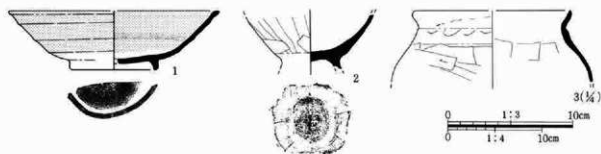
土層説明

- 1 褐色砂質土 ローム粒を含む。
- 2 褐色砂質土 焼土粒を含む。
- 3 黒褐色土 粘性を帯び、炭化物粒を含む。

0 1:60 2m

第169図 II124号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第170図 II124号住居跡出土遺物

II125号住居跡 (第171・172図 PL. 14)

位置 E・F-6

平面形 南半は検出されなかったが、横長方形と思われる。

規模 北辺2.90m、他は不明。

方位 N-150°-E

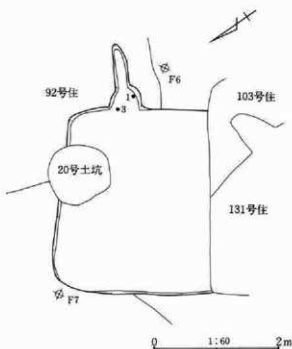
壁 削平のためほとんど遺存せず。北西隅で高さ8cmを測る。

床面 カマド手前部分で硬化した面が検出された。凹凸が多く、また遺構重複部分では不明瞭。

カマド 東辺の北寄りで燃焼部および煙道部の底面が検出された。本体は竪穴外の地山を掘り込んで構築され、規模は燃焼部幅50cm、奥行き30cm、煙道部幅20cm、長さ70cmを測る。なお焚口から15cm大の礫片が出土したが、カマドとの関係は不明。

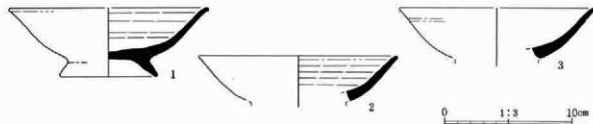
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 出土量はわずかで、カマド燃焼部と埋土から10世紀以降のものが出土する。



第171図 II125号住居跡

重複遺構 II区92号・103号・131号住居跡、北辺でII区20号土坑と重複し、92号住居跡より古いことが判明している。



第172図 II125号住居跡出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物

II126号住居跡 (第173図 PL. 14・74)

位置 D・E-7・8

平面形 歪んだ方形と思われる。

規模 西辺3.50m、南辺3.90m

方位 N-124°E

壁 西壁は直線的、南壁はやや歪む。崩落によるものか。北壁～東壁北半は不明。

床面 北側から南側へ比高差7cmで傾斜する。

カマド 東辺の南寄りで燃焼部を検出。規模は幅65cm、奥行き70cm。焚口で支脚らしき15cm大の礫の欠損品が出土。

ピット 中央部の南西寄りで1基検出。性格不明。

遺物 10世紀以降の土器片が埋土から出土。

重複遺構 II区127号・141号住居跡、II区23号土坑、II区2号溝と重複し、141号住居跡より新しく23号土坑より古い。

II127号住居跡 (第173図)

位置 D・E-7 平面形・規模・方位 不明。

壁 南東壁の一部が遺存し、高さは9cmを測る。

床面 遺存部ではほぼ平坦。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 出土せず。

重複遺構 II区126号住居跡、II区2号溝と重複するが、新旧関係は不明。

II128号住居跡 (第174図 PL. 14・74)

位置 D・E-6・7

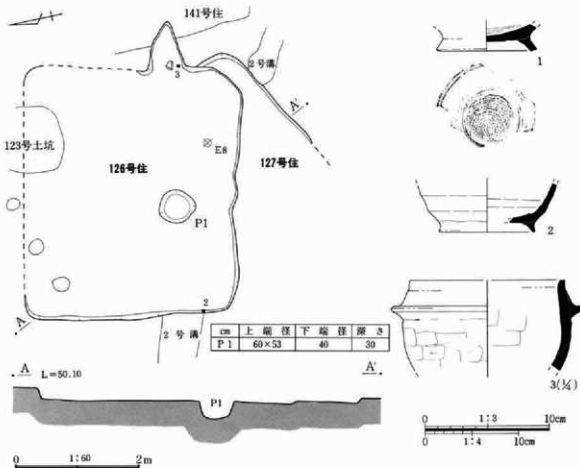
平面形 歪んだ長方形で、北隅が彫らわ。

規模 東辺(3.55)m、西辺3.00m

北辺(4.70)m、南辺(4.70)m

方位 N-60°E

壁 掘り込みはほぼ垂直で、高さ27cmを測る。



第173図 II126号・127号住居跡及び126号住居跡出土遺物

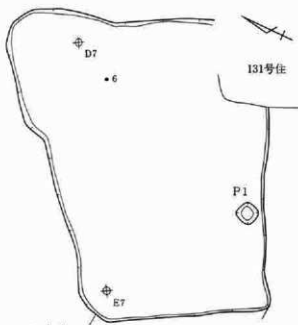
床面 地山の黄褐色土を床とし、ほぼ平坦。北隅の膨張部分では床面が不明確。

ピット 南壁際で1基検出。柱穴とは考えにくく、性格は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

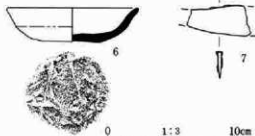
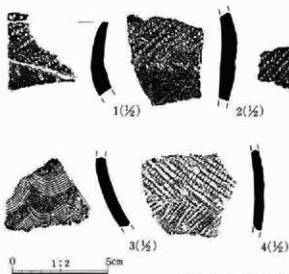
遺物 古墳時代初頭と後半が主体。ただしカマドが認められないことから、古墳時代初頭の住居跡である可能性が高い。

重複遺構 II区113号・124号・141号住居跡、II区2号溝と重複し、埋土の切り合いから124号住居跡より古い。



cm	上端径	下端径	深さ
P1	35×30	20×18	17

0 1:60 2m



第174図 II128号住居跡及び出土遺物

II129号住居跡 (第175図 PL. 15・74)

位置 F-7、G-7・8

平面形 北東部と南半部は不明。方形か。

規模 不明。 方位 N-93°-E

壁 北西部が比較的良好に遺存。高さは22cm。

床面 平坦な面は少ない。重複する住居跡のなかで最も床面標高が高い。

カマド 東辺で検出。袖部は竪穴内に30cm前後張り出す。燃烧部は幅45cmを測り、底面は床面よりもレベルがやや高い。燃烧部中央底面には支脚に用いられたと見られる高杯の杯部片が伏位で出土している。

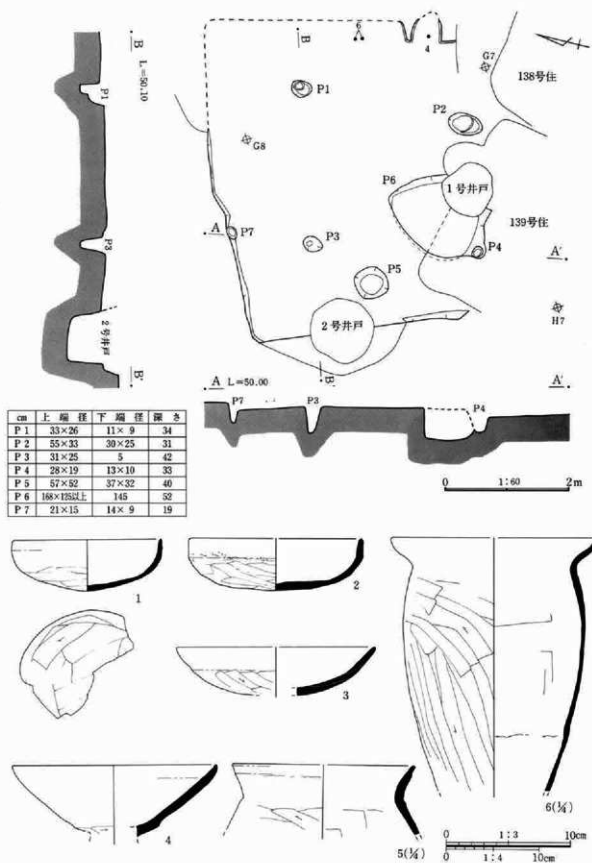
ピット 7基検出されたピットのうち、P1～P4は

整った方形の配置関係ではないが、規模や形状、深さのバランスから主柱穴と考えらえる。P6は規模、形状から生活時に開口していたとは考えにくく、竪穴の荒掘り時に掘り込まれた床下土坑、あるいは重複する異時期の土坑の可能性もある。

遺物 カマド周辺から古墳時代後半の土器片が多く出土しているが、重複するII区132号住居跡に伴う可能性がある。

重複遺構 II区119号・131号・132号・138号・139号住居跡と重複し、132号住居跡より新しく、他の遺構より古い。1号・2号井戸との関係は不明。

第三章 検出された遺構と遺物



第175図 II 129号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II130号住居跡 (第176図)

位置 I・J-5

平面形・規模・方位 不明。

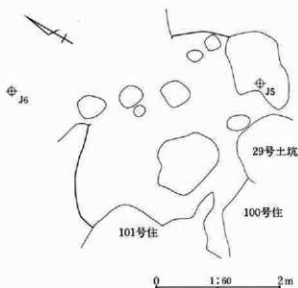
壁 北壁と東壁の一部のみ遺存し、高さは北西部で7cmを測る。

床面 不明瞭な部分が多いが、全体に南側へ傾斜をみ。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 なし。

重複遺構 II区100号・II101号・II172号住居跡、II区29号土坑と重複し、新旧関係は不明である。



第176図 II130号住居跡

II131号住居跡 (第177図)

位置 F・G-6

平面形・規模・方位 不明。

壁 わずかに北壁の一部が遺存し、高さは10cmを測る。

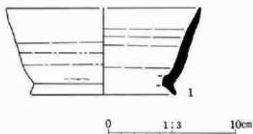
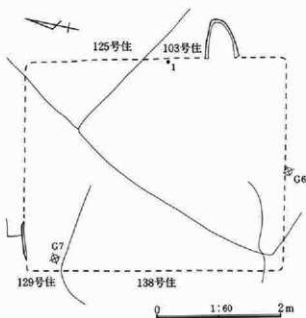
床面 ほとんど検出されなかった。

カマド 東辺付設と推定される位置で燃焼部底面が検出された。規模は幅55cm、奥行き60cmを測る。床面レベルよりやや低いかと思われる。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 本住居跡に伴う可能性の高いものとして高台碗の破片がカマド左脇から出土している。

重複遺構 II区103号・125号・129号・II138号住居跡と重複し、II区103号住居跡より古く、その他の新旧関係は不明。



第177図 II131号住居跡及び出土遺物

II132号住居跡 (第178・179図 PL. 15・74)

位置 E・F-7・8

平面形 北東辺が短い歪んだ方形。

規模 北東辺3.60m、北西辺4.10m

南東辺4.65m、南西辺4.65m

方位 N-38°-E

壁 大部分は削平のため遺存せず、高さは西側で17cmを測る。

床面 北半部がやや高く、良好な遺存状況を示す。

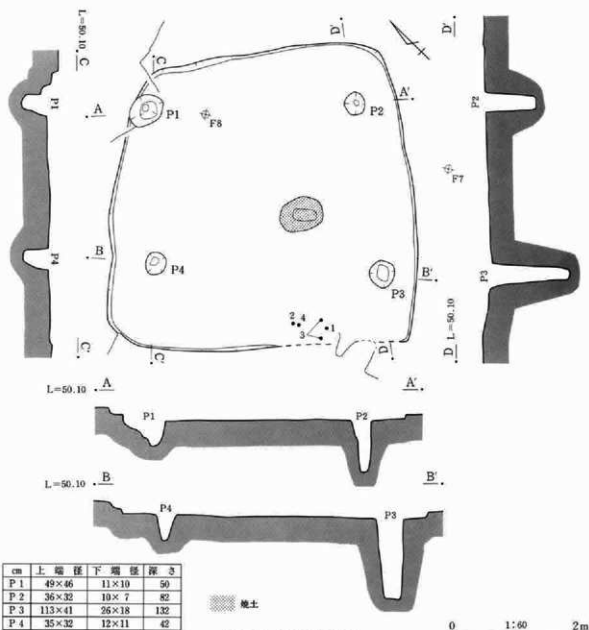
炉 中央部よりやや南寄りで見出された。規模

は径70×55cmで深さ10cmの浅い凹みになる。

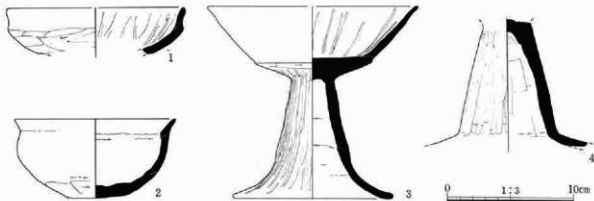
ピット 竪穴の4隅に偏って4基が検出されており、深さにばらつきはあるが、支柱穴と思われる。

遺物 II区129号住居跡との重複部の埋土に集中して出土しており、時期は古墳時代中葉のもの为主体となる。

重複遺構 II区129号・150号住居跡と重複し、これらより古いと思われる。



第178図 II132号住居跡



第179図 II132号住居跡出土遺物

II133号住居跡 (欠番)

II134号住居跡 (第180図 PL. 15・74)

位置 B-8

平面形 (長方形)

規模 西辺2.15m, 他は不明。

方位 不明。

壁 住居跡の西側部分のみ検出され、崩落のため遺存状況は不良。高さは北壁で23cmを測る。

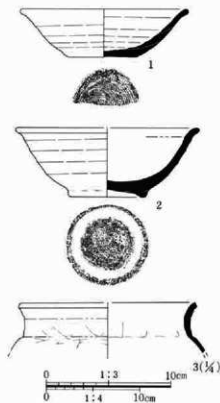
床面 ほぼ平坦で整っている。

ピット 西壁に接して1基検出された。これに対応するピットが反対側の東壁にあれば、住居の主軸に平行する樫木の支柱穴となる可能性もある。

その他 本住居跡は規模が著しく小さく、カマドあるいは炉等が検出されなかったため、通常の住居とは異なる別の機能をもった施設の可能性があるだろう。

遺物 北壁と西壁側の床面から器形の分かる大形破片が出土しており、また埋土出土の土器片も含めて時期は10世紀以降のものが主体を占める。これらは出土状況からみて本住居跡が機能を失った後に廃棄されたか、埋没土とともに流入したものと考えられよう。

重複遺構 II区115号・123号住居跡、II区14号土坑と重複し、新旧関係は不明である。



第180図 II134号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II135号住居跡 (第181図 PL. 15・74)

位置 B-9・10

平面形・規模・方位 遺存する床面から住居範囲を推定したため不明確。

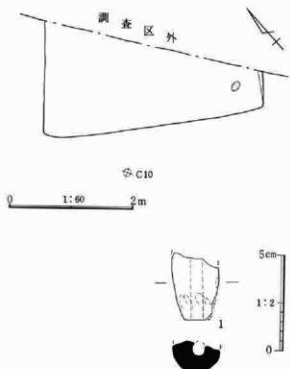
壁 南東壁の一部が遺存し、高さは3cmを測る。

床面 レベルはほぼ水平だが、攪乱等により乱れが大きい。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から少数の小土器片と土錘が出土するが、時期は古墳時代から10世紀代までにわたっており、本住居跡付随遺物は不明。

重複遺構 なし。



第181図 II135号住居跡及び出土遺物

II136号住居跡 (第182図)

位置 B-9、C-9・10

平面形 壁と床面の遺存部分から長方形と推定。

規模 長軸方向(4.7)m、短軸方向(3.8)m

方位 不明。

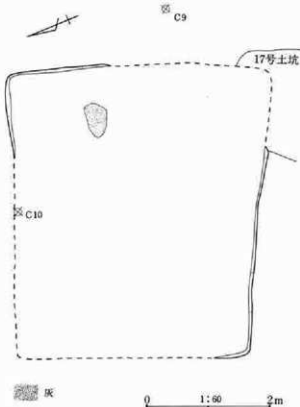
壁 東隅と南西壁の一部がわずかに遺存し、高さは10cmを測る。

床面 平坦な硬化面が部分的に遺存するのみで、明確ではない

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 須恵器の壺片2点が出土したのみ。また東端の床面上から60cmにわたって灰の分布が見られた。炉とは考えられないことから、東壁に存在したはずのカマドから流入したのか。

重複遺構 II区17号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。



第182図 II136号住居跡

II137号住居跡 (第183図 PL. 15)

位置 B・C-7・8

平面形 長方形と思われる。

規模 西辺4.55m、北辺3.00m

方位 N-102°-E

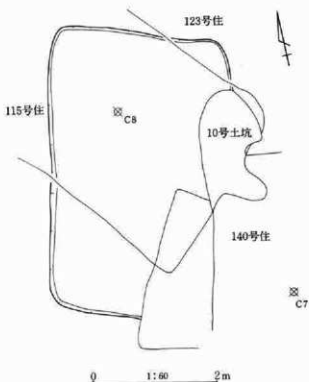
壁 下位部分が遺存し、西壁の中央部で高さは20cmを測る。

床面 北半の良好な床面が残る。レベルは中央部がやや高い。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 ほとんどが埋土から出土しており、時期は8世紀代のものが多い。

重複遺構 II区115号・123号・140号住居跡、II区10号・16号土坑と重複し、115号住居跡より古いと思われるが、その他の新旧関係は不明である。



第183図 II137号住居跡

II138号住居跡 (第184・185図 PL. 15・74)

位置 F・G-6

平面形 西半は隅丸方形を呈しているが、東半は遺構重複のため不明瞭。

規模 西辺2.85m、他は不明。

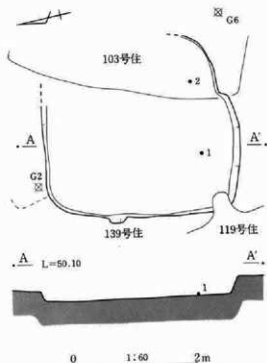
方位 不明。

壁 南壁は比較的良好に遺存しており、高さは28cmを測る。またこの部分は外傾して凹凸が多いため、壁面の崩落が考えられる。

床面 中央部がやや高く良好に遺存するが、周縁部は不明瞭。

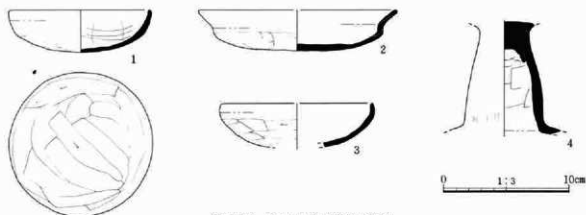
遺物 II区131号住居跡出土遺物との判別が困難だが、南壁際の埋土下層から完形の杯(第185図-1)が出土しており、本住居跡の廃絶時期に最も近いものと考えられる。その他の埋土出土の土器は古墳時代中葉～8世紀代にわたっており一様ではない。

重複遺構 II区103号・119号・131号住居跡と重複し、119号住居跡より古いことが判明している。



第184図 II138号住居跡

第III章 検出された遺構と遺物



第185図 II138号住居跡出土遺物

II139号住居跡 (第186図 PL. 15・74)

位置 G-6・7

平面形 歪んだ横長方形。

規模 東辺2.55m、西辺2.10m

北辺3.00m、南辺3.05m

面積 (6.55) m²

方位 N-103°-E

壁 わずかに下部が遺存し、高さ9cmを測る。

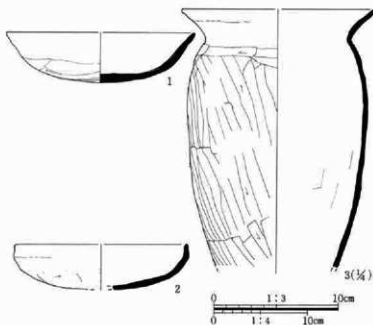
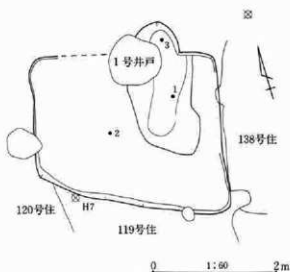
床面 南西部で平坦面が見られるが、他は不明瞭。

カマド 北辺の東寄りで燃焼部の一部を検出。幅約70cm、奥行き50cmを測る。底面のレベルは床面より低くなる。

その他 カマド手前から住居中央にかけて深さ30cmの不定形の掘り込みが見られた。埋土の確認は出来なかったが、掘り方段階のものと考えられる。

遺物 カマドとその周辺から出土しており、時期は8世紀代のものが多い。

重複遺構 II区119号住居跡よりは古い。II区120号・129号住居跡、II区1号井戸との新旧関係は不明である。



第186図 II139号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II140号住居跡 (第187図 PL. 15)

位置 B・C-6・7

平面形 東半を欠くが、方形と思われる。

規模 西辺3.83m、他は不明。

方位 不明。

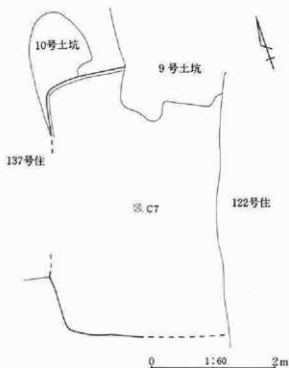
壁 北西隅と南西隅が遺存し、高さは17cmを測る。

床面 重複部分が多いために不明瞭であるが、中央がやや高く、周縁部へ緩く傾斜する。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から10世紀後半代の羽蓋、あるいは甕の破片が1点出土。

重複遺構 II区122号・137号住居跡、II区9号・10号土坑と重複し、これらとの新旧関係は不明である。



第187図 II140号住居跡

II141号住居跡 (第188図 PL. 16)

位置 C・D-7・8

平面形 西半部分のみの検出であるが、方形と思われる。

規模 西辺3.38m

方位 不明。

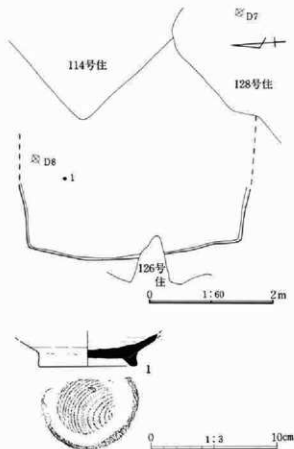
壁 南西隅の壁が比較的良好に遺存し、高さは12cmを測る。他の部分は崩落あるいは削平のため明瞭ではない。

床面 中央部は周縁部に比べてレベルがやや高い硬化面が検出された。ただし東半部は重複するII区114号住居跡の床面とほぼ同レベルのため、明瞭ではない。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 須恵器の甕、碗、土師器の杯、甕等の破片が埋土から出土しており、時期は9世紀代後半のものが多い。ただし重複するII区114号・128号住居跡の伴出遺物との判別は不可能である。

重複遺構 II区114号・126号・128号住居跡と重複し、II区126号住居跡より古い。



第188図 II141号住居跡及び出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物

II142号住居跡 (第189・190図)

位置 I-7

平面形 方形か。

規模・方位 不明。

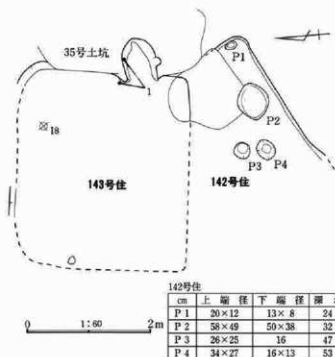
壁 南東部が遺存し、高さは8cmを測る。

床面 ほとんど遺存せず不明瞭。

ピット 4基が検出されたが、本住居跡との関連は不明。

遺物 不明。

重複遺構 II区143号住居跡と重複し、新旧関係は不明である。



142号住

cm	上 端 径	下 端 径	深 さ
P 1	20×12	13× 8	24
P 2	58×49	50×38	32
P 3	26×25	16	47
P 4	34×27	16×13	53

第189図 II142号・143号住居跡

II143号住居跡 (第189・191図)

位置 H・I-7・8

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 北東隅と北壁の一部が遺存し、高さは不明。

床面 カマド前面から北半にかけて平坦な床面が遺存し、南半は不明瞭。

カマド 東辺で燃焼部底面が検出された。馬蹄形を呈し、規模は幅50cm、奥行き65cmを測る。底面のレベルは住居床面より低い。

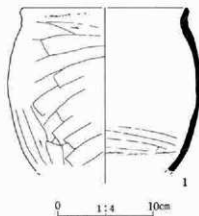
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 カマドとその周辺の床面付近から燧石片が出土しており、その他杯等の土器片は11世紀代と思われる。

重複遺構 II区142号住居跡、II区35号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。



第190図 II142号住居跡出土遺物



第191図 II143号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II144号住居跡 (第192図 PL. 16・74)

位置 J-7・8

平面形 方形と思われる。

規模 東辺3.38m

方位 N-101°-E

壁 東壁が遺存し、高さは55cmを測る。全体にわたって上半部20cm程が崩落している。

床面 ほとんど遺存せず。

カマド 東辺のやや南寄りに燃焼部が検出された。

平面は三角形状を呈し、規模は幅65cm奥行き55cmを測る。奥壁は外傾して立ち上がり、煙道部に続くらしい。

その他 柱穴、貯藏穴、周溝は検出されなかった。
遺物 カマド焚口部から出土しており、時期は8～9世紀代のものが主。

重複遺構 II区155号・158号住居跡と重複しており、155号住居跡より新しく、158号住居跡より古い。

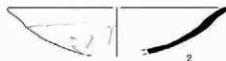


cm	上端径	下端径	深さ
P 1	—	—	11
P 2	—	—	19

0 1:60 2m



1



2

0 1:3 10cm



第192図 II144号・158号住居跡及び144号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II145号住居跡 (第193・194図 PL. 16・74)

位置 H・I-8・9

平面形 縦長長方形。

規模 東辺3.82m、西辺3.80m

北辺4.23m、南辺4.25m

面積 (16.69) m²

方位 N-125°-E

壁 部分的に崩落が見られるが、ほぼ垂直の掘り込みで高さは42cmを測る。

床面 全面的に良好な状況で遺存。中央がやや高く、小さな凹凸が目立つ。

カマド 東辺のやや南寄りで燃焼部と袖部を検出。燃焼部の底面形状は隅丸方形に近く、次第に外傾して立ち上がり煙道部に続く。規模は幅60cm、奥行き50cm前後を測る。中央部での天井部高は20cm前後。なお壁穴内に突出した袖

部先端には土師器製の欠損品を伏せて補強材としている。

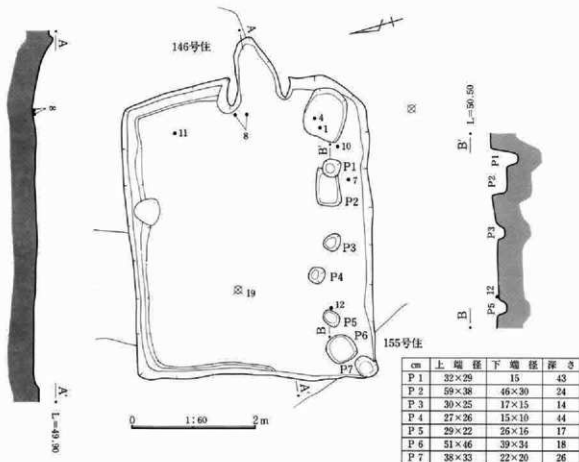
貯蔵穴 南東隅で検出され、楕円形を呈すると思われる。規模は不明。

ピット 7基が検出され、うちP1、P4、P5は位置や規模から柱穴にふさわしいが、これに対応する北半のピットは検出されなかった。

周溝 北半の壁際に沿って1~5cmの深さで検出された。幅は20~8cmを測る。

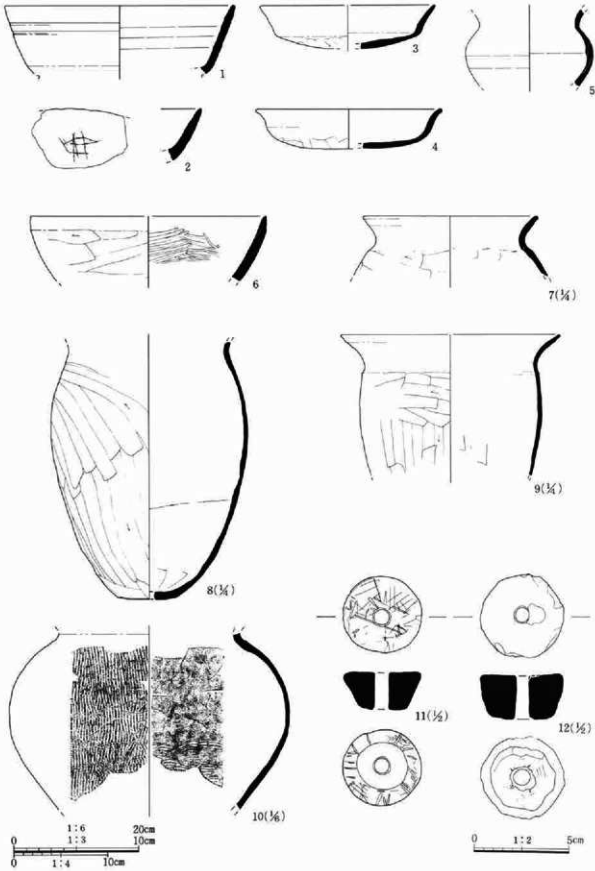
遺物 大部分が埋土下層から出土しており、時期は古墳時代末~8世紀代のものが多い。また紡錘車2点が南西隅と北東隅の床面上から出土している。

重複遺構 II区146号・155号住居跡と重複しており、146号住居跡より新しい。



第193図 II145号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第194圖 II145号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II146号住居跡 (第195図 PL. 16・74)

位置 G・H-8・9

平面形 やや歪んだ方形と思われる。

規模 南東辺3.72m 方位 N-31°-E

壁 東半が遺存し、高さは13cmを測る。

床面 暗褐色土を床土としほぼ平坦。南側へ傾斜。

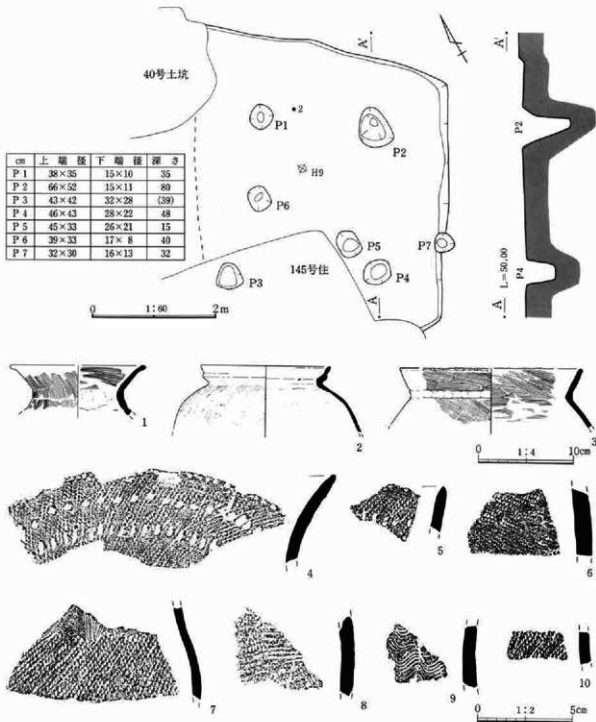
ピット 7基のうちP1~P4は主柱穴だろう。

その他 炉、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 埋土から古墳時代初頭~10世紀代の土器片

が出土するが、量的に古墳時代初頭が主体。

重複遺構 II区145号住居跡よりは古く、II区40号土坑との新旧関係は不明である。



第195図 II146号住居跡及び出土遺物

II147号住居跡 (第196図 PL. 16)

位置 F・G-9・10

平面形 正方形と思われる。

規模 北東辺(3.35)m、北西辺(3.55)m
南東辺3.26m、南西辺3.27m

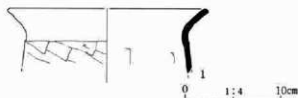
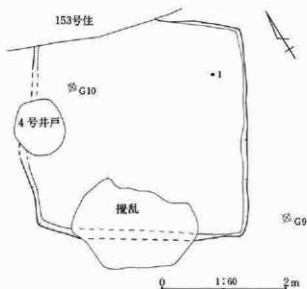
方位 N-53°-E

壁 遺存状況は比較的良好で、ほぼ垂直に掘り込まれ、高さは33cmを測る。

床面 ほぼ平坦。南西部は倒木痕のため不明瞭。
カマド 北壁に痕跡らしき焼土を検出。詳細は不明。
埋土の特徴 ロームブロックを多量に含む褐色砂質土、黒色砂質土が堆積しており、人為的な埋没である可能性が高い。

遺物 古墳時代～10世紀代の土器片が出土し、本跡に帰属する遺物の選別は不可能。

重複遺構 II区153号住居跡、II区4号井戸と重複し、いずれよりも古い。



第196図 II147号住居跡及び出土遺物

II148号住居跡 (第197図 PL. 17)

位置 F-8・9

平面形 方形と思われる。

規模 不明。 方位 N-108°-E

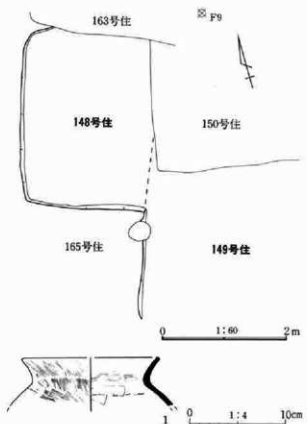
壁 西半が遺存し、高さは南西壁で10cmを測る。

床面 住居中央がややくぼむ。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 古墳時代～平安時代の小土器片がほとんどで、量的には古墳時代初頭が多い。

重複遺構 II区149号・150号・163号・165号住居跡と重複し、149号住居跡より古いことが判明している。



第197図 II148号・149号住居跡及び148号住居跡出土遺物

II149号住居跡 (第197・198図 PL. 75)

位置 F・G-8

平面形・方位 不明確。

規模 南北方向は不明。東西方向は土層断面から3.5m前後と推定される。

壁 北西壁の一部のみ検出。高さ10cmを測る。

床面 中央がやや高く、北西壁付近はややくぼむ。

第三章 検出された遺構と遺物

カマド 土層断面の痕跡から南東辺に付設されたと考えられる。形状と規模は不明。

埋土の状況 ロームブロック、焼土、炭化物を含む褐色砂質土が一様に堆積しており、人為的埋土の可能性が高い。

遺物 古墳時代～平安時代の小土器片が出土しており、本住居跡の帰属遺物の選別は不可能。

重複遺構 II区132号・148号・150号・165号住居跡と重複しており、132号・148号住居跡より新しい。



0 1:3 10cm

第198図 II149号住居跡出土遺物

II150号住居跡 (第199・200図 PL. 17・75)

位置 E・F-8

平面形 やや歪んだ縦長方形

規模 南辺3.10m 方位 N-67°-E

壁 東壁と西壁が遺存し、高さは16cmを測る。

床面 凹凸が多く、明瞭な硬化面は検出されず。

カマド 東辺のほぼ中央で燃焼部と煙道部の底面が検出された。底面レベルは住居床面よりやや高く緩い傾斜で立ち上がる。規模は焚口幅78cm、奥行き90cm前後を測る。

ピット 南半で4基検出されたが、柱穴と考えられるものはない。P1は重複する異時期の遺構の可能性もある。

遺物 床面上～埋土下層から出土しており、時期は10世紀代以降のものが多い。

重複遺構 II区132号・148号・163号住居跡、II区2号溝、II区69号・70号土坑と重複し、新旧関係は不明である。



第199図 II150号住居跡



0 1:3 10cm

第200図 II150号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II151号住居跡 (第201・202図 PL. 17・75)

位置 D・E-9

平面形・規模・方位 不明。

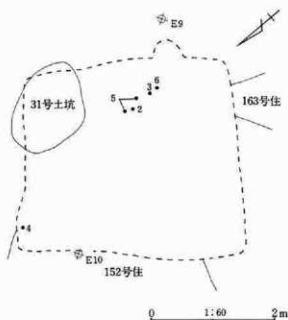
壁 検出されなかった。

床面 ほぼ平坦。重複する住居跡の埋土を床土とする。

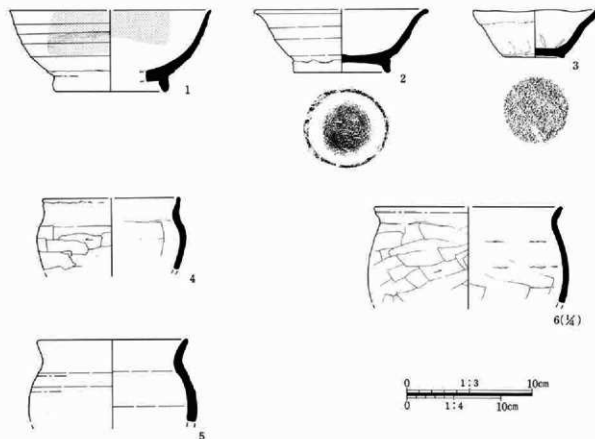
カマド 遺物の分布や焼土痕から南東壁に付設されたと考えられるが、検出できなかった。

遺物 南東半の床面上及び埋土から集中して出土しており、時期は10世紀以降のものが多い。比較的形状のわかる大形破片が多い。

重複遺構 II区152号・163号住居跡、II区31号土坑と重複し、152号住居跡よりは新しい。



第201図 II151号住居跡



第202図 II151号住居跡出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物

II152号住居跡 (第203～205図 PL. 17・75)

位置 D・E-9・10

平面形 正方形。

規模 北東辺 (4.6) m、北西辺4.94m

南東辺 (4.5) m、南西辺4.30m

面積 (21.27) m²

方位 N-10°-W

壁 北西、北東壁が良好に遺存しており、高さは46cmを測る。

床面 平坦で乱れは少ない。1号貯蔵穴の東脇がやや高く盛り上がる。

カマド 北西辺の中央で燃焼部が検出された。袖部は壁穴内に75cm程張り出し、燃焼部本体が構築される。焚口には長胴の竈を2本連結して横架材としている。また燃焼部の中央底面からは長さ25cmの棒状礫が検出されたが、本来は直立させて支脚に用いたものだろう。燃焼部の内法規模は幅55cm、高さ30cm前後と推定される。底面は煙道部に向かって外傾し、次第に立ち上がる。煙道はそのまま外上方に延びて開口すると思われる。

ピット 4基が検出され、いずれも主柱穴と考えられる。柱間寸法はP1-P2よりP1-P4が60cm程長いことから棟方向は北東-南西か。

貯蔵穴 カマドの両脇から2基検出されており、規模は1号が径84cm、深さ38cm。2号が径85×67cm、深さ23cmを測る。両者が同時に使用されたか否かは確認できなかったが、遺物の出土状況から2号貯蔵穴は住居廃絶時には開口していたことが明らかである。

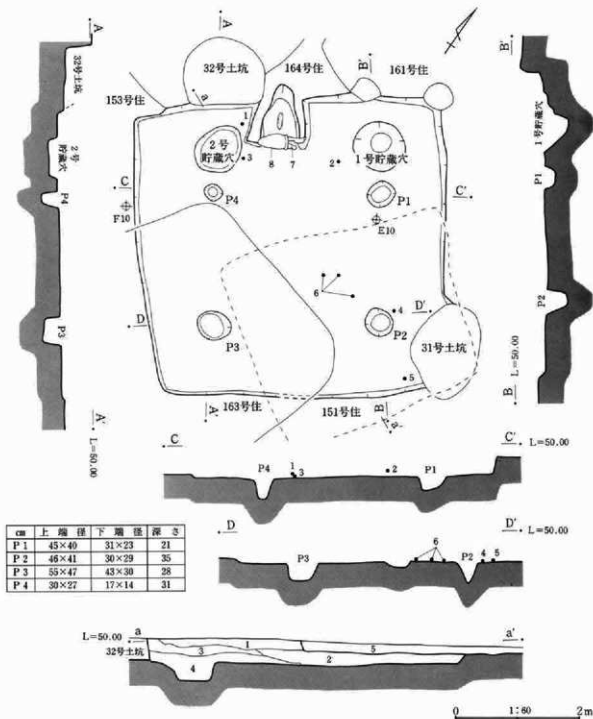
埋土の特徴 全体に黒褐色砂質土が堆積し、下位にはロームブロックと焼土を多く含む。人為的な埋没も考えられよう。

遺物 床面上及び埋土下層から完形品や大形破片が出土しており、時期は古墳時代末のものにほぼ限定される。またカマド手前を中心に棒状礫が15点出土しているが、すべて床面より高い位置であるため住居廃絶後の廃棄あるいは流れ込みと考えられる。

重複遺構 II区151号・153号・161号・163号・164号住居跡、II区31号・32号土坑と重複し、151号住居跡より古く、その他との新旧関係は不明である。

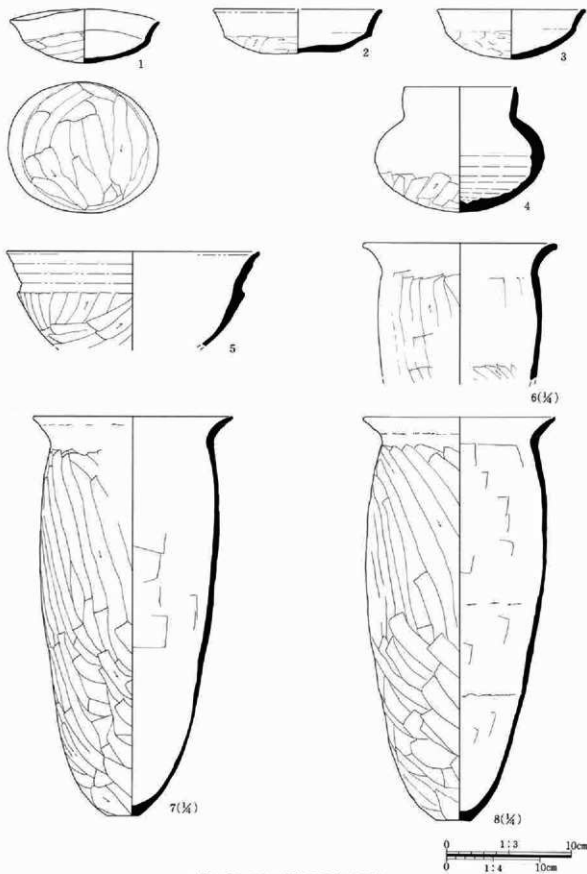


第203図 II152号住居跡カマド検出状況



第204図 II 152号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第205図 II152号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

II153号住居跡 (第206図 PL. 16・75)

位置 F-9・10

平面形 長方形と思われる。

規模 西辺3.12m、南辺3.78m

方位 N-100°-E

壁 北と西壁が遺存、高さ39cm。ほぼ垂直。

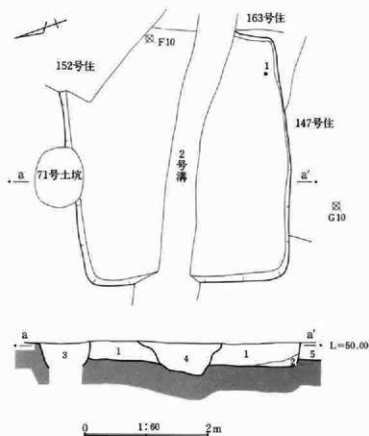
床面 貼り床で、南側にかけてやや傾斜する。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 ロームブロックを多く含む土が一樣に堆積しており、人為的埋没の様相を呈する。

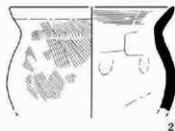
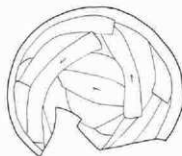
遺物 時期は古墳時代初頭と末期に2分される。

重複遺構 II区147号・152号・163号住居跡、II号2号溝、II区71号土坑と重複し、147号住居跡より新しく、2号溝と71号土坑より古い。



土層説明

- 1 黄褐色砂質土 ロームブロックを多く含む。
- 2 黒色土
- 3 71号土坑埋土
- 4 2号溝埋土
- 5 147号住居跡埋土



0 1:3 10cm

第206図 II153号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II154号住居跡 (第207・208図 PL. 18・75)

位置 H・I-9・10・11

平面形 正方形。

規模 北東辺5.86m、南東辺5.73m

方位 N-118°-E

壁 削平によりほとんど遺存せず、高さは北東部で16cmを測る。

床面 地山のロームをそのまま床として利用している部分が多い。ほぼ平坦で水平。

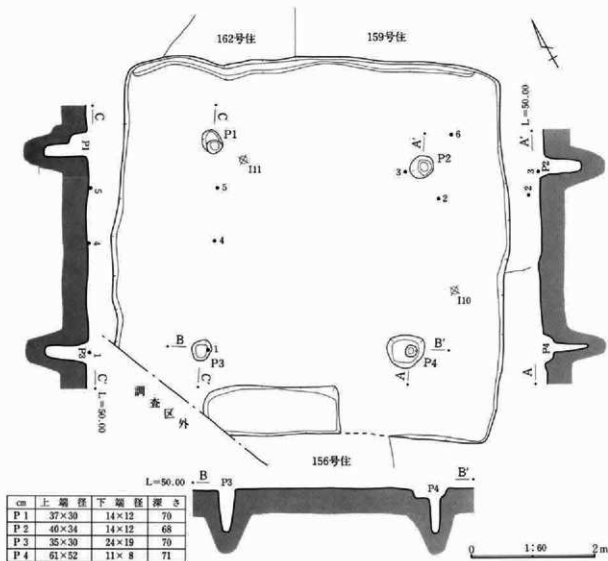
ピット 住居プランの対角線上に主柱穴4基が検出された。柱間寸法は北西-南東方向が10~40cm長いだけであり、梁と桁は正方形の「井桁」に組まれると考えられる。

その他 周溝は北東壁に沿って検出され、幅14cm、深さ5cmを測る。また周溝の対壁に沿って長さ2.17m、幅80cm、深さ15cmの長方形の掘り込みを検出したが、性格は不明。

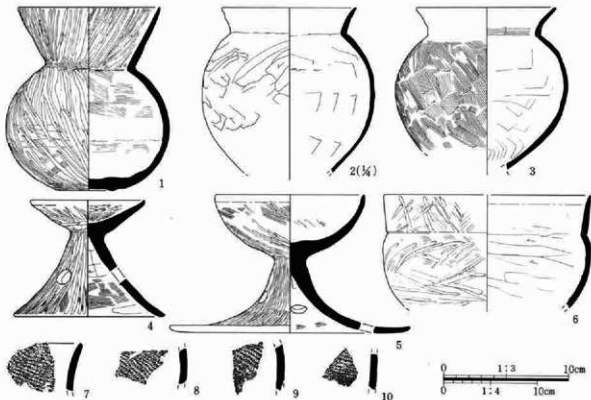
埋土の特徴 一様にロームブロックを含む黒褐色土が堆積している。

遺物 ほとんどが床面か埋土下層から出土しており、時期は古墳時代初頭に限定される。住居廃絶後の廃棄と思われるが、葎、壺、高杯、器台、鉢と該期の良好な器種セットがそろった。

重複遺構 II区156号・159号・162号住居跡と重複し、新旧関係の判明したものはない。



第207図 II154号住居跡



第208図 II 154号住居跡出土遺物

II 155号住居跡 (第209・210図 PL. 18・76)

位置 I-8・9

平面形 隅丸方形と思われる。

規模 東辺5.25m 方位 N-58°-E

壁 東壁の下半が遺存し、高さは18cmを測る。

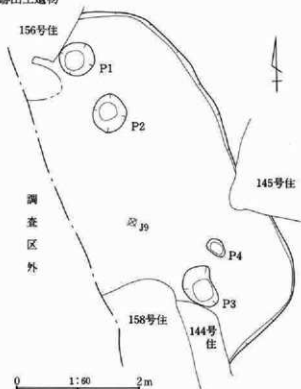
床面 ほぼ平坦。

ピット 4基のうちP1~P3は東壁に平行する軸線上に並ぶ。形状、規模からP1とP3が柱穴だろう。

その他 炉、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 完形に近い壺、甕が床面からつぶれた状態で出土しており、時期は古墳時代初期が主体でこれに平安時代の碗、杯片が混入する。

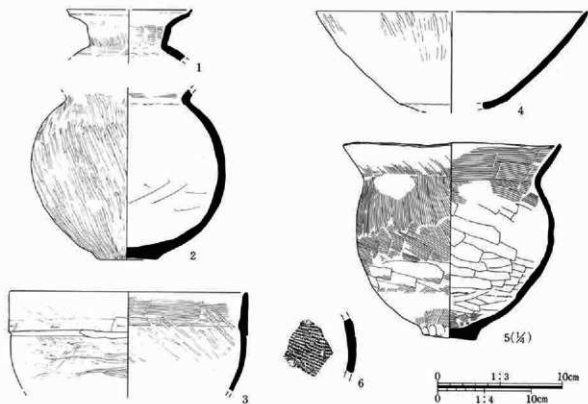
重複遺構 II区144号・145号・156号・158号住居跡と重複し、144号・156号・158号住居跡より古い。



cm	上	期	径	下	地	径	深	さ
P 1	57	×	53	32	×	31	38	
P 2	60	×	53	29	×	28	29	
P 3	70	×	53	35	×	30	43	
P 4	90	×	72	30	×	22	24	

第209図 II 155号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第210図 II155号住居跡出土遺物

II156号住居跡 (第211図 PL. 18)

位置 I-9・10

平面形・規模・方位 不明。

壁 確認出来なかった。

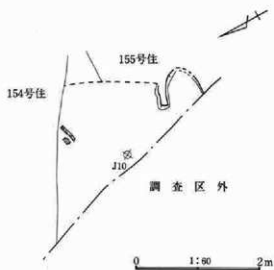
床面 不明確。重複するII区154号・155号住居跡より5～8cm高い。

カマド 南東壁と推定される位置で燃焼部が検出された。袖部は竪穴内に張り出す形状になるらしい。燃焼部底面はややくぼんでおり、土器片や礫が出土する。規模は内側で幅55cm、奥行き約60cmを測る。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 カマドから鉢の破片が出土しており、時期は不明。他に北東壁付近で幅5cm程度の炭化材が2点東西方向に向いて検出された。これが上屋材となるか否かは不明。

重複遺構 II区154号・155号住居跡と重複しており、155号住居跡よりは新しい。



第211図 II156号住居跡

II 157号住居跡 (44号土坑に変更)

II 158号住居跡 (第192・212図 PL. 16)

位置 J-7・8 平面形 方形と思われる。

規模 北東辺3.45m 方位 N-100°-E

壁 ほぼ垂直の掘り込みで、高さは55cmを測る。
南東壁は重複するII区144号住居跡の埋土を
壁土とするためか、崩落した状況を示す。

床面 中央部が高まっており、硬質。

カマド 燃焼部を検出。袖部は竪穴内に若干張り出す。
燃焼部奥壁は外傾して煙道部に続く。燃
焼部の幅は約50cmを測る。

ピット 壁際に相対して2基を検出。P2は生活時に
埋められており、柱穴と断定できない。

遺物 カマド周辺から杯、甕の小破片が出土して
おり、時期は奈良～9世紀前半が多い。

重複遺構 II区144号・155号住居跡より新しい。

II 159号住居跡 (第213・214図 PL. 18・76)

位置 G-10、H-9・10・11

平面形 ほぼ正方形に近いと思われる。

規模 北東辺(4.8)m、南東辺(4.5)m

方位 N-113°-E

壁 削平により下位の一部が遺存するのみで、
高さは東隅で18cmを測る。

床面 中央部の凹凸が激しく、やや盛り上がる。

西半部については遺構重複のために不明。

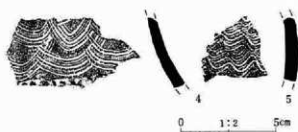
ピット 検出された5基のうち、P1～P4は柱穴。
これには抜き取り穴状の掘り込みがみられな
いことから、支柱を立てたまま住居を放棄し
た可能性がある。

遺物 南隅の埋土下層及び床面上から古墳時代初
頭の破片が廃棄された状態で出土しており、
これに平安時代のものが混入する。II区154号
住居跡と重複する部分については帰属遺物の
識別が困難である。

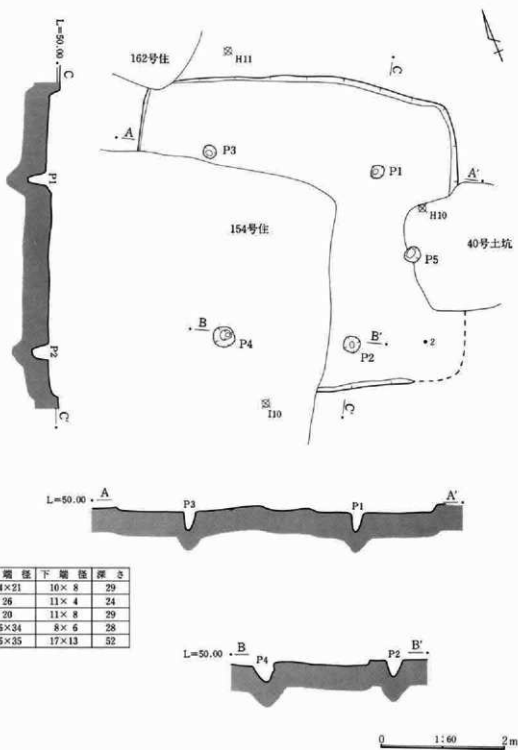
重複遺構 II区154号・162号住居跡、II区40号土坑
と重複し、新旧関係は不明である。



第212図 II 158号住居跡出土遺物



第213図 II 159号住居跡出土遺物



第214図 II 159号住居跡

第1節 竪穴住居跡

II160号住居跡 (第215・216図 PL. 18・76)

位置 C-11、D-10・11

平面形 横長方形。

規模 西辺2.33m、南辺2.65m

方位 N-22°E

壁 わずかに3cmほどが残るのみで、東側はほとんど検出されなかった。

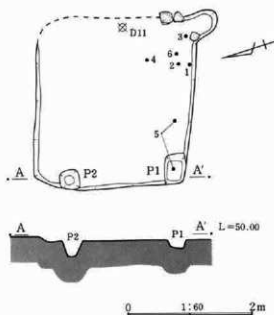
床面 地山の黄褐色土を床土とし、中央部はやや高い。

カマド 南東隅で燃焼部が検出された。袖部には約20cm大の窪をおいて補強材としている。燃焼部火床面は浅い皿状を呈し、幅45cm、奥行き50cmを測る。

ピット 検出された2基のうちP1は方形で浅いため柱穴とは考えにくく、むしろP2がふさわしいがこれに対応するピットは検出されなかった。

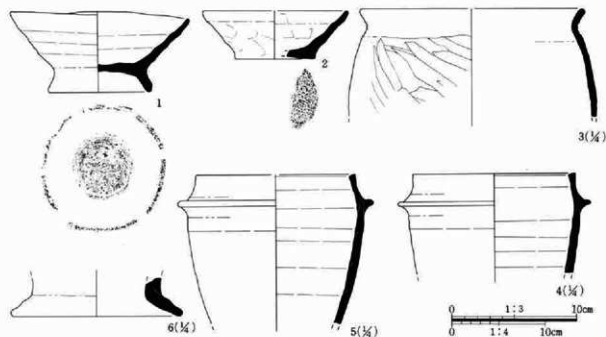
遺物 埋土から碗、羽釜、杯等の平安時代後半の土器が出土する。すべて投棄あるいは流入したものである。

重複遺構 近世以降の畑のサクに切られる。



cm	上期径	下期径	深さ
P 1	48×32	31×21	14
P 2	30	15	24

第215図 II160号住居跡



第216図 II160号住居跡出土遺物

II161号住居跡 (第217図 PL. 18・76)

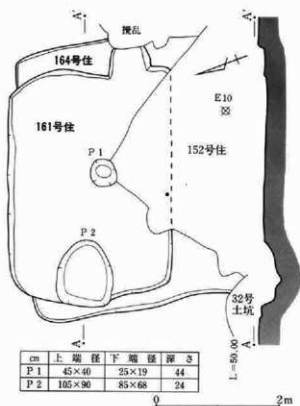
位置 D・E-10・11
 平面形 縦長方形。
 規模 東辺2.60m、西辺2.60m
 北辺3.12m、南辺3.36m
 方位 N-132°-E
 壁 遺存状況が悪く、壁線も乱れる。高さは10cmを測る。

床面 中央部西寄りやや高く、東側へ傾斜する。
 カマド 東辺の南寄りの位置で燃焼部底面が検出された。幅は約70cmを測り、火床面はほぼ平坦。袖部の両側で壁線がずれる。

ピット P1は住居跡の中央にあり、これを支柱として4隅から隅垂木を立て掛けたものか。P2は生活時に開口していたとは考えにくい。重複する別遺構の可能性もある。

遺物 ほとんどの破片が埋土から出土しており、時期は平安時代が多い。

重複遺構 II区152号・164号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



0 1 : 3 10cm

第217図 II161号・164号住居跡及び161号住居跡出土遺物

II162号住居跡 (第218・219図 PL. 76)

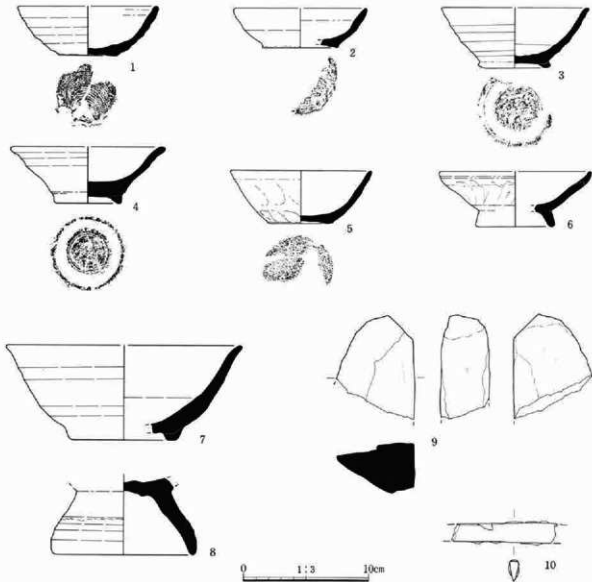
位置 G・H-10・11
 平面形 歪んだ方形。
 規模 一辺約3.1m
 方位 不明。
 壁 非常に遺存状況が悪く、壁線も乱れる。高さは西側で16cmを測る。
 床面 凹凸が多く、全体に北東へ傾斜する。
 その他 北半部で焼土と灰の分布が見られたが戸とは考えにくい。一般的な住居とは異なる性格をもつと考えられるが、それを推定する痕跡は検出されなかった。

遺物 11世紀代の土器が投棄されたかと推定される状態で埋土から出土している。

重複遺構 II区159号住居跡、II区44号・45号土坑と重複し、新旧関係は不明である。



第218図 II162号住居跡



第219図 II162号住居跡出土遺物

II163号住居跡 (第220図 PL. 17・18・76)

位置 E・F-8・9

平面形 横長長方形。

規模 東辺4.60m、西辺(4.0)m

北辺(3.5)m、南辺3.58m

面積 (15.75) m² 方位 N-135°-E

壁 南側が比較的良好に遺存し、高さは17cmを測る。なお西壁は周溝の位置から推定される。

床面 ほぼ平坦で均質。北半は不明確。

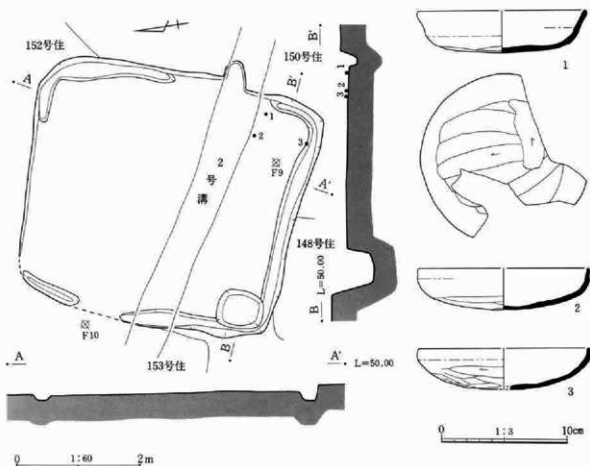
カマド 東辺でわずかに燃焼部底面が残る。幅40cm。

その他 南西隅で長方形の貯蔵穴を検出。規模は上端75×62cm、下端57×50cm、深さ36cm。周溝はほぼ全周すると思われ、南側が最も深く13cmを測る。

遺物 少数であるがカマド付近から杯、壺片が出土しており、時期は8世紀代が主。

重複遺構 II区148号・150号・152号・153号住居跡、II区2号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

第三章 検出された遺構と遺物



第220図 II163号住居跡及び出土遺物

II164号住居跡 (第217・221図 PL. 76)

位置 D・E-10

平面形 方形と思われる。

規模 不明。 方位 N-130°-E

壁 東西壁の一部が遺存し、高さは7cmを測る。

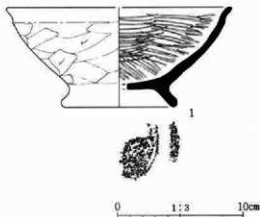
床面 壁際はやや凹凸あり。他は不明。

カマド 東辺の中央部で袖部の痕跡と焼土の分布がわずかに見られたが、攪乱坑、161号住居跡と重複しており規模と形状は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 本跡に伴うものとして高台碗が西壁際の床面から3cmほど浮いて出土した。他の埋土出土遺物は重複遺構との帰属関係を明確にできない。

重複遺構 II区152号・161号住居跡、II区32号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。



第221図 II164号住居跡出土遺物

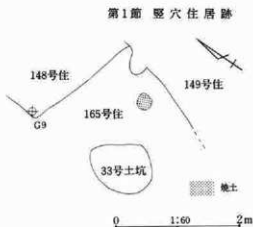
II165号住居跡 (第222図)

位置 F-8

概要 炉と思われる焼土の分布とこれに伴う床面が若干検出されたのみで、形状や規模等については不明。焼土は径25cm程の円形に分布。

遺物 ほとんど不明。

重複遺構 II区148・149号住居跡、II区33号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。



第222図 II165号住居跡

II166号住居跡 (欠番)

II167号住居跡 (第223図)

位置 B-10・11

平面形・規模・方位 北半が重複遺構に切られ、また調査区外になるため不明。

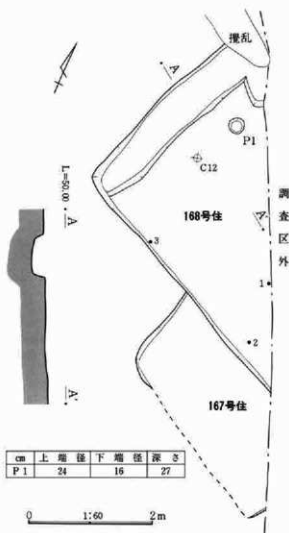
壁 西壁の一部が遺存し、高さは10cmを測る。

床面 ほぼ平坦。南壁際は不明瞭。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 出土せず。

重複遺構 II区168号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第223図 II167号・168号住居跡

II168号住居跡 (第223・224図 PL. 76)

位置 B-11、C-11・12

平面形 北東半は不明だが方形と思われる。

規模 不明。

方位 N-101°-E

壁 南壁がわずかに遺存し、高さは16cmを測る。

床面 ほぼ平坦で均質。暗褐色土を床土とする。

その他 西壁際と推定される部分に幅60cm、深さ25cmを測る溝状の施設が検出された。一般的な周溝にしては規模が大きいため、掘り方あるいは重複遺構の可能性もある。ピットは西寄りの位置で1基検出された。形状、規模から柱穴と考えたいが、主柱の配置関係は不明。

遺物 南壁際から須恵器杯が出土しており、その他に埋土から9世紀代後半を主とする杯、壺片が出土する。

cm	上端径	下端径	深さ
P1	24	16	27

0 1:60 2m

重複遺構 II区167号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

第三章 検出された遺構と遺物



第224図 II168号住居跡出土遺物

II169号住居跡 (第225図)

位置 F-12

平面形 方形と思われる。

規模 北辺2.55m、その他は不明。

方位 N-146°-E

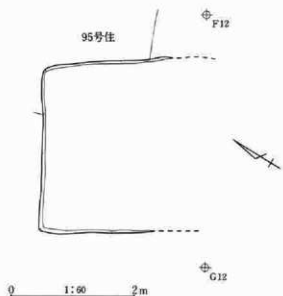
壁 北半部の壁がわずかに遺存し、高さは6cmを測る。

床面 ほぼ均質で、比高差9cmで西側に傾斜する。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 出土せず。

重複遺構 II区95号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第225図 II169号住居跡

II170号住居跡 (第226図)

位置 C-11・12

平面形・規模・方位 不明。

壁 南東部が遺存し、高さは6cmを測る。隅の部分は丸みをもつ。

床面 凹凸が多く、良好に遺存する部分は少ない。

カマド 東辺の南隅で検出されたが、幅20cm、奥行き70cmと狭小で、燃焼部と煙道部の境が不明瞭。火床面はほぼ水平にのびる。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 出土せず。

重複遺構 II区34号・171号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

平面形 方形と思われるが、北西半は不明。

規模 不明。

方位 不明。

壁 東壁は直線状で、南壁は弱い弧状に湾曲する。崩落したものか。高さは48cmを測る。

床面 凹凸が多く、全体的に中央部がくぼむ。

カマド 東辺の南隅で燃焼部を検出。主軸はやや北に傾き、規模は幅75cm、奥行き95cmを測る。火床面はほぼ水平で、住居床面よりやや高い。

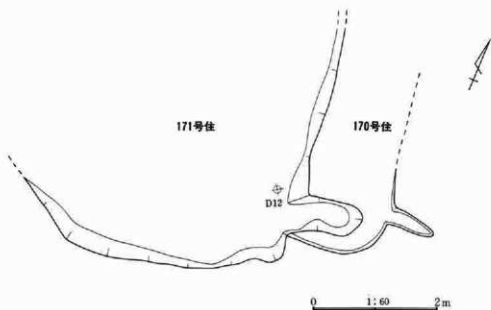
その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 出土せず。

重複遺構 II区34号・170号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

II171号住居跡 (第226図)

位置 C・D-11・12



第226図 II170号・171号住居跡

II172号住居跡 (第227図)

位置 I-5

平面形 方形と思われる。

規模 不明。

方位 不明。

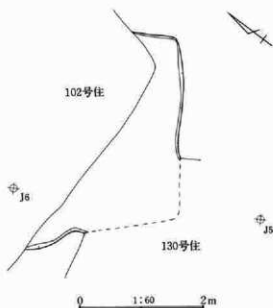
壁 東半の壁が遺存し、高さは6cmを測る。南西壁も一部が検出されたが、本来の形状を残さない。

床面 ほぼ平坦だが、重複するII区130号住居跡の床面との識別が困難。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 わずかに埋土から土器片が出土するが、本跡に伴う遺物は明らかでない。

重複遺構 II区102号・130号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

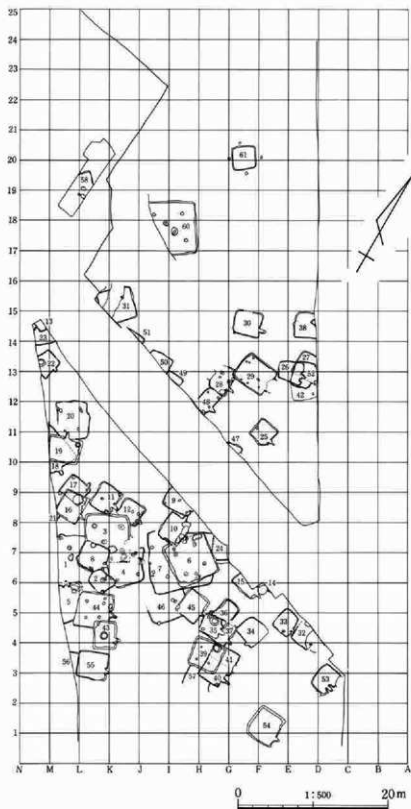


第227図 II172号住居跡

(2) III区の竪穴住居跡

概要

III区はI・II区ほどの密集度ではないが、総計60軒が数軒づつ重複した状態で検出された。本地区では4基の古墳が存在しており、古墳時代初頭と10世紀以降のもの以外はこれらの古墳を避けて立地している。時期別住居数は古墳時代初頭が10軒、古墳時代中葉～後期が2軒、7世紀後半以降11世紀代までが38軒で、時期別比率はほとんどI・II区と変わらない。I～III区は古墳築造の時期を除く全時期にわたって竪穴住居群が構築された居住域と考えられる。



第228図 III区竪穴住居跡位置図

第1節 竪穴住居跡

Ⅲ1号住居跡 (第229図 PL. 77)

位置 L-6・7

平面形 方形と思われる。

規模 不明。

方位 N-57°-E

壁 北西側の壁が遺存し、高さは22cmを測る。

床面 ほぼ平坦。

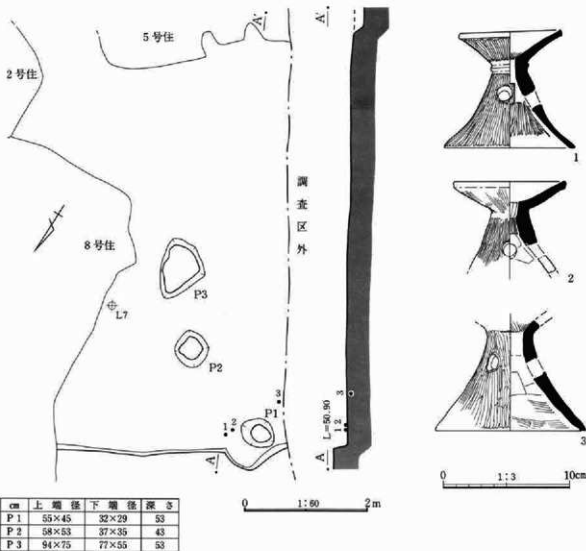
ピット 深さ30cm程のピットが3基検出されたが、位置から柱穴とは考えにくい。P1は北壁際に設けられ、その周辺から土器片が多く出土していることから貯蔵穴の可能性も考えられる。

その他 カマド、炉、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 上層は褐色土、下層は黒色土を主体とし、いずれもローム粒を多く含む。人為的な埋没も考えられよう。

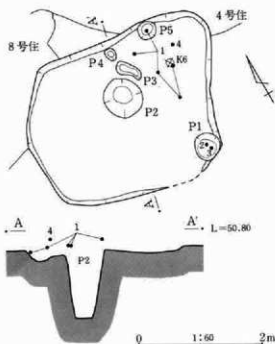
遺物 北壁際に集中し、他は南半分に散在する。いずれも床面から出土しており、時期は古墳時代初頭のもの为主体となる。

重複遺構 Ⅲ区2号・3号・5号・8号住居跡と重複し、いずれよりも新しい。



第229図 Ⅲ1号住居跡及び出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



cm	上層径	下層径	深さ
P 1	42	29×27	56
P 2	64×58	32×26	105
P 3	43×20	32×10	8
P 4	21×18	11× 8	17
P 5	30	19×16	22

第230図 III 2号住居跡

III 2号住居跡 (第230・231図 PL. 77)

位置 J・K-5・6

平面形 歪んだ台形。

規模 西辺2.08m、北辺2.70m、主軸長3.00m

方位 N-90°-E

壁 北壁が直線的に遺存し、他は遺構重複のため不明瞭。高さは12cmを測る。

床面 西側にやや傾斜する。東半部で貼り床と思われる箇所が見られたが、範囲は不明。

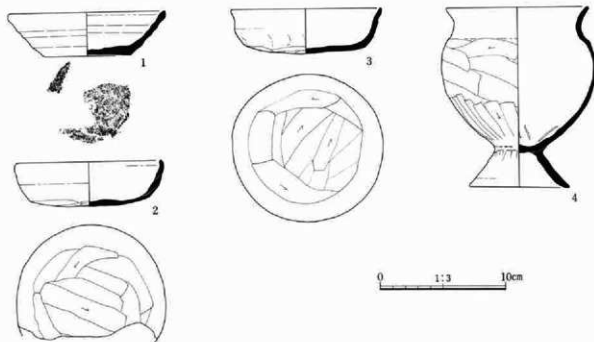
ピット 5基検出されたうちP1は床下である。他の4基は性格が不明で、後世の攪乱とも考えられる。

その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝等の付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 住居跡埋土として黒褐色土が堆積するが、後世の攪乱土が過半をしめる。

遺物 東半部の埋土中から土器片が多く出土しており、P1内からは杯2点が出土した。

重複遺構 III区1号・4号・8号住居跡と重複し、新旧関係は不明である。



第231図 III 2号住居跡出土遺物

III 3号住居跡 (第232・233図 PL. 19・77)

位置 J・K-6・7

平面形 ほぼ正方形と思われる。南半は不明。

規模 北辺6.15m、南北軸長6.55m

方位 N-46°-E

壁 直線的でほぼ垂直に掘り込まれ、最も遺存状況の良い東壁で高さは37cmを測る。

床面 ほぼ平坦。

その他 カマド、炉は検出されなかった。

ピット 検出された7基のうち、P1~P4は主柱穴、P6は南東隅に位置し、底面が広くて浅いことから貯蔵穴の可能性もある。なおP7は床下か

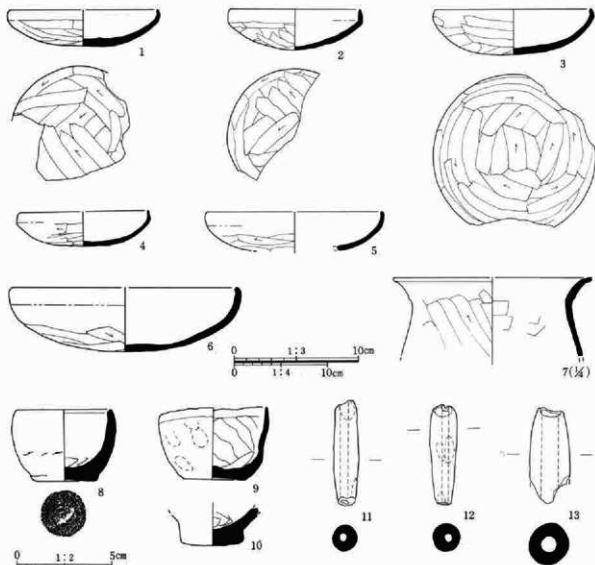
ら検出されており本住居跡とは別遺構とも考えられる。

周溝 検出された壁にそって全周しており、深さは7~10cmを測る。

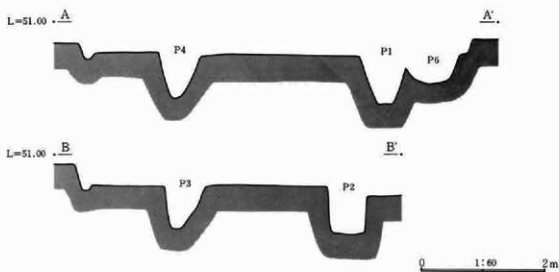
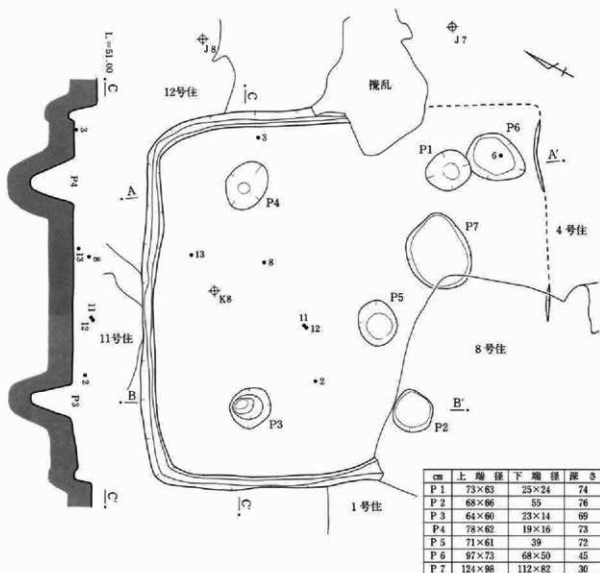
埋土の特徴 ほぼ均質な暗褐色土、黒褐色土が堆積しており、ローム粒等を含まないことから自然埋没と考えられる。

遺物 北半部から破片が多く出土しており、時期は8世紀代が主体。

重複遺構 III区1号・4号・8号・11号・12号住居跡と重複し、8号住居跡より古いが、他との関係は不明。



第232図 III 3号住居跡出土遺物



第233図 III 3号住居跡

III 4号住居跡 (第234・235図 PL. 77)

位置 J-6・7

平面形 方形と思われるが、北及び西側では遺構重複や攪乱により不明瞭。

規模 東西軸長4.60m、他は不明。

方位 N-33°-E

壁 南東部の壁が比較的良く遺存し、高さは40cmを測る。なお東壁北側ではかなり乱れており、本来の壁とは考えにくい。

床面 攪乱が多く、不明瞭。

カマド 東壁に設けられ、袖部は竪穴内に張り出す。

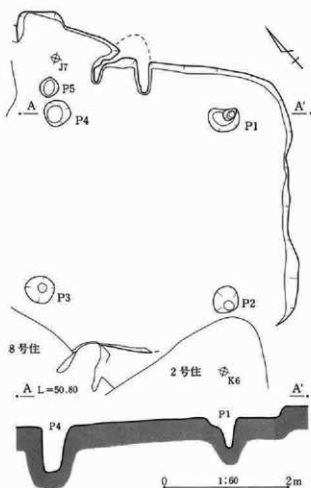
規模は幅95cm、奥行き50cmを測る。煙道部は燃焼部の奥壁中位から掘り込まれたらしい。

ピット 検出された5基のうちP1~P4は支柱穴と考えられる。

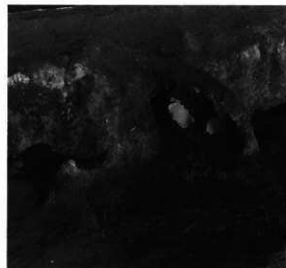
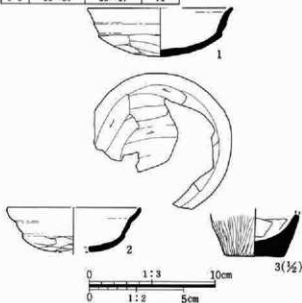
埋土の特徴 住居跡の直接的な埋土として褐色土と黒褐色土にローム粒やロームブロックを含む土が堆積。大部分は後世の攪乱土がしめる。

遺物 床面上、埋土から小土器片がわずかに出土するが、時期は古墳時代~8世紀代で本住居跡に伴うものの認定が困難。

重複遺構 III区2号・3号・8号住居跡と重複し、8号住居跡よりは古いが、他との関係は不明。

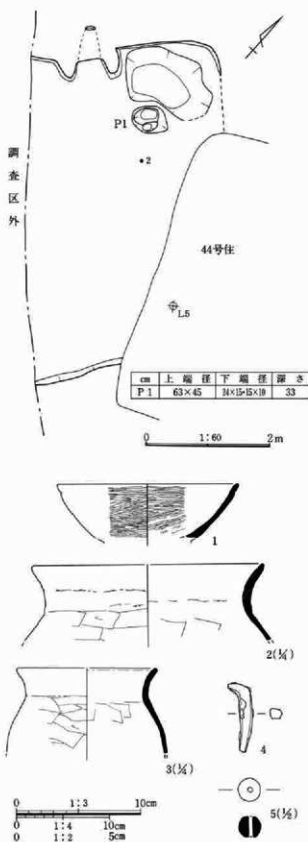


cm	上編径	下編径	深さ
P 1	50×35	10×9	50
P 2	45×39	17×13	89
P 3	46×43	14	76
P 4	42	27×25	75
P 5	31×30	25×17	71



第234図 III 4号住居跡カマド検出状況

第235図 III 4号住居跡及び出土遺物



第236図 III 5号住居跡及び出土遺物

III 5号住居跡 (第236・237図 PL. 77)

位置 K・L-4・5

平面形 方形と思われる。

規模 主軸長5.05m、他は不明。

方位 N-17°-W

壁 ほぼ垂直に掘り込まれ、南東部で高さは14cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、カマドの手前部がやや高い。

カマド 北西壁に構築されており、天井部が検出された。袖部は竪穴内に50cm程張り出す。煙道部は円筒状に外部へ延び、竪穴外約40cmのところできり出すが、本来はさらに長いと思われる。

ピット カマドの右手前で1基検出されており、位置と規模、形状から柱穴の可能性はある。なお底面形状から柱の据え直しも考えられる。

貯蔵穴 北隅で検出。規模は155×80cm、深さ40cmを測る。

埋土の特徴 黒色土を主体とし、ローム粒や焼土粒を含んでおり、後世の攪乱土がかなり入り込む。

遺物 古墳時代末～10世紀代の土器片が出土するが、出土位置の明確なものはない。

重複遺構 III区44号住居跡との新旧関係は不明である。



第237図 III 5号住居跡カマド検出状況

III 6号住居跡 (第238～241図 PL. 19・77・78)

位置 H-5・6・7、G-I-6・7

平面形 正方形。

規模 北東辺(5.50)m、北西辺5.25m

南東辺5.55m、南西辺5.30m

面積 約34㎡

方位 N-61°-W

壁 直線的でほぼ垂直に掘り込まれ、高さは最も遺存状況の良い東隅で31cmを測る。北西壁は重複する7号住居跡の壁と識別が困難。

床面 レベルはほぼ均一で、中央部に凹凸が見られる。

カマド 北西壁に袖部らしき痕跡を残すが不明瞭。

ピット 7基が検出され、P1～P4は主柱穴。柱間寸法はP1-P2は2.9m、P2-P3は2.8m、P3-P4は3.1m、P1-P4は2.8mを測る。P5とP7は位置や規模から、入り口施設に伴う支柱穴で、その中央にあるP6は「はしご」を接地させた部分と考えられる。

貯蔵穴 北隅で検出された。細長い台形状で、規模は135×70cm、深さ53cmを測る。

周溝 南西半の壁に沿って検出された。幅は15～30cm、深さ3～9cmである。南隅は幅広く深くなっており、ピット等がからむ可能性がある。また南東壁の入り口と想定される部分で周溝が切れていることから、壁材を立て掛けるための溝切りとも考えられようか。

埋土の特徴 一次堆積土は黒色土、黒褐色土で、その上にローム粒を含む黒褐色土が堆積する。堆積状況はレンズ状で、自然堆積と考えられる。

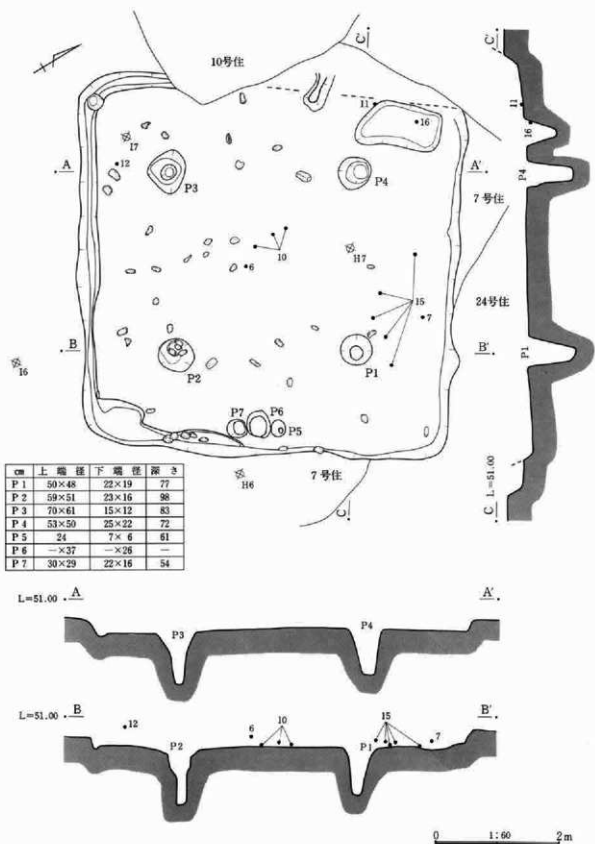
遺物 住居跡全体から出土しており、完形に近い大形破片はカマドから貯蔵穴にかけて集中する。時期は古墳時代末～8世紀代が多い。また礫が住居跡全体に散在するのが特色で、いずれも床面上かやや浮いた状態で出土する。礫は20cm大で形状は様々である。これらは柱穴P2との関係からある程度住居跡が埋没した時点で堆積したものらしい。なお紡錘車が1点埋土中から出土している。

重複遺構 III区7号・10号・24号住居跡と重複し、7号住居跡より新しく、10号住居跡より古い。



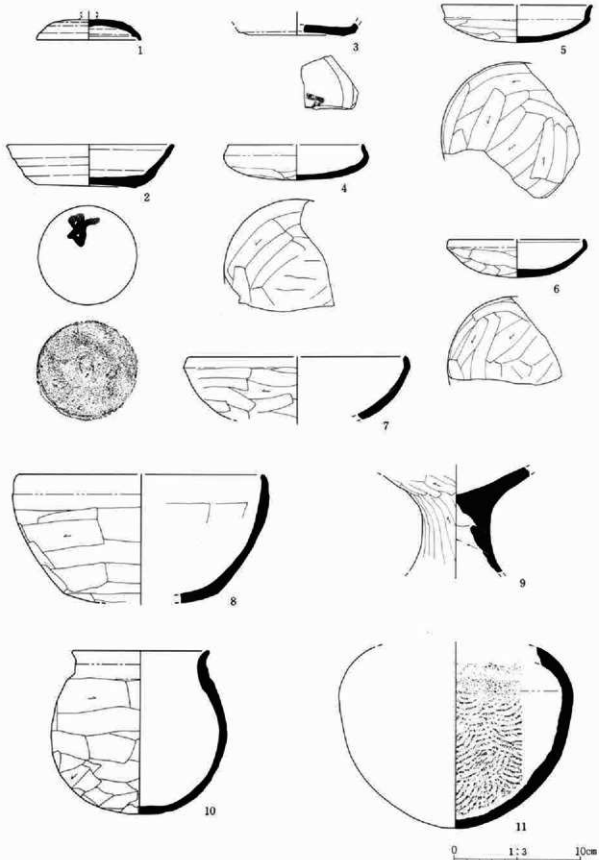
第238図 III 6号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

第三章 検出された遺構と遺物

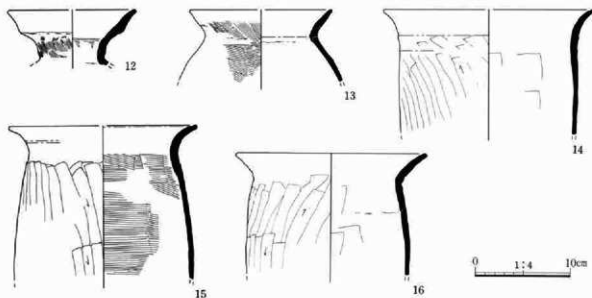


第239図 III 6号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第240图 III 6号住居跡出土遺物(1)



第241図 III 6号住居跡出土遺物(2)

III 7号住居跡 (第242・243図 PL. 78)

位置 G-6・7、H-1-5・6・7

平面形 ほぼ正方形。

規模 東辺6.92m、西辺8.15m

北辺8.75m、南辺7.63m

方位 N-7-W

壁 西壁が比較的良く遺存し、この部分で高さは19cmを測る。

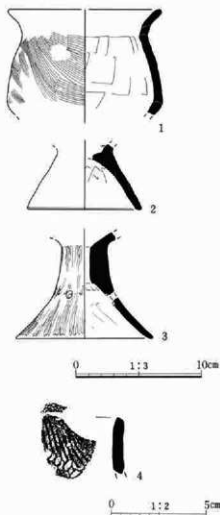
床面 壁付近がやや軟質。

ピット 検出された7基のうちP1とP7は住居跡平面形の対角線上に位置し、規模もほぼ同じであることから柱穴の可能性が高い。P2とP3は深さが15cm前後と浅く、壁際の上屋施設に伴う支柱穴と考えられる。

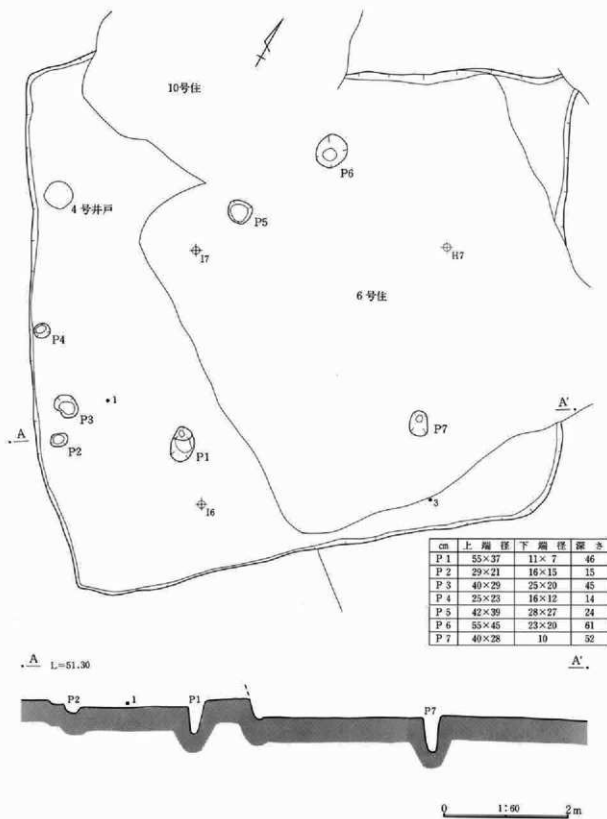
その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

遺物 埋土から少数の土器片が出土しており、時期は古墳時代初頭が主である。

重複遺構 III区6号・10号・24号・46号住居跡、4号井戸と重複し、6号・10号住居跡よりは古いと思われるが、他との新旧関係は不明である。



第242図 III 7号住居跡出土遺物



第243圖 III 7号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

Ⅲ 8号住居跡 (第244・245図 PL. 78)

位置 K-6・7、L-6

平面形 ほぼ正方形。

規模 東辺不明、西辺3.28m

北辺3.40m、南辺不明。

方位 N-81°-E

壁 遺構検出面より45cm程を割り、重複する遺構の中では最も深い。南北壁はほぼ垂直であるが、西壁は上半が崩落している。

床面 全体にほぼ平坦で、カマドの手前部分がやや高い。

カマド 東壁の南寄りで燃焼部と袖部が検出された。本体は白色粘土で構築され、袖部は30cmほど整穴内に張り出す。規模は幅65cm、奥行き70cmを測る。煙道部は検出されなかった。

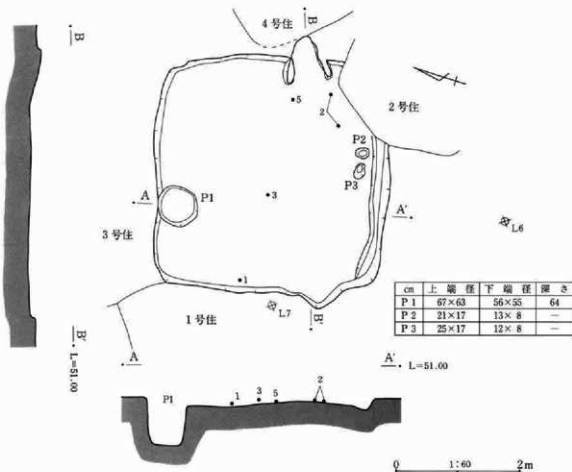
ピット 3基が検出されたが柱穴と考えられるものはない。P1は重複する別遺構の可能性がある。P2とP3は入り口施設に伴うものだろう。

溝 南壁に沿って検出され、幅20cm、深さ2～5cmを測る。

埋土の特徴 黒色土、黒褐色土を主体とし、ローム粒や焼土を多く含む。

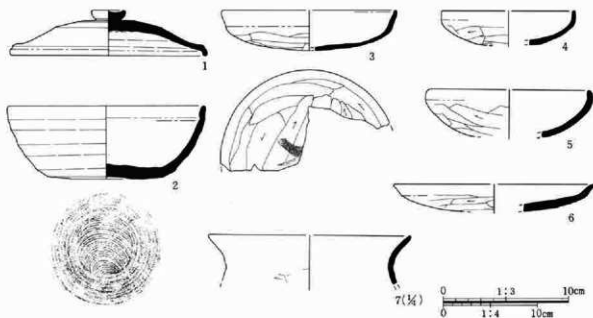
遺物 住居跡全体の床面から出土しており、時期は古墳時代末～8世紀初頭のものが多い。また古墳時代初頭の土器も出土しているが、重複する遺構からの混入品だろう。

重複遺構 Ⅲ区1号・2号・3号・4号住居跡と重複し、3号・4号住居跡より新しく、1号・2号住居跡より古い。



第244図 Ⅲ 8号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第245図 III 8号住居跡出土遺物

III 9号住居跡 (第246・247図 PL. 78)

位置 H・I-8・9

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 東辺・西辺・北辺は不明、南辺4.28m

方位 N-77°E

壁 上半は崩落のため乱れ、高さは38cmを測る。

床面 地山のロームを床とし、小さな凹凸はあるがほぼ水平。

カマド 東壁の南寄りで燃焼部が検出された。遺存する右袖部は竪穴内に25cmほど張り出す。燃焼部から煙道部への移行部分で天井がわずかに残る。燃焼部火床面は煙道方向へ緩傾斜し、煙道に至って急に立ち上がる。

ピット 6基が検出されており、P4は位置から支柱穴とも考えられるが、これに対応するピットがなく、むしろP1・P2・P3・P5の住居隅部のピットと中央に位置するP6を柱穴とする上屋構造の可能性が有ろう。

周溝 南壁の中央で1.5m程検出された。幅12cm前後、深さ3~6cmを測る。

埋土の特徴 ほぼ均質な暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然の埋没が主と考えられる。なお壁際にロームブロックが混入するが、壁上半の崩落であろう。

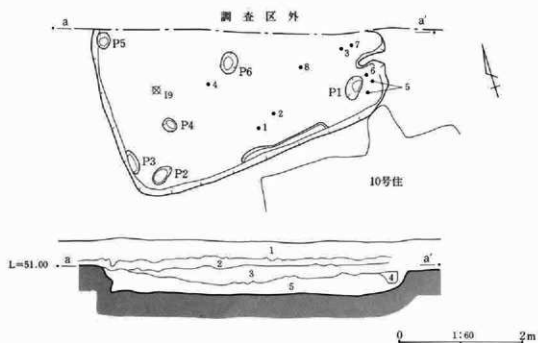
遺物 カマド内とその周辺から大形の土器片を含めて遺物の大半が出土しており、時期は古墳時代末~8世紀代が主。なお埋土中位から出土した杯(第247図-1)と隣接する10号住居跡出土土器の接合関係が認められた。

重複遺構 南東部分で10号住居跡カマドと接する。



第246図 III 9号住居跡カマド検出状況

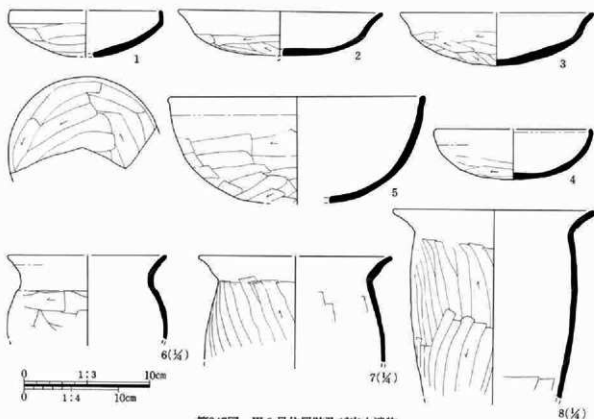
第三章 検出された遺構と遺物



土層説明

- 1 暗褐色土 現在の耕作土。
- 2 暗褐色土 1 よりやや明るい。
- 3 暗褐色土 ローム粒を含む。
- 4 カマド天井部
- 5 暗褐色土 ロームブロックとローム粒を含む。

cm	上端径	下端径	深さ
P 1	39×24	20×12	13
P 2	36×21	25×15	20
P 3	40×—	30×—	12
P 4	24×19	17×9	17
P 5	27×21	14	24
P 6	35×26	21×15	8



第247図 III 9号住居跡及び出土遺物

III10号住居跡 (第248・249図 PL. 19・78)

位置 H・I-7・8

平面形 ほぼ正方形。

規模 東辺(3.6)m、西辺3.68m

北辺3.15m、南辺(3.1)m

方位 N-3°-W

壁 北壁と西壁が比較的良好に遺存し、高さは28cmを測る。他の遺構と重複する南と東側では崩落が見られ壁線が歪む。

床面 ほぼ平坦。

カマド 北壁の東寄りで燃焼部を検出。本体は竪穴外に張り出し、規模は幅70cm、奥行き60cmを測る。煙道部は不明。

貯蔵穴 北東隅のカマド右手前で径1m前後、深さ18cmの落ち込みが検出されており、貯蔵穴の可能性がある。

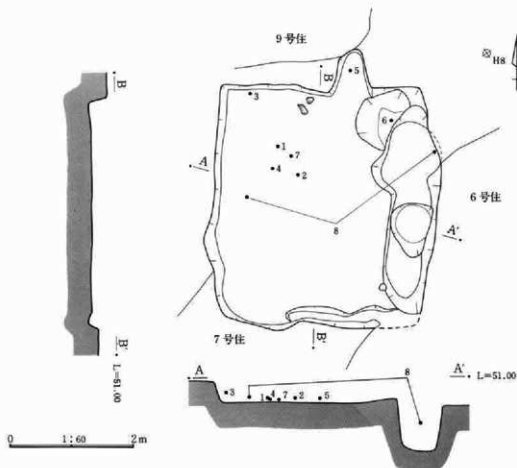
周溝 南壁に沿って東半部で検出。幅20~30cm、深さ10~5cmを測る。

その他 東壁に沿って幅110~70cm、深さ30~43cmの落ち込みと、更に中央部に深さ30cmのピットが検出された。埋土堆積状況では住居跡を切っていないことから本住居跡以前のもので、住居跡掘削時の掘り方と考えられる。

埋土の特徴 下位に黒褐色土、上位に褐色土が堆積し全体にローム粒をわずかに含む。ロームブロックが認められないことから自然埋没と考えられる。

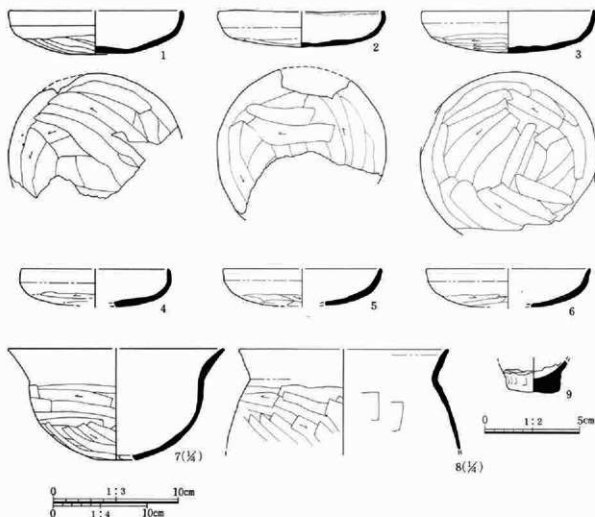
遺物 埋土中から出土しており、投棄された状況と考えられる。時期は8世紀代が主。

重複遺構 III区6号・7号住居跡よりも新しく、9号住居跡との関係不明。



第248図 III10号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第249図 III10号住居跡出土遺物

III11号住居跡 (第250図 PL. 78)

位置 J・K-8・9

平面形 横長長方形。

規模 東辺(3.5)m、西辺3.55m

北辺3.15m、南辺(3.0)m

面積 10.02㎡

方位 N-87-E

壁 比較的遺存状況が良好でやや外傾し、上半で崩落部が見られる。高さは32~37cmを測る。

床面 ほぼ平坦でカマドの手前部がやや高い。

カマド 東壁のほぼ中央で検出された。袖部が35cmほど張り出し、燃焼部本体は細長く幅55cm、奥行80cmを測る。火床面は緩やかに傾斜して立ち上がる。煙道部は検出されなかったが、

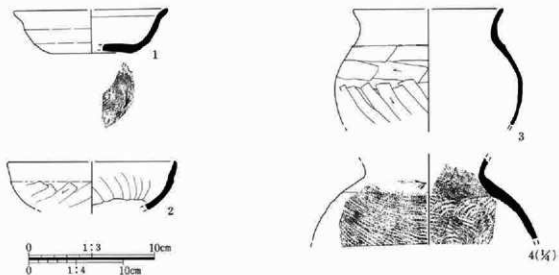
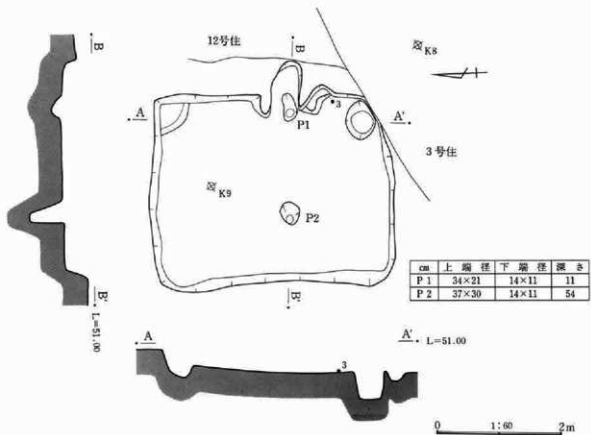
燃焼部奥壁の中位から掘り込まれたと考えられる。なおカマドの前面から住居中央付近にかけて焼土の分布が見られたが、カマド崩落土が堆積したと考えられる。

ピット 2基が主軸上に乗って検出されたが、P1はカマド燃焼部にあることから柱穴とは考えられない。むしろ後世の擾乱坑(ごぼり栽培)の可能性が高い。

貯蔵穴 南東隅で検出された。楕円形で径63×50cm、深さ42cmを測る。

その他 カマド右袖縁で長さ50cm、高さ13cmの段状施設、北東隅で三角形を呈する深さ12cmの落ち込みが検出された。周溝は認められない。

埋土の特徴 褐色土が主でローム粒やロームブロッ



第250図 III11号住居跡及び出土遺物

クを含む。レンズ状の堆積状況を示すが、埋没初期は人為的埋土の可能性が強い。

遺物 大部分が埋土から出土しており、時期は8世紀代のものが多い。

重複遺構 III区3号住居と重複するが、新旧関係は不明である。

III12号住居跡 (第251図 PL. 78)

位置 I・J-8

平面形 縦長長方形。

規模 東辺2.75m、西辺不明

北辺3.16m、南辺(3.4)m

方位 N-83°-E

壁 南側は遺構重複のため不明だが他は良好に遺存しており、ほぼ垂直で高さは18cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、壁際が溝状に浅くくぼむ。

カマド 東壁南寄りて検出された。本体は竪穴の外側に張り出し、右袖部がわずかに竪穴内にて。燃焼部は深い「櫛形」状を呈し、幅75cm、奥行き55cmを測る。

ピット 検出された6基のうち、柱穴と考えられるものはない。P6はカマド燃焼部～焚口があり、使用時の施設とは考えにくい。カマド焚口の温気抜きを意図したものでしょうか。

遺物 ほとんど埋土から出土しており、時期は10世紀代が主。なおカマド内に落ち込んだ状態で甕が出土している。

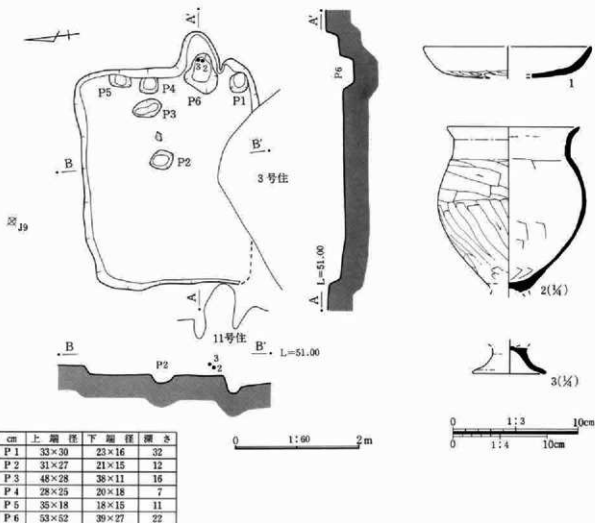
重複遺構 III 3号住居跡と重複し、新旧関係は不明。

III13号住居跡 (第265・266図 PL. 79)

位置 M-14

平面形・規模・方位は南隅のみ検出のため不明。

遺物 古墳時代初頭の壺、東海系の壺、鉄製鎌が



第251図 III12号住居跡及び出土遺物

出土するが、重複するⅢ区23号住居跡に伴う可能性あり。

Ⅲ14号住居跡 (第252図)

位置 F-5

平面形・規模・方位 不明。

壁 南壁の一部が遺存し、高さは3cmを測る。

床面 南東隅部のみが残る。

カマド 東障で燃焼部の一部がみられるが詳細不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 埋土下位から土器片がわずかに出土している。時期は不明。

重複遺構 Ⅲ区15号住居跡、2号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

Ⅲ15号住居跡 (第252図 PL. 79)

位置 E・F-5・6

平面形 長方形と思われる。

規模 南辺3.58m、他辺は不明。

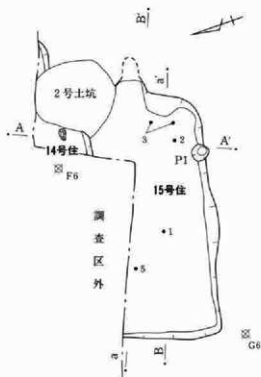
方位 N-94°-E

壁 ほぼ垂直で、高さは30cmを測る。崩落は少なく、比較的遺存状況は良好。

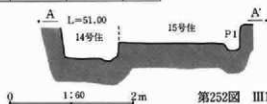
床面 やや中央がくぼむ。

カマド 東壁の南寄りで検出され、燃焼部が残る。本体は竪穴の壁線に位置し、燃焼部平面形は方形を呈する。規模は幅60cm前後を測る。煙道部は不明瞭。

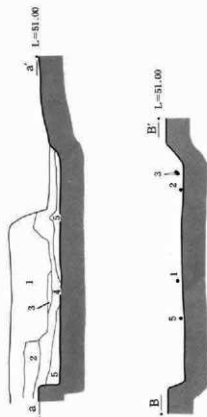
ピット 南壁の東寄り部分に1基が掘り込まれる。柱穴の可能性もあるがこれに対応するピットは不明。



cm	上端径	下端径	深
P 1	28×27	14×11	41



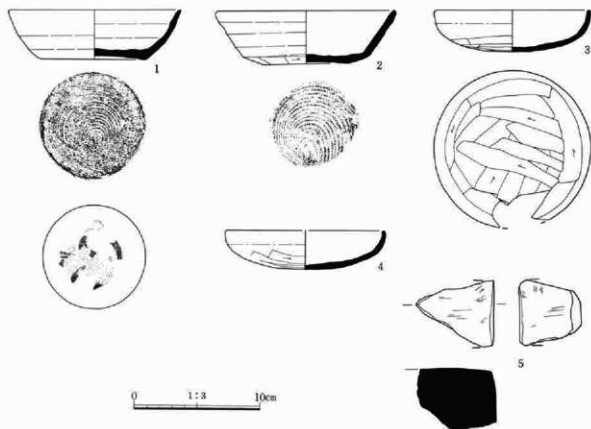
第252図 Ⅲ14号・15号住居跡



土層説明

- 1 褐色土 現在の耕作土。近世以降の層が見られる。
- 2 褐色土 As-Bを含む。
- 3 黒褐色土 ローム殻を含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム殻、焼土を含む。

第III章 検出された遺構と遺物



第253図 III15号住居跡出土遺物

埋土の特徴 砂質の黄褐色土、黒褐色土が堆積し、
ローム粒やロームブロックを含むが、人為的
な埋積とは認められない。
遺物 床面あるいは床面からわずかに浮いた状態

で、完形かそれに近い大形破片が出土しており、
時期は8世紀代が主。

重複遺構 III区14号住居跡、2号土坑と重複するが、
新旧関係は不明である。



第254図 III15号住居跡遺物出土状況

III16号住居跡 (第255・256図 PL. 19・79)

位置 K-8、L-8・9

平面形 横長方形。

規模 東辺4.28m、西辺(3.8)m

北辺3.25m、南辺(3.3)m

面積 (12.6) m² 方位 N-79°-E

壁 ほぼ垂直で直線的に掘り込まれる。高さは47cmを測る。

床面 ほぼ平坦で凹凸も少ない。

カマド 東壁南寄りて検出された。燃焼部は方形に掘り込まれ、側壁と奥壁はほぼ垂直に立つ。煙道部は奥壁の底面から5cmほど上がった位置から掘り込まれ、ほぼ水平に40cm延びる。この位置から上部へ開口すると考えられる。左右袖部の位置にピット2基(P2とP3)が検出されており、浅く小規模なことから袖部補強材の抜き取り穴の可能性がある。

ピット 竪穴内で8基、竪穴外で3基を検出。柱穴と考えられるものはない。P11は埋土での確認は出来なかったが、床下土坑か重複する別の遺構だろう。P5・P9とP7・P10は左右対称に位置しており、規模もほぼ同一なことから出入り口施設の支柱穴と考えたい。またP5とP7の中央にあるP6はこれと組み合う昇降材の支柱穴になろうか。

周溝 南東隅を除いた壁に沿って検出された。平均して幅10cm前後で、東側は30cmと広がっている。深さは2~10cmで凹凸が多い。なお南壁中央でピットP7と重複するが切り合い関係は不明。

埋土の特徴 黄褐色土、黒褐色土が主に堆積し、全体にローム粒やロームブロックを含む。人為的な埋積も考えられよう。

遺物 ほとんどが埋土から出土しており、杯、甕、平瓶など時期は8世紀代のものが多い。

重複遺構 III区17号・21号住居跡と重複し、カマドの遺存状況から17号住居跡よりは古いことが判明している。



1



2(1/4)



3(1/4)



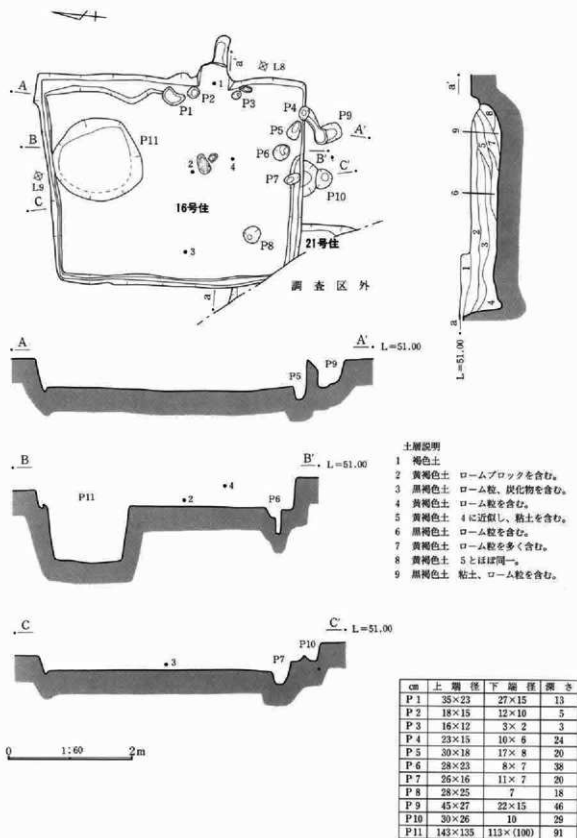
4(1/4)



5(1/4)



第255図 III16号住居跡出土遺物



第256図 III16号・21号住居跡

III17号住居跡 (第257図 PL. 79)

位置 K・L-8・9

平面形 縦長長方形。

規模 東辺 (2.8) m、西辺2.95m

北辺3.75m、南辺 (3.8) m

面積 (9.9) m²

方位 N-0°-E

壁 北及び西側で遺存状況が良く、高さは23cmを測る。ほぼ直線的に掘り込まれ、崩落は少ない。

床面 地山のロームをそのまま床としており、凹凸が少なくほぼ平坦。北壁に沿った部分がややくぼむ。

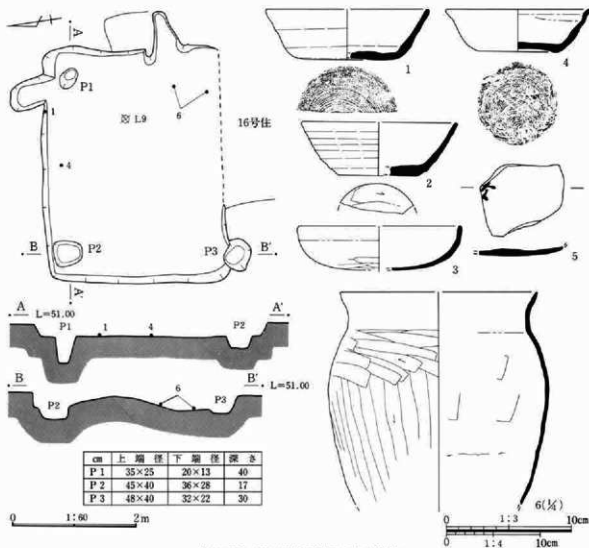
カマド 東壁の南寄りで検出された。本体は竪穴外に張り出し、幅50cm、奥行き55cmを測る。奥壁は垂直に近い角度で立ち上がる。煙道部は不明。燃焼部～袖部は主に粘土で構築される。

ピット 3基が検出されており、これらの性格は不明。P2は平面が方形で住居跡の隅に位置することから貯蔵穴の可能性もあろうか。なおP3と北壁東隅の張り出し部は本住居跡とは別遺構の可能性もある。

埋土の特徴 主に黄褐色土が堆積し、ロームを含む。

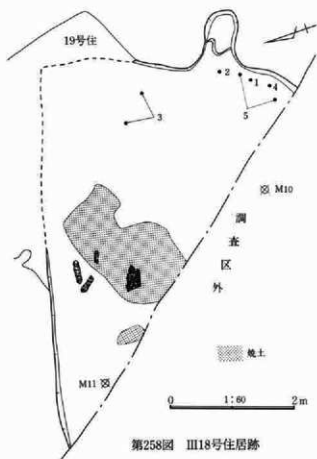
遺物 床面からほぼ9世紀代の杯と壺、埋土からは墨書土器の破片が出土。

重複遺構 III区16号住居跡よりも新しい。



第257図 III17号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第258回 III18号住居跡

III18号住居跡 (第258・259回 PL. 79)

位置 L-9・10・11

平面形 縦長方形と思われる。

規模 不明。

方位 N-96°-E

壁 北東と南東部分でわずかに遺存し、高さは15cmを測る。17号住居跡と重複する部分では不明瞭。

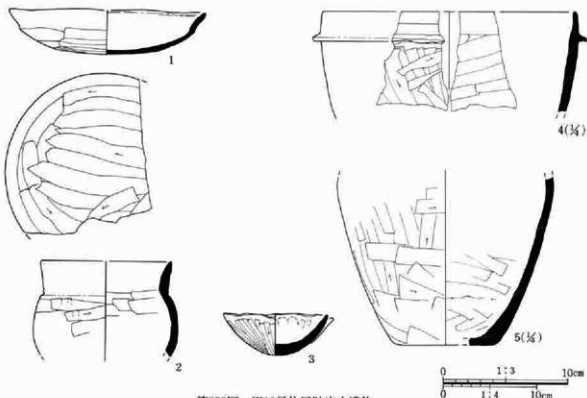
床面 ほぼ平坦。不明瞭な部分が多い。

カマド 本体は竪穴外にあり、幅85cm、奥行き90cmを測る。燃焼部底面は中央部で2cmほどの段をなす。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 床面からわずかに浮いた状態で土器片が出土しており、時期は古墳時代から10世紀代にわたる。なお中央部には広く焼土の分布が認められ、長さ40cmほどの炭化材(構造物と茅材か)が検出された。

重複遺構 III区19号住居跡よりは新しい。



第259回 III18号住居跡出土遺物

III19号住居跡 (第260・261図 PL. 19・79)

位置 K-10、L-9・10・11

平面形 横長長方形。

規模 東辺3.05m、西辺(3.3)m

北辺4.40m、南辺(4.5)m

方位 N-68°-E

壁 直線的でほぼ垂直に掘り込まれ、上位の一部が崩落する。周囲の住居跡に比べて最も深く、高さは45cmを測る。

床面 ロームをそのまま床土としており、小さな凹凸はあるがレベルはほぼ均一である。

カマド 東壁のほぼ中央で検出。本体は竪穴外に構築され、袖部が20cmほど竪穴内に張り出す。両袖部には壺と壺の欠損品をそれぞれ倒立させて粘土で覆い補強材としている。燃焼部は幅50cmの楕円形を呈し底面は浅い皿状にくぼむ。奥壁は強い角度で立ち上がり、そのまま外傾して煙道部に続く。粘土の遺存状況から

カマドの高さは床面から50cm前後と考えられる。

貯蔵穴 北東端で周溝の内側に接して検出された。

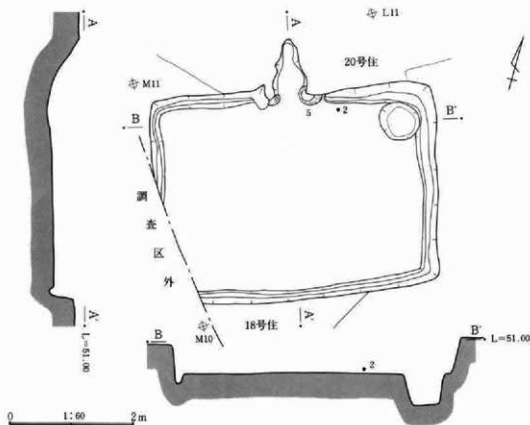
平面は円形を呈し、上端径65cm、下端径45cm、深さ60cmを測る。

周溝 壁に沿って全周し幅15~30cm、深さ5~9cmを測る。掘り込みは直線的で、底面は凹凸が多い。

埋土の特徴 砂質の褐色土、黒褐色土が主に堆積し、焼土や粘土を含む。また下位にはロームを多量に含む層があり、人為的な埋土の可能性もある。

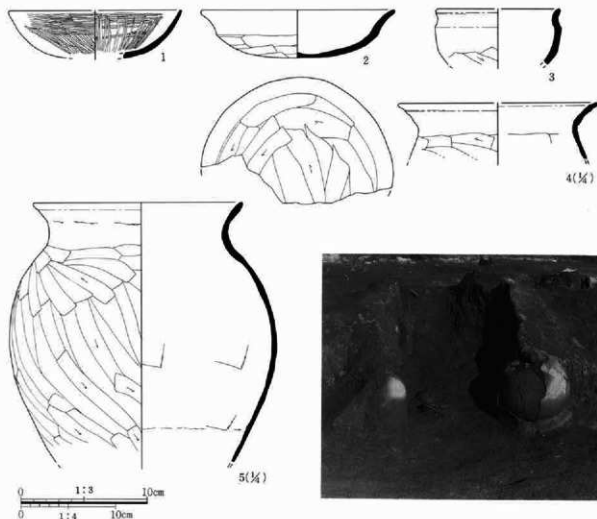
遺物 大形の土器片はカマド周辺に集中しており、時期は古墳時代末~8世紀代のものが多い。

重複遺構 III区18号・20号住居跡と重複し18号住居跡より古く、20号住居跡より新しい。



第260図 III19号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第261図 III19号住居跡出土遺物及びカマド遺物出土状況

III20号住居跡 (第262図)

位置 K・L-10・11

平面形 歪んだ方形で南側は不明。

規模 東辺4.38m、北辺4.50m、西辺・南辺不明。

方位 N-58°-E

壁 大部分が削平、擾乱によって遺存する部分は少ない。また壁線も北壁以外はかなり歪んでいる。高さは最も遺存状況の良い北西部で19cmを測る。

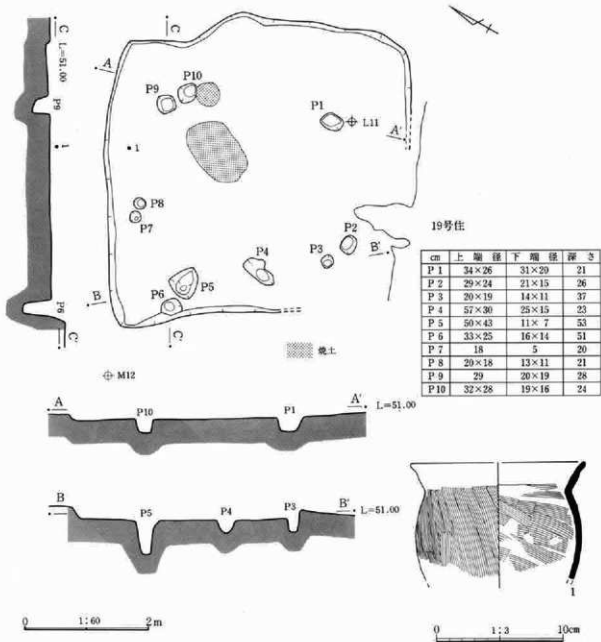
床面 凹凸が激しく一定していない。また中央付近は後世の擾乱によって乱されており、本来の床面を確認することができない。

炉 北東側に偏って焼土の集中分布が大小2ヶ所検出された。小規模のものはピットP10の

南側に接しており径35cmを測る。これを炉と考えれば、P10は同時存在の柱穴とは考えられない。また大規模のものは中央部よりやや北東に偏って位置し、径110×70cmの楕円形で炉としては大きすぎる。両者とも掘り込み部や硬化面が検出できなかったため、本来の炉の形状、規模は不明である。

ピット 10基が検出され、このうちP1・P2・P3・P5・P9・P10が主柱穴と推定される位置にある。ただし上記のように、P10は炉と接していることから終始柱穴であったとは考えられないこと、P2とP3、P9とP10、P5とP6がそれぞれほぼ同位置にあることから、これらはいずれも途中で位置を変更した柱穴と考

第1節 竪穴住居跡



第262図 III20号住居跡及び出土遺物

えられよう。この場合P1が動いていないことを考慮すれば、上屋の建て替えのような規模の大きな改変ではなく部分的な改造に伴うものであろう。またP7とP8は主柱穴とは想定できないが、これも上屋の支柱穴で改造に伴って移動させたと考えられる。

埋土の特徴 主に黒褐色土が堆積しており、ローム粒を多く含む。攪乱が多く堆積状況は不明瞭。
遺物 ほとんどが埋土から出土しており、時期は古墳時代初頭から10世紀代にわたるが、本来的に伴うのは古墳時代初頭のものだろう。
重複遺構 III区19号住居跡よりも古い。

第III章 検出された遺構と遺物

III21号住居跡 (第256・263図 PL. 79)

位置 L-8

平面形・規模・方位 東側一部検出のため、不明。

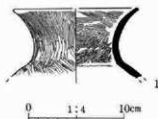
壁東側の一部が遺存し、高さは36cmを測る。

床面 不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から4点が出土しているのみ。

重複遺構 III区16号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第263図 III21号住居跡出土遺物

III22号住居跡 (第264図)

位置 L・M-12・13

平面形 ほぼ正方形と思われる。

規模 東辺2.80m、北辺2.47m、西辺・南辺不明。

方位 N-102°-E

壁 掘り込みは直線的で垂直に近い。上半は削平され、高さは遺存状況の良い東壁で13cmを測る。

床面 凹凸が多く一定していない。

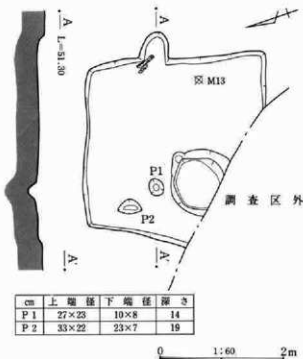
カマド 凹凸が燃焼部のみ検出。本体は壁穴外に構築。規模は幅45cm、奥行き40cmを測る。

ピット 2基検出されたが、性格は不明。

その他 西部で上端径110cm、下端径70cm、深さ190cmの円形掘り込みが確認されたが、本住居跡と重複する井戸の可能性はある。

遺物 埋土から壁片が数点出土。カマド左脇からは長さ30cmと20cmの炭化材が出土。

重複遺構 明確な重複遺構はない。



第264図 III22号住居跡

III23号住居跡 (第265・266図 PL. 79)

位置 L・M-14

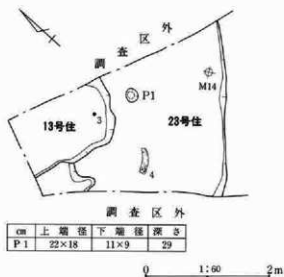
平面形・規模 不明。

方位 不明。

壁 上半は削平により失われており、遺存する南東壁では高さ5~8cmを測る。

床面 壁際がやや低い。西側は不明瞭。

ピット 1基が検出されたが、住居内での位置付けが不明確で、性格は不明。



第265図 III13号・23号住居跡

第1節 竪穴住居跡

その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝などの付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から小土器片が70点ほど出土したが、時期の確定はできない。重複する13号住居跡との遺物の帰属関係も不明瞭。また検出部分の南寄りでは長さ40cmの炭化材が出土している。

重複遺構 III区13号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

III24号住居跡 (第267図)

位置 G-6・7

平面形 方形と思われる。

規模 不明。 方位 不明。

壁 ほとんど遺存せず、わずかに南東部分で3~5cmの段差が認められた。

床面 南側の一部が確認され、ほぼ平坦。

ピット 南東壁際で1基検出されたが、住居との関係は不明。

その他 南東壁に沿って幅40cm、深さ5cm前後の浅い凹みか検出されたが、周溝あるいは掘り方の痕跡であろう。

遺物 埋土から土器片が出土しており、時期は古墳時代初頭が多い。

重複遺構 III区6号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

III25号住居跡 (第268・269図 PL. 20・79)

位置 E・F-10・11

平面形 正方形で南東隅が欠ける。

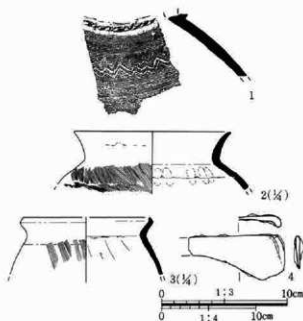
規模 東辺2.50m、西辺2.55m
北辺3.06m、南辺2.20m

面積 7.27㎡

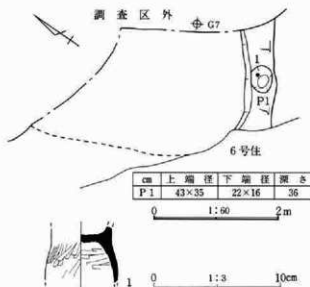
方位 N-91°-E

壁 掘り込みはやや外傾し、北側に比べて南側では壁線が歪む。高さは51cmを測る。

床面 中央部では浅い不定形の掘り方が認められ、ロームを主とする土を埋めて貼り床とし



第266図 III13号・23号住居跡出土遺物

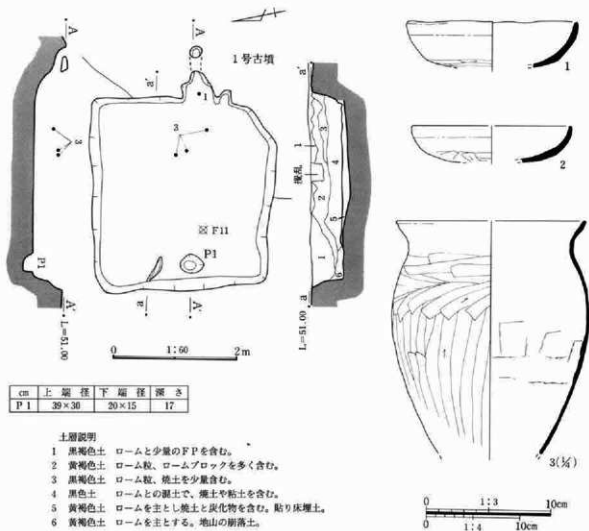


第267図 III24号住居跡及び出土遺物

ている。全体に北側へ傾斜する。

カマド 東壁の南寄りで、竪穴外に構築された燃焼部と煙道部を検出。袖部は地山を利用しており、右側では地山を掘り込んで、20cmほどの突出部を作り出している。燃焼部は方形の平面で皿状にくぼむ。規模は幅50cm、奥行き40cmを測る。煙道部は径10cm、長さ30cmほどで緩く外傾して延び、急に角度を増して上方に開く。

第三章 検出された遺構と遺物



第268図 III25号住居跡及び出土遺物



第269図 III25号住居跡カマダ検出状況

ピット 西壁際に1基検出されたが性格は不明。またP1の北側で長さ40cmの浅い三日月状の溝が検出されており、掘り方の可能性が高い。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 ロームブロックを多く含む土層が下半に厚く水平堆積しており、人為的な埋積であることを伺わせる。

遺物 カマダ付近の埋土に分布が集中する。8世紀末～9世紀初頭の杯、甕片が主。

重複遺構 1号古墳よりも新しい。

第1節 竪穴住居跡

Ⅲ26号住居跡 (第270・271図 PL. 20)

位置 D・E-12・13

平面形 西辺が短い台形。

規模 東辺3.03m、西辺2.05m

北辺3.15m、南辺2.95m

面積 8.15㎡

方位 N-75°-E

壁 崩落部分が多く不整形。東半は遺構重複のため不明瞭。高さは西壁で28cmを測る。

床面 凹凸が多く、硬化面は不明瞭。

カマド 東壁中央部で検出。袖部は竪穴内に35cm張り出す。燃焼部は平面楕円形で、規模は幅55cm、奥行き55cmを測る。煙道は燃焼部奥壁から外傾して立ち上がる部分が発出された。なお燃焼部中央には支脚として使われたと思われる15cm大の自然礫が直立して出土した。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

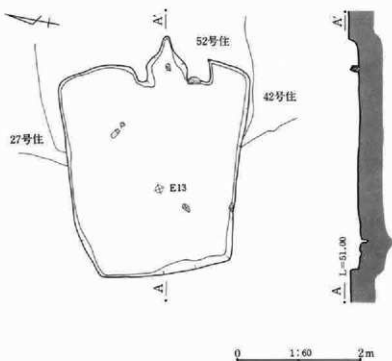
埋土の特徴 ローム粒と炭化物を含む黒褐色土が堆積する。

遺物 古墳時代以降の土器片が埋土より出土するが、時期を確定できるものは少ない。

重複遺構 Ⅲ区27号・42号・52号住居跡と重複しており、カマド遺存状況より26号住居跡が最も新しいと考えられる。

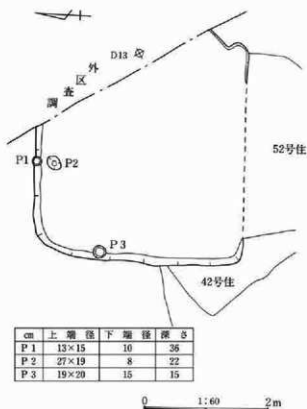


第270図 Ⅲ26号住居跡カマド検出状況



第271図 Ⅲ26号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



III27号住居跡 (第272図 PL. 20・24)

位置 D-12・13

平面形 方形と思われる。

規模 東辺・北辺不明、西辺3.28m、南辺3.35m

方位 N-88°-E

壁 遺存状況の良い北壁は、ほぼ垂直に掘り込まれ、高さは31cmを測る。南壁は遺構重複のため不明。

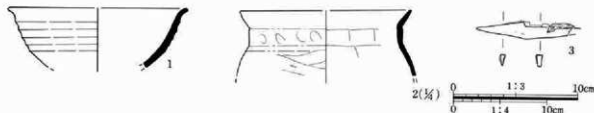
床面 北半だけで確認され、ほぼ平坦。

ピット 北壁と西壁際で3基が検出されたが、性格は不明。その他にプラン内で4基のピットが検出されているが、位置関係から重複する別遺構のものと思われる。

その他 カマド、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 すべて埋土から出土しており、10世紀代の土器とともに刀子1点が出土している。

重複遺構 III区26号・42号・52号住居跡と重複し、26号住居跡より古いのが、その他との新旧関係は不明である。



第272図 III27号住居跡及び出土遺物

III28号住居跡 (第273図 PL. 20・79)

位置 F・G-12・13

平面形 横長方形と思われる。

規模 東辺3.80m、南辺2.70m、西辺・北辺不明。

方位 N-86°-E

壁 北東隅と北西半は不明。遺存する部分はやや外傾する。高さは20cmを測る。

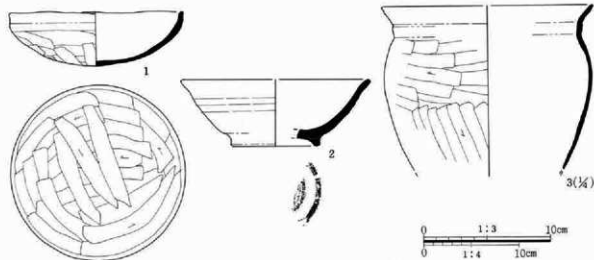
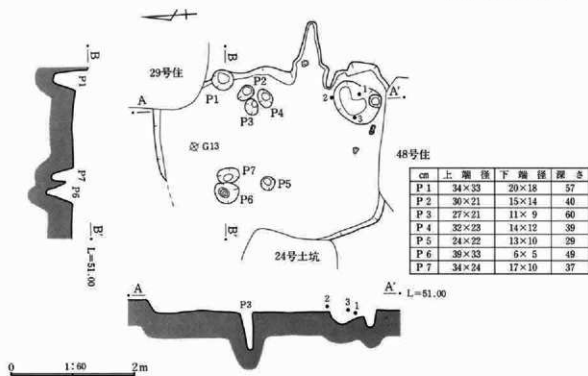
床面 地山のロームを床土としており、ほぼ平坦。

カマド 東壁の南寄りて検出。燃焼部は平面方形で幅60cm、奥行き40cmを測る。袖部は左右対称だが、左側は地山のまま、右側は盛土で作

出している。煙道部は燃焼部奥壁から外傾して立ち上がり、そのまま延びるとと思われる。燃焼部中央付近には支調として使われた可能性のある15cm大の自然礫が出土した。

ピット 7基が検出され、そのうちP6とP7は位置と規模から柱穴の可能性はある。ただしこれと対応する他の柱穴は不明。

貯蔵穴 南東隅で検出され、平面は不整形円形で、径76×58cm、深さ26cmを測る。なお貯蔵穴の南部で径18cm、深さ30cmのピットが確認されたが、貯蔵穴との関係は不明であった。



第273図 III28号住居跡及び出土遺物

埋土の特徴 ローム粒、ロームブロックを多く含む
黒褐色土が堆積する。

遺 物 貯蔵穴付近の埋土から大形破片が集中して
出土しており、時期は8世紀代～10世紀代に
わたっており確定できない。

重複遺構 III区29号・48号住居跡、24号土坑と重複
しており、48号住居跡、24号土坑より古い
29号住居跡との新旧関係は不明である。

第三章 検出された遺構と遺物

III29号住居跡 (第274・275図 PL. 21・79・80)

位置 E・F-12・13

平面形 縦長長方形。

規模 東辺3.55m、西辺3.75m

北辺4.53m、南辺4.82m

面積 (17.8) m²

方位 N-94°-E

壁 東壁は後世の攪乱により不明。他の壁は直線的でほとんど垂直に掘り込まれている。高さは最も遺存状況の良い南隅で45cmを測る。

床面 地山のロームを床土とし、ほぼ平坦で整っている。

カマド 東壁の南寄りの位置で燃焼部の一部が検出されたが、攪乱により詳細は不明であった。

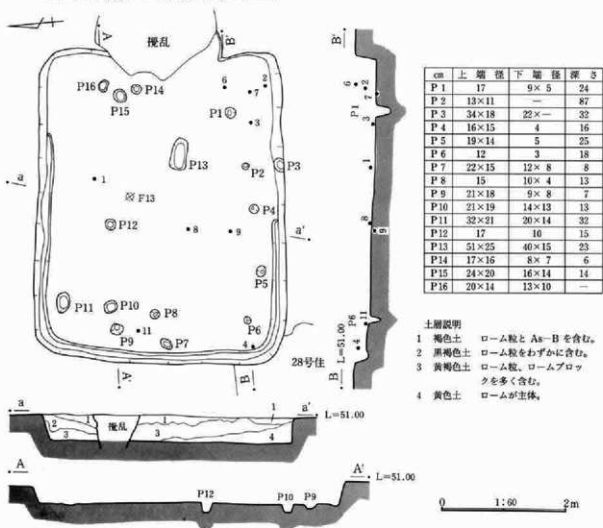
ピット 16基が検出されており、いずれも小規模な円形で深さもそろっている。これらは住居跡プランに相応して長方形の配列を示すことから、柱穴列と考えたい。

周溝 西半の壁に沿って巡り、幅15cm前後、深さ2~7cmを測る。

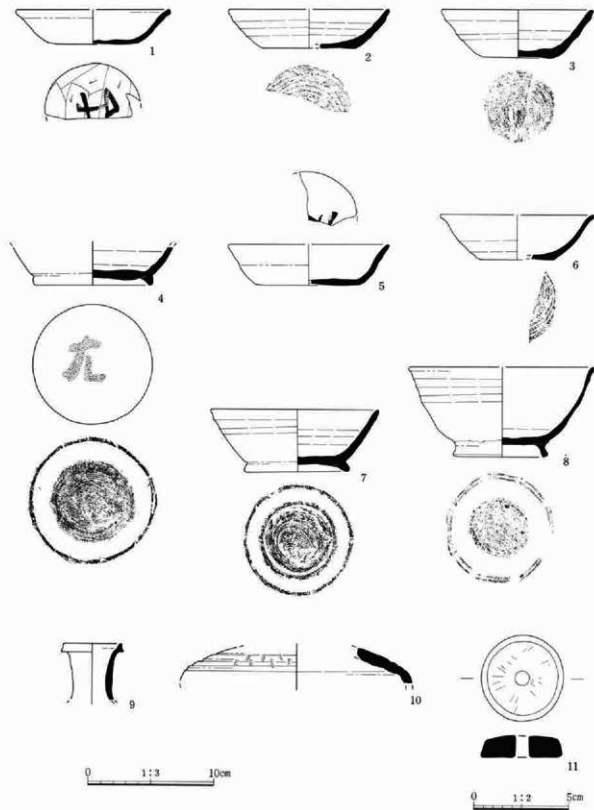
埋土の特徴 全体にローム粒、ロームブロックを含み、特に下層ではロームブロックが多量であることから、人為的な埋積の可能性が高い。

遺物 床面及び埋土の全体から出土しており、時期は10世紀代のものが主体。

重複遺構 III区28号住居跡と重複し、新旧関係は不明である。



第274図 III29号住居跡



第275圖 III29号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

III30号住居跡 (第276~278図 PL. 21・80)

位置 E・F-14

平面形 縦長長方形。

規模 東辺3.20m、西辺3.00m

北辺3.68m、南辺3.45m

面積 10.32㎡

方位 N-68°-E

壁 上半は崩落が激しく壁線が乱れる。西壁が最も遺存状況が良好で、高さは43cmを測る。

床面 大部分が地山のロームを床土としており、周縁部に比べて中央部が4cmほどくぼむ。

カマド 東壁の南寄りで検出。本体は竪穴外に構築される。燃焼部は平面楕円形を呈し、幅50cm、奥行き85cm、遺構確認面からの深さ35cmを測る。煙道部は確認できなかったが、燃焼部奥壁の高い位置から掘り込まれたと思われる。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 ローム粒を含むがロームブロックが見られないことから主に自然埋没と思われる。

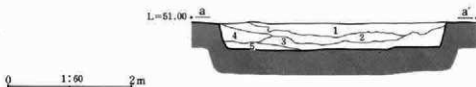
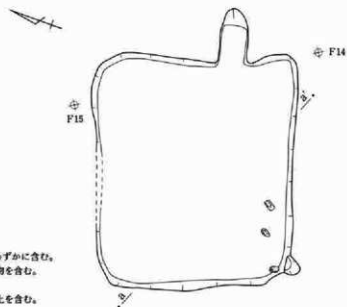
下層に炭化物を多く含むが、住居廃絶後の流れ込みだろう。

遺物 主に埋土から出土で、投棄あるいは流れ込みによるものと考えられる。時期は9世紀代後半のものが主体を占める。またカマド内の底面からはほぼ同じ作りの甕が3点出土している。

重複遺構 なし。

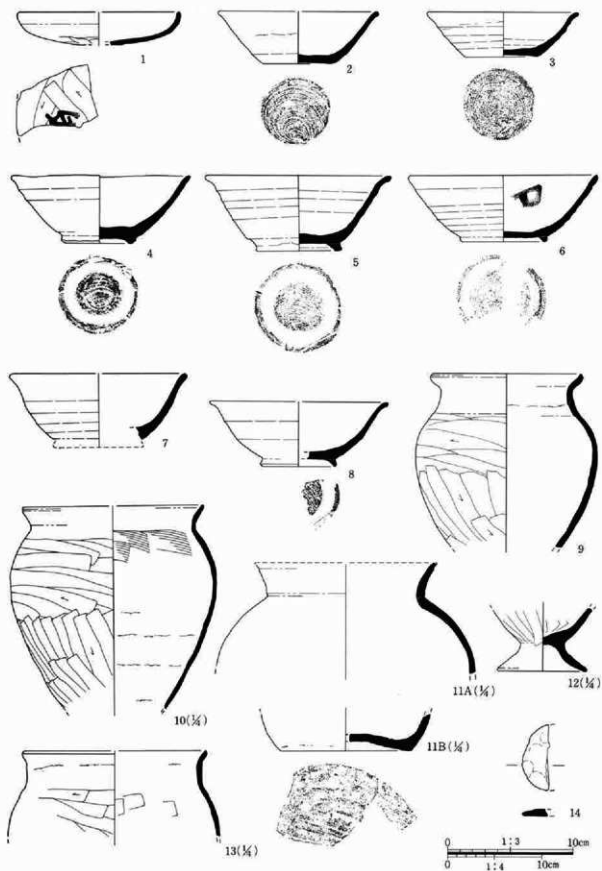
土層説明

- 1 褐色土 ローム粒とAs-Bをわずかに含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒、粘土、炭化物を含む。
- 3 黄褐色土 炭化物を多く含む。
- 4 褐色土 粘性を帯び炭化物と焼土を含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒が主。

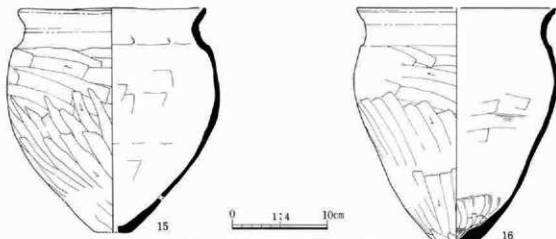


第276図 III30号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第277図 III30号住居跡出土遺物(1)



第278図 III30号住居跡出土遺物(2)

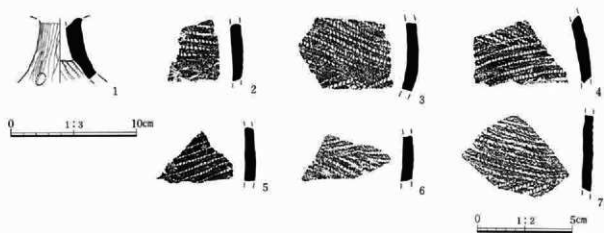
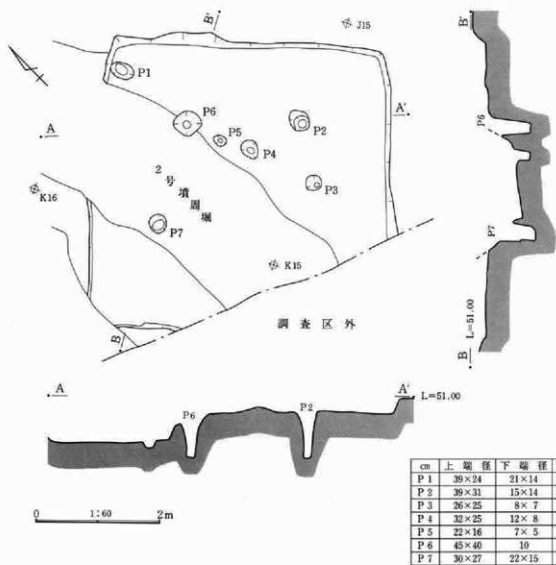
III31号住居跡 (第279図 PL. 22)

- 位置 I・J-14・15
 平面形 方形と思われる。
 規模 東辺4.25m、西辺(4.9)m
 北辺4.62m、南辺不明
 方位 N-48°-E
 壁 直線的だが小さな凹凸が多い。高さは22cmを測る。
 床面 ほぼ平坦。北側やや傾斜する。
 ビット 検出された7基のうちP2・P6・P7は位置と規模から主柱穴と考えられる。しかしこれらと対応する南西の位置ではビットは検出されなかった。なおP1・P4・P5は重複する2号古墳に伴う可能性がある。
 その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝などの付随施設は検出されなかった。なお西隅で焼土の分布が認められたが、火処とは考えられない。
 埋土の特徴 主に黒褐色土が堆積し、ロームもかなり含む。
 遺物 埋土から小土器片が出土しており、時期は古墳時代初頭が主で弥生式土器も見られる。また本住居跡に伴っていたものが重複する2号古墳周溝に流れ込んだ可能性も高い。
 重複遺構 2号古墳と重複し、いずれよりも古い。

III32号住居跡 (第280・281図)

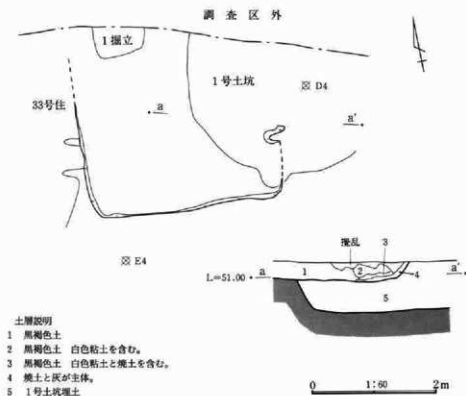
- 位置 D-3・4、E-4
 平面形 方形と思われるが、北半は遺構重複により不明瞭であった。
 規模 東辺・西辺・北辺不明、南辺2.90m
 方位 N-95°-E
 壁 南～西壁がわずかに遺存し、壁線はやや乱れる。高さは西側の最も遺存状況の良い部分で9cmを測るが、土層断面の所見から壁高は30cm以上であったことが推定される。
 床面 東半部は重複する1号土坑の埋土をそのまま床土として使用しており、小さな凹凸が見られる。
 カマド 東壁の南寄りの位置で右袖の一部が検出された。本体は白色粘土を利用して構築される。燃焼部の平面形、規模は不明であるが、底面は床面とほぼ同レベルで奥壁は急角度で立ち上がる。
 その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
 埋土の特徴 黒褐色土が主体で、カマド付近では焼土と粘土粒を多く含む。
 遺物 埋土から小土器片がわずかに出土しているが、時期を確定できるものはない。
 重複遺構 III区33号住居跡、1号掘立柱建物跡、1号土坑と重複しており、33号住居跡、1号土坑より新しい。

第1節 竪穴住居跡



第279図 III31号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第280図 III32号住居跡



第281図 III32号住居跡(上)と33号住居跡(下)

III33号住居跡 (第281・282図 PL. 80)

位置 D・E-4・5

平面形 やや胴張りの横長方形。

規模 東辺2.92m、西辺2.85m

北辺2.40m、南辺2.58m

面積 7.94㎡ 方位 N-104°-E

壁 ほぼ垂直だが、凹凸が多く、乱れている。

高さは西側で22cmを測る。

床面 周縁部に比べ、中央部がややくぼむ。

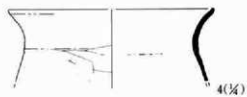
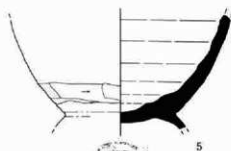
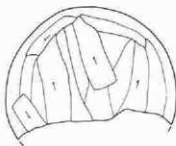
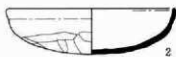
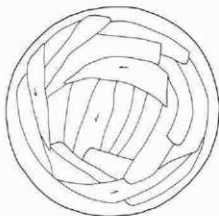
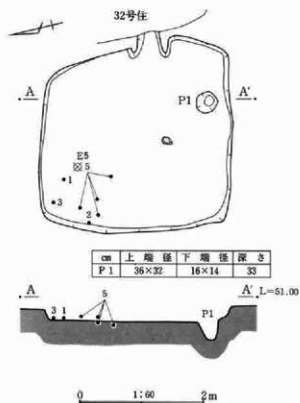
カマド 東壁のやや南寄りで燃焼部を検出。袖部は25cmほど壁穴内に張り出す。燃焼部は幅50cmで、焚口から煙道部方向へ底面が外傾する。

ピット 南壁際で1基検出されたが、柱穴とは考えにくい。

遺物 北西隅から多く出土しており、時期は8世紀代が主体。

重複遺構 III区32号住居跡より古いのが、1号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

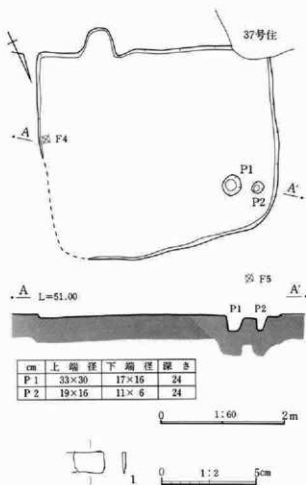
第1節 竪穴住居跡



第282図 III33号住居跡及び出土遺物

III34号住居跡 (第283図)

位置 E-4、F-3・4
 平面形 やや歪んだ横長方形。
 規模 東辺(3.3)m、西辺(3.0)m
 北辺(3.7)m、南辺(3.8)m
 方位 N-15°-W
 面積 (11.3)m²
 壁 大部分は失われており、北東部では確認できなかった。高さは残りの良い南西部で13cmを測る。
 床面 ほぼ平坦。
 カマド 南壁の東寄りで燃焼部底面を検出。本体は竪穴内に構築。平面は台形状で、幅55cm、奥行き40cmを測る。
 ビット 北西隅で2基が検出された。規模、形状は柱穴にふさわしいが、対応する他のビットは不明。
 埋土の特徴 ローム粒を多く含む暗褐色土が主体。
 遺物 埋土から30点程の小土器片と用途不明の鉄製品が出土。遺物の時期は確定できない。
 重複遺構 III区37号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第283図 III34号住居跡及び出土遺物

III35号住居跡 (第284図 PL. 21・81)

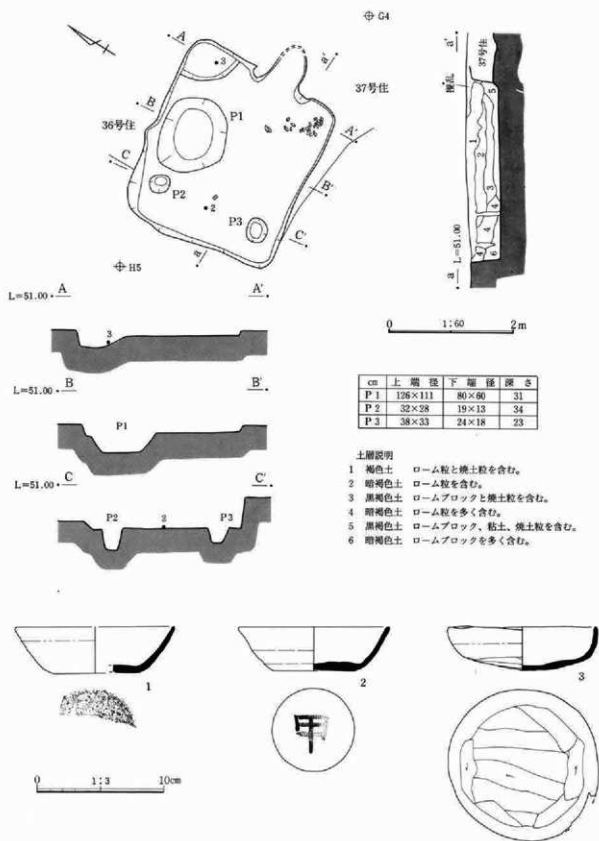
位置 G-4 平面形 ほぼ正方形。
 規模 東辺2.54m、西辺2.55m
 北辺2.90m、南辺2.70m
 面積 6.94m² 方位 N-83°-E
 壁 他の重複する住居跡と比べて遺存状況が良好で、高さは西側で50cmを測る。
 床面 中央部と東側がやや高く、周縁部へ傾斜。
 カマド 東壁のほぼ中央部で検出。袖部が比較的よく残っており、先端は竪穴内に15cmほど張り出す。本体の大部分は竪穴内に構築され、燃焼部はやや細長い楕円形で幅80cmを測る。燃焼部底面は焚口から煙道部方向に緩く傾斜して立ち上がる。煙道は遺構重複のため不明。
 ビット 3基が検出され、P2とP3は南西と北西の

隅部の対称位置にあることから柱穴の可能性が高い。P1はその規模から住居使用時に開口していたとは考えられず、掘り方掘削時のビット、床下貯蔵穴、時期の異なる土坑などの可能性が考えられる。

その他 北東隅で70×60cm、深さ9cm程の浅い皿状の掘り込みがあり、完形の杯が出土。

埋土の特徴 黒褐色土と暗褐色土が堆積し、上層はローム粒、下層はロームブロックを多く含む。特に床面から20cm程の高さまでは、人為的な埋土の可能性が高い。

遺物 西側床面から完形の杯、その他に埋土から600点に及ぶ土器片が出土。9世紀前半か。重複遺構 III区36号・37号住居跡と重複し、いずれよりも新しいと思われる。



第284図 III35号住居跡及び出土遺物

III36号住居跡 (第285図 PL. 21・22・81)

位置 F・G-4・5

平面形 横長方形。

規模 東辺・西辺・南辺不明、北辺2.50m

方位 N-98°-E

壁 ほぼ垂直に掘り込まれ、西の壁線はやや歪む。南壁は遺構重複により不明。高さは最も残りの良い北壁で42cmを測る。

床面 中央部分がやや高く、周縁部に比べて約5cmの比高差がある。

カマド 東壁のほぼ中央部分で袖部を検出。先端部には補強材として10cm大の礫が置かれていた。本体の大部分は壁外に構築されたと思

われるが、遺構重複のため規模や形状については不明。

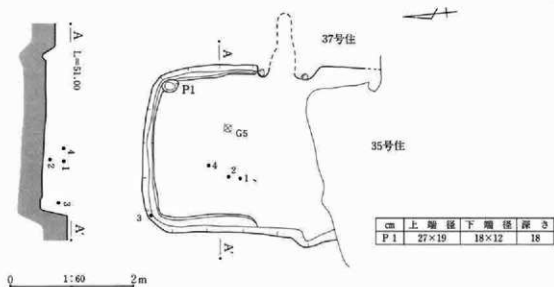
ピット 北東部で1基が検出されたが、性格は不明。

周溝 北半部の壁に沿って巡り、幅20~15cm、深さ1~5cmを測る。底面は凹凸が目立つ。

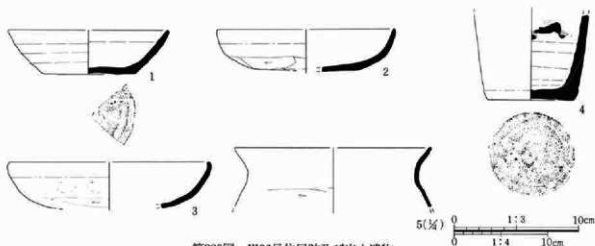
埋土の特徴 暗褐色土が主体で、堆積はほぼ上下で二分され、下層には小ロームブロックを多く含む。この堆積状況から住居廃絶時に人為的に埋められた可能性がある。

遺物 大部分は埋土上層から出土しており、住居廃絶時に伴う遺物は少ない。

重複遺構 III区35号・37号住居跡と重複し、35号住居跡より古く、37号住居跡より新しい。



cm	上端径	下端径	深さ
P 1	27×19	18×12	18



第285図 III36号住居跡及び出土遺物

III37号住居跡 (第286・287図 PL. 21・81)

位置 F・G-3・4

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 東辺・西辺・南辺不明、北辺4.22m

方位 N-98°-E

壁 東壁以外は遺構重複により不明確。高さは37cmを測る。

床面 全体に南側が低い。

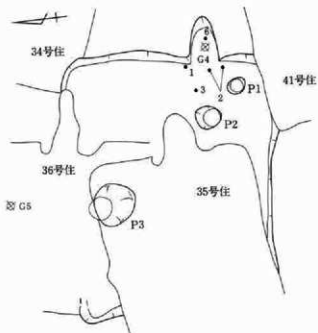
カマド 東壁南寄りで見出。袖部に煙を伏せて補強としている。燃焼部は楕円形を呈し、幅45cm、奥行き70cmを測る。焚口から燃焼部奥壁まで緩く外傾して立ち上がる。

ピット 3基が検出されたが、性格は不明。そのうちP3は35号住居跡、36号住居跡のいずれにも属する可能性がある。

埋土の特徴 暗褐色土を主体とし、焼土をはじめ粘土やロームブロックが多くみられることから、カマドの崩壊土をかなり含んでいると考えられる。

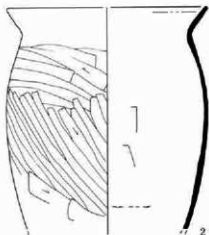
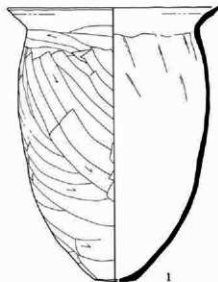
遺物 カマドの内外から完形あるいは大形破片が出土しており、時期は8世紀代が主体。

重複遺構 III区34号・35号・36号・41号住居跡と重複し、35号住居跡と36号住居跡より古い、他との新旧関係は不明である。



cm	上層径	下層径	深さ
P 1	31×25	21	61
P 2	42×37	30	61
P 3	68	37	(90)

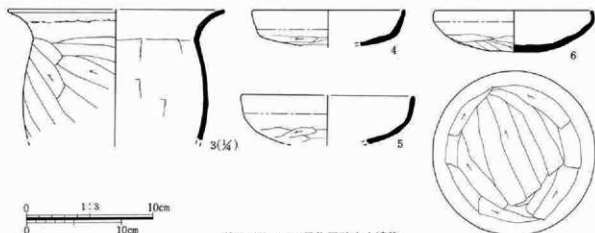
0 1:60 2m



0 1:4 10cm

第286図 III37号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第287図 III37号住居跡出土遺物

III38号住居跡 (第288・289図 PL. 22・81)

位置 D-14

平面形 方形と思われる。

規模 東辺・南辺・北辺不明、西辺3.40m

方位 N-62°-E

壁 壁線はやや乱れるが、掘り込みはほぼ垂直。
高さは土層断面の所見から35cm以上と推定される。

床面 南側はやや高く平坦だが、他は凹凸が激しい。一部貼り床の可能性もある。

ビット 5基検出されたが、柱穴と推定されるもの

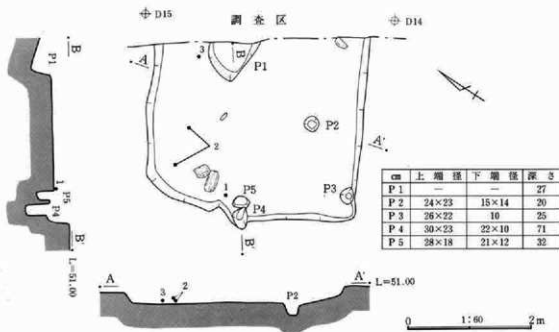
はない。なおP1は埋土の特徴から床下土坑と考えられる。

その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝などの付随施設は検出されなかった。

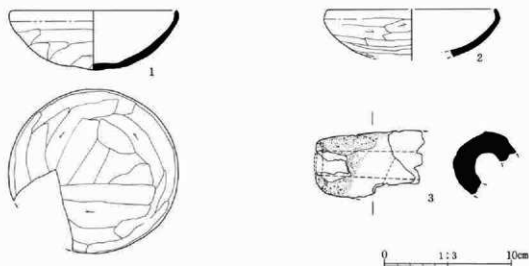
埋土の特徴 遺構確認面までは現在の耕作土層が堆積し、床面付近まで攪乱が及ぶ。埋土の主体は暗褐色土で、ローム粒を含む。

遺物 埋土下層から多く出土しており、土器片に加えて羽口、台石とも見られる長さ30cmと40cmの鎌が出土。時期は8世紀代が主体。

重複遺構 なし。



第288図 III38号住居跡



第289図 III38号住居跡出土遺物

III39号住居跡 (第290・291図 PL. 81)

位置 G・H-3・4

平面形 北辺がやや長い長方形。

規模 東辺3.48m、西辺3.86m

北辺4.27m、南辺4.00m

面積 15.37㎡

方位 N-79°-E

壁 北～西壁が遺存し、高さは35cmを測る。壁線は直線的で乱れはない。

床面 地山のロームをそのまま床土としており、ほぼ平坦。東半は遺構重複のため不明。

カマド 検出されなかったが、重複する41号住居跡によって切られた東壁に構築された可能性がある。

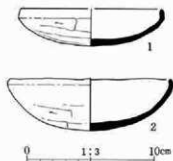
ピット 6基が検出され、P1～P4はその配置から主柱穴と思われる。北壁際東寄りにあるP6は床下から検出されたもので、本住居跡の掘り方に伴うものか、時期の異なる別遺構の可能性はある。

周溝 壁に沿って全周する。規模は、幅10～28cm、深さ2～9cmで、底面は比較的平坦。

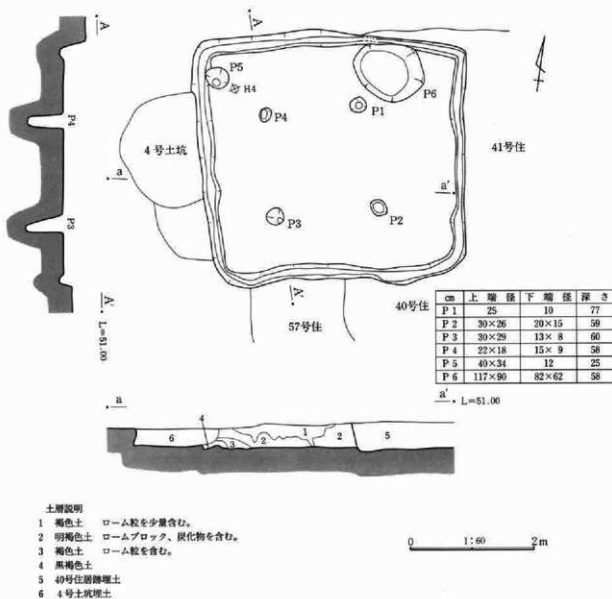
埋土の特徴 下層は多量のロームブロック、炭化物黒色土ブロックを含み、人為的な埋土の可能性が高い。

遺物 埋土からの出土が主で、時期は古墳時代末～8世紀前半と思われる。

重複遺構 III区40号・41号・57号住居跡、4号土坑と重複しており、いずれよりも古い。



第290図 III39号住居跡検出状況と出土遺物



土層説明

- 1 褐色土 ローム粒を少量含む。
- 2 明褐色土 ロームブロック、炭化物を含む。
- 3 褐色土 ローム粒を含む。
- 4 黒褐色土
- 5 40号住居跡埋土
- 6 4号土坑埋土

第291図 III39号住居跡

III40号住居跡 (第292・293図 PL. 22・81)

位置 G-2・3

平面形 正方形と思われる。

規模 南北軸 (3.0) m、南辺3.20m

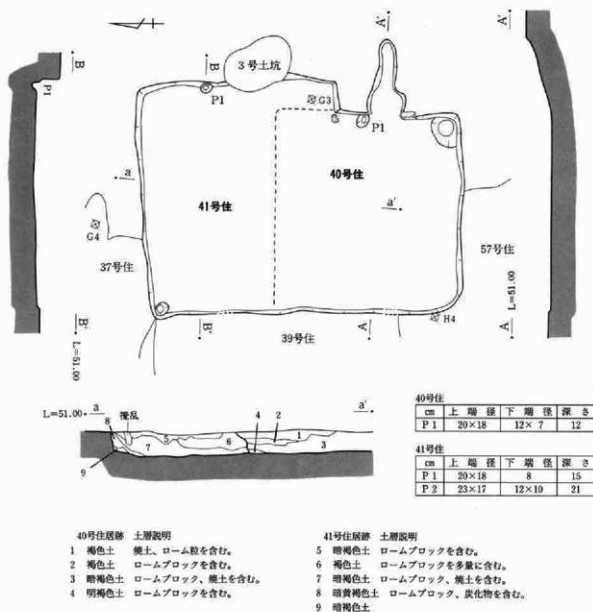
方位 N-85°-E

壁 ほぼ垂直で直線的。西は重複する41号住居跡の壁線とほぼ一致しており、不明確。北壁は土層断面の所見から図の破線部分に推定さ

れる。高さは東側で32cmを測る。

床面 南側中央部がややくぼむ。重複する41号住居跡とレベルがほぼ同じで識別が不可能。

カマド 東壁のやや南寄りで見出。本体は壁外を掘り込んで構築される。袖部は壁をそのまま用いたらしく、左袖部には補強材を据置したと思われるP1、右袖部には長さ20cm強の直方体の補強材が埋置されている。燃焼部は平面



40号住居跡 土層説明

- 1 褐色土 焼土、ローム粒を含む。
- 2 褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む。
- 4 明褐色土 ロームブロックを含む。

41号住居跡 土層説明

- 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 6 褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック、焼土を含む。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック、炭化物を含む。
- 9 暗褐色土

0 1:60 2m

第292図 III40号・41号住居跡

が楕円形で底面は浅い皿状にくぼむ。規模は幅55cm、奥行き45cmを測る。煙道部は燃焼部から次第に立ち上がり、長さ70cmを測る。

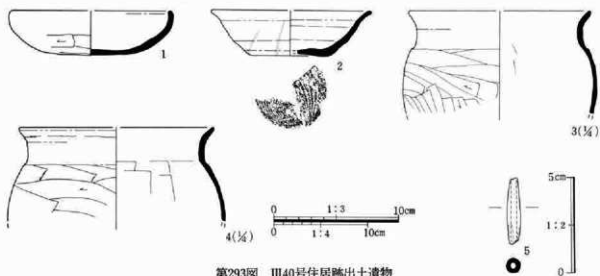
貯蔵穴 南東隅で検出。平面楕円形で上端径57×38cm、下端径26cm、深さ53cmを測る。

埋土の特徴 全体にロームブロックが目立つ。人為的埋土の可能性が高い。

遺物 カマド内から10世紀代の杯と甕が出土しており、他に埋土からは古墳時代初頭の土器片や土鋸が見られる。

重複遺構 III区39号・41号・57号住居跡と重複しており、いずれれよりも新しい。

第III章 検出された遺構と遺物



第293図 III40号住居跡出土遺物

III41号住居跡 (第294図 PL. 22・81)

位置 F-3、G-2・3

平面形 縦長方形と思われる。

規模 東辺3.10m、北辺3.62m、南辺・西辺不明。

方位 N-85°-E

壁 東壁と北壁の一部が遺存し、高さは北壁の残りの良いところで33cmを測る。西壁は遺構重複の部分で、更に40号住居跡の壁線と連続するため不明確。

床面 ほほ平坦。40号住居跡の床面と判別が不可能である。

ピット 東壁際と北西隅で2基を検出したが、柱穴とは考えにくく性格は不明。なおP2は重複す

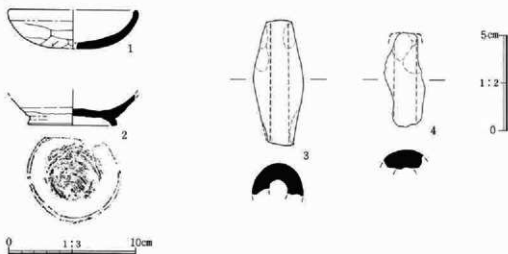
る39号住居跡に伴う可能性もある。

その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝などの付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 全体にロームブロックを多く含み、人為的埋土の可能性がある。

遺物 大部分が埋土から出土しており、時期は8世紀代が主体。また床下からは土鍾が出土している。

重複遺構 III区37号・39号・40号住居跡、3号土坑が重複しており、39号住居跡より新しく、40号住居跡よりは古い。他との新旧関係は不明である。



第294図 III41号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

III42号住居跡 (第295図 PL. 20・24)

位置 D-12

平面形 壁のわずかな痕跡から方形と推定される。

規模・方位 不明。

壁 西壁の一部が遺存し、高さは8cmを測る。

他はわずかに段差が確認できたのみである。

床面 北西部と南半でわずかに検出され、小さな凹凸が見られる。

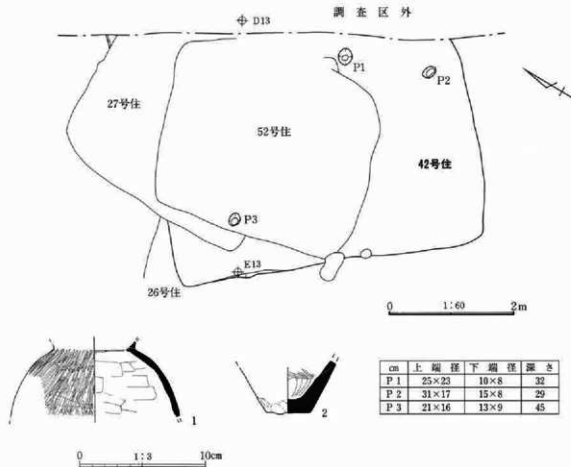
ビット 本住居跡に伴う可能性のあるものとして3

基が検出されたが、そのうちP1とP3の位置は推定される住居プランの対角線上にのるため、柱穴の可能性はある。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 明らかに本住居跡に伴うのは土器片2点で、いずれも古墳時代初頭に位置付けられる。

重複遺構 III区26号・27号・52号住居跡と重複しており、26号住居跡より古い。他との新旧関係は不明である。



第295図 III42号住居跡及び出土遺物

III43号住居跡 (第296・297図 PL. 22・23・81)

位置 J・K-3・4

平面形 横長方形。

規模 東辺3.66m、西辺3.72m

北辺2.80m、南辺2.95m

面積 10.20㎡

方位 N-59°-E

壁 ほぼ垂直で乱れは少ない。北東部が最も残存状況が良好で高さは45cmを測る。

床面 中央部がやや高く凹凸は少ない。

第三章 検出された遺構と遺物

カマド 東壁の南寄りで検出。燃焼部は主に堅穴内に白色粘土で構築される。規模は幅60cm、奥行き55cmを測る。煙道部は燃焼部奥壁から30cmほど高い位置から掘り込まれ、緩い傾斜で堅穴外へ延びる。

ピット P1は住居跡中央に位置しており、埋土の状況から本住居跡発給後に掘削された可能性がある。P2は性格不明。

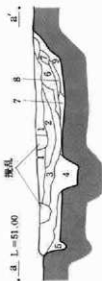
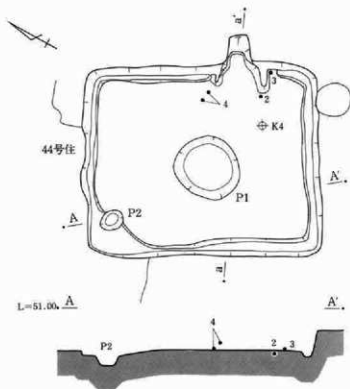
周溝 ほぼ全周しており幅15~30cm、深さ3~7

cmを測る。底面は地山のロームで小さな凹凸が見られる。

埋土の特徴 下層は全体にロームブロックを多く含んでおり、人為的埋土の可能性が高い。

遺物 カマドの周辺から杯、甕が出土しており、時期は古墳時代末~8世紀代が主体。

重複遺構 III区44号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



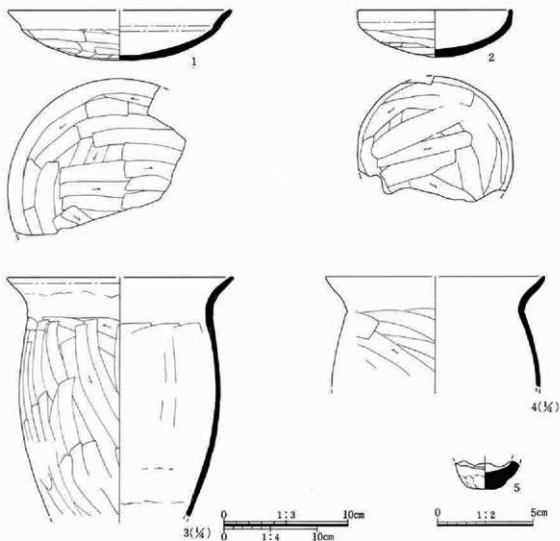
cm	上層 幅	下層 幅	深さ
P1	106×96	80×72	44
P2	38×31	24×16	15

0 1:60 2m

土層説明

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 | 5 黒色土 白色粘土を含む。 |
| 2 黒褐色土 ローム粒を含む。 | 7 白色粘土が主 |
| 3 黒褐色土 ロームブロックを含む。 | 8 黒褐色土とロームの混合土。 |
| 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。 | 9 雑土を主とし、灰、白色粘土、黒色土粒を含む。 |
| 5 黄褐色土 ロームブロックが主。 | |

第296図 III43号住居跡



第297図 III43号住居跡出土遺物

III44号住居跡 (第298・299図 PL. 22・23・81・82)

位置 J・K-4・5

平面形 やや歪んだ正方形と思われる。

規模 東辺・南辺不明、西辺 (4.6) m

北辺 (4.6) m

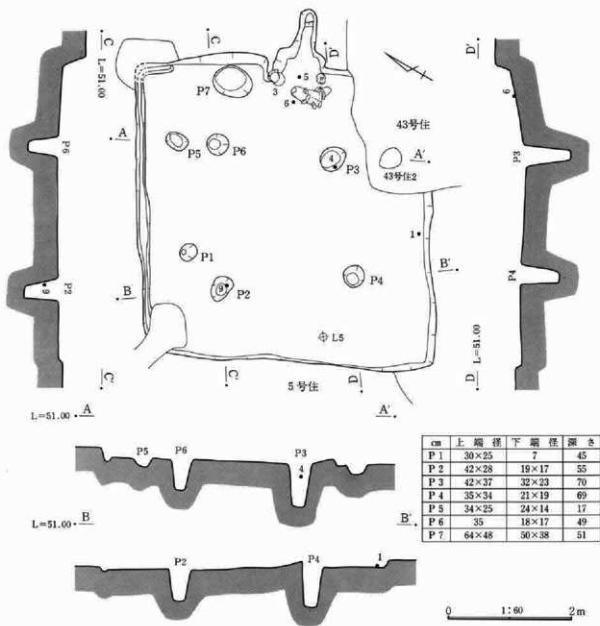
方位 N-65°-E

壁 削平と遺構重複により遺存する部分は少ない。壁線は凹凸が多く乱れる。高さは最も遺存状況の良い東側で31cmを測る。

床面 周縁部幅1mほどは貼り床で、中央部は地山のルームをそのまま床土としている。カマドの前面部は後世の掘り込みがあり不明。

カマド 東壁の中央部で検出。本体は竪穴内に構築され、煙道部が壁外に延びる。袖部は30cmほど張り出し、その先端部に壁を正立させて補強材としている。なお焚口天井部に「入れ子」にして架構材に用いたと思われる壁2個体が崩れた状態で出土している。燃焼部は平面方形で底面は平坦、規模は幅60cm、奥行き35cmを測る。煙道部は燃焼部奥壁のやや高い位置から掘り込まれ、35cmほど延びる。

ピット 7基検出されたうち、P2~P4・P6は主柱穴と考えられる。P7は貯蔵穴か。またP1とP5は北壁に沿って配置され、規模も他と遜色



第298図 III44号住居跡

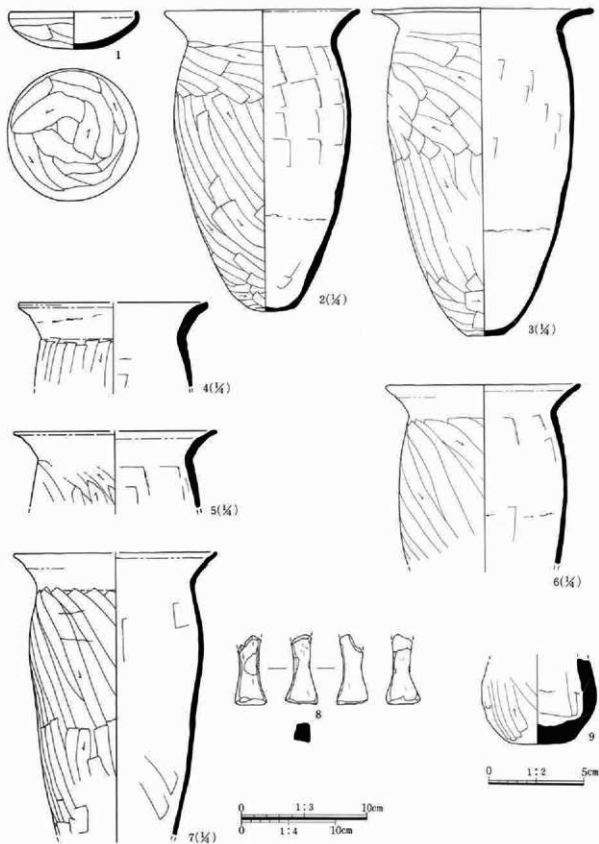
ないことから、これもP3とP4に対応する柱穴の可能性もある。なお重複する43号住居跡西端のピットは本住居跡に伴う可能性もある。

周溝 北壁に沿って検出され、幅10~20cm、深さ3~6cmを測る。

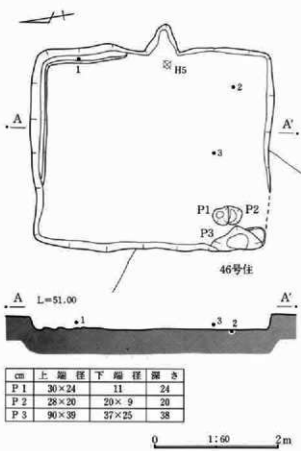
埋土の特徴 ローム粒を含む褐色土が主体で、人為的な埋没状況はみられない。

遺物 カマド契口付近から集中して古墳時代末~8世紀代初頭のものが主体的に出土している。

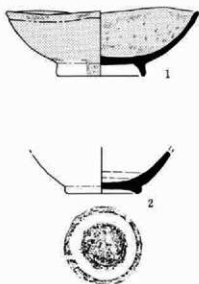
重複遺構 III区5号住居跡・43号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第299圖 III44号住居跡出土遺物



第300図 III45号住居跡



第301図 III45号住居跡出土遺物

III45号住居跡 (第300・301図 PL. 23・82)

位置 H・I-6

平面形 横長方形。

規模 東辺3.72m、西辺3.64m

北辺2.95m、南辺(3.0)m

面積 10.61㎡

方位 N-85°-E

壁 北側が比較的良好に遺存し、やや外傾する。高さは北西部で27cmを測る。

床面 南半で壁際に沿って貼り床が施される。中央部は地山のロームを床土とする。中央部がやや高く、周縁部へ傾斜する。

カマド 東壁の中央部で燃焼部が検出された。火床面は床面よりやや高く、浅い皿状にくぼむ。規模は幅50cm、奥行き40cmを測る。

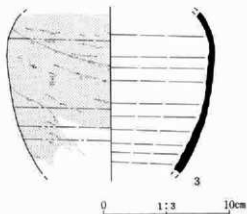
ピット 南東隅で3基が検出され、P1とP2は同じ性格をもつと考えたい。柱穴と推定されるものは検出されなかった。

周溝 北壁から東壁にかけてのコーナー部分で検出。幅10cm前後で、深さは2~3cmを測る。底面は凹凸が多い。

埋土の特徴 暗褐色土が堆積し、焼土を含む。北側の下層ではロームブロックを含んでいる。

遺物 古墳時代~10世紀代の土器片が埋土から出土しており、質、量ともに10世紀代が主体。

重複遺構 III区46号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第1節 竪穴住居跡

III46号住居跡 (第302図 PL. 82)

位置 H・I-4・5

平面形 北西半が検出されなかったが、方形と思われる。

規模 主軸長(5.5)m

方位 N-41°-E

壁 削平と遺構重複により遺存状況不良で、高さは13cmを測る。

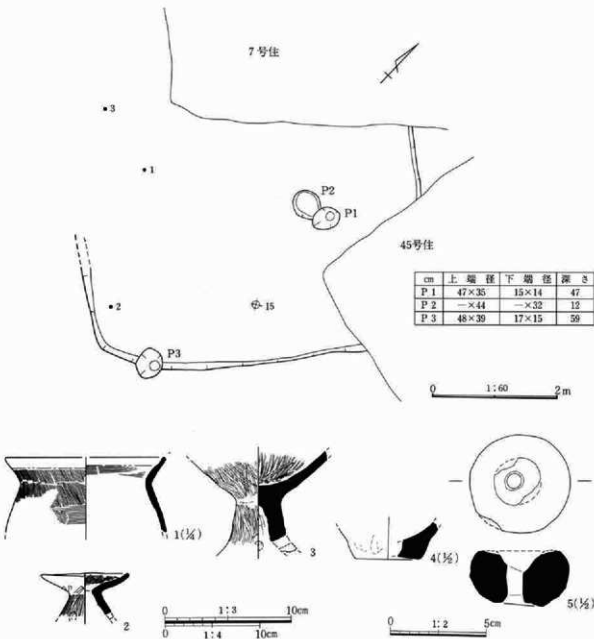
床面 北東から南西側へ傾斜する。

ピット 検出された3基のうちP1は柱穴の可能性はあるが、他の性格は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

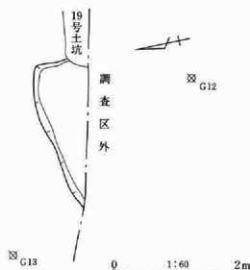
遺物 南西半の埋土下層から出土しており、時期は古墳時代初頭が主体。

重複遺構 III区7号・45号住居跡と重複するが、旧関係は不明である。

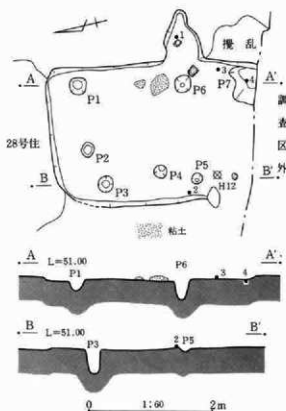


第302図 III46号住居跡及び出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



第303図 III47号住居跡



第304図 III48号住居跡

cm	上端径	下端径	深さ
P1	27×26	16×14	17
P2	22×19	17×11	11
P3	25	13×10	38
P4	20×19	11×10	10
P5	17×16	7×4	11
P6	26×25	7	33
P7	65×-	35×-	-

III47号住居跡 (第303図)

位置 F-10

平面形・規模・方位 一部検出のため不明。

壁 北東部が遺存し、高さは38cmを測る。

床面 検出された部分については中央部がややくぼむ。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から甕、杯など70点ほどが出土しており、時期は特に限定できない。

重複遺構 III区19号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

III48号住居跡 (第304・305図 PL. 23・82)

位置 G-11・12 平面形 横長長方形。

規模 東辺・西辺・北辺不明、南辺2.30m

方位 N-99°-E

壁 東壁が比較的良好に遺存し、高さは17cmを測る。壁面は凹凸が多く乱れている。

床面 全体に凹凸が目立ち、中央がくぼむ。

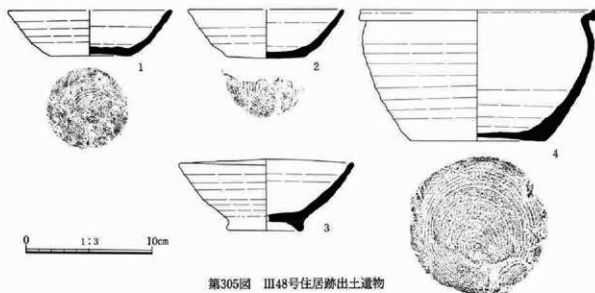
カマド 東壁の南寄りで燃焼部を検出。平面は楕円形で、竪穴外を掘り込んで構築される。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は幅65cm、奥行き78cmを測る。燃焼部中央部では支脚と思われる長さ16cmの礎が検出された。

ピット 7基が検出された。P1・P3・P5・P6は配置から支柱穴を構成すると思われるが、P6はカマドの焚口前面にある点が疑問である。P7は南東隅にあり規模も他と比べて大きいことから貯蔵穴の可能性が高い。

埋土の特徴 下層にはローム粒やロームブロックを多く含み、上層はAs-Bの混入する黒褐色土が堆積する。なおカマド前面左から厚さ10cm前後の粘土塊が検出された。カマド構築材の崩落したものか。

遺物 カマド周辺から貯蔵穴にかけて出土しており、時期は10世紀代が主体。

重複遺構 III区28号住居跡と重複しており、28号住居跡よりは新しい。



第305図 III48号住居跡出土遺物

III49号住居跡 (第306・307図 PL. 24・82)

位置 H-12

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 攪乱により大部分は不明瞭。高さは北側で14cmを測る。

床面 ロームをそのまま床としており、部分的に攪乱が入り、凹凸が目立つ。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 下層には白色粘土を多く含む灰褐色土が堆積するが、大部分は攪乱で不明瞭。

遺物 壁際から杯と紡錘車が出土しており、時期は10世紀後半と思われる。

重複遺構 III区50号住居跡よりも古い。



第306図 III49号・50号住居跡

III50号住居跡 (第306図 PL. 24)

位置 H・I-13

平面形 方形と思われる。

規模 東辺3.03m、西辺・北辺・南辺不明。

方位 N-89°-E

壁 攪乱が激しく遺存状況不良で乱れており、高さは9~11cmを測る。

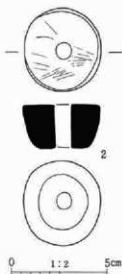
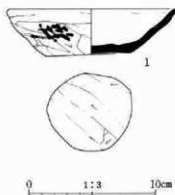
床面 ロームを床とし、凹凸が激しい。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

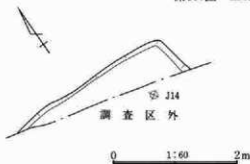
埋土の特徴 ロームを含む黒褐色土が堆積。

遺物 埋土から30点ほどの土器片が出土しており、時期を確定できるものはない。

重複遺構 III区49号住居跡より新しい。



第307図 III49号住居跡出土遺物



第308図 III51号住居跡



cm	上端径	下端径	深さ
P 1	92×50	66×26	72
P 2	130×56	112×90	22

第309図 III52号住居跡

III51号住居跡 (第308図)

位置 J-14

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 北壁東半が遺存し、高さは21cmを測る。

床面 凹凸が著しい。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土からわずかに10点ほど出土しているが、時期不明のものが多い。

重複遺構 なし。

III52号住居跡 (第309・310図 PL. 24)

位置 D-12・13

平面形 横長方形と思われる。

規模 東辺3.45m、西辺2.90m

北辺2.85m、南辺2.90m

方位 不明。

壁 遺構重複が激しいため確認された部分が少なく、不明瞭。比較的残りの良い南側で高さ20cmを測る。

床面 中央部がやや高く平坦。

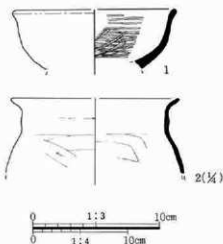
ピット 北側で2基のピットが検出され、P1は北東隅にあって長方形を呈し、70cmと深いことから貯蔵穴の可能性がある。P2は不整形で底

第1節 竪穴住居跡

面は一定しておらず、床下土坑と考えられる。また南側の壁に沿って幅70cm、深さ20cmの凹みが発出されたが、その形状から掘り方と考えたい。

その他 カマド、柱穴、周溝は検出されなかった。
遺物 南側の埋土より土器片が集中して出土するが、重複する42号・27号住居跡に伴う遺物との判別はできない。

重複遺構 III区26号・27号・42号住居跡と重複しており、26号住居跡より古い、他との新旧関係は不明である。



第310図 III52号住居跡出土遺物

III53号住居跡 (第311・312図 PL. 24・82)

位置 C・D-2・3

平面形 隅丸横長方形。

規模 東辺3.67m、西辺3.53m、南辺2.07m

方位 N-97°-E

壁 全体に外傾しており壁線もかなり歪む。高さは遺存状況の良い南側で29cmを測る。

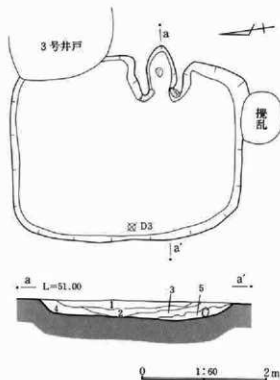
床面 大部分が地山のロームを床としている。全体に平坦で南側に傾斜する。

カマド 東壁南寄りで見出。本体は竪穴内に構築され、袖部は70cm張り出す。袖部先端には30cm大の礎を埋め込んで補強材としている。燃焼部は細長い楕円形を呈し、幅45cm、奥行き90cmを測る。なお燃焼部中央には支脚と考えられる礎が正立位で見出された。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。
埋土の特徴 全体にロームブロックを含むことから人為的な埋土の可能性はある。

遺物 南東隅のカマド右側の床面から土器片、紡錘車が出土しており、時期は10世紀代が主体である。

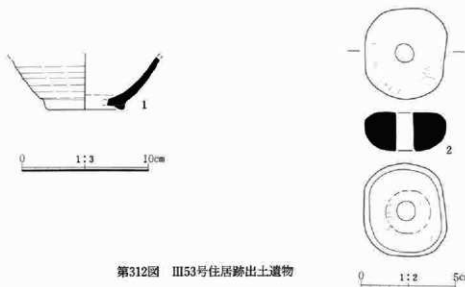
重複遺構 III区3号井戸と重複するが、新旧関係は不明である。



土層説明

- 1 褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒と炭化物を含む。
- 3 褐色土 ロームと粘土ブロックを含む。
- 4 明褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 焼土と炭化物が主。

第311図 III53号住居跡



第312図 III53号住居跡出土遺物

III54号住居跡 (第313・314図 PL. 24・82)

位置 E・F-1・2

平面形 やや歪んだ横長方形。

規模 東辺4.19m、西辺4.32m

北辺3.62m、南辺3.56m

面積 15.40㎡

方位 N-93°-E

壁 全体的に遺存状況は良好で、北壁以外は壁線がやや乱れており、外傾する。高さは西壁で34cmを測る。

床面 地山のロームをそのまま床土としており、カマド手前部分は周辺部より5cmほど高く平坦である。

カマド 東壁南寄りで燃焼部のみ検出された。袖部

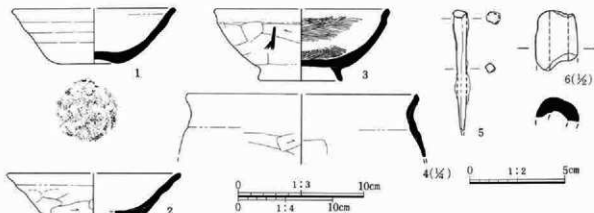
は竪穴の壁をそのまま利用し、左側には高さ20cmの隙を立てて補強材としている。燃焼部の規模は幅70cm、奥行き60cmを測る。底面は焚口から煙道部方向にかけて次第に強く立ち上がる。

周溝 カマドのある南東部を除いた壁に沿って検出された。幅は5~30cm、深さ3~7cmを測る。底面は部分的に浅いピット状に凹む。

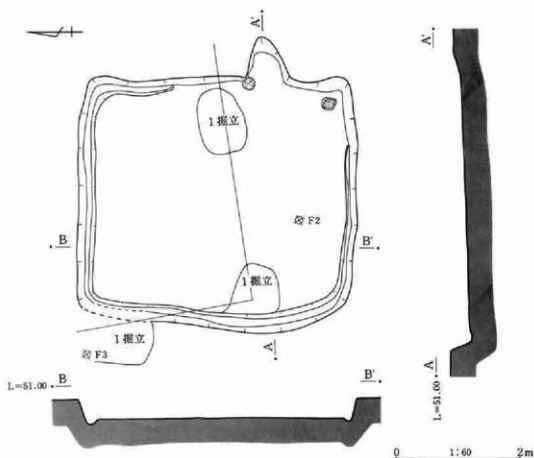
埋土の特徴 全体にロームブロックが多く、下層では炭化物や焼土が主に堆積する。

遺物 主に埋土から土器片、土鏝、鉄器、鉄釘が出土しており、時期は10世紀後半以降が多い。

重複遺構 1号孤立柱建物跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。



第313図 III54号住居跡出土遺物



第314図 III54号住居跡

III55号住居跡 (第315図 PL. 24・82)

位置 K-2・3

平面形 縦長長方形。

規模 東辺3.48m、西辺3.21m
北辺4.05m、南辺4.00m

面積 13.34㎡

方位 N-69°-E

壁 ほぼ垂直で壁線も乱れはなく直線的。高さは東壁で48cmを測る。

床面 北半部に地山のロームをそのまま利用した平坦な床が検出された。その他の部分はこれより5~9cmほど低い凹みになっている。この部分は別遺構の可能性がある。

カマド 東壁の南寄りで検出。袖部は25cmほど竪穴内に張り出す。燃焼部は三角形の平面形で、軸は住居跡主軸よりやや南に振れる。規模は

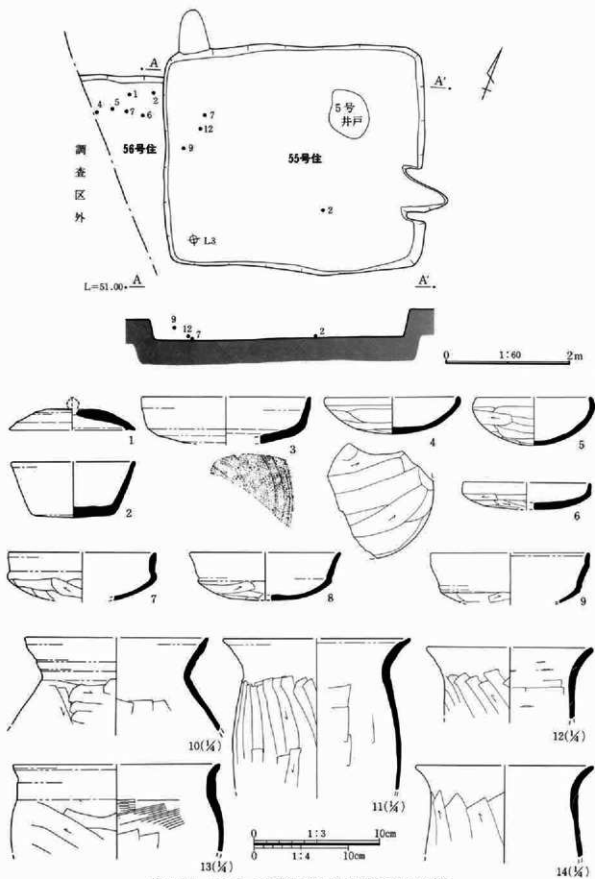
幅、奥行き共に60cmを測る。奥壁から煙道部へは強い角度で傾斜する。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 全体にロームブロックと炭化物を含む褐色土が堆積しており、人為的埋土の可能性が高い。南半部は別の埋土が入り込んでおり、この部分と凹みとが対応することから本住居跡を切る別遺構の存在が考えられる。

遺物 南西半から古墳時代後半と8世紀代の土器片が混在して集中的に出土しているが、この部分は既述したように別の遺構と関連する可能性が高く、本住居跡伴出遺物は判別できない。また西側で重複する56号住居跡からの遺物流入も十分に考えられる。

重複遺構 II区14号・III区56号住居跡と重複し、56号住居跡より新しく、5号井戸より古い。



第315図 III55号・56号住居跡及び55号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡

Ⅲ56号住居跡 (第315・316図 PL. 82・83)

位置 L-3

平面形・規模・方位 不明。

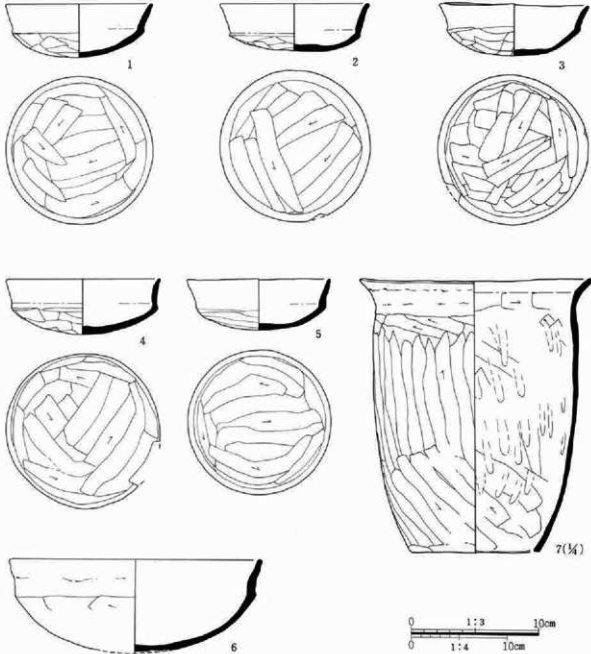
壁 北壁のみ遺存し、高さは14cmを測る。

床面 検出された部分ではほぼ平坦で、レベルは重複する55号住居跡よりも40cmほど高い。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

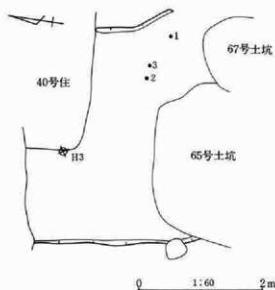
遺物 床面と埋土下層から完形と大形破片が多く出土しており、時期は古墳時代後半で占められる。

重複遺構 Ⅲ区55号住居跡よりも古い。



第316図 Ⅲ56号住居跡出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物



第317図 III57号住居跡

III57号住居跡 (第317・318図)

位置 G・H-2・3

平面形 方形と思われる。

規模 主軸長 (3.6) m

方位 不明。

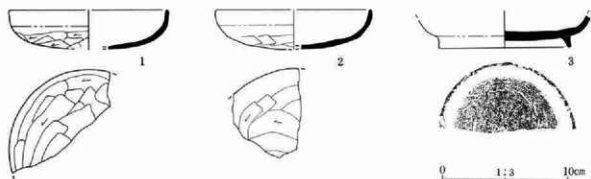
壁 東西壁の一部が遺存し、高さは20cmを測る。

床面 レベル差が激しく、特に中央部はくぼむ。

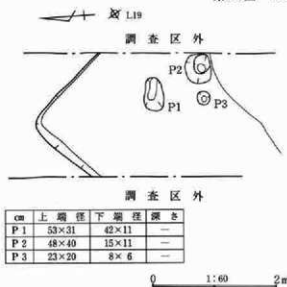
その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 東壁付近から杯、碗の破片が出土しており、
時期は8世紀代が主体。

重複遺構 III区39号・40号住居跡、65号・67号土坑
と重複し、39号住居跡より新しく、40号住居
跡より古い。他との新旧関係は不明である。



第318図 III57号住居跡出土遺物



第319図 III58号住居跡

III58号住居跡 (第319図)

位置 L-19

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 北隅部が遺存し、ほぼ垂直の掘り込みで、
壁線も直線的である。

床面 不明。

ピット 3基が検出されており、いずれも主柱穴と
なる可能性がある。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 なし。

重複遺構 2号古墳と重複するが新旧関係は不明。

III59号住居跡 (欠番)

III60号住居跡 (第320・321図 PL. 83)

位置 H・I-17・18

平面形 方形。

規模 東辺6.72m、西辺・北辺・南辺不明。

方位 N-56°-E

壁 やや外傾し上半は崩落により乱れる。高さは北側で21cmを測る。

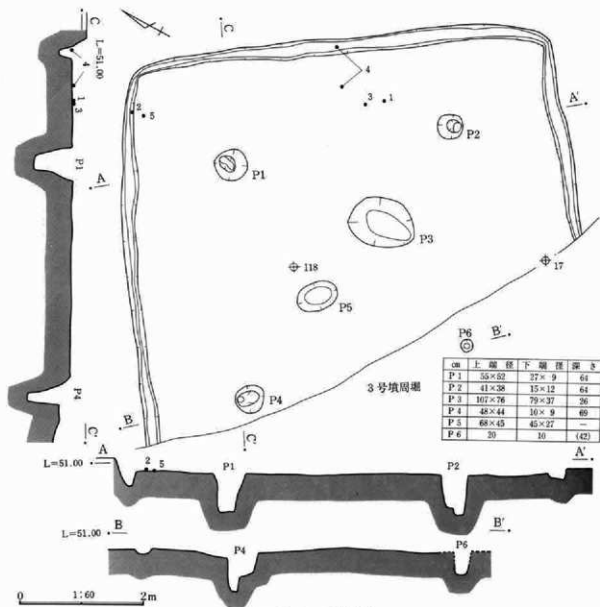
床面 中央部は周縁部に比べて5cmほどくぼむ。

ピット 本住居跡に伴うものとして6基が検出されたが、そのうちP1・P2・P4・P6は主柱穴と考えられる。中央部のP3とP5は深い皿状の断面形を呈しており、焼土は確認できなかったが、炉穴の可能性もある。

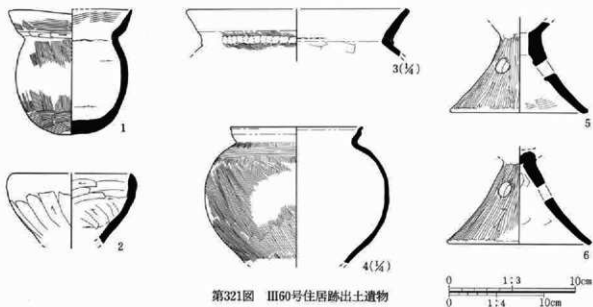
周溝 壁に沿って全周しており、幅10~30cm、深さ10~17cmを測る。

遺物 東壁際に偏って出土しており、時期は古墳時代初頭のものが多い。

重複遺構 3号古墳の周溝と重複しており、本住居跡のほうが古い。



第320図 III60号住居跡



第321図 III60号住居跡出土遺物

III61号住居跡 (第322~324図 PL. 83)

位置 F-19・20

平面形 隅丸正方形。

規模 東辺2.78m、西辺2.90m

北辺3.08m、南辺3.00m

面積 8.63m²

方位 N-47°E

壁 ほぼ垂直に掘り込まれ、壁線はやや歪む。

高さは平均的に33cm前後を測る。

床面 北西が高く比高差9cmで南東へ傾斜する。

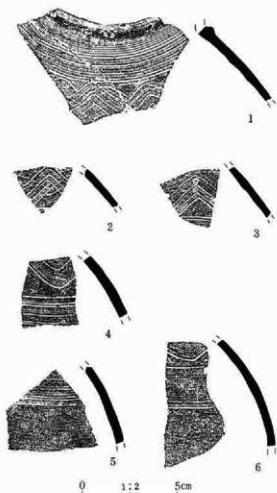
ピット 竪穴内では検出されなかったが、各壁外に40cm (P1は80cm) ほど離れて4基のピットが確認された。これを本住居跡に伴う柱穴とした場合、竪穴と上屋の主軸方向がほぼ45度振れることになるか、あるいは2本柱による簡素な「切妻」と考えられる。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

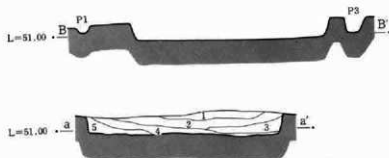
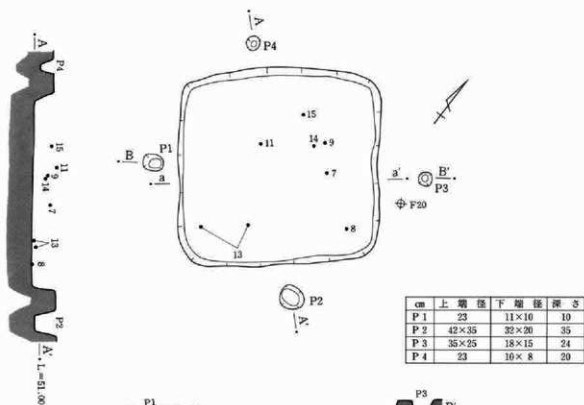
埋土の特徴 褐色土とロームブロックが互層になっており、住居跡埋没初期は流れ込みによる自然堆積と思われる。

遺物 中央部の埋土から集中して出土しており、時期は古墳時代初頭に限られる。

重複遺構 3号古墳の封土の下に構築されたと思われる。



第322図 III61号住居跡出土遺物(1)

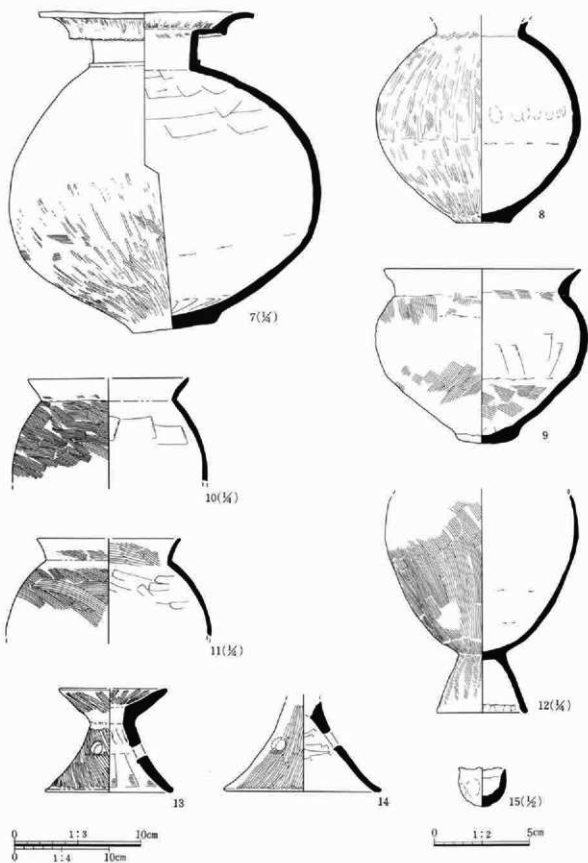


土層説明

- 1 黒色土 粒子粗くしまりあり。遺物を多く含む。
- 2 黒色土とロームブロックの混合土。
- 3 褐色土 粒子粗い。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒を主とする。

0 1:60 2m

第323図 III61号住居跡



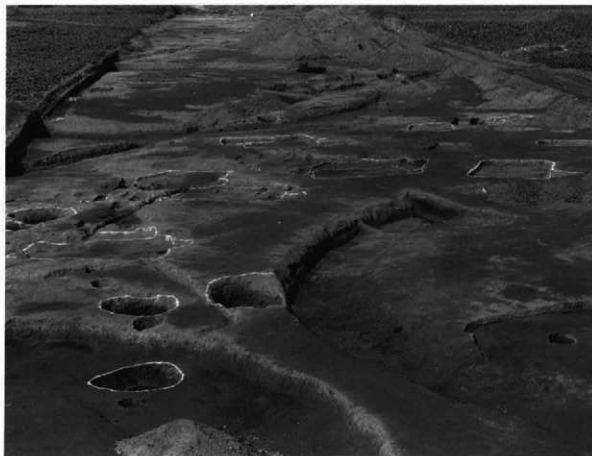
第324図 III61号住居跡出土遺物(2)

(3) IV区の竪穴住居跡

概要

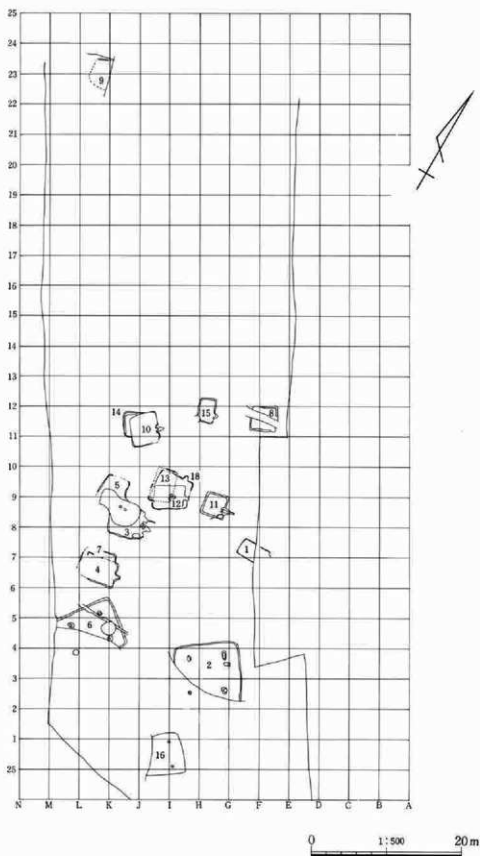
IV区の竪穴住居はI～III区に比べて16軒と極端に少ない。3ヶ所で住居跡同士の重複が見られるが、一時期に限定した場合、散在する様相を示すと思われる。時期別軒数は、古墳時代初頭が1軒、10世紀以降が11軒を数える。古墳がこのことから本地区は居住域としては外郭部分にあたり、平安時代中葉のある時期にのみ広がりを見せたと考えられる。その理由として、古墳が密集して存在しており、9世紀

代までは宅地として不適切であったこと、また本地区以北の約100mは竪穴住居がほとんど見られないことから、居住以外の目的を対象とする地域であったことが推定される。なお小鍛冶遺構と推定される9号住居跡が、I～III区に展開する竪穴住居跡群とはやや離れた北西端部に単独で存在することは「村はずれの鍛冶屋」を想起させて興味深い。



第325図 IV区全景（南東より撮影）

第三章 検出された遺構と遺物



第326図 IV区竪穴住居跡位置図

IV 1号住居跡 (第327・328図 PL. 25)

位置 F-6・7

平面形 縦長長方形。

規模 西辺2.08m、北辺3.86m

東辺・南辺不明。

方位 N-89°-E

壁 ほぼ壁線は直線的で、立ち上がりも垂直に近い。高さは土層断面の所見から45cmと推定される。

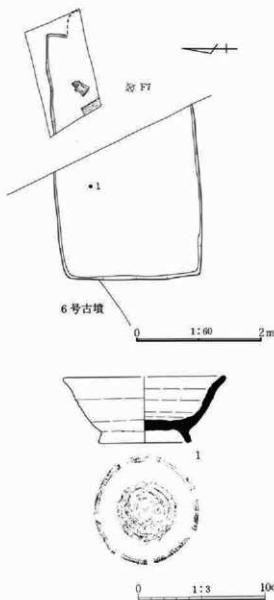
床面 地山のロームをそのまま床としており、中央部分に住居跡主軸と直交して溝状の浅い段差が見られる。

カマド 東壁の北寄りに一部が確認されたが、詳細は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。埋土の特徴 下位ほどローム粒やロームブロックが目立つ。南半は攪乱土層が入る。

遺物 大部分が埋土からの出土で、古墳時代初頭と10世紀代のものが混在する。

重複遺構 6号古墳周堀を切る。



第327図 IV 1号住居跡及び出土遺物

IV 2号住居跡 (第329・330図 PL. 25・84)

位置 F・G・H-2・3・4

平面形 方形。

規模 東辺8.0m以上、北辺8.94m

南辺・西辺不明。

方位 N-59°-E

壁 遺存状況が良好で、崩落は少なくほぼ垂直に立つ。東壁では一部がオーバーハンズする。

床面 全面に貼り床が施され、堅く踏み固められており、壁付近でやや軟質になる。貼り床は厚さ10~15cmでロームと白色粘土の小ブロックを含む暗褐色土を埋める。

炉 中央のやや西寄りで地床炉を検出。80×60cmの範囲で確認され、掘り込みは見られず床自身が4cmほどの厚さで赤変する。この部分の貼り床は他と比べて薄く、4~5cmで地山



第328図 IV 1号住居跡検出状況

第III章 検出された遺構と遺物

のロームに達する。中央の東寄りでも50cmほどの焼土分布が確認されたが、炉とは考えられない。

ピット 6基が検出され、うちP1・P3・P5・P6は配置と規模から支柱穴と考えられる。これらは規格的な掘り方と柱痕跡が明らかで、柱位置に気を使っていたことが伺える。この柱間寸法はP1-P3は4.2m、P3-P5は5.3m、P5-P6は4.2m、P1-P6は5.25mを測る。なお北側で検出されたP2は長方形で階段状の断面形を呈するピットだが、その形状や位置から本住居跡とは別遺構の可能性もある。

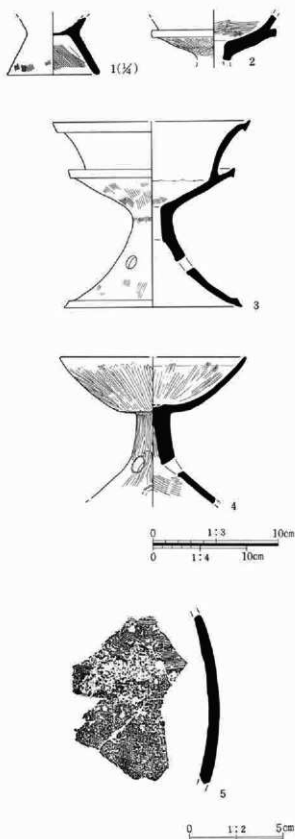
周溝 壁に沿って全周すると思われる。幅は10cm前後、深さ6~12cmを測る。なお底面に矢板を打ち込んだと思われる痕跡を数箇所確認。幅3cm、深さ3~8cmの黒色土の落ち込みで、壁からは2~3cm離れている。この落ち込みはやや外傾することから、矢板は壁にもたせかけるように打ち込んだと推測される。

その他 東壁際と中央部北寄りで炭化材が検出された。前者は「スサ」状の炭化物を束ねたもので床からは1cm浮いている。後者は直径3~6cm、長さ25cmまでの炭化材が人為的に寄せ集められた状態と考えられる。なお後者の炭化材集積の下位には、他の貼り床とは異なるピット状の黒色土の堆積が見られたが、炭化材との相関関係の有無は不明。

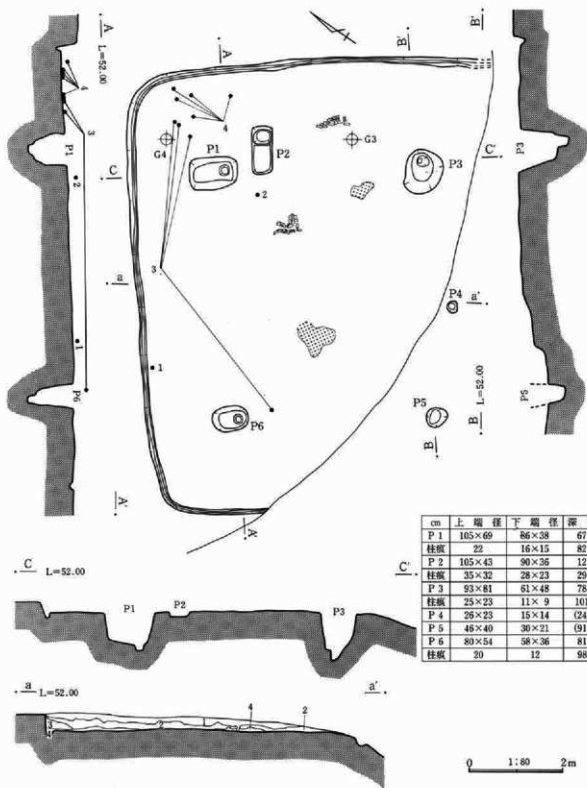
埋土の特徴 下層部分のみ確認できた。全体にロームブロックを多く含んでおり、人為的な埋土の可能性が高い。

遺物 住居跡全体から平均的に土器小破片が出土しており、平安時代のもも混在するが、住居形状や床面出土品から本住居跡に伴うのは古墳時代初頭であろう。

重複遺構 確認はできなかったが6号古墳の封土下に構築されたと思われる。また住居跡の南半部分は周堀に切られる。



第329図 IV 2号住居跡出土遺物



cm	上 堀 径	下 堀 径	深 さ
P 1	105×60	86×38	67
柱 版	22	16×15	82
P 2	165×43	90×36	12
柱 版	35×32	28×23	29
P 3	93×81	61×48	78
柱 版	25×23	11×9	101
P 4	26×23	15×14	(24)
P 5	46×40	30×21	(91)
P 6	80×54	58×36	81
柱 版	20	12	98

土層説明

- 1 黒褐色土 少量のロームブロックと軽石を含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 小ロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

 黄土

第330図 IV 2号住居跡

IV 3号住居跡 (第331~334図 PL. 25・84)

位置 J-7・8

平面形 北西部は攪乱で不明だが、方形と思われる。

規模 東辺2.85m、南辺4.72m、西辺・北辺不明

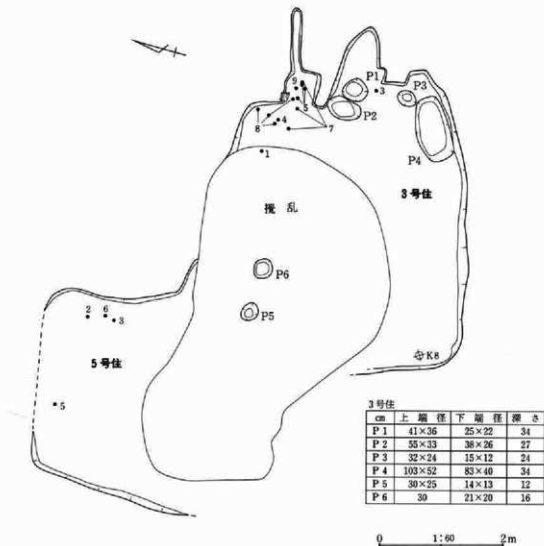
方位 N-74°-E

壁 南隅は比較的良くに遺存する。やや外傾し、高さは9cmを測る。

床面 遺存する南東部では、地山のロームをそのまま床としている。

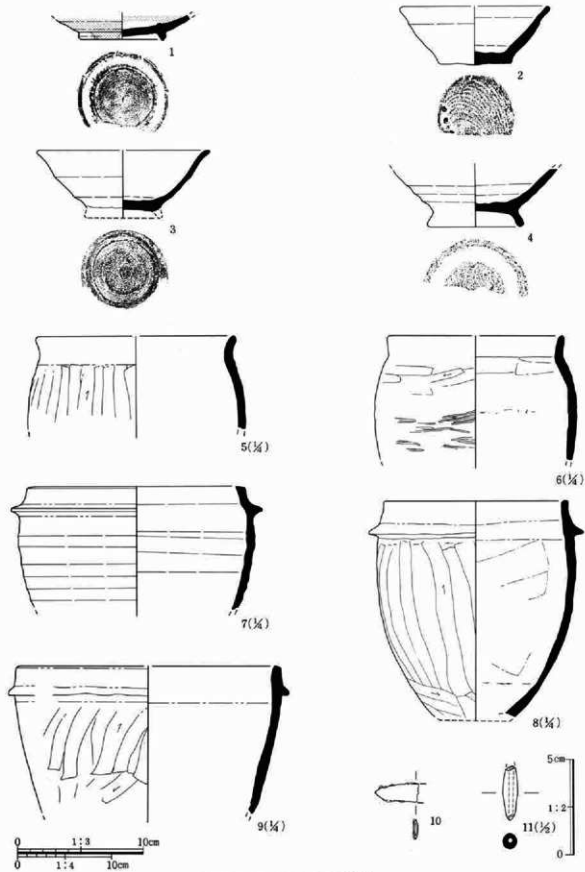
カマド 東壁に2基が検出された。1号カマドは南側にあり、歪んだ三角形の燃焼部で火床面は煙道部方向へ緩く立ち上がる。燃焼部の規

模は幅105cm、奥行き100cmを測る。火床面下の掘り方は深く、下から黒色土、ロームブロックの順で埋める。2号カマドは方形の燃焼部で幅50cm、奥行き50cmを測る。袖部は壁をそのまま利用し、角礫を据えて補強材としている。左側の礫は床に立てられたままで火を受けていない。右側の礫は23cmの方柱状に加工され15cmほどが床面に埋め込まれる。これはかなり火を受けたのが明らかである。また燃焼部のかなり手前の位置で床面に埋め込まれた30×28cmの円礫が確認され、この部分が火を受けていた。これより燃焼部は竪穴の



第331図 IV 3号・5号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第332図 IV 3号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

50cm前後内側まで張り出していた可能性がある。なお火床面は地山のロームそのまま、灰のかき出しを行った痕跡が残る。煙道部は不明確であったが幅15cm、長さ100cmの水平な掘り込みが検出された。遺物の出土状況や遺存状況から1号が途中で廃絶され、2号が最終段階まで使用されたと考えられる。

ピット 6基が検出されたが、P1とP2はカマド燃焼部の位置にあるため攪乱坑の可能性もある。P4は南壁際の東隅にある長方形のピットで、貯蔵穴かと思われる。

埋土の特徴 ローム粒やロームブロックを含む褐色土が主。

遺物 カマド周辺から集中して出土しており、時期は10世紀代が主体で、古墳時代初頭のものが混入する。

重複遺構 IV区5号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

IV 4号住居跡 (第335～337図 PL. 25・84)

位置 J・K-5・6

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 東辺2.76m、北辺(3.7)m

南辺・西辺不明。

方位 N-64°-E

壁 東隅が明瞭に遺存し、高さは10cmを測る。外傾して立ち上がるが、崩落によるものだろう。

床面 カマド手前部分は地山のロームのまま、中央部床土は貼り床状に踏み固められた焼土、粘土、炭化物の混合土である。

カマド 東壁中央で検出。燃焼部は平面三角形状で、幅70cm、奥行き65cmを測る。火床面は床面とほぼ同レベルで煙道部方向に緩く傾斜する。火床面の下は焼土や粘土を含まない褐色土を埋める。なお焚口部底面は埋土をせず地山のままを残している。

その他 柱穴、貯蔵穴、溝溝は検出されなかった。



第333図 IV 3号住居跡カマド遺物出土状況



第334図 IV 3号住居跡灰軸土出土状況

埋土の特徴 下層は焼土やロームブロックを多く含む土で、カマド崩壊土を含めた人為的埋土と考えられる。

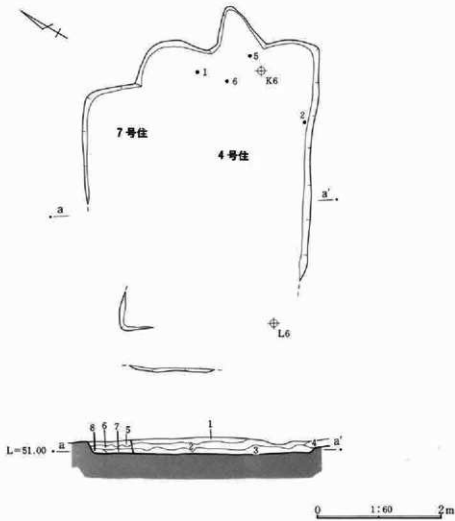
遺物 カマド周辺から羽蓋の大形破片が出土しており、埋土出土の壺、杯片も10世紀代が主体。ただし重複する7号住居跡に伴う遺物もかなり混入している可能性が高い。

重複遺構 IV区7号住居跡よりは新しい。



第335図 IV 4号住居跡カマド遺物出土状況

第1節 竪穴住居跡

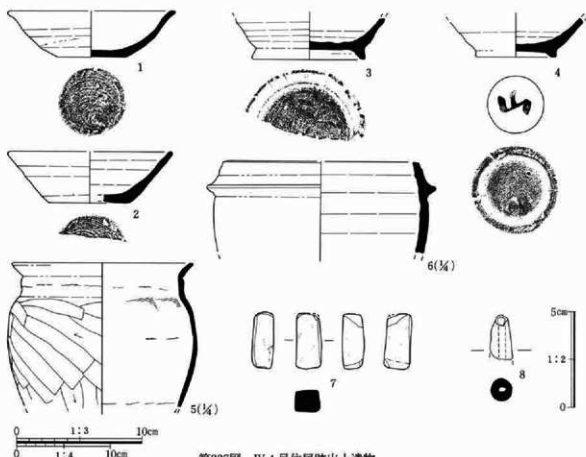


土層説明

- 1 黒色土
- 2 黄褐色土 ローム粒を含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を多く含む
み焼土もみられる。
- 4 ロームブロックが主体の層。
- 5 黒色土
- 6 黄褐色土 ローム粒をまばらに含む。
- 7 黄褐色土 3に近似するが黒味が強い。
- 8 黄褐色土 ロームが主。

第336図 IV 4号・7号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第337図 IV 4号住居跡出土遺物

IV 5号住居跡 (第331・338・339図 PL. 25・84)

位置 J・K-8・9

平面形 横長長方形。

規模 東辺 (2.4) m、北辺 (1.9) m

南辺・西辺不明。

方位 N-92°-E

壁 全体に遺存状況不良で、高さは10cm前後を測る。

床面 カマド崩壊土と思われる焼土、灰等で厚さ3~6cmの貼り床を施す。その下層にはローム粒を含む黒褐色土を10cm前後の厚さで埋める。カマド前面部を除いて全体に軟質。

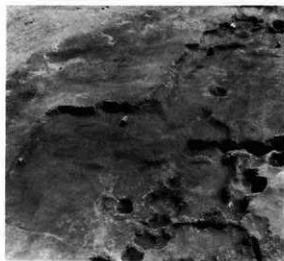
カマド 東壁の中央で燃焼部の左半を検出。火床面は不明確。奥行きは50cm。掘り方は竪穴とほぼ同じレベルまで掘り込まれる。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

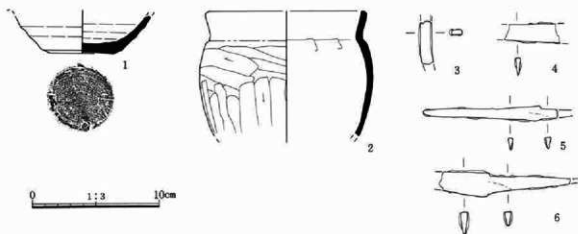
埋土の特徴 黒褐色土が主体。

遺物 北東隅の床面付近から土器片と鉄製刀子4点が出土しており、時期は10世紀代が主体。

重複遺構 IV区3号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第338図 IV 5号住居跡 (右上は3号住居跡)



第339図 IV 5号住居跡出土遺物

IV 6号住居跡 (第340・341図 PL. 26)

位置 J・K・L-4・5

平面形 長方形。

規模 東辺・南辺不明、西辺7.5m以上
北辺6.52m

方位 N-33°-E

壁 削平により下位部分のみ遺存し、ほぼ垂直に立ち上がる。高さは14cmを測る。

床面 ほぼ水平で平坦。

炉 西壁際の2カ所で径40cm大の焼土の分布が見られたが、いずれも火床面が不明確で、更に1基はピットP2と重複することから、どの程度使用されたのか疑わしい点もある。

ピット 長方形の配置構成をとる4基が検出された。これは支柱穴と考えられ、各柱間寸法は、P1-P2が4.2m、P2-P3は3.6m、P3-P4は5.0m、P1-P4は3.7mを測る。

周溝 検出された壁に沿って全周する。規模は幅17~25cm、深さ8~10cmを測る。底面は比較的平坦で凹凸は少ない。ロームブロックの多い土が堆積。

埋土の特徴 黒色土が主体で、下層にはローム粒が目立つ。

遺物 小土器片が全体に点在する。時期は古墳時代~平安時代で、特定できない。

重複遺構 IV区8号溝と4号井戸に切られ、9号古墳周溝と重複するが、新旧関係は不明。



第340図 IV 6号住居跡出土遺物

IV 7号住居跡 (第336図 PL. 25)

位置 K・L-6

平面形 長方形。

規模 主軸方向3.0m前後。

方位 不明。

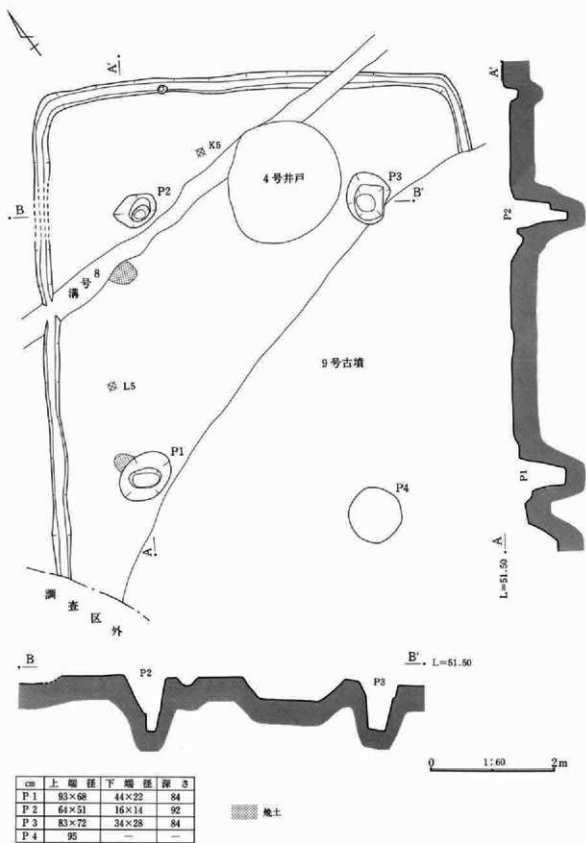
壁 崩落部分が多く、本来の形状を示さない。

床面 重複する4号住居跡よりも5cmほどレベルが高い。凹凸が多いため掘り方面の可能性もある。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。ただし重複する4号住居跡の埋土に、流れ込みと思われる焼土が見られることから、本住居跡に伴うカマドの存在が推定される。

遺物 本住居跡に伴うものは出土していない。

重複遺構 IV区4号住居跡に切られる。



第341図 IV 6号住居跡

IV 8号住居跡 (第342図 PL. 26・84)

位置 E・F-11

平面形 ほぼ正方形。

規模 東辺3.26m、西辺3.06m

北辺3.30m、南辺3.50m

面積 (10.5) m²

方位 N-61°-E

壁 オーバーハング気味に立ち上がる。高さは東側で46cmを測る。

床面 ロームを主体とした土で全面に貼り床を施す。全体に凹凸は少なく平坦。

カマド 東壁南半は周溝がなく、遺物が集中して出土することからカマドの存在が推定される。おそらく3号溝によって切られたものだろう。

ピット 本住居跡に伴う可能性があるものとして北

東隅壁外で1基を検出。

周溝 東壁南半を除いた壁に沿って検出された。

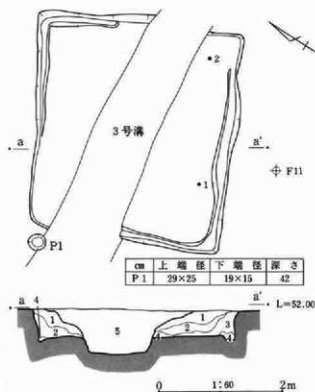
幅5~25cm、深さ1~13cmを測る。東側中央では底部に矢板を打ち込んだ跡と思われる幅1cm、長さ5cmの黒色土の落ち込みを確認。

埋土の特徴 全体にロームブロックが多く、炭化物や焼土も含まれる。人為的埋土の可能性あり。

遺物 南東部では土器片が集中して出土、南西部で炭化材と1cm大の炭化物が床面に広がる。炭化材は長さ13cm、厚さ7cmを測る。いずれも本住居跡に伴うと考えられる。

その他 埋土や炭化物の特徴から焼失家屋とも考えられるが、床面や壁には火熱を受けた部分は認められなかった。

重複遺構 IV区3号溝に切られる。



土層説明

- 1 暗褐色土 1~2cm大のロームブロックを含む。
- 2 暗褐色土 大きいロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒を多く含む。炭化物多い。
- 4 黒褐色土 ローム粒は含まず、粘性弱い。
- 5 3号溝埋土。



第342図 IV 8号住居跡及び出土遺物

IV 9号住居跡 (第343・344図 PL. 26・84)

位置 K-22・23

平面形・規模・方位 不明。

壁 平面ではほとんど確認できず。土層断面の所見からは垂直に近い壁の立ち上がりは見られず、全体が浅い皿状を呈する。

床面 遺構確認面から15cmほど下ではほぼ平坦な水平面が見られる。硬化面は確認できない。更に下には20~30cmの厚さで焼土や灰、炭化物を含む暗褐色土あるいは黒褐色土が堆積しており、貼り床や床の補修が随時行われた可能性がある。

炉 推定プランの北西寄りでは床面レベルで検出。径25cmで深さ10cmの「つぼ」状を呈し、内壁は白色粘土を用い火熱を受けて赤変する。底面には灰の堆積が見られた。

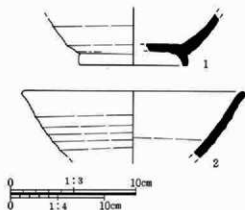
ピット 床面精査の段階で推定プランの中央部に1基確認。径(100)×(80)cmの楕円形を呈し、深さは40cm弱を測る。埋土は地山とほぼ同様の黒褐色土が堆積する。

埋土の特徴 床面はわずかな間層をはさんで As-Bの純層に覆われる。

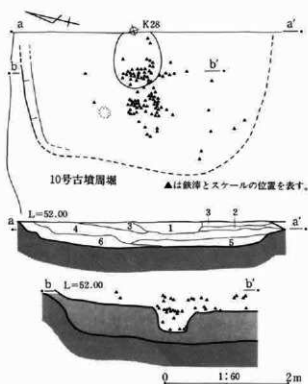
遺物 底面レベルとピット内から鉄滓と多量の鉄碎片が出土した。またピット内からは平安時代の杯、碗が出土する。

重複遺構 10号古墳周堀上に構築される。

その他 本跡は住居跡として扱ったが、小鍛冶遺構と考えられる。



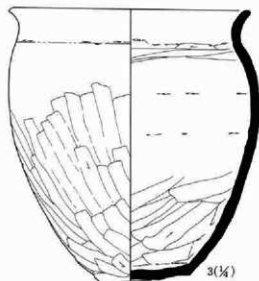
第344図 IV 9号住居跡出土遺物



土層説明

- 1 暗灰褐色軽石 As-Bが主体で、褐色土、焼土が混入する。
- 2 暗褐色軽石 As-B 純層。
- 3 黒褐色土 As-Bが少量混入する。
- 4 暗褐色土 やや粘性を帯び、焼土と灰を含む。
- 5 暗褐色土 4層より焼土が少なく、炭化物が多い。
- 6 黒褐色土 炭化物を含む。

第343図 IV 9号住居跡



IV10号住居跡 (第345・346図 PL. 26・84)

位置 I・J-10・11

平面形 ほぼ正方形。

規模 北東辺(3.5)m、北西辺3.32m

南西辺3.22m、南東辺(3.65)m

面積 (11.54) m²

方位 N-48°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、崩落も少ない。高さは北隅で30cmを測る。

床面 掘り方凹凸面を平坦に整地する程度の貼り床を施す。厚さは2~3cmで、カマドの前面では10cmと厚い。

カマド 北東壁のほぼ中央で検出。袖部は白色粘土

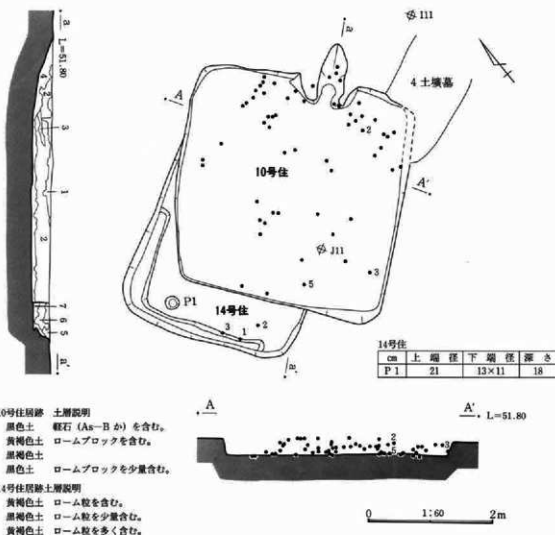
で構築され竪穴内に40cmほど張り出す。燃焼部は平面楕円形で、幅35cm、奥行き100cmを測る。火床面は長さ50cmほどの平坦面で、煙道方向へ緩傾斜する。側壁は火熱により赤変する。なお燃焼部埋土に焼土があることから、同じ場所にカマドを再構築した可能性がある。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 全体にロームブロックが目立つ。

遺物 住居跡全域に散在し、床面出土のものは少ない。時期は10世紀代に限られる。

重複遺構 4号土墳墓とIV区14号住居跡を切る。



10号住居跡 土層説明

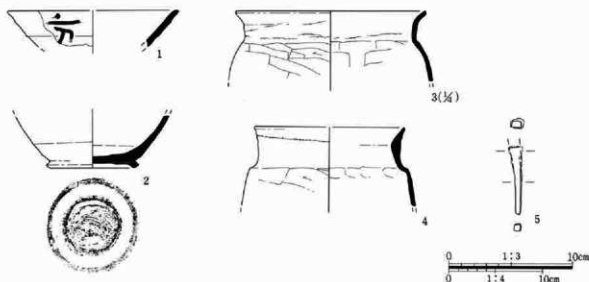
- 1 黒色土 軽石 (As-B か) を含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土
- 4 黒色土 ロームブロックを少量含む。

14号住居跡土層説明

- 5 黄褐色土 ローム粒を含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒を多く含む。

第345図 IV10号・14号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物



第346図 IV10号住居跡出土遺物

IV11号住居跡 (第347図 PL. 26・84)

位置 G-8・9

平面形 横長方形。

規模 東辺3.48m、西辺3.33m

北辺2.95m、南辺3.03m

面積 9.03㎡

方位 N-73°-E

壁 全体にやや外傾気味に立ち上がり、南壁では崩落が見られる。高さは北壁で20cmを測る。

床面 地山のロームをそのまま床としており、カマド前面から中央部にかけて良好な硬化面を残す。

カマド 東壁のやや南寄りで検出され、燃焼部は東壁線上に位置する。袖部は不明確ではあるが、白色粘土で構築され壁穴内に50cmほど張り出したと推定される。燃焼部は幅50cm、奥行き100cmを測り、中央部は皿状にくぼむ。煙道部は燃焼部から次第に傾斜して立ち上がる。

貯蔵穴 南東隅で不整形のプランで検出された。規模は上端90×70cm、下端75×55cm、深さ30cmを測る。底面にはカマド崩落に伴うと思われる炭化物、焼土、灰が堆積する。

周溝 カマド付近を除いた壁に沿ってほぼ全周し、幅15~23cm、深さ2~5cmを測る。西側では黒色土、東側でロームが主に堆積する。

ピット 西壁に平行する位置でピットが2基検出されたが後世の擾乱と判明し、本住居跡に伴うものはない。また北東隅と南西隅で壁から40cmほど離れて円形の浅い凹みがあり、柱痕跡の可能性はある。

埋土の特徴 ローム粒とロームブロックがみられ、ほぼ水平の堆積状況を示す。

遺物 カマドから南壁にかけて偏在しており、投棄あるいは流れ込みによるものがほとんどである。器種は羽釜、土釜、皿等で、時期は11世紀に入る可能性がある。

IV12号住居跡 (第348・349図 PL. 26・84)

位置 H-I-8・9

平面形 縦長方形。

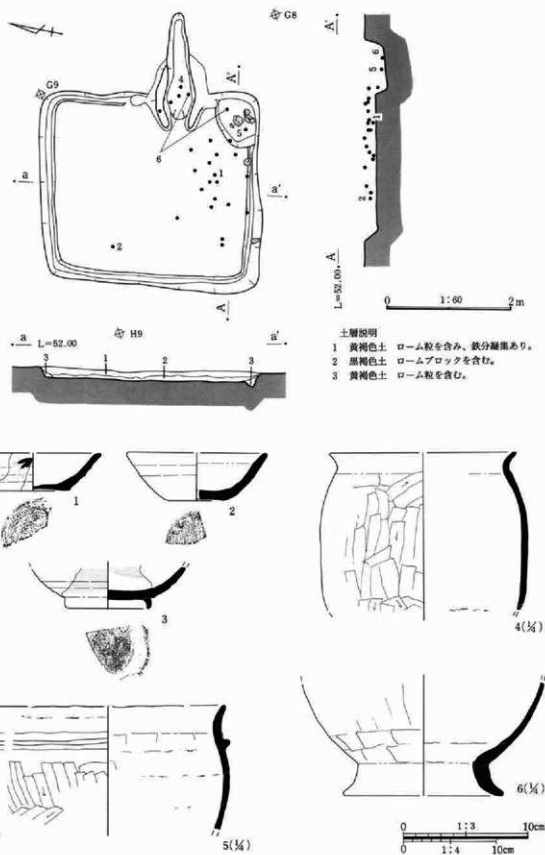
規模 東辺2.70m、西辺(2.75)m

北辺(4.0)m、南辺3.78m

面積 (10.51)㎡

方位 N-58°-E

第1節 竪穴住居跡



第347図 IV11号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

壁 南東壁のみ良好に遺存しており、ほぼ垂直の立ち上がりで、高さは23cmを測る。

床 面 貼り床は認められず、重複する18号住居跡との床面レベル差はほとんどない。

カマド 東壁中央で燃焼部底面を検出。規模は幅55cm、奥行き65cmを測る。袖部や焚口、煙道部は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 ローム粒の少ない黒褐色土が主体。

遺物 埋土から散在して出土しており、投棄あるいは流れ込みと思われる。時期は8世紀代～平安時代が多いが、重複する13号住居跡・18号住居跡との判別はできない。

重複遺構 IV区13号住居跡よりは古く、18号住居跡との新旧関係は不明である。

IV13号住居跡 (第348・349図 PL. 26)

位置 I・J-8・9

平面形 横長長方形と思われる。

規模 長軸長 (4.2) m、短軸長 (3.1) m

方位 N-79°-E

壁 北壁と南西隅の一部が遺存する。土層断面の所見から緩く傾斜する立ち上がりで、高さは15cmを測る。

床 面 重複する12号住居跡と18号住居跡の埋土を床土としており、部分的にロームブロックで貼り床を施す。床面レベルは12号住居跡よりも10cmほど高い。

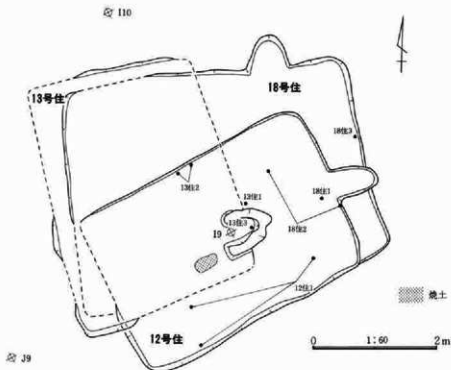
カマド 東壁の南寄りで検出。袖部は右側がやや手前に張り出す。燃焼部は幅40cm、奥行き80cmを測る。火床面は不明瞭。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 黒褐色土が主体で、12号住居跡とほとんど同質。

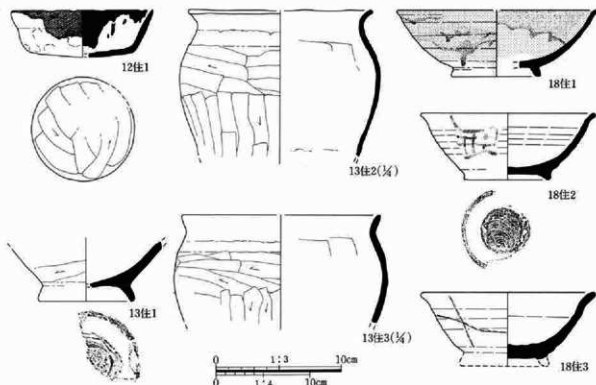
遺物 カマドとその周辺の埋土から出土しており、重複する12号・18号住居跡との判別不能。

重複遺構 IV区12号・18号住居跡のいずれよりも新しい。



第348図 IV12号・13号・18号住居跡

第1節 竪穴住居跡



第349図 IV12号・13号・18号住居跡出土遺物

IV14号住居跡 (第345・350図 PL. 26・84)

位置 J-11

平面形 長方形と思われる。

規模 南西辺2.83m、その他は不明。

方位 N-60°-E

壁 隅部が垂直に近く、他は外傾して立ち上がる。高さは北西隅で23cmを測る。

床面 地山のロームをそのまま床とし、凹凸が多い。重複する10号住居跡の床よりも5cmほどレベルが高い。

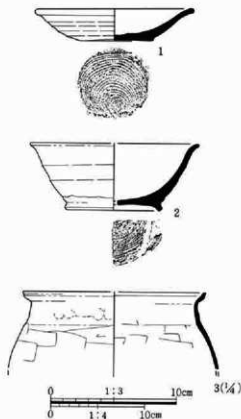
周溝 検出された壁に沿って巡り、凹凸が激しく幅18~40cm、深さ5~10cmを測る。

ピット 西隅で1基検出された。性格は不明。

埋土の特徴 ローム粒を含み、ロームブロックは見られない。

遺物 南西壁際の床面上より器形の明らかな10世紀代の碗、皿、甕が出土。埋土出土遺物は重複する10号住居跡伴出遺物との判別が困難。

重複遺構 IV区10号住居跡に切られる。



第350図 IV14号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

IV15号住居跡 (第351・352図 PL. 26・84)

位置 G-11

平面形 横長長方形。

規模 東辺2.85m、西辺(2.6)m

北辺2.10m、南辺(2.3)m

面積 (5.56) m²

方位 N-66°-E

壁 全体に外傾しており、凹凸が多い。高さは南壁で16cmを測る。

床面 南側でロームブロックの多い土で貼り床を施す部分が見られる。中央部がややくぼむ。

カマド 東壁南寄りで燃焼部を検出。袖部は不明瞭。規模は幅60cm、奥行き40cmを測る。燃焼部底面は外傾していることから中心部は竪穴の更に内側に存在した可能性がある。

周溝 壁に沿って全周しており、幅8~20cm、深さ2~7cmを測る。

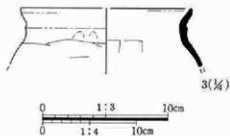
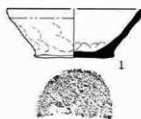
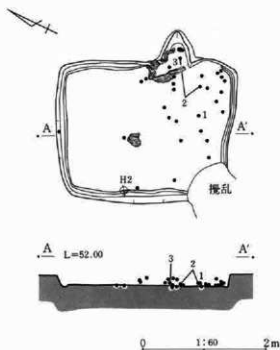
埋土の特徴 黒色土が主体で、ロームブロックやローム粒を含む。比較的均質。

遺物 カマドと南側に偏って出土しており、時期は10世紀代後半が主体。なおカマド付近を中心に多量の炭化物と焼土が検出されたが、床面から浮いた状態が多く、焼失家屋の可能性は低い。

重複遺構 なし。



第351図 IV15号住居跡遺物出土状況

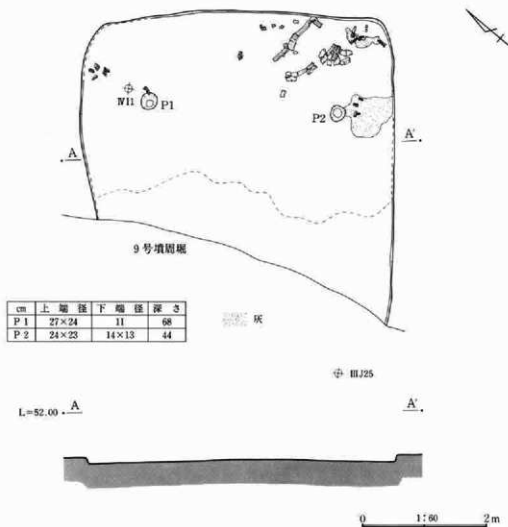


第352図 IV15号住居跡及び出土遺物

IV16号住居跡 (第353図)

位置 H・I-1
 平面形 方形と思われる。
 規模 長軸長4.8m以上、短軸長4.6m
 方位 N-52°-E
 壁 削平によりほとんど遺存せず、東側で高さ14cmを測る。
 床面 ほぼ平坦。西側は不明瞭で確認できず。
 ビット 北東壁に平行して2基が検出され、規模と配置から柱穴と考えられる。柱間寸法は約3mを測る。

その他 カマド、炉、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。東隅で80cmほどの炭化材と多量の焼土、灰を検出した。炭化材は東隅から中央方向へ向いていることから垂木と考えられる。
 埋土の特徴 黒褐色土が堆積するが、大部分は攪乱により不明瞭。
 遺物 古墳時代初頭～10世紀代の土器片が出土しており、時期は限定できない。
 重複遺構 9号古墳周溝と重複するが、新旧関係は不明である。



第353図 IV16号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

IV17号住居跡（欠番）

IV18号住居跡（第348・349・354図 PL. 26・85）

位置 H・I-8・9

平面形 横長長方形。

規模 東辺2.98m、北辺4.46m、南辺・西辺不明。

方位 N-7°-W

壁 東壁が比較的良好に遺存する。高さは15cmを測る。

床面 12号住居跡とほぼ同レベルのため、識別が困難。

遺物 埋土からの出土が大部分で、12号住居跡に伴うものとの判別が困難。

重複遺構 IV区13号住居跡より古い、12号住居跡との新旧関係は不明である。



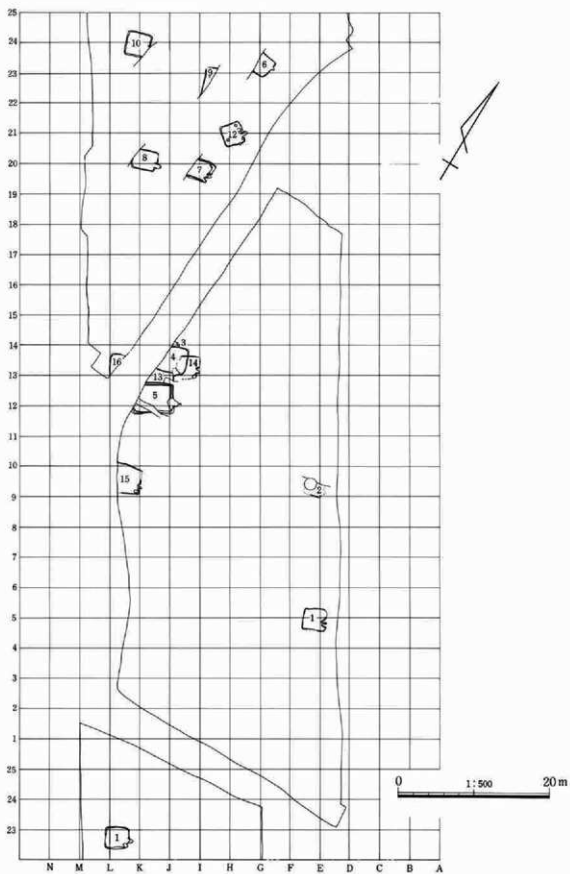
第354図 IV12号・18号住居跡遺物出土状況

(4) V・VI区の竪穴住居跡

概要

V区とVI区は緩傾斜面から水平な面への変換地にあたり、I～V区のはほぼ水平な平坦面が広がる地域とはやや異なる占地を示している。標高は現地形で55m前後を測り、I区付近より5m前後高位に位置する。本地区で検出された竪穴住居跡は16軒で、ほとんどが7世紀後半以降の時期に限定される。個々の住居跡はH-12・13グリッドで見られるように、数軒が重複する部分もあるが、全体に距離をあけて散在する傾向が伺える。また主軸方向もI～IV区では南北方向が主流であったが、本地区では北東方向にはほぼ限定されるという違いがある。このことから本地区の竪穴住居跡は限定された短期間に構築された可能性が高い。しかもこれらはIV区との間に100m近くの空白地帯が存在することからI～IV区で検出された竪穴住居跡群とは異なる1群としてとらえられる。また本地域住居跡群の分布はVII区の住居跡も含めて小さな窪地を取り巻くように南北方向に長く延びたと考えられる。

なおV区ではJ-22グリッドで1軒検出されたのみで、これは分布の標相からVI・VII区の竪穴住居跡群に含まれるものと考えこの項で扱った。またV区の19～23グリッド付近で竪穴住居跡とほぼ同じ方形の掘り込みでカマドや柱穴等の付随施設を伴わない遺構が4基検出されたが、これらは埋土の特徴や出土遺物の検討から、中世に属する竪穴遺構として扱ったため本項では取り上げていない。



第355図 V・VI区竪穴住居跡位置図

第三章 検出された遺構と遺物

V 1号住居跡 (第356図 PL. 27)

位置 K・L-22

平面形 ほぼ正方形。

規模 東辺2.30m、西辺2.63m

北辺3.13m、南辺2.98m

面積 8.04㎡

方位 N-60°-E

壁 削平により遺存する部分は少なく、東壁で高さ15cmを測る。

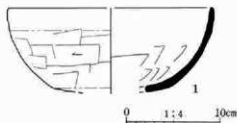
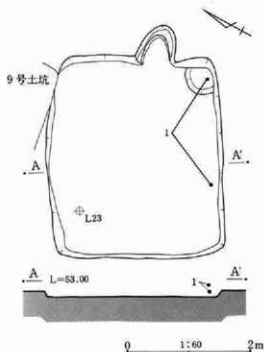
床面 ほぼ平坦。

カマド 東壁南寄りで燃焼部を検出。袖部は不明。幅45cm、奥行き50cmを測る。

貯蔵穴 南東隅にあり、椀状に掘り込まれ、平面楕円形で、径55×50cm、深さ6cmを測る。

遺物 南壁際の埋土から大形の椀が出土している。

重複遺構 北壁の一部でV区9号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。



第356図 V 1号住居跡及び出土遺物

VI 1号住居跡 (第357図 PL. 27)

位置 D・E-4・5

平面形 隅丸正方形。

規模 東辺2.81m、西辺2.70m

北辺3.15m、南辺3.25m

面積 7.27㎡

方位 N-61°-E

壁 やや外傾して立ち上がり、高さは全体に20cm前後を測る。東壁は弧を描いて膨らむ形状を呈しているが、この部分の床面が不明瞭なことから本来の壁でない可能性がある。また西壁と南壁の一部でも崩落や後世の擾乱により乱れた部分が見られる。

床面 地山のロームをそのまま床としており、カマド手前から中央南寄りにかけては踏み固められている。このことから南辺に出入口の存在が推測される。床面レベルはカマド手前部分が周辺に比べて3~6cmほど低く、西壁際が最も高くなっている。

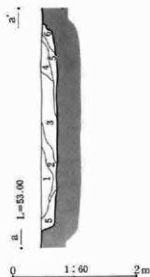
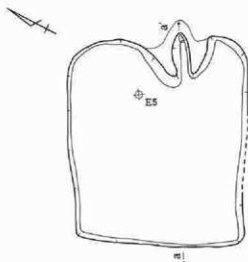
カマド 東壁のやや南寄り検出。灰黒色粘土で構築され、袖部は竪穴内に35cmほど張り出す。

検出された部分での本体の長さは30cm強を測るが、崩落が甚だしいため、燃焼部、煙道部は不明瞭。焼土、灰とも極めて少ない。

その他 柱穴、貯蔵穴、馬漕は検出されなかった。埋土の特徴 全体にロームブロックを含み、人為的な埋土の可能性がある。

遺物 埋土から30点ほどの土器片が出土しており、時期は8世紀代~9世紀代のものが主体と思われるが、一時期に限定できない。

重複遺構 5基のピットと重複するが、埋土の特徴から後世のものと考えられる。



土層説明

- 1 黒褐色土 砂質で軽石（拾取不明）を含む。
- 2 黄褐色土 色調暗く、ローム粒、ロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土 粒子は粗く、全体に軟質。
- 4 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒が多い。
- 5 黒色土 ローム粒、焼土粒、灰を含む。
- 6 暗褐色土 焼土塊、粘土塊を含む。

第357図 VI11号住居跡

VI2号住居跡（第358図）

位置 D・E-9・10

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

壁 南壁の一部が遺存し、高さはわずかに3cmを測る。

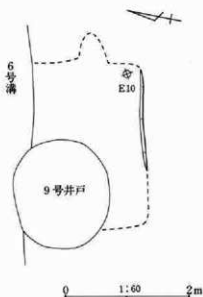
床面 部分的に硬化面が見られる。貼り床の有無は不明。

カマド わずかな焼土の分布から東壁の南寄りに構築されたことが推測される。規模や形状などの詳細は不明。

その他 柱穴、貯藏穴、周溝は検出されなかった。

遺物 西端で形状不明の小鉄片1点が出土したのみである。

重複遺構 VII区9号井戸、6号溝と重複し、いずれとも新旧関係は不明。



第358図 VI2号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

VI3号住居跡 (第359図 PL. 85)

位置 I-13・14

平面形・規模・方位 不明。

壁 東壁の一部が遺存し、高さは17cmを測る。

床面 重複する4号住居跡の床面より20cm弱レベルが高く、4号住居跡埋土を床土としている。貼り床の有無は不明。

カマド 推定される東壁位置で粘土塊が検出されており、これが本住居跡のカマド痕跡と考えられる。詳細は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 砂質の暗褐色土が一様に堆積する。

遺物 4号住居跡と重複する部分で床面と想定される位置から杯が出土しており、他に埋土から奈良時代と思われる土器片が30点弱出土する。

重複遺構 VI区4号住居跡よりは新しいが、14号住居跡との新旧関係は不明である。

VI4号住居跡 (第359図 PL. 85)

位置 I・J-13

平面形 縦長長方形と思われる。

規模 東辺3.25m、主軸長4m以上

方位 N-70°-E

壁 重複する遺構に切られて良好に遺存するのは北東隅のみで、高さは40cmを測る。外傾して立ち上がり、壁線も乱れる。

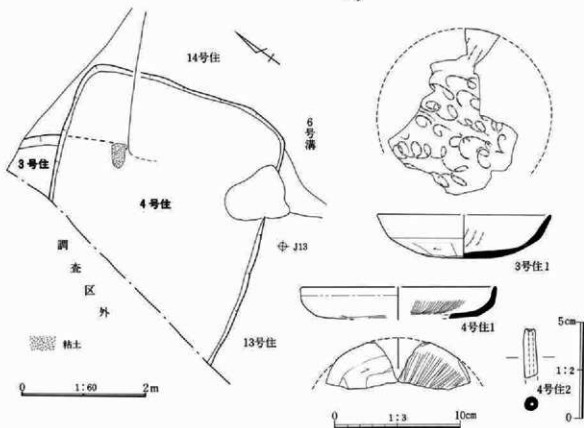
床面 地山のロームが主な床で、ほぼ平坦。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

埋土の特徴 ローム粒やロームブロックを多く含むが、重複する住居跡の貼り床埋土の可能性もある。

遺物 埋土から8世紀代を主とした土器片が170点ほど出土しているが、本住居跡に確実に伴うものはない。

重複遺構 VI区3号・13号・14号住居跡、6号溝と重複し、土層断面の所見からいづれよりも古い。



第359図 VI3号・4号住居跡及び出土遺物

VI5号住居跡(第360・361図 PL. 27・85)

位置 I・J・K-11・12

平面形 縦長長方形。

規模 北東辺3.73m、南東辺(5.8)m

北西辺・南西辺は不明。

方位 N-55°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、高さは58cmを測る。

床面 ほぼ平坦で、全面に貼り床を施す。

カマド 南東壁で検出。灰色粘土で構築し、袖部は40cm竪穴内に張り出す。燃燒部は幅50cm、奥行き70cm前後を測り、火床面には灰が堆積しほぼ平坦。煙道部は直径10cmで火床面から次

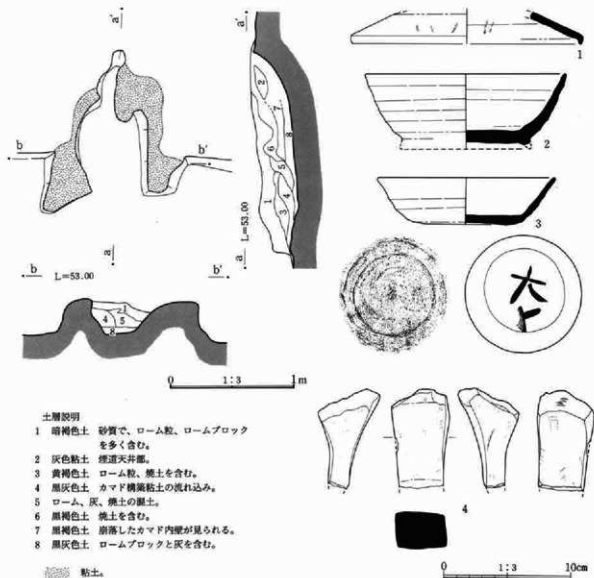
第に角度を強めて立ち上がる。

周溝 壁に沿って全周し、幅12~36cm、深さ6~11cmを測る。人為的な埋土が堆積する。

埋土の特徴 ロームブロックが多いことから、人為的に埋めもどされた可能性が高い。

遺物 床面中央部から墨書土器、磁石、椀が出土しており、その他に埋土出土のものを含めて時期は9世紀代が主。また南隅には炭化物が集中して検出されたが、形状の明らかなものはない。

重複遺構 VI区6号・8号溝と重複し、いずれよりも古い。

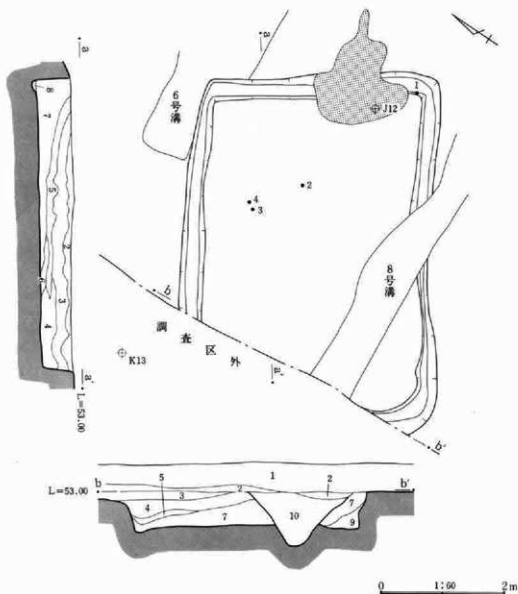


土層説明

- 1 暗褐色土 砂質で、ローム粒、ロームブロックを多く含む。
- 2 灰色粘土 煙道天井部。
- 3 黄褐色土 ローム粒、焼土を含む。
- 4 黒灰色土 カマド構築粘土の残れ込み。
- 5 ローム、灰、焼土の混土。
- 6 黒褐色土 焼土を含む。
- 7 黒褐色土 崩落したカマド内壁が見られる。
- 8 黒灰色土 ロームブロックと灰を含む。

粘土。

第360図 VI5号住居跡カマド及び出土遺物



土層説明

- 1 褐色土 現在の耕作土。
- 2 褐色土 小ロームブロックをわずかに含む。
- 3 褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 褐色土 ロームブロックをわずかに含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックやローム粒を含まない均質な層。
- 7 黒褐色土 ロームブロックとローム粒を多く含む。
- 8 黒褐色土とロームの混土。周溝埋土。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 10 VI区8号溝の埋土。

焼土

第361図 VI 5号住居跡

VI6号住居跡 (第362図)

位置 F・G-22・23

平面形 方形。

規模 東辺2.72m、西辺・北辺・南辺不明。

方位 N-97-E

壁 遺存状況は不良で、不明瞭な部分が多い。

高さは南壁で17cmを測る。

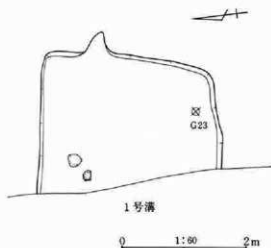
床面 全体に南側が低く、北側とは6cmの比高差で傾斜する。

カマド 東壁北寄りで燃焼部底面を検出。幅40cm、奥行き30cmを測る。構造や形状などの詳細は不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

遺物 目立った遺物はない。

重複遺構 VI区1号溝、35号井戸と重複するが、新旧関係は不明である。



第362図 VI6号住居跡

VI7号住居跡 (第363・364図 PL. 27・85)

位置 H・I-19・20

平面形 縦長長方形。

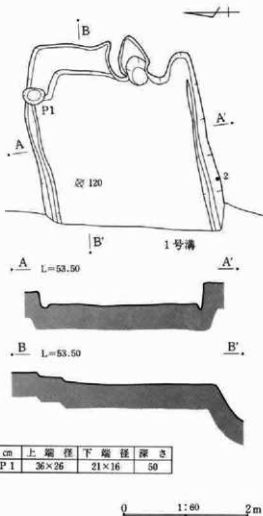
規模 東辺2.45m、主軸長2.8m以上

方位 N-76-E

壁 ほぼ垂直かやや外傾気味に立ち上がり、壁線は崩落により部分的に乱れる。高さは南壁で35cmを測る。

床面 全体に地山のロームを床としており、中央部には踏み固められた黒褐色土が見られる。東北隅には地山を掘り残したベッド状施設が検出された。壁に沿って「L」字状に屈曲し、幅30cm、床面からの高さ5~12cmを測る。

カマド 東壁南寄りで検出され、袖部と燃焼部が遺存する。袖部は灰色粘土で構築され、竪穴内に65cmほど張り出す。燃焼部は平面楕円形を呈し、幅40cm、奥行き80cmを測る。火床面は凹凸があり、その下にはローム粒を含む暗褐色土が埋められる。なお煙道部は検出されなかったが、火床面から奥壁に外傾し、そのまま続くと考えられる。



第363図 VI7号住居跡

cm	上端径	下端径	深さ
P1	26×26	21×16	50

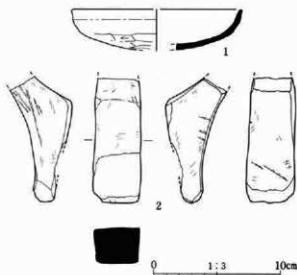
第三章 検出された遺構と遺物

ビット 北壁上のベッド状遺構端部で1基が検出された。上屋構造との関連は不明。

周溝 北壁と南壁に沿って見られ、幅18~30cm、深さ3~10cmを測る。底面は一定していない。埋土の特徴 暗褐色土が主に堆積し、レンズ状の堆積状況を示す。

遺物 埋土から8世紀代を中心とした土器片100点ほど、他に磁石が出土。

重複遺構 VI区1号溝と重複するが、新旧関係は不明。



第364図 VI7号住居跡出土遺物

VI8号住居跡 (第365・366図 PL. 27・85)

位置 J・K-19・20

平面形 縦長長方形。

規模 東辺2.35m、南辺3.10m、西辺・北辺不明。

方位 N-72°E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁線も乱れはない。高さは北壁で45cmを測る。

床面 平坦でレベルもほぼ水平。

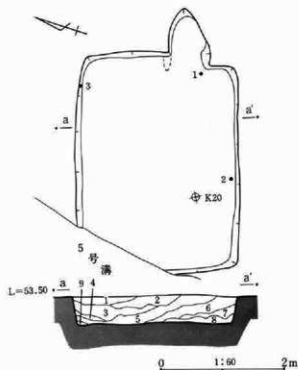
カマド 東壁南寄りで燃焼部が検出され、袖部は痕跡と思われる粘土塊が左側に見られた。平面形は左右で異なるが、おそらくこの左袖部が張り出すことでシンメトリーになると考えられる。燃焼部規模は幅60cm、奥行き95cmを測る。なお燃焼部奥壁は急角度で立ち上がり、中位から煙道が掘り込まれると考えられる。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。

埋土の特徴 黒褐色土が主体で、ロームブロックが互層状に堆積しており、人為的埋土の可能性が高い。

遺物 南壁際から器形の判る大形破片が出土しており、時期は8世紀代が多い。

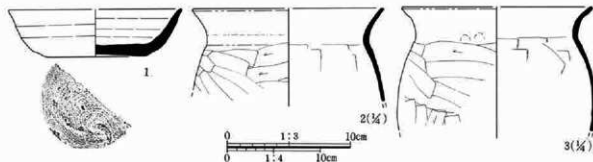
重複遺構 VI区5号溝と重複するが、新旧関係は不明である。



土層説明

- 1 黒褐色土 やや粘性を帯び、炭化物粒とローム粒を含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 黒褐色土 砂質で、ローム粒は少ない。
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックとローム粒を多く含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 8 黒褐色土 ローム粒を含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を多く含む。

第365図 VI8号住居跡



第366図 VI 8号住居跡出土遺物

VI 9号住居跡 (第367図)

位置 H-22・23

平面形 方形と思われる。

規模 不明。

方位 不明。

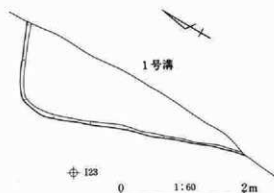
壁 西壁と北壁の一部を検出。削平により遺存状況は悪く、高さは11cmを測る。

床面 ほぼ平坦。貼り床の有無は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 埋土から40点ほどの土器片が出土しているが、時期は不明のものが多い。

重複遺構 VI区1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。



第367図 VI 9号住居跡

VI 10号住居跡 (第368・369図 PL. 27)

位置 J・K-23・24

平面形 ほぼ正方形。

規模 西辺3.00m、北辺3.45m、南辺・東辺不明。

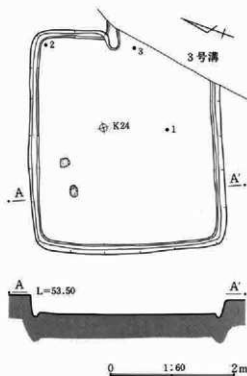
方位 N-72°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁線も乱れは見られない。高さは西側で32cmを測る。

床面 ほぼ平坦。貼り床の有無は不明。

カマド 東壁中央部に構築されたと思われる、左袖部が遺存する。袖部は灰色粘土で構築され、40cm竪穴内に張り出す。

周溝 壁に沿って全周しており、幅15cm、深さ6cmを測る。



第368図 VII 0号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

埋土の特徴 全体に大粒のロームブロックが見られ、人為的埋土を推定させる。

遺物 比較的大形破片が床面付近から出土しており、時期は8世紀代が主体。

重複遺構 VI区3号溝よりも古い。

VI11号住居跡 (欠番)

VI12号住居跡 (第370・371図 PL. 27・28・85)

位置 G・H-20・21

平面形 ほぼ正方形。

規模 北東辺2.77m、北西辺2.54m

南東辺2.58m、南西辺2.65m

面積 6.90㎡

方位 N-41°-E

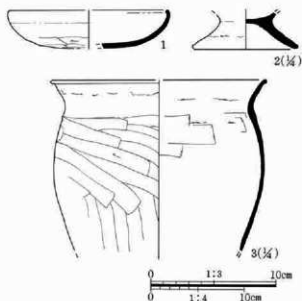
壁 ほぼ垂直で壁線も直線的。高さは南壁中央で31cmを測る。

床面 北側から南側へ比高差5cmで傾斜する。

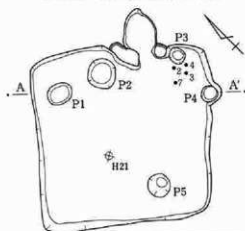
カマド 北東壁で燃焼部と袖部を検出。袖部は白色粘土を用いて住居壁から張り出して構築され、内側に入り込む状態で遺存している。このことから燃焼部平面形は楕円形で、焚口が狭まる形状であることがわかる。規模は幅55cm、奥行き95cmを測る。火床面には灰が堆積し焼土はほとんど見られない。燃焼部奥壁は急角度で立ち上がる。

ピット 5基検出されており、P1とP5は住居跡の対角線上に位置している。これに対応するピットが確認できないことから、あるいはこれを棟持ち柱とする上屋構造も想定できるが、この場合には竪穴主軸と上屋棟方向が一致せず斜交する。しかし本住居跡のように壁の直線部にカマドが付設される構造にはふさわしくないだろう。

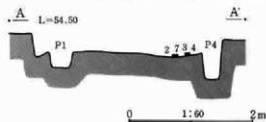
埋土の特徴 主体はロームブロックを含む土で、短時間で埋まった感が強い。



第369図 VI10号住居跡出土遺物



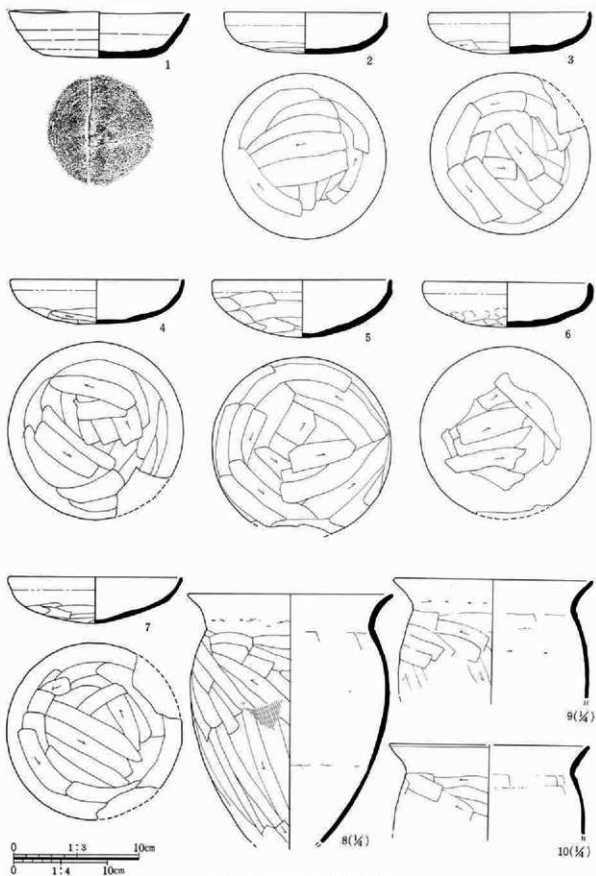
cm	上端径	下端径	深さ
P 1	41×33	31×23	26
P 2	46×44	32×31	16
P 3	26×23	18×14	44
P 4	28×24	21×20	42
P 5	37	16×15	31



第370図 VI12号住居跡

遺物 東隅のカマド右袖部縁から完形の杯が4点出土しており、他の埋土出土の壺等も含めて時期は8世紀に限定される。

第1節 竅穴住居跡



第371圖 VII2号住居跡出土遺物

VI13号住居跡 (第372図)

位置 J-12・13

平面形・規模・方位 不明。

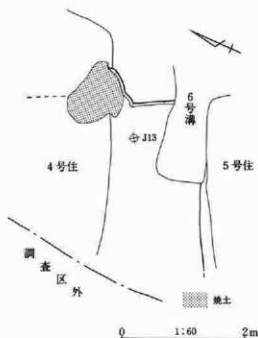
壁 確認できたのは東壁と南壁の一部である。他は遺構重複により不明瞭。高さは南壁で22cmを測る。

床面 遺存状況が悪く、不明瞭な部分が多い。重複する4号住居跡より6cmほどレベルが高い。

カマド 東壁の4号住居跡と重複する部分で灰の堆積が検出されたが、これがカマドの痕跡と考えられる。形状、規模は不明。

遺物 埋土から70点ほどの土器片が出土したが、重複する住居跡との帰属関係は不明。

重複遺構 VI区4号住居跡、6号溝と重複し、4号住居跡より新しく、6号溝より古い。



第372図 VI13号住居跡

VI14号住居跡 (第373図)

位置 I・J-12・13

平面形 やや歪む横長方形。

規模 東辺2.83m、西辺・北辺・南辺不明。

方位 N-53°-E

壁 遺存状況が悪く、特に西半は遺構重複のため不明瞭。高さは東壁で16cmを測る。

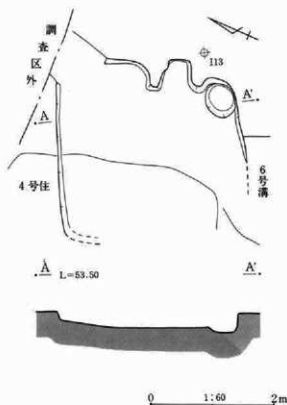
床面 ほぼ平坦で、レベルも均一。貼り床の有無は不明。

カマド 東壁の南寄りで燃焼部底面と竪穴内に40cm張り出した袖部を検出。燃焼部平面は方形を呈し、幅58cm、奥行き50cmを測る。燃焼部奥壁は検出面まで20cmの高さで立ち上がり、これから煙道が掘り込まれたものと考えられる。

貯蔵穴 南東隅で楕円形の貯蔵穴を検出。上端径58×48cm、下端径43×38cm、深さ11cmを測る。

遺物 カマド周辺及び埋土から20点の小土器片が出土しており、時期は判定できない。

重複遺構 VI区4号住居跡、6号溝と重複し、4号住居跡より新しく、6号溝より古い。



第373図 VI14号住居跡

第1節 竪穴住居跡

V115号住居跡 (第374・375図 PL. 28・85)

位置 J・K-9・10

平面形 歪んだ台形状で西半は不明。

方位 N-62°-E

壁 土層断面の所見から、ほぼ垂直に立ち上がり、高さは30cmを測る。東壁北部は攪乱により不明。他の部分も攪乱で壁線が乱れており、本来の壁としては南壁の遺存状況が良い。

床面 地山のロームをそのまま床としており、比較的凹凸が少なく平坦。

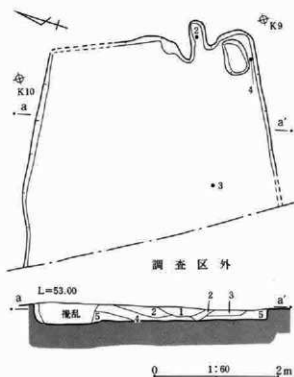
カマド 東壁南寄りで燃焼部と竪穴内に45cm張り出した袖部を検出。袖部は灰色粘土で構築され、左右非対称で右軸のほうが20cmほど短い。本来的にはシンメトリーと考えられる。燃焼部は幅45cm、奥行き70cmを測る。火床面は床面のレベルよりやや低く、灰掻きによる凹凸が残る。奥壁は緩い角度で外傾して煙道部へ続くと思われる。

貯蔵穴 南東隅で検出され、楕円形を呈し、上端径58×36cm、下端径48×25cm、深さ12cmを測る。

埋土の特徴 上層ではロームブロックが多いが、攪乱の可能性が高く、むしろ下層では自然堆積と思われる黒褐色土が堆積する。

遺物 埋土を主に土器片120点ほどが出土しており、時期は8世紀代が主体と考えられる。

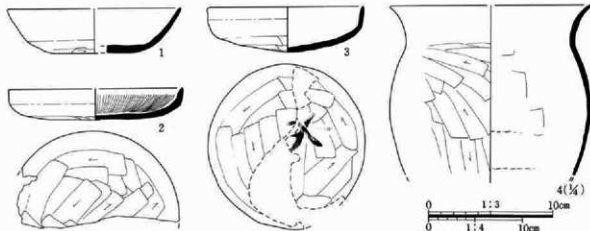
重複遺構 なし。



土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒とロームブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒が少なく、1層よりも黒い。
- 5 黒褐色土 4層に近似し粘性が強い。
- 6 黒褐色土 ローム粒が多く粘性が強い。

第374図 V115号住居跡



第375図 V115号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

VI16号住居跡 (第376図)

位置 K-13

平面形 方形と思われる。

規模・方位 不明。

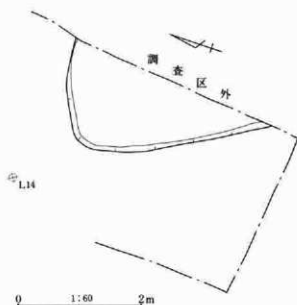
壁 やや弧を描く北壁と西壁の一部を検出したのみで他は不明。立ち上がりはやや外傾気味で、高さは西壁で34cmを測る。

床面 北西部がややくぼむ。貼り床の有無は不明。

その他 住居跡付随施設は検出されなかった。

遺物 なし。

重複遺構 なし。



第376図 VI16号住居跡

(5) VII区の竪穴住居跡

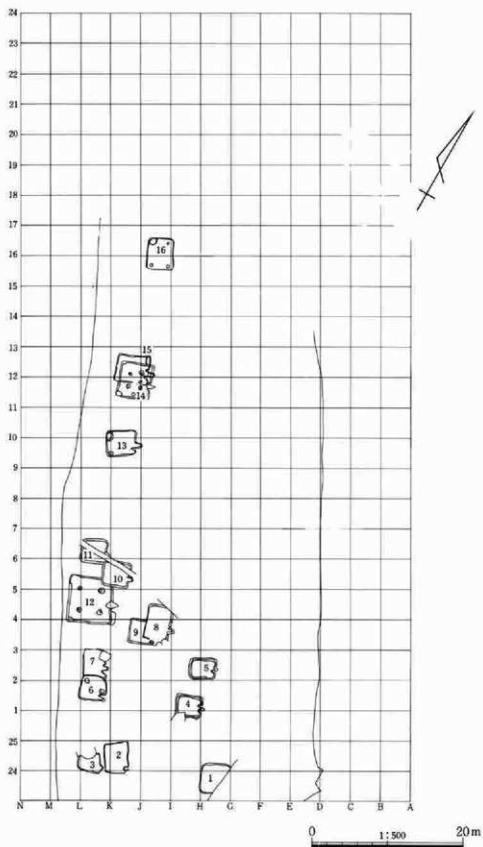
概要

VII区で検出された竪穴住居跡は16軒で、時期は8世紀末～9世紀初にほぼ限定される。分布や個々の住居跡の特徴はV区と同様である。重複状況からは2～3代にわたって営まれたと想定される。I-16グリッドに位置する16号住居跡を境にして北側では竪穴住居跡は検出されていない。地形的には約4%の勾配で周辺では最も強い傾斜を示す地点である。この傾斜面を越えた上位平坦面であるVII区では小形の遺構はほとんど検出されていない。このことから竪穴住居跡群を主体とする居住域の北限をこの地点に想定することができる。またVII区東側には住居跡の分布が見られないが、この地点に位置する12

号古墳は近代まで墳丘が遺存していたことから、これを避けて住居地の選定をしたことが推定される。一方西側は傾斜面が迫っていることから、住居跡の分布は南北に細長く展開すると考えられよう。



第377図 VII区全景 (北西より撮影、手前は4号溝)



第378圖 VII区竪穴住居跡位置圖

第三章 検出された遺構と遺物

VII 1号住居跡 (第379図 PL. 86)

位置 G-24・25

平面形 横長方形と思われる。

規模 西辺3.90m、北辺(4.1)m以上
東辺・南辺不明。

方位 N-63°-E

壁 やや外傾して立ち上がり、高さは北西部で
52cmを測る。

床面 地山を床とし、ほぼ水平で平坦。

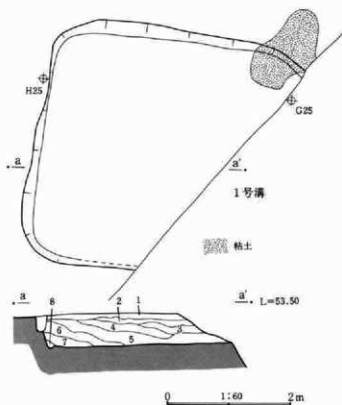
その他 住居跡付随施設は検出されなかった。なお

北壁の東隅で、竪穴外から床面にかけて約
140×70cmの範囲に粘土の分布が見られたが、
本住居跡との関連は不明。

埋土の特徴 暗褐色土が主体で、中位にロームブ
ロックも見られるが、全体的には自然堆積の
感が強い。

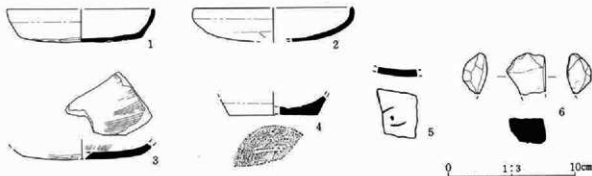
遺物 埋土から100点強の土器片が出土しており、
時期は10世紀代が主体。

重複遺構 VII区1号溝に切られる。



土層説明

- 1 現在の耕作土で、As-Aを多く含む。
- 2 黄褐色土 2~3cm次のロームブロックを多く
含む、As-Aも見られる。
- 3 暗褐色土 しまりの強い砂質で、ローム粒含む。
- 4 暗褐色土 炭化物を含み、ローム粒は少ない。
- 5 暗褐色土 ローム粒を均等に含む、下位では
ロームブロックも見られる。
- 6 黒褐色土 大粒ローム粒を均等に含む、炭化物
や灰も見られる。
- 7 暗褐色土 壁の崩落土と思われ、ロームブ
ロックが主体。
- 8 黒褐色土 周溝埋土で、ローム粒は見られない。
- 9 擾乱



第379図 VII 1号住居跡及び出土遺物

第1節 竪穴住居跡

Ⅶ2号住居跡 (第380図 PL. 28・86)

位置 J-24・25

平面形 歪んだ横長方形。

規模 東辺4.32m、西辺3.70m
北辺3.18m、南辺2.98m

面積 11.83㎡

方位 N-61°-E

壁 南西部が比較的良好に遺存し、高さは24cmを測る。

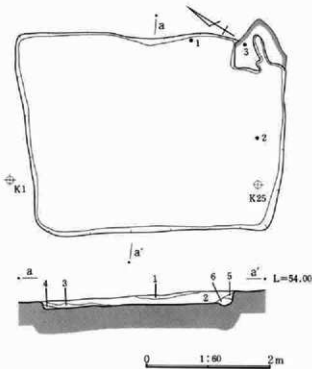
床面 中央部がやや高く、周囲よりも踏み固められている。地山のロームは露出してないが、貼り床の有無は不明。

カマド 東壁の南隅で、燃焼部を検出。黒灰色粘土で構築され、袖部は竪穴内に40cmほど張り出すが、崩壊により原型を止めておらず、本来の形状、規模については不明。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。埋土の特徴 下層にはローム粒を含むが、全体にロームブロックが目立つ。

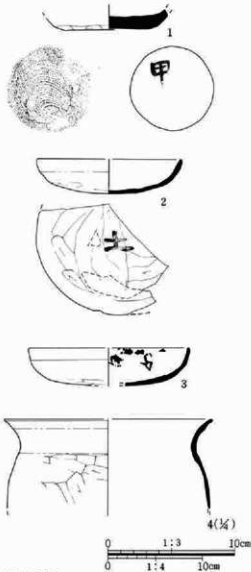
遺物 出土位置は集中傾向を示さず、埋土全体から約100点の土器片が出土。時期は8世紀後半～9世紀初頭が主体。

重複遺構 特に重複遺構はないが、西側に30cmと隣接してⅦ区3号住居跡が位置する。



土層説明

- 1 現在の耕作土。
- 2 暗褐色土 砂質で、小ロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土 2に近似するが、ローム粒の混入が多い。
- 4 褐色土 ローム粒を主とする粘質土。
- 5 暗褐色土 小ロームブロックとローム粒を多く含む。
- 6 黒褐色土 軟質。



第380図 Ⅶ2号住居跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

Ⅶ3号住居跡 (第381・382図 PL. 28・86)

位置 K-24・25

平面形 西辺の短い台形。

規模 東辺2.45m、西辺不明。

北辺(3.9)m、南辺3.00m

方位 N-75°-E

壁 東壁は比較的遺存状況が良好。立ち上がりはほぼ垂直で、高さは24cmを測る。

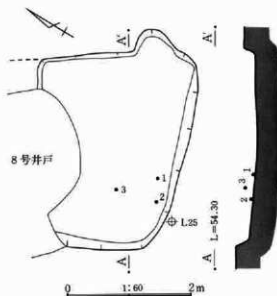
床面 地山のロームで、南側が踏み固められる。

カマド 東壁南寄りで燃焼部を検出。幅70cm、奥行き35cmを測る。袖部は不明。

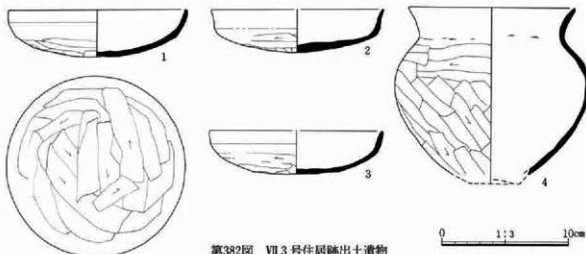
埋土の特徴 ロームブロックを多く含む。

遺物 大部分が埋土出土で、時期は8世紀代が主。

重複遺構 Ⅶ区8号井戸に切られる。



第381図 Ⅶ3号住居跡



第382図 Ⅶ3号住居跡出土遺物

Ⅶ4号住居跡 (第383図 PL. 28)

位置 G・H-1・2

平面形 縦長長方形。

規模 東辺(3.0)m、西辺(2.9)m

北辺3.70m、南辺(3.7)m

方位 N-68°-E

壁 全体に遺存状況良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、高さは北壁で47cmを測る。上位では崩落が見られる。

床面 地山のロームを床としており、中央部がやや高く周辺との比高差は4cmを測る。

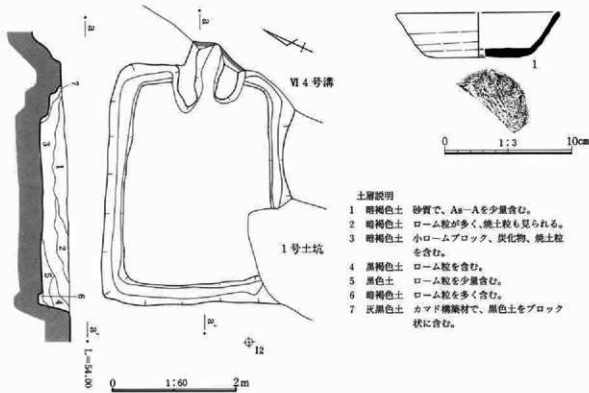
カマド 灰色粘土で構築され、袖部は壁穴内に75cmほど張り出す。燃焼部は細長く、幅38cm、奥行き100cmを測る。火床面は赤変しており、焚口から緩い角度で傾斜して立ち上がる。煙道部は重複するⅦ区4号溝に切られて不明。

周溝 壁に沿って全周し、幅3~8cm、深さ15~26cmを測る。

埋土の特徴 壁際に地山崩落土が見られ、住居廃絶後しばらくは放置されていたと思われる。

遺物 杯と壺片数点が埋土から出土。

重複遺構 Ⅶ区4号溝に切られ、Ⅶ区1号土坑は新旧関係は不明。



第383図 VII 4号住居跡及び出土遺物

VII 5号住居跡 (第384図 PL. 28・86)

位置 G・H-3

平面形 縦長長方形。

規模 東辺2.56m、西辺2.76m

北辺3.68m、南辺3.55m

面積 8.21㎡

方位 N-58°-E

壁 ほぼ垂直か外傾して立ち上がり、高さは全体に40cm前後を測る。壁線は北壁が直線的で、他は丸みを持ち、特に隅部は弧線を意識して掘り込まれたらしい。

床面 黒褐色土とロームブロックを混合して貼り床を施す。ほぼ平坦で、レベルもほとんど差はない。

カマド 東壁のほぼ中央部で燃焼部を検出。黒色の強い粘土で構築され、袖部は右側が55cm、左側が35cm張り出すが、本来は左右対称と思われる。燃焼部の幅は40cm、奥行き70cmを測る。

火床面は床面とほぼ同レベルで続いて平坦面をなす。奥壁は急角度で立ち上がるが、本体の崩落によって本来の形状を示していない可能性もある。

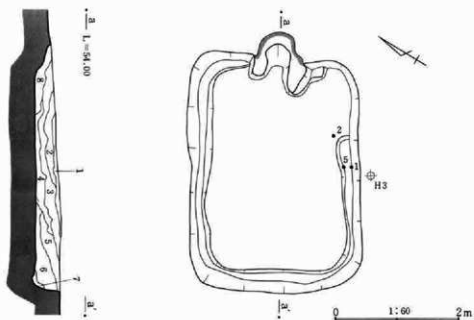
周溝 南辺東部を除いた壁に沿ってめぐる。規模は一定しておらず、幅8~25cm、深さ8~10cmを測る。埋土はロームブロック混じりの暗褐色土で、人為的な埋土の可能性はある。

埋土の特徴 住居廃絶後初期の堆積土はロームをあまり含まないことから、しばらくは放置されていたものか。

遺物 埋土からの出土が大部分で土器片数は100点強を数える。時期は8世紀代後半にほぼ限定される。

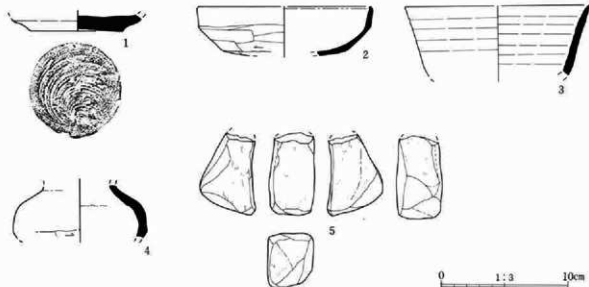
重複遺構 なし。

第三章 検出された遺構と遺物



土層説明

- 1 明褐色土 現在の耕作土で、As-A を多く含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む、小ロームブロックも見られる。
- 4 黒褐色土 ロームブロック、焼土、灰を含む。
- 5 暗褐色土 不均質で、ロームブロックを含む。
- 6 黒色土 上位にローム粒が見られる。
- 7 暗褐色土 黒色土とロームブロックの混合土。
- 8 黒色土 カマド構築材粘土の覆れ込み。



第384図 VII 5号住居跡及び出土遺物

Ⅶ6号住居跡 (第385・386図 PL. 28・86)

位置 K-2・3

平面形 横長長方形。

規模 東辺(2.8)m、西辺3.16m
北辺(3.0)m、南辺3.52m

方位 N-62°E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、壁線も直線的。高さは西側で41cmを測る。東壁は土層断面の所見から第385図の破線部分と考えられる。

床面 大部分は地山ロームで、貼り床はない。

カマド 東壁の南隅で燃焼部を検出。本体は竪穴外に地山を掘り込んで構築される。規模は幅60cm、奥行き100cmを測る。

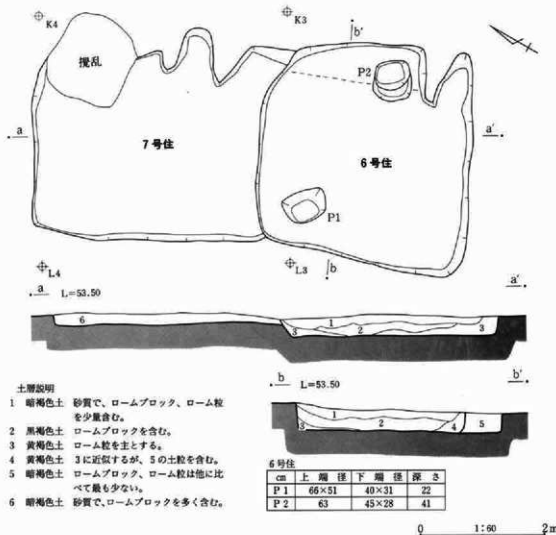
ピット 北西隅とカマド左脇からそれぞれ方形のピットが検出された。貯蔵穴の可能性はある。

その他 東辺の張り出し部は、当初は壁と考えられたが、土層から住居跡埋没以前の掘り込みであることが判明した。底面が床面レベルとほぼ同じだが、埋土は自然堆積の感が強く、ピットP2を含めて別遺構の可能性はある。

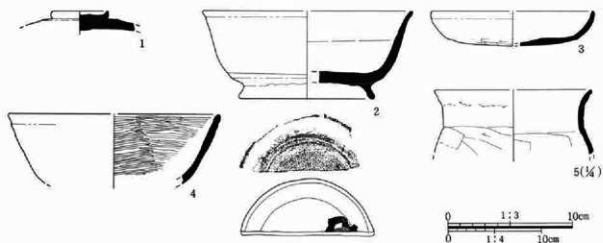
埋土の特徴 全体にローム粒、ロームブロックが多く、人為的な埋土の可能性はある。

遺物 土器片150点ほどが埋土から出土しており、時期は奈良時代が主。重複するⅦ区7号住居跡の遺物も混入している可能性が高い。

重複遺構 Ⅶ区7号住居跡を切る。



第385図 Ⅶ6号・7号住居跡



第386図 VII 6号住居跡出土遺物

VII 7号住居跡 (第385・387図 PL. 28・86)

位置 K-2・3

平面形 横長長方形。

規模 主軸長3.1m、直行軸長4m前後。

方位 N-59°-E

壁 西壁が比較的良好的に遺存し、高さは25cmを測る。北東部は後世の擾乱により破壊されて不明。

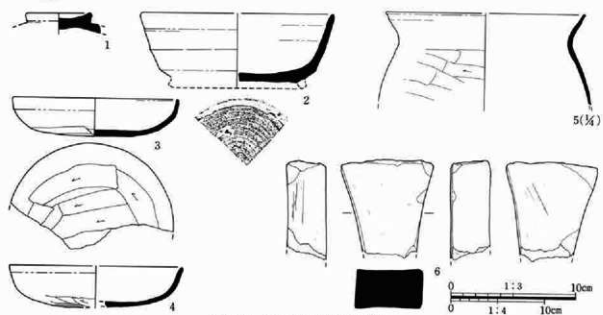
床面 地山はハードルームに達していないが、貼り床は確認できなかった。レベルは重複するVII区6号住居跡よりも20cm前後高く、ほぼ平坦。

カマド 東壁のほぼ中央付近で燃焼部と袖部が遺存する。袖部は黒灰色粘土で構築され、壁穴内に35cmと60cmの長さで張り出す。短い左袖部は崩落したものであろう。燃焼部は主体が壁穴内にあり、幅80cm、奥行き85cmを測る。

その他 柱穴、貯蔵穴、周溝は検出されなかった。埋土の特徴 全体にロームブロックが多く、人為的な埋土の可能性がある。

遺物 8世紀後半を主体とした土器片70点ほどが埋土から出土。

重複遺構 VII区6号住居跡に切られる。



第387図 VII 7号住居跡出土遺物

VII 8号住居跡 (第388・389図 PL. 29・86)

位置 I-4・5

平面形 横長長方形。

規模 東辺(4.8)m、西辺4.36m

北辺(3.5)m、南辺(3.4)m

面積 (14.9)㎡

方位 N-68°E

壁 立ち上がりはほぼ垂直で、西側の遺存状況が良好。高さは北西部で38cmを測る。

床面 VII区9号住居跡と重複する南半部分と西壁際に沿って帯状に貼り床を施す。この貼り床部分は北東半の地山床部分と比べてレベルが2～6cm高い。

カマド 東壁の南寄りで検出。本体は竪穴外の地山を掘り込み、主に灰色粘土と黒色土の混合土を用いて構築する。袖部はわずかに20cmほど竪穴内に張り出す。燃焼部は幅45cm、奥行き75cmを測り、火床面は深い皿状にくぼむ。奥壁は緩く外傾して立ち上がりそのまま煙道部

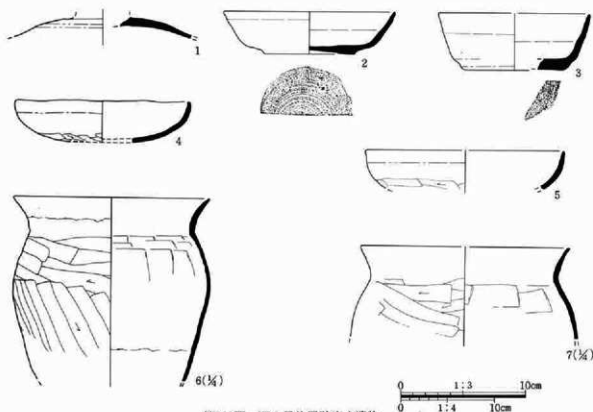
に続くと思われるが、明確には検出できなかった。なお袖部には補強としての壁の破片が埋め込まれている。

周溝 東壁～北壁に沿って回り、幅10～18cm、深さ2～8cmを測る。カマドの両脇で掘り込みが終わっていることから、カマド位置の決定と同時に、それ以降に周溝の掘削が行われたと思われる。

埋土の特徴 全体に黒褐色土を主体としており、ロームブロックが比較的少ないことから、自然堆積の可能性はある。

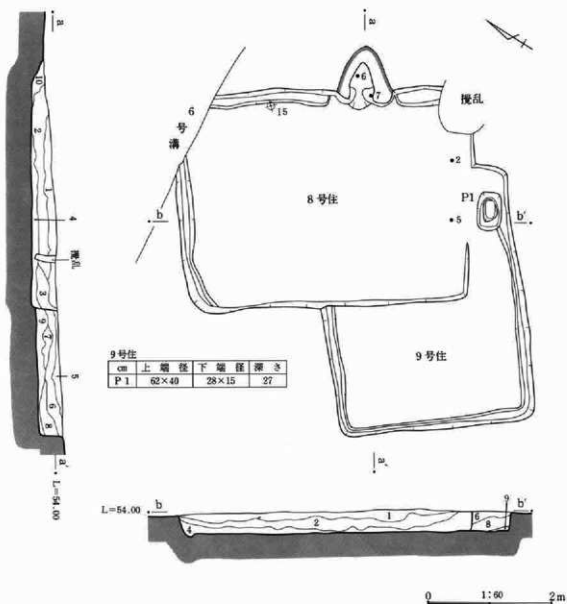
遺物 カマド燃焼部内から大形の甕、他に埋土から8世紀末～9世紀初頭を主とした土器片が240点ほど出土している。埋土出土遺物は重複するVII区9号住居跡からの混入品も含まれる。

重複遺構 VII区6号溝より古く、VII区9号住居跡より新しい。



第388図 VII 8号住居跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



土層説明

- 1 黄褐色土 ロームブロックをわずかに含む。
- 2 黒褐色土 小ロームブロックとローム粒を含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4 黒色土 ローム粒を少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む。
- 7 褐色土 小ロームブロックを含む。
- 8 黒色土 ローム粒を少量含む。
- 9 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 10 灰

第389図 VII 8号・9号住居跡

第1節 竪穴住居跡

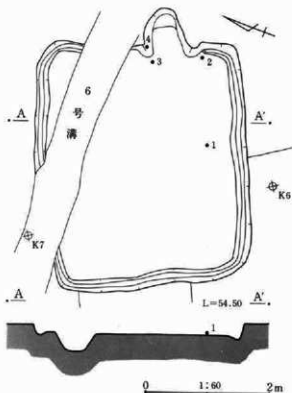
Ⅶ9号住居跡 (第389図 PL. 29)

位置 I・J-4・5
 平面形 縦長長方形と思われる。
 規模 西辺3.05m、南辺3.93m、東辺・北辺不明。
 方位 N-67°E
 壁 立ち上がりはほぼ垂直で壁線も直線的。高さは西側で39cmを測る。
 床面 地山のロームを床とし、平坦。床レベルはⅦ区8号住居跡よりも最大8cmほど高い。

ピット 南東隅で隅丸形状のピットを検出。位置と形状から貯蔵穴となる可能性が高い。
 周溝 壁に沿って全周し、幅7~13cm、深さ2~6cmを測る。埋土にはロームを主とした黄褐色土が堆積する。
 埋土の特徴 全体にロームブロックが見られる。
 遺物 埋土から130点ほどの土器片が出土しているが、本住居跡に確実に伴うものは不明。
 重複遺構 Ⅶ区8号住居跡に切られる。

Ⅶ10号住居跡 (第390図 PL. 29・86)

位置 J-6
 平面形 縦長長方形。
 規模 東辺2.96m、西辺2.95m
 北辺3.87m、南辺3.47m
 面積 (11.56) m² 方位 N-66°E
 壁 ほぼ垂直で、高さは西側で29cmを測る。
 床面 黒褐色土による貼り床で、凹凸が目立つ。
 カマド 東壁南寄りにあり、大部分は地山を掘り込んで本体を構築する。燃烧部は幅50cm、奥行き70cmを測る。煙道部は不明。
 周溝 壁に沿って全周し、幅13~18cm、深さ3~7cmを測る。
 埋土の特徴 ロームブロックが目立つ。
 遺物 カマド付近を中心に9世紀前半の土器片約250点が出土。
 重複遺構 Ⅶ区6号溝より古く、Ⅶ区12号住居跡より新。



第390図 Ⅶ10号住居跡及び出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物

VIII11号住居跡 (第391・392図 PL. 29・86)

位置 K-6・7

平面形 縦長長方形。

規模 東辺(3.25)m、西辺3.86m

北辺3.25m、南辺不明。

方位 N-65°E

壁 西壁の遺存状況が良好で、高さ39cmを測る。

床面 地山のロームを床とし、踏み固めによる黒褐色土が乗る。

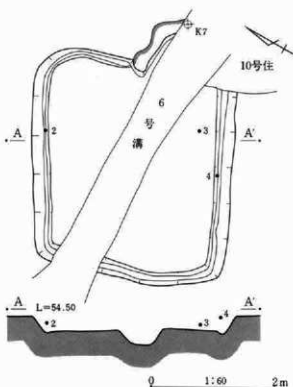
カマド 東壁南寄りで竪穴外に構築された燃焼部左半部を検出。

周溝 壁に沿って全周し、幅8~16cm、深さ2~5cmを測る。

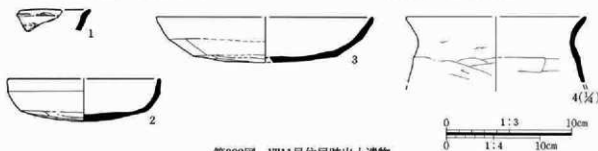
埋土の特徴 暗褐色土が主で、ローム粒を多く含む。

遺物 ほとんどが埋土から出土しており、時期は8世紀代が主。

重複遺構 VII区6号溝に切られるが、VII区10号住居跡との新旧関係は不明である。



第391図 VIII11号住居跡



第392図 VIII11号住居跡出土遺物

VIII12号住居跡 (第393~397図 PL. 29・86・87)

位置 J・K・L-4・5・6

平面形 正方形。

規模 東辺(6.2)m、西辺6.28m

北辺(6.0)m、南辺6.20m

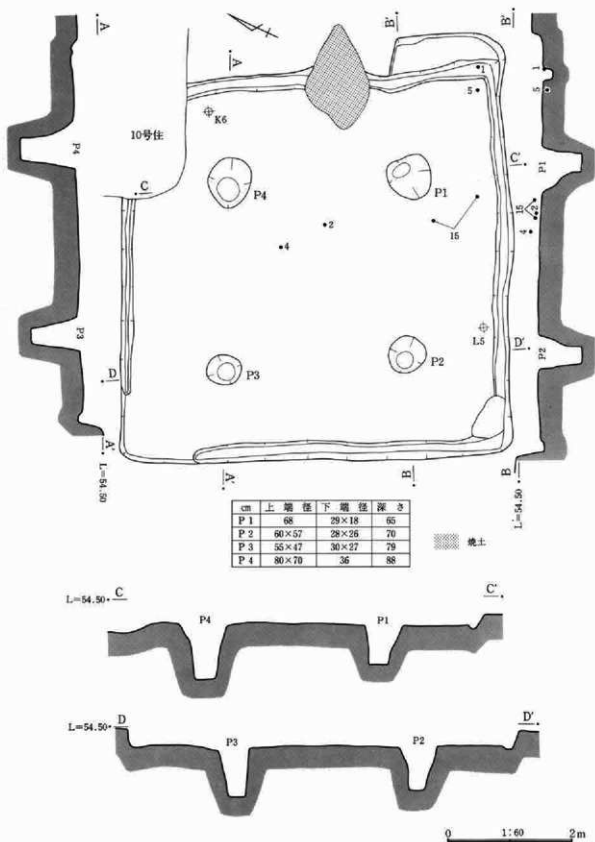
面積 (37.3)㎡

方位 N-66°E

壁 垂直か外傾気味に立ち上がり、壁線も直線的で乱れは少ない。高さは遺存状況の良好な西壁で41cmを測る。

床面 地山のロームを床とし、西から東側へ10cmの比高差で傾斜する。

カマド 東壁中央で天井部が崩落した状態の本体を検出した。焚口は袖部に2個の壺を伏せ、その上に5ないし6個体の壺を「入れ子」にして横架させる構造である。これに用いた壺は粘土が付着する部分と二次的火熱を受けた部分が認められることから、焚口の内側に器面を露出させ、外側は粘土等で被覆していたと考えられる。燃焼部は平面が三角形状で、幅50cm、奥行き55cmを測る。奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。煙道と火床面は不明瞭であった。掘り方は床面より12cmほどの深さの浅い皿状を呈し、燃焼部だけでなく焚口前面の80



第393图 VIII2号住居跡

第三章 検出された遺構と遺物

cm近くまで達している。埋土は焼土粒とローム粒を含む暗褐色土で、燃焼部内の堆積土との区別が難しい。なお崩落した架構材の土器と火床面と推定されるレベルの間には、10cmほどの厚さで焼土ブロックを含む暗褐色土が堆積していることから、住居廃絶後しばらくは放置されていた可能性がある。

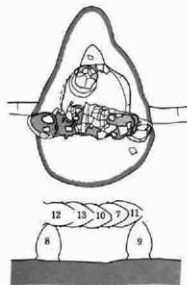
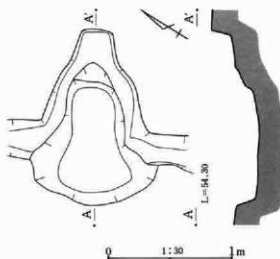
ピット 検出された4基はほぼ対角線上にあり、柱穴と考えられる。柱間寸法はP1-P2が3.0m、P2-P3は2.9m、P3-P4は2.9m、P1-P4は2.8mを測る。

その他 カマド右脇の壁上に幅55cm、長さ190cmで、床からの高さ5cmの方形張り出し施設を検出した。底面は平坦だが硬化面はない。

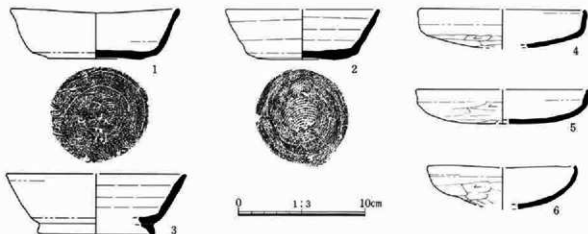
周溝 北西隅を除いた壁に沿って巡る。幅13~25cm、深さ4~13cmを測る。住居の下層と同じ土が堆積する。

埋土の特徴 暗褐色土が堆積し、ロームは含まず。
遺物 カマド以外では埋土からの出土がほとんどで、8世紀後半のものが主体。

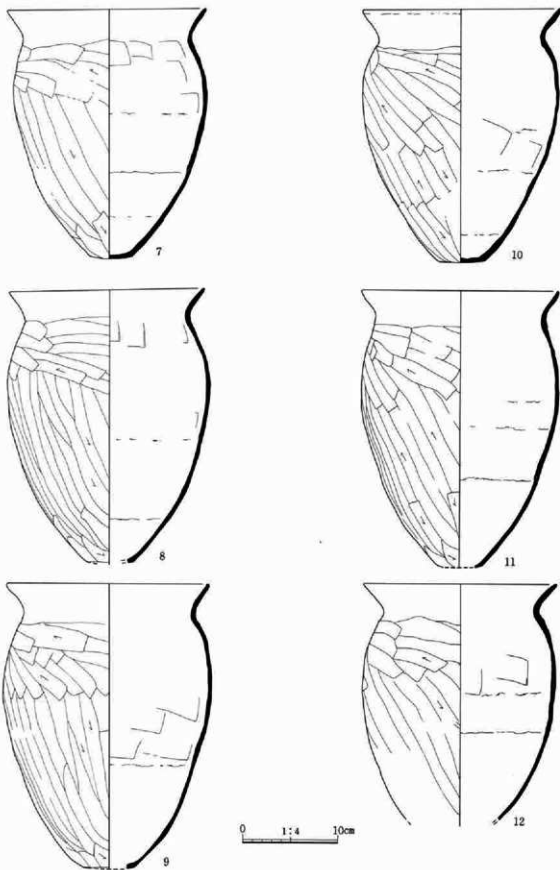
重複遺構 VII区10号住居跡よりも古い。



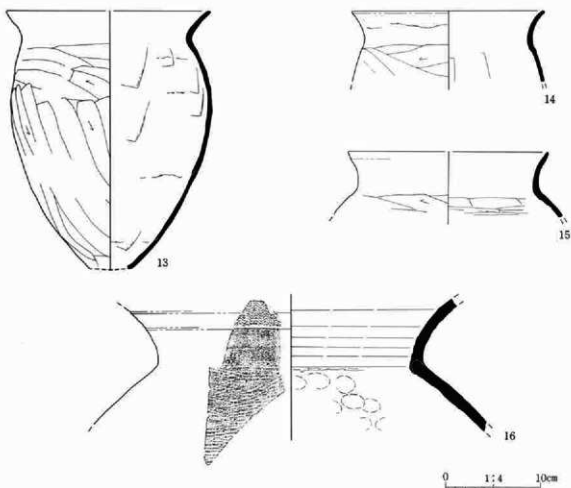
第394図 VII12号住居跡カマドと復元図



第395図 VII12号住居跡出土遺物(1)



第396圖 VII12号住居跡出土遺物(2)



第397図 VII12号住居跡出土遺物(3)

VII13号住居跡 (第398図 PL. 30・87)

位置 J・K-10・11

平面形 縦長方形。

規模 東辺3.03m、西辺3.18m

北辺3.93m、南辺3.73m

面積 11.70㎡

方位 N-57-E

壁 北壁は直立気味で、他は崩落のためか外傾する。壁線の乱れは少なく、直線的。高さは南壁中央部で40cmを測る。

床面 全体に10cm前後の厚さで貼り床を施す。ほぼ平坦だが、西から東側へ約25cmの比高差で傾斜しており、掘り方面でも30cm前後の高低差が見られる。

カマド 東壁のやや南寄りで見出。燃焼部は壁穴外の地山を掘り込んでおり、平面は楕円形を呈し、幅70cm、奥行き130cmを測る。袖部は粘土主体で構築され、壁穴内に60cm張り出す。本来は左右対称と思われるが、左袖部は確認できなかった。

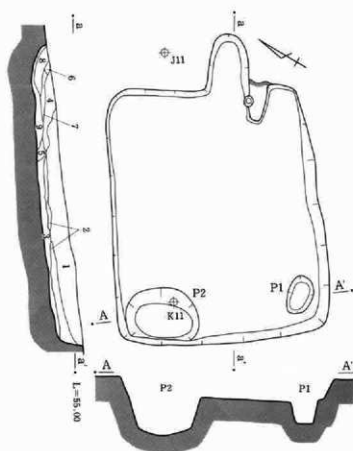
ピット 西辺の両隅で2基が見出されたがいずれも上屋の支柱穴より貯蔵穴の可能性が高い。

埋土の特徴 下層にロームブロックが目立つことから、崩壊時点で人為的に埋められたと考えられよう。

遺物 ほとんどが埋土からの出土で、時期は9世紀後半と思われる。土器の他に刀子1点。

重複遺構 なし。

第1節 竪穴住居跡

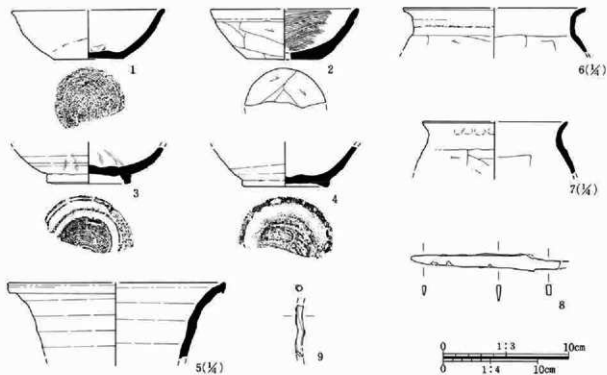


土層説明

- 1 暗褐色土 砂質で粗い。ローム粒、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック、炭化物を含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロックが多く、炭性あり。
- 4 暗褐色土 カマド構築材の粘土、灰、焼土を含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒が主で、焼土粒を含む。
- 6 赤褐色土 焼土が主、カマド天井崩落土だろう。
- 7 灰褐色土 灰が主で、焼土も多く含む。
- 8 暗褐色土 灰を多く含む。
- 9 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む。火床面下埋土。

cm	上端径	下端径	高さ
P 1	61×39	47×25	43
P 2	120×81	90×52	62

0 1:60 2m



第398図 VII13号住居跡及び出土遺物

Ⅶ14号住居跡 (第399・400図 PL. 30・87)

位置 I・J-12・13

平面形 正方形。

規模 東辺・西辺・北辺・南辺4.45m

面積 19.82㎡

方位 N-64°-E

壁 ほぼ垂直で、壁線も直線的。

床面 中央部は地山のロームを床としているが、周辺部の貼り床の有無は不明。レベルは西から東側へ14cmほど傾斜する。

カマド 東壁南寄りで検出。燃焼部は竪穴内にあり、袖部は粘土で構築されて竪穴内に50cm張り出す。燃焼部は平面楕円形を呈し、幅50cm、奥行き110cmを測る。火床面は床面より15cmほどくぼんだ皿状で、凹凸が多い。火床面の下は粘土、灰、ローム粒の混合土を15cmほどの厚さで埋める。煙道部は削平により検出不可能であった。

ピット 6基が検出され、うちP1・P2・P3・P6の4基が柱穴である。いずれも対角線上に位置し各隅からの距離はほぼ等しい。柱間寸法はP1-P2が1.8m、P2-P3は1.7m、P3-P6は1.7m、P1-P6は2.0mを測る。P5は南壁際中央にあり、出入り口に伴う支柱穴の可能性がある。

周溝 壁に沿って全周し、幅10cm前後、深さ4cm前後を測る。北東部を除く隅部で周溝とつながる隅切り状の掘り込みが検出された。

埋土の特徴 暗褐色土が主体で、ロームブロックは少ない。

遺物 埋土からの出土が主体で、時期は8世紀代が多い。

重複遺構 Ⅶ区15号住居跡に切られる。



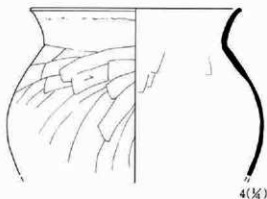
1



2



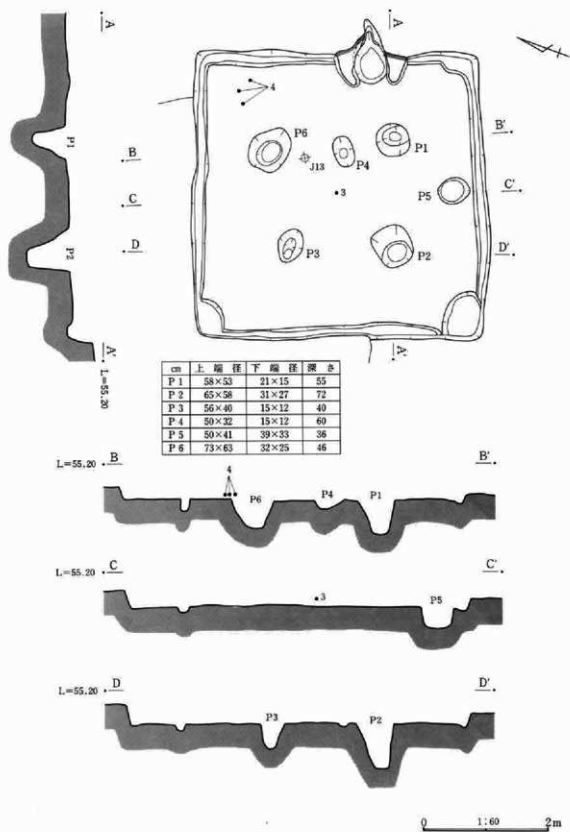
3



4(壺)



第399図 Ⅶ14号住居跡出土遺物



第400图 VII14号住居跡

Ⅶ15号住居跡 (第401・402図 PL. 30・87)

位置 I・J-12・13

平面形 縦長長方形。

規模 東辺(3.8)m、西辺3.52m

北辺4.32m、南辺4.55m

面積 (14.85) m²

方位 N-63°-E

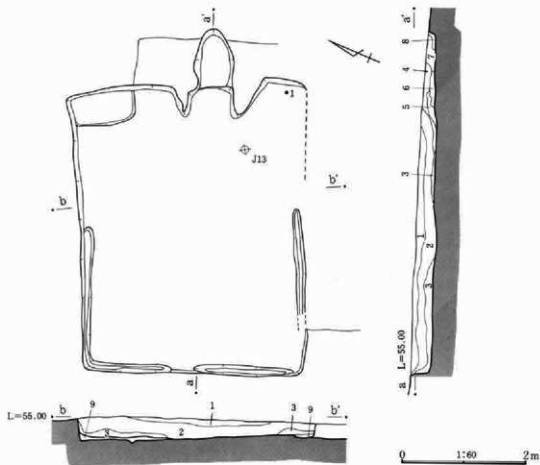
壁 ほぼ垂直な立ち上がりで、壁線も直線的。

南東部は遺構重複のため不明。高さは36cmを測る。

床 面 レベルが重複するⅦ区14号住居跡とほぼ同

じため、重複部分ではいずれの床面か不明瞭。北半では土層断面から厚さ5cm前後の貼り床が認められたが、この掘り方は14号住居跡床面までは達していない。全体に西から東側へ約10cmの比高差で傾斜する。

カマド 東壁南寄りで検出。袖部は粘土と黒褐色土の混合土で構築され、竪穴内に60cmほど張り出す。燃烧部は平面方形を呈し、幅65cm、奥行き48cmを測る。火床面は床面よりわずかに



土層説明

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色土 砂質。 | 6 褐色土 焼土粒、灰を含む。 |
| 2 暗褐色土 ロームブロックを少量含む。 | 7 赤褐色土 天井部崩落土。 |
| 3 暗褐色土 ローム粒を含む。 | 8 暗褐色土 焼土粒を少量含む。 |
| 4 黄褐色土 ロームブロックと少量の焼土を含む。 | 9 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を含む貼り床埋土。 |
| 5 灰褐色土 灰、焼土塊、ロームブロックを含む。 | |

第401図 Ⅶ15号住居跡

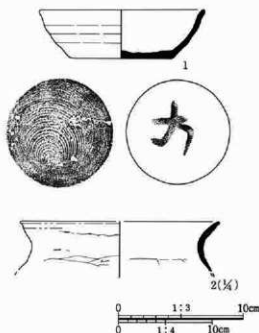
くぼむ程度でほぼ平坦。煙道部は傾斜した燃焼部奥壁から続き、ほぼ水平に90cm延びる。煙道部掘り方は40cmと幅広く、ここに粘土等を埋填して構築したと考えられる。

周溝 西半で検出され、幅10~15cm、深さ2~5cmを測る。西辺中央で長さ35cmで断絶する。その他 北東隅で長方形の掘り込みを検出。規模は100×53cm、深さ4cmの浅い凹みで、性格は不明。

埋土の特徴 ローム粒やロームブロックを含むが、人為的な埋土の可能性は不明。

遺物 埋土から8世紀末前後の土器片が120点ほど出土している。

重複遺構 VII区14号住居跡を切る。



第402図 VII15号住居跡出土遺物

VII16号住居跡 (第403図)

位置 H・I-16・17

平面形 長方形。

規模 東辺4.10m、西辺2.03m

北辺3.08m、南辺3.50m

面積 13.71㎡

方位 N-62°-E

壁 上半が削平され、遺存状況は悪い。ほぼ垂直の立ち上がりで、高さは西壁で30cmを測る。

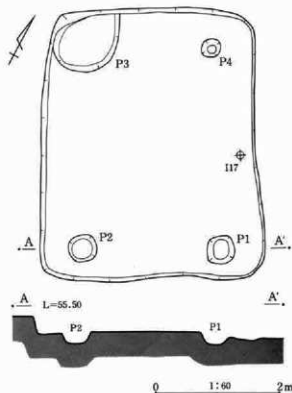
床面 中央部が高く、最大15cmの比高差で壁際へ傾斜する。

ピット 住居の各隅から4基検出されており、P3は規模の点で疑わしいが、他は柱穴となる可能性が高い。

その他 本跡はカマドや炉等がないことから、一般的な住居とは目的を異にする付属建物と考えられる。ただし時期は不明。

遺物 なし。

重複遺構 なし。



cm	上端径	下端径	傾斜	深さ
P 1	44×43	32×25	18	
P 2	44×43	31	19	
P 3	-×92	-×72	19	
P 4	33×30	14×12	22	

第403図 VII16号住居跡

第2節 掘立柱建物跡

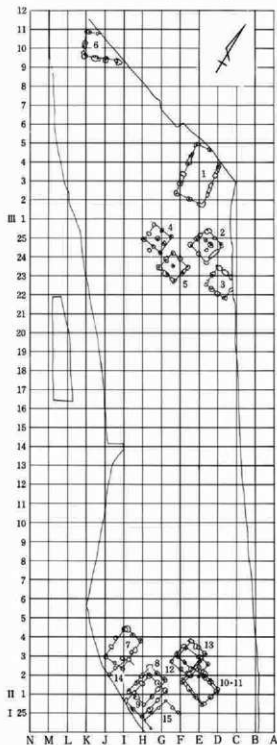
概要

掘立柱建物跡は建替えを含めて14棟（1978「上武国道地域埋蔵文化財調査概報Ⅴ」P32では11棟としたが、図面検討の結果3棟を追加。）がⅠ～Ⅲ区の平坦な地形部分で検出されており、その位置関係から2群に分けることができる。北側に位置する建物群では5棟が検出されており、それぞれがほぼ等間隔の配置で、重複関係は見られない。群構成は更に北東側へ広がることが予想され、「L」字あるいは「コ」字状配置を示すと思われる。一方南側の建物群は8棟が検出されており、建物相互の重複や建替えが見られる。またこの地点では柱列の認定はできなかつ

たが、明らかに掘立柱建物跡の柱穴と思われるビットが多数検出されていることから、実際の建物数は調査区内でも数棟上回ると考えられる。



(1グリット=4m)



第404図 掘立柱建物跡位置図 (1/800)

1号掘立柱建物跡 (第406図 PL. 31)

位置 III区D-1・2・3、E-2・3・4
 平面形 長方形。
 規模 桁行5間 (西辺11.15m)
 梁行2間 (南辺6.10m)
 面積 (68.4) m² 方位 N-7°-W
 柱穴 桁方向の側柱穴は2基一对で、約3.1×0.6m、深さ30cmの溝で結ばれる掘り方もち、更に長さ90~100cm、深さ50cmで掘り込み、ここに柱を据えている。各隅部の柱穴は「L」字形の掘り方で、ほぼ中央部に柱が据えられる。検出面からの深さは最大値で96cmを測り、平均値をみても本遺跡で検出された掘立柱建物跡のなかでは最も深い。柱痕跡と思われる小穴は径20cmほどの円形で、すべてが直線の柱筋にのる。柱間寸法は桁方向ではそろっており、各隅柱との間が8尺で、他は7尺を基準としているらしい。梁行では不均等で、南面の柱間寸法は60cmの差がある。

遺物 特に目立ったものは出土していない。

重複遺構 III区32号・33号・54号住居跡、1号土坑と重複しており、III区32号・54号住居跡より古く、その他との新旧関係は不明。

その他 本遺跡で検出された建物のなかでも最大の規模を誇り、柱列配置に見られたように規格性に富んだ構造が予想されることから、本建物は集落の中核をなすことが考えられる。また2~5号掘立柱建物跡と「L」字あるいは「コ」字状の配置関係を構成すると推定され、この場合出入り口は東面する平入りと考えられる。

2号掘立柱建物跡 (第405・407図 PL. 31)

位置 II区D-24・25、E-24
 平面形 ほぼ正方形。
 規模 桁行3間 (西辺4.80m・東辺4.90m)
 梁行2間 (北辺4.10m・南辺4.60m)
 面積 22.2m²

方位 N-17°-E

柱穴 床東と思われる柱穴を含め、13基が検出された。掘り方平面形は方形あるいは楕円形で、隅部のP1とP6は「L」字形を呈する。桁方向の側柱P2・P3とP7・P8・P13は、それぞれ幅70cm、深さ20~50cmの溝で結ばれる。検出面からの深さは平均して90~100cmで、床東柱穴と思われるP11とP12はこれより10cmほど浅い。各柱痕跡は側柱筋に乗っているが、北東隅柱穴のP9は50cmほど西側へずれる。柱間寸法は等間隔ではないが、P1-P10とP4-P5(7尺)やP3-P4とP6-P13(6尺)のように対称位置の柱間をそろえる意図はあったようである。

遺物 P7埋土から須恵器蓋の破片が出土している。

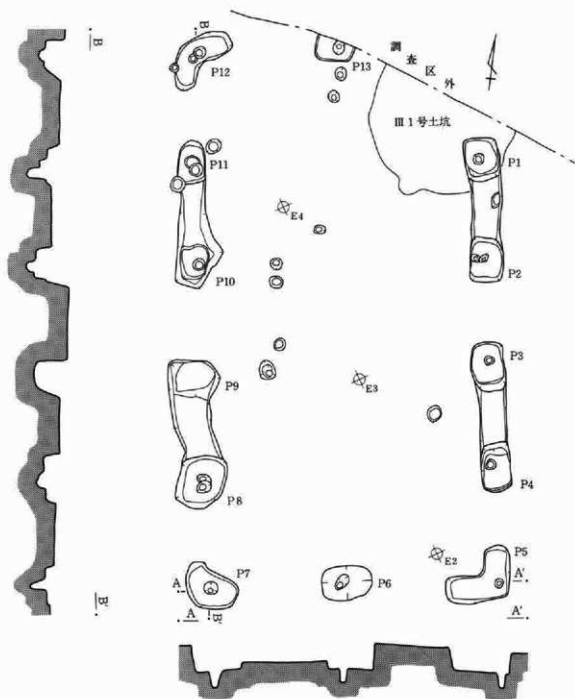
重複遺構 II区1号・4号・6号住居跡と重複しており、4号住居跡より新しく、6号住居跡より古い。他との新旧関係は不明。



第405図 2号掘立柱建物跡出土遺物

3号掘立柱建物跡 (第408図 PL. 31)

位置 II区C・D-23・24
 平面形 長方形。
 規模 桁行3間 (南辺5.10m)
 梁行2間 (西辺4.22m)
 面積 (20.7) m² 方位 N-83°-W
 柱穴 掘り方は長さ100cm強、幅80cm前後の長方形で、検出面からの深さは最大値で72cmを測る。柱痕跡は不明瞭なものが多いが、P5では掘り方底面から更に30cmくぼむ。柱筋は通っており、対面する柱間寸法をそろえている。桁方向中央の柱間寸法が5尺、梁方向の柱間寸法が7尺と思われる。



	上端径 (cm)	柱幅断径 (cm)	深さ (cm)
P 1	92×75	22	87
P 2	94×72	24×14	93
P 3	92×72	30	90
P 4	104×60	22	96
P 5	136×60	30	85
P 6	108×74	38×22	80
P 7	118×80	28	86
P 8	114×100	32×26	67
P 9	110×78	—	78
P10	98×92	24	91
P11	92×58	28	89
P12	(130)×60	20	60
P13	84×—	30×24	66

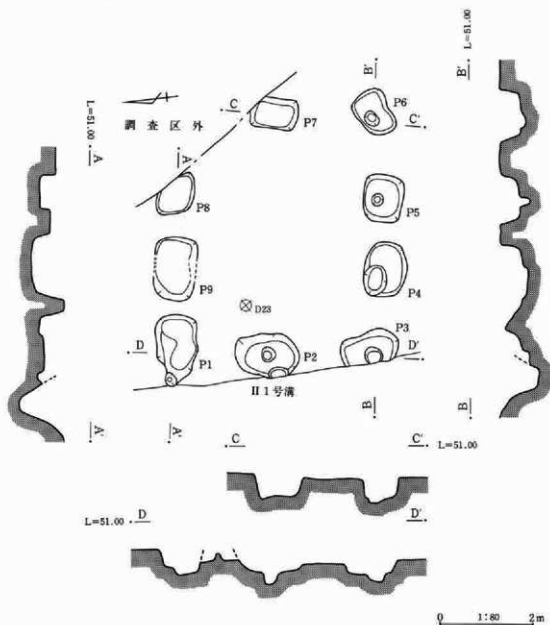
	柱間寸法 (m)
P 1—P 2	2.10
P 2—P 3	2.10
P 3—P 4	2.15
P 4—P 5	2.50
P 5—P 6	3.40
P 6—P 7	2.80
P 7—P 8	2.20
P 8—P 9	(2.30)
P 9—P10	(2.30)
P10—P11	2.00
P11—P12	2.35
P12—P13	3.14

第406図 1号掘立柱建物跡

第三章 検出された遺構と遺物

遺物 目立った遺物は出土していない。

重複遺構 平安時代と思われるⅡ区1号溝に切られる。他にⅡ区7号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



	上端径 (cm)	柱頭跡径 (cm)	深さ (cm)
P 1	(145)×88	—	55
P 2	140×90	30	64
P 3	125×—	(35)	50
P 4	114×92	—	55
P 5	100×88	24	66
P 6	100×76	36×26	54
P 7	104×62	—	52
P 8	78×76	—	22
P 9	125×90	—	72

柱間寸法 (m)	
P 1—P 2	1.85
P 2—P 3	2.30
P 3—P 4	1.65
P 4—P 5	1.65
P 5—P 6	1.75
P 6—P 7	2.10
P 8—P 9	1.50
P 1—P 9	1.85

第408図 3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡 (第409図 PL. 31)

位置 II区F-24、G-24・25

平面形 やや東西に長い歪んだ方形。

規模 桁行2間(北辺4.15m・南辺4.48m)

梁行2間(西辺3.70m・東辺4.00m)

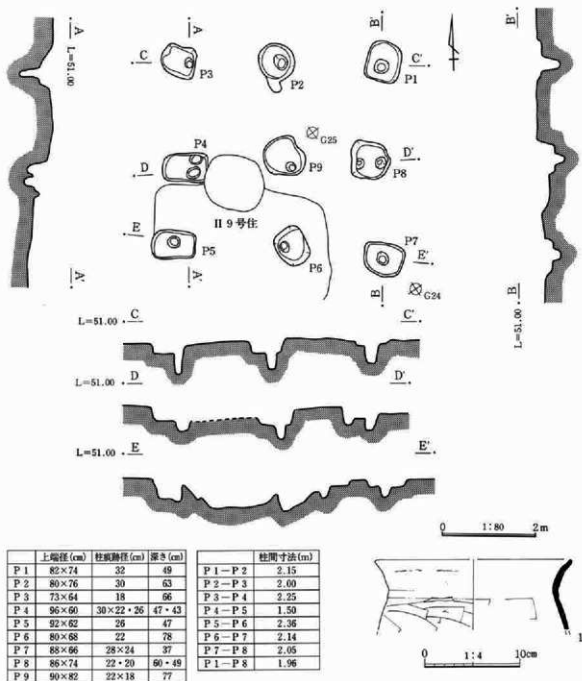
面積 16.6m² 方位 N-1°-E

柱穴 方形あるいは円形の掘り方をもち、さらに柱の太さにあわせて15~40cm掘り込む。柱筋

はほぼ通っており、柱間寸法は7尺を主とするがばらつきが大きい。P4とP8は内側にも柱痕跡があり、これが中央のP9と直線で結ばれることから東西根太の東柱と考えられよう。

遺物 P6から壺口縁部が出土。

重複遺構 II 9号・10号住居跡との新旧関係不明。



第409図 4号掘立柱建物跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

5号掘立柱建物跡 (第410図 PL. 31)

位置 II区E-23、F-22・23、G-23

平面形 ほぼ正方形。

規模 桁行2間(北辺4.15m・南辺4.30m)

梁行2間(東辺4.05m・西辺4.00m)

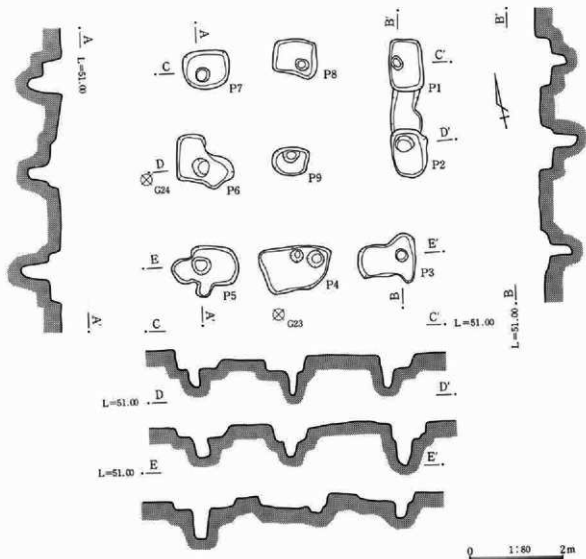
面積 17.1m²

方位 N-11'-E

柱穴 掘り方は長方形で、掘り込みは浅く、さらに柱部分のみ50cm前後掘り込む。柱間寸法はほぼ7尺等間で東辺のみ6尺、8尺と違っている。なおP1とP2は浅い溝で結ばれる。

遺物 目立った遺物は出土していない。

重複遺構 II60号土坑と重複するが、新旧関係不明。



	上階径(cm)	柱板跡径(cm)	深さ(cm)
P 1	110×72	30×22	67
P 2	110×72	40×30	87
P 3	122×106	26	67
P 4	152×96	26・34	36・89
P 5	142×110	38	79
P 6	120×100	28×32	62
P 7	96×84	28	79
P 8	92×60	30	72
P 9	78×58	35×26	58

	柱間寸法(m)
P 1 - P 2	1.75
P 2 - P 3	2.30
P 3 - P 4	2.22
P 4 - P 5	2.10
P 5 - P 6	2.06
P 6 - P 7	1.95
P 7 - P 8	2.15
P 1 - P 8	2.00

第410図 5号掘立柱建物跡

第2節 掘立柱建物跡

6号掘立柱建物跡 (第411図 PL. 32)

位置 III区I-9、J-9・10

平面形 長方形と思われる。

規模 桁行3間 (南辺6.95m・6.60m)

梁行2間 (西辺4.85m・5.15m)

面積 (33.8) m²

方位 N-65°-E・N-73°-E

柱穴 北東部を除き13基を検出。掘り方は方形だ

が重複しているため個々については不明。

柱通りからP1-P3-P5-P7-P9-P

11-P13とP2-P4-P6-P8-(P10)-P

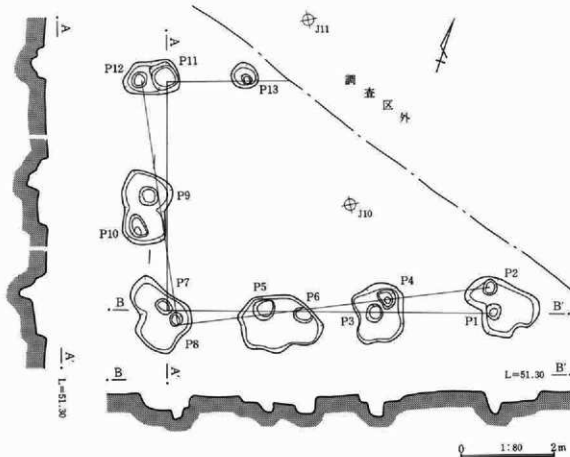
12が柱列を構成し、柱筋は通るが各柱間寸法

はばらつきがある。建て替えと思われ、両者

の桁方向は8度ほどずれる。新旧関係は不明。

遺物 特に目立った遺物は出土していない。

重複遺構 なし。



	上端径 (cm)	柱頭跡径 (cm)	深さ (cm)
P 1	160×108	30	50
P 2	#	28	33
P 3	124×110	38	45
P 4	#	(16)	49
P 5	182×125	48×40	34
P 6	#	40×30	31
P 7	150×115	36×26	66
P 8	#	28	50
P 9	150×108	(18)	51
P10	#	40	42
P11	118×70	—	36
P12	#	32	37
P13	54	20	59

	柱間寸法 (m)
P 1 - P 3	2.50
P 3 - P 5	2.35
P 5 - P 7	2.15
P 7 - P 9	2.30
P 9 - P11	2.55
P11 - P13	1.80

	柱間寸法 (m)
P 2 - P 4	2.15
P 4 - P 6	1.80
P 6 - P 8	2.70
P 8 - P10	(2.00)
P10 - P12	(3.20)

第411図 6号掘立柱建物跡

第III章 検出された遺構と遺物

7号掘立柱建物跡 (第412・415図 PL. 32)

位置 H-2・3・4、I-2・3

平面形 長方形。

規模 桁行3間(東辺6.83m・西辺6.68m)

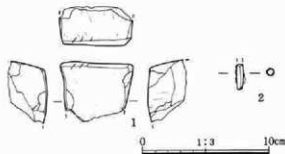
梁行2間(北辺4.10m・南辺4.20m)

面積 28.1m² 方位 N-3°-E

柱穴 掘り方は方形あるいは楕円形で、柱痕跡は10cm前後と浅いことから柱に負荷された重みによって沈んだものか。桁方向の柱筋は通るが、梁行中央のP2とP7はやや北側にずれる。柱間寸法は等間ではないが6尺、7尺、8尺が用いられたらしい。

遺物 柱穴内より砥石片、釘が出土するが、攪乱や重複遺構に伴う可能性もある。

重複遺構 II区81号・82号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



第412図 7号掘立柱建物跡出土遺物

8号掘立柱建物跡 (第413・416図 PL. 32)

位置 I区G・H-25、II区G・H-1

平面形 長方形。

規模 桁行3間(東辺6.75m・西辺6.53m)

梁行2間(北辺4.20m・南辺4.45m)

面積 28.9m² 方位 N-6°-E

柱穴 掘り方は方形で、柱痕跡は浅くやや不明瞭。柱間寸法は等間ではないが、6尺、7尺、8尺で対称となるよう意図したと思われる。

遺物 P3から須恵器蓋が出土している。

重複遺構 II区60号住居跡、II区3号溝より古い。



第413図 8号掘立柱建物跡出土遺物

9号掘立柱建物跡 (第414・417図 PL. 32)

位置 I区G・H-25、II区G・H-1

平面形 長方形。

規模 桁行3間(東辺7.43m・西辺7.28m)

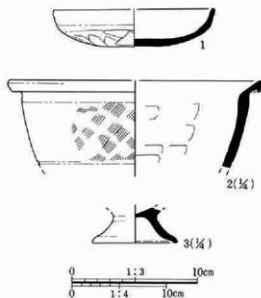
梁行2間(北辺4.68m・南辺4.62m)

面積 34.3m² 方位 N-15°-E

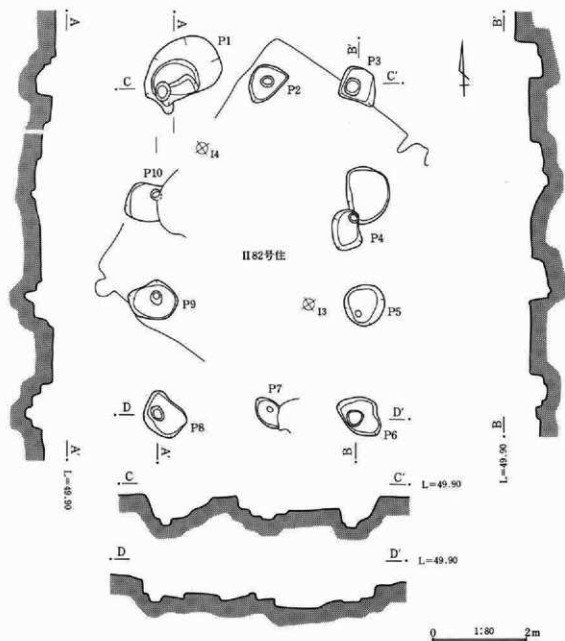
柱穴 方形の掘り方で、柱痕跡は更に20~30cmくぼむ。桁方向の柱筋は通るが、梁中央のP5とP10はやや外側にずれる。柱間寸法はほぼ8尺等間で、P1-P2、P7-P8が他より広い。

遺物 P7とP9から奈良時代の大形土器片が出土。

重複遺構 II区60号・61号・77号・85号住居跡と重複し、60号・61号住居跡よりは古い。また8号掘立柱建物跡とは北方にずれた位置で重複しており、建て替えの可能性が高い。

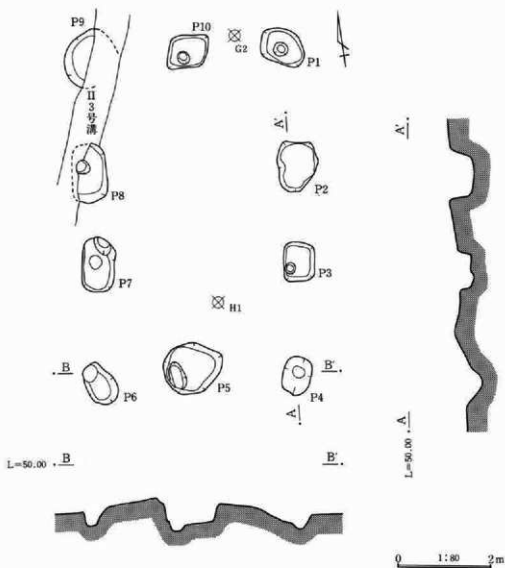


第414図 9号掘立柱建物跡出土遺物



上層径 (cm)	柱幅跡径 (cm)	厚さ (cm)	柱間寸法 (m)		
P 1	104×84	40×32	74	P 1-P 2	2.26
P 2	86×64	28	44	P 2-P 3	1.83
P 3	78×70	36	68	P 3-P 4	2.74
P 4	85×58	18	(84)	P 4-P 5	2.00
P 5	88×85	(12)	(66)	P 5-P 6	2.20
P 6	108×78	36	53	P 6-P 7	1.80
P 7	(80)×50	(10)	15	P 7-P 8	2.40
P 8	94×74	34×24	38	P 8-P 9	2.45
P 9	105×82	30×26	63	P 9-P 10	2.10
P 10	—	(24)	24	P 1-P 10	2.10

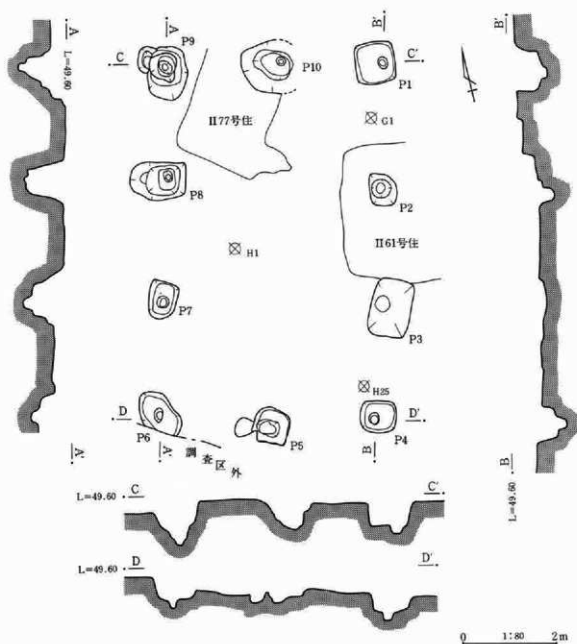
第415図 7号掘立柱建物跡



	上端径 (cm)	柱基礎径 (cm)	深さ (cm)
P 1	102×68	30×28	—
P 2	102×88	—	56
P 3	80×66	20	32
P 4	78×60	(26)	30
P 5	130×104	(60×30)	59
P 6	90×62	(34)	40
P 7	110×68	(28)	62
P 8	122×—	(26)	51
P 9	(120)	—	—
P 10	82×66	26	64

	柱間寸法 (m)
P 1—P 2	2.44
P 2—P 3	2.12
P 3—P 4	2.20
P 4—P 5	2.10
P 5—P 6	1.86
P 6—P 7	2.35
P 7—P 8	2.00
P 8—P 9	(2.15)
P 9—P 10	(2.10)
P 1—P 10	2.10

第416図 8号掘立柱建物跡



	上端径 (cm)	柱洞直径 (cm)	深 3 (cm)
P 1	88	24×20	66
P 2	65×57	20	(56)
P 3	122×87	(34)	16
P 4	78×68	25×22	64
P 5	78×74	50×32	20
P 6	116×70	30×18	65
P 7	82×62	25	84
P 8	120×75	24	86
P 9	112×86	30×20	100
P10	(112)	14	64

	柱間寸法 (m)
P 1 - P 2	2.60
P 2 - P 3	2.40
P 3 - P 4	2.40
P 4 - P 5	2.38
P 5 - P 6	2.38
P 6 - P 7	2.34
P 7 - P 8	2.60
P 8 - P 9	2.30
P 9 - P10	2.50
P 1 - P10	2.20

第417图 9号掘立柱建物跡

第三章 検出された遺構と遺物

10号掘立柱建物跡 (第418・419図 PL. 32)

位置 II区D-1・2、E-1・2

平面形 長方形。

規模 桁行3間(北辺6.23m・南辺6.30m)

梁行2間(東辺4.00m・西辺4.00m)

面積 25.0㎡

方位 N-73°-W

柱穴 P1~P10の10基が検出された。掘り方は楕円形か方形で、柱痕跡は更に20~50cm深い。

柱筋は通り、柱間寸法はほぼ7尺等間と思われる。

遺物 P1から奈良時代の土器片が出土する。

重複遺構 II区64号・65号・69号・70号・73号・75号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。なお11号掘立柱建物跡とは建て替えの関係にあると考えられるが、新旧関係は不明である。

11号掘立柱建物跡 (第419図 PL. 32)

位置 II区D-1・2、E-1・2

平面形 長方形。

規模 桁行3間(北辺6.20m・南辺6.35m)

梁行2間(東辺4.00m・西辺4.00m)

面積 28.8㎡

方位 N-70°-W

柱穴 P11~P18が本掘立柱建物跡の柱列を構成する。掘り方は楕円形あるいは方形で、10号掘立柱建物跡の掘り方と重複する。柱痕跡は10号掘立柱建物跡ほど明瞭ではなく、浅いものが多い。柱筋は通るが、柱間寸法のばらつきが大きい。

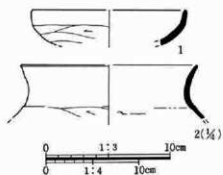
遺物 なし。

重複遺構 II区64号・65号・69号・70号・73号・75号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。

12号掘立柱建物跡 (第420図 PL. 32)

位置 II区D-2、E・F-2・3

平面形 長方形。



第418図 10号掘立柱建物跡出土遺物

規模 桁行(3)間(北辺6.55m)

梁行(西辺2間4.35m・東辺は3間か)

面積 (28.3)㎡

方位 N-85°-W

柱穴 北辺と南東隅の2基が不明で、9基が検出された。掘り方は方形を主とする。柱痕跡は掘り方底面から更に7~20cm深い。柱筋は通るが、柱間寸法のばらつきは大きい。

遺物 なし。

重複遺構 II区73号・75号・76号住居跡、10号・11号・13号掘立柱建物跡と重複しており、いずれも新旧関係は不明。

13号掘立柱建物跡 (第421図 PL. 32)

位置 II区D-3、E-2・3、F-2

平面形 長方形。

規模 桁行2間(東辺4.26m・西辺4.42m)

梁行2間(北辺3.92m・南辺3.82m)

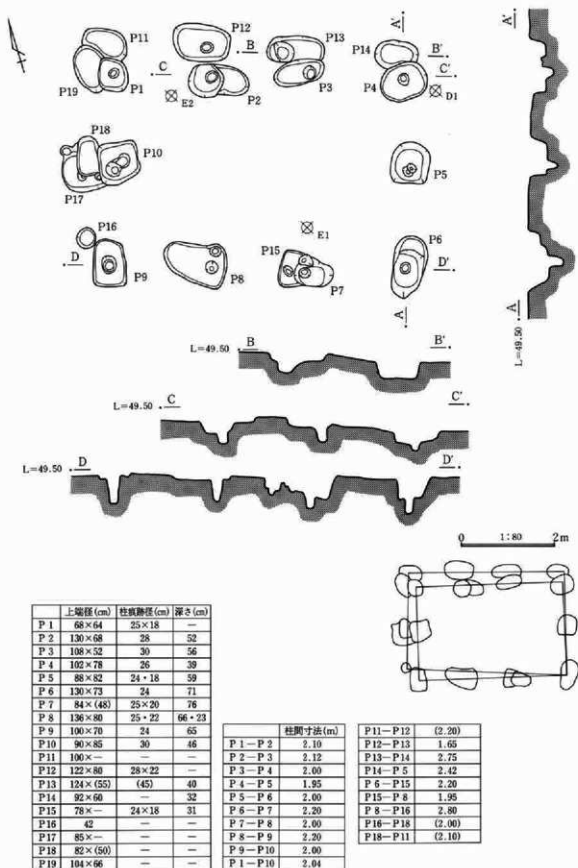
面積 16.5㎡

方位 N-79°-W

柱穴 掘り方は楕円形か方形で、中央の東柱穴は円形。側柱の柱筋は通り、柱間寸法もほぼ7尺が基準と思われる。中央のP9は梁方向(東西方向)の柱筋に乗っていることから、主軸(棟方向)と直交する根太が想定できる。

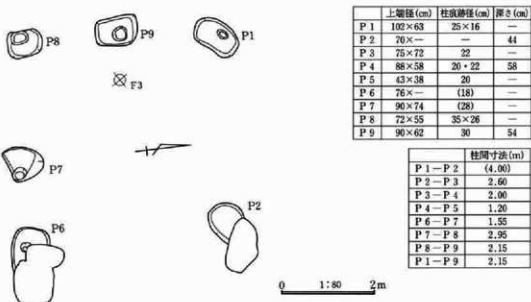
遺物 古墳時代初頭の土器片が出土。

重複遺構 II区73号・74号・75号・76号住居跡、12号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

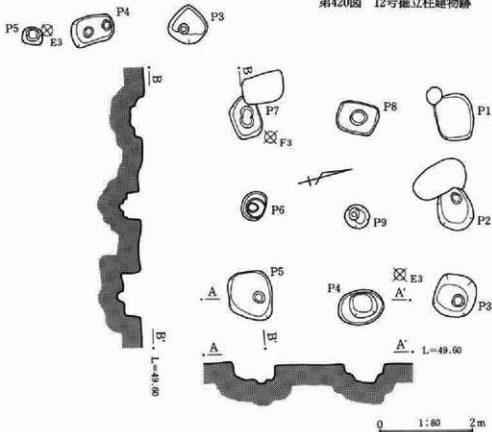


第419図 10号・11号掘立柱建物跡

第三章 検出された遺構と遺物



第420図 12号掘立柱建物跡



第421図 13号掘立柱建物跡

第2節 掘立柱建物跡

14号掘立柱建物跡 (第422図 PL. 32)

位置 II区G・H-1・2、I-1

平面形・規模 不明。方位 N-(22°)-E

柱穴 桁行の御柱と思われる柱穴3基が検出されたのみである。掘り方は方形か楕円形で、検出面からの深さは40cm前後を測る。柱痕跡は不明瞭だが、柱筋は通ると思われる。

遺物 なし。

重複遺構 II区83号・84号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



0 1:80 2m

	柱間寸法(m)
P 1 - P 2	2.50
P 2 - P 3	1.94

	上端径 (cm)	柱痕跡径 (cm)	深さ (cm)
P 1	88×80	—	—
P 2	70×60	30×26	40
P 3	80×52	—	—

第422図 14号掘立柱建物跡

15号掘立柱建物跡 (第423図 PL. 32)

位置 I区F-24・25、G-23・24・25

平面形 長方形と思われる。

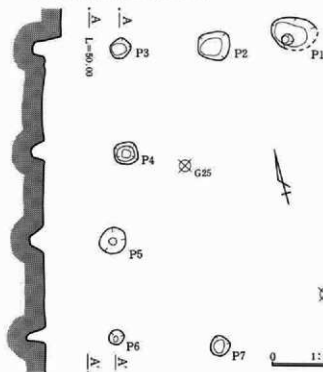
規模 桁行 (西辺6.20m) 他は不明。

方位 N-(30°)-E

柱穴 7基を検出し、東辺柱列は不明。梁行と桁行はほぼ直交するが、各柱痕跡は柱筋からややずれる。

遺物 なし。

重複遺構 I区4号・II区60号・61号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。



	上端径 (cm)	柱痕跡径 (cm)	深さ (cm)
P 1	(110)×68	22	62
P 2	68×60	—	41
P 3	43×40	—	58
P 4	52×48	18	(33)
P 5	56	(16)	28
P 6	30	12×8	47
P 7	42	—	58

	柱間寸法(m)
P 1 - P 2	1.60
P 2 - P 3	2.00
P 3 - P 4	2.20
P 4 - P 5	1.88
P 5 - P 6	2.05
P 6 - P 7	2.20

第423図 15号掘立柱建物跡

第3節 古墳と埴輪

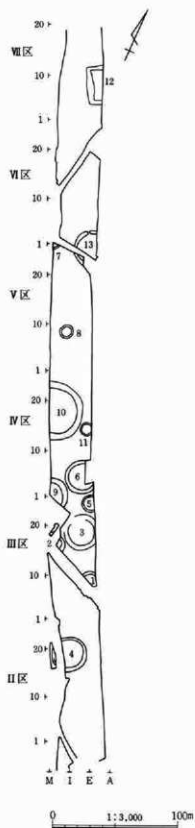
概要

今回の調査で確認された古墳は、円墳12基、方墳1基の合わせて13基である。これらは、調査以前にはその存在が知られていなかったものである。というのは、これらの古墳が調査前に墳丘の盛土部分の大半を失ってしまっていたため、古墳としての指標となるものが全くなかったからである。そこでこれらの古墳に対して新たに下瀬名1号古墳～13号古墳と命名した。また、これらの古墳の間には、周堀を伴わないことから墳丘を有していなかったことが推測される土墳墓が4基確認されている。

古墳の分布が調査区域外にも延びていることは、雨上がりの調査地東側の畑地に古墳の周堀と思われるドーナツ状の黒色土の広がりが点々と認められたことから明らかである。また、昭和52年度に調査地の南西側に隣接して、境町教育委員会が土地改良事業に伴う事前の発掘調査を行った際にも円墳1基が確認されている。しかし、その分布の南、北の限界は今回の調査地内で、西側のそれは境町教育委員会の調査により確認されており、東側も調査地からほどなくして水田の広がる低地部分となってしまうことから、今回確認された範囲を大きく越えて広がるものではなく、その中心的部分を発掘調査したものと思われる。

これらの古墳は、限られた範囲に円墳を中心とした中小規模のものが頰を寄せ合うように築造されていたことと、方墳である13号古墳を除くとすべての古墳の築造時期がかなり接近していることが明らかであることから、古墳相互の間に極めて密接な関係を想定することが可能である。そこで、これらの古墳総体に対しては「下瀬名古墳群」というあらたな名称をつけることとした。

主体部が確認されたものは、8号古墳のみであり、箱式石棺状を呈する整穴式小石槨であった。他は、墳丘とともに平夷されたものと考えられ、その痕跡すら確認することができなかった。時期的にみて、



第424図 古墳位置図

これらの古墳が築造された段階の群馬県では横穴式石室はまだ導入されていないことから、いづれも竪穴系の埋葬施設を有するものであったことは間違いないところである。

5基の古墳からは埴輪の設置が確認されている。埴輪類の大半は円筒埴輪であり、これに少量の朝顔形埴輪と極めてわずかの形象埴輪が認められる。

古墳に設置されていたものとは別に、平安時代の住居跡内から、カマドの構造材として再利用されている埴輪がかなりの数にのぼっている。これらは埴輪の特徴から6世紀後半のものと推測される。隣接地には、この時期の古墳は全く認められないことから、この地の北方約1kmの付近に位置する上淵名古墳群（横穴式石室を主体部とする6世紀後半以降の築造になる古墳多数からなる）から抜き取ってきたものである可能性が高い。

埴輪とともに注目された遺物に主として周堀中から発見された土器類がある。これらのうち5世紀後半に属するものは、周堀の底面に近い深さからの出土例が多いことから古墳に直接伴うものである。

8号古墳は全く盗掘等が及んでいなかったが、主体部内からは1点の鉄製刀子が出土したに過ぎない。また墳丘を伴わない4基の土壌墓からまったく副葬品は出土していない。

古墳から出土した埴輪、土器の特徴、15基の古墳の周堀内から、5世紀末葉ないし6世紀初頭の降下が推定されている榛名山二ツ岳の火山灰（FA）の純堆積層が確認されていること等を考慮すると、本古墳群の形成は5世紀後半を中心とした短期間になされたものと推定される。以下、各古墳の調査について具体的に記述して行くこととする。

1号古墳（第425～427図 PL. 34・88）

古墳群の南寄りに位置している。古墳の東および南側は調査区域外であったため、調査は全体の1/4ほどであった。この付近は耕作による削平がローム面に達するほどに深く及んでおり、遺構の遺存状況は悪く、周堀の底面に近い部分が辛うじて残るだけ

のわずかなものであった。古墳の北側には周堀部分で平安期初頭のⅢ区25号住居が重複している。

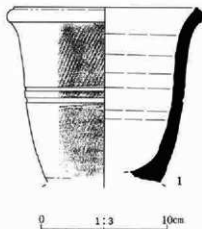
周堀の形状から復元すると、径約15mの円墳と推定される。周堀の幅は、上端で1.25m、下端で1.0m、深さ0.1mを測る。その遺存状態からすると周堀の断面形状は、急角度に立ち上がり、底面は平坦をなすもので、均一な形状で全周するものと推定される。

墳丘部分は削平により完全に失われており、そのため基石の有無についても明らかでないが、周辺に石材の散乱等もまったく認められないことから、もともとなかったものと考えられる。

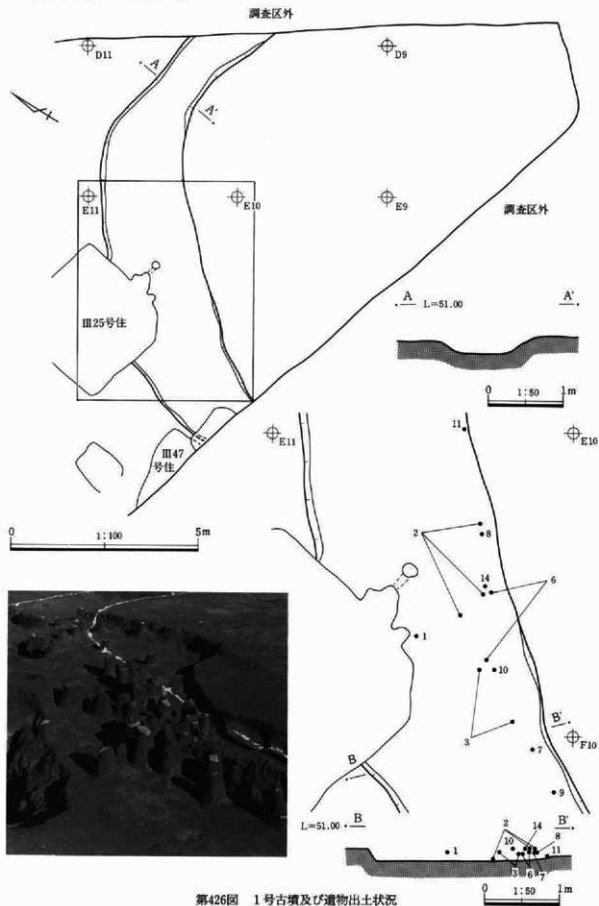
主体部については、墳丘の中心に施設されているとするならば、削平により消滅してしまったものと思われる。

周堀内の墳丘寄りの部分に沿って、埴輪片がまとまった状態で出土している。その種類をみるとすべてが円筒埴輪片であり、完形に復せるものも多い。形象埴輪は1点も含まれない。これらは、明らかに墳丘に樹立されていたものが転落したものであり、墳丘の裾部をめぐる円筒列であったことが推定される。

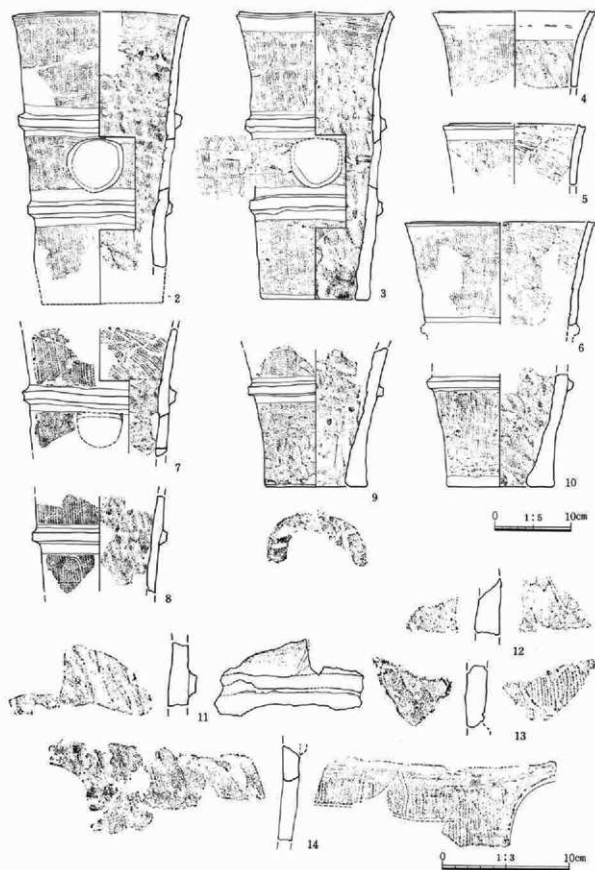
第425図に示した須恵器撞鉢は、周堀内からの出土であるが、その形態的特徴から古墳に後出する7世紀代のものであることから、攪乱による混入と考えられている。



第425図 1号古墳出土遺物



第426図 1号古墳及び遺物出土状況



第427図 1号古墳出土埴輪

第三章 検出された遺構と遺物

2号古墳 (第428～430回 PL. 34・88)

1号古墳の西12mで、同墳と同じ古墳群の南寄り
に位置している。北東側で3号古墳と周堀を接する
ように隣り合っている。調査区内に属していたのは
全体の約2/5ほどである。古墳時代前期のⅢ区31号住
居跡の中心部分を周堀がすっぽり切るように重複し
ている。

周堀の形状から径約17.5mの円墳に復元される。
盛土部分は後世に完全に削平されてしまっているた
め当初の高さは不明である。

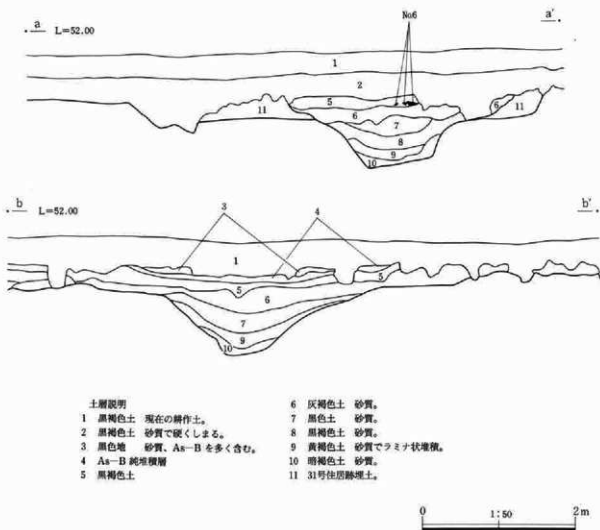
主体部は、古墳の中心部分が調査区外となっ
てしまったため不明であるが、堅穴系の埋葬施設であ
ることは間違いないところである。

周堀は、幅が上端で1.9m、下端で1.0m、深さ0.7

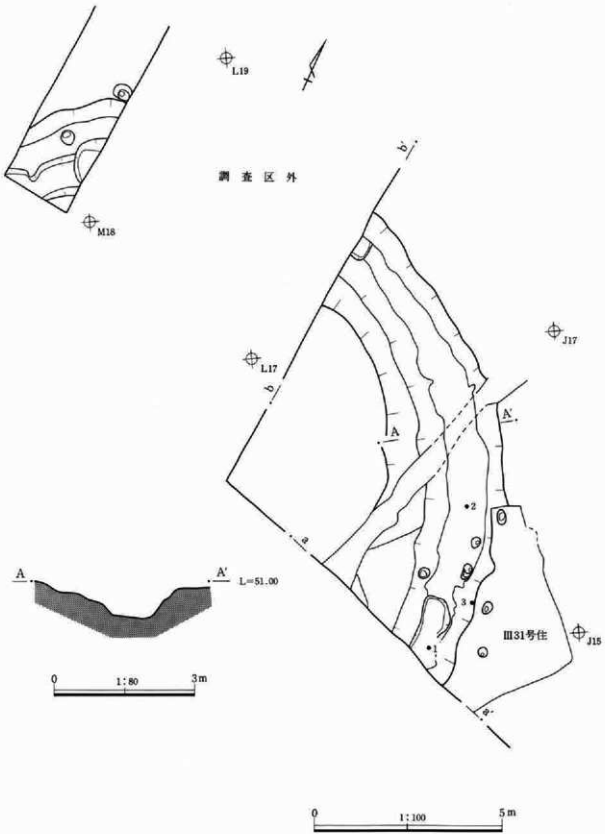
mを測る。その断面形状は台形状を呈しており、墳丘
側、墳丘外側の立ち上がりともかなり急角度である。
その傾向は特に外側に顕著である。墳丘の周囲を均
一な形状で全周しているものと推定される。

基石、埴輪等の施設は、その痕跡がまったく認め
られないことから、もともとなかったものと思われ
る。

周堀内から須恵器、土師器、埴輪小破片が出土し
ている。このうち土師器は古式土師器に属すること
からⅢ区31号住居のものが周堀の掘削時に混入した
ものであろう。埴輪片は量的に僅少であることから
隣接古墳からの流入であろう。須恵器等は周堀の覆
土の最上位からの出土であり、形態的特徴から古墳
に後出する可能性もある。

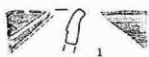


第428図 2号古墳周堀土層断面図



第429図 2号古墳

第三章 検出された遺構と遺物



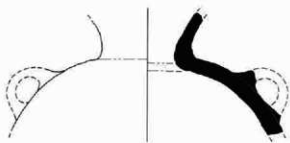
1



2

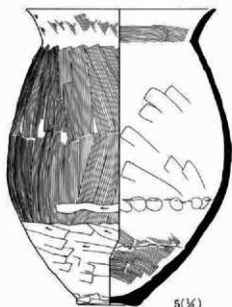


3



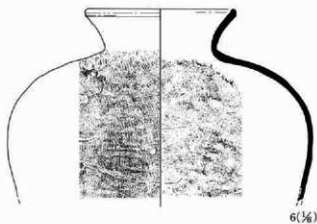
4

0 1:3 10cm



5(1/4)

0 1:4 10cm



6(1/6)

0 1:6 20cm

第430図 2号古墳出土遺物

3号古墳 (第431~434図 PL. 33・88・89)

2号古墳の北東側に隣接している。東側の一部の周堀が調査区外となるのを除くとほぼ全体を調査することができた。ちょうど墳丘下にあたる位置に古墳時代前期に属するⅢ区60号・61号住居跡が重複しており、西側の周堀部分を南北走行の道路跡が重複している。

後世の削平のため墳丘の盛土部分を失い、当時の地表面下のローム層まで達していた。周堀の墳丘側の掘り込み面を基準にすると、径東西で21.5m、南北で21.5mの円墳となる。盛土部分は完全に失っているため当初の墳丘の高さは不明である。

周堀は断面形状が台形に近いもので、上端で幅約3.5m、下端で幅約2.0mである。深さは60~90cmと一様でなく、適当な間隔をおいて深い部分と浅い部分を交互に繰り返している。周堀を掘削する際の作業単位を示すものと推測される。区画に大小の差があるが、6区画を認めることができる。

周堀の墳丘側および墳丘外側の掘り込み部分に沿ってピットが多数発見された点も注意される。ピットの大きさは径上端で30~40cm、深さ30cm前後でほぼ垂直に穿たれている。その数は内側で13、外側で23、周堀内で6であった。ピットの使用法を具体的に知るための資料が不足しているため断言できないが、周堀の内外の掘り込み面と一致しており、しかもこの部分以外には認められていないことから、少なくとも古墳に直接伴うものであることは明らかであろう。また、ピットの形状から柱穴である可能性が最も強いと考えられる。その深さについては、ピットを断ち割って確認する調査を行わなかったため、これより深いものになる可能性も十分残している。

周堀を埋めている覆土中には、周堀中心で、底面から約25cmの位置に標名山二ツ岳噴出の火山灰の純堆積層（FA）が認められる。古墳の築造時期が、火山灰の降下時期と推定されている5世紀末葉ないし6世紀初頭を下らないことを示している。

墳丘西側の裾部および周堀内からかなりまとま

た量の埴輪が出土している。西側の裾部から出土しているものは完形に近いもので、当初よりこの付近に樹立されていたものが横転したものと推測される。埴輪の種類は、大半が円筒埴輪であり、これに少量の朝顔形埴輪が含まれる。形象埴輪はまったく認められない。

主体部は、竪穴系の小規模な施設と思われるが墳丘全体の調査であるにもかかわらずその痕跡すら確認することができなかった。埴輪が墳丘裾部から出土していることから考えるならば、墳丘の削平は、当時の地表下に深くおよぼほどのものではなかったことから、主体部の位置は墳丘上に築かれ、盛土とともに削平されてしまったものと推測される。

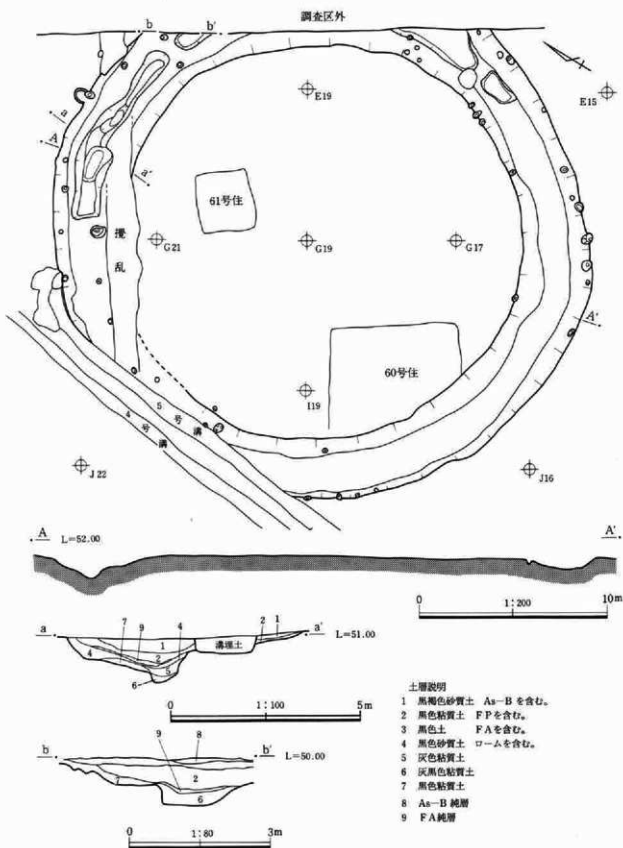
4号古墳 (第435~438図 PL. 35・89・90)

今回確認された古墳のうちでは最も南よりに位置している。本墳の南には、隣接して埴町教育委員会が調査した一円墳がある。これら2古墳を最南端にして、これより南には古墳は確認されていない。地形的にも、これらの位置より南へ約100mで台地面から沖積地面への変換点となっており、墓域の限界を示している。

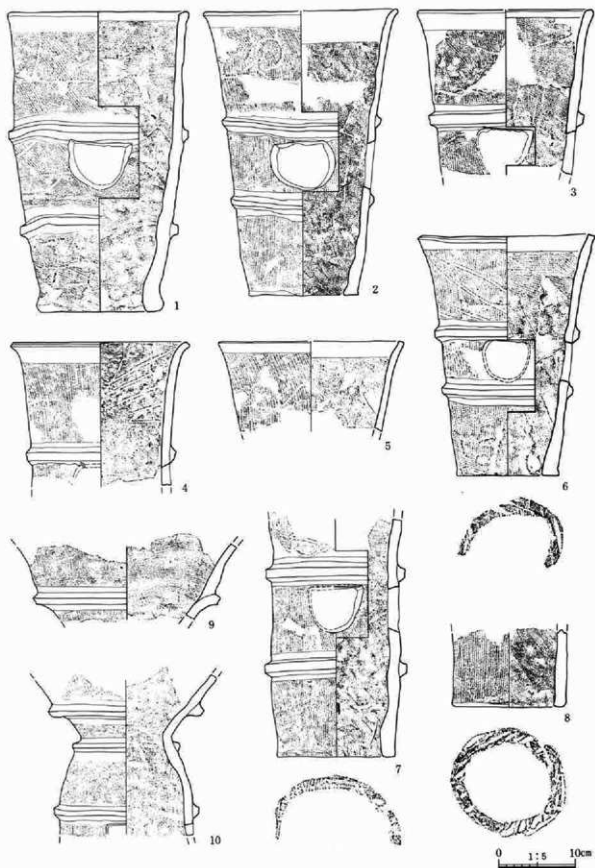
調査は古墳の西寄りを町道が南北に縦断していたため、この部分を除いた全体の2/3ほどについて実施した。古墳の東側裾を南北走行の2条の平安期の溝が重複しており、北側周堀に平安期のⅡ区19号住居跡が重複している。また南側に古墳に先行する古墳時代前期の遺構と重複する。

墳丘は明瞭な盛土部分は大半を削平されてしまっており、周堀の形状からのみ円墳であることがわかった。墳丘側の周堀掘り込み面を基準にすると、径南北で24mの規模となる。

周堀は、当時の地表面への削平があまり及んでいない北側部分のみと、上端幅2.3m、下端幅1.3mである。深さは一様でなく、0.8~1.2mで、堀の立ち上がりは、墳丘側がやや緩やかなのに対し、外側は急角度である。底面のレベルは一様でなく、場所により40cm以上の高低差がある。周堀内の覆土中で、堀

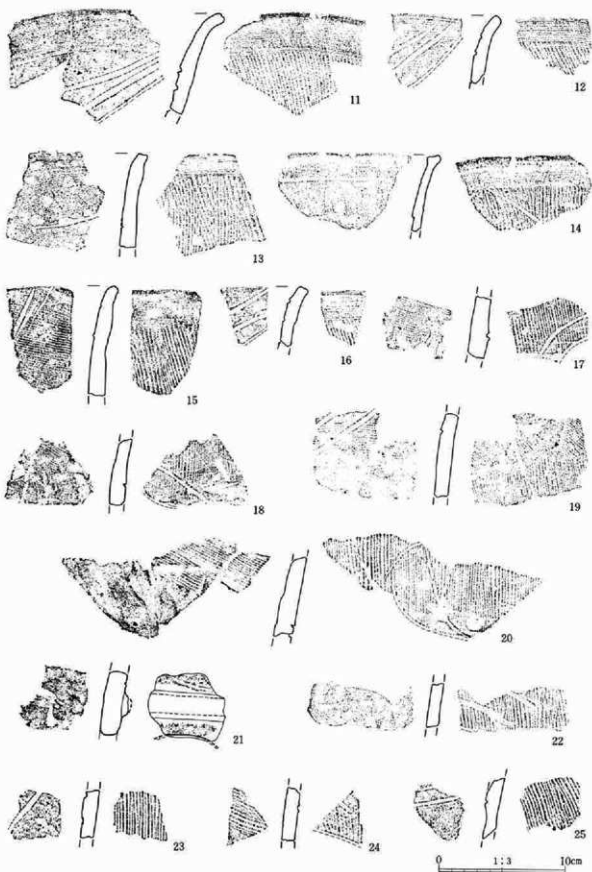


第431図 3号古墳

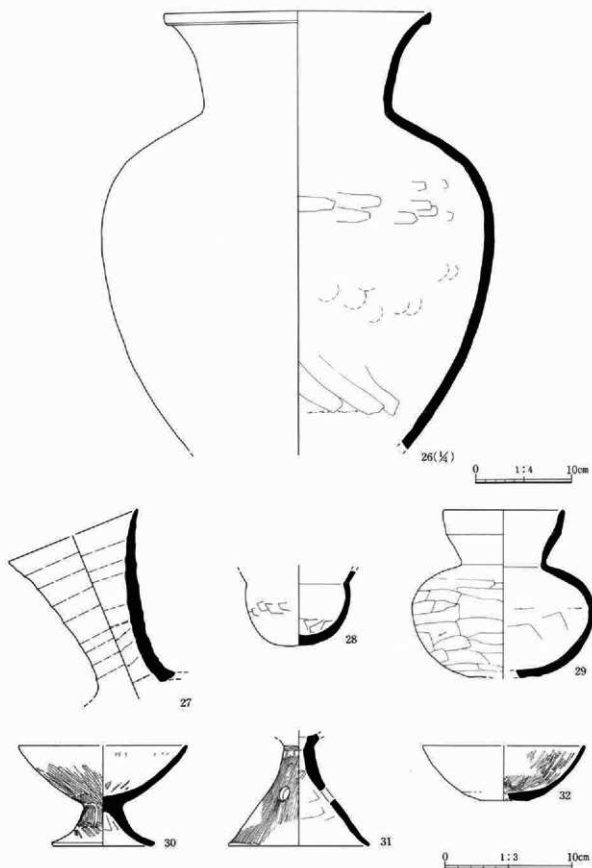


第432図 3号古墳出土埴輪(1)

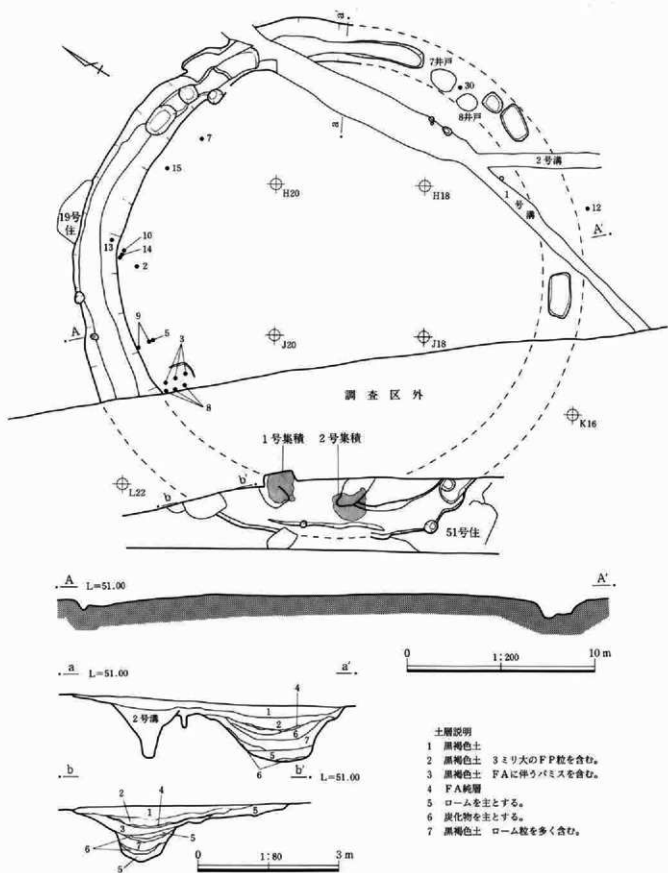
第三章 検出された遺構と遺物



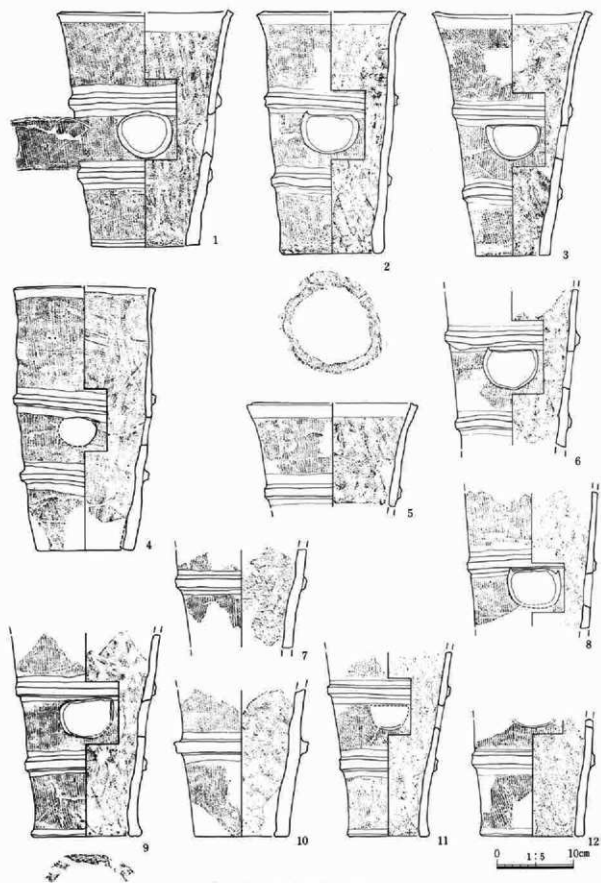
第433図 3号古墳出土埴輪(2)



第434図 3号古墳出土遺物

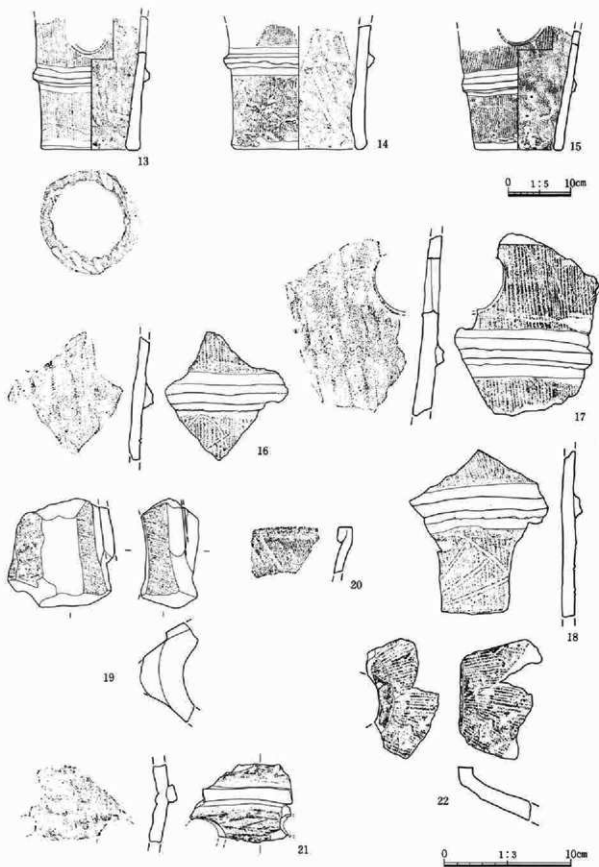


第435図 4号古墳



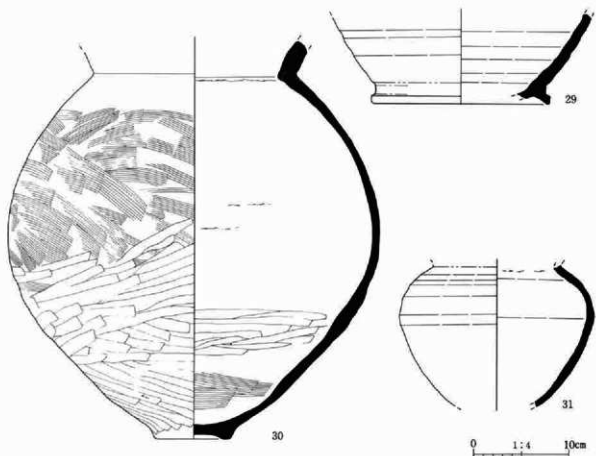
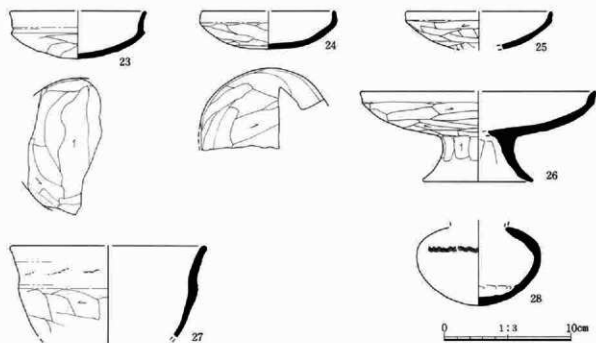
第436図 4号古墳出土埴輪(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第437図 4号古墳出土土埴輪(2)

第3節 古墳と埴輪



第438図 4号古墳出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

の底面から60cmの位置に厚さ5cm前後のFA層のレンズ状の純堆積が確認された。

周堀を掘削する際の採土をもって盛土用の材料にしたものと推定されるが、堀の形状、規模からするならば、あまり墳丘の高さを確保することはできなかったものと推定される。

墳丘部分は、当時の地表面から80cmほどの高さまで残しており、墳丘の中心部分まで調査が及んでいるにもかかわらず、主体部はその痕跡すら確認できなかった。主体部が墳頂部からの掘り込みにより構築され、墳丘の削平とともに消滅したものと考えられる。

墳丘北側部分を中心として、墳丘裾部と周堀内から多量の埴輪が出土している。これらのうち、墳丘北側の裾部から出土したものは、適当な間隔をおいて出土していること、完形に近く復せるものが多いことから、墳丘裾部に列状に配列されていたものと推測される。確認された埴輪の主体をなすのは、圧倒的に円筒埴輪であり、わずかに種類を特定できない形象埴輪の破片が認められる。

周堀内から埴輪片とともに須恵器、土師器が出土している。これらのうち、第438図-23・24・25・26・27・29・31は明らかに古墳に後出するものであり、古墳の周辺に群在する住居跡群に伴う土器類の混入と思われる。第438図-28の埴輪は陶邑編年のTK208の型式の特徴を備えており、第438図-30の土師器甕は和泉式(新)である。これらは推定される5世紀後半の年代観から、古墳に直接伴うと考えられる。

5号古墳 (第439・440図 PL. 33)

古墳群の中央から南寄りにかけて、古墳が最も集中している地帯の一角を占めている。南側に隣接する3号古墳、北西側に隣接する6号古墳との間は、人が穿うじて通過できるほどのスペースしか残さないほどに近接している。古墳の北東側は調査区外となってしまうため調査を行ったのは全体の4/5ほどであった。西側は道路跡が重複しており、その底面寄りにかろうじて周堀の痕跡を抽出することがで

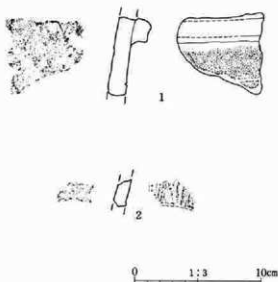
きた。

周堀の形状を基準にすると、径南北で11.5mの円墳に復元される。周堀は、最も遺存状態のよい南東側で、幅上端で1.2m、下端で0.4m、深さ0.4mの規模である。本古墳群の中では、比較的小規模な部類に属するものである。掘り込みが墳丘側、外側ともに急角度であり、明確な区画の効果を果たして全周している。

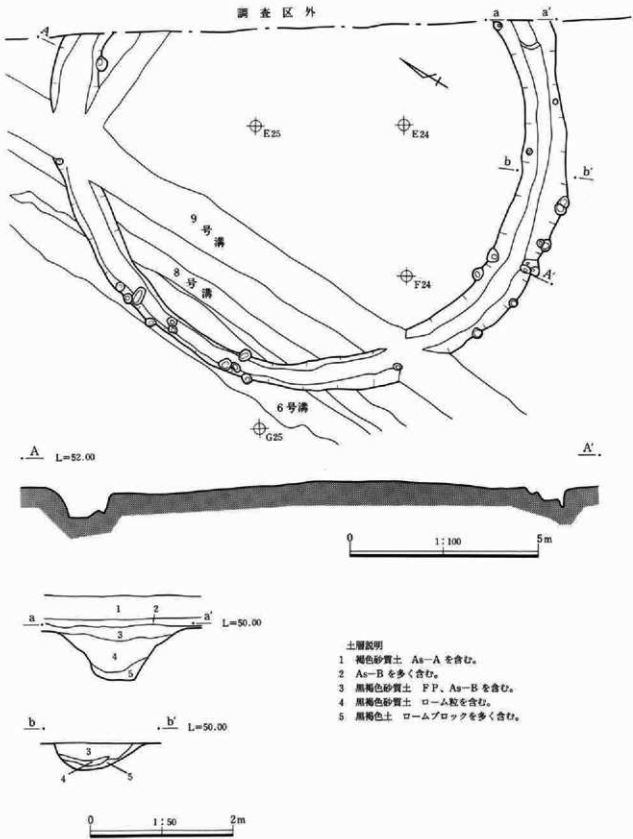
周堀の両側の掘り込み部分に沿って、3号古墳と同様のビットが認められた。

主体部はその痕跡すら確認することはできなかった。少なくとも、後述する8号古墳のように、当時の地表面を掘り込んで構築したものでなかったことは明らかである。

周堀内の覆土中から埴輪片がわずかに出土しているが、量的にみて到底、本墳に直接伴うものとは考えられず、隣接古墳からの混入と推定される。



第439図 5号古墳出土埴輪



第440図 5号古墳

6号古墳 (第441~443図 PL. 33・36・91)

5号古墳の北側に隣接している。両墳の周堀の間は幅約2.5mほどのわずかな間隙があるにすぎない近接ぶりである。古墳の北側に未移転の墓地が残存していたため、この部分を除いた全体の3/4ほどについて調査を実施した。

墳丘の東裾を南北走行の道路跡が、南側に古墳時代前期のIV区2号住居跡が、北側裾に平安期のIV区1号住居跡が重複している。

墳丘は完全に削平されている。周堀の形状により径南北で21.5mの円墳であったことが推定できる。

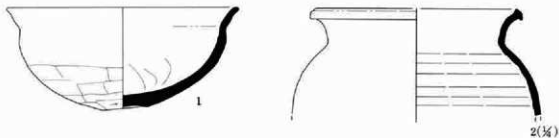
周堀は全周しており、遺存状態のよい西側で、幅上端で3m、下端で1.5m、深さ0.85mの規模である。その断面形状を見ると、墳丘外側の立ち上がりは急角度であるのに対し、墳丘側はこれに比べてやや緩やかである。その覆土の中位からは、わずかではあるが、FA層のレンズ状の純堆積が認められた。

西側の周堀の底面には、周堀を掘削する際の単位を推測させるような痕跡が確認された。それによる

と周堀内に15mの間隔をおいた2カ所に、堀を横断するように幅40cm前後の帯状の掘り残り部分が認められる。さらに、その区画内を3等分するように2カ所に幅40cm、高さ堀底面から10cmの帯状の掘り残り部分が認められた。これらを、周堀内の特定の部分を区画するための意図的な施設と想定することは、ほかにそのことを示唆するようなものが何ら認められないことから、可能性は弱い。周堀の掘削作業の作業単位が何らかの理由で残ったものと考えた。これと同様のものは、9号古墳で1カ所確認され、また、これらほど明確ではないが、3号古墳でも認められている。

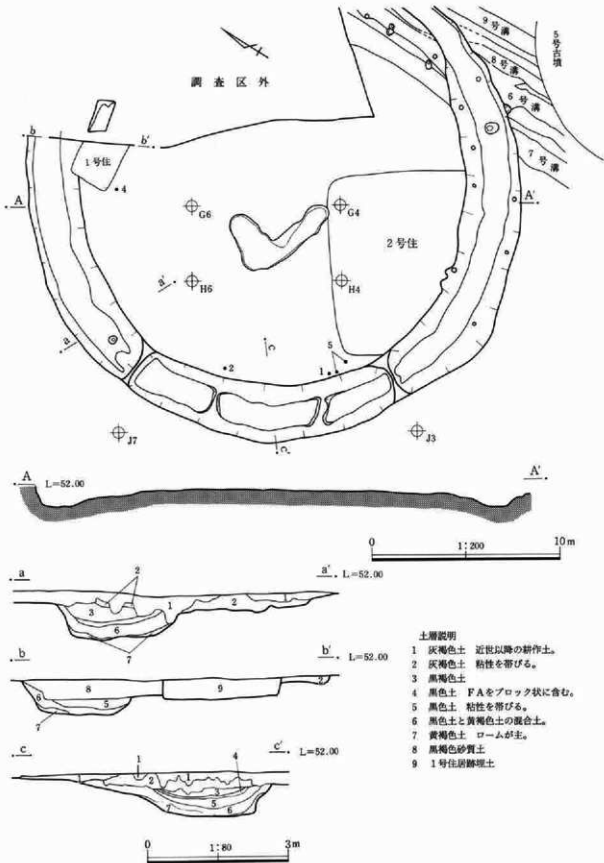
主体部は、墳丘の削平に伴って消滅してしまったものと思われる。

墳丘西側の裾部および周堀内の覆土中から埴輪が出土している。その大半は円筒埴輪であり、わずかに朝顔形埴輪の破片が認められる。墳丘を取り巻くようにその裾部に樹立されていたものと推定される。



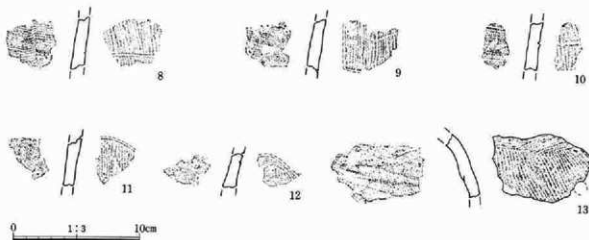
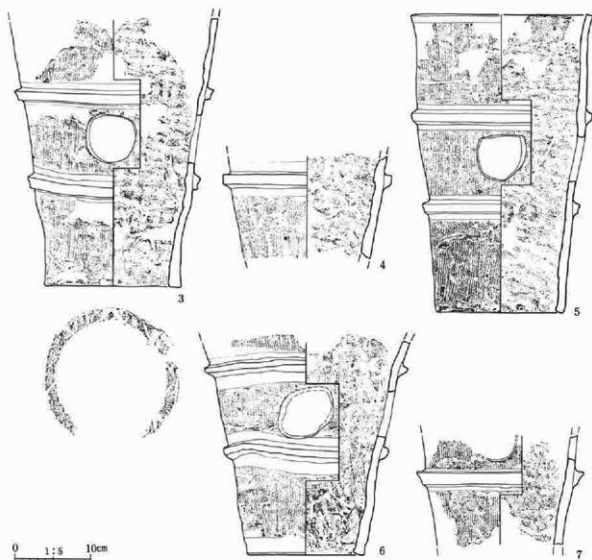
0 1:3 10cm
0 1:4 10cm

第441図 6号古墳出土遺物



第442図 6号古墳

第三章 検出された遺構と遺物



第443図 6号古墳出土埴輪

7号古墳 (第444・445図 PL. 91)

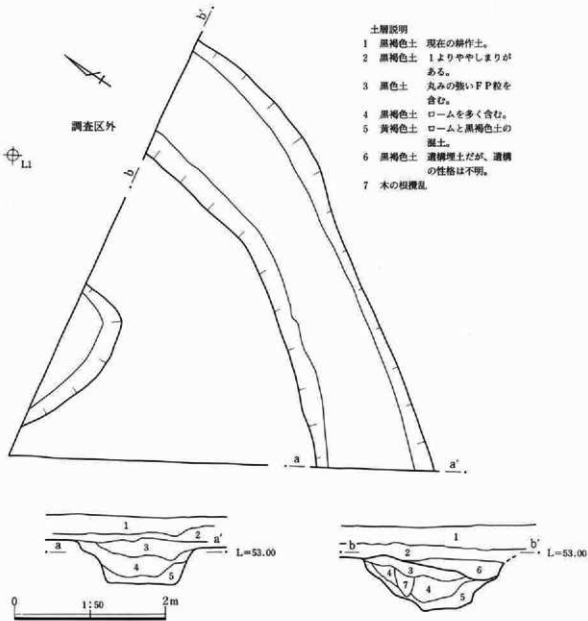
古墳群の中では、最も北寄りに位置する古墳の一つである。付近には隣接する古墳との間に距離があり、散在的な状態である。古墳の西側は、道路予定地外であり、北側は町道が東西に横断しているため、全体のわずか1/5ほどの調査であった。

墳丘は既に削平されており、周堀の一部を確認したのみであるが、その形状から径10m前後の円墳が

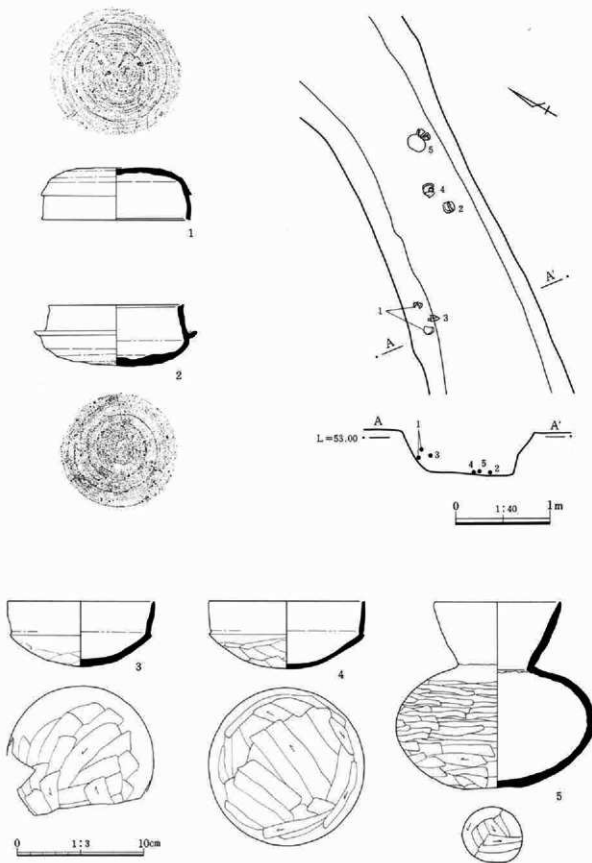
推定される。

周堀は、幅上端で1.4m、下端で1.0m、深さ0.5mの規模を測る。断面形状をみると逆ハの字形を呈しており、比較的急角度の立ち上がりで、底面は平坦である。

本墳で注目されたこととして、周堀内から土師器、須恵器がまとめて出土したことが上げられる。その内訳は、須恵器杯蓋1 (第445図-1)、同杯身1



第444図 7号古墳



第445図 7号古墳出土遺物と出土状況

(第445図-2)、土師器杯2(第445図-3・4)土師器埴1(第445図-5)である。その出土状態は周堀内の1カ所にほぼ集中した状態であり2・4・5が周堀内の底面から約10cmの高さから、1・3が周堀内の墳丘側斜面上から出土している。これらは、当初よりこの位置におかれていたものではなく、墳丘寄りに置かれていたものが転落したものと推定される。また、遺構面との間にあまり間層が認められないことから、古墳築造後早い時期の転落が推定される。このことは、これらの土器群が主体部に遺骸とともに副葬されたものではなく、柵外の墳丘のある特定の部分にまとめて置かれたものである可能性が強い。須恵器杯蓋と身はセット関係をなすものであり、陶色古窯址群の須恵器編年のTK47型式の型式的特徴を有している。土師器類も兎高I式の前段階に位置づけ得るものであり、両者の共存関係に年代的な矛盾はない。

調査が墳丘の中心部分まで及んでいないため主体部は不明である。また埴輪は、一片すら認められないことから、設置されなかったものと思われる。

8号古墳(第446～453図 PL. 37・38・91)

今回の調査古墳中で唯一、主体部が遺存していた事例である。古墳群の北寄りに位置しており、その北側に7号古墳、南側に10号古墳が隣接することになるが、いずれも30m以上の距離をあけており、1基ボツンと存在している。調査予定地の中央部に位置していたことと、古墳が小型であったため、その全体を調査することができた。

後世に当時の地表面下まで削平されてしまっているため、墳丘の盛土部分は全く残っていない。墳丘を全周する周堀よりするならば、周堀の内側の掘り込み面を基準にして、径東西8.25m、南北7.9mの規模である。

周堀は、明瞭に全周するもので、幅上端で1.15m、下端で0.65m、深さ0.4mの規模である。後世の削平

は、当時の地表面に達するほどのものではないから、周堀の深さは当時もわずかなものであったことがわかる。墳丘の盛土部分は、周堀を掘削した際の土でまかなったであろうから、古墳の完成時の高さは、1mにもみえない極めて低いものであったことが推定される。

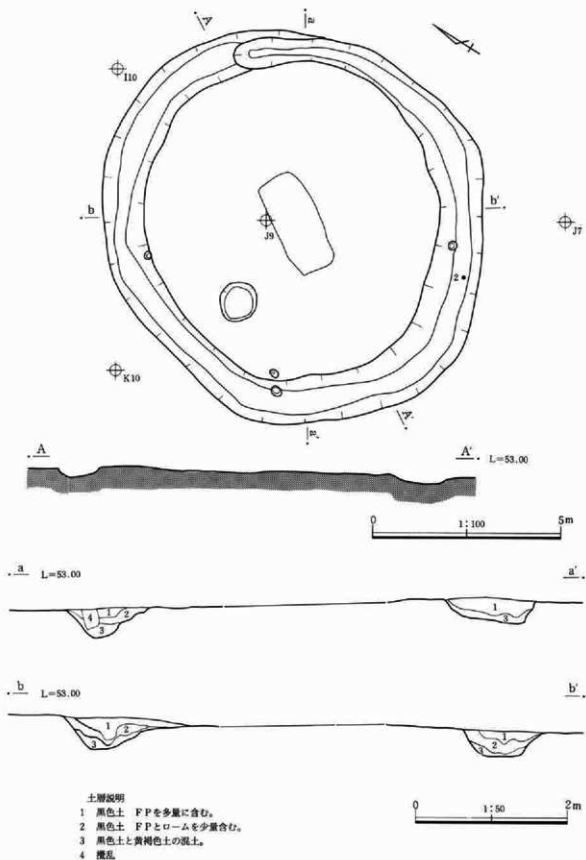
主体部は、墳丘の中心部に、当時の地表面から掘削された1.25×2.65mの長方形で深さ0.5mの掘り方内に構築された箱式石椁状を呈する竪穴式小石椁である。使用されている石材は、石灰岩系の自然石であり、山石の塊石で板状を呈するものを主としている。主軸を北東から南西にとり、その内法で、長辺172.5cm、幅北東側で38cm、中央で40cm、南西側で28cm、深さ17cmを測る。石椁の平面形状を見ると、中央部よりやや北東寄りに中心をもつ軽い胴張りを呈しており、頭位を北東側にして伸展葬するように、成人の人体を基準にして造られていることがわかる。

次に石椁の構造を詳しく見てみる。石材を使用している部分は主として壁体および天井である。壁面は、小口面に各1石、側面に北西側で7石、南東側で5石のほぼ同大のもので構成されている。各壁石材の設置する位置は、掘り方底面を石椁の外法に合わせさらに一段掘り下げて、設置の際の安定を図っている。さらに壁石と掘り方壁面との間に、褐色土を裏込状に厚く充填して補強している。

石椁の床面は、その基底面から約5cmの厚さで白色粘土を敷いた後、その上に石椁材と同じ石灰岩系の小礫を敷き詰め、さらにその上に再び白色粘土を約5cmの厚さで敷いて築成している。

石椁内に遺骸を納めた後、蓋石で覆うわけであるが、それらは8枚で構成されている。石の大きさは、厚さ、奥行きとも頭位にあたる北東側のものの方が大きい。その架構状態から、北東側の端から順に置いていったことがわかる。かけわたした天井石の相互の間に生じた間隙には、拳大ないし小児頭大の石をめじとして充填している。念入りに密閉した石椁に対して、さらに白色粘土で厚く覆っている。天井

第三章 検出された遺構と遺物



第446図 8号古墳

石の直上が最も厚く、10cmあまりを測り、端へ行くにつれてレンズ状に薄くなっており、外見的には蒲鉾状を呈している。最後に掘り方の上面まで通常の土を埋め戻して埋葬を完了する。

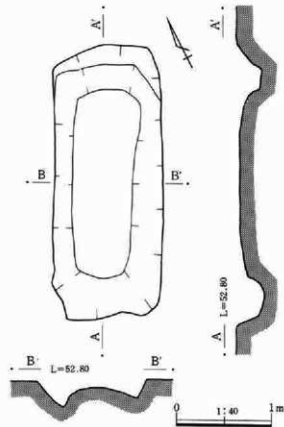
周堀の掘削、墳丘の築成は上述の遺骸の埋葬、石槨の密閉が終了した後であったことが推測される。

副葬品としては、推定される頭位の向かって右側に切先を北東に向けて、主軸と平行に置かれていた鉄製刀子が唯一のものである。これは全長12cm、刃部の長さ7.7cm、幅は柄寄りで1.2cmを測る小型で細身の製品である。柄の部分には木質をよく残しており断面倒卵形を呈している。その刃部寄りの端部には長さ1cm、厚さ1mmの鉄製の縁金具が装着され、木柄をおさえている。

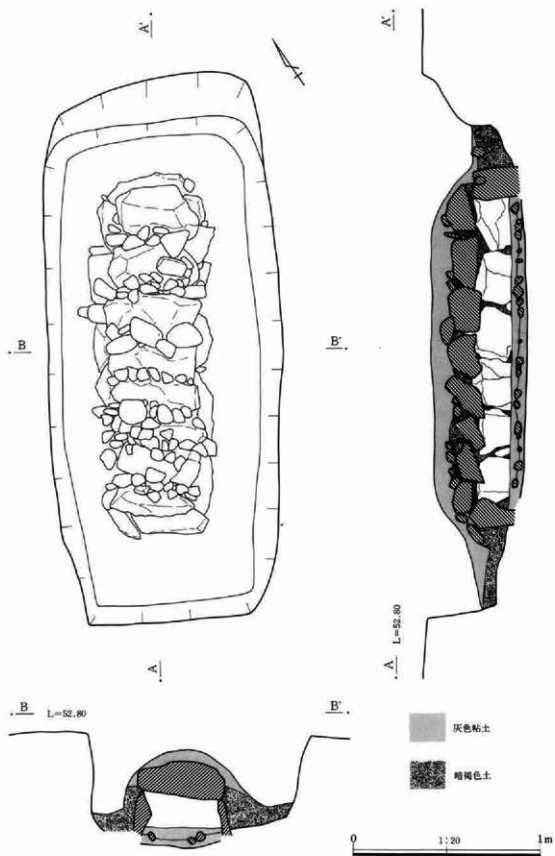
古墳の真南の周堀内の底面に近い位置から、土師器の大型の甕が出土している。完形品であり、破損が全く無く、正立状態で出土していることから、当初よりここに置かれた可能性が高い。埴輪は破片すら1片も確認されていないことから、もともと設置されなかったものと思われる。



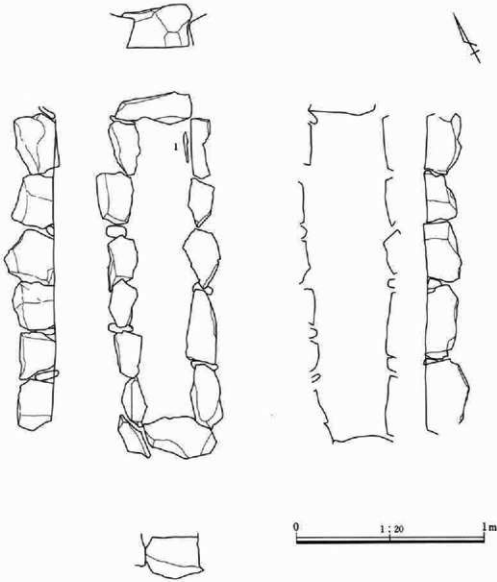
第447図 8号古墳主体部検出状況



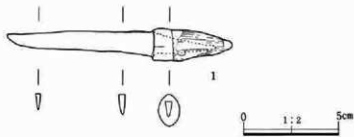
第448図 8号古墳主体部粘土被覆状況図



第449図 8号古墳埋葬主体部

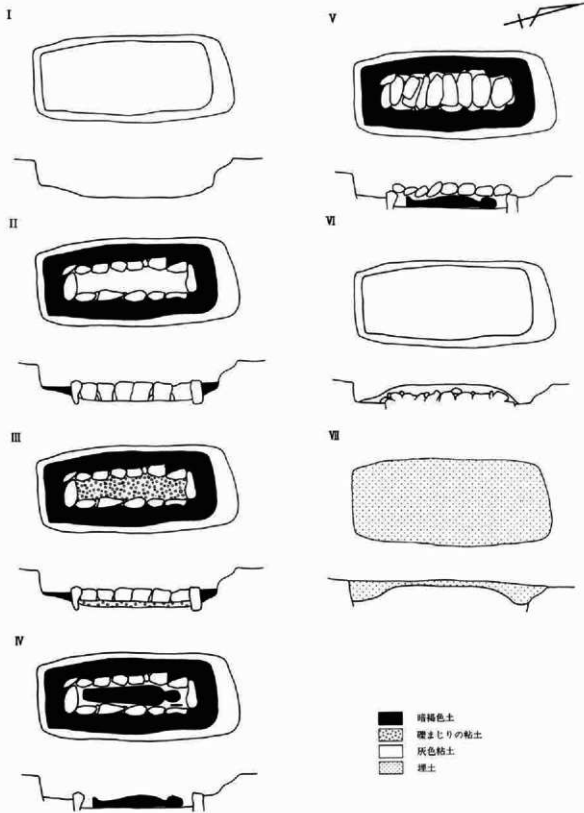


第450図 8号古墳石櫛展開図

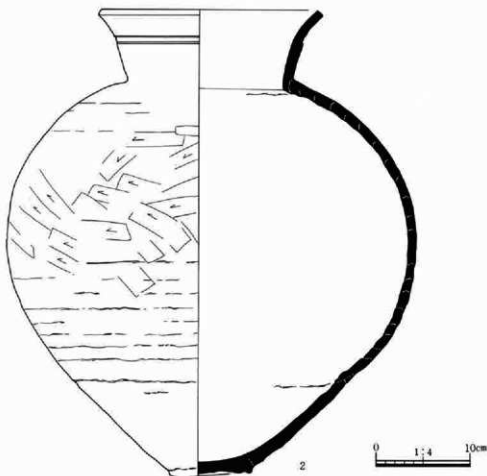


第451図 8号古墳出土刀子

第三章 検出された遺構と遺物



第452図 8号古墳主体部埋葬過程模式図



第453図 8号古墳出土遺物

9号古墳 (第454・455図 PL. 39・91・92)

6号古墳の南西側に隣接しており、両者の周堀の間には1.6mほどの間隙があるにすぎない。墳丘の西側は調査区外であるため、全体の2/5ほどの調査であった。周堀北西側でIV区6号住居、北東側でIV区16号住居の古墳時代前期の住居跡と重複している。

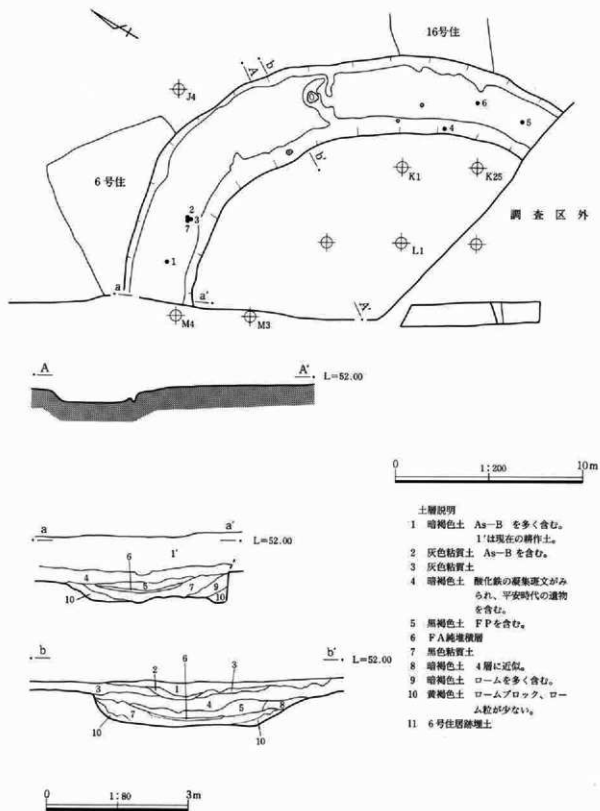
後世の削平により、墳丘は失われ、周堀のみの遺存であるが、その墳丘側掘り込み面を基準にすると、径約22mの円墳であったことがわかる。

主体部は、墳丘の中心寄りに近い位置も調査したが、その痕跡すら確認できなかった。

周堀は明瞭に全周するものと推定され、幅上端で4.0m、下端で2.5m、深さ0.8mの規模を有している。その立ち上がりの形状を見ると、墳丘側のそれが比較的緩やかであるのに対し、外側のそれは直角に近いほどの急角度である。また、底面は全体に平坦で

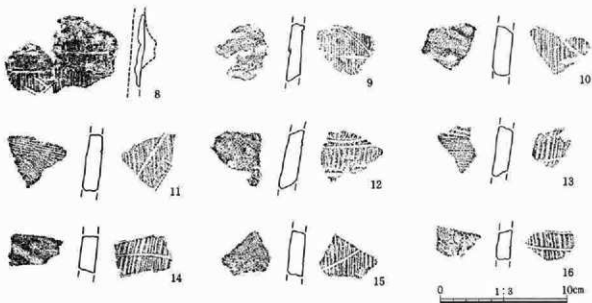
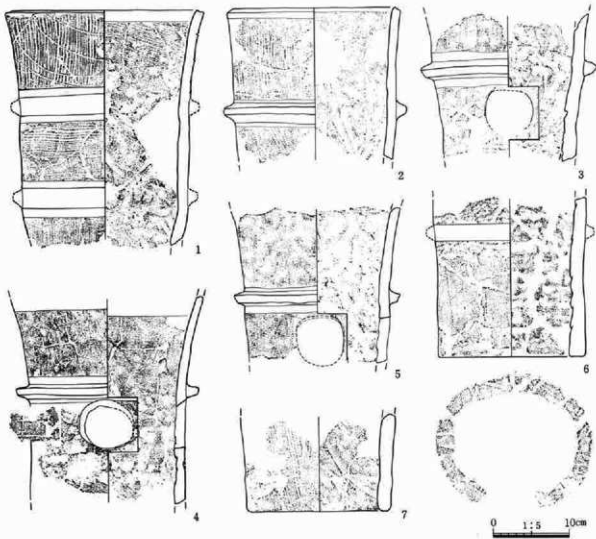
ある。周堀内の1カ所で、底面に周堀の走向と直交する幅約20cm、高さ5cmほどの帯状高まりが確認された。周堀の掘削時の作業単位を示す境界点と推測される。

墳丘裾部および周堀内からかなりまとまった量の埴輪片が出土した。これらのうち墳丘裾部から出土した1点は底部が埋まった状態であり、原位置を保っていることがわかる。その位置は、周堀の墳丘側の立ち上がりの頂点から若干墳丘中心寄りである。埴輪の設置されている部分は、盛土上ではなく、当時の地表面であることから、墳丘と周堀との間に適当な幅でテラス面があり、その縁辺部に埴輪列が設置されたものと推定される。周堀内に転落した埴輪を復元的に原位置に戻してやると、隣合う埴輪相互の間隔は1m前後であり、かなりまばらな設置状態であったことがわかる。



第454図 9号古墳

第3節 古墳と埴輪



第455図 9号古墳出土埴輪

10号古墳 (第457~459図 PL. 40・92)

今回調査された古墳の中で最大規模を誇るものである。確認された古墳の分布のほぼ中央を占めている。古墳の西側は調査区外となっていたため、全体の2/3ほどについて調査を行った。その東側には小型の11号古墳が隣接する。古墳の東で中世と思われる南北走向のIV区1号・2号溝が、北西部で平安期の小鍛冶遺構 (IV区9号住居跡) が重複している。後世の削平により、墳丘の盛土部分の大半を失っているため、主として周堀のみの検出であった。この周堀を基準にすると、径約37mの大型円墳となる。

主体部は、古墳の中心部分まで調査が及んでいるにもかかわらず、その痕跡すら確認されなかった。中心付近の削平は、当時の地表面まで達するものではないので、主体部は墳頂部を構築面として作られたものと考えられる。周堀は明瞭であり、全周するものと推測される。その規模は、幅が上端で4.5m、下端で3.5m、深さ1.1mである。断面形状を見ると、外側の立ち上がりは急角度であるのに対し墳丘側のそれは比較的緩やかである。底面はおおむね平坦であるが、全体的にはそのレベルが西から東へと低くなっている。周堀内の覆土中には、底面から30cmほどの高さに、厚さ最大で4cmほどのFAのレンズ状の純堆積層が認められる。

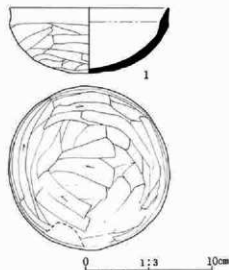
本墳に埴輪が樹立されていたことは明らかだが、大型の古墳であるわりにその量は少ない。調査範囲も広く、周堀も比較的深いものであることから、本来的に樹立された個体数が少なかったものと推測される。埴輪の種類をみると、円筒埴輪の他に、朝顔形埴輪、形象埴輪が認められる。特に注目されるのは、三角板釘留式を模した甲冑形埴輪と思われる破片 (第459図-13) である。わずかな破片であるため、その種類を的確に同定することは困難であるが、その法量、形状から強いて考えるならば、三角板釘留衝角付冑を模した可能性が考えられる。もう1点、交差する直線の沈線とその交点に刺突の点を配した破片があるが、前述のものと同じ表現手法を採っている点を重視して、甲冑形埴輪の一部と考えたい。

11号古墳 (第456~460図 PL. 41・92)

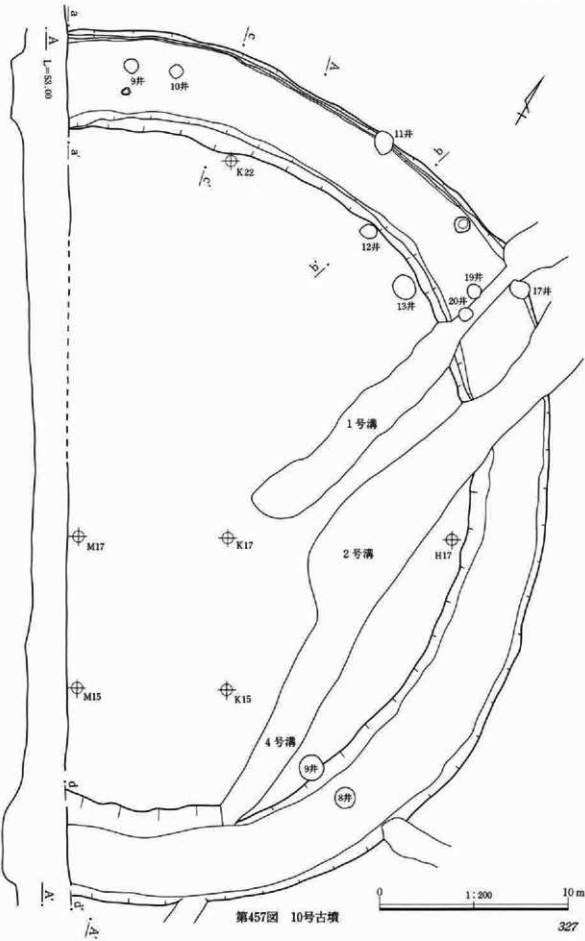
古墳群の中央寄りで、10号古墳の東側に隣接して位置している。古墳の東端がわずかに調査区外となるほかは全体に調査をすることができた。

後世の削平が、当時の地表面をも失うほどに及んでいるため、墳丘は完全に消失してしまっており、周堀のみの確認であった。それを基準にすると径8mを測り、本古墳群では最小規模の部類に属する円墳である。周堀は幅上端で1.2m、下端で0.4m、深さ0.4mの規模で、全周をしている。後世の削平を考慮したとしても、極めて小規模なものであったことが推定される。周堀を掘削した際に出る土をもって盛土材にしたものと推定されることから、墳丘の高さは極めてわずかなものであったと思われる。

古墳のほぼ全体を調査したにもかかわらず、主体部はその痕跡すら確認できなかった。当時の地表面に掘り方を穿って竪穴式小石椁を構築したのであるならば、少なくともその過半数は残っていてもよさそうなものである。8号古墳とは異なる葬法、構築法を想定する必要がある。周堀内の覆土中から土師器杯1点が出土している。この土師器の推定される5世紀後半という年代的な理解は古墳の構築時期に近いものと推定され、両者が直接的な関係にあるものと考えられる。埴輪は1片も確認されていないことから、樹立されなかったものと思われる。

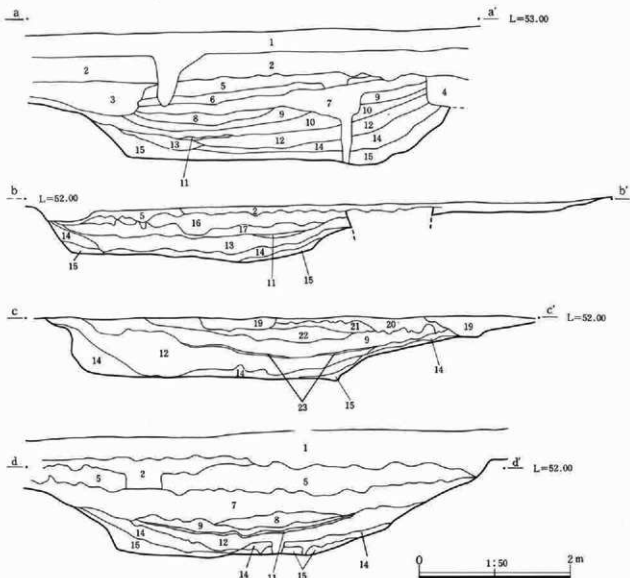


第456図 11号古墳出土遺物



第457図 10号古墳

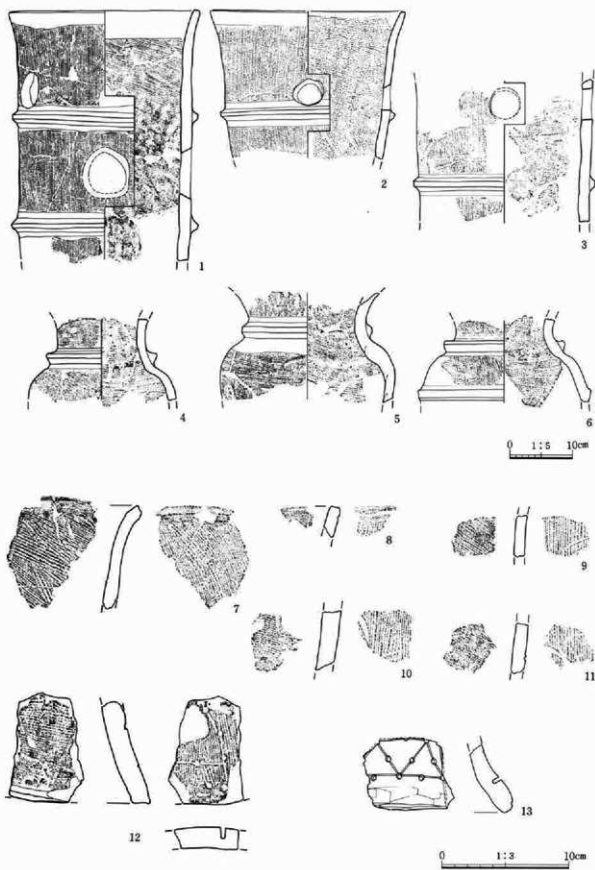
第三章 検出された遺構と遺物



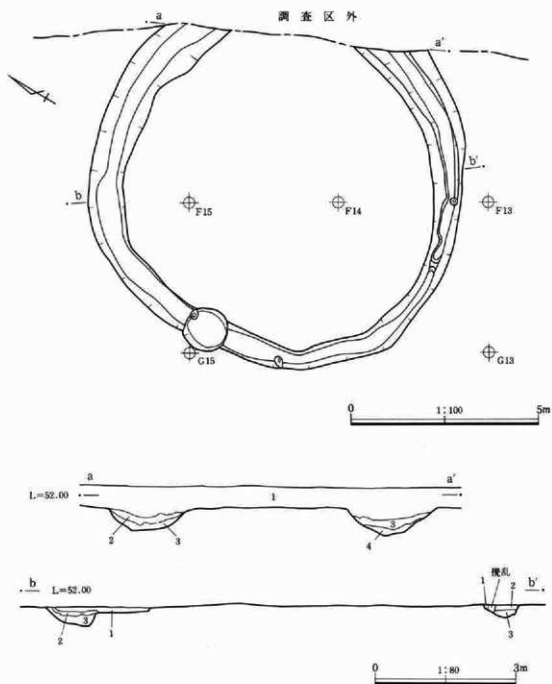
土層説明

- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| 1 現在の耕作土 | 13 黒色土 鉄分の凝集による斑文が見られる。 |
| 2 1とほぼ同質でややしりあり。 | 14 黒色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。 |
| 3 黒褐色土 2とほぼ同質でローム粒を少量含む。 | 15 黄褐色土 ローム粒を主とする。 |
| 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。 | 16 褐色土 上位にAs-Bを含む。 |
| 5 黒色土 As-Bを含む。 | 17 黒色土 しりがあり、テフラを含まない。 |
| 6 As-B 純層 上位に2~3cmの厚さでピンク色の火山灰が堆積。 | 18 暗灰褐色土 As-Aを多く含む。 |
| 7 黒色土 細かい炭化物を含む。IV区9号柱が埋り込まれる。 | 19 黒褐色土 As-A、焼土粒を含む。 |
| 8 黒褐色土 粒子が細かく、やや粘性がある。 | 20 暗褐色土 鉄片、スラグを少量含む。 |
| 9 黒褐色土 8よりやや色調が明るく、FPを含む。 | 21 暗褐色土 鉄片、スラグを多く含む。 |
| 10 黒色土 粒子が粗く、大きいもので2cm大のFPを含む。 | 22 暗褐色土 鉄片、スラグ、炭化物を多く含む。 |
| 11 FA純層 | 23 黒褐色土 FAを含む。 |
| 12 黒色土 粒子粗い。 | |

第458図 10号古墳周堀土層断面図



第459図 10号古墳出土埴輪



土層説明

- 1 暗褐色土 現在の耕作土。
- 2 黒褐色土 榛名山二ツ岳給瀨の微小なバミス（FPかFA）とローム粒を含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒とロームブロックを含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロックを多く含む。

第460図 11号古墳

12号古墳 (第461図 PL. 42)

古墳群の最も北寄りに位置している本古墳群で唯一の方墳である。7号・13号古墳の位置からも100m以上離れており、しかもその間に1基も古墳が存在していないことから、他の諸古墳との一体感がやや薄い。古墳の西側の一部で戦国期のⅦ区4号・5号溝と重複している。古墳の東側3/5ほどは調査区外となっているため全体の2/5について調査を行った。

後世の削平を受けているため中心寄りでわずかに盛土部分を残す以外は、周堀のみの検出であった。墳丘は、周堀の形状からすると1辺約24mの方墳である。ただし、方形の全体の形状を確認したわけではなく、南北の1辺と、これと直角をなす東西の2辺の一部である。主軸は南北線より東に55°振れた北々西から南々東としており、ほぼ方位を意識したプラン設定が推測される。

周堀は非常に明瞭であり、全周するものと思われる。その規模は、幅上端で3～4m、下端で1～2m、深さ約0.9mである。掘り込み面の角度は、墳丘側が比較的緩やかであるのに対し、墳丘外側のそれは急角度であり、明確に区域を画している。この点では、本古墳群の他の円墳の周堀に共通している。墓石、埴輪等の施設は全く認められなかった。

本墳の場合、墳丘の盛土がわずかに遺存していたが、その積土の方法は単純に厚い単位で盛り上げるのみであり、終末期の方墳によくみられる版築様の積み上げの傾向は全く認められなかった。

横穴式石室を主体部とする後期の方墳であるならば、石室の存在を物語るなんらかの痕跡があってもよさそうであるが、それは全く認められなかった。また東側の調査区外の畑地について簡単にボーリング調査を行ってみたが、横穴式石室の存在を示すような兆候は認められなかった。そこで、周堀の断面形状なども考慮して、現在は本古墳群の他の諸古墳と同時期の築造で堅穴系の主体部であったと推定しておきたい。

13号古墳 (第462図 PL. 42)

調査古墳の中では最も北寄りの地点に属するものの一つである。西側に7号古墳が近接して位置している以外は周囲には古墳が認められない。古墳を東西に横断するようにして町道があり、また、東側は調査区外となっていたため、全体の3/5ほどの調査であった。

この付近は戦国期の館跡に関わる遺構が密集している地点と重複しているため、これらと古墳が複雑にからまり、調査当初は古墳の存在を確認することができなかった。このことは、同時に古墳の遺存状態が極めて悪いことを物語っていた。恐らく、戦国期の館跡がつくれる際に、古墳は完全に削平されてしまったものと思われる。

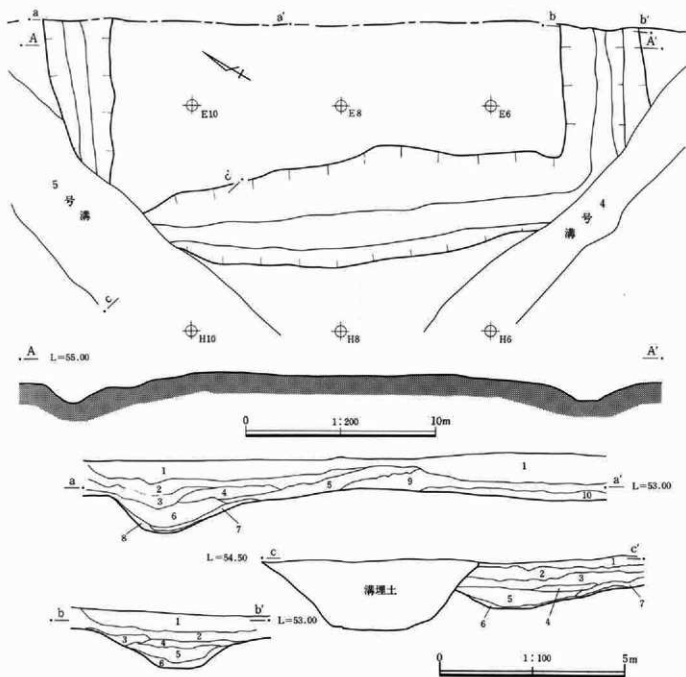
わずかに残っていた周堀の形状からすると、径28mほどの円墳に復元され、調査古墳の中では規模の大きい部類に属することがわかる。

周堀は、最も残りのよい北側で、幅上端で2.8m、下端で1.4m、深さ0.25mの規模を測り、後世の削平が著しかったことを物語っている。そのため、不確定な部分も多いが、現状では埴輪樹立の存在を顕著に示す埴輪の出土は認められなかった。

遺構外出土埴輪 (第463～467図 PL. 92～94)

ここでは、検出された13基の古墳に伴う以外に、何らかの理由によって住居内及び墓域外に持ち出されたりして、古墳との帰属関係が不明になった埴輪について図示した。詳細については観察表を参照されたい。(右島)

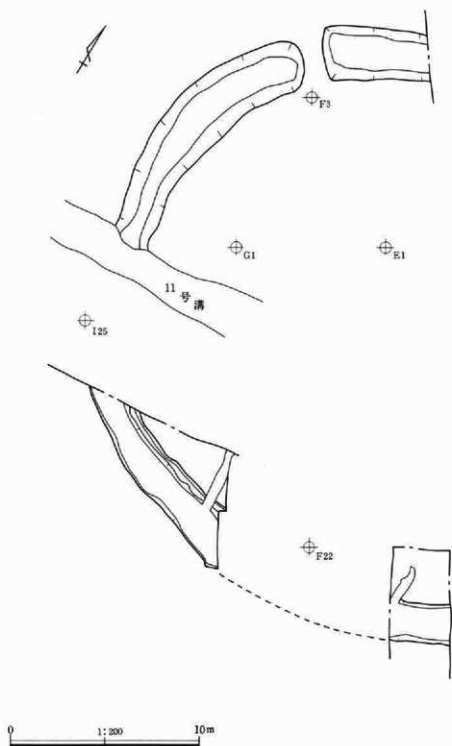
第三章 検出された遺構と遺物



土層説明

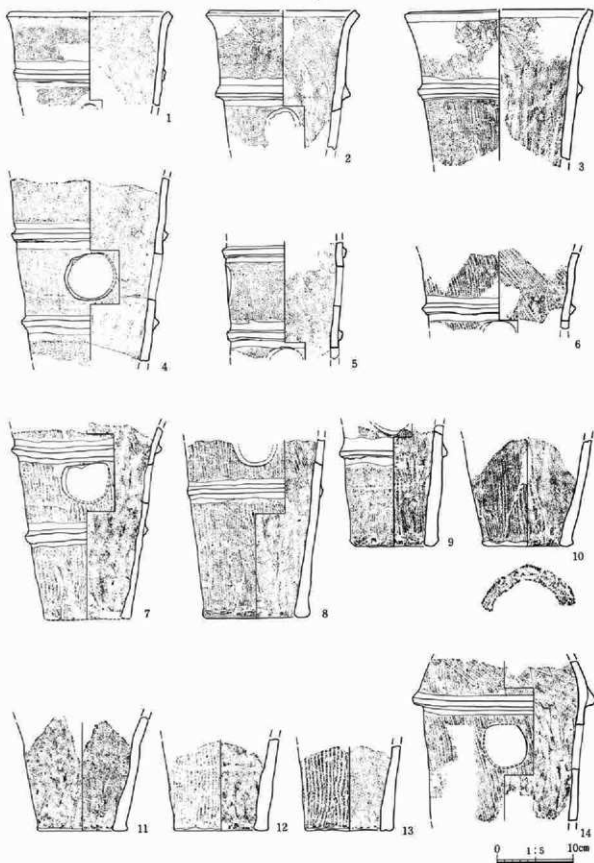
- | | | | |
|--------|------------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 現在の耕作土。ロームブロックを多く含む。 | 6 黒色土 | 均質で、FPを多く含む。封土あるいは旧黄土の流入したものと思われる。 |
| 2 黒色土 | ローム粒とFPを含む。 | 7 黄褐色土 | 6層とほぼ同質でローム粒を多く含む。 |
| 3 黒色土 | ローム粒、ロームブロック、FPを含む。 | 8 黄色土 | ロームブロック、ローム粒を主とする。 |
| 4 黄褐色土 | 3層に近似しており、ローム粒、ロームブロックを多く含む。 | 9 黒色土 | テフラは含まない。旧黄土の可能性はある。 |
| 5 黄褐色土 | 4層に近似するが、ローム粒が多く、色調は明るい。 | 10 黄褐色土 | やや粘性がある。 |

第461図 12号古墳

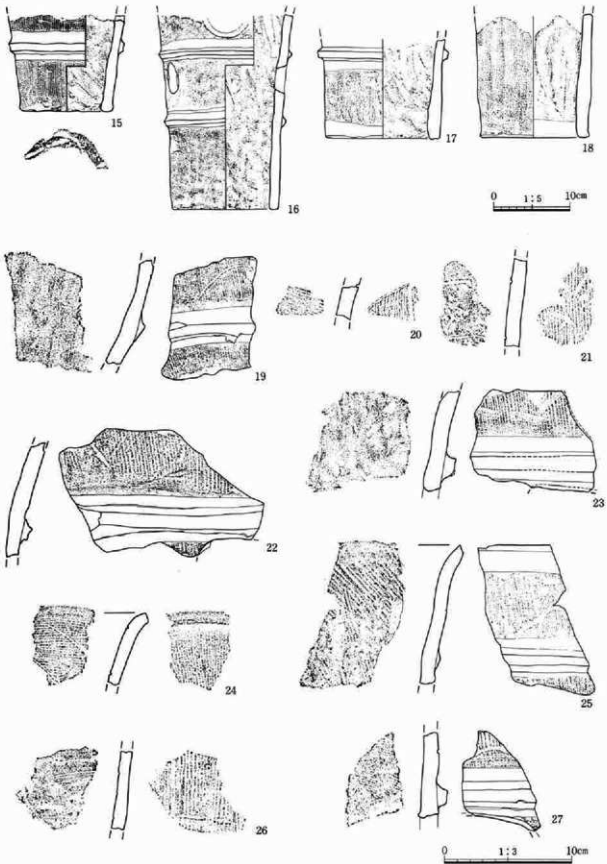


第462図 13号古墳

第三章 検出された遺構と遺物

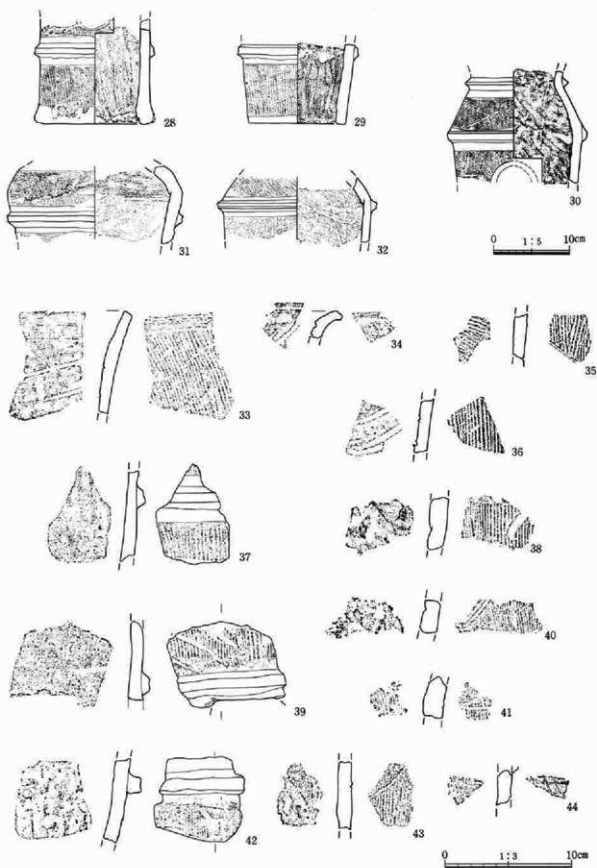


第463図 遺構外出土埴輪(1)

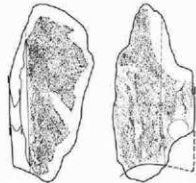
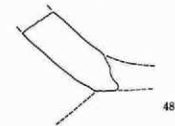
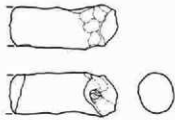
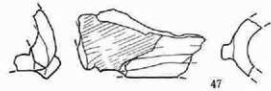
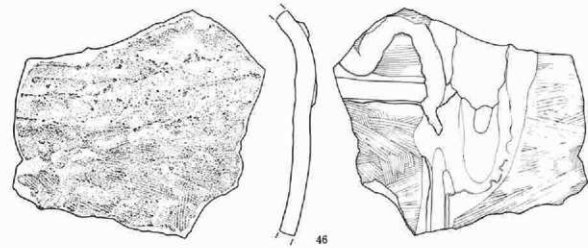
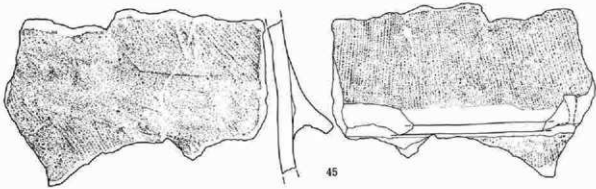


第464図 遺構外出土埴輪(2)

第三章 検出された遺構と遺物

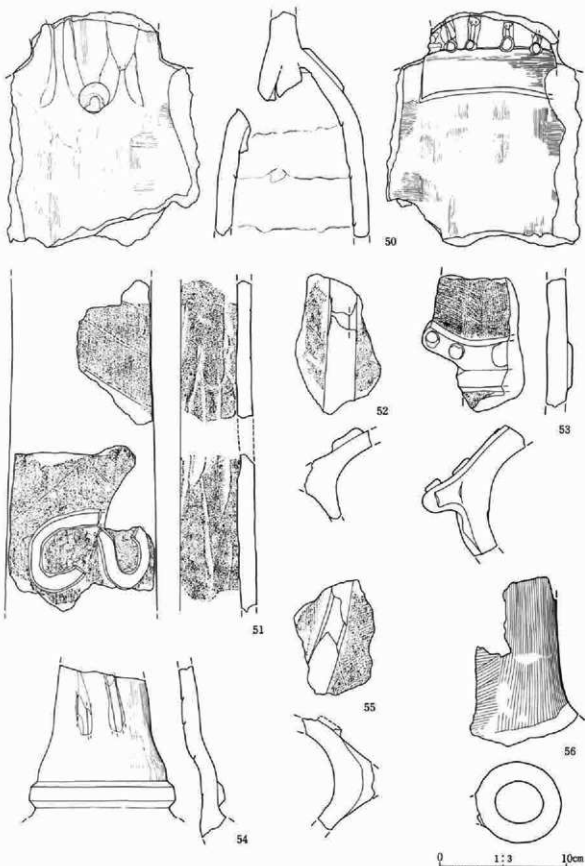


第465図 遺構外出土埴輪(3)



0 1:3 10cm

第466図 遺構外出土埴輪(4)



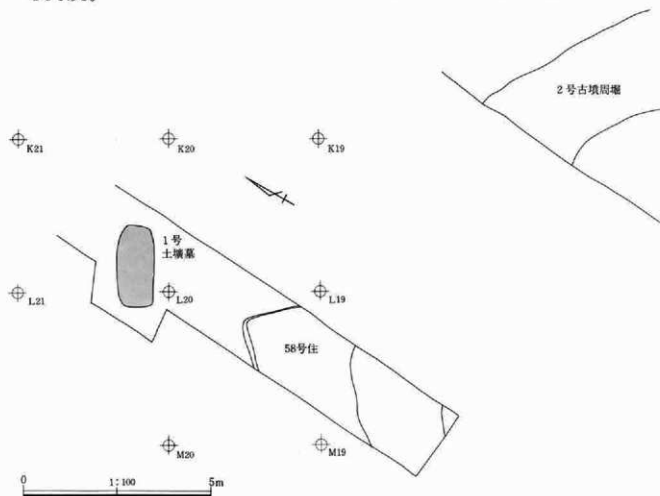
第467図 遺構外出土埴輪(5)

第4節 古墳時代の土墳墓

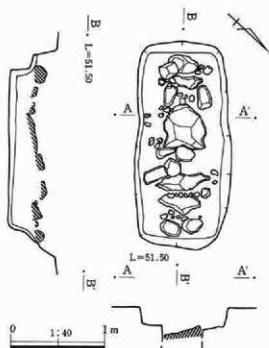
本古墳群の調査を実施している際に、古墳の最も集中している中央寄りの部分で、古墳の周堀と周堀の間に挟まれたわずかな空間から土墳墓4基が発見された。これらは、その占地から古墳のそれを十分に考慮したことが窺えること、また1号土墳墓のように埋葬施設が構造的に8号古墳のそれと共通する点が多いこと等からして、古墳群の形成と平行して構築されたものであることは明らかである。一方、本古墳群を構成する個々墳はいずれの場合も明瞭な周堀が確認されているが、これに近接しているこれら4基の土墳墓からはその痕跡すら確認できなかった。これらが本来的に周堀を有していなかったこと、また顕著な墳丘を持たなかったことが想定されることである。



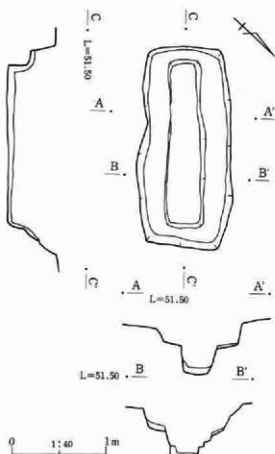
第468図 1号土墳墓検出状況（北より）



第469図 1号土墳墓検出位置図



第470図 1号土墳墓検出状況



第471図 1号土墳墓掘り方

今回の調査以前に調査地の隣接地である2号古墳の西側で境町の教育委員会が小規模な緊急調査を実施しているが、その際1基の竪穴式小石塚が発見されている(明神遺跡)。この場合も周堀が確認されなかったことから、今回の4基の土墳墓と同種のものであると考えられる。

1号土墳墓 (第468~471図 PL. 43)

2号古墳の北約5mの地点、III区K-20に位置している。その周囲を広く探索したがこれに伴う周堀は全く認められなかった。遺構確認時には旧地表面に近い褐色土面で土壌の掘り方が明瞭に確認されたことが発見につながったわけであり、盛土は一切認められなかった。

埋葬施設は、主軸を北東から南西にとるもので、長軸長212cm、短軸長94cm、深さ26cmの長方形の掘り方内の中心をさらに長軸長178cm、短軸長北東側で40cm、南西側で34cm、深さ20cmの長方形に掘り窪めて構築したものである。その底面および側面には厚さ5~10cmの白色粘土が敷き詰められている。これに伴う木棺の痕跡は確認できなかったことから、この土壌内に遺骸は直接納められたものと推定される。土壌の形状が北東から南西に向かうにつれて幅の狭くなるものであることから、北東側を頭位としていたことが推測される。遺骸の安置後は、土壌全体が8号古墳に使用されていたのと同一の石灰岩系の石材で蓋されていた。これらの石材は山石(あるいは割石の可能性もある)、川原石が混然としており、その大きさも区々である。8号古墳に見られたような整然とした密封状況には程遠い雑然としたものであった。石材のうちその幅が土壌のそれを上回っている5石以外の石は土壌内に落ち込んだ状態で確認されている。当初は木で蓋され、その上に石がのせられたのであろうか、あるいは遺骸の上に石がのせられるように置かれたのであろうか。この石蓋の上には厚さ10cm前後で白色粘土が覆っていた。白色粘土で被覆する範囲は、徐々に薄くなるが、掘り方内全体に及んでいた。この上に掘り方の上面まで、

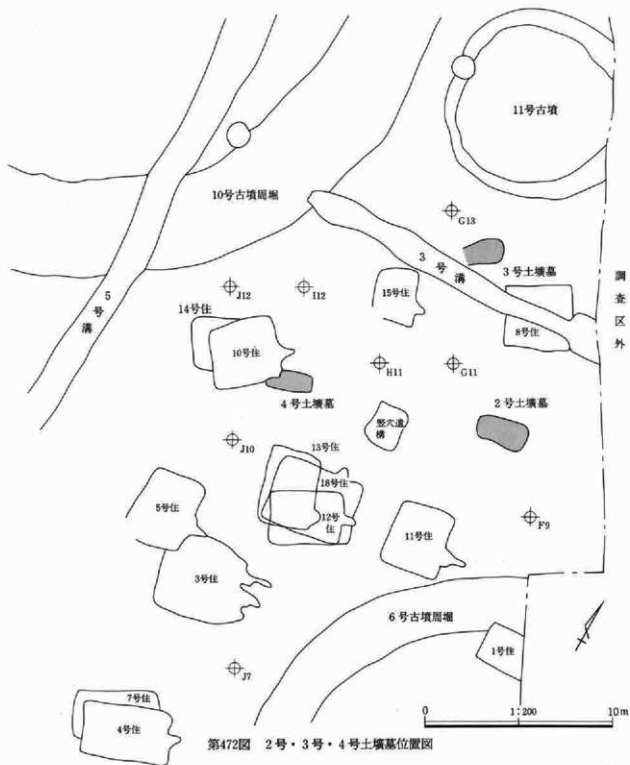
その掘削時に出土と思われる黒色土、褐色土、ロームの混土からなる埋め戻し土が認められる。

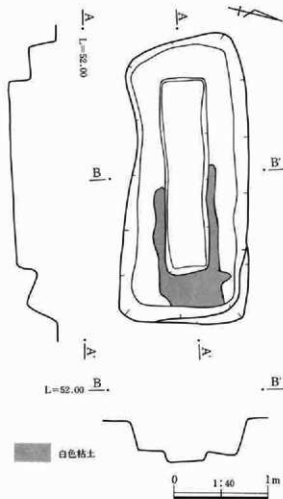
掘削時に出土する土量は掘り方上面までの埋め戻しまでの工程ではかなりの量が余ることが予測される。

その土でもって、墳丘とまではいかないが、埋葬施設の上に土饅頭状の簡易な盛土がなされたことが推

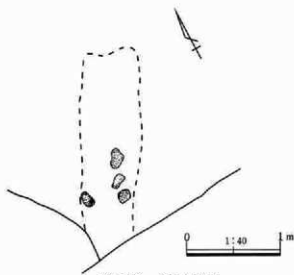
測されよう。

土墳内およびその周囲からは、これに直接伴ったと思われる副葬品、土器類は一切発見されなかった。





第473図 2号土墳墓



第474図 3号土墳墓

2号土墳墓 (第472・473図 PL. 43)

6号古墳、10号古墳、11号古墳にちょうど囲まれるようにして3基の土墳墓(2号~4号)が発見された。この付近は主として平安期の住居跡群、戦国期の溝跡がかなりの数で位置する部分でもあるから、あるいはこれらに破壊された土墳墓も存在したかもしれない。

本土墳墓は6号古墳の北7m、IV区F-10に位置している。

主軸をほぼ東西にしており、長軸長302cm、短軸長130cm、深さ38cmの長方形の掘り方内に構築されている。その構造は、掘り方底面の中心をさらに一段掘り下げて、主軸に沿って長さ206cm、幅46cm、深さ18cmの白色粘土による長方形の粘土床を築いたものである。粘土床の4辺の側部は内側が垂直に立ち上がる断面三角形を呈する粘土壁をなしており、垂直に据えられた板状の材を背後から押さえ付けてできた状態と考えられる。これが木棺を据え付けるための被覆構造である可能性は極めて強い。しかし、そのことを示唆する棺釘、銚等の具体的な遺物は認められなかった。これが本格的な組み合わせ式の木棺であったかとなると疑問点も多い。その上には、掘り方の掘削時に出た土が埋め戻されていた。

土墳墓の形状からは、頭位がいずれであったかは知ることはできない。主軸方位を東西に取ることからすると、これと共通する8号古墳、1号土墳墓のそれが東側であることを勘案して本例もこれらに同様である可能性は高いと言えよう。

土墳墓内およびその周辺からは、これに直接伴うと思われる副葬品、土器類は一切認められなかった。

3号土墳墓 (第472・474図 PL. 44)

11号古墳の南2.5m、IV区F-12に位置している。後世の破壊が著しいため、わずかにその痕跡が確認できたのみである。

他の土墳墓に使用されていたのと同じ白色粘土が散乱した状態で認められたこと、掘り方底面の痕跡を物語るような土層面のよごれた広がり認め

られたことから土壌墓の残骸と推定した。土のよごれている範囲は、長辺210cm、短辺68cmで平面長方形に近いもので、主軸をほぼ東西にするものであったと考えられる。

破壊が著しいため、本来のものとも言えないが、副葬品等は一切認められなかった。

4号土壌墓 (第472・475図 PL. 44)

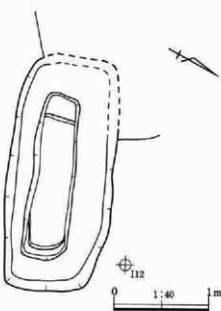
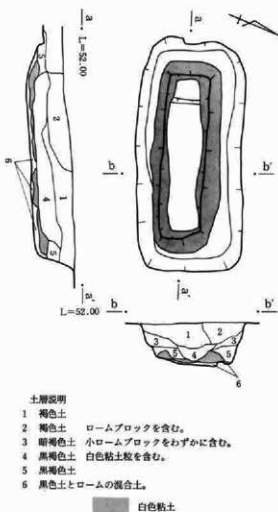
10号古墳の東8m、IV区I-10に位置している。西側で平安期のIV区10号住居跡と重複しているが下端部は残存していた。

主軸をほぼ東西としており、掘り方の規模は上端で長軸長244cm、短軸長110cm、深さ27cmで、平面長方形を呈している。その底面の中心に、上端で長軸長170cm、短軸長44cm、深さ15cmの平面長方形に掘り窪め、遺骸を納める部分を白色粘土で作っている。白色粘土で作られた部分は、底面に厚さ7cmほどで平坦に敷き詰め、4辺の側部では内側に面する部分が垂直に近く10cmほど立ち上がる断面三角形の粘土壁がめぐる。このことから、粘土壁に接して板状のものが縦位に置かれていたことが考えられよう。とするならば、組み合わせの木棺が遺骸を直接納めるものとして存在した可能性も十分考えられよう。しかし、釘、鋸等は全く存在していないことから、本格的な木棺は想定しにくいところである。

粘土被覆施設の形状を見ると、東寄りの方が若干幅が広くつくられており、また東から140cm西よった位置で底面が5cm低い段をなしている。頭位を推定する明確な材料に乏しいが、上述の点を考慮するならば、やはり東側に置かれていた可能性が強いと言えよう。

遺体の安置後、掘り方の上面まで、その掘削時に出土が埋め戻されたものと思われる。粘土被覆施設の上を黒色土、褐色土、ロームのブロック状の混土層が覆っていた。

埋葬施設がこのような丹念に築造されたものであるにもかかわらず、これに直接伴うと思われる副葬品、土器類等は一切認められなかった。(右鳥)



第475図 4号土壌墓及び掘り方

第5節 土器集積跡

概要

II区の4号古墳南西部における周堀を調査した際、周堀埋土掘削時に多量の土器片が集中する部分を検出した。これらは主体をなす土器の時期や出土位置から4号古墳に伴うものではないと判断し、便宜的に53号・54号・55号住居跡と仮称して調査が継続されたが、床面やカマド等の痕跡を検出することはできなかった。従ってここでは住居跡とは異なる遺構と考え、土器集積跡として扱った。

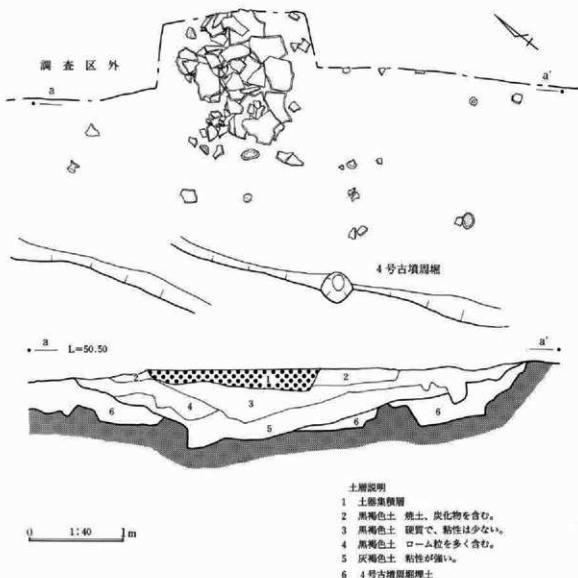
1号土器集積跡(第476~479図 PL. 95)

位置 II区L-19

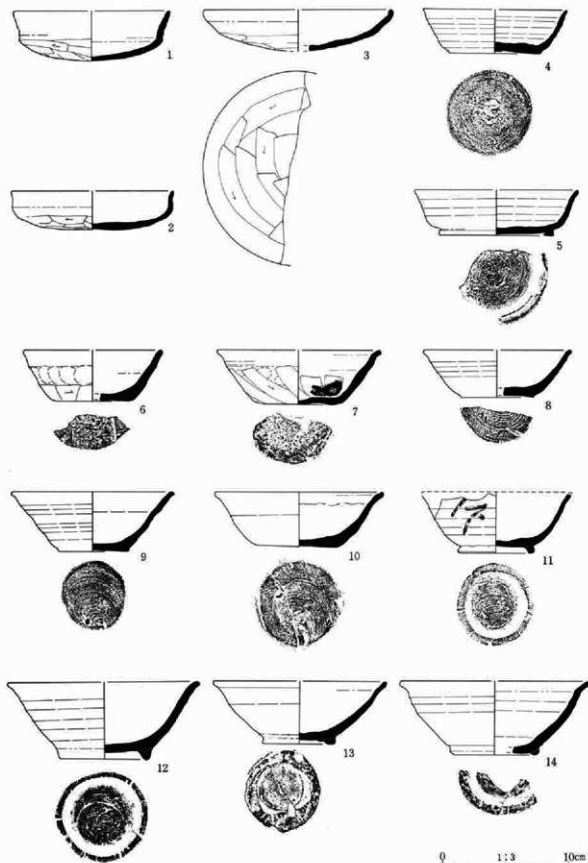
形状 平面形は不明。断面形は皿状で一方の傾斜が強いことから、楕円形状の平面形の可能性がある。

規模 長さ4.5m、確認面からの深さ80cmほど。

遺物 II区53号・54号住居跡出土として登録した遺物を本遺構伴出遺物として扱う。底面より55cmほど高い位置で須恵器壺(第480図-26)

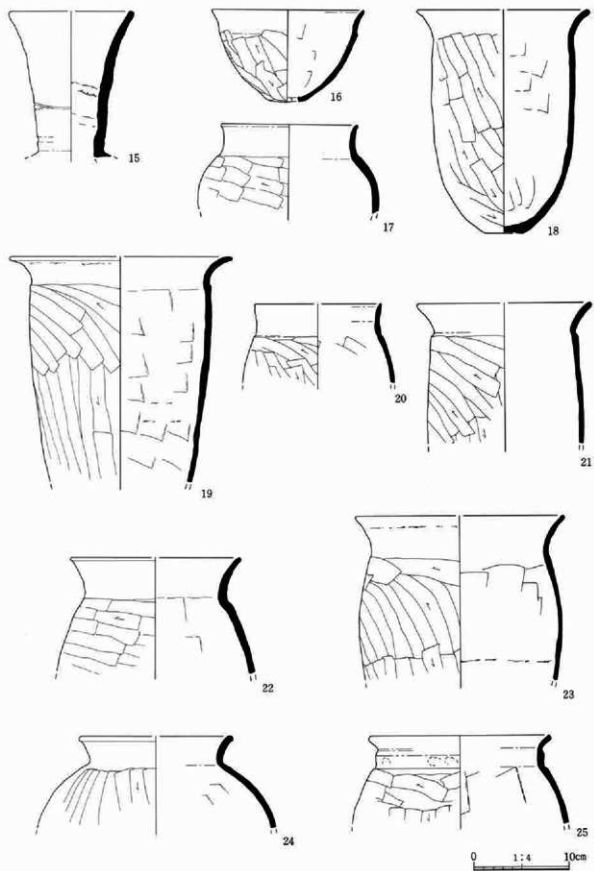


第476図 1号土器集積跡

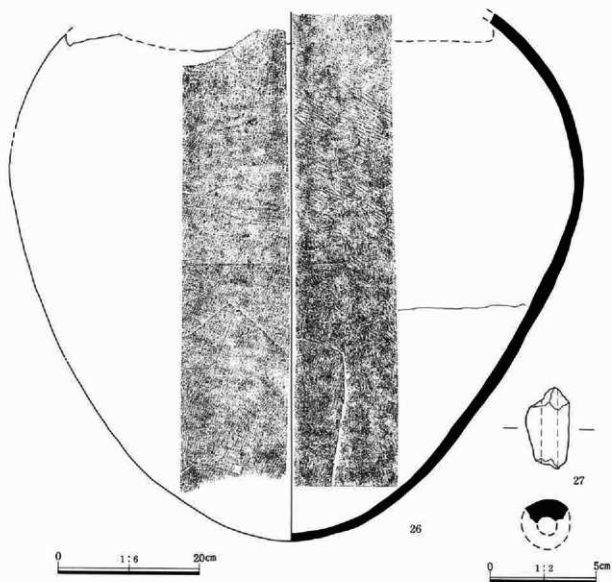


第477圖 1号土器集積跡出土遺物(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第478図 1号土器集積跡出土遺物(2)



第479図 1号土器集積跡出土遺物(3)

が潰れた状態で出土している。またその他の土器もこのレベルに集中している。遺物の時期は7世紀後半代と10世紀代に2分される。この新旧の差は埋土層位で確認できなかった。土器は大形破片が主で、完形品は見られない。

埋土の特徴 下層は灰色粘質土、上層は黒褐色土が堆積する。古墳周堀埋土を切っている。

第三章 検出された遺構と遺物

2号土器集積跡 (第480~485図 PL. 96・97)

位置 L-18 形状 不明。

規模 ほぼ径2m、厚さ20cmの範囲に土器片の集積が検出された。掘り込みの有無については確認できなかった。

遺物 II区55号住居跡として登録した遺物を本遺構伴出遺物として扱う。数量的に7世紀前半のものが主体。器種は1号が杯主体であったのに対し甕が多くを占める。器形を復元できる大形破片が多いが、完形品はない。遺物の出土状況から、円形状の落ち込みの中に限定された一時期に投棄されたものだろう。



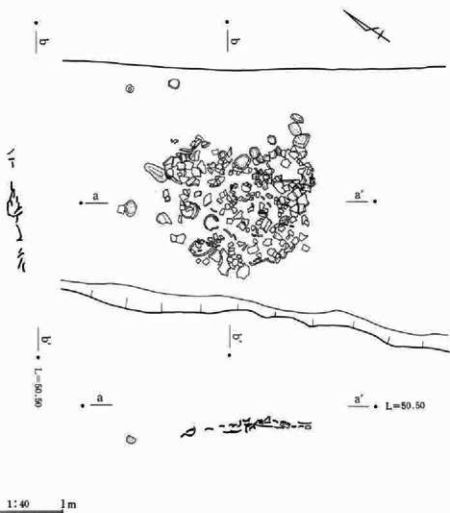
1



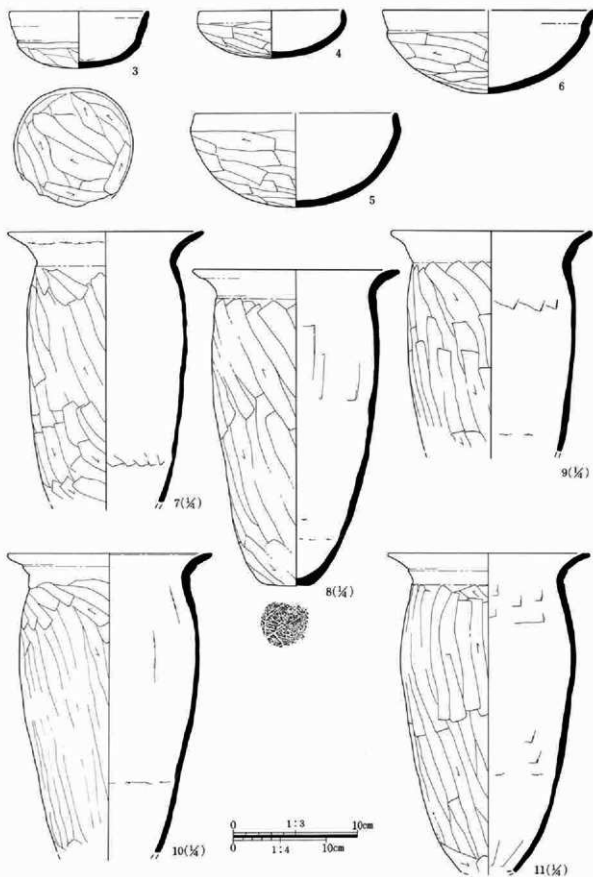
2

0 1:2 5cm

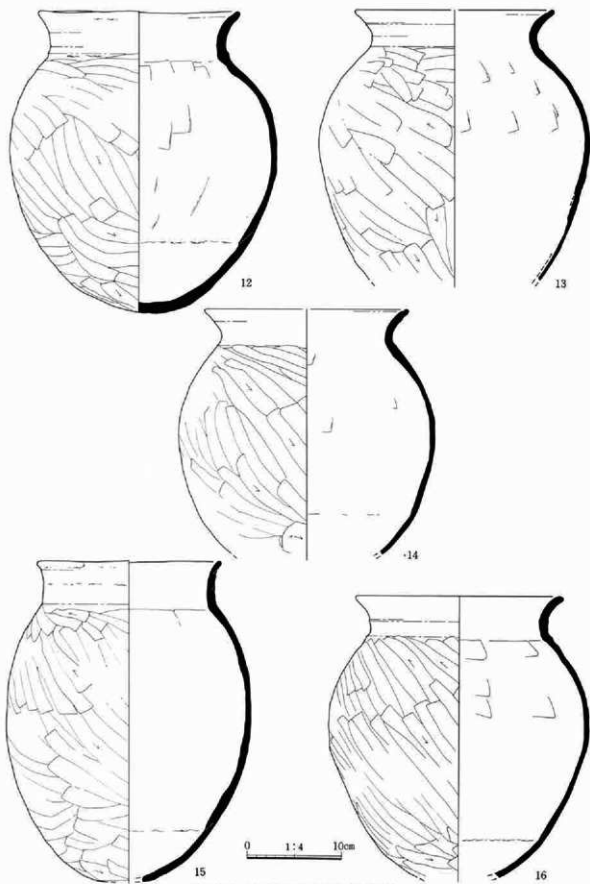
第480図 2号土器集積跡出土遺物(1)



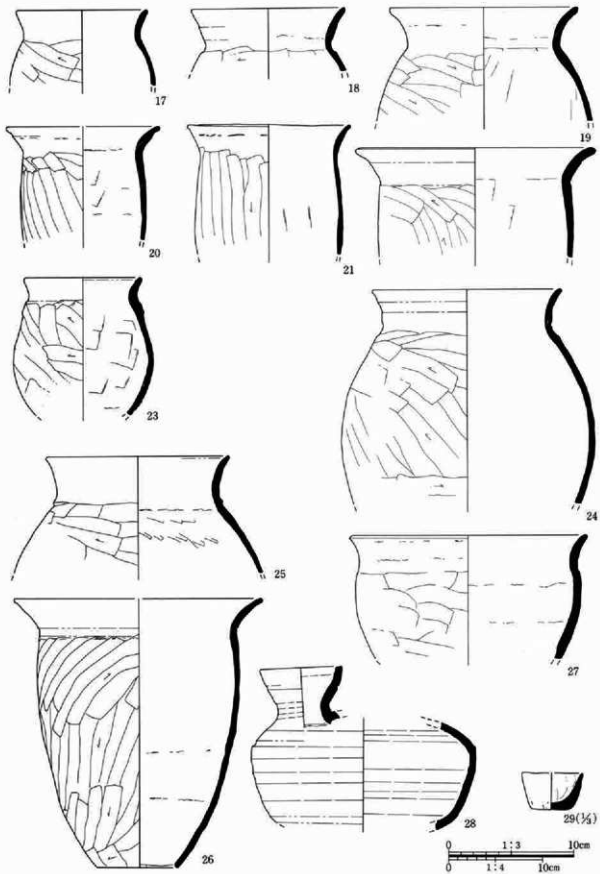
第481図 2号土器集積跡



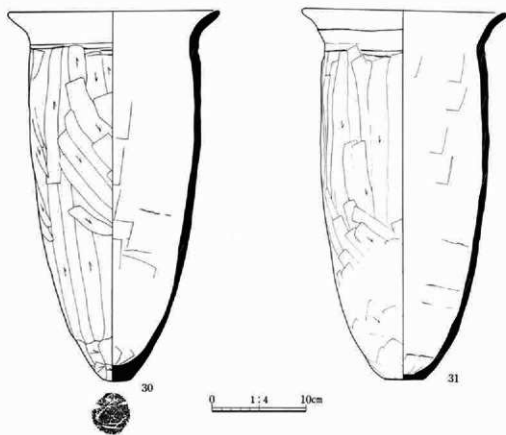
第482图 2号土器集積跡出土物(2)



第483図 2号土器集積跡出土遺物(3)



第484図 2号土器集積痕跡出土遺物(4)



第485図 2号土器集積跡出土遺物(5)

第6節 中世館跡

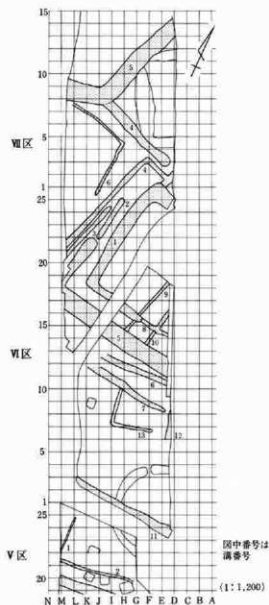
概要

調査区域には、山崎 一氏が「群馬県古城墓址の研究」で“淵名館”と命名した、一辺約170mの館跡推定地の一部がかかっていた。これに該当するのはVI区1号溝で囲まれた南北約32mの方形区画と、これの南側8mにあるVI区5号溝、及び約50m離れたVI区11号溝で囲まれた区域と思われる。

これらの遺構のうち、VI区5号溝は、幅、深さ共に他の溝より規模が大きく、形状も栗研堀に近いものとなっているが、館跡を巡るものではない。VI区1号溝で囲まれた区画の外堀としてとらえられるものと考えている。VI区11号溝は遺物出土量は多いが、規模は小さく館跡を巡る堀であるか否かは判別できなかった。なおこれらの溝からは土橋や木橋跡などは検出されていない。

淵名館は秀郷流藤原氏を継ぐと伝えられる淵名兼行から始まる淵名氏の居館が想定されていたのだが、溝から出土する遺物は16世紀代が中心であった。

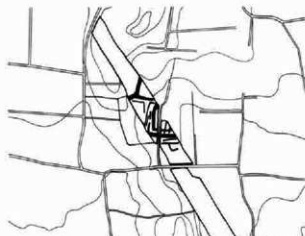
なお第8節で扱ったV区4号溝は、規模は小さいが、底面が階段状になるもので、「畷堀」的な意図が伺えるもので、館跡との関連が注目される。



第486図 館跡全体図



(昭和46年 山崎 一「群馬県古城墓址の研究」より)



第487図 館跡推定図

第三章 検出された遺構と遺物

VI 1号溝 (第488～494図 PL. 45・46・98・99)

位置 VI区14～25グリッド

規模と形状 北東半は調査区外のため未確認であるが内区を矩形に閉鎖する形状と考えられる。走向はN-3°-WとN-92°-Eでほぼ東西と南北方向に走る。南北走向の一辺は長さ40mで、最大幅5.3m、深さ1.6mを測る。断面形状は「薬研堀」状で、内区側の底から60cmの中位に約1m幅の「犬走り」状の平坦面が残る。これは溝内堆積土層の状況から掘り直した際の掘削面の可能性もある。東西方向の溝のうち北側は南北溝とほぼ同規模で、南側は最大幅3m、深さ1.5mと小規模である。断面形状はやはり「薬研堀」状で、勾配は約50°と南北溝より急角度である。これは規模の小さいVI区8号溝に継続してほぼ直線的に東側へ延びる。

埋土の特徴 第1次埋没土として、最下層に80cm前後の厚さで灰色粘土が堆積し、これを掘り直した後の埋積と思われる黒色土が堆積する。この上にロームブロックを多く含む褐色土が互層で厚く堆積しており、流れ込む土量は北西隅では外区、南北溝の南半では内区からの方が勝っている。

遺物 出土位置は掘り直し後の堀底付近に集中しており、内区側から投げ込まれたと思われるものが多い。皿、内耳土器、石臼が主で、他に板破片や石造品数点が出土する。

重複遺構 VI区の6号・7号・9号住居跡、VII区の1号住居跡を切っている。

備考 館の西半主要部を区画する最も内側の堀と思われる。埋積したロームブロックの堆積状況から土層が葺かれた可能性が高い。

VI 2号溝 (第495・496図 PL. 99)

位置 VI区22～24グリッド。VI区1号溝に西側に約2m離れて並走する。

規模と形状 規模は長さ15.2m、幅1.7m、深さ0.9m

を測り、走向はN-1°-Eを指す。南端でVI区5号溝と土橋状の仕切りで連続する可能性がある。断面形は「U」字状。

遺物 皿、皿が出土。

重複遺構 VII区1号住居跡、36号井戸と重複し、新旧関係は不明。

VI 3号溝 (第495・497・498図 PL. 100)

位置 VI区20～24グリッド。VI区2号溝と4号溝の間に挟まれて並走する。

規模と形状 幅1.3m、深さ0.4mでI-24グリッドで途切れる。走向はN-11°-E。断面形は浅い「U」字状。

遺物 灯明皿、石鉢、石臼等が出土。

重複遺構 VI区37号井戸と重複するが新旧不明。

VI 4号溝 (第495・499図 PL. 100)

位置 VII区21～VII区4グリッド。VI区1号溝の西側約6m離れて並走する。

規模と形状 幅1.8m、深さ0.5mで、VII区F-3グリッドで東方へ屈曲する。走向はN-11°-Eを指す。断面形や規模はVI区3号溝とほぼ同じである。南側は未調査のため確認できなかったが、東西に走るVI区7号溝と連続して、最も外側の方形区画の可能性も考えられる。

遺物 日常陶磁器類、石臼、石鉢、磁石、「寛永通寶」等が出土。

重複遺構 VII区10号住居跡、VII区4号住居跡を切る。

VI 6号溝 (第495図)

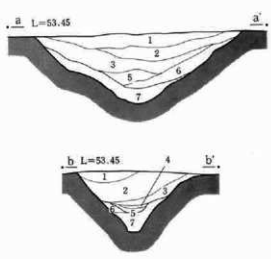
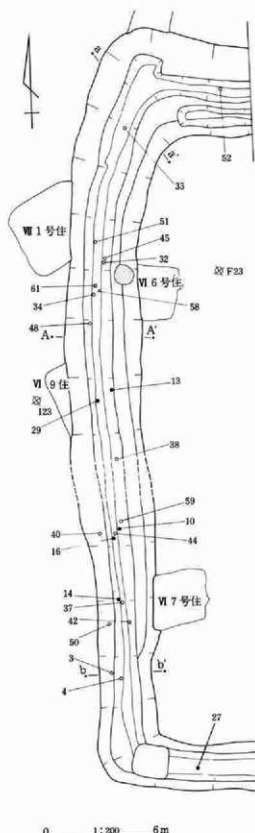
位置 VI区25～VII区9グリッド

規模と形状 幅0.75m、深さ0.5mで、南北に20m走り、H-4グリッドで西方に屈曲する。走向はN-3°-WからN-78°-Wを指す。西南の区画を囲繞する小規模な溝と考えられるが、館との関連は不明確である。

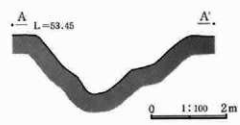
遺物 目立った出土遺物は見られない。

重複遺構 VII区の8号・10号・11号住居跡を切る。

第6期 中世 館跡



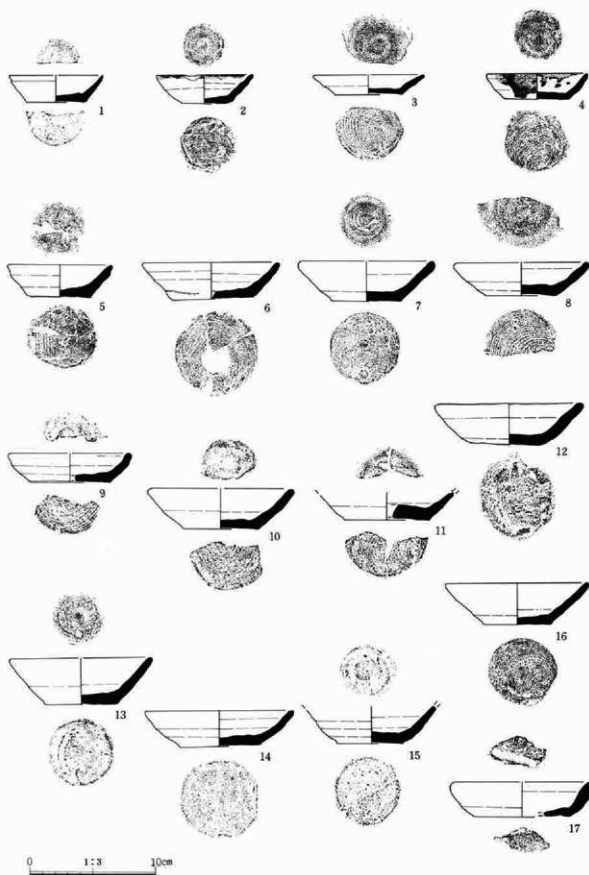
- 土層説明
- 1 黒褐色土 ローム粒を含む。
 - 2 黒褐色土 1層よりも明るく小ロームブロックを含む。
 - 3 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
 - 4 灰褐色土 ロームや粘土粒を主とする。
 - 5 黒色土 砂質、溝底堆積土。
 - 6 灰色土 土粒粗く、ローム粒を含む。
 - 7 灰色土 粘性強く、部分的にロームブロックを含む。溝底堆積土。



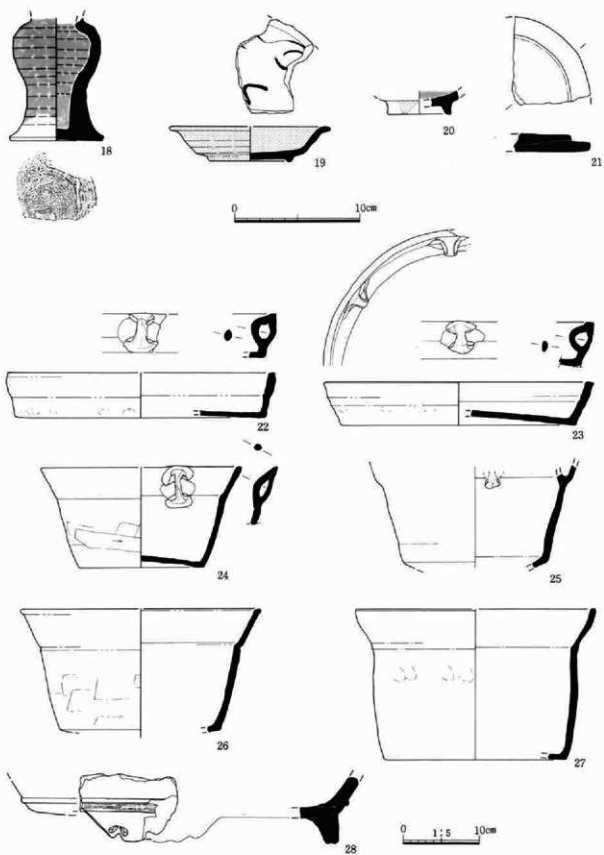
0 1:200 6m

図 116

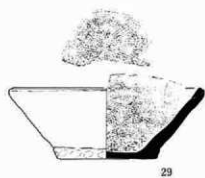
第488図 VI 1号溝



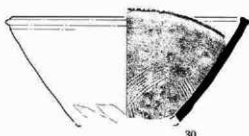
第489図 VI1号溝出土遺物(1)



第490圖 VI 1号溝出土遺物(2)



29



30

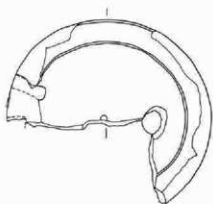


31

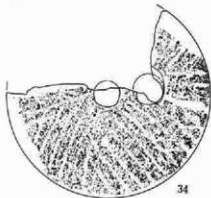
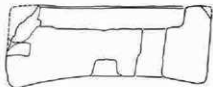
0 1:5 10cm



32



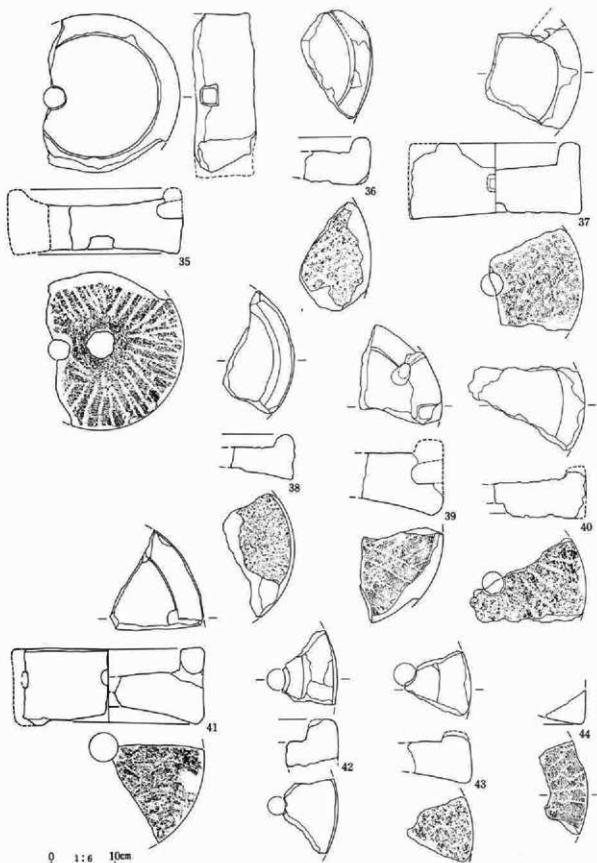
33



34

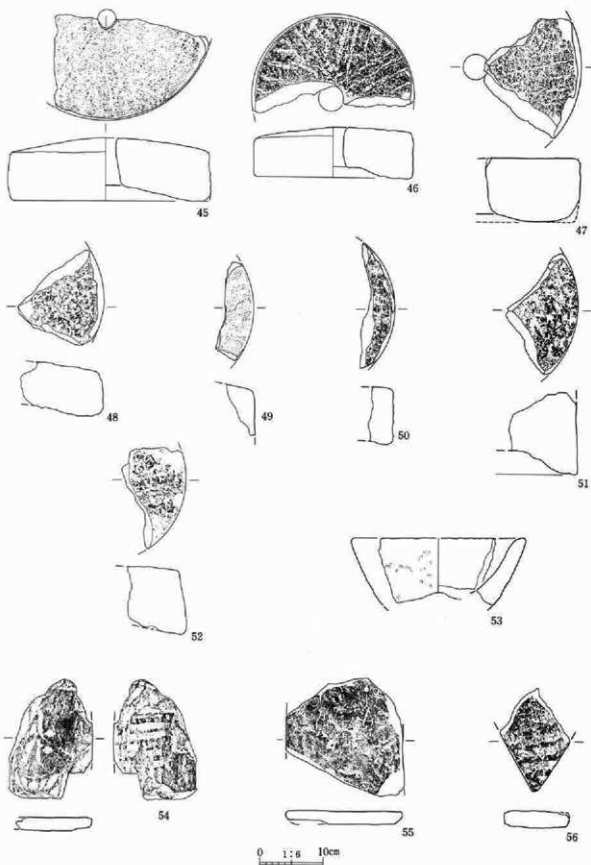
0 1:6 10cm

第491図 VI1号溝出土遺物(3)

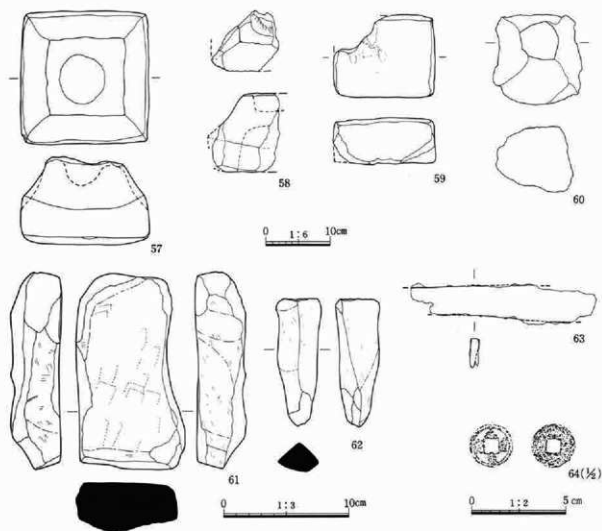


第492圖 VI1号溝出土遺物(4)

第三章 検出された遺構と遺物



第493図 VI1号溝出土遺物(5)



第494図 VI 1号溝出土遺物(6)

VI 5号溝 (第500~507図 PL. 47・100・101)

位置 VI区11~21グリッド。VI区1号溝の南側に4mの間隔をあけて並走する。

規模と形状 最大幅5.9m、深さ2.4mを測り、本遺跡で検出された館跡に関連する堀としては最大規模を誇る。東西走向部分に比べてL-18グリッド付近で北方へ屈曲する部分は幅2.8m、深さ1.3mと極めて小規模になる。走向はN-93°-E。断面形は3mほどの平坦な底面の「逆台形」状を呈し、中央部分は更に幅90cm、深さ20cmでくぼむ。法面の勾配は50°~60°。東方部分が未調査のために、これが方形区画を構成するとの確証はないが、防御施

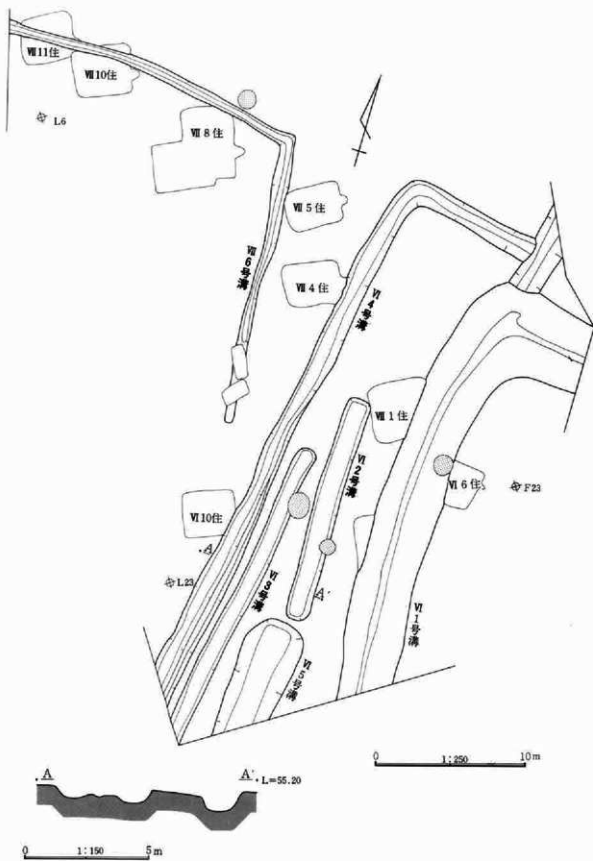
設として見た場合、VI区1号溝の小規模な東西走向部分の不備を補完するものと考えられる。

埋土の特徴 地山法面の崩落土と思われる灰褐色砂質土が厚く堆積する。また埋土の特徴から土塁の存否は確認できない。堆積状況から数度に亙る掘り直しが伺えるが、最終段階では幅3m、深さ1mほどに縮小している。

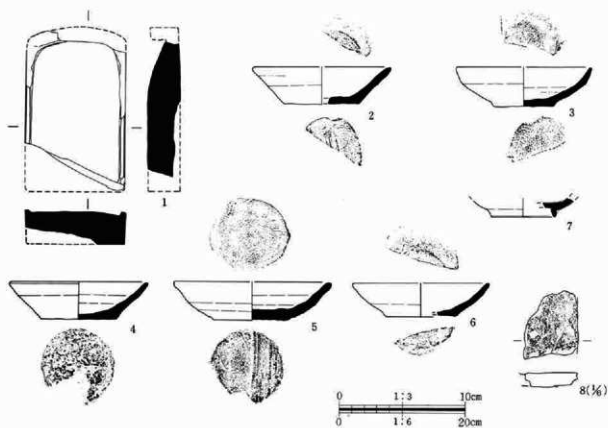
遺物 出土位置は中位以下に集中しており、その状況から堀の内側から投棄されたと想定される。内耳鍋、櫛鉢等の陶磁器類、石臼、石造品が出土。

重複遺構 VI区8号住居跡を切る。

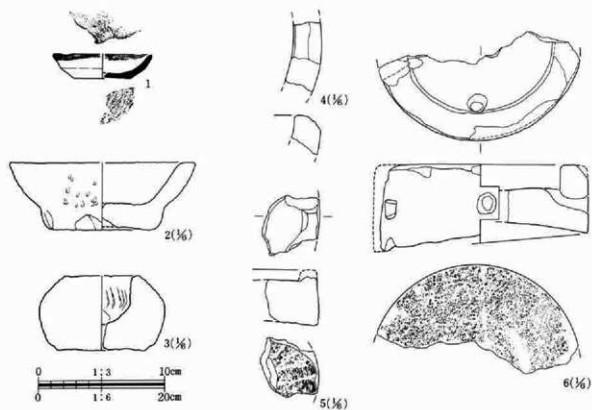
第三章 検出された遺構と遺物



第495図 VI 2号・3号・4号溝・VII 6号溝

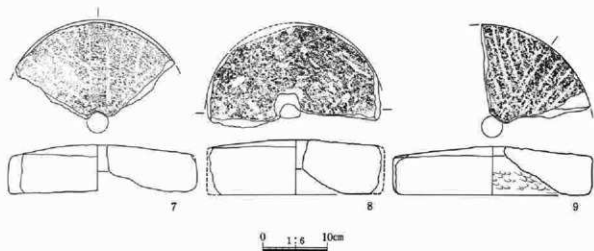


第496図 VI 2号溝出土遺物

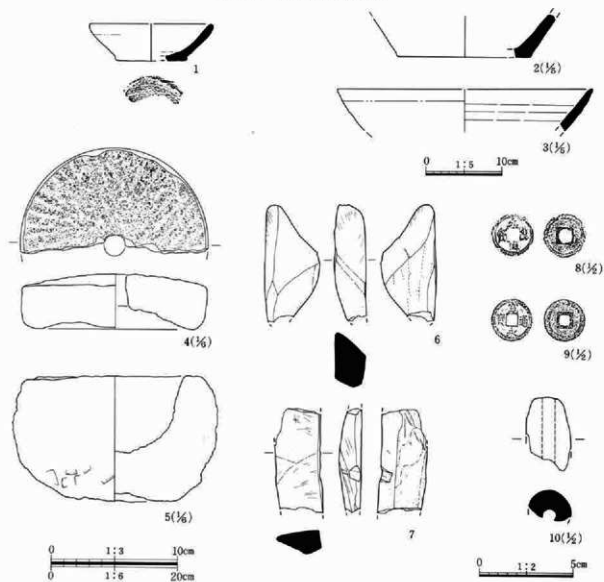


第497図 VI 3号溝出土遺物(1)

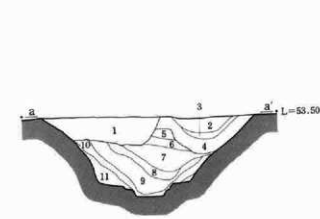
第III章 検出された遺構と遺物



第498図 VI 3号溝出土遺物(2)



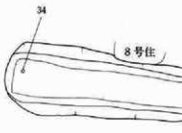
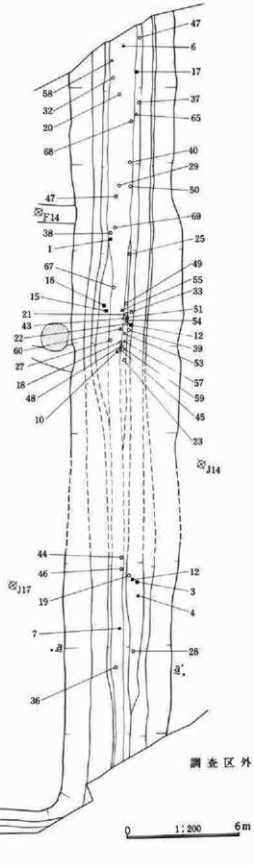
第499図 VI 4号溝出土遺物



0 1:100 2m

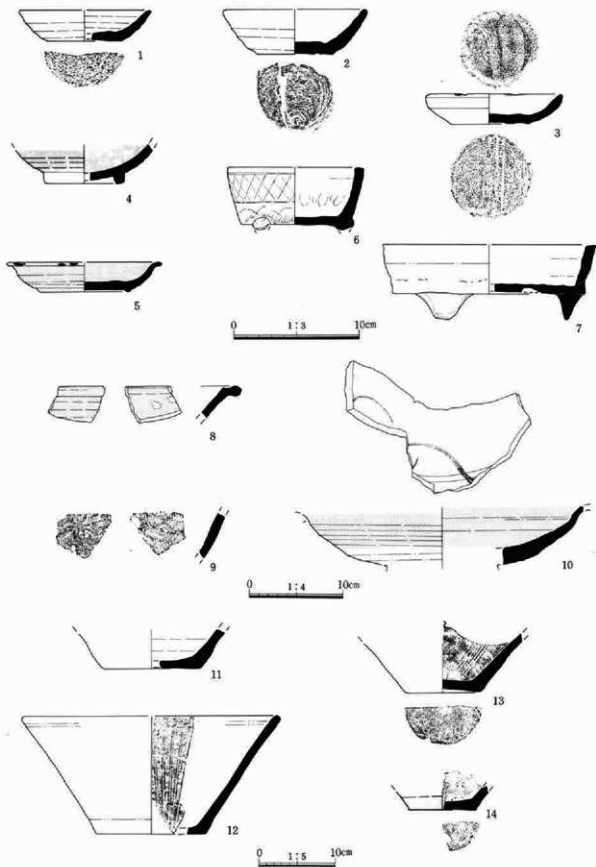
土層説明

- 1 灰褐色土 粒子が粗い。
- 2 黒褐色土 軟質で粒子が粗い。
- 3 茶褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 黒褐色土 粒子が細かい。
- 5 黒褐色土 しまりがある。
- 6 灰褐色土 砂質。
- 7 灰褐色土 砂質で、ローム粒を含む。
- 8 暗灰褐色土
- 9 灰褐色土 砂質。
- 10 黒色土 砂質。
- 11 黄色土 地山崩落土。

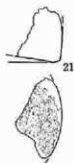
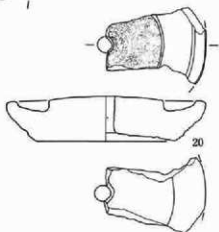
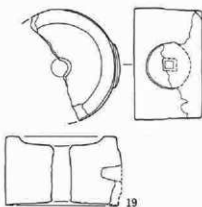
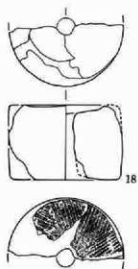
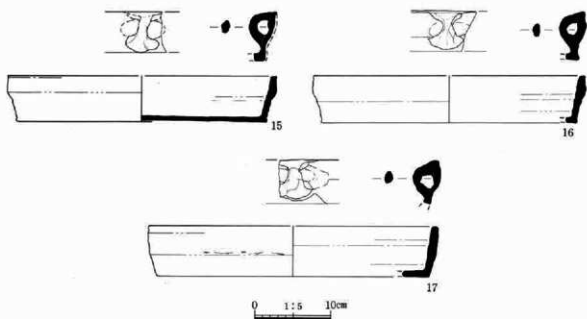


第500図 VI 5号溝

第三章 検出された遺構と遺物

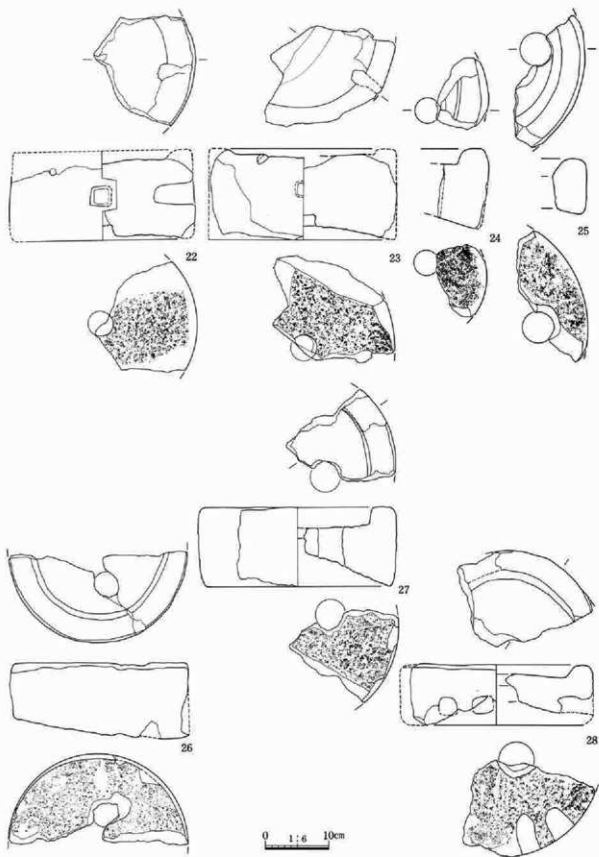


第501図 VI5号溝出土遺物(1)

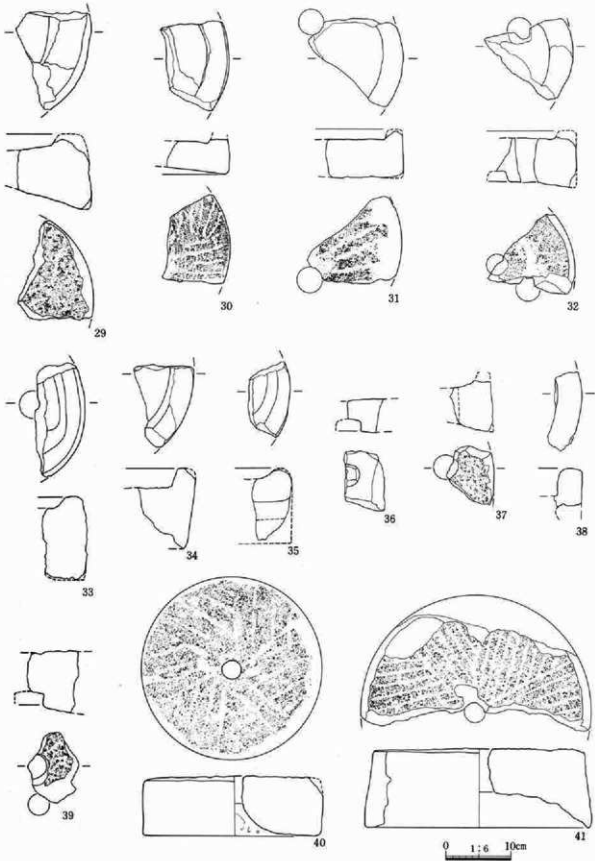


0 1:6 10cm

第502図 VI5号溝出土遺物(2)

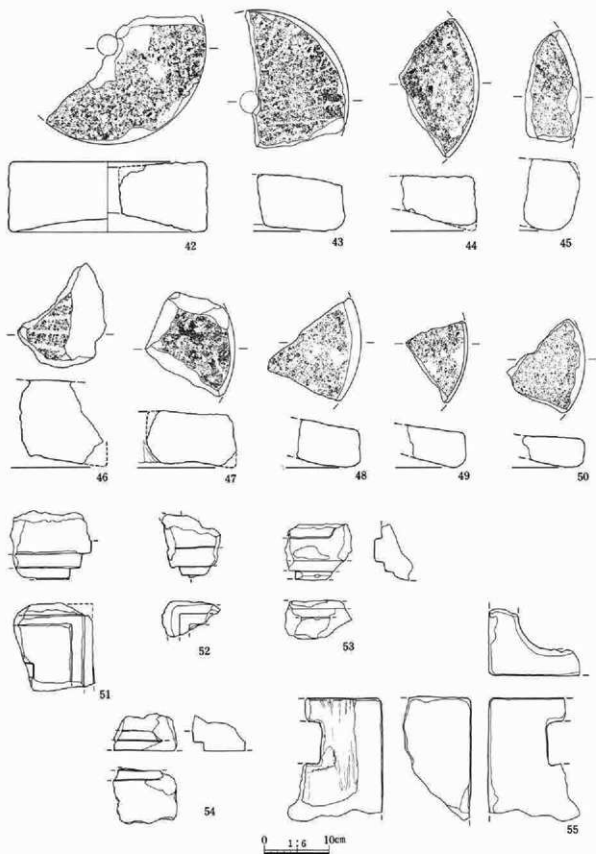


第503図 V15号溝出土遺物(3)

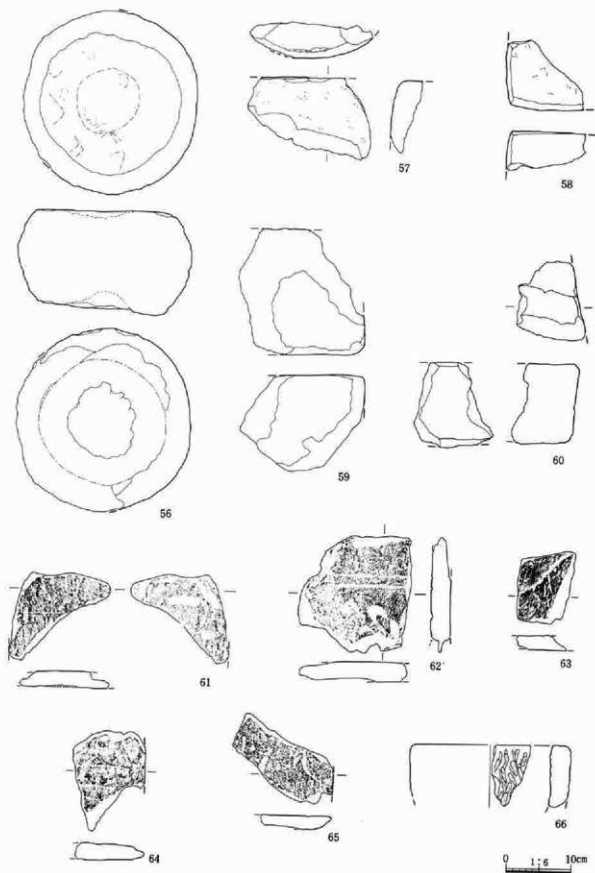


第504圖 VI 5号溝出土遺物(4)

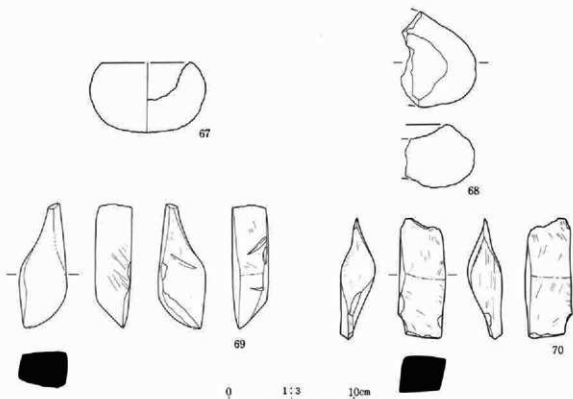
第三章 検出された遺構と遺物



第505図 VI 5号溝出土遺物(5)



第506圖 VI 5号溝出土遺物(6)



第507図 VI 5号溝出土遺物(7)

VI 6号溝 (第508・509図 PL. 48)

位置 VI区10～12グリッド

規模と形状 幅2.1m、深さ0.6mで、長さは不明だが
J-12グリッド付近で途切れるらしい。走向
はN-80°-Eで、館跡を圍繞する他の溝とは
やや方向を異にする。

遺物 目立った遺物は出土していない。

重複遺構 VI区2号・5号住居跡、2号土坑、9号・
10号井戸と重複し、2号・5号住居跡よりは
新しいが、その他との関係は不明。

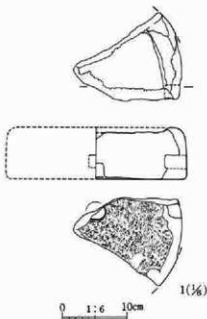
VI 7号溝 (第509・510図 PL. 48・102)

位置 VI区8～11グリッド。VI区5号溝から南側
に8m離れて並走する。

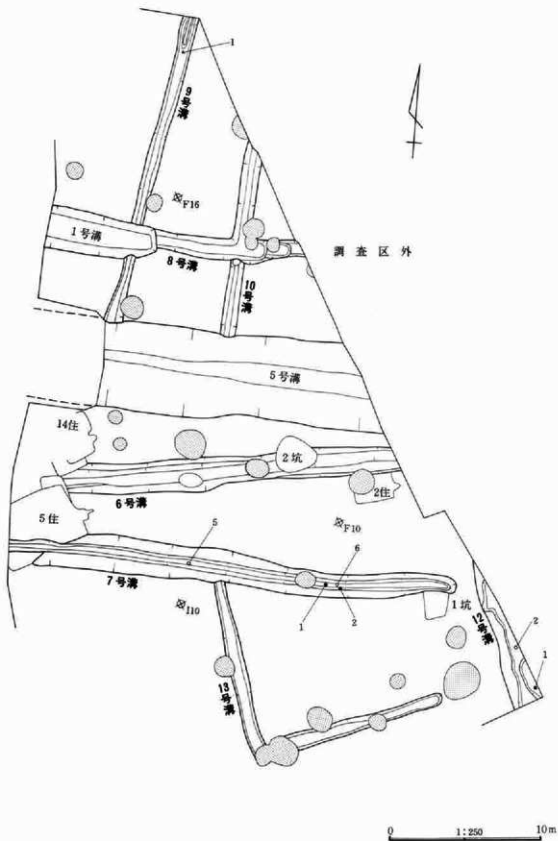
規模と形状 幅2.5m、深さ1.2mを測り、D-8グ
リッドで途切れる。走向はN-91°-E。西側
で北方に屈曲して4号溝と連続する可能性が
ある。

遺物 皿、播鉢等の陶磁器類、石臼が出土。

重複遺構 VI区5号住居跡、1号土坑、8号井戸と
重複し、5号住居跡よりは古い。

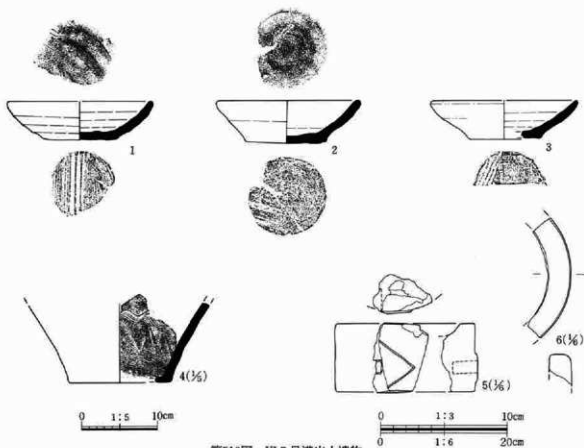


第508図 VI 6号溝出土遺物



第509図 VI 6号~13号溝

第三章 検出された遺構と遺物



第510図 VI7号溝出土遺物

VI8号溝 (第509・511図 PL. 102)

位置 VI区E・F-14・15グリッドでVI区1号溝の東西部分に連続するものだろう。

規模と形状 幅1.4m、深さ0.9mを測り、走向はN-90°-Eを指す。1号溝とは50cmほどの段差がある。

遺物 陶磁器類と石臼が出土。

重複遺構 VI区17号・18号井戸と重複、10号溝と交差するが、新旧関係は不明。

VI9号溝 (第509・512図 PL. 48・102)

位置 VI区14~18グリッド

規模と形状 幅0.9m、深さ0.6m。走向N-10°-E。

小規模な2条平行の溝あるいは掘り直しの可能性あり。断面形は「葉研削」状。

遺物 板碑片が出土。

重複遺構 VI区1号・5号溝と直交するが新旧関係は不明。

VI10号溝 (第509図)

位置 VI区13~16グリッド

規模と形状 幅1.3m、深さ0.8m。走向N-3°-E。

9号溝とは約5mの間隔をあけて並走する。

両者とも直交する5号溝以南では検出されないことから内区を仕切る溝になろうか。

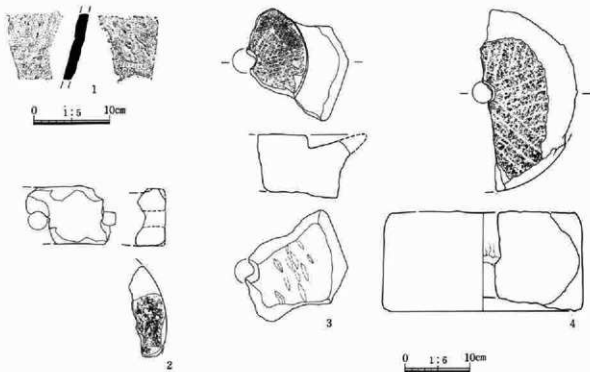
遺物 特に目立つ遺物は出土していない。

重複遺構 VI区5号・8号溝と直交し、新旧関係は不明。

VI11号溝 (第513~519図 PL. 48・102・103)

位置 V区23~VI区2グリッド。VI区5号溝から南側に42mほど離れて東西に走る。

規模と形状 幅3.0m以上、深さ1.2mを測り、東西両端の延長部分是不明。走向はN-88°-Eを指す。断面形はやや底の丸い「葉研削」状で、勾配は50°前後。深さは浅いが、規模としてはVII区5号溝、VI区5号溝、1号溝に次ぐもの



第511図 VI 8号溝出土遺物

である。本溝は明治18年測量の地形図（参謀本部陸軍局測量）によれば道路となっておりすでに溝としての機能は失せているが地境として遺存したらしい。館跡の南端の堀になる可能性がある。

遺物 出土位置は下層部分に集中し、日常陶磁器類、石臼、砥石、五輪塔等が多量に出土。

重複遺構 13号墳を切る。

VI12号溝（第509・520図）

位置 VI区6～8グリッド。調査区東端で一部を検出。

規模と形状 南北方向にやや蛇行する。規模は不明。

館跡との直接的な関連は不明。

遺物 内耳鍋、石臼等の破片が出土。

VI13号溝（第509図）

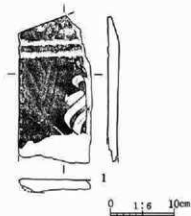
位置 VI区6～9グリッド

規模と形状 幅約1m、深さ0.4mを測り、東西方向

に12mで、走向がN-67°-EからN-18°-Wに屈曲する。溝の北東部分を区画するものと思われるが、館跡を構成する他の溝とは走向が異なる。

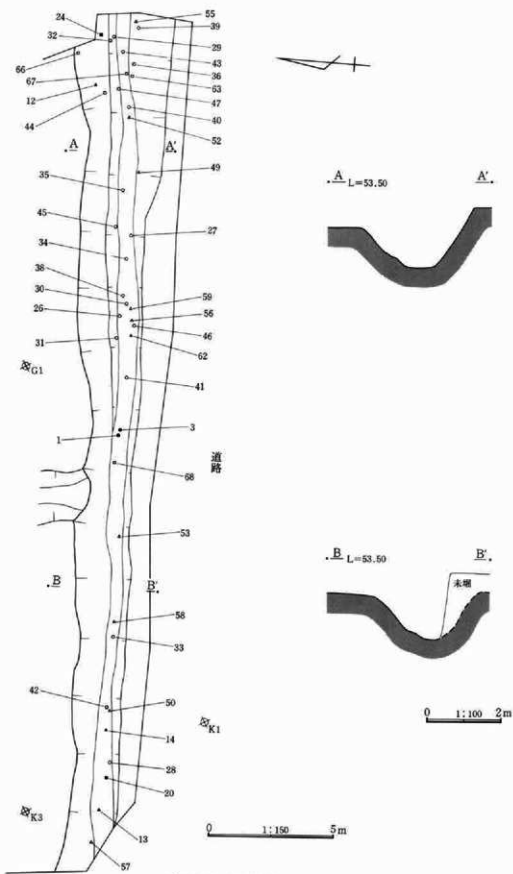
遺物 特に目立つ遺物は出土していない。

重複遺構 VI区6号・7号・14号・24号・25号井戸と重複する。

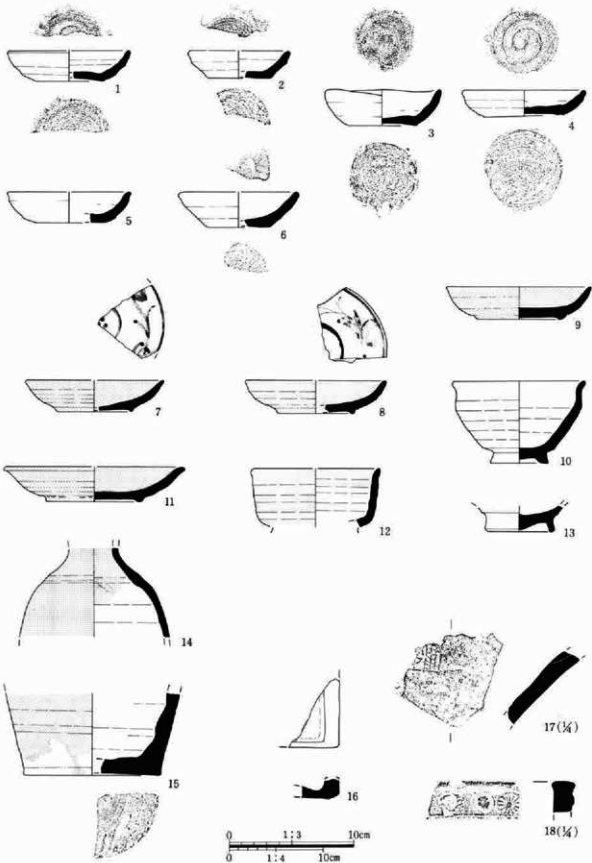


第512図 VI 9号溝出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

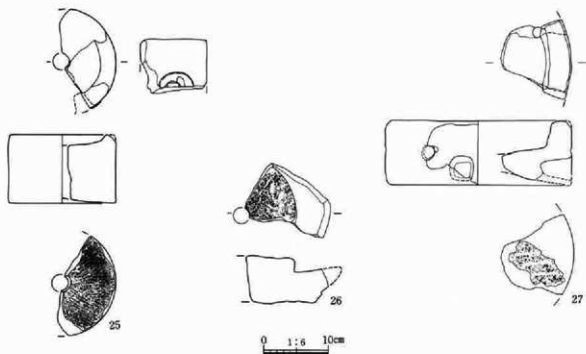
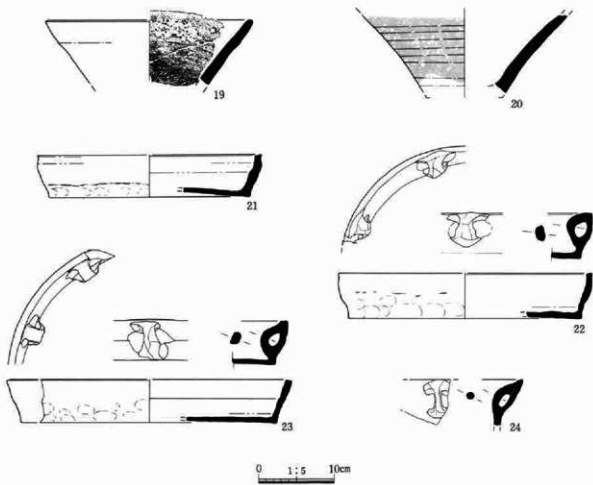


第513図 VII1号溝

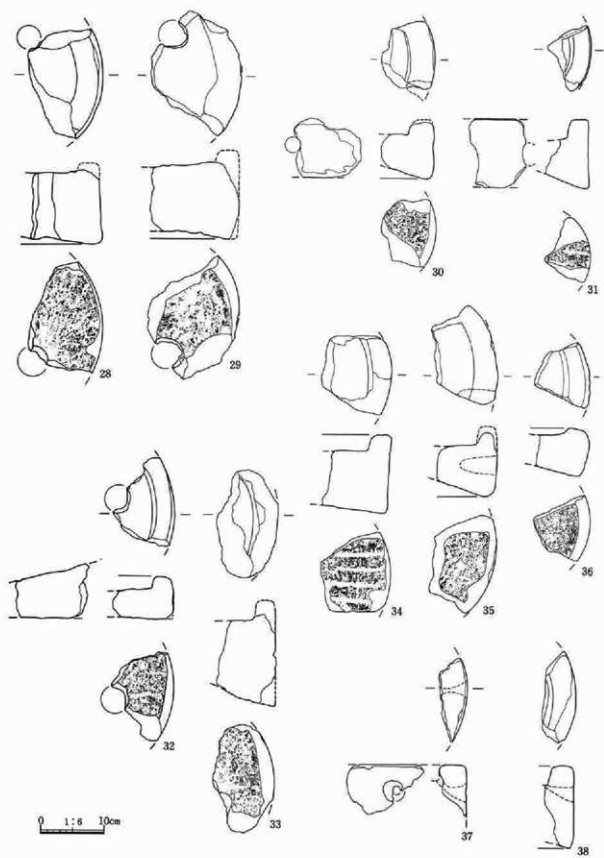


第514圖 VII1号溝出土遺物(1)

第III章 検出された遺構と遺物

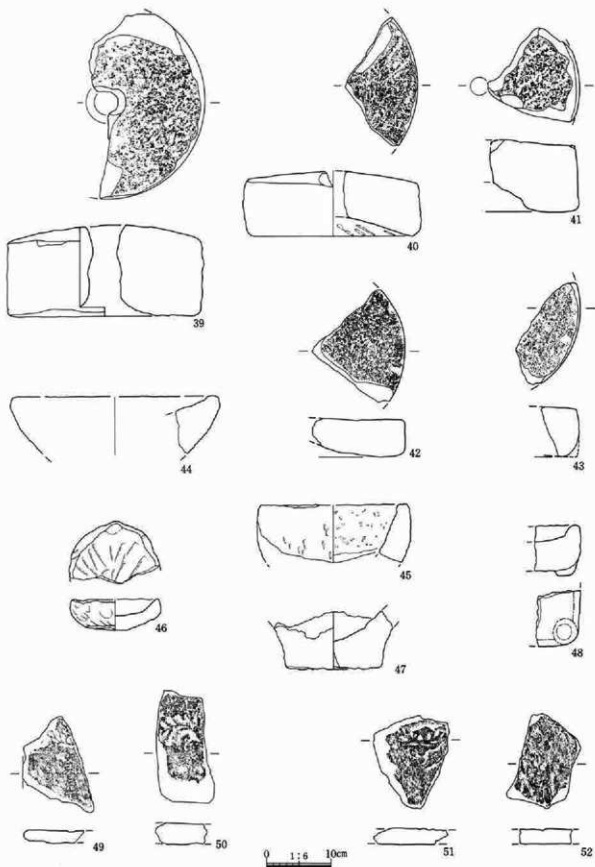


第515図 VII1号溝出土遺物(2)

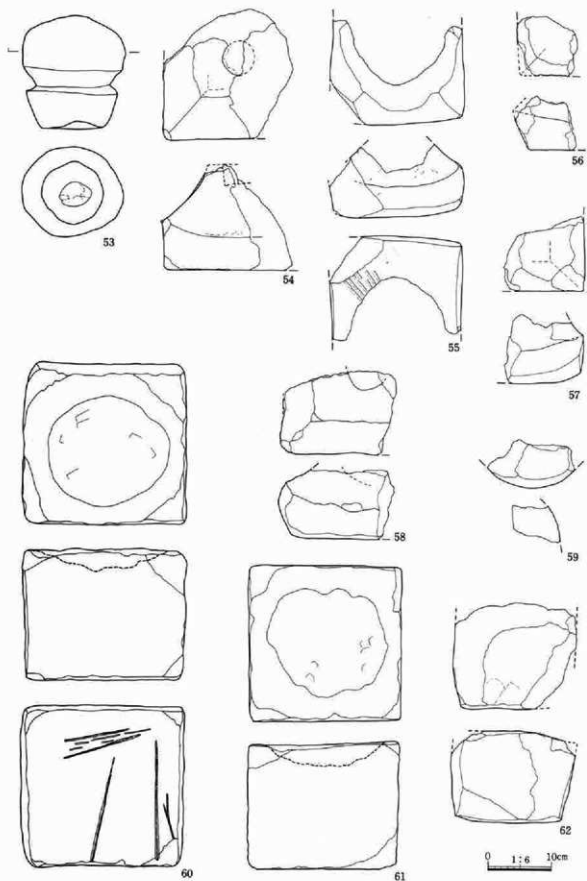


第516図 VII1号溝出土遺物(3)

第三章 検出された遺構と遺物

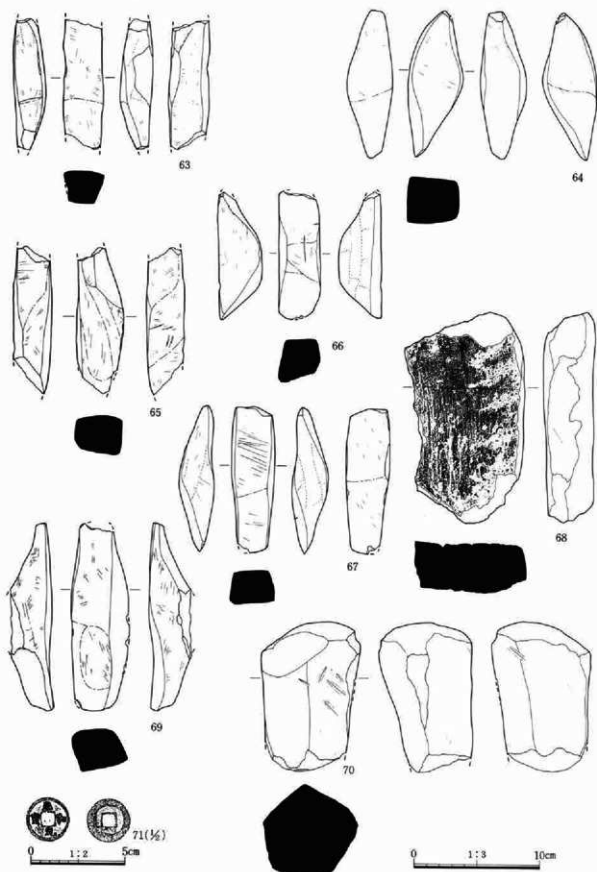


第517図 VII1号溝出土遺物(4)

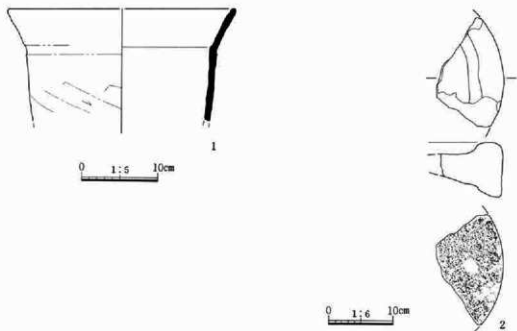


第518図 VIII号溝出土遺物(5)

第三章 検出された遺構と遺物



第519図 VII1号溝出土遺物(6)



第520図 VII12号溝出土遺物

VII 4号溝 (第521~523図 PL. 103)

位置 VII区3~7グリッド

規模と形状 VII区5号溝の屈曲部分から東西に走り、28mで途切れる。幅3.4m、深さ1.3~1.5mを測る。断面形は中央部が急角度で落込み、底面が丸みを持つ、いわゆる「毛抜細」状を呈する。走向はN-103°-E。底面レベルは東側にやや傾斜しており途切れた部分で水が溜まることも考え得る。

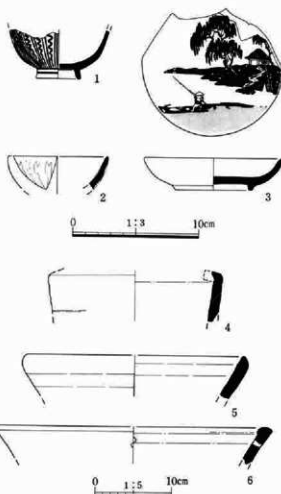
埋土の特徴 下層は有機質の多い土が堆積する。また本溝がほとんど埋まりきった後に、純層ではないが浅間山噴出火山灰 As-A (天明3年-1783年) が厚く覆っている。

遺物 板碑、石臼、近世陶器片が出土。

重複遺構 12号墳を切り、VII区5号井戸との新旧関係は不明。

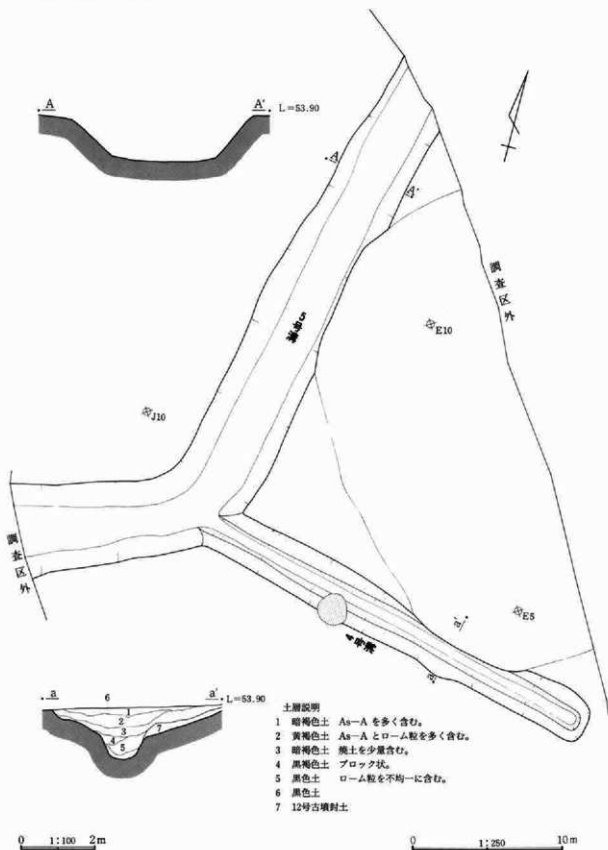
VII 5号溝 (第522・524図)

位置 VII区8~14グリッド。館跡に関連する可能性のある溝の中では最も北西に位置する。本溝を境に北西側は緩い上り勾配の傾斜面になる。

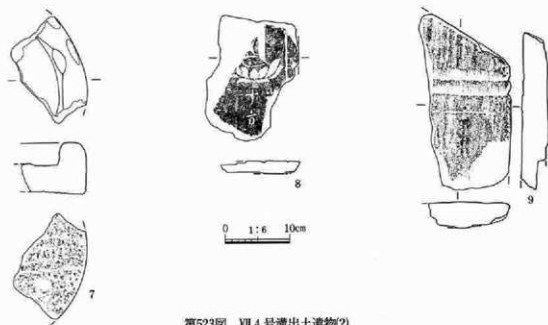


第521図 VII 4号溝出土遺物(1)

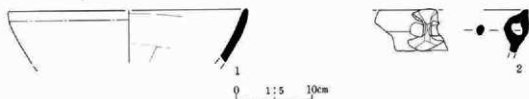
第三章 検出された遺構と遺物



第522図 VII 4号・5号溝



第523図 VII 4号溝出土遺物(2)



第524図 VII 5号溝出土遺物

規模と形状 最大幅6.5m、深さは0.7~1.9mで西側が浅く北東側へ低く傾斜する。断面形は逆台形状を呈し、勾配は40°~50°を測る。底面はほぼ平坦で幅3m近くを測る。走向はN-69°-EからN-12°-Eに屈曲する。北東部は未調査であるが、傾斜面が迫っていることから、東方に屈曲すると思われる。また南西部についてもこのまま延びるのではなく、南方に折れると考えられよう。その場合館跡を圍繞する外堀となる可能性がある。少なくとも北側と西側の一段高い場所と館のある南西の平地を区切る意図を読み取ることにはできる。VII区4号溝とは底面が連続することから、ほぼ

同じところに同じ意図を持って掘削されたものと考えられよう。なお近代にはいってもこの溝は水堀として遺存し、その内側には通称「大畑山」という土塁が存在していた(昭和46年山崎一『群馬県古城址の研究 上巻』による)らしいが、その痕跡は検出できなかった。

遺物 わずかに陶器片が出土したのみである。

重複遺構 12号墳を切る。

第7節 道 路 跡

概 要

調査時点で溝として扱ったもののうち、同規模の溝が平行して走っており、地図等によって道路としての可能性の高いものをここで取り上げた。調査検討の結果、調査区内では2本の道路跡が検出された。ただし両者とも路面は確認されておらず、あくまでも推定であることを付記しておく。なおこれを1号道路跡、2号道路跡とそれぞれ命名したが、個々の説明では調査時点の登録名である溝名を用いた。

1号道路跡 (第526・527図 PL. 104)

位 置 I区22～II区2グリッド。調査区南西端で調査時現在で用いられている小規模な道路の下から検出。

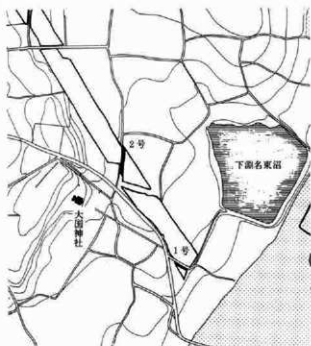
規模と形状 I区の1号・2号溝が側溝にあたる。

1号溝は北北東方向にずらして掘り直されているために、平面的には幅広い溝として検出された。幅1.5m、深さ0.5mを測り、最初の溝もこれとほぼ同規模と思われる。埋土には地山の粘土粒やブロックを含んでおり、掘削土をすぐ脇に積み上げていた可能性が高い。2号溝は幅0.6m、深さ0.2mで、1号溝に比べてやや小規模である。埋土は1号溝と同様である。走向はN-60°-Wを指す。この側溝に挟まれた路面と想定される部分の幅は約1.5mを測る。

遺 物 9世紀代の杯や砥石が出土するが、重複する住居跡からの流れ込みと考えられよう。

重複遺構 I区3号・4号溝と直交しており、3号溝よりは新しいと思われる。

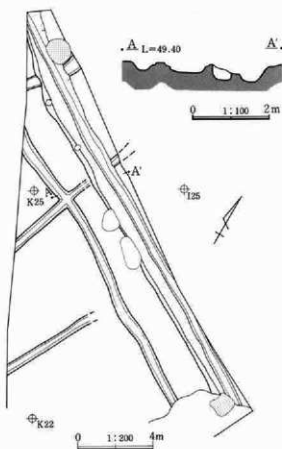
備 考 本道路跡はこれより北西方向約200mに鎮座する大國神社の参道に直結する道であり、南東方向は数10mで低地部との境を走る道と交差すると考えられる (第525図)。



(1:6000)

第525図 道路推定図

(昭和37年埴町都市計画図より作成)



第526図 1号道路跡

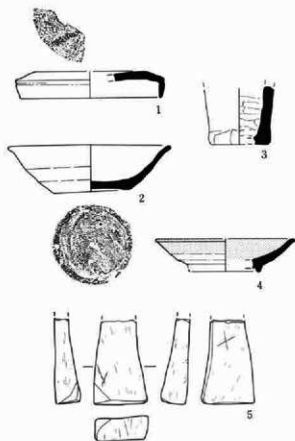
第7節 道 路 跡

なる。東端に走る4号と5号溝はG-22グリッドで2m弱の間隔をあけて切れており、ここが東側へ延びる道との辻であったことが推定される。これら側溝の同時性は確認できないが、最大幅を示す東端の5号溝と西端の7号溝で想定した場合、道路幅は4m弱となる。

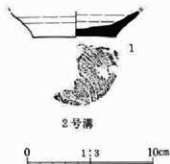
遺 物 4号溝から土鏝、5号溝からは瓦片が出土するが、本遺構に伴うとの確証は得られなかった。

重複遺構 2号・3号・5号・6号古墳を切る。

備 考 大国神社の参道と直交し、鳥居前を南北に走る道路跡と思われる(第525図)。利用された時期の上限は不明だが、明治18年測量の迅速測図に記されていることから、江戸時代に遡るの間違いないだろう。なおこの道路は検出された館跡の推定東限に沿って延びる可能性がある。



1号溝



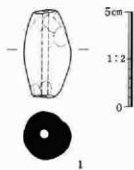
2号溝

第527図 1号道路側溝出土遺物

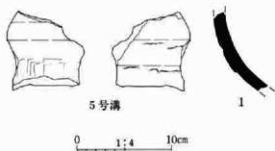
2号道路跡 (第528・529図 PL. 104)

位 置 Ⅲ区18~Ⅳ区3グリッド。現道路の下位から検出された。

規模と形状 側溝はⅢ区4号~9号の6条が検出された。これらは幅0.7~1.3m、深さ0.2~0.7mで、規模に大きな差はない。走向はN-2°~5°-Wとほぼ南北方向に走る。断面形は「U」字状で、底面レベルは北から南へ低く

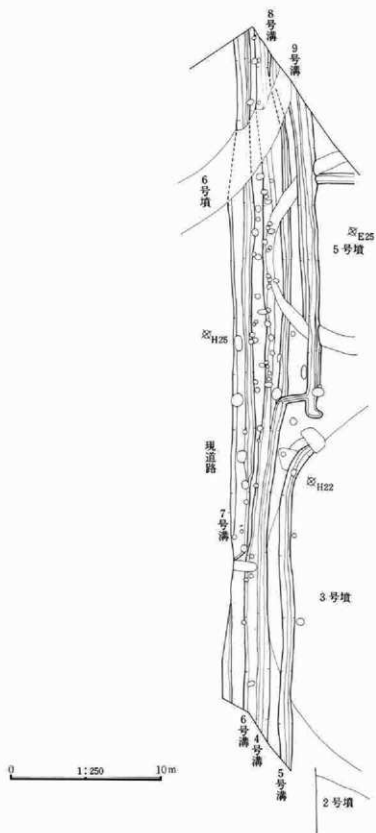


4号溝



5号溝

第528図 2号道路側溝出土遺物



第529図 2号道路跡

第8節 溝

概要

ここでは、検出された溝のうち前節で扱った館跡、道路跡と分けて、性格の不明確なすべての溝を扱う。

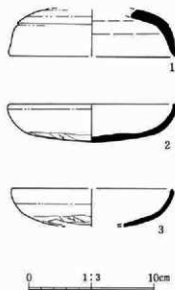
I 3号溝 (第530・531図 PL. 104)

位置 I区24～II区6グリッド

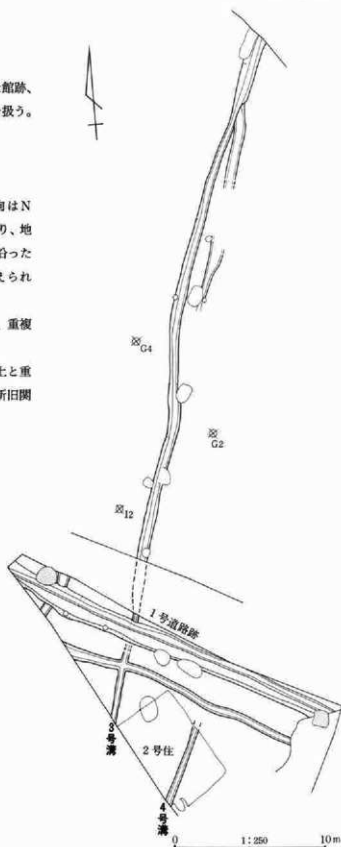
規模と形状 幅は約1m、深さ25cmで、走向はN-16°-Eを指す。わずかに蛇行しており、地形的には東側低地への傾斜変換部分に沿った台地縁辺部を南北方向に延びると考えられる。

遺物 古墳時代以降の土器片が出土するが、重複する住居跡からの流れ込みだろう。

重複遺構 平安時代以前の竪穴住居跡10軒以上と重複しており、いずれよりも新しいか、新旧関係不明である。



第530図 I 3号溝出土遺物



第531図 I 3号・4号溝

I 4号溝 (第531図)

位置 I区J・K-22・23グリッド

規模と形状 削平により大部分は不明。長さ6m、幅40cm、深さ5cmほどがわずかに遺存する。走向はN-25°-Eを指す。3号溝の東側約5mを並行して走ることから、これと近い性格か。

遺物 なし。

重複遺構 I区の2号住居跡を切る。

II 1号溝 (第532・533図 PL. 49・104)

位置 II区15~24グリッド

規模と形状 幅は1.2m、深さ0.8mを測り、南北方向に走ってC-24付近で途切れる。断面形は「葉研堀」状を呈する。

遺物 10世紀代の土器片、鉄鏃、刀子、土錘等が出土。伴う可能性は不明。

重複遺構 II区49号・50号住居跡、4号古墳、2号溝を切る。

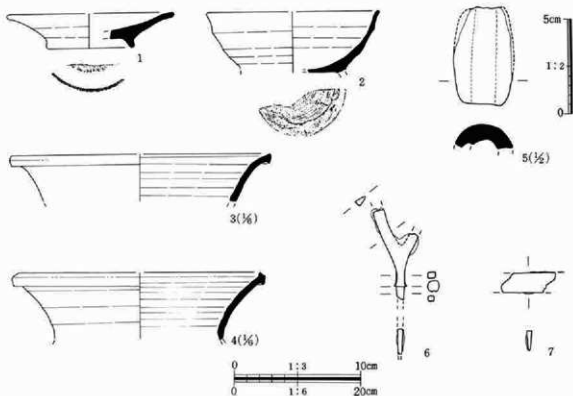
II 2号溝 (第533・534図 PL. 49・104)

位置 II区7~23グリッド

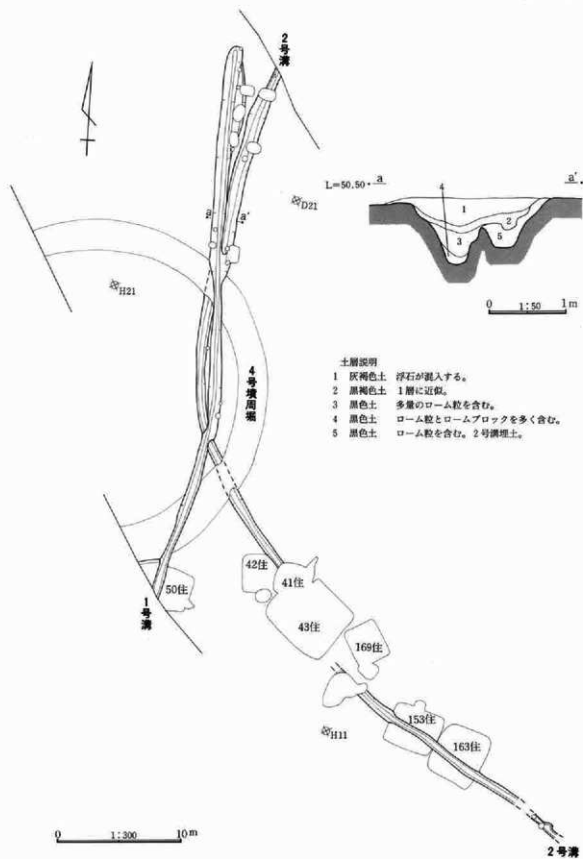
規模と形状 幅は1.4m、深さ0.6mを測り、D-7付近から北西に湾曲して走り、G-17付近で北北東へ屈曲して延びる。断面形は「葉研堀」状を呈する。

遺物 10世紀代の土器片、土錘等が出土するが、伴う可能性は不明。

重複遺構 竪穴住居跡10軒と重複しており、いずれよりも新しいか新旧関係不明であるが、1号溝よりは古い。

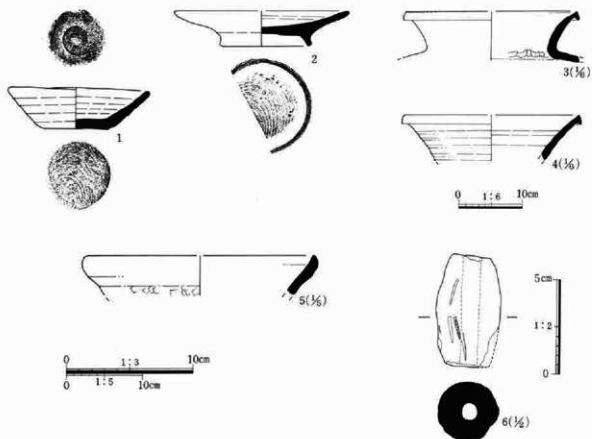


第532図 II 1号溝出土遺物



第533図 II 1号・2号溝

第三章 検出された遺構と遺物



第534図 II 2号溝出土遺物

IV 1号溝 (第535・536図 PL. 49・50・104)

位置 IV区18～21グリッド

規模と形状 I-18から北側に20mほど検出された。幅は約3m、深さは1mで底面のレベル差は南側ほど深くなる。断面形は「葉研堀」状を呈する。勾配は南側が急で、60°を測る。走向はN-12°-Eを指す。なお溝の終わるI-18では楕円形にやや深く掘りこまれている。

埋土の特徴 中層以下は地山法面の崩落と思われる灰色がかかった砂質土が堆積する。中位にはロームブロックが多く見られる。

遺物 底面から20～30cm浮いた位置でほぼ完形の板碑、小皿、内耳鍋、磁石等が出土。

重複遺構 5基の井戸が重複しているが、いずれも本溝より新しいと思われる。また本溝より新しい6号溝が東側に沿って走る。

IV 2号溝 (第535・537～540図 PL. 49～53・104・105)

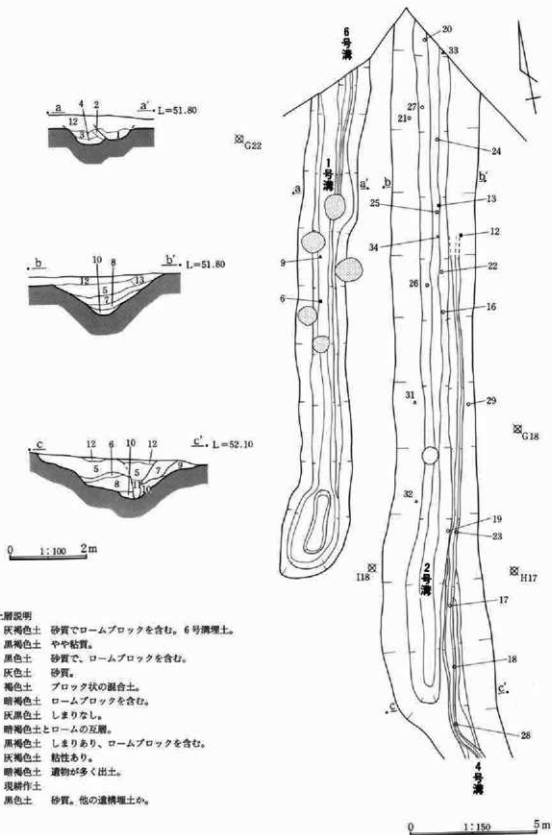
位置 IV区16～21グリッド。

規模と形状 幅は4.3m、深さ約1mを測り、走向はN-11°-Eを指す。断面形は「葉研堀」状で、底が丸くくぼむ。勾配は平均的に30°前後を測る。I-16付近で終わっており、西側に並走する1号溝と近似する。

埋土の特徴 下層に地山法面からの崩落と思われる砂質土が堆積し、中位にロームの多い土層が見られる。

遺物 下層～中層にかけて出土しており、中～近世の陶磁器類、石臼、板碑、五輪塔等が見られる。

重複遺構 IV区4号溝に沿って走り、これよりも新しい。

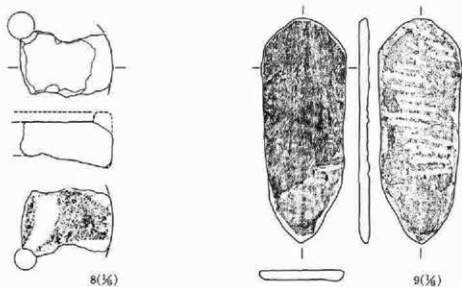
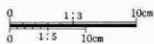
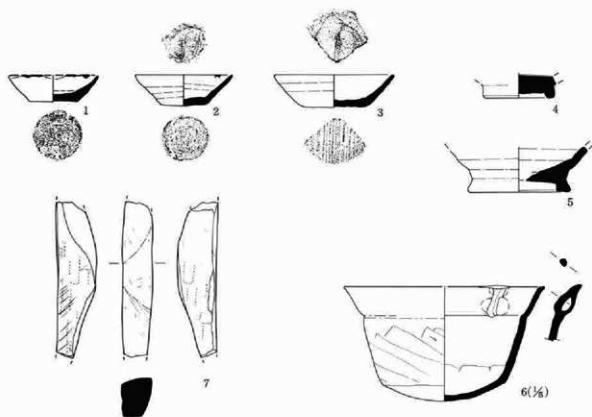


土層説明

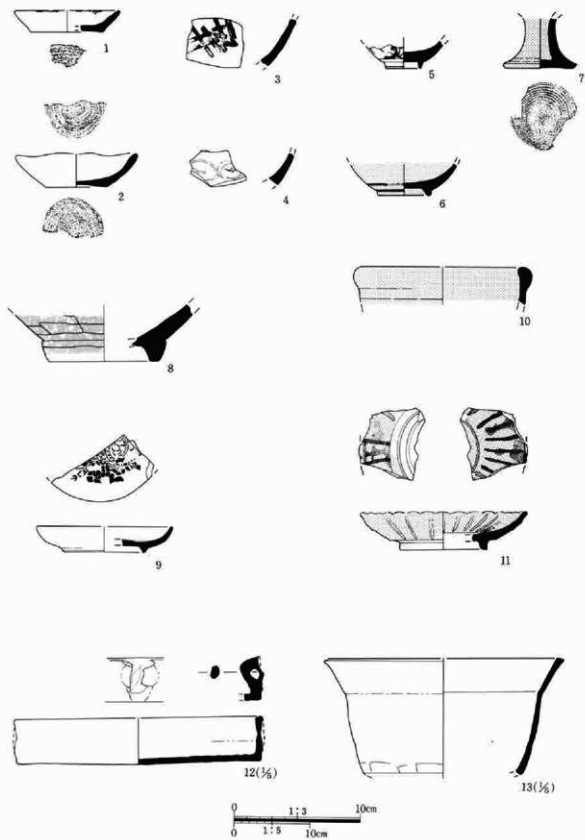
- 1 灰褐色土 砂質でロームブロックを含む。6号溝埋土。
- 2 黒褐色土 やや粘質。
- 3 黒色土 砂質で、ロームブロックを含む。
- 4 灰色土 砂質。
- 5 褐色土 ブロック状の混合土。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを含む。
- 7 灰黒色土 しまりなし。
- 8 暗褐色土とロームの互層。
- 9 黒褐色土 しまりあり、ロームブロックを含む。
- 10 灰褐色土 粘性あり。
- 11 暗褐色土 遺物が多く出土。
- 12 現耕作土
- 13 黒色土 砂質。他の遺構埋土のみ。

第535図 IV 1号・2号・4号・6号溝

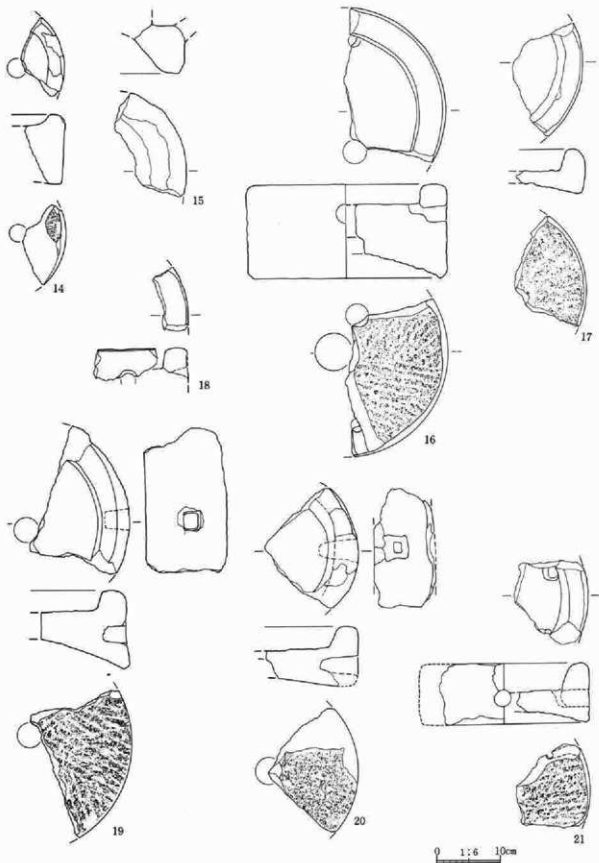
第三章 検出された遺構と遺物



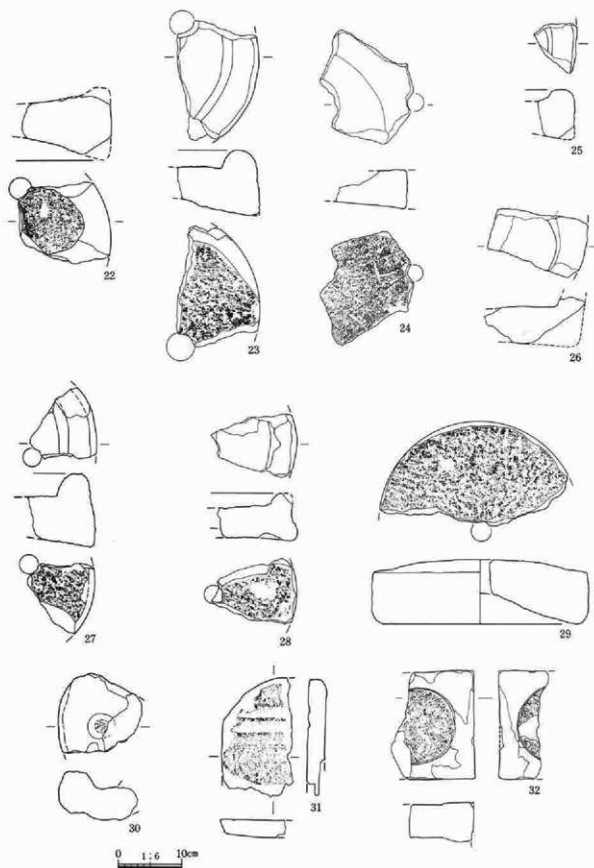
第536図 IV 1号溝出土遺物



第537图 IV 2号沟出土遺物(1)

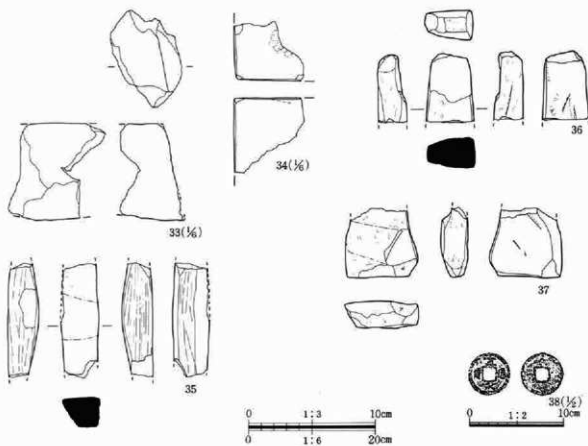


第538図 IV 2号溝出土遺物(2)

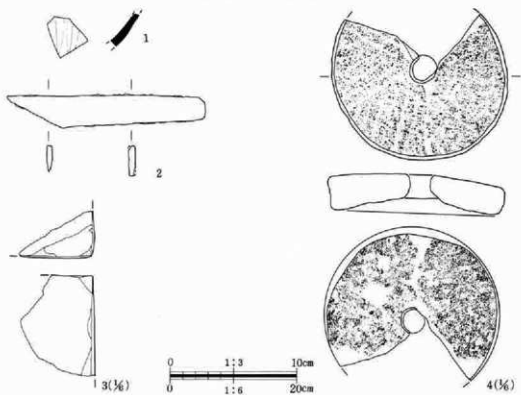


第539圖 IV 2号溝出土遺物(3)

第三章 検出された遺構と遺物



第540図 IV 2号溝出土遺物(4)



第541図 IV 4号溝出土遺物

IV 3号溝 (第542・543図 PL. 52・53・105)

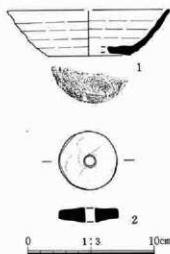
位置 IV区11~13グリッド

規模と形状 幅は1.8m、深さは0.8mを測り、走向はN-86°-Eを指す。G-13付近で途切れており、東方部分は未調査のため不明。断面形は逆台形状で底面はやや平坦。

埋土の特徴 全体にロームが多く見られ、人為的な埋土の可能性も考えられる。

遺物 須恵器杯、紡錘車等が出土。

重複遺構 IV区8号住居跡を切る。



第542図 IV 3号溝出土遺物

IV 4号溝 (第535・541図 PL. 49・52・53・105)

位置 IV区15~19グリッド

規模と形状 幅、深さととも約1mを測り、走向は2号溝に沿ってN-13°-Eを指す。断面形は深い「薬研型」状を呈する。2号溝の掘り直しの可能性もあるが、規模が著しく異なり、5号溝と続いてかなり長く延びることから、両者は異なる性格をもつと考えられよう。

埋土の特徴 ほぼ同質の黒褐色土が堆積する。

遺物 石臼、小刀等が出土するが、2号溝出土遺物との判別はできない。

IV 5号溝 (第543・544図 PL. 53・105)

位置 IV区10~13グリッド

規模と形状 幅は1.7m、深さは0.7mを測り、走向はN-1°-Wを指す。断面形は深い「薬研型」状を呈する。やや走向が変わるが4号溝と同一と思われる。

遺物 陶磁器類、石臼、砥石等が出土。

重複遺構 10号古墳を切る。

IV 6号溝 (第535図 PL. 49)

位置 IV区F-21グリッドで1号溝に沿って同時に検出された。

規模と形状 幅は0.9m、深さ0.5mを測り、走向は1号溝とほぼ同じ。断面形は「薬研型」状を呈する。規模はやや小さいが、1号溝の掘り直

しの可能性がある。ただしこの場合、埋土の状況から1号溝がほとんど埋まりきってからと考えられる。

遺物 なし。

重複遺構 1号溝より新しい。

IV 7号溝 (第543図)

位置 IV区K-6~9グリッドで、7mほどが検出された。

規模と形状 幅は0.4m、深さは0.3mで溝の下半部と思われる。走向はN-12°-Wを指す。

遺物 なし。

重複遺構 IV区5号・7号住居跡を切る。

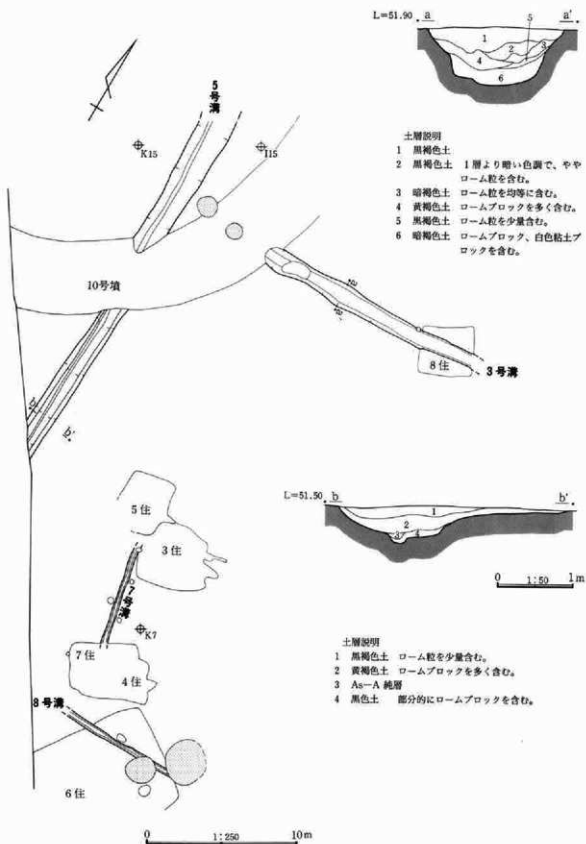
IV 8号溝 (第543図)

位置 IV区I・J-4・5グリッドで、9mほどが検出された。

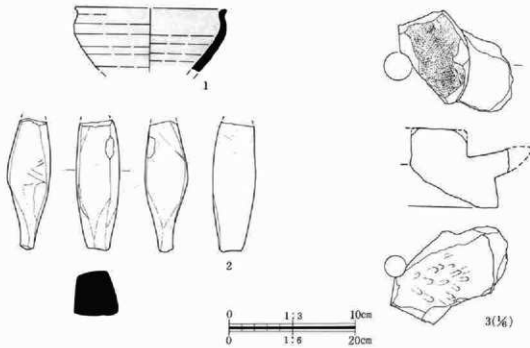
規模と形状 幅は0.5m、深さはわずかに15cmほどで、溝底面付近の一部と考えられる。走向はN-90°-Eを指す。

遺物 なし。

重複遺構 IV区6号住居跡を切っており、2基の井戸との新旧関係は不明。



第543図 IV 3号・5号・7号・8号溝



第544図 IV 5号溝出土遺物

V 1号溝 (第545図)

位置 V区L-22~24グリッド

規模と形状 幅は0.5m、深さ0.3mを測り、走向はN-7°-Wを指す。底面付近が検出されたのみで全容は不明。

遺物 なし。

重複遺構 V区1号井戸と8号土坑と重複するが、新旧関係は不明。

V 2号溝 (第545図 PL. 53・54)

位置 V区19~21グリッドで、4号溝の北側に並走する。

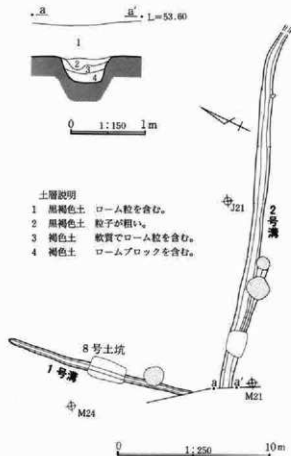
規模と形状 幅は0.5m、深さ0.3mを測り、走向は東西方向に走り、わずかに湾曲する。断面形は逆台形状を呈する。

遺物 なし。

重複遺構 V区の2号・3号方形竪穴遺構、6号・7号井戸と重複しているが、新旧関係は不明。

V 3号溝 (第547・548図 PL. 53~55・105)

位置 V区15~19グリッドで、4号溝に沿って同



第545図 V 1号・2号溝

第三章 検出された遺構と遺物

時に検出された。

規模と形状 幅は1.6m、深さは0.4mを測り、走向はほぼ東西方向を指す。断面形は浅い「葉研堀」状を呈する。

埋土の特徴 黒褐色砂質土が主体。比較的短時間で堆積したものだろう。

遺物 石臼、砥石等が出土する。

重複遺構 V区の4号溝を切っており、8号井戸に切られる。

V 4号溝 (第546・547・549～556図 PL. 53～56・106～108)

位置 V区15～20グリッド

規模と形状 幅は4.4m、深さは1mほどで、走向はN-78°-EからN-97°-Eに折れる。断面形は「箱葉研堀」状と思われる。底には高さ10cmほどを測る畝状の浅い仕切り、あるいは段が見られる。そのため深さが一定せず、流水を考慮した構造とは思えない。東端はE

-16で土坑状にやや深く掘り込み、途切れると考えられる。

埋土の特徴 下層に地山法面からの崩落と思われる砂質土が堆積し、中位には黒みの強い土が厚く堆積する。中位以上にはロームブロックが多量に見られるが、人為的な埋土あるいは土塁等盛り土の流れ込みと思われる。

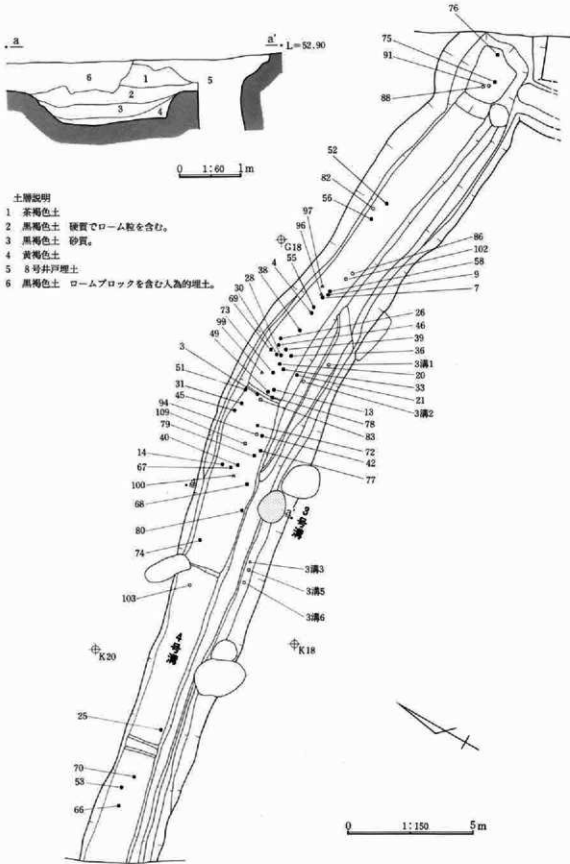
遺物 底面あるいはやや浮いた位置から集中して出土しており、小皿、内耳鍋が多く、これに石臼、板碑片が加わる。

重複遺構 V区3号溝、8号井戸に切られる。

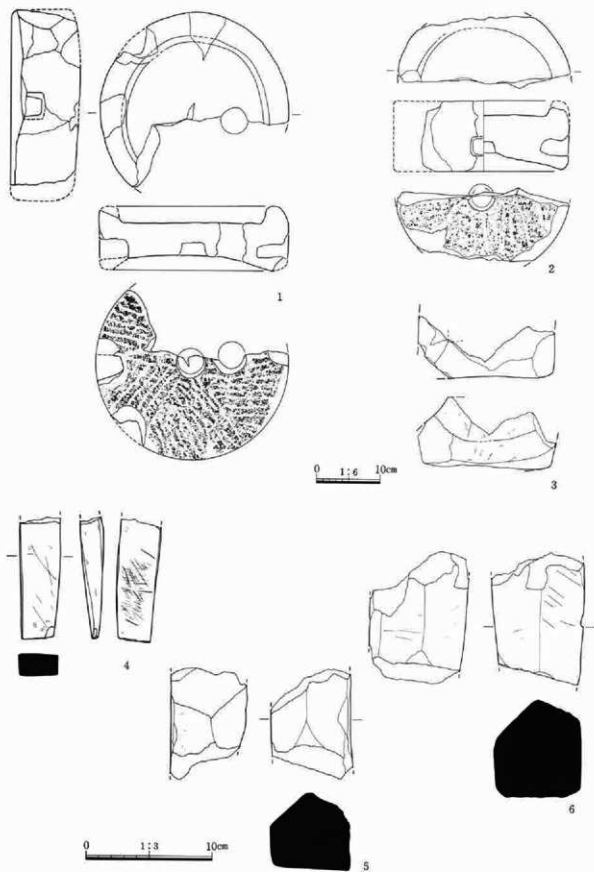
備考 館跡で最南の溝として扱ったVI区11号溝は本溝の北20mの位置に並走しており、ほぼ同じ規模を測る。溝内に投棄された遺物についても館跡の堀とした他の溝と同一様相を示す。更に本溝を境として南側には野井戸以外ほとんど遺構が見られないことから、本溝は館跡を区画する最も外側の堀となる可能性がある。



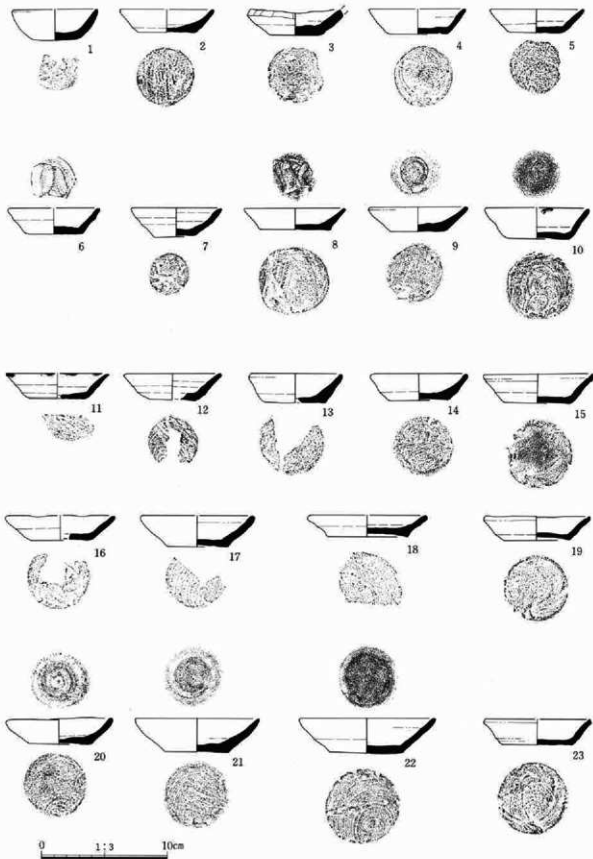
第546図 V 4号溝遺物出土状況



第3章 検出された遺構と遺物

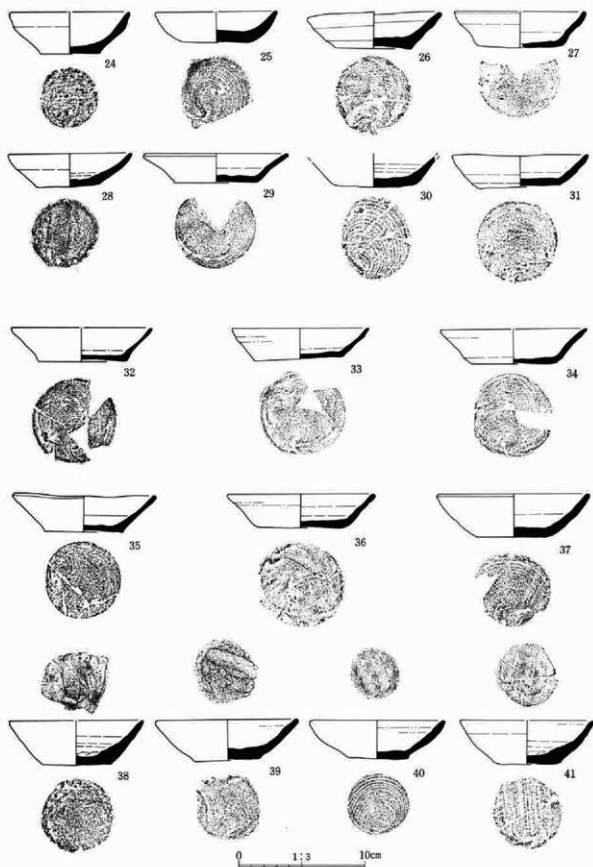


第548図 V3号溝出土遺物

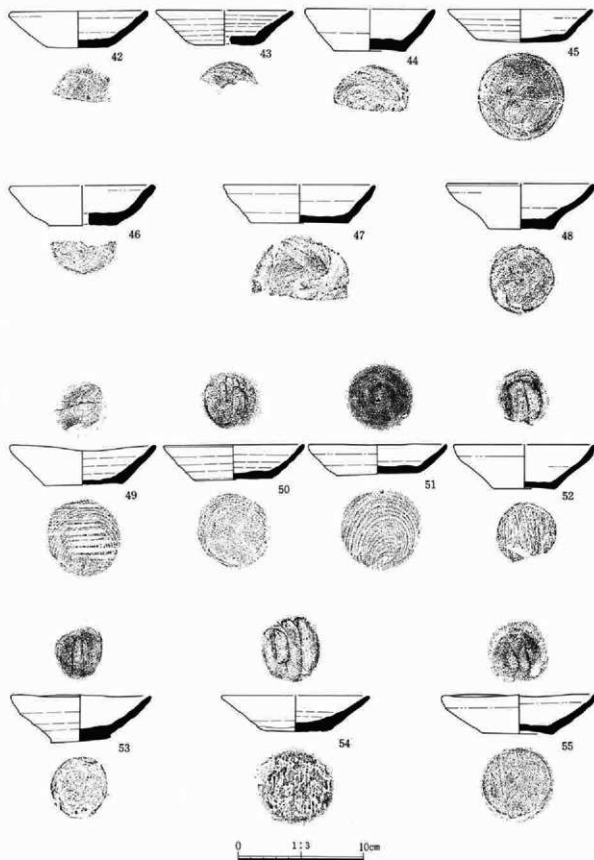


第549図 V 4号溝出土遺物(1)

第三章 検出された遺構と遺物

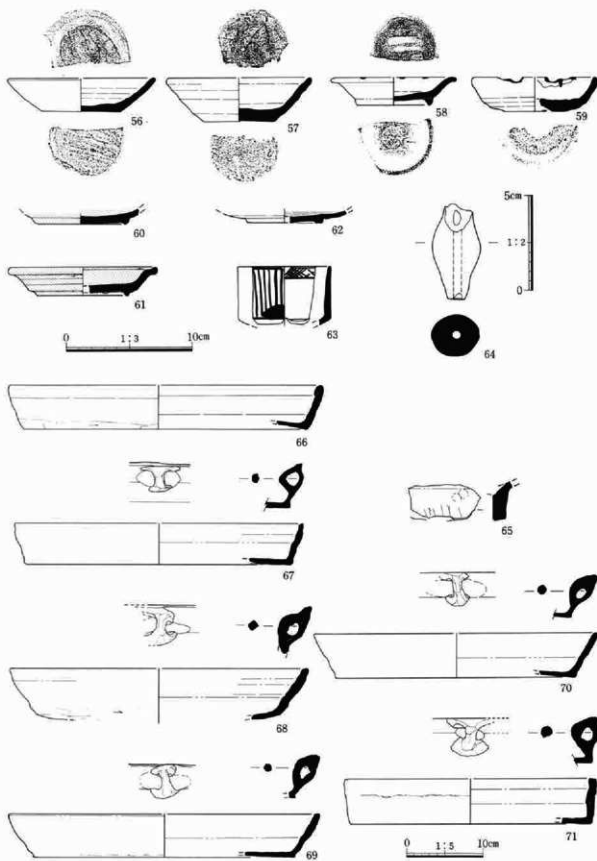


第550図 V 4号溝出土遺物(2)

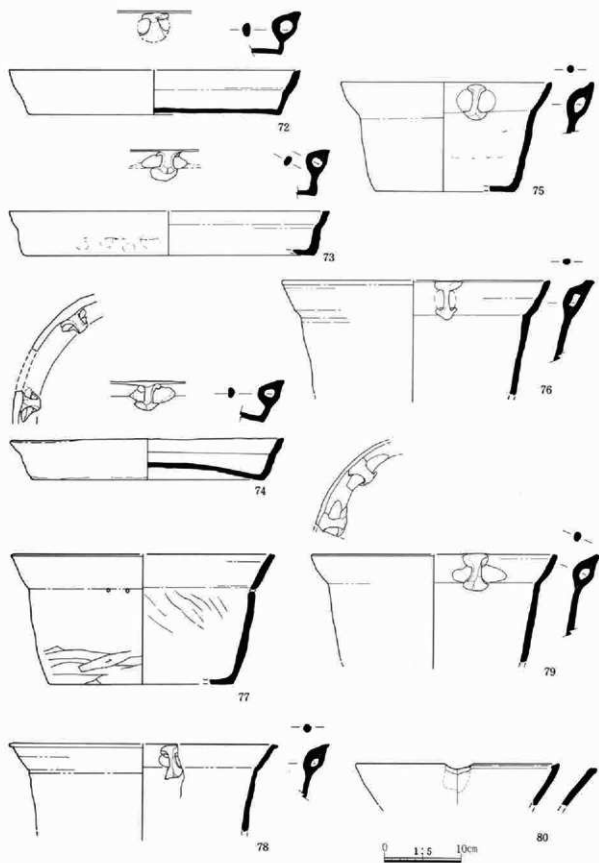


第551圖 V 4号溝出土遺物(3)

第三章 検出された遺構と遺物

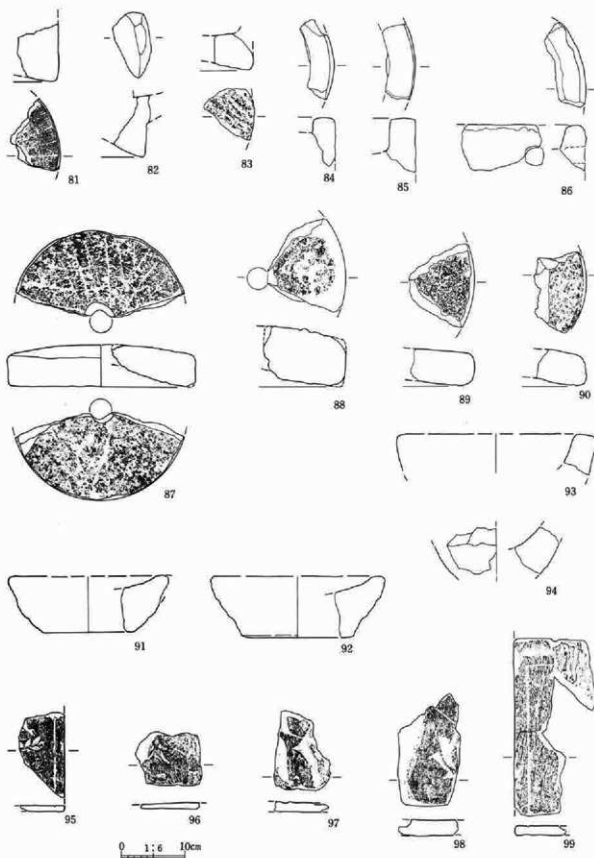


第552図 V4号溝出土遺物(4)

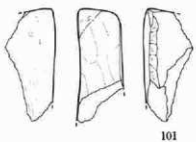
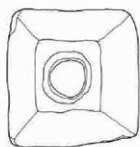


第553图 V 4号沟出土物(5)

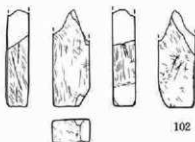
第三章 検出された遺構と遺物



第554図 V4号溝出土遺物(6)



101



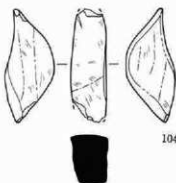
102



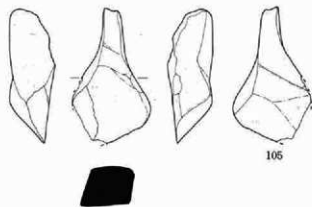
100(1/6)



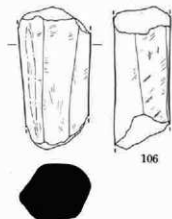
103



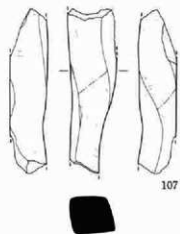
104



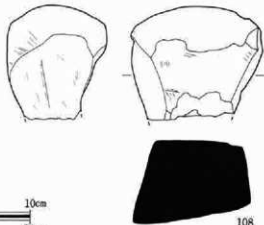
105



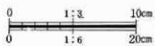
106



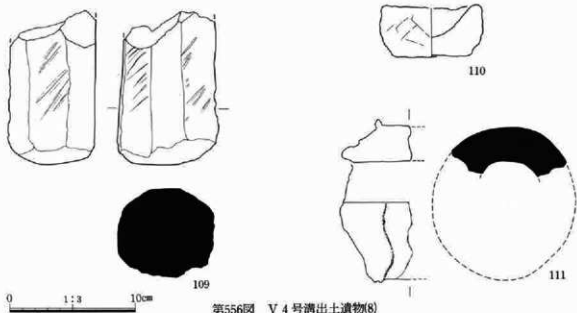
107



108



第555圖 V 4号溝出土遺物(7)



第556図 V4号溝出土遺物(8)

V5号溝 (第557～560図 PL. 54・57・109)

位置 IV区25～V区15グリッドで、地形的には西側に一段高い斜面があり、これに沿っている。規模と形状 幅は2.8m、深さは0.7mを測り、走向はN-5°-Wを指し、I-5付近で折れる。断面形は「葉研堀」状で、南半では「蒲鉾」形を呈している。北端では4号溝東端から連続する位置関係にある。

埋土の特徴 下層に黒みの強い土が堆積し、その上にロームブロックが多量に見られる。盛り土の崩落か人為的埋土だろう。

遺物 ロームブロックの多い下層部分から出土しており、小皿、内耳鍋、石臼等が主体で、4号溝とほぼ同一様相を示す。

重複遺構 V区の4号・6号溝、4基の井戸と重複しており、新旧関係は不明である。

V6号溝 (第557図)

位置 V区H・I-6・7グリッド
規模と形状 ほぼ南北方向を指し、中央部分で折れる。規模は幅0.6m、深さは30cm前後を測る。重複する5号溝の折れる部分で西方に屈曲し、8号溝と直結する可能性が高い。

遺物 なし。

重複遺構 V区5号溝、2基の井戸と重複するが、新旧関係は不明。

V7号溝 (第557図)

位置 V区G・H-6・7グリッドで6号溝に隣接して検出された。

規模と形状 幅は約1m、深さ30cm前後を測る。走向は南北で、わずかに蛇行する。規模や走向から6号溝と同じ性格か。

遺物 なし。

重複遺構 V区の12号井戸と重複するが新旧関係は不明。

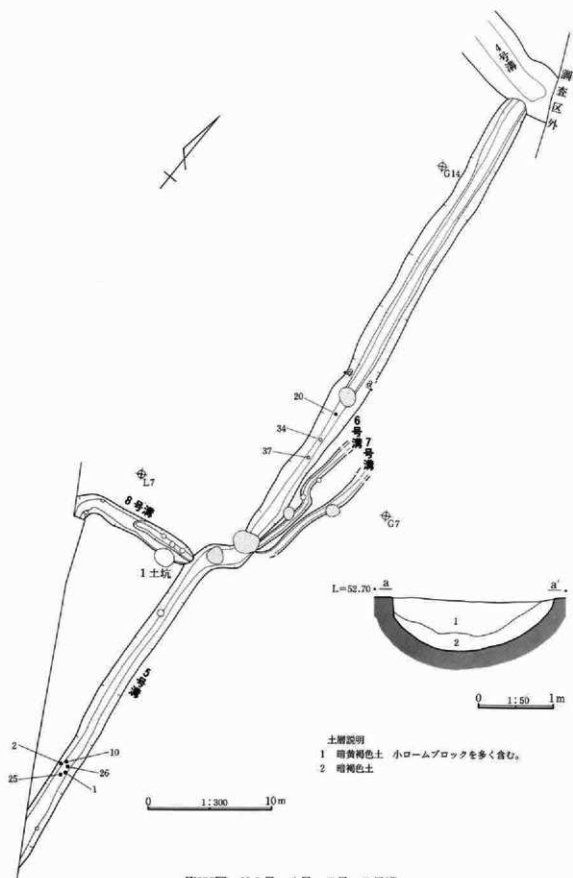
V8号溝 (第557図)

位置 V区J・K・L-5・6グリッド
規模と形状 幅は1.6m、深さ50cm前後を測り、走向はN-83°-Eを指し、西端でやや南に折れる。またJ-5で屈曲して6号・7号溝と直結する可能性あり。

遺物 なし。

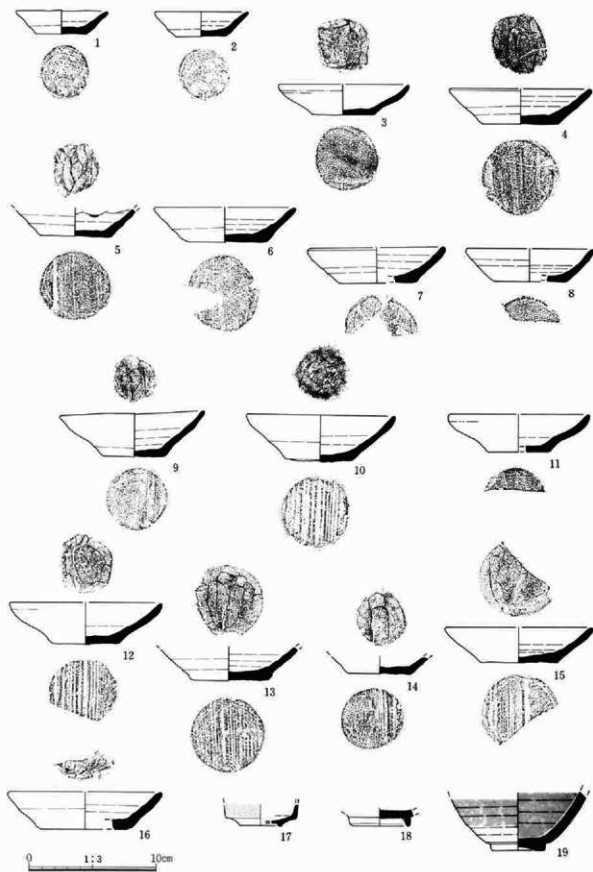
重複遺構 V区5号溝、1号土坑と重複するが、新旧関係は不明。

備考 本溝は、現道路の下位にあることから、道路跡に伴う側溝の可能性もある。

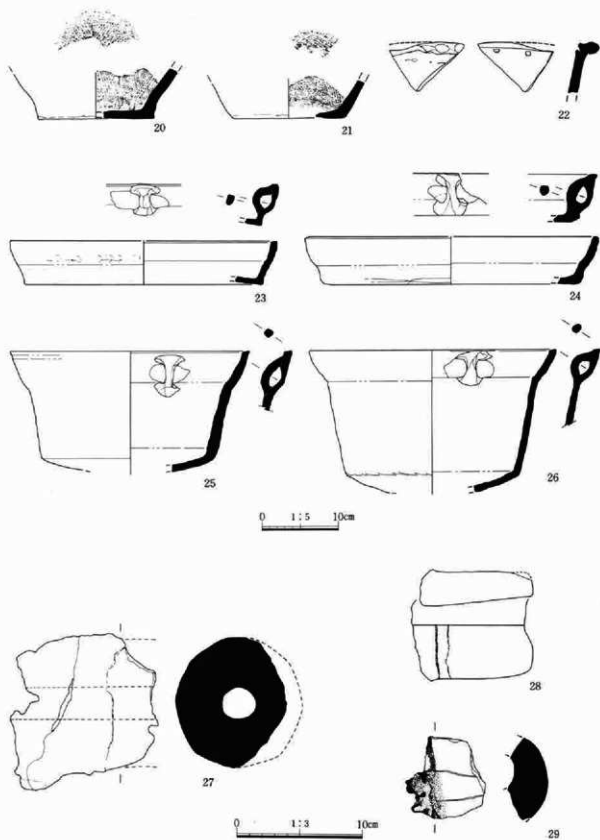


第557図 V5号・6号・7号・8号溝

第III章 検出された遺構と遺物

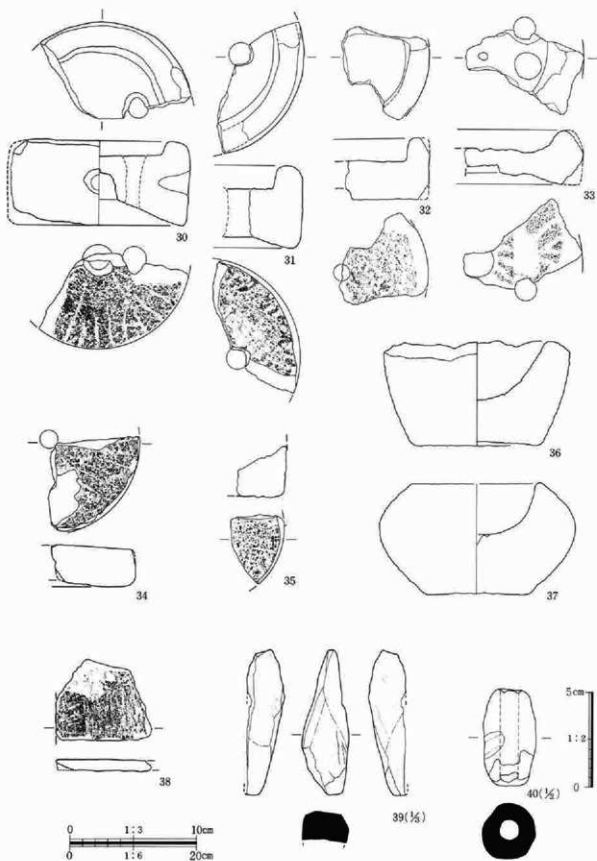


第558図 V 5号溝出土遺物(1)



第559图 V 5号沟出土文物(2)

第三章 検出された遺構と遺物



第560図 V5号溝出土遺物(3)

VII 1号溝 (第561図)

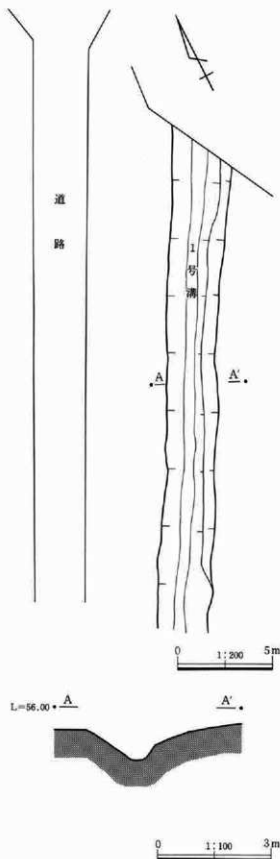
位置 VII区12~16グリッド

規模と形状 検出された上端幅は2.7mで、検出面からの深さは0.8m前後を測る。断面形は浅い「菜研堀」状を呈し、東側法面はテラス状の平坦部分あるいは緩傾斜面が残る。走向はN-35°-Eで、西側約5mのところを走る現道路とほぼ並走する。検出されたのは直線的な部分であるが、調査区外の北東及び南西での走向は不明である。東側に下りの傾斜面、西側は平坦地形となっており、ちょうど地形変換部分に沿って掘削されている。検出された位置、規模、形状からは道路に付随する側溝、用水路、VI~VII区で検出された船跡に伴う外堀が考えられるが、いずれも決め手はない。

埋土の特徴 全体的にロームを主とした黄褐色土が堆積しており、流水や溜水の痕跡については不明瞭であった。

遺物 なし。

重複遺構 なし。



第561図 VII 1号溝

第9節 方形竪穴遺構

概要

当初、竪穴住居跡として調査が行われたが、カマド等の施設がないこと、中世を主とした遺物が出土すること、埋土が他の古代住居跡のものに比べて新しい時期と判断されることから、これらを古代以前の竪穴住居跡と異なる時期、性格を持つ遺構として捉え、方形竪穴遺構と命名した。IV区で1基、V区で4基、VI区で1基が検出されており、V区の4基は1カ所に集中する。この4基はすべて同時存在であるとの確証はないが、第6節で扱った館跡南側のVI区11号溝とV区4号溝に挟まれた位置にあることから、館に伴う施設の可能性が高い。

IV 1号方形竪穴遺構 (第563図)

位置 IV区G・H-10

平面形 南半がやや丸い長方形。

規模 東辺2.05m、南辺1.75m、西辺1.90m

北辺1.55m

方位 N-7°-W

壁 やや外傾する。

床面 地山をそのまま床としており、小さな凹凸がある。

ピット 主軸上に2基検出された。P1は径15cm、深さ60cm、P2は径20cm、深さ45cmを測る。両者とも底面は細く尖る。杭状の柱を打ち込んだものか。

埋土の特徴 下層はロームブロックを含む土が堆積するが、人為的埋土か盛り土の流れ込みか不明である。

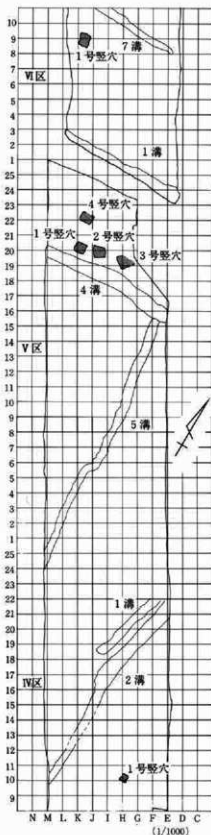
遺物 なし。

重複遺構 なし。

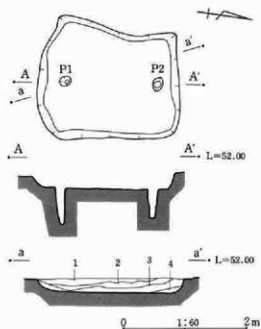
V 1号方形竪穴遺構 (第564・567図)

位置 V区J・K-19・20

平面形 長方形と思われる。



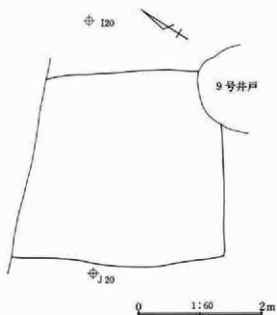
第562図 方形竪穴遺構位置図 (1/1000)



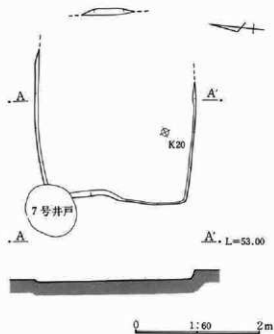
土層説明

- 1 黒色土 硬質で、浮石を混入する。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを含む。
- 3 黄褐色土 小ロームブロックを含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

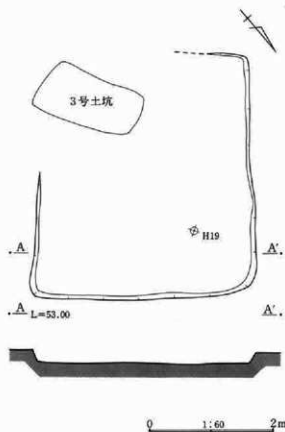
第563図 IV 1号方形整穴遺構



第565図 V 2号方形整穴遺構



第564図 V 1号方形整穴遺構



第566図 V 3号方形整穴遺構

第三章 検出された遺構と遺物

規模 主軸方向で約3m、直交軸方向で2.6m。

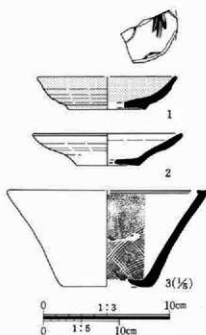
方位 N-85°-E

壁 ほぼ垂直で26cmほど遺存する。東壁不明。

床面 ほぼ平坦で整っている。

遺物 床面よりやや浮いた位置で、皿、指鉢が出土している。

重複遺構 V区7号井戸との新旧関係は不明。南東端を攪乱坑に切られる。



第567図 V1号方形竪穴遺構出土遺物

V2号方形竪穴遺構 (第565・568図)

位置 V区I-19・20

平面形 ほぼ正方形と思われる。

規模 一辺3m前後。

方位 不明。



第568図 V2号方形竪穴遺構出土遺物

壁 畠サク等により削平され、ほとんど遺存せず、わずかに段状の壁が検出された。

床面 攪乱により不明瞭。

遺物 西壁付近から皿が出土。

重複遺構 V区2号溝、9号井戸との新旧関係は不明である。

V3号方形竪穴遺構 (第566図)

位置 V区G・H-18・19

平面形 ほぼ正方形と思われる。

規模 南東辺3.5m、南西辺3.5m、他辺は不明。

方位 N-45°-E

壁 ほぼ垂直で、高さ22cmを測る。

床面 ほぼ平坦で整っている。

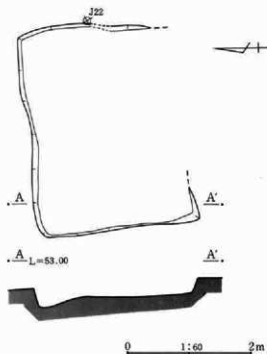
遺物 なし。

重複遺構 V区3号土坑に切られる。

V4号方形竪穴遺構 (第569図)

位置 V区J-21・22

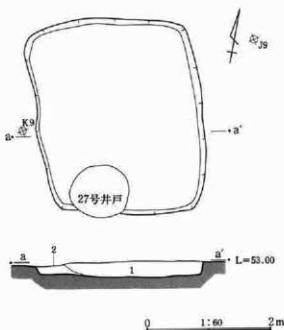
平面形 長方形。



第569図 V4号方形竪穴遺構

第9節 方形竪穴遺構

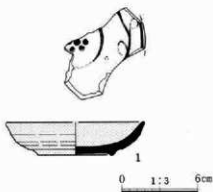
規模 西辺2.45m、北辺3.2m、他辺は不明。
 方位 N-85°-E
 壁 西壁が比較的良く残り、高さ28cmを測る。
 床面 攪乱により不明確。
 遺物 なし。
 重複遺構 攪乱坑に切られる。



VI1号方形竪穴遺構 (第570図)
 位置 VI区J-8・9
 平面形 やや歪む長方形。
 規模 東辺2.9m、南辺2.3m、西辺2.85m
 北辺2.5m
 方位 N-13°-W
 壁 ほぼ垂直で、北壁と東壁の遺存状況が良好で、高さ20cm前後を測る。

床面 ほぼ平坦。
 埋土の特徴 全体にロームブロックが多く見られる。
 遺物 皿1点が出土。
 重複遺構 VI区27号井戸と重複するが新旧関係は不明である。

- 土層説明
 1 暗褐色土 砂質で、ロームブロックを多く含む。
 2 暗褐色土 1より粒子細かく、ローム粒を含む。



第570図 VI1号方形竪穴遺構及び出土遺物

第10節 柱 穴 列

概 要

V区～VI区にかけてピットが直線状に並ぶ地点が2カ所検出された。これらは建物柱列、あるいは柵列と考えられ、しかも配列や位置から館跡との関連が強いと想定されたため、古代の掘立柱建物跡とは分離して扱った。

1号柱穴列 (第572図)

位 置 V区I・J・K-23・24 館跡南限と思われるV区4号溝とVI区11号溝の間で検出。

平面形 46基のピットが検出され、うち18基が長方形の建物を構成する可能性がある。他は東西方向に配列する傾向がある。

規 模 桁行3間(7.2m)×梁行2間(3.0m)

方 位 N-84°-E

ピット 北側列に方形で上端規模が50cmを越えるものが見られるほかは、円形で直径30cm前後、深さ20～40cmのものが大部分である。

2号柱穴列 (第573図)

位 置 VI区K-20～I-24 館跡の主要な堀と考えられるVI区1号溝と3号溝の間で検出。

平面形 直線状に並ぶ9基のピットとこれと並行する4基のピットからなる。

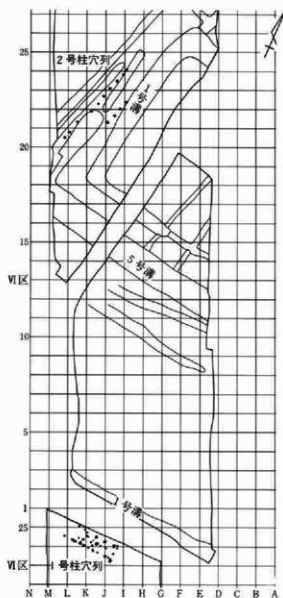
規 模 直線状の部分は長さ21mを測るが、更に両側へ延びる可能性はある。これと並行する4基のピット列P1～P4は4.5m離れており、長さ6.5mを測る。

方 位 N-10°-E

ピット ほとんど円形か楕円形で、上端径は45～80cmを測る。深さは40cm前後と60cm前後のものがある。掘り方より柱痕跡が深いものが6基みられ、この痕跡径は12～15cmを測る。

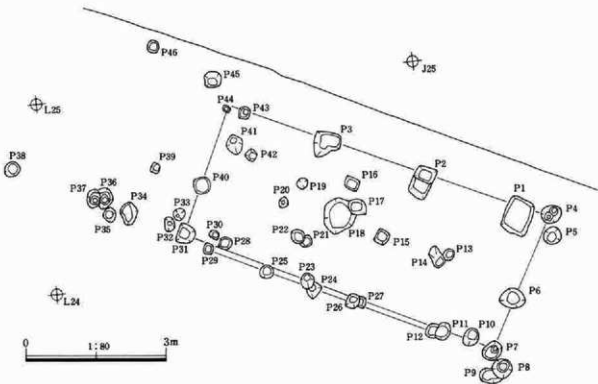
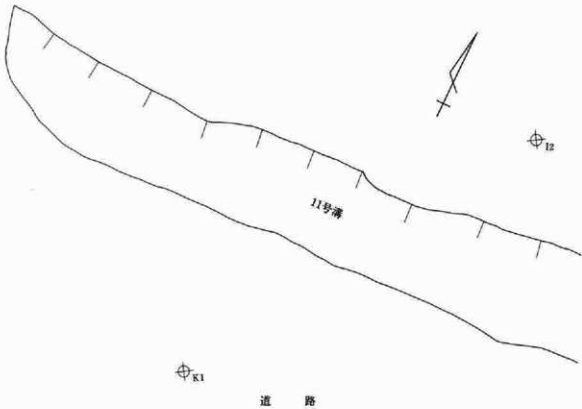
備 考 本跡は堀に伴う柵列と想定されたが、並行する4基のピット列の性格については時期の

異なる柵列か、あるいは矢倉状の施設となる可能性がある。この場合、P1～P4、P8～P11で構成され、3間×1間の建物が想定されよう。ただし館跡の付属施設と考えた場合、主要な堀であるVI区1号溝や5号溝と走向がややずれており、むしろ3号溝と並行する点から3号溝が機能していた一時期の施設と考えられよう。



第571図 柱穴列全体図 (1/800)

第10節 柱 穴 列



第572圖 1号柱穴列

第三章 検出された遺構と遺物

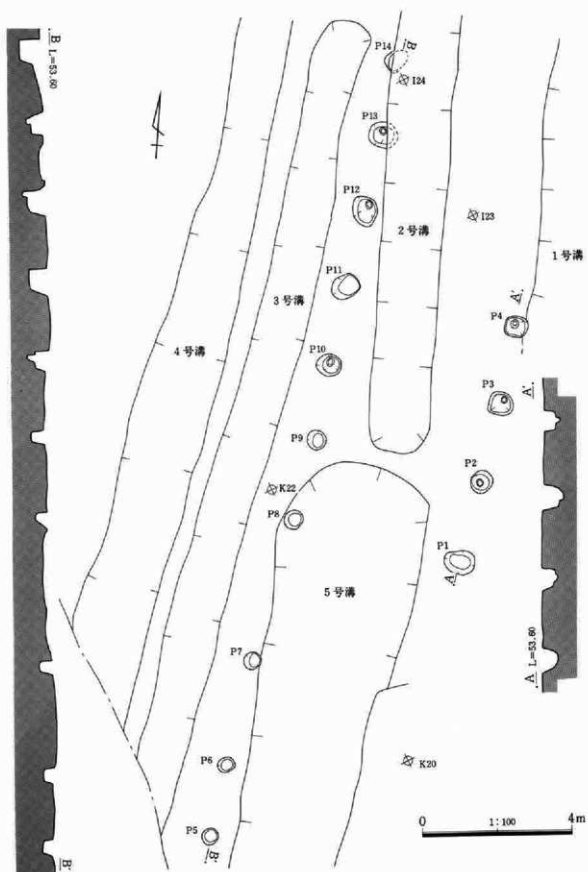
表1 1号柱穴列ピット規模一覧表

	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	76×58	36
P 2	66×44	57
P 3	56×42	56
P 4	44×38	49
P 5	36×34	28.5
P 6	54×42	37.5
P 7	44×32	37
P 8	42×40	44.5
P 9	—×32	24
P10	38×30	25
P11	38×30	22
P12	—×30	25
P13	26×22	22
P14	42×28	34
P15	30×28	38
P16	30×26	41.5
P17	36×32	42
P18	—×74	49
P19	24×22	—
P20	22×18	24.5
P21	—×26	26
P22	32×30	28
P23	32×26	56
P24	—×32	22
P25	28×28	43
P26	30×26	50
P27	—×18	20
P28	26×24	28.5
P29	22×20	41
P30	20×14	35.5
P31	40×36	54.5
P32	30×20	22.5
P33	26×22	25.5

	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
P34	50×30	39
P35	30×20	37.5
P36	42×—	34.5
P37	40×28	46
P38	34×32	20
P39	20×18	52.5
P40	36×34	50
P41	42×34	30
P42	22×20	58
P43	24×22	41
P44	16×12	20
P45	34×32	37
P46	28×24	34.5

表2 2号柱穴列ピット規模一覧表

	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
P 1	82×62	43
P 2	60×58	42
P 3	65×60	54
P 4	60×54	46.5
P 5	49×44	31
P 6	45×40	34
P 7	47×47	47.5
P 8	53×50	38
P 9	50×48	36
P10	67×60	60
P11	75×60	49.7
P12	75×70	56.5
P13	—×66	48
P14	—	—



第573图 2号柱穴列

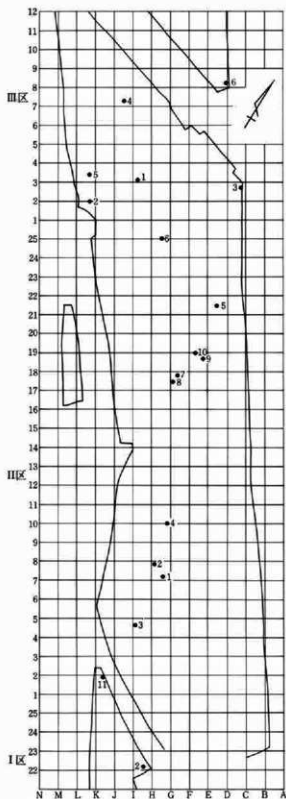
第11節 井戸跡

概要

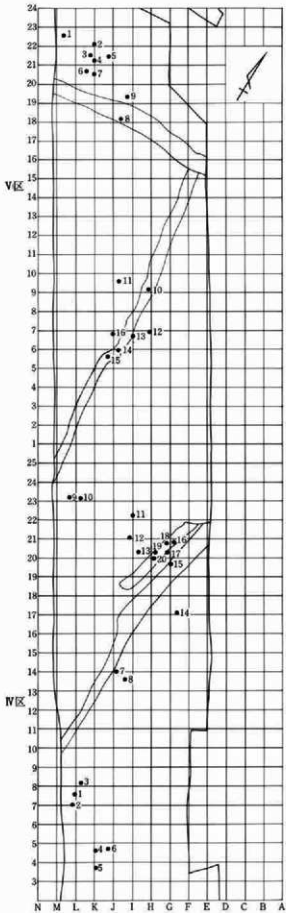
本遺跡で検出された井戸跡の総数は100基を数える。平面がほぼ円形で、掘り込みが比較的深く、湧水の認められるものを井戸として取り扱った。ただし後述するように、6基については底面の標高が極端に浅く湧水が期待できないため、本来井戸として機能したか疑わしいが、調査時点での所見を尊重してここに含めた。また井戸の番号はI区からVII区までそれぞれの区の通し番号としてある。

区毎の検出数はI区2基、II区11基、III区6基、IV区20基、V区16基、VI区38基、VII区8基であり、分布は調査区域の北西部に偏る傾向をみせており、最も分布の薄いIII区の北西地区を境にして全体数の8割ほどがここに分布する。これはこの地区に推定される中世館跡の存在と無関係ではあり得ないと思われる。しかし館跡、井戸跡の時期がいずれも不明確なものが大半を占めるため、これらをすべて一連の遺構として捉えるには至らない。また各箇所において数基が集中して分布する傾向が看取できるが、おそらく壁面の崩落等によって1基の利用期間が短く、次々に連続して穿掘された結果ではないだろうか。穿掘する位置と本遺跡の地形との関係は明らかでないが、他の遺構との関わりで捉えた場合、古墳周廻や溝の内部に多いとの傾向が伺える。その理由については不明な点が多いが、このことからこれらの遺構に重複する井戸が時期的にそれらを遮らないといえる。

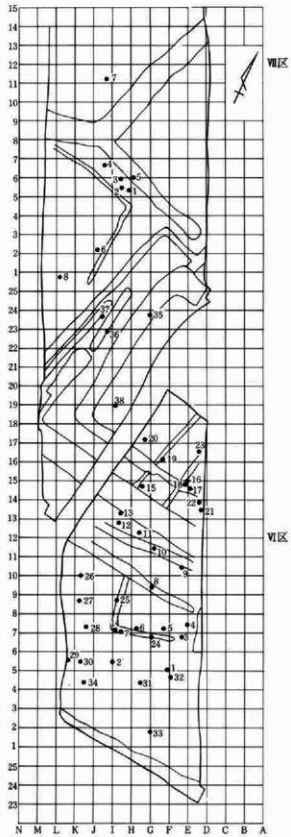
個々の井戸の形状については、I区2号井戸以外は地山を穿掘しただけで何らの筒構造も持たず、せいぜい上端に崩落防止の礫を配列しただけの地山井筒が大部分と思われる。深さは当時の地表面から3～4mと推定される。底面の標高では地表面の低いI～III区では48m前後、それより高いIV～V区では50m前後、さらに高いVI・VII区では50～51mに分布が集中する。このレベルでは粘土層から砂層に達しており、調査時でも湧水が確認されている。



第574図 I・II・III区井戸跡位置図 (1/800)



第575図 IV・V・VI・VII区井戸跡位置図(1/800)



第III章 検出された遺構と遺物

I 1号井戸

命名されているが、調査記録類がなく所在不明。

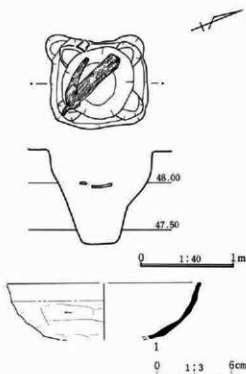
I 2号井戸 (第576図 PL. 58)

位置 H-22 調査区南西端の台地から低地に移行する傾斜面で検出された。

形状と規模 平面は隅丸方形で一辺約1m、深さは1.1mを測る。粘土層を掘り込んでいる。四隅がわずかに掘り込まれていることから、掘り方とほぼ同規模の方形板枠が設けられていたと思われる。底面から50cm程まではやや上に開く円筒状を呈する。

遺物 杯片1点、板材2点が底面から約70cm浮いた位置で出土。他に出土レベルは不明であるが、鉄片が1点みられる。

重複遺構 1号溝と重複するか新旧関係は不明。



第576図 I 2号井戸跡及び出土遺物

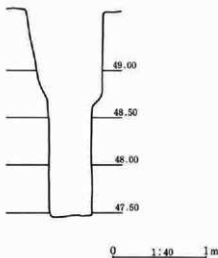
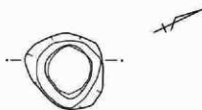
II 1号井戸 (第577図 PL. 58)

位置 G-7

形状と規模 平面は円形で径0.8m、深さ2.2mを測る。上半はやや開き、中央部でくびれて下半の1m程は径40cmのほぼ筒状を呈する。底面ではかなりすぼまっている。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 129号・139号住居跡と重複するか新旧関係は不明。



第577図 II 1号井戸跡

II 2号井戸 (第578図 PL. 58)

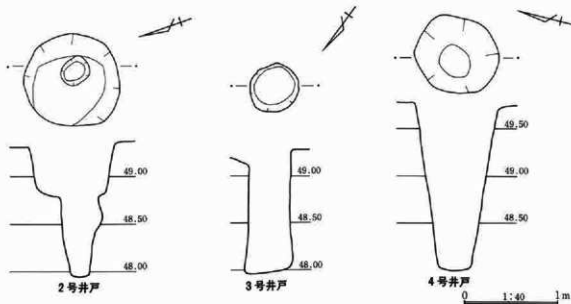
位置 G-7

形状と規模 平面は円形で径約1m、深さ1.6mを測る。中位でテラス状の面があり、底面から1.8mほどは径30cm程の筒状に掘り込まれる。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 129号住居跡と重複し、新旧関係は不明である。

第11節 井戸跡



第578図 II 2号・3号・4号井戸跡

II 3号井戸 (第578図)

位置 H-4

形状と規模 平面は円形で径0.5m、深さ1.4mを測る。断面はほぼ筒状で、底面がやや広がる。小規模であるが底面の標高は他の井戸と大きな差はない。

遺物 なし。

重複遺構 98号住居跡とわずかに重複し、新旧関係は不明。

びれがみられるが、ほぼ筒状を呈する。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

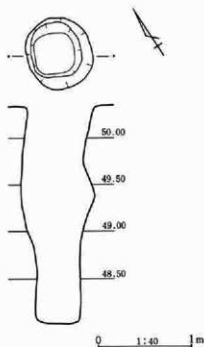
II 4号井戸 (第578図)

位置 G-9・10

形状と規模 平面は歪んだ楕円形状で径0.9×0.8m、深さ2.0mを測る。下位に行くに従いすばまり、底面では径40cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 147号住居跡と重複しており、これよりも新しいと思われる。



第579図 II 5号井戸跡

II 5号井戸 (第579図)

位置 D-21

形状と規模 平面は楕円形で径0.8×0.6m、深さは2.3mを測る。中位で崩落によると思われるく

第III章 検出された遺構と遺物

II 6号井戸 (第580図)

位置 G-24・25

形状と規模 上端はやや崩落しており、楕円形を呈する。規模は径1.3×1.2m、深さ2.2mを測る。ほぼ筒状を呈し、中位でやや崩落が見られる。地山井筒と思われる。

埋土の特徴 下層ではロームブロック、粘土ブロックが多く、人為的埋土の可能性がある。中位では壁崩落土の堆積も見られる。

遺物 底面付近に人頭大の礫が埋積しており、上端に巡らしたものであろうか。

重複遺構 9・10号住居跡よりも新しい。

II 7号井戸 (第581図)

位置 F-17

形状と規模 上半はかなり崩落したと思われ、平面楕円形の擂鉢状を呈している。規模は上端径1.4×1.0m、下半の径0.6m、深さは4号古墳周堀底面から1.5mを測る。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 4号古墳周堀と重複し、これを切る。

II 8号井戸 (第581図)

位置 F-17 4号古墳調査時に周堀中央から検出された。

形状と規模 平面楕円形で径1.1×0.9m、深さ0.9mを測る。

遺物 なし。

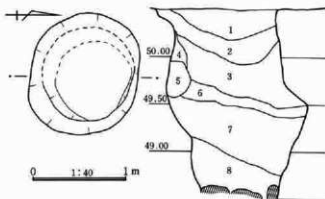
重複遺構 4号古墳周堀より新しいと思われる。

II 9号井戸 (第581図)

位置 E-18

形状と規模 上端が楕円形で、筒状を呈する。規模は径1.2mで、深さは1.9mを測る。地山井筒と思われる。

埋土の特徴 全体に黒色粘質土が堆積しており、中に壁面崩落土が見られる。



土層説明

- 1 黒褐色土 砂質で、As-Aを含む。
- 2 黒色土 ローム粒をわずかに含む。
- 3 黒色土 砂質で2より色調が明るい。
- 4 黒色土 粘性を帯び、ロームブロックを含む。
- 5 黒色土 4に白色粘土が多くなる。
- 6 黒色土 白色粘土を多く含む。
- 7 黒色土 粘性が強い。
- 8 黄褐色土 ロームと粘土の混土。

第580図 II 6号井戸跡

遺物 なし。

重複遺構 25号住居跡のカマド煙道部と重複しており、この部分の土層所見から25号住居跡より新しいと思われる。

II 10号井戸 (第581図)

位置 E-18・19

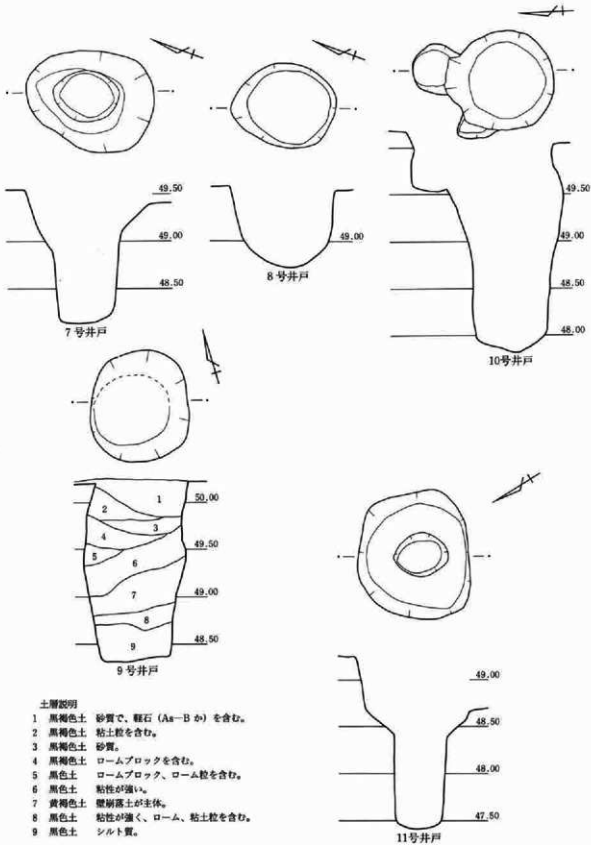
形状と規模 平面が円形で筒状の地山井筒に小ピットが1基付属する。時期の異なる別遺構の可能性もあるが、この形状は他の井戸にも見られるためここでは井戸の付属施設として考えたい。規模は井筒部分の径1.2m、深さ2.4mで、ピットは径0.5m、深さ0.6mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 25号住居跡とカマド焚口付近で重複しており、これよりも新しいと思われる。

II 11号井戸 (第581図 PL. 58)

位置 J-1



第581図 II 7号・8号・9号・10号・11号井戸跡

第III章 検出された遺構と遺物

形状と規模 上半部は椀状に開き、上端径1.5×1.3mで、下半部は筒状で径50cmを測る。深さは1.8m。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 1号溝と重複するが、新旧関係は不明。

III 1号井戸 (第582図)

位置 H-2・3

形状と規模 平面円形で、規模は径1.4m、断面筒状で深さ1.3mを測る。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

III 2号井戸 (第582図)

位置 K-1・2

形状と規模 上位はやや崩れて平面楕円形を呈する。断面は筒状だがやや上に開く。上端径は1.0×0.9m、深さ1.6mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 II区13号住居跡と重複し、新旧関係は不明。

III 3号井戸 (第582図)

位置 C-2

形状と規模 平面楕円形を呈し、上端径は1.9×1.5mを測る。中央部以下は断面筒状で径約1m、深さ2.5mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 53号住居跡の東隅部で重複し、新旧関係は不明。

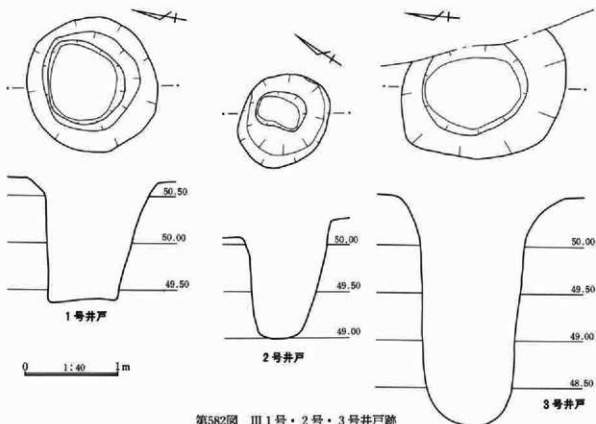
III 4号井戸 (第583図)

位置 I-7

形状と規模 平面円形を呈し径0.5mを測る。断面は筒状で深さ1.4mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 7号住居跡と重複し、新旧関係は不明。



第582図 III 1号・2号・3号井戸跡

III 5号井戸 (第583図)

位置 K-3 55号住居跡床面精査時に検出された。

形状と規模 平面楕円形で上半は崩落によりやや開き、下半は筒状。規模は上端径0.9×0.6m、深さは1.4mを測る

遺物 なし。

重複遺構 55号住居跡と重複し、これより新しいと思われる。

III 6号井戸 (第583図)

位置 D-8

形状と規模 上端形状は崩落により乱れる。断面は筒状で、径0.7m、深さ1.4mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 1号古墳の墳丘部から検出されており、新旧関係は不明。

IV 1号井戸 (第584図 PL. 58)

位置 K・L-7

形状と規模 円形、筒状の地山井筒で、上端部分は崩落により形状が乱れる。規模は径1.2~0.9m、深さ2.2mを測る。上半の一部が段状に落ち込んでいるが、これは使用上の痕跡か付随施設の跡か判断できなかった。底面は粘土層に達している。

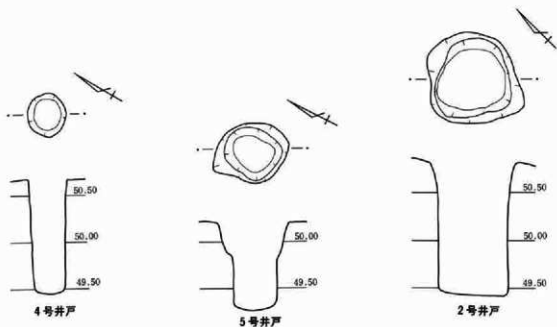
遺物 なし。

重複遺構 重複はしていないが、2号井戸と隣接しており、同時存在とは考えにくい。

IV 2号井戸 (第584図 PL. 58)

位置 L-6・7

形状と規模 円形筒状の地山井筒で、規模は上端径1.4×1.3m、深さ1.5mを測る。上半はやや開き、中位では壁面が崩落してオーバーストリング



第583図 III 4号・5号・6号井戸跡

第III章 検出された遺構と遺物

する部分が見られる。底面は粘土層に達している。深さは隣接する1号井戸より70cmほど高い。

遺物 なし。

重複遺構 1号井戸との新旧関係は不明。

IV 3号井戸 (第584図 PL. 58)

位置 K-8 1号・2号井戸と並列して検出された。

形状と規模 円形筒状の地山井筒で、規模は径約1m、深さ1.4mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

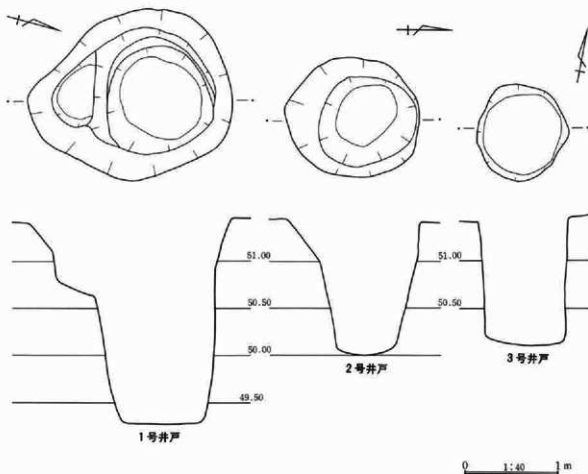
IV 4号井戸 (第585図 PL. 58)

位置 J・K-4

形状と規模 平面は楕円形で上方へ開くが、大きく崩れた痕跡はない。特に上端付近ではくぼんでおり、ここに崩落防止の礫が配されていたものであろうか。上端の径は2.0×1.7mを測る。中位以下は筒状で径0.7mを測る。深さは2.1m。

遺物 小形の石鉢と思われる破片が出土している。他に重複する6号住居跡に伴うと思われる土器片が流れ込んでいる。

重複遺構 6号住居跡との新旧関係は不明である。



第584図 IV 1号・2号・3号井戸跡

IV 5号井戸 (第586図 PL. 59)

位置 J・K-3 9号古墳の周堀調査時に検出された。

形状と規模 上端の径1.7m、深さ1.0mの大きな地山井筒と径0.4m、深さ1.5mのピットからなる。しかしこの両者は本来別個の井戸と考えられる。

遺物 拳大の楕円鏝が数点出土したのみで、時期を推定しうる遺物は出土していない。

重複遺構 9号古墳と重複するが、新旧関係は不明である。

IV 6号井戸 (第586図 PL. 59)

位置 J-4・5

形状と規模 平面円形で上方に大きく開く。上端付近では幅広くくぼんでおり、礫を配した可能性がある。中位では3段に弱くくびれるが、水位に応じて壁面が崩落したと思われる。上端での径は3.1×2.7m、深さは2.5mで、下位の筒状部分は径0.7mを測る。IV区の井戸の中では最も深い。

遺物 とくに目立った遺物は出土していない。

重複遺構 6号古墳周堀と6号住居跡の間に挟まれて両者と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。また4号・5号井戸とは隣接して穿たれていることから、これら3基は同時存在ではないにしても連続する一連の井戸と考えられよう。

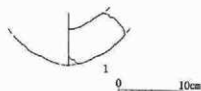
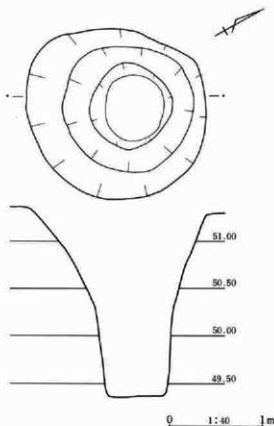
IV 7号井戸 (第586図 PL. 59)

位置 I・J-13・14

形状と規模 円形筒状の地山井筒で、径は1.2m、深さ1.0mを測る。井戸としては浅く、底面がロームを貫通していない。調査時点でも湧水は見られなかった。

遺物 なし。

重複遺構 10号古墳の周堀と重複するが新旧関係は不明である。



第585図 IV 4号井戸跡及び出土遺物

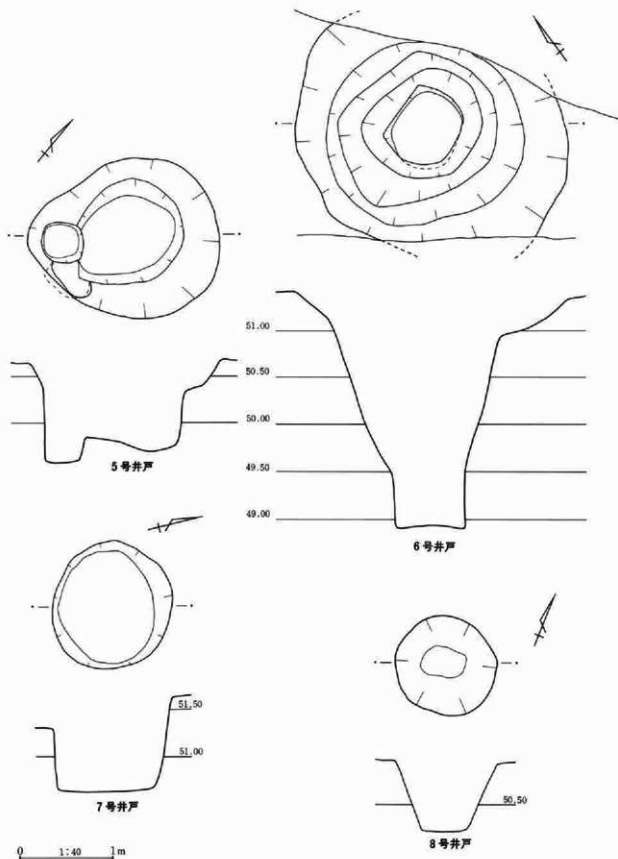
IV 8号井戸 (第586図 PL. 59)

位置 I-13 10号古墳の周堀調査時に検出された。

形状と規模 平面は円形で径約1mを測る。断面は台形状で、深さは10号古墳周堀底面から1.4mを測る。

遺物 人頭大の楕円鏝が1点出土したが、時期を推定させ得る遺物は見られなかった。

重複遺構 10号古墳との新旧関係は不明であった。



第586図 IV 5号・6号・7号・8号井戸跡

IV 9号井戸 (第587図 PL. 59)

位置 L-23 10号古墳の周廻調査時に検出。

形状と規模 円形筒状の地山井筒で、径0.8m、深さ1.6mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 10号古墳との新旧関係は不明。

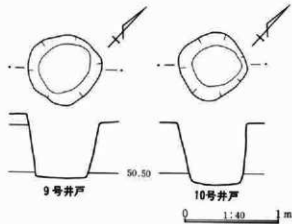
IV10号井戸 (第587図 PL. 59)

位置 K-23 10号古墳の周廻調査時に検出。

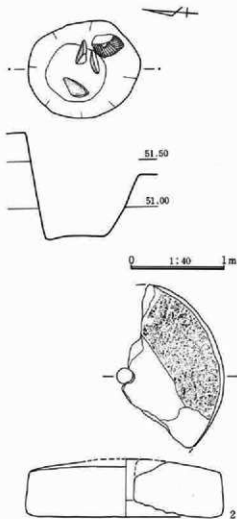
形状と規模 円形筒状の地山井筒で、径0.7m、深さ1.6mを測る。

遺物 なし。

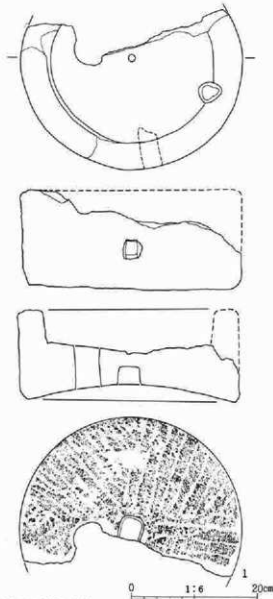
重複遺構 10号古墳との新旧関係は不明。



第587図 IV 9号・10号井戸跡



第588図 IV11号井戸跡及び出土遺物



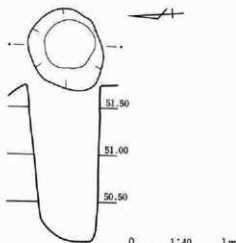
第三章 検出された遺構と遺物

IV11号井戸 (第588図 PL. 59・110)

位置 H・I-22 10号古墳周堀調査時に検出。
形状と規模 円形筒状の地山井筒で、径1.2m、深さ
1.1mを測る。

遺物 石白片4点が出土。

重複遺構 10号古墳との新旧関係は不明。



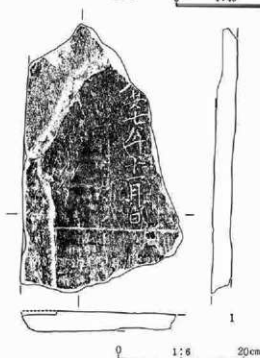
IV12号井戸 (第589図 PL. 59・110)

位置 I-21

形状と規模 平面はやや歪んだ円形で、上端の径は
0.9×0.7mで、断面は筒状を呈し深さ1.7mを
測る。形状から地山井筒と思われる。

遺物 底面から50cmの高さで、紀年名「(弘)安7
年11月」の刻まれた板碑片が出土した。

重複遺構 10号古墳と重複するが新旧関係は不明で
ある。



第589図 IV12号井戸跡及び出土遺物

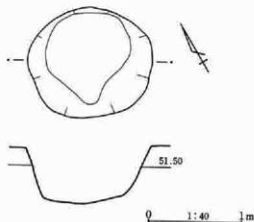
IV14号井戸 (第591図 PL. 59・110)

位置 F-17

形状と規模 平面は円形で断面筒状を呈する地山井
筒と思われる。規模は上端径0.9m、深さ1.0m
を測る。

遺物 埋土からほぼ完形の石塔(五輪塔の地輪か)
が出土している。

重複遺構 なし。



第590図 IV13号井戸跡

IV15号井戸 (第592図 PL. 59・60)

位置 F-19

形状と規模 平面はやや崩れた円形で、断面は筒状を呈する。規模は径0.8m、深さ1.7mを測る。地山井筒と思われる。崩落はほとんど見られず、整った形状をしている。

遺物 なし。

重複遺構 10号古墳、2号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

IV16号井戸 (第592図 PL. 60)

位置 F-20

形状と規模 平面は楕円形を呈し、上端径0.9×0.8mを測る。断面は上方にやや開く台形状で、深さは1.5mを測る。1号溝と重複するため、検出されたのは下半と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 1号溝と重複しているが、新旧関係は不明である。

IV17号井戸 (第592図 PL. 60)

位置 G-20

形状と規模 平面は楕円形で、上端径1.1×0.9mを測る。断面はやや上方に開き気味である。深さは1.2mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 10号古墳、1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

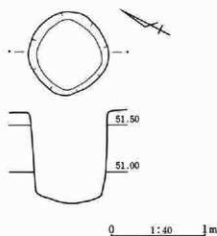
IV18号井戸 (第593図 PL. 60・110)

位置 G-20

形状と規模 上方に大きく開いており下半は筒状を呈する。筒状部分の径は0.9~0.7mで、深さ1.8mを測る。

遺物 底面から50cmほどの高さで、青磁片1点、石臼片1点、人頭大の礫数点が出土している。

重複遺構 10号古墳、1号溝と重複しており、新旧関係は不明である。



第591図 IV14号井戸跡及び出土遺物

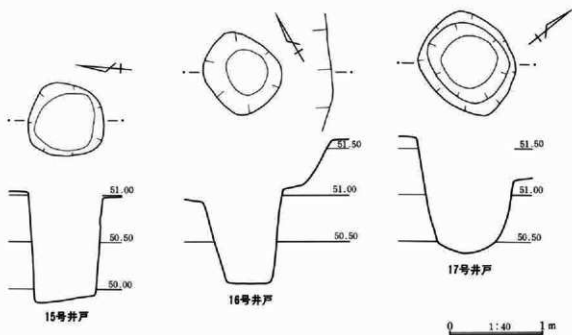
IV19号井戸 (第594図 PL. 60)

位置 G-20

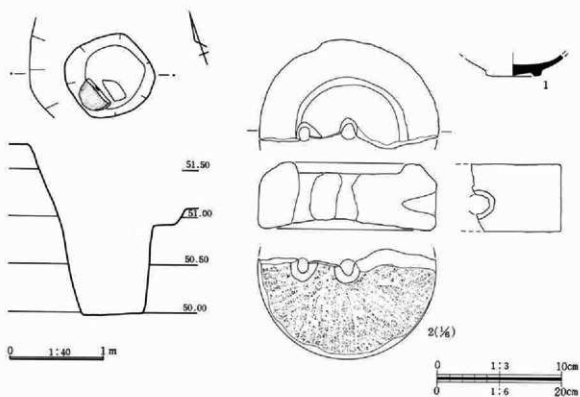
形状と規模 平面円形で断面筒状の地山井筒と思われる。規模は径0.7m、深さ1.6mを測る。壁面は中位でわずかに崩落がみられるのみで比較的整っている。

遺物 中位から石臼片1点と内耳土器片、磁石が出土している。

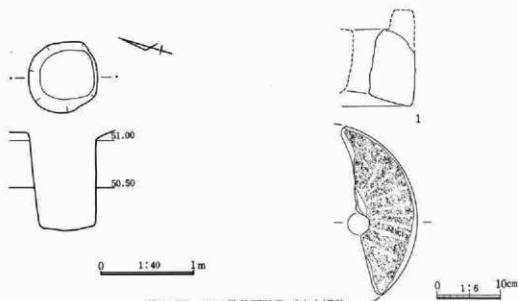
重複遺構 10号古墳、1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。



第592図 IV15号・16号・17号井戸跡



第593図 IV18号井戸跡及び出土遺物



第594図 IV19号井戸跡及び出土遺物

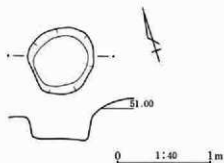
IV20号井戸 (第595図 PL. 60)

位置 G-19・20

形状と規模 他の遺構と重複するため、底面付近しか検出できなかった。底面は円形で径0.6mで、標高は50.7mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 10号古墳、1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。ここでは10号古墳の周堀と重複する井戸が多く、隣接するものも含めて14基を数える。井戸掘削時には周堀は埋没していたと思われるが、本遺跡のように浅い井戸で水を湧出させるのに好都合であったのだろうか。



第595図 IV20号井戸跡

V1号井戸 (第596図 PL. 110)

位置 L-22

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端径は1.4m、深さ2.4mを測る。上半は崩落によるためか上方に開く。

遺物 内耳土器、皿等の陶器片、板碑片、砥石が出土する。

重複遺構 1号溝と重複するが、新旧関係は不明。

V2号井戸 (第597図 PL. 60・110)

位置 J-22、K-21・22

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端径は1.3×1.2m、深さ3.0mを測る。上端付近は崩落が見られる。

遺物 青磁碗片、皿、板碑片が出土する。

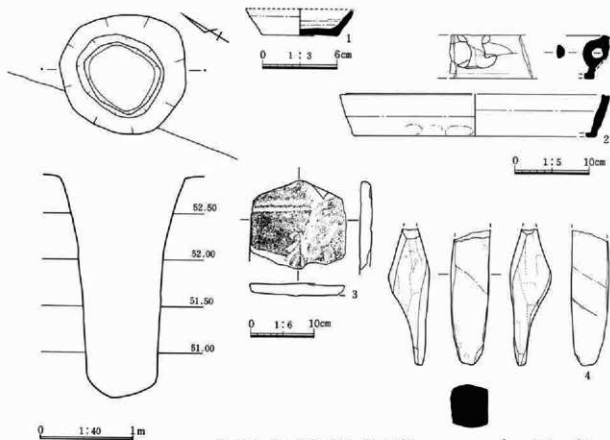
重複遺構 なし。

V3号井戸 (第598・599図 PL. 110)

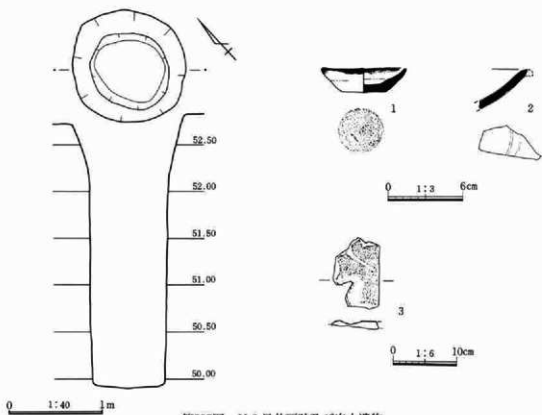
位置 K-21

形状と規模 平面は楕円形で大きく開き、下半は筒状を呈する。規模は上端径1.8×1.5m、深さ1.8mを測る。下半の筒状部分は径0.8~0.6m。

第III章 検出された遺構と遺物



第596図 V 1号井戸跡及び出土遺物



第597図 V 2号井戸跡及び出土遺物

上半で片方に深さ0.6mほどの階段状の落込があり、本井戸に付属する施設の可能性がある。性格は不明。

遺物 皿等の陶器片、砥石が出土。

重複遺構 4号井戸と重複するが、新旧関係は不明である。

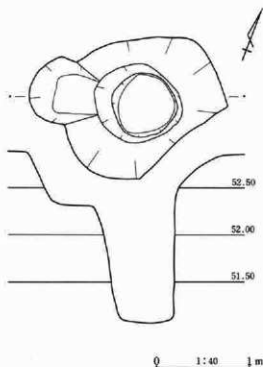
V4号井戸 (第600図 PL. 110・111)

位置 J・K-21

形状と規模 上端部分は平面楕円形で大きく開くが、以下は筒状を呈する。地山井筒と思われる。上端径は1.9×1.3mで、筒状部分の径は0.9~0.6mを測る。深さは2.6m。

遺物 皿、碗等の陶器片、五輪塔(火輪)の一部が出土している。

重複遺構 3号井戸と重複するが、新旧関係は不明。



第598図 V3号井戸跡

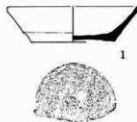
V5号井戸 (第601図 PL. 110)

位置 J-21

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、径0.8m、深さ2.3mを測る。

遺物 埋土からは砥石1点が出土している。また直接は伴わないが、上端付近から燈明に用いたと思われる皿が出土している。

重複遺構 なし。



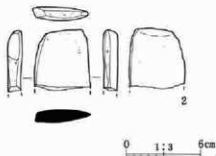
V6号井戸 (第602図 PL. 60・111)

位置 K-20

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われる。上端付近は開く部分やくぼむ部分が見られる。崩落か鏝等を配した痕跡かは判別できなかった。中位では水位に応じた壁面の崩落と思われる箇所が見られる。規模は筒状部の径0.9mを測る。深さは約3m。

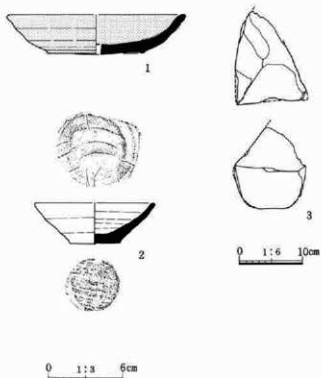
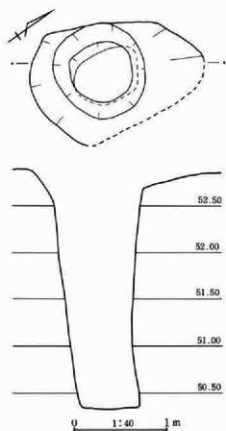
遺物 埋土から杯の破片が1点出土している。

重複遺構 6号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

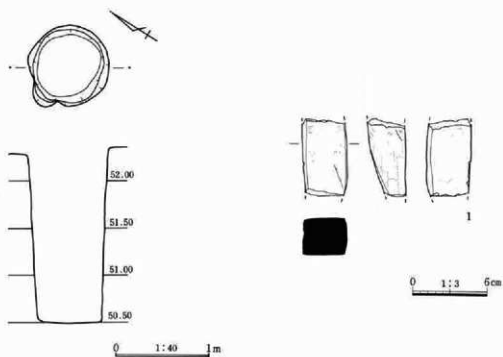


第599図 V3号井戸跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第600図 V4号井戸跡及び出土遺物



第601図 V5号井戸跡及び出土遺物

V7号井戸 (第603・604図 PL. 60・111)

位置 J・K-20

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、径は上端で0.9mを測る。完掘できなかったために深さは不明である。

遺物 埋土から内耳土器、杯が1点づつ出土している。

重複遺構 6号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

V8号井戸 (第605図)

位置 I-18

形状と規模 上端は径1.3mほどの楕円形の範囲で浅くくぼんでおり、礫等を配していた可能性がある。大部分は筒状で径0.6~0.7m、深さ2.7mを測る。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 3号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

V9号井戸 (第605図 PL. 60)

位置 I-19

形状と規模 平面は不整形円形で、断面筒状の地山井筒と思われる。崩落が激しく、壁の大部分が旧面を止めていない。筒状部分の径は0.7m、深さ2.7mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 2号方形竪穴遺構と重複するが、新旧関係は不明である。

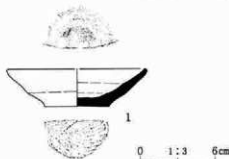
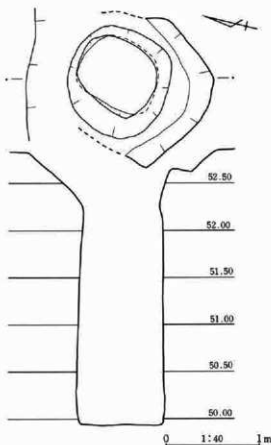
V10号井戸 (第606図 PL. 60)

位置 G・H-9

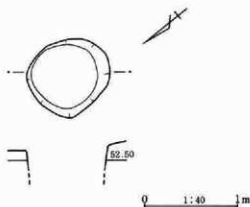
形状と規模 楕円状の掘り込みで、規模は上端径1.5×1.3m、深さ1.5mを測る。井戸としては浅いが、調査時に湧水が見られた。

遺物 なし。

重複遺構 5号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

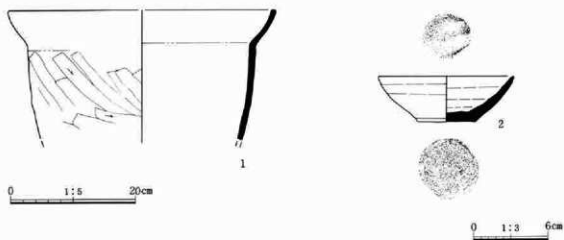


第602図 V6号井戸跡及び出土遺物

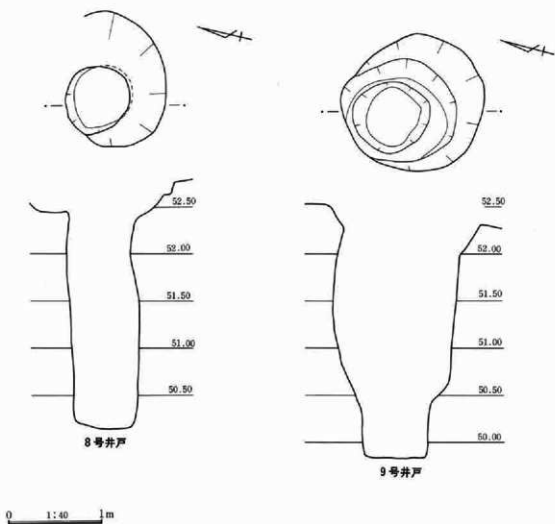


第603図 V7号井戸跡

第三章 検出された遺構と遺物



第604図 V7号井戸跡出土遺物



第605図 V8号・9号井戸跡

V11号井戸 (第606図)

位置 I-9

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、規模は径1.1×1.0m、深さ1.5mを測る。やや壁面の崩落が見られる。

遺物 なし。

重複遺構 8号古墳と重複するが、新旧関係は不明である。

V12号井戸 (第606図 PL. 60)

位置 G・H-6・7

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、規模は径1.0×0.9m、深さ1.2mを測る。壁面の崩落が激しい。

遺物 なし。

重複遺構 7号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

V13号井戸 (第607図)

位置 H・I-6

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、規模は径0.9×0.8m、深さ2.1mを測る。

遺物 埋土から内耳土器片1点が出土している。

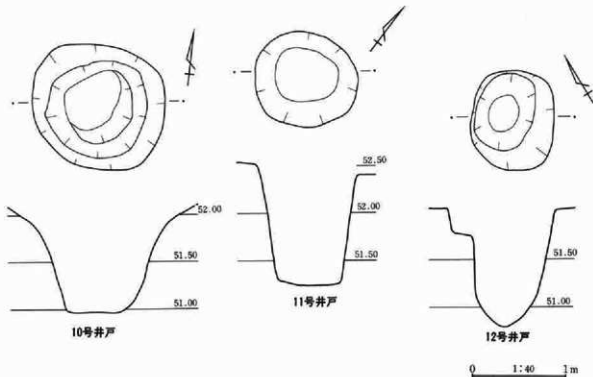
重複遺構 6号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

V14号井戸 (第608～610図 PL. 61・111)

位置 I-5・6

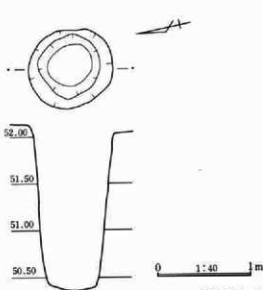
形状と規模 平面楕円形で上端付近は大きく崩落している。下位は筒状を呈しており、上半から中位は壁面が崩落する。規模は上端で径2.1×1.7m、底部付近は0.5m、深さ3.0mを測る。

遺物 下位の埋土から人頭大の礫とともに播鉢、陶器片、石臼、五輪塔、磁石、鎌等が集中して出土している。

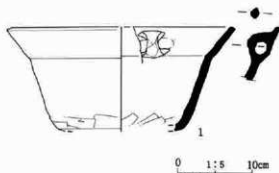


第606図 V10号・11号・12号井戸跡

第三章 検出された遺構と遺物



第607図 V13号井戸跡及び出土遺物



重複遺構 5号・6号・7号溝が合流する位置で重複する。新旧関係は不明。

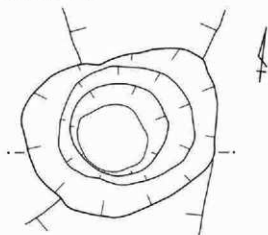
V15号井戸 (第611図)

位置 J-5

形状と規模 上端では楕円形の広い掘り込み面としてとらえられたが、重複遺構との識別は困難。明確なのは筒状の部分で、径 $0.7 \times 0.3\text{m}$ 、深さ 2.4m を測る。

遺物 埋土から内耳土器片1点、石臼片1点が出土している。

重複遺構 5号溝と屈曲部分で重複しており、新旧関係は不明である。



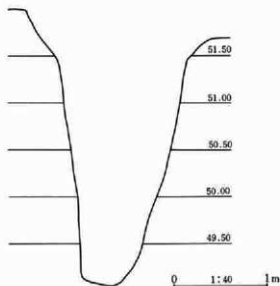
V16号井戸 (第612図 PL. 111・112)

位置 I・J-6・7

形状と規模 平面はやや楕円形で、断面は筒状を呈する地山井筒と思われる。上位でやや崩落した部分も見られるが、全体的に遺存状況は良い。規模は径 $1.5 \times 1.4\text{m}$ 、深さ 2.5m を測る。

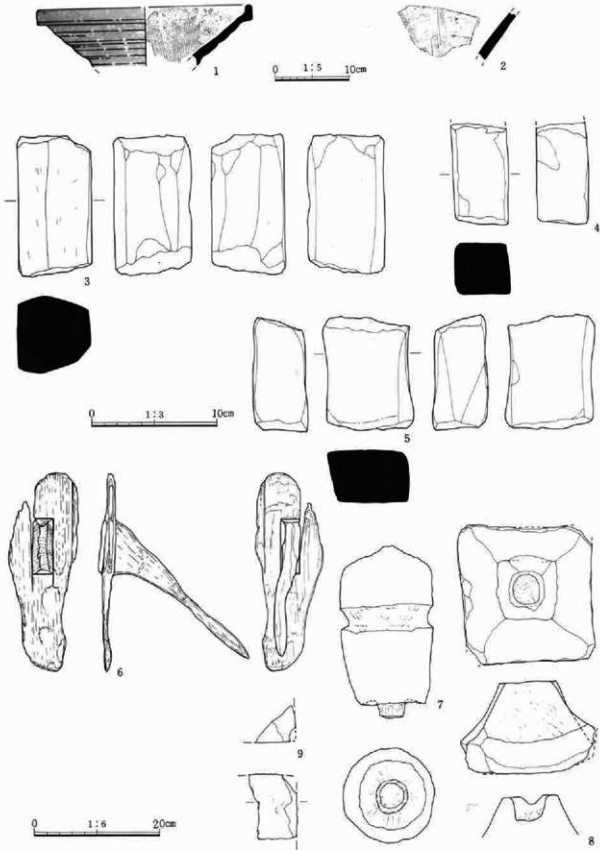
遺物 埋土の下層から上層にかけて完形を含む杯6点、青磁片1点が出土する。出土位置の集中傾向はない。

重複遺構 なし。



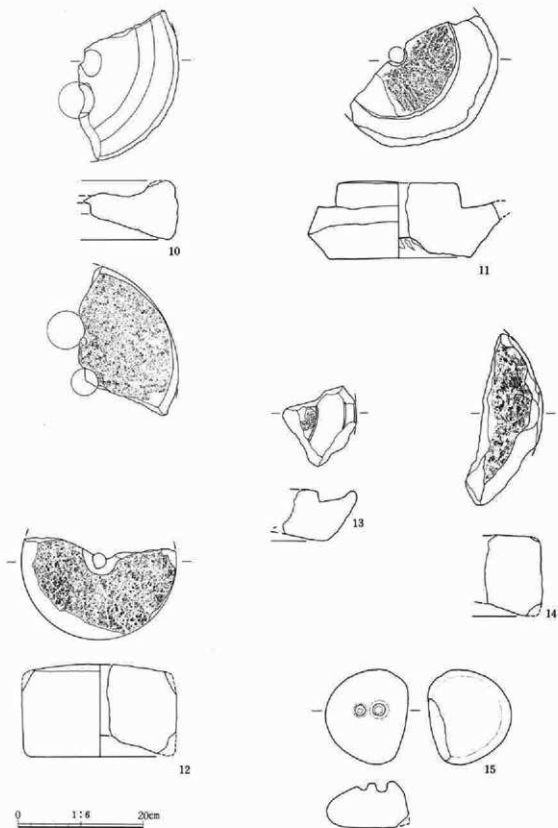
第608図 V14号井戸跡

第11箇井戸跡

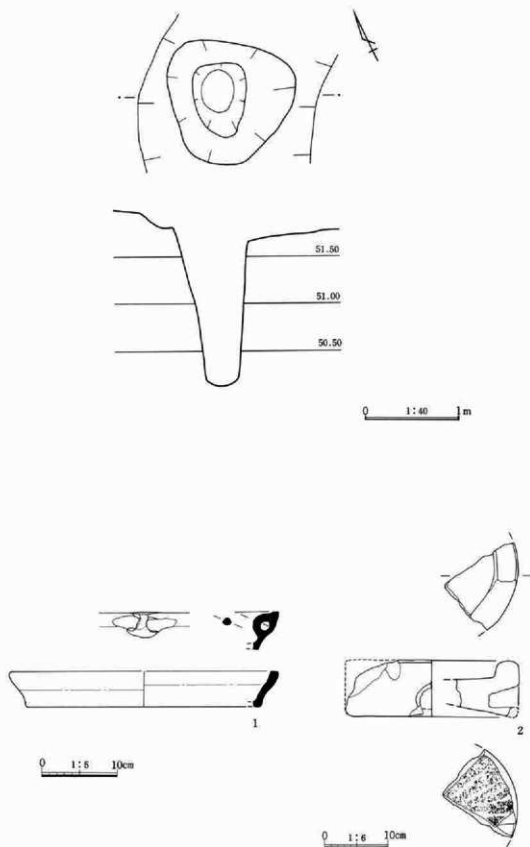


第609圖 V14号井戸跡出土遺物(1)

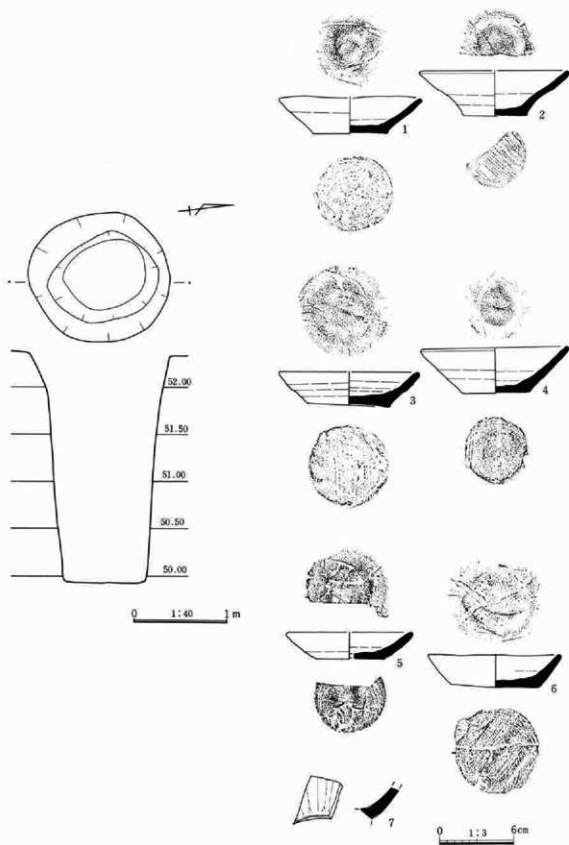
第三章 検出された遺構と遺物



第610図 V14号井戸跡出土遺物(2)



第611図 V15号井戸跡及び出土遺物



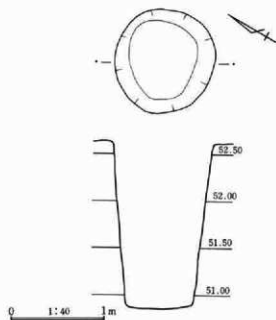
第612図 V16号井戸跡及び出土遺物

第11節 井戸跡

VI1号井戸 (第613図 PL. 112)

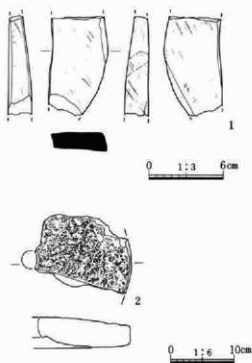
位置 E・F-4・5

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、規模は径1.1×1.0m、深さ2.0mを測る。遺存状況は良く、崩落は少ない。



遺物 埋土から石臼、砥石が1点ずつ出土している。

重複遺構 なし。



第613図 VI1号井戸跡及び出土遺物

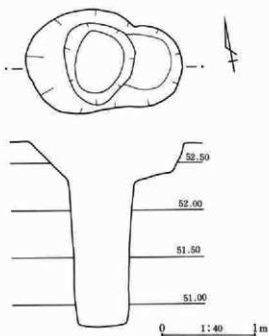
VI2号井戸 (第614図)

位置 H・I-5

形状と規模 上端は径1.3×1.0mの楕円形に開いており、崩落か礫等を配した痕跡かは不明。筒状の部分は径0.7~0.5mで、深さ2.0mを測る。なお東側に張り出す形で径0.8m前後の階段状のピットが掘り込まれており、これが本井戸に伴う施設あるいは使用による痕跡か全く時期の異なる遺構かは判別できなかった。

遺物 特に時期を推定し得る遺物の出土はない。

重複遺構 なし。



第614図 VI2号井戸跡

第三章 検出された遺構と遺物

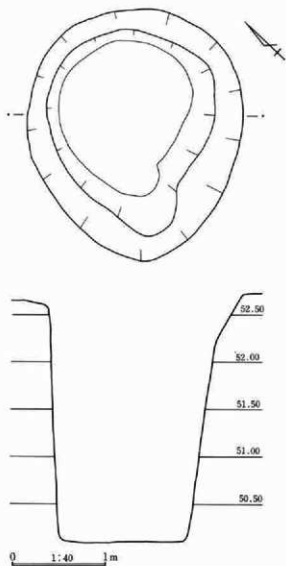
VI3号井戸 (第615・616図 PL. 112)

位置 E-6・7

形状と規模 上位の片側がややくぼんでいるが、ほぼ円形で筒状を呈する。規模は径2.7×2.3m、深さ2.6mを測る。底面の径は1.3mで大きい部類に属する。壁面のくぼみは水を汲み上げる際、桶の上げ下ろしによってついたものではないか。

遺物 埋土から杯2点、石臼片4点、板碑片1点、石鉢1点が出土している。

重複遺構 なし。

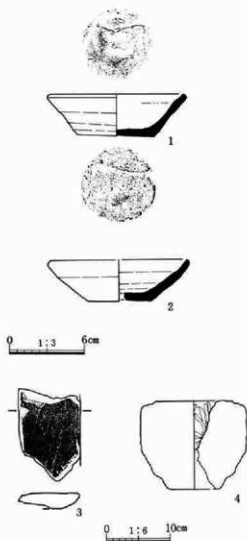


VI4号井戸 (第617・618図 PL. 112)

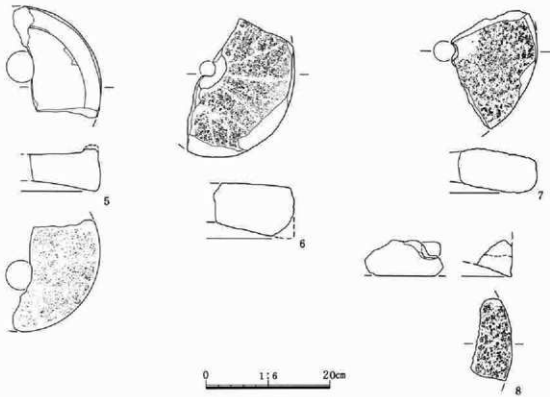
位置 D・E-7

形状と規模 平面は楕円形で径1.5×1.3m、断面は上方にやや開く筒状を呈し、深さ3.0mを測る。地山井筒と思われる。

遺物 埋土から陶器片、砥石1点、五輪塔(火輪)、板碑片1点、方形石造品等が出土している。重複遺構 なし。



第615図 VI3号井戸跡及び出土遺物



第616図 VI 3号井戸跡出土遺物

VI 5号井戸 (第619図)

位置 F-7

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、径1.0m、深さ1.6mを測る。中位では壁面がやや崩れている。

遺物 なし。

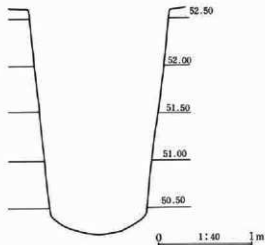
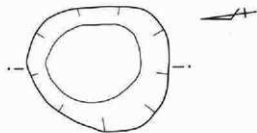
重複遺構 なし。

VI 6号井戸 (第619図)

位置 G-7

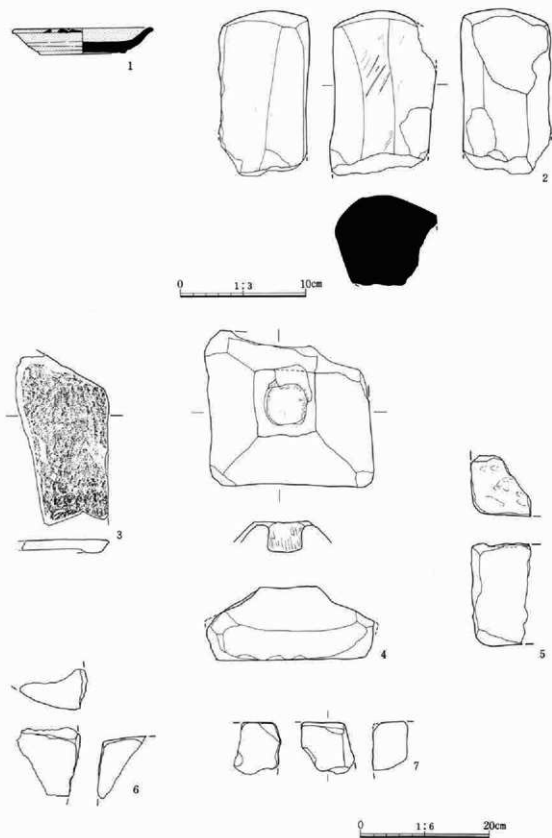
形状と規模 平面円形、断面台形状を呈する。規模は径1.8×1.5m、深さ0.5mを測る。調査時点では井戸として扱ったが、底面標高が52.3mと他の井戸と比べて高く、湧水が期待できないことから井戸ではないだろう。

遺物 なし。



第617図 VI 4号井戸跡

第三章 検出された遺構と遺物



第618図 VI4号井戸跡出土遺物

重複遺構 13号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

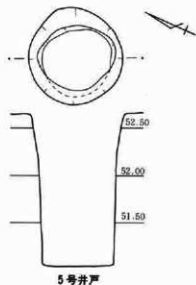
VI7号井戸 (第620図)

位置 H-6・7

形状と規模 平面楕円形で上位は大きく開く。おそらく崩落によるものと思われる。上端の径は2.2×1.8mを測る。中位でも崩落がみられ段状になる。本来は筒状と思われ、底部付近の径は1.0m、深さは2.7mを測る。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 13号溝、14号井戸と重複しており、新旧関係は不明である。



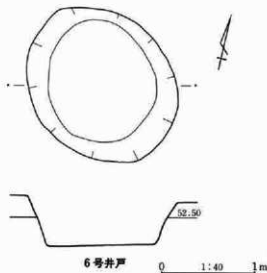
VI8号井戸 (第620・621図 PL. 61・112)

位置 F・G-9

形状と規模 平面楕円形で、上半はかなり崩落している。断面はやや上方に開いた筒状を呈する。規模は上端の径1.4×1.0m、筒状部の径1.0~0.7mで、深さ1.8mを測る。底面は砂質層に達している。

遺物 底面から0.5mほど高い位置で板碑片2点が出土している。

重複遺構 7号溝の中央部で重複しており新旧関係は確認できなかった。



第619図 VI5号・6号井戸跡

VI9号井戸 (第620図)

位置 E-10

形状と規模 平面楕円形で径1.8×1.6m、断面は台形状で深さ0.5mを測る。調査時に井戸として登録したが、他と比べて底面標高が52.5mと極端に高く、湧水も期待できない。井戸ではないだろう。

遺物 なし。

重複遺構 2号住居跡と重複するが新旧関係は不明。

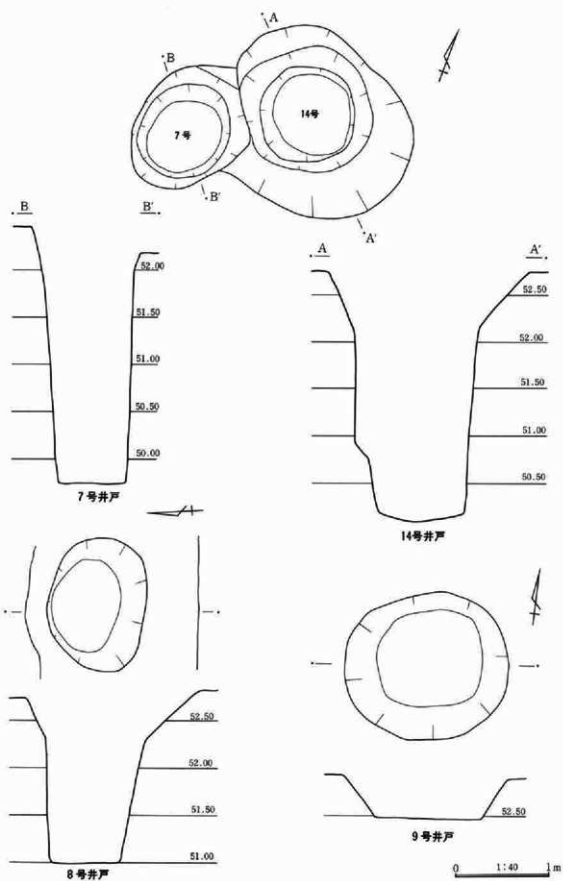
VI10号井戸 (第623図)

位置 F-11

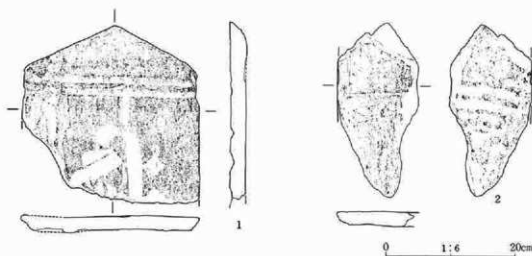
形状と規模 上端付近がやや開くが、平面が円形のほぼ筒状を呈しており径1.2m、深さ2.3mを測る。地山井筒と思われる。

遺物 なし。

重複遺構 6号溝の中央部で重複しており、新旧関係は確認できなかった。



第620図 VI 7号・8号・9号・14号井戸跡



第621図 VI 8号井戸跡出土遺物

VI11号井戸 (第623図)

位置 G-12

形状と規模 平面楕円形で断面は上方に開く台形状を呈する。規模は上端の径が2.1×1.9m、底面の径0.9m、深さ3.0mを測る。壁面の崩落も見られる。

遺物 なし。

重複遺構 6号溝と接する。

VI12号井戸 (第623図)

位置 H-12

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端での径0.9mを測る。深さは不明。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

VI13号井戸 (第623図)

位置 H-13

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端での径0.9mを測る。深さは不明。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

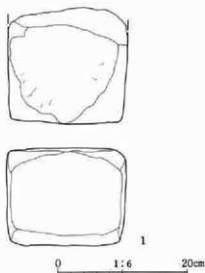
VI14号井戸 (第620・622図 PL. 112)

位置 H-6・7、I-7

形状と規模 平面は不整形で上端付近は開き気味にくぼむ。崩落か配した裸の痕跡かは不明。断面は筒状を呈するが、中位で2段にくびれ、上位での径1.3m、底部付近の径0.5mを測る。深さは2.9mで、底部は40cmほど砂層を掘り抜いている。

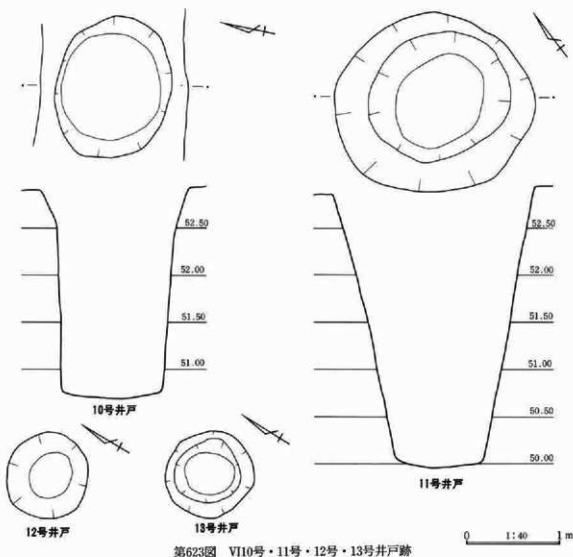
遺物 埋土から五輪塔(地輪)の破片が1点出土している。

重複遺構 13号溝、7号井戸と重複しており、新旧関係は確認できなかった。



第622図 VI14号井戸跡出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



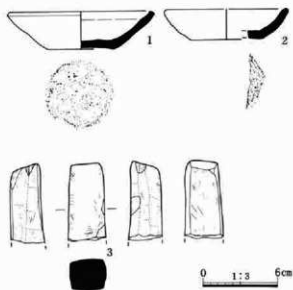
VI15号井戸 (第624・625図 PL. 112)

位置 G-14

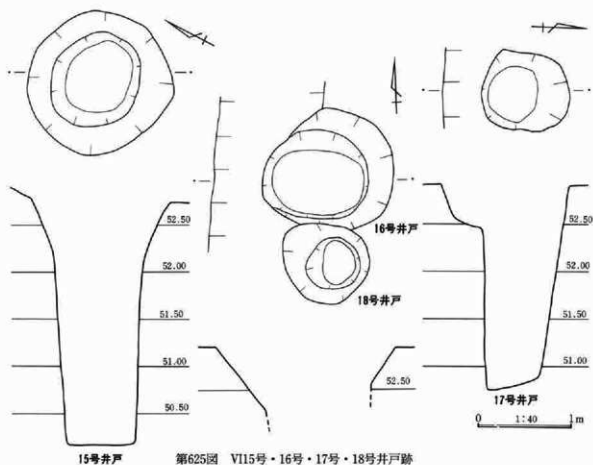
形状と規模 ほぼ円形で筒状の地山井筒と思われ、
 上位は壁面の崩落により、上方に開く。上端
 の径は1.5m、中位から底部での径0.8mを測
 る。深さは2.7m。

遺物 埋土中位から杯2点と磁石1点が出土して
 いる。

重複遺構 9号溝と重複するが新旧関係は不明であ
 る。



第624図 VI15号井戸跡出土遺物



VI16号井戸 (第625図)

位置 D・E-14・15

形状と規模 平面楕円形で、崩落のためか上位部分は大きく開く。上端の径は1.5×1.3mを測る。
深さは不明。

遺物 なし。

重複遺構 10号溝、18号井戸と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

VI17号井戸 (第625図)

位置 D・E-14

形状と規模 上端付近がやや崩れるがほぼ平面円形の筒状を呈した地山井筒と思われる。規模は径0.8×0.5m、深さ2.2mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 8号溝と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

VI18号井戸 (第625図)

位置 E-14

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、径0.9mを測る。深さは不明。

遺物 なし。

重複遺構 8号溝、16号井戸と重複するが、新旧関係は確認できなかった。

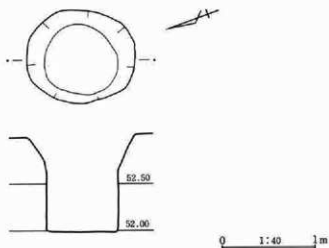
VI19号井戸 (第626・627図 PL. 61・112)

位置 F-15・16

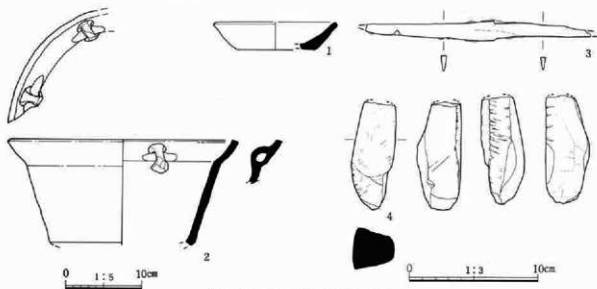
形状と規模 平面は楕円形で上端は崩落したと思われる。下半は筒状を呈する。規模は上端の径1.1×1.0m、深さ1.0mを測る。

遺物 杯1点、内耳土器2点、刀子1点、砥石1点が埋土上位から出土している。

重複遺構 9号溝と重複するが、新旧関係は不明である。



第626図 VI19号井戸跡



第627図 VI19号井戸跡出土遺物

VI20号井戸 (第628図)

位置 G-17

形状と規模 円形で筒状の地山井筒と思われ、上端の径1.2m、深さ1.64mを測る。中位で壁面の崩落が見られる。

遺物 なし。

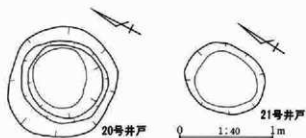
重複遺構 なし。

VI21号井戸 (第628図)

位置 D-13

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端の径0.8×0.7mを測る。深さは不明。

遺物 なし。 重複遺構 なし。



第628図 VI20号・21号井戸跡

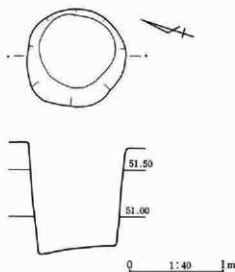
VI22号井戸 (第629・630図 PL. 61・112・113)

位置 D-13・14

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端の径1.1m、深さ1.2mを測る。

遺物 埋土の中位から下位で板碑片4点が出土している。

重複遺構 なし。

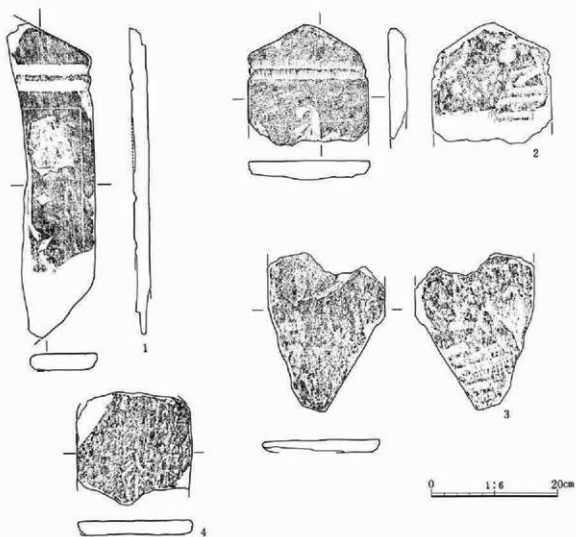


第629図 VI22号井戸跡

VI23号井戸 (第631・634図)

位置 D-16

形状と規模 平面円形で筒状の地山井筒と思われるが上端は不整形に開く。恐らく崩落によると思われる。筒状部分の径は1.2mを測る。底



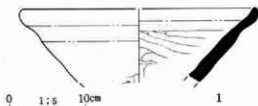
第630図 VI22号井戸跡出土遺物

第III章 検出された遺構と遺物

面まで完掘できなかったために深さは不明である。

遺物 埋土の中位から鏝鉢の破片1点が出土している。

重複遺構 10号溝と重複するが、新旧関係は確認できなかった。



第631図 VI23号井戸跡出土遺物

VI24号井戸 (第634図)

位置 F・G-6

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、規模は上端の径1.3×1.2mを測る。底面まで完掘できなかったために深さは不明である。

遺物 なし。

重複遺構 13号溝と重複するが、新旧関係は不明。

VI25号井戸 (第634図)

位置 H-8

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端は崩落によりやや開いている。規模は上端で径1.4×1.2m、筒状部で径1.0m、深さ2.1mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 13号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。

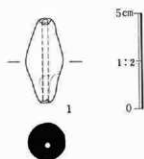
VI26号井戸 (第632・634図 PL. 112)

位置 J-9・10

形状と規模 平面円形でほぼ筒状の地山井筒と思われる。径は0.9m、深さ1.8mを測る。

遺物 埋土から土鍾1点が出土している。

重複遺構 なし。



第632図 VI26号井戸跡出土遺物

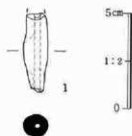
VI27号井戸 (第634図 PL. 112)

位置 J-8

形状と規模 平面円形でほぼ筒状の地山井筒と思われる。径は1.0×0.9m、深さ1.9mを測る。

遺物 埋土から土鍾1点が出土しているが、重複する16号住居跡からの流れ込みと考えられる。

重複遺構 16号住居跡より新しいと思われる。



第633図 VI27号井戸跡出土遺物

VI28号井戸 (第634図)

位置 J-7

形状と規模 平面楕円形で断面はやや上方に開く筒状を呈する。規模は上端径1.0×0.9m、底部径0.8m、深さ1.1mを測る。

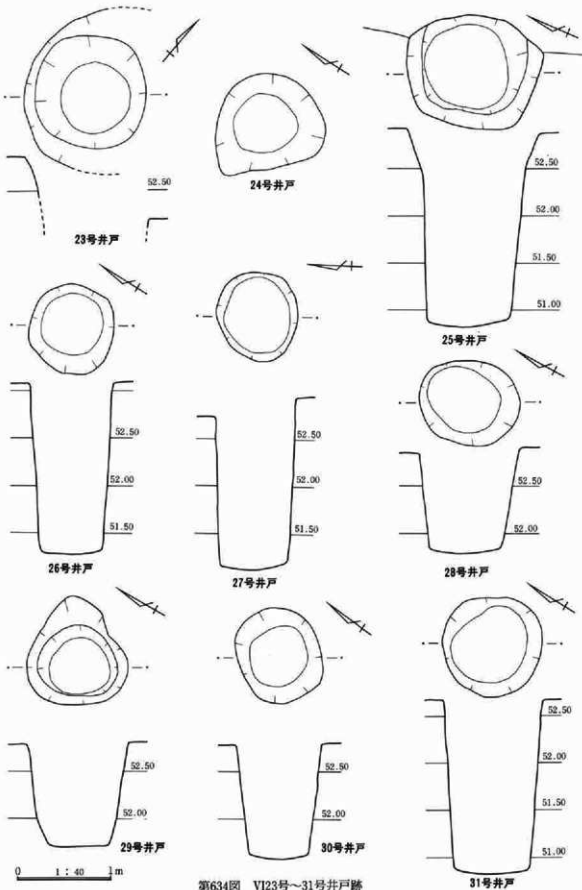
遺物 なし。

重複遺構 なし。

VI29号井戸 (第634図)

位置 K-5

形状と規模 平面楕円形で断面はやや上方に開く筒

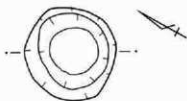


第634图 VI23号~31号井戸跡

第三章 検出された遺構と遺物

状を呈する。規模は上端径1.2×1.0m、底部径0.6m、深さ1.0mを測る。

遺物 なし。 重複遺構 なし。

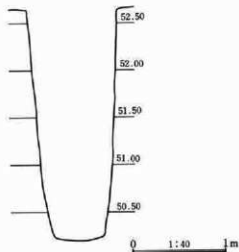


VI30号井戸 (第634図)

位置 J-5

形状と規模 平面円形で断面はやや上方に開く筒状を呈する。規模は上端径1.0m、底部径0.6m、深さ1.2mを測る。

遺物 なし。 重複遺構 なし。



VI31号井戸 (第634図)

位置 G-4

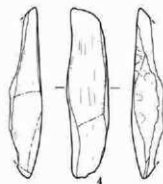
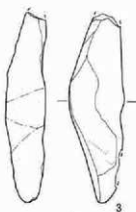
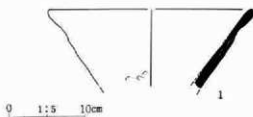
形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、径1.0m、深さ2.3mを測る。

遺物 なし。 重複遺構 なし。

VI32号井戸 (第635・636図 PL. 113)

位置 E・F-4

第635図 VI32号井戸跡



0 1:3 10cm

第636図 VI32号井戸跡出土遺物

形状と規模 円筒筒状の地山井筒と思われ、上方にやや開く。規模は上端径1.0m、底部径0.5m、深さ2.5mを測る。底面は砂層を掘り込む。

遺物 埋土から用途不明の内耳土器底部再利用の円盤、鏝鉢片2点、砥石2点が出土する。

重複遺構 なし。

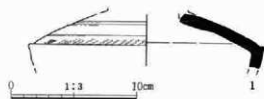
VI33号井戸 (第637・639図)

位置 F・G-1

形状と規模 円筒筒状の地山井筒と思われ、規模は径1.0m、深さ2.2mを測る。崩落は少なく遺存状況は良好。

遺物 埋土から長頸壺の破片が1点出土しているが、本井戸に伴うものとは考えにくく、重複する13号古墳の副葬品等が流れ込んだものと解釈したい。

重複遺構 本井戸は13号古墳の墳裾付近から検出されており、新旧関係は不明である。



第637図 VI33号井戸跡出土遺物

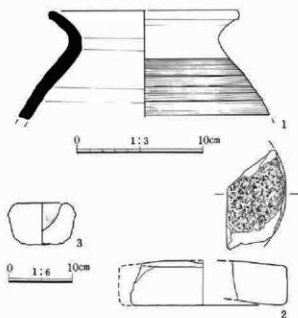
VI34号井戸 (第638・639図)

位置 J-4

形状と規模 円筒筒状の地山井筒と思われ、上端は崩落によりやや開いている。規模は上端で径1.4×1.2m、筒状部で径1.0m、深さ2.1mを測る。

遺物 埋土から石鉢の破片1点が出土している。

重複遺構 なし。



第638図 VI34号井戸跡出土遺物

VI35号井戸 (第639図)

位置 F・G-23 1号溝の調査時点で検出。

形状と規模 平面が円形で断面筒状の地山井筒と思われるが、約1/2が溝との重複で確認できない。下位の径は0.9mで深さ1.6mを測る。

遺物 埋土下層から杯、小形甕等の土器片が集中して出土したが、重複する6号住居跡からの流れ込みと考えられる。

重複遺構 6号住居跡、1号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

VI36号井戸 (第639図)

位置 I-22

形状と規模 円筒筒状の地山井筒と思われ、上半は2号溝と重複するため不明確である。下位の径は0.8~0.5mで、深さ1.6mを測る。

遺物 板磚片が埋土に突き刺さった状態で出土。

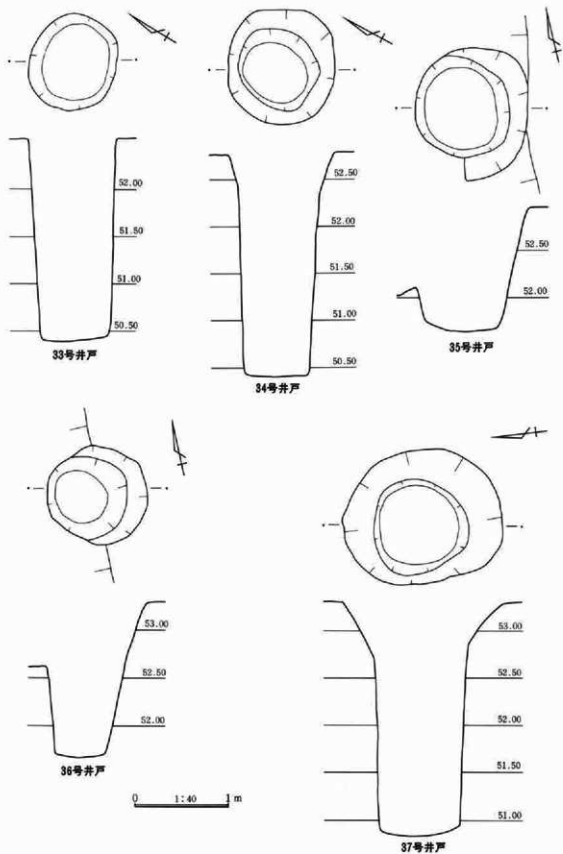
重複遺構 2号溝と重複し、新旧関係は不明。

VI37号井戸 (第639図)

位置 I-23

形状と規模 円筒筒状の地山井筒と思われ、上端は

第III章 検出された遺構と遺物



第639図 VI33号~37号井戸跡

大きく開いている。規模は上端で径1.7×1.5 m、筒状部で径0.9m、深さ2.5mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 3号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。

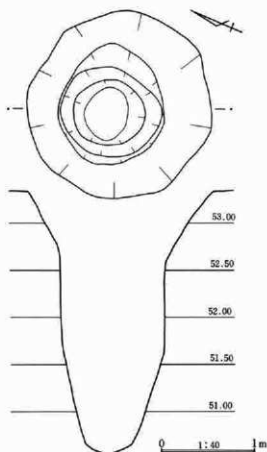
VI38号井戸 (第640～642図 PL. 113)

位置 H・I-18・19

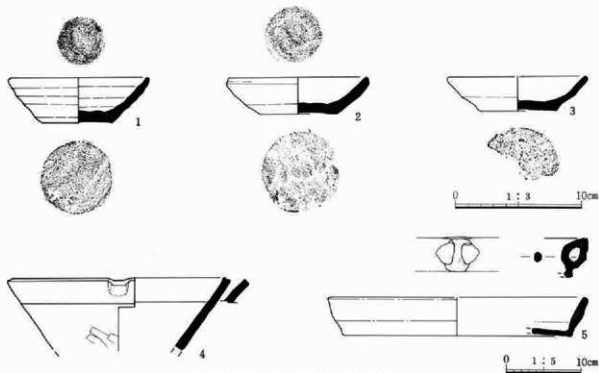
形状と規模 上位は平面円形で大きく開く。中位以下は壁面の崩落が激しく本来の面を残していない。上端での径は約2.0m、中位での径1.0～0.5m、深さは2.8mを測る。

遺物 杯3点、内耳土器片1点、播鉢片1点、五輪塔(水輪)の破片、石臼片等が埋土から出土している。

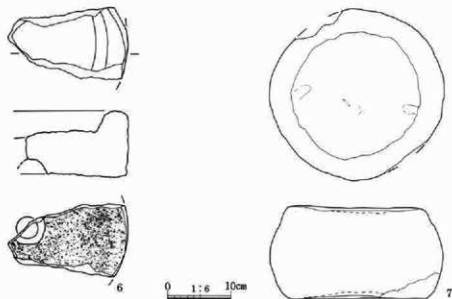
重複遺構 なし。



第640図 VI38号井戸跡



第641図 VI38号井戸跡出土遺物(1)



第642図 VI38号井戸跡出土遺物(2)

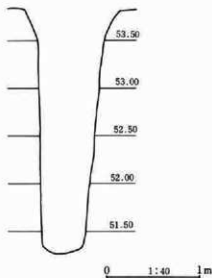
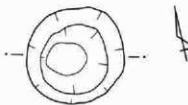
Ⅶ1号井戸 (第643・644図 PL. 61・113)

位置 H-5

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端は崩落によりやや開いている。規模は上端で径1.1×1.0m、筒状部で径0.5m、深さ2.6mを測る。

遺物 杯、鉢、磁石等の破片が出土しているが、埋土の上層からの出土である。

重複遺構 2号・3号井戸、6号溝は直接重複しないが互いに隣接しており、同時存在とは考えにくい。特に井戸に関しては時間的に連続したものと考えたい。



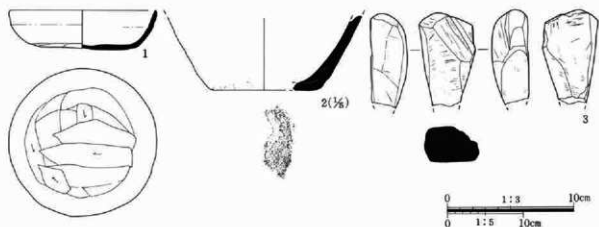
Ⅶ2号井戸 (第645図 PL. 113)

位置 H-5

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、上端は崩落によりやや開いている。規模は上端で径1.3×1.2m、筒状部で径0.7m、深さ3.3mを測る。Ⅶ区では最も底面標高が低く、50.5mを測る。比較的遺存状況が良好である。

第643図 Ⅶ1号井戸跡

第11節 井戸跡



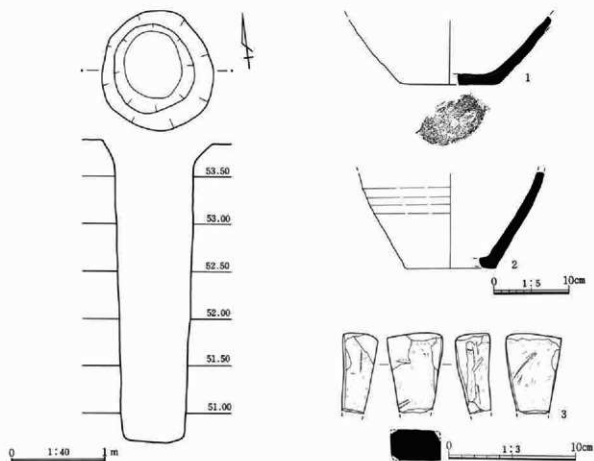
第644図 VII 1号井戸跡出土遺物

遺物 埋土上位から中位にかけて鉢片2点、砥石

1点が出土する。

重複遺構 6号溝とは隣接しており本来の掘り込み

面では重複していたと思われる。



第645図 VII 2号井戸跡及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

VII 3号井戸 (第647図 PL. 61)

位置 H-5・6

形状と規模 上端の平面は崩落のため歪んだ楕円形を呈しており、径は1.4×1.2mを測る。上位はやや開くが、中位以下は筒状を呈する。この部分の径は0.8mを測る。深さは2.7m。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

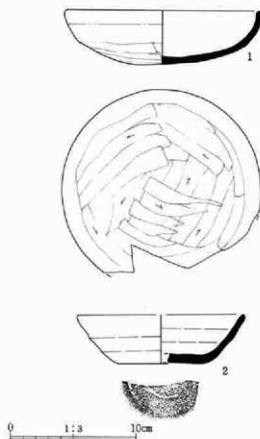
VII 4号井戸 (第646・647図 PL. 113)

位置 I-6

形状と規模 円形筒状の地山井筒と思われ、径0.9m、深さは3.0mを測る。遺存状況は良好。

遺物 埋土の上層から土師器と須恵器の杯が1点づつ出土している。

重複遺構 なし。



第646図 VII 4号井戸跡出土遺物

VII 5号井戸 (第647図)

位置 G・H-5・6

形状と規模 平面円形で筒状の地山井筒と思われるが、上半は4号溝と重複するために不明確である。下半は筒状を呈するが、壁面の崩落が激しい。規模は径0.8m前後を測る。深さは3.2m。

遺物 なし。

重複遺構 4号溝と重複するが新旧関係は確認できなかった。

VII 6号井戸 (第647図)

位置 I・J-1・2

形状と規模 平面が楕円形で断面が筒状の地山井筒と思われるが、壁面の崩落が激しく、本来の形状を止めていない。筒状部での径は0.7m、深さは2.5mを測る。なお南側に1.5×1.1mの方形の浅い掘り込みが見られたが、本井戸に付随するものか重複遺構かの判別はつかなかった。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

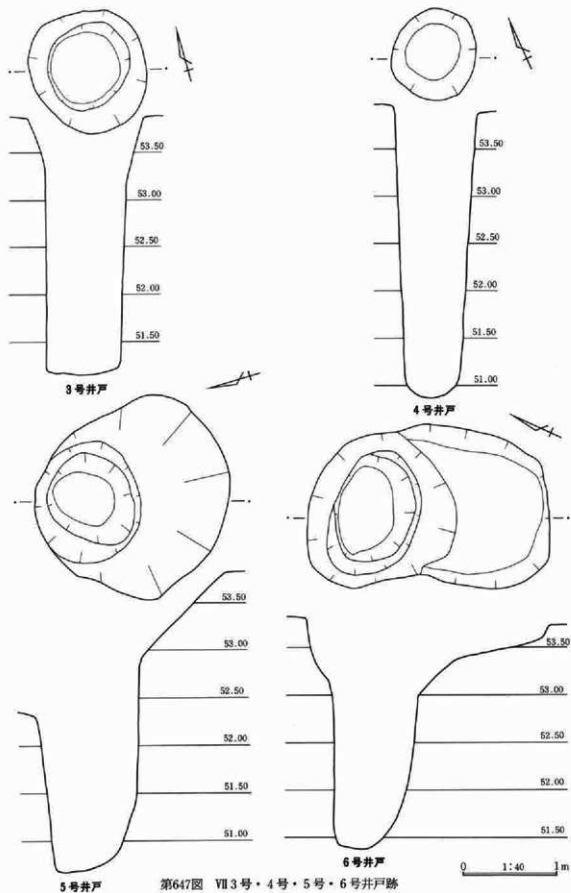
VII 7号井戸 (第648図 PL. 61・113)

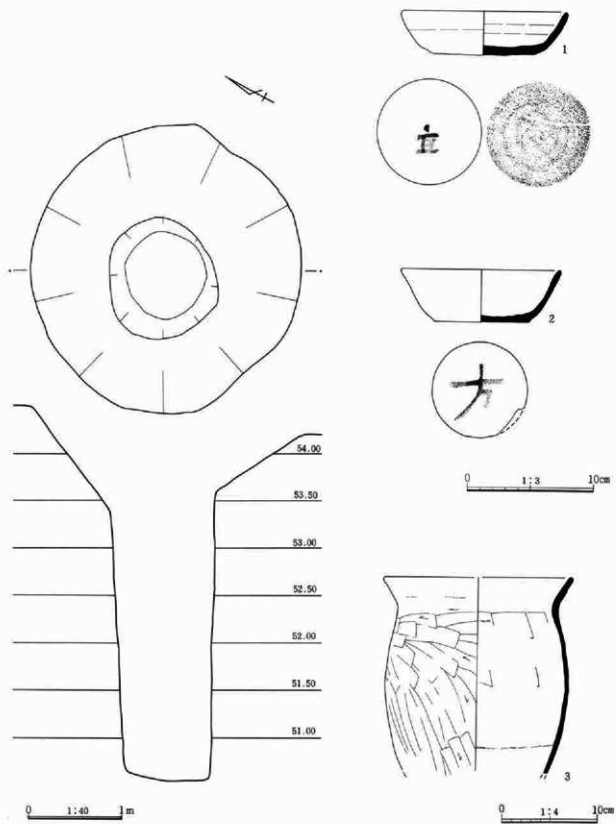
位置 I-10・11

形状と規模 上位は大きく円錐形に開いており、径約3mを測る。中位以下は筒状を呈し、径1.0m前後、深さ4.0mを測る。形状から地山井筒と思われるが上位の形状は自然崩落には異様に大きい。

遺物 墨書杯2点、甕が出土しているが、埋土上層からの出土であり、流れ込みや人為的埋土に含まれていた可能性がある。

重複遺構 なし。





第648図 VII 7号井戸跡及び出土遺物

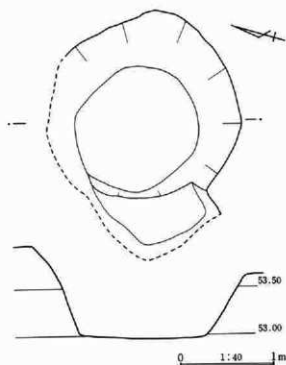
VII 8号井戸 (第649図)

位置 VI区K・L-25

形状と規模 平面円形で断面は台形状を呈する。上端の径は約2mで底径1.3m、深さは1.1mを測る。調査時点で井戸として登録したが、底面標高が53.0mと高く、湧水も期待できないので井戸とは考えにくい。

遺物 埋土から土器の破片が数点出土したが、重複する3号住居跡からの流れ込みと思われる。

重複遺構 3号住居跡よりも新しいと思われる。



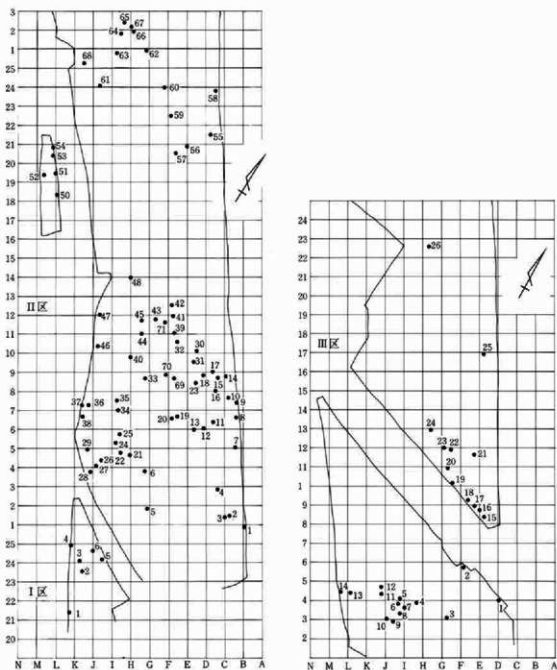
第649図 VII 8号井戸跡

第12節 土 坑

概 要

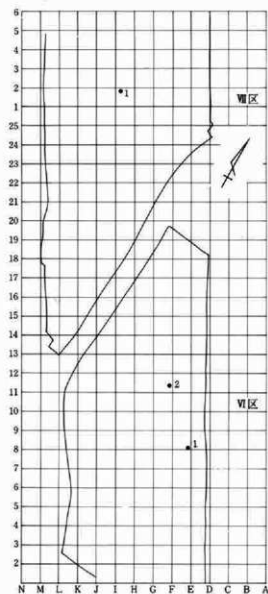
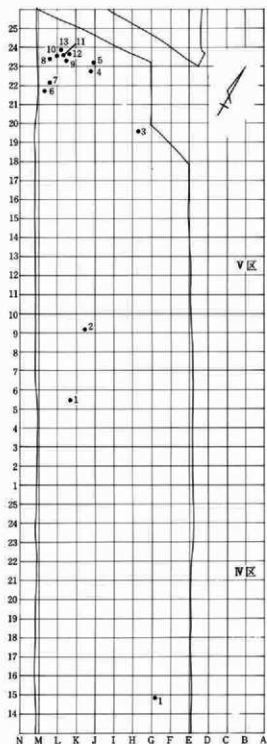
本遺跡では合計120基の土坑が検出された。時期、性格については不明なのがほとんどである。形状には大きく方形、円形、楕円形の3種類に分類でき

る。円形と長方形のものはそれぞれ集中する傾向をもっており、ほぼ同じ時代に属する同じ性格の遺構と考えられる。円形土坑はⅠ～Ⅲ区に多く分布し、特に台地東縁部分に濃い。長方形土坑はⅢ区の中央部とⅤ区の北西部に分布が見られ、いずれも主軸方向が東西あるいは南北を向き、連続して掘削された



第650図 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区土坑位置図 (1/800)

傾向が何えることから、畑等に伴う貯蔵穴の可能性が考えられよう。Ⅲ区北西半～Ⅶ区にかけての地域は分布が非常に希薄である。



第651図 IV・V・VI・Ⅶ区土坑位置図 (1/800)

第三章 検出された遺構と遺物

I 1号土坑 (第652・655図)

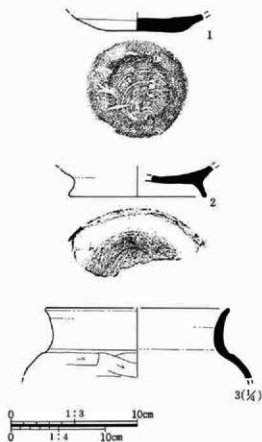
位置 J・K-21

形状と規模 平面は隅丸長方形で、東側の両方の隅が張り出す。断面は凹凸の多い椀状を呈する。規模は3.2×2.2m、深さ51cmを測る。調査時点では倒木痕として扱ったが、土層断面の所見から人為的に掘り込まれた可能性があるためここでは改めて土坑として扱った。

遺物 埋土から甕、須恵器の杯等の土器片が出土している。

埋土の特徴 炭化物、軽石、粘土ブロックがレンズ状に堆積する。

重複遺構 1号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第652図 I 1号土坑出土遺物

I 2号土坑 (第653・655図 PL. 114)

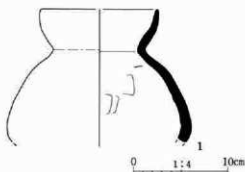
位置 J-23

形状と規模 平面は歪んだ長方形で、断面は台形状を呈し底面は平坦。規模は1.0×0.7m、深さ25cmを測る。

方位 N-5°-W

遺物 埋土から壺の破片が出土している。

重複遺構 2号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第653図 I 2号土坑出土遺物

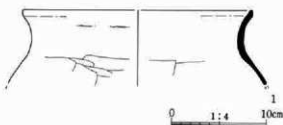
I 3号土坑 (第654・655図)

位置 J-23・24

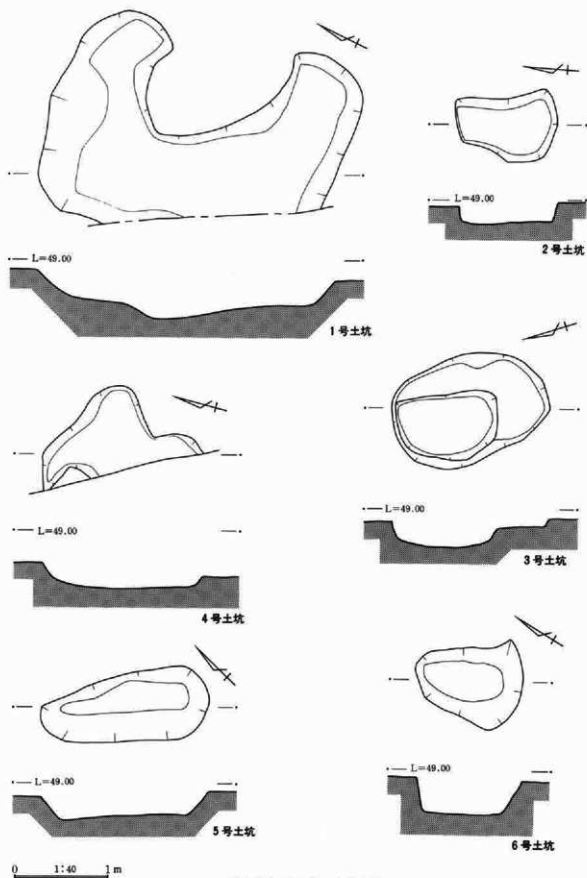
形状と規模 平面は楕円形で、断面は台形状を呈する。底面は更に小規模な楕円形状に落込み、中央がややくぼむ。規模は1.7×1.1m、深さ44cmを測る。

遺物 埋土から甕の口縁破片1点が出土している。

重複遺構 2号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第654図 I 3号土坑出土遺物



第655图 I 1号~6号土坑

第三章 検出された遺構と遺物

I 4号土坑 (第655・656図 PL. 114)

位置 K-24・25

形状と規模 平面形は不明で、断面は浅い台形状を呈する。深さ33cmを測る。

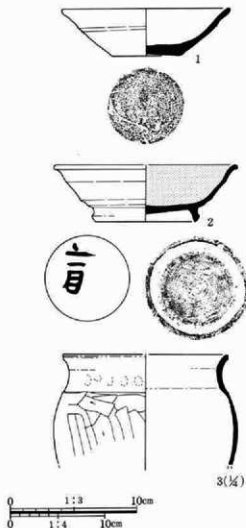
遺物 9世紀後半代と思われる杯、甕が出土している。

重複遺構 なし。

I 5号土坑 (第655図)

位置 I-24

形状と規模 平面は細長い楕円形で、断面は台形状を呈し、底面は平坦である。規模は1.8×0.8m、深さ30cmを測る。



第656図 I 4号土坑出土遺物

方位 N-134°-E

遺物 なし。

重複遺構 1号道路跡側溝と重複しており、新旧関係は不明である。

I 6号土坑 (第655図)

位置 I・J-24

形状と規模 平面は不整楕円形で、断面は台形状を呈する。規模は1.2×0.7m、深さ38cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 1号道路跡側溝と重複しており、新旧関係は不明である。

II 1号土坑 (第657・658図 PL. 114)

位置 I区A-25

形状と規模 平面は楕円形と思われるが過半については調査区外のため不明、断面は浅い台形状を呈する。規模は幅0.7m、深さ12cmを測る。

遺物 埋土から灰軸碗とほぼ完形の甕が出土している。

重複遺構 なし。

II 2号土坑 (第658図)

位置 B-1

形状と規模 平面は楕円形で、断面は台形状を呈する。規模は0.9×0.7m、深さ43cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 3号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

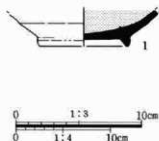
II 3号土坑 (第658図)

位置 B-1

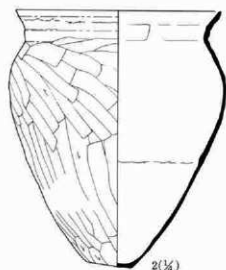
形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。規模は径約1m、深さ40cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 2号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。



第657図 II 1号土坑出土遺物



II 4号土坑 (第658図)

位置 C-2・3

形状と規模 平面は不整形で、断面は底部中央が高い台形状を呈し、底面は凹凸が多い。規模は3.0×(2.8)m、深さ66cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 74号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II 5号土坑 (第658図)

位置 G-1・2

形状と規模 平面は楕円形で、断面は浅い台形状を呈する。底面は平坦。規模は1.6×1.2m、深さ17cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 6号掘立柱建物跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II 6号土坑 (第658図)

位置 G-3

形状と規模 平面は楕円形で、底面が東側に偏って深い。規模は1.5×1.1m、深さ66cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II 7号土坑 (第659・660図)

位置 B-4・5

形状と規模 平面は不整形円形だが、中央にブリッジ状の高まりがあることから本来2基の土坑とも考えられる。断面は台形状を呈し、底面はやや椀状にくぼむ。規模は1.9×0.9m、深さ58cmと43cmを測る。

方位 N-141°-E

遺物 埋土から高杯の破片1点が出土している。

重複遺構 79号・108号住居跡と重複しており、また109号・110号住居跡と接するがいずれとも新旧関係は不明である。

II 8号土坑 (第659図)

位置 B-6

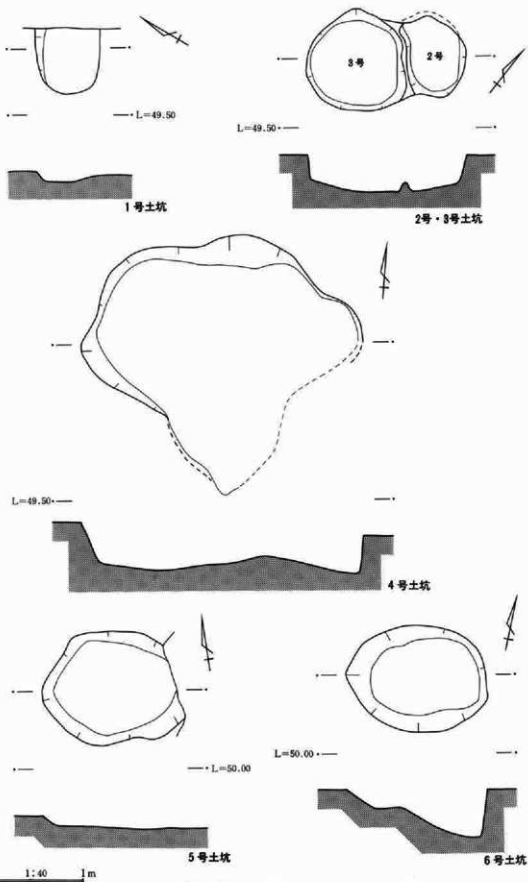
形状と規模 平面は長方形と思われる、断面は台形状を呈する。底面はやや凹凸が見られる。規模は不明。深さ40cmを測る。

方位 N-30°-E

遺物 なし。

重複遺構 122号住居跡、I区3号溝と重複しており、新旧関係は不明である。

第III章 検出された遺構と遺物



第658図 II 1号~6号土坑

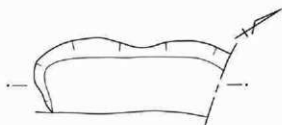
第12節 土 坑



L=49.50



7号土坑



L=50.00



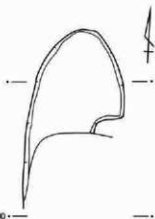
8号土坑



L=50.00



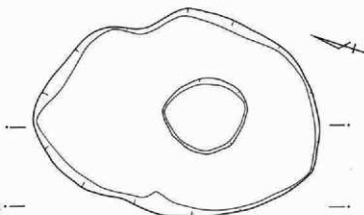
9号土坑



L=50.00



10号土坑



L=50.00



11号土坑

0 1:40 1 m

第659图 II 7号~11号土坑

第12節 土 坑



第660図 II 7号土坑出土遺物

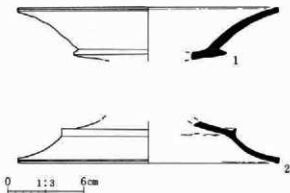
II 9号土坑 (第659・661図 PL. 114)

位 置 B-7

形状と規模 平面は不整形で確認されたが、本来の形状は不明確。底面はかなり凹凸が激しく、中央に円形ピット状のくぼみがある。規模は径1.8m前後、深さ64cmを測る。

遺 物 古墳時代初頭の北陸系ではないかと思われる高杯あるいは器台が出土している。

重複遺構 122号・123号・140号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第661図 II 9号土坑出土遺物

II10号土坑 (第659図)

位 置 B-7

形状と規模 平面は楕円形状と思われるが遺構重複のため不明確。断面は浅い台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。規模は幅0.9m、深さ24cmを測る。

遺 物 なし。

重複遺構 137号・140号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II11号土坑 (第659図)

位 置 C-6

形状と規模 平面はやや歪んだ楕円形で、中央部にピット状の落込みがある。断面は台形状を呈し、底面は平坦である。規模は3.1×2.2m、深さ61cmを測り、ピット部は径0.8mで周辺より更に8cm低い。中央部に筒状のものを据え置いて利用したものか。

遺 物 なし。

重複遺構 116号住居跡とわずかに重複しており、また128号住居跡、12号土坑と接しているが、新旧関係は不明である。

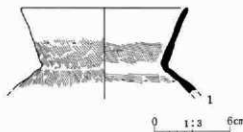
II12号土坑 (第662・663図 PL. 114)

位 置 C・D-5・6

形状と規模 平面は楕円形と思われるが、南半は不明。断面は浅い台形状を呈する。規模は幅1.2m、深さ43cmを測る。

遺 物 埋土から古墳時代初頭の壺破片が出土している。

重複遺構 なし。



第662図 II12号土坑出土遺物

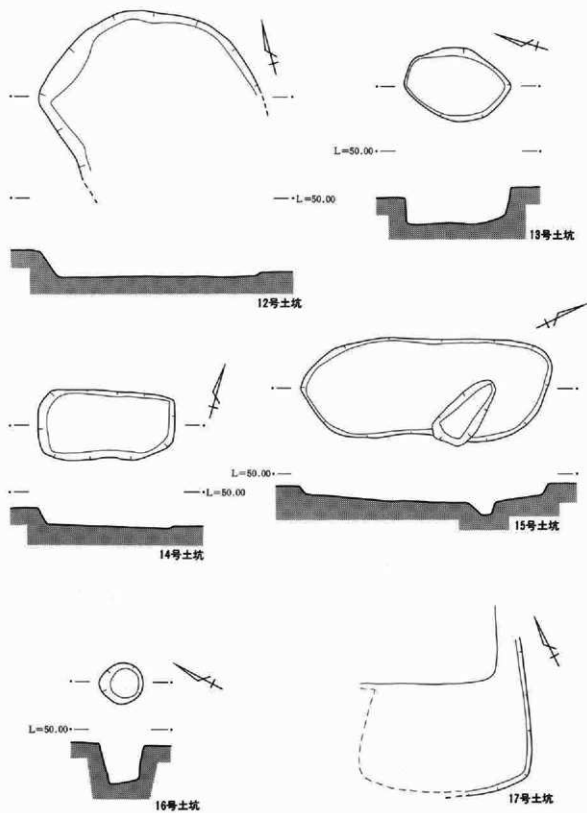
II13号土坑 (第663・664図 PL. 62・114)

位 置 D-5・6

形状と規模 平面は楕円形で、断面は台形状を呈する。底面は平坦である。規模は1.2×0.8m、深さ47cmを測る。

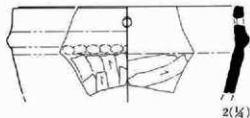
遺 物 埋土から11世紀代と思われる高台椀、羽釜の破片が出土している。

重複遺構 なし。



第663圖 II12号~17号土坑

0 1:40 1m



第664図 II13号土坑出土遺物

II14号土坑 (第663図)

位置 B・C-8

形状と規模 平面は長方形で、断面は浅い台形状を呈する。底面は平坦。規模は1.5×0.7m、深さ18cmを測る。

方位 N-77-E

遺物 なし。

重複遺構 134号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

II15号土坑 (第663図)

位置 C-8

形状と規模 平面は楕円長方形で、断面は浅い台形状を呈する。底面は平坦で、北東の一部がくぼむ。これについては擾乱坑の可能性もある。規模は2.7×1.1m、深さ21cmを測る。

方位 N-23-E

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II16号土坑 (第663図)

位置 C-8

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。規模は径0.6m、深さ45cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 115号・137号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II17号土坑 (第663図)

位置 C-8・9

形状と規模 方形と思われるが、北半は遺構重複のため不明。深さは7cm前後を測り、底面は比較的平坦。

遺物 なし。

重複遺構 136号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II18号土坑 (第665・666図 PL. 62・114)

位置 C・D-8・9

形状と規模 平面は円形で中央部に更に円形ピット状に落ち込む。また北側には円形の張り出しピットが付随するが、本来伴うものか、重複関係にある別遺構かは確認できなかった。断面は浅い台形状を呈する。規模は径3.0×2.6m、深さ37cmを測る。中央部の落ち込みは径1.2×1.0m、深さ50cmを測る。張り出しピットは径0.9m、深さ30cmでやや浅くなっている。

埋土の特徴 黒褐色土が主体でロームを多く含む。中央の落ち込みには灰と炭化物が見られた。上層は明らかに人為的埋土と思われる。

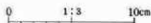
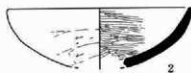
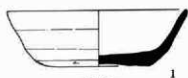
遺物 中央落ち込み部分の埋土から墨書土器、杯、灰釉碗等の破片が出土している。

重複遺構 なし。

II19号土坑 (第666図)

位置 E-6

形状と規模 平面は歪んだ円形で、断面は碗状を呈する。規模は径0.8m、深さ40cmを測る。



第665図 II18号土坑出土遺物

遺物 なし。

重複遺構 92号住居跡と重複しており、これよりも古い。

II20号土坑 (第666図)

位置 E-6

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈し、

西側に偏って底面がややくぼむ。規模は径1.0m、深さ32cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 92号・125号住居跡と重複しており、92号住居跡より古い。

II21号土坑 (第666図)

位置 H-4

形状と規模 平面は楕円形で、断面は鉢形を呈する。

規模は0.8×0.7m、深さ46cmを測る。埋土では確認できなかったが、位置関係から重複する98号住居跡の貯蔵穴の可能性もある。

遺物 なし。

重複遺構 98号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II22号土坑 (第669図)

位置 H-4

形状と規模 平面は円形で、断面は浅い台形状を呈

する。底面はほぼ平坦。規模は径1.4m、深さは98号住居跡の床面から13cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 98号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

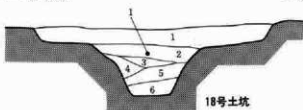
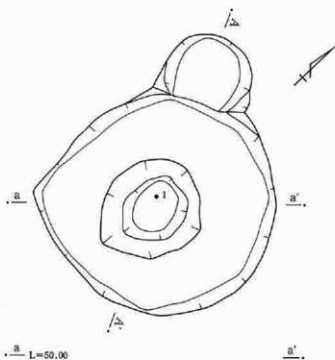
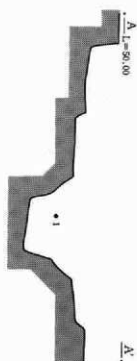
II23号土坑 (第669図)

位置 D-8

形状と規模 平面は隅丸方形と思われるが、北半は

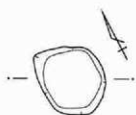
不明。断面形はほとんど不明で、底面は平坦。

規模は幅1.0m、深さはわずかに2～4cmを測る。



土層説明

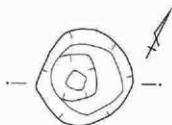
- 1 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 黒色土 炭化物粒を含む。杯出土。
- 3 黒色土 灰と炭化物を多く含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
- 6 黒褐色土 ほぼ均質。



L=50.00



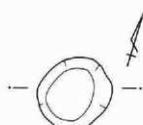
19号土坑



L=50.00



20号土坑



L=50.00



21号土坑

0 1:40 1m

第666図 II18号～21号土坑

遺物なし。

重複遺構 126号住居跡と重複しており、これよりも新しい。

II24号土坑 (第669図)

位置 H-5

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。

底面は平坦。規模は径1.6m、深さは重複する98号住居跡の床面から28cmを測る。

遺物なし。

重複遺構 98号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II25号土坑 (第669図 PL. 62)

位置 H-5

形状と規模 平面は歪んだ円形で、東西に偏って2基のピットが検出された。底面はほぼ平坦で壁は垂直に近い。規模は径1.6m、深さ98cmを測る。ピットは両者とも径0.5mで、深さは底面から更に70cmと16cmを測り、西側のほうが深い。

遺物なし。

重複遺構 98号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II26号土坑 (第667・669図 PL. 114)

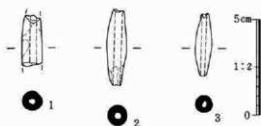
位置 I-4

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈しており、北西側に偏ってピットが検出された。

規模は径1.5m、深さ34cmを測る。ピットは平面楕円形で0.8×0.5mの椀状に掘り込まれており、底面から深さ20cmを測る。

遺物 土鏝3点が埋土から出土している。

重複遺構 なし。



第667図 II26号土坑出土遺物

II27号土坑 (第668・669図 PL. 114)

位置 I-3・4

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は中央がややくぼむ台形状を呈する。規模は径1.5×1.3m、深さ34cmを測る。

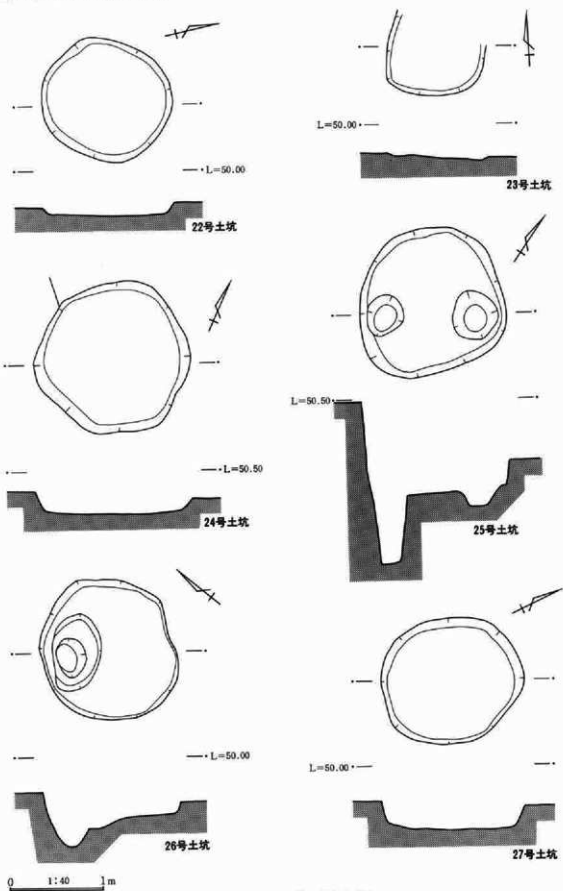
遺物 埋土から椀と思われる底部破片が出土している。

重複遺構 なし。



第668図 II27号土坑出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第669図 II22号~27号土坑

II28号土坑 (第673図)

位置 J-3

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は浅い台形状を呈する。底面は平坦。規模は径1.0m、深さ19cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II29号土坑 (第673図)

位置 J-4・5

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は浅い台形状を呈する。規模は1.1×1.0m、深さ19cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 100号・130号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II30号土坑 (第673図)

位置 D-9・10

形状と規模 平面は長方形と思われるが南半は不明。規模は幅0.8m、深さ32cmを測る。

方位 N-12°E

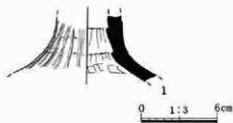
遺物 なし。

重複遺構 161号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II31号土坑 (第670・673図)

位置 D-9

形状と規模 平面は楕円形で、断面は台形状を呈する。規模は1.5×1.1m、深さ72cmを測る。



第670図 II31号土坑出土遺物

遺物 埋土から古墳時代中葉と思われる高杯の破片が出土している。

重複遺構 151号・152号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II32号土坑 (第671・673図)

位置 E-10

形状と規模 平面は円形で南側は不明。断面は台形状を呈する。底面は平坦。規模は径1.4m、深さ45cmを測る。

遺物 埋土から平安期と思われる台付甕の破片が出土している。

重複遺構 152号・161号・164号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第671図 II32号土坑出土遺物

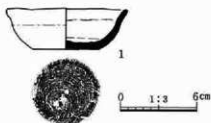
II33号土坑 (第672・673図 PL. 114)

位置 G-8

形状と規模 平面は不整形楕円形で、断面は浅い台形状を呈する。底面は平坦。規模は1.1×0.9m、深さ10cmを測る。内面がやや焼けて、焼土が散見される。

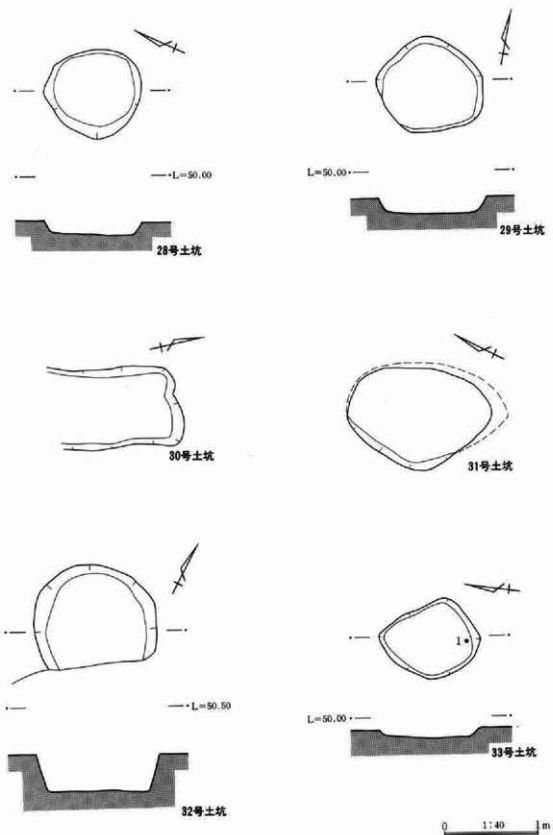
遺物 南側の底面からほぼ完形の杯1点が出土している。

重複遺構 165号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第672図 II33号土坑出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第673図 II28号~33号土坑

II34号土坑 (第676図)

位置 H-6・7

形状と規模 平面は不整形円で、断面は台形状を呈する。底面はやや凹凸がある。規模は径1.5×1.3m、深さ33cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 120号住居跡と重複しており、これよりも新しい。

II35号土坑 (第676図)

位置 H・I-7

形状と規模 平面は隅丸形状で、北側が大きく膨らむ形状を呈する。断面は浅い皿状を呈する。規模は2.8×1.2m、深さ30cmを測る。

方位 N-13°-E

遺物 なし。

重複遺構 120号・143号住居跡と重複し、120号住より新しいが、143号住との関係は不明。

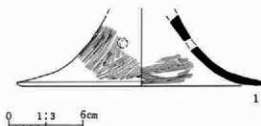
II36号土坑 (第674・676図)

位置 I・J-7

形状と規模 平面は楕円形で、中央に更に楕円形に掘り込まれる。断面は台形状を呈し底面は平坦。規模は2.7×2.3m、深さ20cmを測る。中央の掘り込みは径2.0×1.7m、深さは更に20cmほど下がる。

遺物 埋土から古墳時代初頭の高杯あるいは器台の小破片1点が出土している。

重複遺構 37号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。



第674図 II36号土坑出土遺物

II37号土坑 (第676図)

位置 J-7

形状と規模 平面は楕円形と思われ、断面は台形状を呈する。底面は平坦。規模は1.1m、深さは28cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 36号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

II38号土坑 (第676図)

位置 J-6

形状と規模 平面は不整形円で、断面は台形状を呈する。規模は0.9×0.8m、深さ20cmを測る。西側に擾乱ピットがある。

遺物 なし。

重複遺構 102号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II39号土坑 (第675・676図)

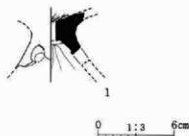
位置 E-10・11

形状と規模 平面は不整形長方形で、断面は台形状を呈する。底面は平坦。規模は1.1×0.8m、深さ47cmを測る。

方位 N-9°-E

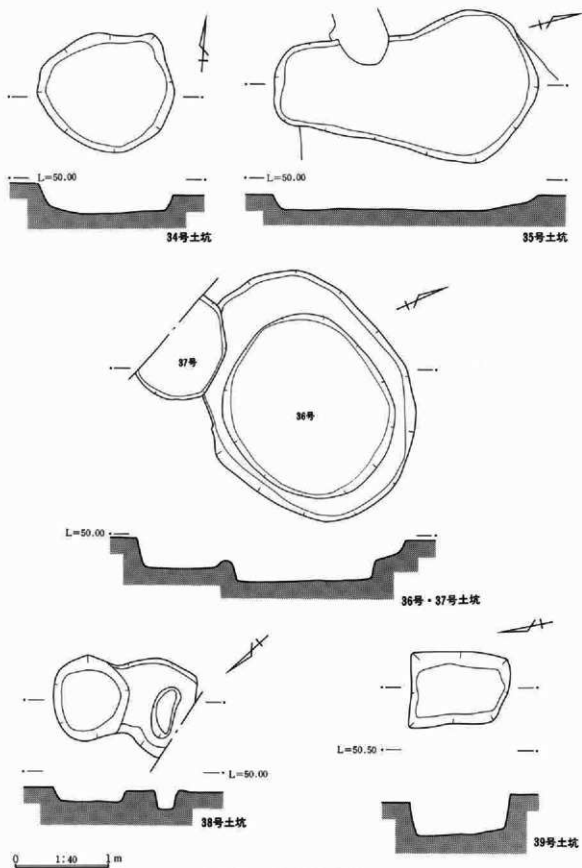
遺物 埋土から古墳時代初頭の器台破片が出土している。

重複遺構 なし。



第675図 II39号土坑出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第676図 II34号~39号土坑

II40号土坑 (第678図)

位置 G・H-9・10

形状と規模 平面は隅丸方形で、断面は台形状を呈する。底面は平坦。北東壁が崩落のため歪む。規模は2.3×1.8m、深さ63cmを測る。

方位 N-90°-E

遺物 なし。

重複遺構 146号・159号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II41号土坑 (第678図)

位置 E・F-11・12

形状と規模 平面は方形状とおもわれるが南西半は擾乱のため不明。断面は台形状を呈し、南東部にかけて次第に深くなる。規模は長さ2.5m、深さは80cmを測る。なお、北西部では段状の部分が見られるが、本来的には外傾する壁面と考えられる。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II42号土坑 (第678図)

位置 E-12

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は台形状を呈する。ビット状の掘り込みが重複していると考えられる。この新旧関係は不明。規模は1.2×1.0m、深さ54cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II43号土坑 (第678図)

位置 F-11

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は台形状を呈する。底面は凹凸がある。規模は1.7×1.3m、深さ56cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 169号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

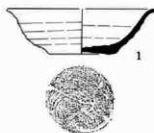
II44号土坑 (第677・678図 PL. 114)

位置 G-10・11

形状と規模 調査時に157号住居跡と命名されたが、検討の結果、土坑として扱うことになった。平面は西辺の長い方形状で、断面は台形状を呈する。壁は垂直に近く、底面はほぼ平坦。規模は3.3×2.7m、深さ44cmを測る。

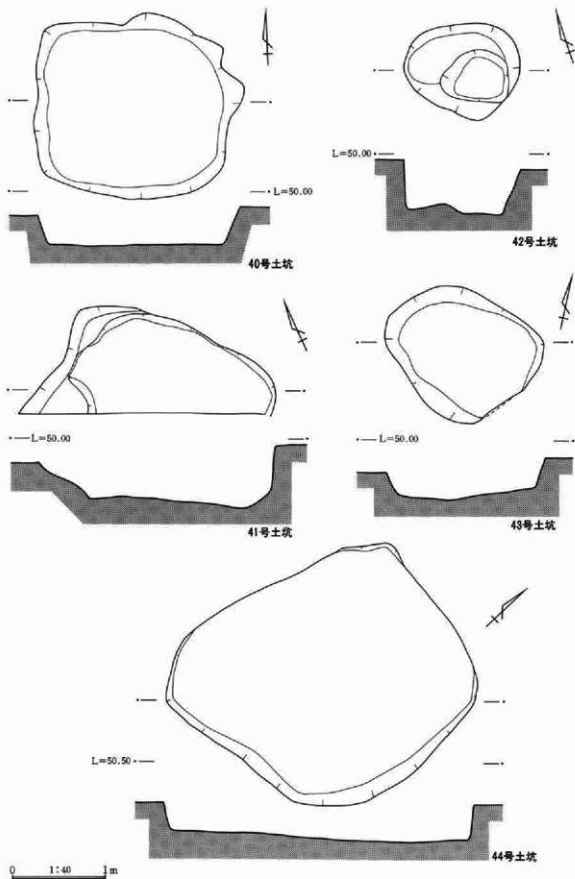
遺物 埋土から11世紀代と思われる杯が出土している。

重複遺構 162号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第677図 II44号土坑出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第678図 II 40号~44号土坑

II45号土坑 (第679図)

位置 G-11

形状と規模 平面は「無花果」形で、断面は皿状を呈し、底面はやや凹凸が見られる。また円形を呈する北東部隅にはピットが掘り込まれる。規模は3.2×1.8m、深さは42cm、ピット径0.6×0.5mを測る。

遺物 なし。

重複遺構 162号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II46号土坑 (第679図)

位置 I-10

形状と規模 平面は長方形で、断面は浅い台形状を呈する。規模は2.2×0.8m、深さ16cmを測る。

方位 N-116°-E

遺物 なし。

重複遺構 154号・156号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II47号土坑 (第679図)

位置 I-11・12

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は鐏鉢状を呈し、中位でテラス状の段をもつ。規模は径1.9×1.8m、深さ107cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II48号土坑 (第679図)

位置 G・H-13・14

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は浅い皿状を呈する。規模は1.4×1.0m、深さは27cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 42号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II49号土坑 (欠番)

II50号土坑 (第680図)

位置 K・L-18

形状と規模 平面は不整形円形と思われ、東半は不明。断面はV字状を呈する。規模は幅1.2m、深さ85cmを測る。2号土器集積遺構(第481図参照)の下位に位置し、この掘り込みとも考えられるが、土器の出土位置は本土坑がかなり埋没してから廃棄されたと推定される。

埋土の特徴 黒褐色土、灰色粘土、ロームが堆積し、その堆積状況から人為的埋土の可能性がある。

遺物 なし。

重複遺構 4号古墳と重複しており、これよりも古いと思われる。

II51号土坑 (第680図)

位置 K・L-19

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は碗状を呈する。規模は1.7前後×1.0m、深さ47cmを測る。1号土器集積遺構の下位から検出されたが、ここでの遺物出土レベルから本土坑の大半が埋没した後の投棄と思われる。

埋土の特徴 黒褐色土と灰褐色土が堆積し、ローム粒を多く含む。

遺物 なし。

重複遺構 4号古墳と重複し、これよりも新しい。

II52号土坑 (第680図)

位置 L-19

形状と規模 平面は不整形丸方形で、断面は台形状を呈する。底面は平坦。規模は1.6×1.1m、深さ40cmを測る。

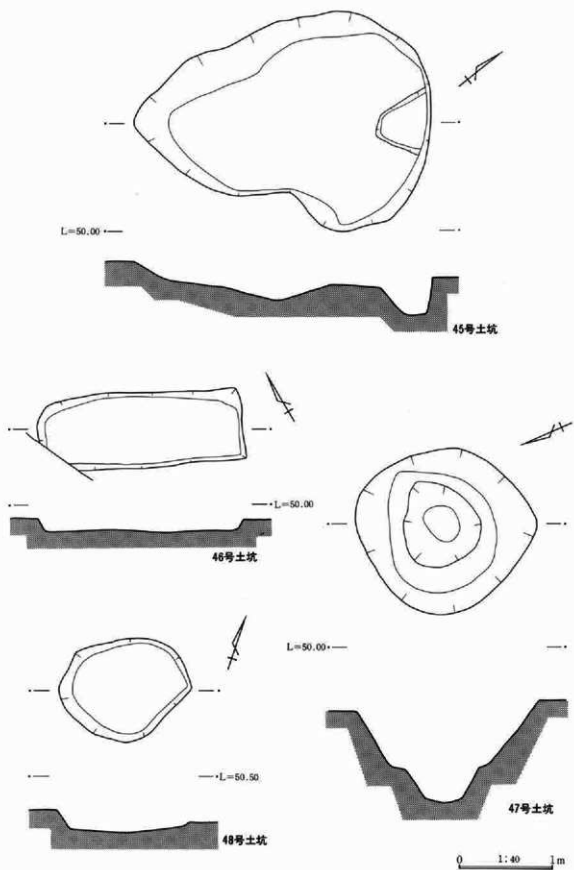
遺物 なし。

重複遺構 4号古墳と重複するが、新旧関係は不明。

II53号土坑 (第680図)

位置 L-20

形状と規模 平面形と規模は不明。深さは70cm前後



第679図 II45号～48号土坑

を測る。

埋土の特徴 黒褐色土とロームの混合土からなる。

人為的埋土の可能性がある。

遺物 なし。

重複遺構 4号古墳、54号土坑と重複し、4号古墳より新しく、54号土坑より古い。

II54号土坑 (第680図)

位置 L-20

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は台形状を呈する。底面はやや凹凸が見られる。規模は長さ2.1m、深さ75cmを測る。

埋土の特徴 黒褐色土が主体で、ローム粒を多く含む。

遺物 なし。

重複遺構 4号古墳、53号土坑より新しい。

II55号土坑 (第681図)

位置 C-21

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は1.4×0.8m、深さ28cmを測る。

方位 N-90°-E

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II56号土坑 (第681図)

位置 D・E-20・21

形状と規模 平面は円形で、断面はやや上方に開く筒状を呈する。規模は径1.0m、深さ123cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 21号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II57号土坑 (第681図)

位置 E-20

形状と規模 平面は方形と思われる。断面は台形状

を呈する。規模は幅1.4m、深さ33cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 2号溝と重複しており、新旧関係は不明である。

II58号土坑 (第681図)

位置 C-23

形状と規模 平面は方形と円形を複合せた形状で、断面は台形状だが、南側の円形部分に傾斜する。北半の底面は平坦。規模は2.9×1.7m、深さ75cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 23号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II59号土坑 (第681図)

位置 E・F-22

形状と規模 平面は長方形で、断面は浅い台形状を呈する。規模は2.4×0.7m、深さ26cmを測る。

方位 N-10°-E

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II60号土坑 (第681図)

位置 E・F-23・24

形状と規模 平面は長方形で、断面は台形状を呈する。規模は1.9×1.0m、深さ24cmを測る。

方位 N-3°-E

遺物 なし。

重複遺構 5号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

II61号土坑 (第682図)

位置 I-23・24

形状と規模 平面は長方形で、断面は中央が浅くくぼむ皿状を呈し東辺に沿って溝状の凹みがある。規模は2.9×1.7m、深さ28cmを測る。

埋土の特徴 ロームを多く含んでおり、人為的埋土

第三章 検出された遺構と遺物



土層説明

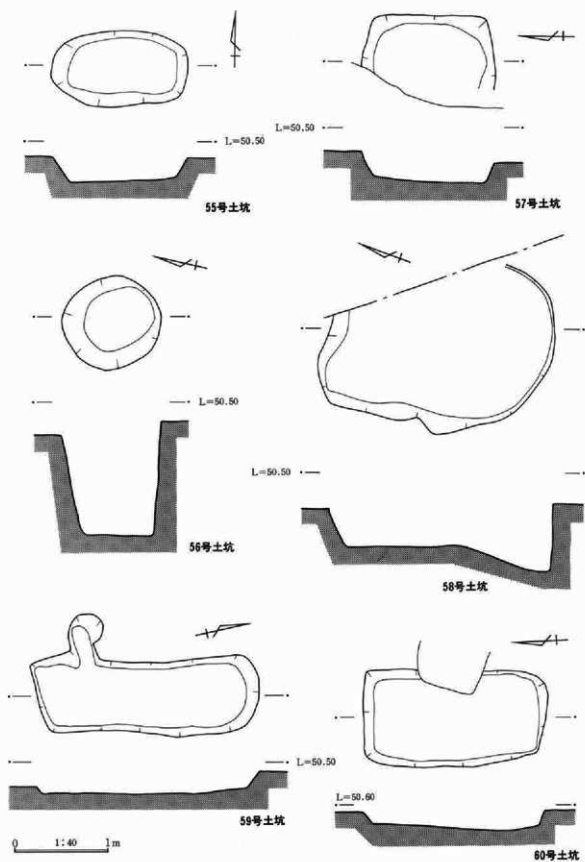
- 1 黄褐色土 ロームが主体。
- 2 黒褐色土
- 3 黄褐色土 ロームが主体。
- 4 灰色土 粘性あり。
- 5 黄褐色土 壁崩落土。

土層説明

- 1 黒褐色土 やや硬質。
- 2 黒色土 粘性あり。
- 3 黒褐色土 ローム粒をわずかに含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 5 黒色土 ローム粒を含む。
- 6 黒色土 ローム粒を多く含む。
- 7 黒褐色土 ロームを含み、ブロック状。
- 8 黒褐色土 ローム粒を多く含む。
- 9 黄褐色土 ローム粒と黒色土の混土。
- 10 黄褐色土 ロームが主体。

第680図 II50号～54号土坑

第12節 土 坑



第681圖 II 55号~60号土坑

第III章 検出された遺構と遺物

の可能性がある。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II62号土坑 (第682図)

位置 F・G-25

形状と規模 平面は円形と思われる。断面は台形状を呈する。規模は径2.1m、深さ60cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

II63号土坑 (第682図)

位置 H-25

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は台形状を呈する。底面は平坦。規模は2.3×1.8m、深さ35cmを測る。

埋土の特徴 ロームを多く含む黒褐色土が主体。

遺物 なし。

重複遺構 8号住居跡と重複しており、新旧関係は不明。

II64号土坑 (第683・684図 PL. 62)

位置 III区H・I-1・2

形状と規模 平面は不整形円形で、壁は北側が大きく開き、他は垂直か崩落でオーバーハングした部分が見られる。底面は小さな凹凸が見られる。規模は径4.1×3.7m、深さ88cmを測る。

埋土の特徴 下層にロームブロックが多く、壁の崩落あるいは人為的埋土と考えられる。上層は自然堆積だろう。

遺物 埋土下層から8世紀代末を主とする杯、甕の破片が出土している。

重複遺構 65号土坑と重複しており、これよりも新しい。

II65号土坑 (第683・685図 PL. 62・114)

位置 III区H-2

形状と規模 平面は不整形円形で、壁はほぼ垂直で、

底面はほぼ平坦。規模は径3.3×2.6m、深さ80cmを測る。64号土坑とともに粘土探掘坑の可能性もある。

埋土の特徴 ロームブロックやローム粒を含む層が主体で、中位には粘土ブロックも見られる。人為的埋土だろう。

遺物 底面から下層にかけて8世紀代末～9世紀初頭を主とする杯、甕が出土している。重複する別遺構に伴う可能性が高い。

重複遺構 64号・67号土坑と重複しており、これらよりも古い。

II66号土坑 (第683図)

位置 III区G-1・2

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は上方に開く筒状を呈する。底面は比較的平坦。規模は径1.3×1.1m、深さ105cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 67号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

II67号土坑 (第683・686図 PL. 62・114)

位置 III区G・H-2

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は上方に開く筒状を呈する。規模は径1.3×1.2m、深さは160cmを測る。井戸の可能性もある。

遺物 埋土の下層から8世紀代の杯が出土する。重複遺構 65号・66号土坑と重複しており、65号土坑より新しい。

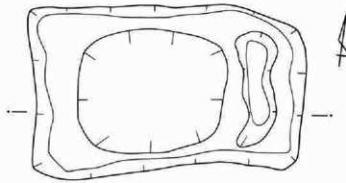
II68号土坑 (第687図)

位置 J-25

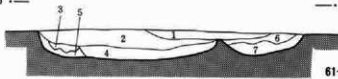
形状と規模 平面は隅丸長方形であるが、3基のビットが重複した可能性もある。規模は1.4×0.8m、深さ110cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。



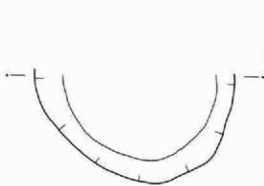
L=50.80



61号土坑

土層説明

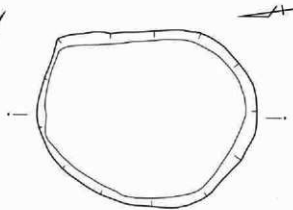
- | | | | |
|--------|---------------|--------|------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒を含む。 | 5 黒褐色土 | ロームブロックを多く含む。 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロックを含む。 | 6 暗褐色土 | ローム粒を多く含む。 |
| 3 暗褐色土 | | 7 暗褐色土 | ブロック状褐色土とロームの混土。 |
| 4 暗褐色土 | ロームブロックを多く含む。 | | |



L=51.00



62号土坑



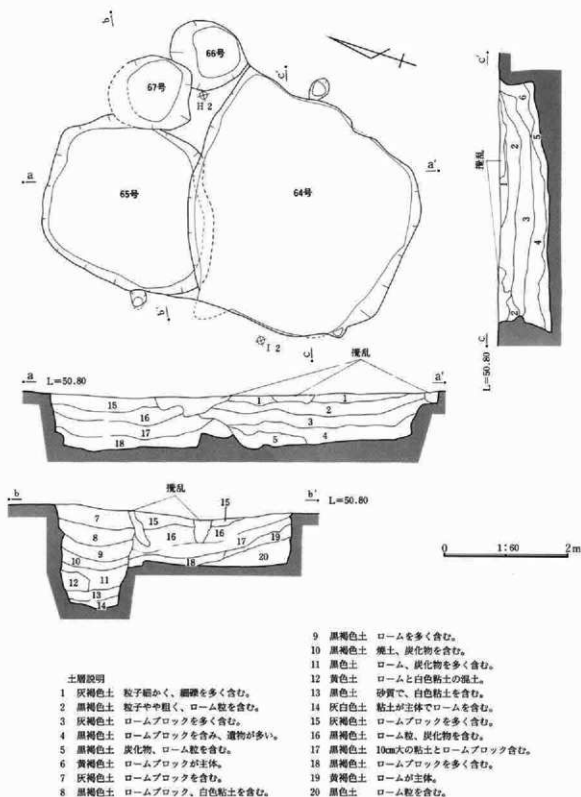
L=51.00



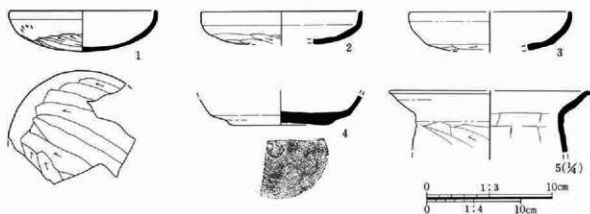
63号土坑

0 1:40] m

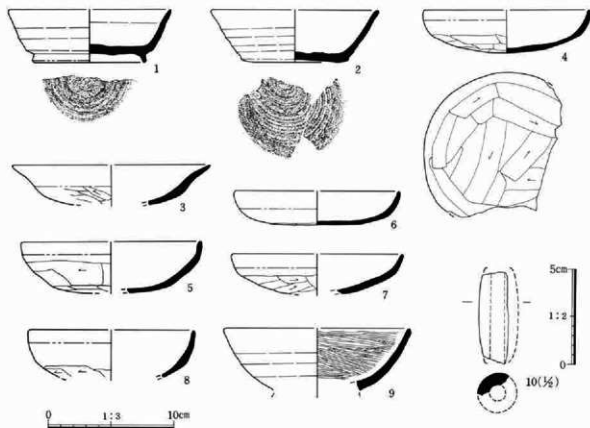
第三章 検出された遺構と遺物



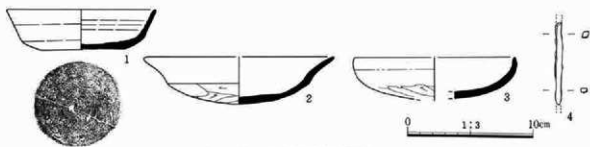
第683図 II64号～67号土坑



第684圖 II 64号土坑出土遺物



第685圖 II 65号土坑出土遺物



第686圖 II 67号土坑出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物

II69号土坑 (第687図)

位置 E-8

形状と規模 平面は楕円形で、断面は浅い台形状を呈する。規模は径0.7×0.6m、深さ20cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 150号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II70号土坑 (第687図)

位置 F-8

形状と規模 平面は楕円形と思われ、断面は浅い台形状を呈する。規模は短径0.6m、深さ12cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 150号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

II71号土坑 (第687図)

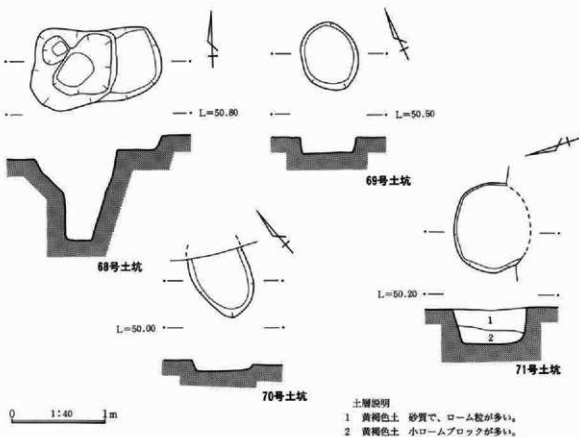
位置 F-10

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。

底面はやや中央がくぼむ。規模は径0.9m、深さ42cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 153号住居跡と重複し、これよりも新しい。



第687図 II68号～71号土坑

Ⅲ1号土坑 (第688図)

位置 C・D-3・4

形状と規模 平面は円形と思われ北半は不明。中央部に楕円形のピットが掘り込まれる。壁は外傾して断面は台形状を呈し、底面は平坦である。規模は径3.1m、深さ57cmを測る。ピットは径0.5×0.4mで底面から更に深さ32cmで掘りこまれる。また南壁際に小規模なピットが掘り込まれているが、本土坑に伴うとの確認はできなかった。

埋土の特徴 全体に黒色土とロームブロックの混土で、中央部のピット内埋土も大差はない。

遺物 なし。

重複遺構 2号獨立柱建物跡、32号住居跡と重複し、これよりも古いと思われる。

Ⅲ2号土坑 (第688図)

位置 E-5

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は壁がほぼ垂直に立つ箱状を呈する。底面は平坦。規模は径1.3×1.1m、深さ68cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 14号・15号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

Ⅲ3号土坑 (第688図)

位置 F-3

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は台形状を呈する。底面は中央がややくぼむ。規模は径1.2×0.7m、深さ52cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 41号住居跡とわずかに重複しているが、新旧関係は不明である。

Ⅲ4号土坑 (第688図)

位置 H-3・4

形状と規模 平面は円形あるいは楕円形と思われるが、他遺構と重複するため形状と規模は確認

できなかった。断面は台形状を呈する。壁は一部オーバーハングする部分が見られる。底面はほぼ平坦。規模は径1.8m前後、深さ35cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 39号住居跡と重複しており、これよりも新しい。

Ⅲ5号土坑 (第689図)

位置 I-3・4

形状と規模 平面は円形で、断面は浅い台形状を呈する。規模は径1.5×1.2m、深さ25cmを測る。北側の壁際に径20cm前後を測る3基の小ピットが検出されたが、同時性は確認できなかった。

遺物 なし。

重複遺構 6号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

Ⅲ6号土坑 (第689図)

位置 I-3

形状と規模 平面は隅丸長方形で、断面は浅い台形状を呈する。底面はやや凹凸がある。規模は1.9×0.9m、深さ17cmを測る。

方位 N-150°E

遺物 なし。

重複遺構 5号土坑との新旧関係は不明。

Ⅲ7号土坑 (第689図)

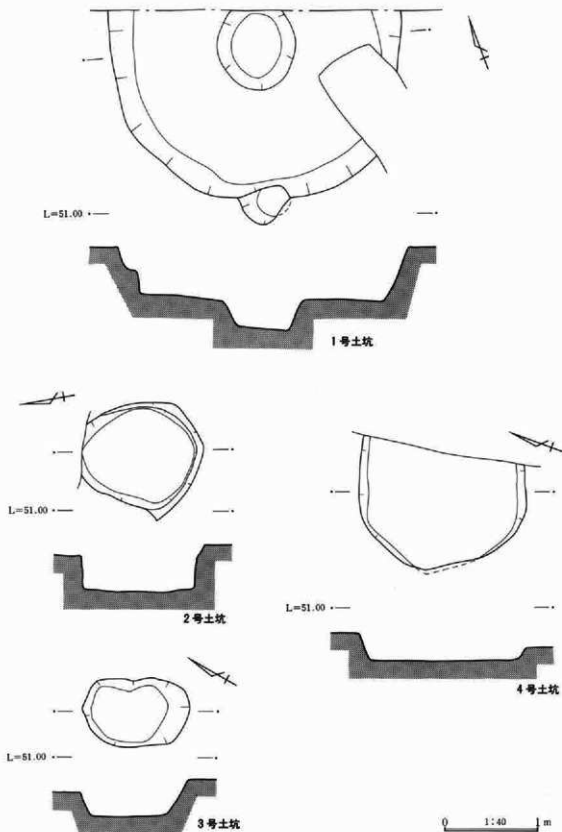
位置 H・I-3

形状と規模 平面「瓢」形で検出されたが、おそらく円形土坑2基の重複と思われる。大部分は削平されており底面だけが遺存する。規模は径0.7m前後、深さ10cmを測る。

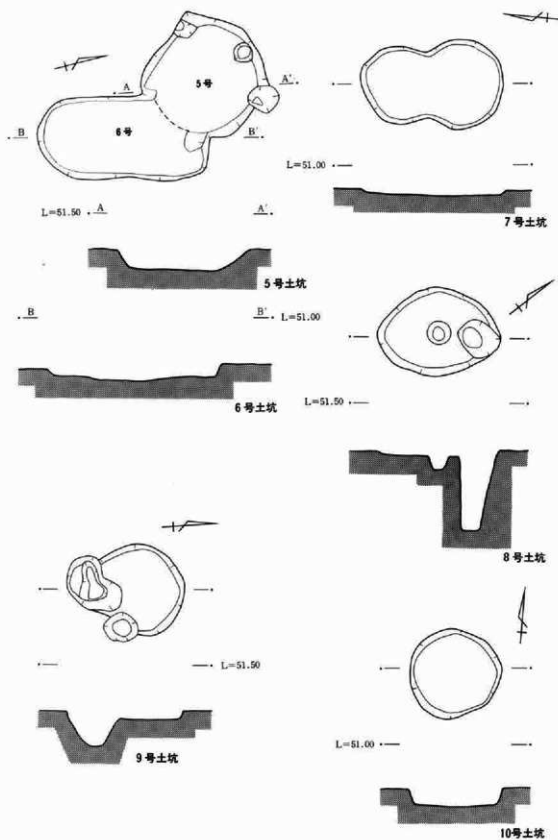
遺物 なし。

重複遺構 なし。

第III章 検出された遺構と遺物



第688図 III 1号~4号土坑



第689图 III 5号~10号土坑

第三章 検出された遺構と遺物

III 8号土坑 (第689図)

位置 I-3

形状と規模 平面楕円形で確認されたが、掘り込みはきわめて浅く、底面に2基のピットが検出された。規模は1.3×1.0m、深さ14cmを測る。中央部のピットは深さ15cm前後と浅い。北東隅のピットは深さ85cmを測る。ただしこれは本土坑と時期の異なる可能性がある。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

III 9号土坑 (第689図)

位置 I-2・3

形状と規模 平面は円形で、断面は浅い箱形を呈する。ピットが2基重複する。規模は1.3×1.0m、深さ14cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 ピットとの新旧関係は不明。

III 10号土坑 (第689図)

位置 I-2・3

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は径1.0m、深さ21cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

III 11号土坑 (第690図 PL. 62・114)

位置 I・J-4

形状と規模 平面は不整形円で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に1基、南北の両壁際に2基のピットが検出された。全体の規模は径2.1×1.9m、深さ37cmを測る。中央部ピットは径0.6m、深さ124cmを測る。壁際のピットは埋土の堆積状況から本土坑に伴う可能性が高い。規模は径30cm前後、深さ60cmを測る。

埋土の特徴 ローム粒を含む黒褐色土が堆積してお

り、堆積状況から埋没時点ではピットを含む土坑全体が開いていたと思われる。

遺物 埋土中位から7世紀代の杯を主とした土器片が多く出土している。本土坑が浅い凹みになった段階で投棄あるいは流入したと考えられる。

重複遺構 12号土坑と重複しており、これよりも新しい。

III 12号土坑 (第691図)

位置 I・J-4

形状と規模 平面は不定形で、断面は浅い台形状を呈する。底面はややくぼむ。規模は2.1×1.6m、深さ18cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 11号土坑よりも古い。

III 13号土坑 (第691図)

位置 K-4

形状と規模 平面は方形で、中央のやや北西寄りに小ピットが掘り込まれる。断面は台形状を呈する。規模は1.0×0.9m、深さ32cm、ピットは径22cmを測る。掘立柱建物跡の柱穴に近似するが、対応するピット列は確認されていない。

遺物 なし。

重複遺構 なし。

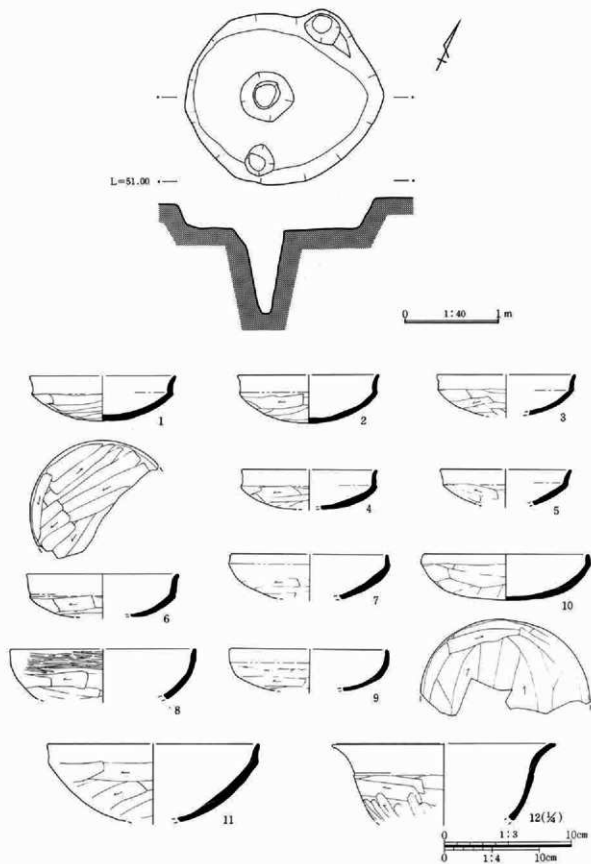
III 14号土坑 (第691図)

位置 L-4

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は楕円状を呈する。規模は径1.4×0.9m、深さ56cmを測る。

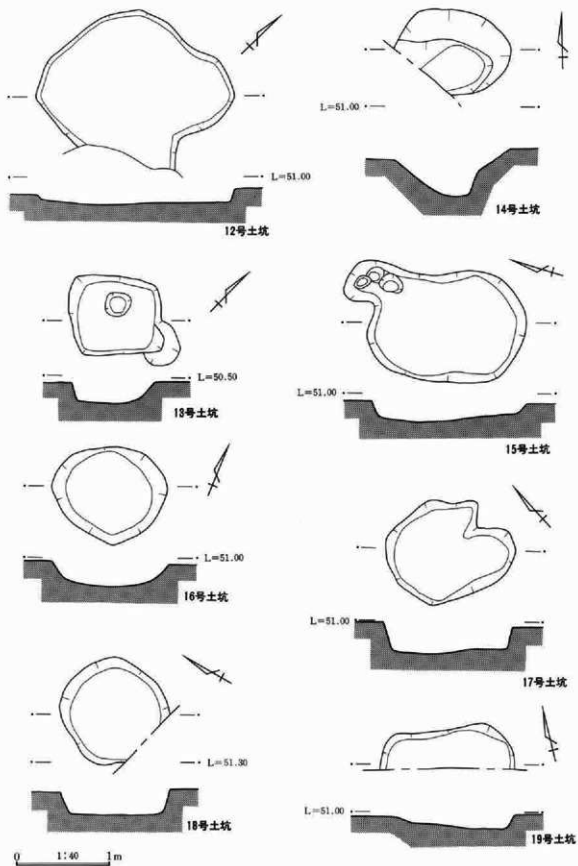
遺物 なし。

重複遺構 なし。



第690図 III11号土坑及び出土遺物

第三章 検出された遺構と遺物



第691図 III12号～19号土坑

III15号土坑 (第691図)

位置 D-8

形状と規模 平面は不整形円形で、北隅に小ピットが重複する。底面は凹凸があり、北側に緩く傾斜する。規模は径1.7×1.1m、深さ25cmを測る。

方位 N-163°-E

遺物 なし。

重複遺構 1号古墳と主体部付近で重複しており、新旧関係は不明であるが、これに付随する土坑の可能性もあろう。

III16号土坑 (第691図)

位置 D・E-8

形状と規模 平面は不整形円形で、断面は浅い碗状を呈する。規模は径1.2×1.1m、深さ26cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 1号古墳と主体部付近で重複しており、新旧関係は不明である。

III17号土坑 (第691図)

位置 E-8・9

形状と規模 平面は楕円形で東壁の一部が張り出す。断面は台形状を呈する。底面は不整で、凹凸が多い。規模は1.4×1.0m、深さ34cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 1号古墳と主体部付近で重複しており、新旧関係は不明である。

III18号土坑 (第691図)

位置 E-9

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は径1.2×1.1m、深さ27cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 1号古墳墳丘部と重複しており、新旧関

係は不明である。

III19号土坑 (第691・692図)

位置 F-10

形状と規模 平面は隅丸方形形状と思われるが、南半部は道路のため調査ができず規模、形状とも確認できなかった。断面は浅い台形状を呈し、底面は東側へやや傾斜する。規模は長さ1.4m、深さ42cmを測る。

方位 N-95°-E

遺物 埋土から古墳時代初頭の器台破片1点が出土するが、重複する47号住居跡に伴う可能性がある。

重複遺構 1号古墳周堀、47号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第692図 III19号土坑出土遺物

III20号土坑 (第693図)

位置 F-10・11

形状と規模 平面は隅丸長方形で、断面は浅い碗状を呈する。北東隅に小さな掘り込みが検出された。規模は1.2×0.9m、深さ20cmを測る。

方位 N-12°-E

遺物 なし。

重複遺構 なし。

III21号土坑 (第693図)

位置 E-11

形状と規模 平面は長方形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、北東側にやや傾斜する。規模は2.5×0.8m、深さ23cmを測る。

方位 N-15°-E

遺物 なし。

重複遺構 なし。

第三章 検出された遺構と遺物

III22号土坑 (第693図)

位置 F-11・12

形状と規模 平面は方形で、断面は台形状を呈する。

底面は平坦。規模は2.3×0.9m、深さ32cmを測る。また5基のピットが重複して検出されたが、本土坑との関係は不明。

方位 N-100°-E

遺物 なし。

重複遺構 23号土坑と重複するが新旧関係は不明である。

III23号土坑 (第693図)

位置 F・G-11・12

形状と規模 平面は隅丸長方形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は1.6×1.0m、深さ46cmを測る。

方位 N-98°-E

遺物 なし。

重複遺構 22号土坑とほぼ主軸を同じくして重複しており、連続して掘削されたものか。新旧関係は不明である。

III24号土坑 (第693図)

位置 G-12・13

形状と規模 平面はやや歪んだ長方形を呈し、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央に小さな凹凸が見られる。規模は1.6×1.0m、深さ53cmを測る。

方位 N-12°-E

遺物 なし。

重複遺構 28号住居跡と重複しており、これよりも新しい。

III25号土坑 (第693図)

位置 D-16

形状と規模 平面は円形で、断面は筒状を呈する。

底面は平坦。規模は径1.0×0.9m、深さ49cmを測る。本土坑は3号古墳周堀壁面から検出されており、本来の深さは1mを越えるものと推定される。

遺物 なし。

重複遺構 3号古墳と重複しており、新旧関係は不明である。

III26号土坑 (第693図)

位置 G・H-22

形状と規模 平面は不整楕円形あるいは隅丸方形を呈すると思われるが、掘り過ぎにより本来の形状と規模は不明瞭である。壁はほぼ垂直で、底面は平坦な部分が多いが、南西部では大きく傾斜するようである。また西隅で径30cmのピット1基が検出されたが、本土坑との関係は不明。単独の土坑ではなく重複する2号道路跡側溝の屈曲部分と関連する掘り込み(溝の掘り直し部分)の可能性がある。規模は最大長3.2m、深さ75cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 3号古墳、2号道路跡側溝と重複しており、新旧関係は確認できなかった。

IV1号土坑 (第694図)

位置 F-14・15

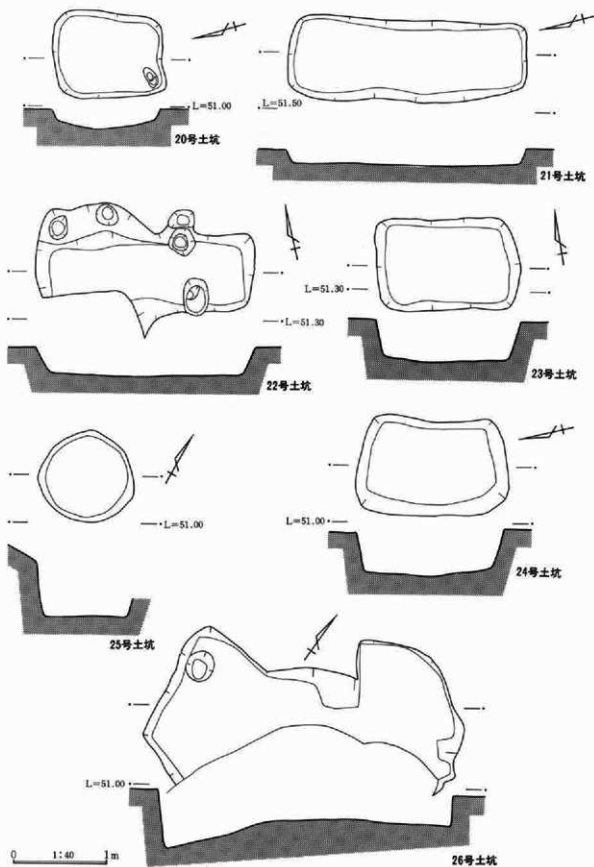
形状と規模 平面は円形で、断面は椀状を呈する。

規模は径1.2×1.1m、深さ32cmを測る。北東壁際に小ピット1基が検出されたが、本土坑との関係は不明。

遺物 なし。

重複遺構 11号古墳と周堀の中央で重複しており、新旧関係は確認できなかった。

第12節 土 坑



第693圖 III20号~26号土坑

第三章 検出された遺構と遺物

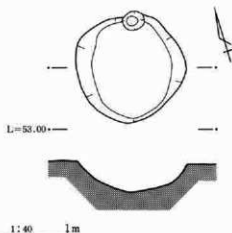
V1号土坑 (第695図)

位置 K-5

形状と規模 平面は円形で、ほとんど底面だけが検出されたのみで、壁は不明瞭。底面はほぼ平坦。規模は径1.5×1.4m、深さは最も遺存状態の良い部分で13cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 8号溝と重複しており、新旧関係は不明である。



第694図 IV1号土坑

V2号土坑 (第695図)

位置 J-9

形状と規模 平面は円形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は径1.1×1.0m、深さ23cmを測る。重複する8号古墳の墳丘に掘り込まれたとすれば、深さは1m近いと推定される。

遺物 なし。

重複遺構 8号古墳と墳丘部西側で重複しており、新旧関係は確認できなかった。

でピット2基が検出されたが、伴うものか否か不明。

方位 N-170°-E

遺物 なし。

重複遺構 5号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

V3号土坑 (第695図)

位置 G-19

形状と規模 平面はやや歪む長方形で、断面は深い箱状を呈する。壁はほぼ垂直で底面は凹凸が多い。断面形から掘り直した可能性もある。規模は1.7×0.8m、深さ107cmを測る。

方位 N-150°-E

遺物 なし。

重複遺構 3号方形竪穴遺構、倒木痕跡と重複しており、新旧関係は不明である。

V5号土坑 (第695図)

位置 J-23

形状と規模 平面は溝状の長方形で、断面は箱状を呈する。底面はほぼ平坦。北端部に径20cm、深さ20cmのピットが伴う。規模は幅0.4m、深さ27cmを測る。

方位 N-172°-E

遺物 なし。

重複遺構 4号土坑と重複するが、西壁を同じくする点や、底面がほぼ同レベルであることから、関連遺構の可能性もある。

V4号土坑 (第695図)

位置 J-22・23

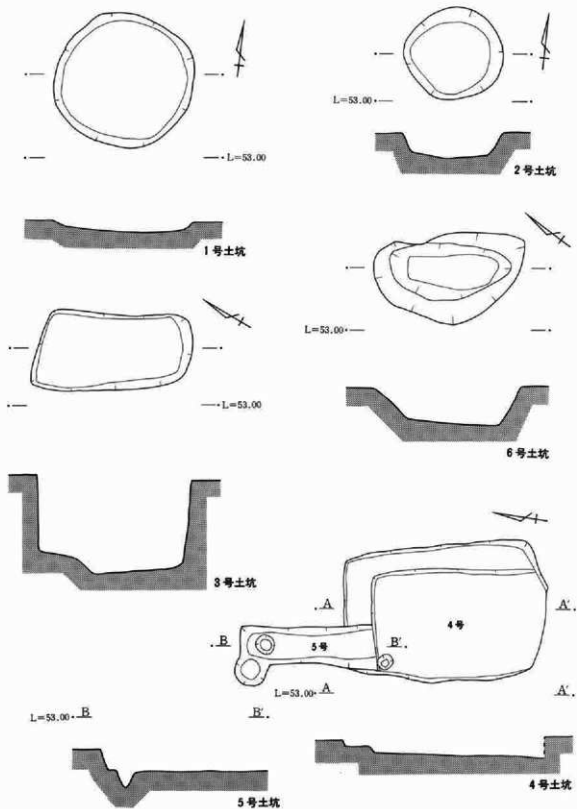
形状と規模 平面は長方形で、断面は浅い箱形状を呈する。北及び東側は幅25cm前後、底面からの高さ8cmほどのテラスがある。規模は2.1×1.4m、深さ24cmを測る。また南東と北西の隅

V6号土坑 (第695図)

位置 L-21

形状と規模 平面は不整楕円形で、断面は台形状を呈する。底面は小規模だがほぼ平坦な面が見られる。規模は径1.6×1.0m、深さ43cmを測る。

方位 N-143°-E



0 1:40 m

第695圖 V 1号~6号土坑

第三章 検出された遺構と遺物

遺物 なし。

重複遺構 なし。

V7号土坑 (第696図)

位置 L-21・22

形状と規模 平面は長方形で、断面は浅い台形状を呈する。底面は平坦である。規模は2.4×1.3m、深さ38cmを測る。

方位 N-80°-E

遺物 なし。

重複遺構 なし。

V8号土坑 (第696図)

位置 L-23

形状と規模 平面は長方形で、底面付近のみ検出された。底は浅い皿状を呈する。中央部分は溝と重複するため不明瞭。規模は2.4×1.2m、深さ25cmを測る。

方位 N-157°-E

遺物 なし。

重複遺構 1号溝、10号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

V9号土坑 (第696図)

位置 K-23

形状と規模 平面は比較的整った長方形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦である。規模は2.0×1.2m、深さ30cmを測る。

方位 N-81°-E

遺物 なし。

重複遺構 1号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。

V10号土坑 (第696図)

位置 K・L-23

形状と規模 平面は長方形と思われるが、底面付近のみの検出で全体の形状は不明瞭。底面はほぼ平坦。規模は(2.0×1.0)mを測る。

方位 N-79°-E

遺物 なし。

重複遺構 8号・11号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。また9号土坑とは主軸方向を同じくして縦列しており、連続して掘削された可能性がある。

V11号土坑 (第696図)

位置 K-23

形状と規模 平面は長方形で、断面は台形状を呈する。規模は1.9×0.5m、深さ16cmを測る。

方位 N-88°-E

遺物 なし。

重複遺構 13号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

V12号土坑 (第696図)

位置 K-23

形状と規模 平面は溝状の長方形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は3.2×0.5m、深さ49cmを測る。

方位 N-85°-E

遺物 なし。

重複遺構 13号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。

V13号土坑 (第696図)

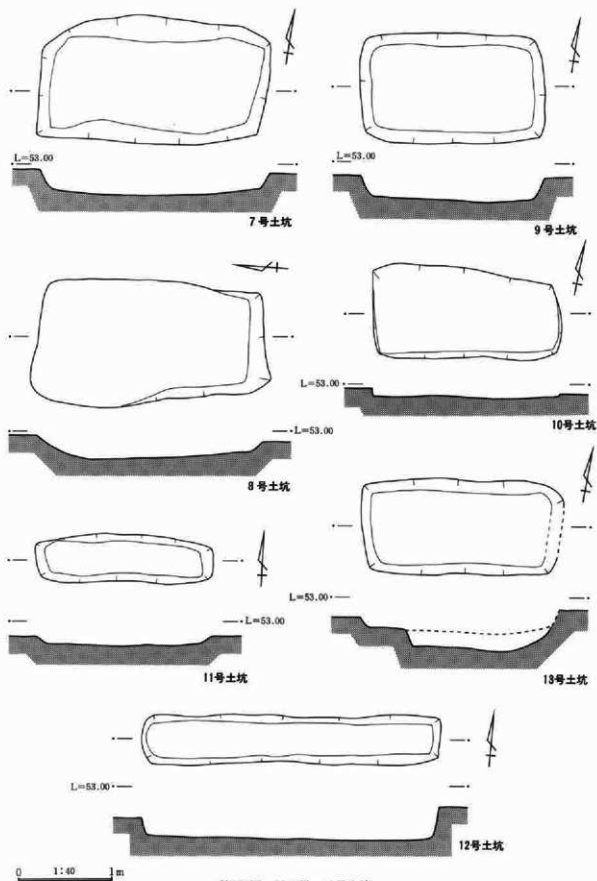
位置 K・L-23

形状と規模 平面は長方形で、断面は台形状を呈する。東半は掘り過ぎのため底面が不明確。規模は2.1×1.0m、深さ25cmを測る。

方位 N-79°-E

遺物 なし。

重複遺構 11号・12号土坑と重複しており、新旧関係は不明である。



第696图 V 7号~13号土坑

VI1号土坑 (第697図)

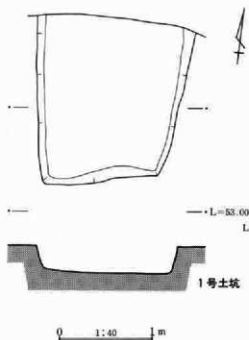
位置 D・E-7・8

形状と規模 平面は長方形と思われるが、北半は溝と重複するために形状と規模を確認できなかった。断面は浅い箱形を呈する。規模は幅1.4m、深さ76cmを測る。

方位 N-163°-E

遺物 なし。

重複遺構 7号溝と重複しており、新旧関係は不明である。



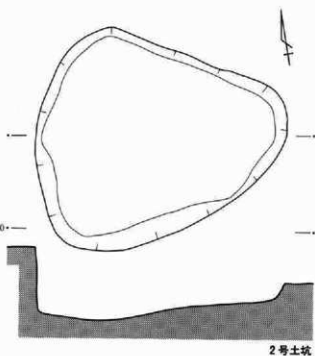
VI2号土坑 (第697図)

位置 E・F-11

形状と規模 平面は不整楕円形で、壁はほぼ垂直で、底面は不整で西側が低い。規模は径2.6×2.4m、深さ70cmを測る。

遺物 なし。

重複遺構 6号溝と重複しており、新旧関係は不明である。



第697図 VI1号・2号土坑

VII1号土坑 (第698図)

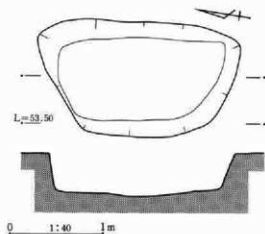
位置 H-1

形状と規模 平面は不整楕円形で、断面は台形状を呈する。底面はほぼ平坦。規模は2.1×1.2m、深さ63cmを測る。

方位 N-172°-E

遺物 なし。

重複遺構 4号住居跡と重複しており、新旧関係は不明である。



第698図 VII1号土坑

第13節 遺構外の遺物

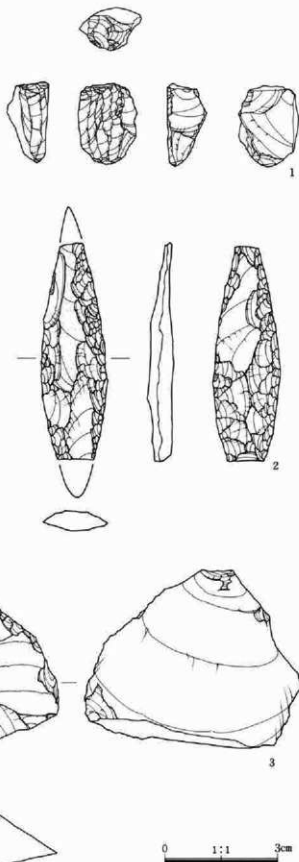
(1) 旧石器～縄文時代の石器 (PL. 115)

旧石器時代 台地縁辺から100～120mほど内側の地点で、細石刃核1点(第699図1)が出土している。やや厚手の素材を石核に用い、石核正面から左側の範囲を集中して剥離している。丁寧な調整剥離が打面を覆い、剥離作業の進行に伴い打面調整を繰り返していた可能性が高い。打角は直角に近く、微細な加工で打角を調節するには限界に達している。断面楕状に近い石核形状を呈し、「矢出川タイプ」の石核に似る。平安時代の住居(Ⅱ区・144号)の埋没土中より出土したため、本来の出土層位は不明だが、As-YPより下位の層序に含まれていた可能性が高い。黒味の強い黒曜石を用いる。4.0g。

なお、この石核には光沢の強弱が存在している。作業面に比べ、石核素材の裏面と表面の一部が摩耗してより光沢が弱い。この光沢の強弱が石核素材を獲得してから以後生じたのか、角礫を石核素材に使用したため光沢の強弱が生じているのか不明だが、裏面に礫面を残す石核が「矢出川タイプ」の石核が多く存在することから、後者の可能性を想定しておきたい。

この他、この時代に所属する可能性の強い石器が2点出土している。第699図2は石器表面の一部に礫面を残す縦長剥片を素材に用い、製作した槍先形の尖頭器である。丁寧な平坦剥離で素材剥片の周辺を加工する他、裏面基部には全面を覆う剥離を加えている。先端・基部を欠損する。

頁岩。4.2g。Ⅱ区出土。



第699図 旧石器時代の石器

第699図3は幅広の剥片を素材に用い、左右の側縁に微細な加工を施す。石器石材は珪質頁岩を使用しており、この石材が県内にはないこと、草創期段階の石器を除き、この石材は縄文石器には余り使用されないこと、より丁寧に刃部を作出していることなどから、旧石器段階の石器に所属する可能性が高い。調査段階に石器下端を欠損する。36.8g。

縄文時代 39点の石器が出土している。半数以上が古墳時代以後の遺構の埋没土中から出土している。本来の出土位置は不明だが、各区から満遍なく出土する傾向を示す石鏃を除き、Ⅱ区から出土した石器が多く、こうした石器の分布傾向は土器の分布傾向に一致する。全体に打製石斧や削器が多く、剥片や砕片は概して少ない。

第700図1～5は楕形の打製石斧である。うち、4点が欠損しており、1・2は刃部を、3・5は器体上半を欠損している。刃部形状は、3が円刃・4が偏刃・5が直刃で、多様性に富む。石器石材は、1が灰色安山岩(78.7g)・2が黒色頁岩(39.7g)・3が粗粒安山岩(59.8g)・4が粘板岩(131.5g)・5が細粒安山岩(47.5g)を用い、刃部形状と同様に多様性に富む。6・8の2点は、分銅状を呈す打製石斧である。6は器体中央で節理より破損している。左側縁は抉れ、右側縁は直線的である。やや硬質の片岩を素材に使用する。196.0g。8は完成状態の形状を良く留めている。上下両端の刃部は若干凹状に抉れ、全体に摩耗が激しい。フォルンフェルス素材に使用する。304.4g。7・9の2点は短冊状を呈す打製石斧である。7は大形剥片を石器素材に用い、礫面を石器基部に残す。表裏両面に及ぶ加工は全体に粗く、側縁の「潰れ」も確認できないなど完成状態には遠い。石器上端・左右の側縁には「抉り」を作出していること、刃部は尖り、その主体的機能部は左右側縁に想定され、本来打製石斧から分離して扱えるべきものかもしれない。黒色頁岩。174.8g。9は表裏両面に礫面を残し、棒状の礫を素材に用い、周辺を加工して石器を作出している。側縁の「潰れ」も顕著で、刃部角度も厚く、刃部の再生も

著しい。粗粒安山岩。168.2g。

第701図10～13は石鏃を一括した。4点とも丁寧に加工され、完成状態を示している。1点(10)を除き、3点は茎を持ち、11・13の2点は「返し」が発達した基部形状を作出している。石材・重量・出土位置は10がチャート(1.14g・Ⅵ区)、11が珪質頁岩(1.05g・Ⅲ区)、12がチャート(1.70g・Ⅵ区)、13が黒色頁岩(1.97g・Ⅳ区)で、各区から出土している。

第701図14・15は削器を一括した。2点とも器体の中央付近で欠損している。14は横長の剥片を素材に、周辺に加工を施し、剥片端部に刃部を作出している。素材剥片の打面を粗く加工して除去している。黒色頁岩。20.9g。15は幅広の剥片を素材に周辺を粗く加工して、刃部を作出している。黒色頁岩。3.4g。

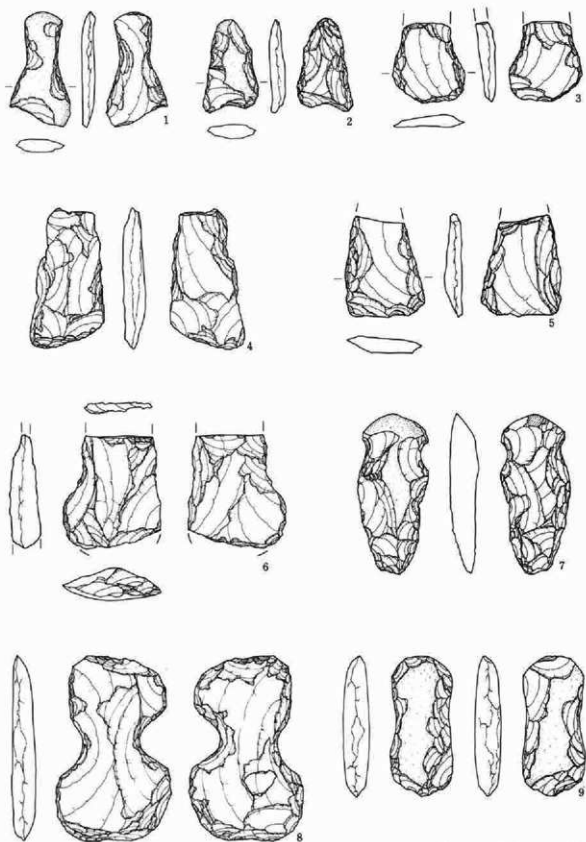
第701図16～22は加工痕ある剥片を一括した。Ⅱ区に多く出土している。その加工状態は剥片の縁辺を粗く加工しており、縦長剥片の場合には左右の側縁を、横長剥片の場合には剥片端部を加工する傾向が指摘されよう。特定の形態の石器を作出する意図は看取されない。

第701図23～25は使用痕ある剥片を一括した。Ⅱ区に多く出土している。剥片の形状は様々だが、使用に耐える形状の良好な剥片を選択している。

第702図26・28は石核を一括した。26は棒状の礫面を素材に用い、礫面を打面に小口部分から連続して剝離を行う。やや幅広の剥片を作出する。Ⅴ区出土。黒色頁岩。456.1g。28は板状剥片を石核素材に用い、その上下両端から剝離を行い、やや小形の剥片を作出する。出土位置不明。チャート。22.9g。

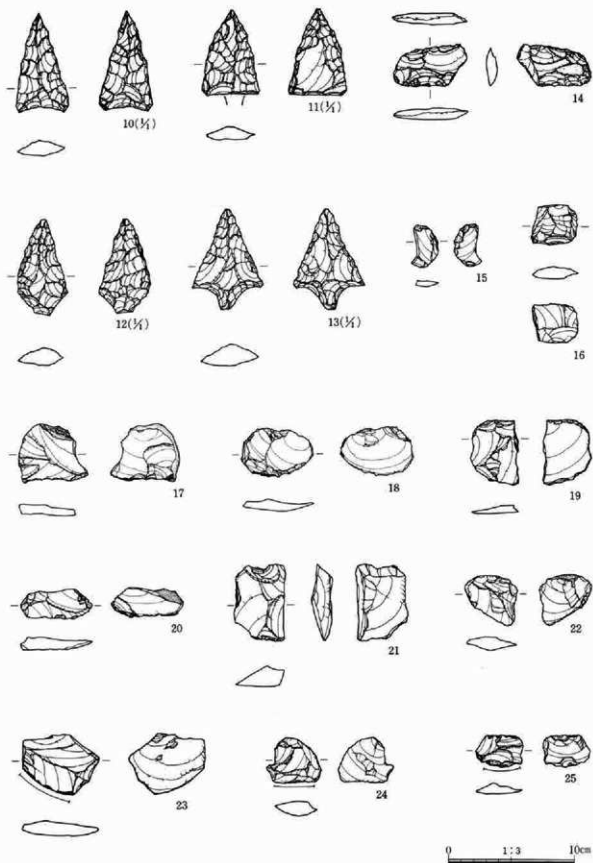
第702図27・30～35は剥片を一括した。石器石材は採集してきた9点全部が黒色頁岩で、剥片は礫面を打面に剝離され、良好な形状の剥片が多い。

第702図36は撻切石斧で、Ⅱ区146号住居の埋没土層より出土した。側縁には段ズレが観察され、特に、右側縁の段ズレは著しい。石器は全体が丁寧に研磨され、全面に条痕が存在している。石器表面の一部が熱で剝落している。砂岩。253.1g。(岩崎泰一)

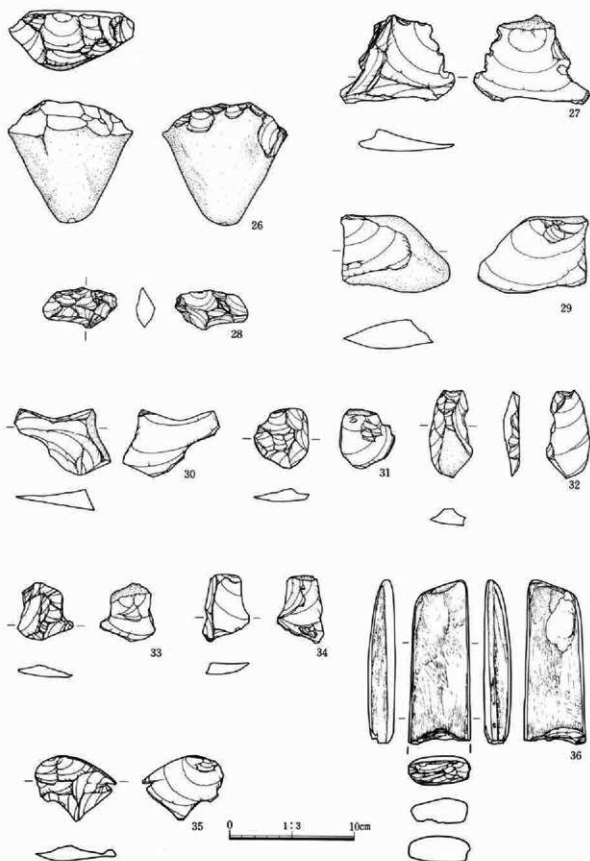


第700図 縄文時代の石器(1)

第三章 検出された遺構と遺物



第701図 縄文時代の石器(2)



第702図 縄文時代の石器(3)

(2) 縄文時代の耳飾と土器

縄文時代の遺物は土器、石器類が散発的に出土したのみで、住居・土坑などの遺構については存在しない。各遺物は古代住居、溝、井戸等の埋没土中から出土したもので、土器類についてはいずれも小片であり器形の復元できる資料は得られていない。

出土した縄文土器については、表3の縄文土器集計表に示した通りである。時期的には早期後半から後期にわたるもの各期とも量的には少ない。また、土器以外の土製品としては第703図に示す玦状耳飾が出土している。

玦状耳飾 (第703図 PL. 116)

形態から見て土製の耳飾と考えられる。推定径は7.5cm程度とやや大型品であり、体部の1/3が残存する。両端が欠損するため、切目の存在は確認できない。胎土は緻密であり砂粒の他に輝石粒が目立つ。整形は丁寧で滑らかな面をもつ。断面形は三角形を呈し外側は平坦面となり、両端に低い段が形成される。色調は全体的に橙褐色を示し、塗彩の有無は不明である。

縄文土器 (第704図 PL. 116)

土器については、型式ごとにその概要を示していきたい。

野島式土器 (第704図1~4)

全てII区から出土し、文様・胎土等類似しており接合関係はないものの、同一個体も含まれる。1は波状口縁部片。断面三角形の縁線が貼付される。波頂部には刻目に加えられ、器内外面には幅広の条痕文が施される。胎土には繊維を含む。

諸磯a式土器 (第704図5~8)

5は口縁部片で、半截竹管により弧状文が施され縄文はR L横位に加えられる。6~8は3~4本単位の櫛歯状工具による波状文が施される胴部片である。いずれも波状文上に円形文を縦位に加え、縄文は認められない。

浮島式土器 (第704図9)

出土区は不明であるが、浮島式土器が1点出土し

ている。

五領ヶ台式土器 (第704図10)

II区から1点検出された。平行線文間に弧状刺突文が加えられる口縁部小片である。

勝坂式土器 (第704図11~13)

VI区から4点検出された。11は眼鏡状把手部で縁辺に刻目を加える。12は内湾する口縁部片で連続刺突文により文様構成する。13は頸部片であり、接合部はないものの同一個体とみられる。

加曾利E3式土器 (第704図14~16)

I区~VI区にかけ出土し、計10点検出された。全て胴部片であり、14・15はR L縦位、16はL R縦位の縄文が施される。

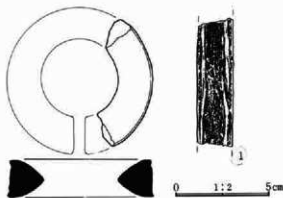
堀之内I式土器 (第704図17~20)

図に示す4点が出土している。17は波状口縁でL R縦位、18もL R縦位が施される。19は浅鉢の口縁部とみられる。20は突起下に刺突が加えられる。

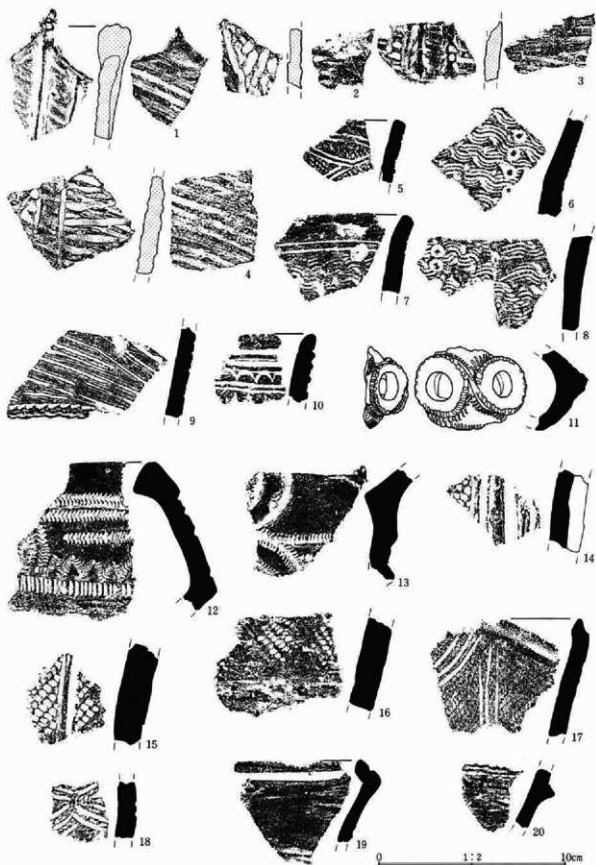
(原 雅信)

表3 縄文土器集計表

時期	型式	調査区					計	
		I	II	III	IV	VI		
早期	朱竈土器	5					5	
前期	縄文土器	1 1 1					3	
	諸磯式	1	10	2 (浮島1)			13	
中期	勝坂式	(五領ヶ台1)					4	
	加曾利E3式	2	3	2	2	1	10	
後期	堀之内I式	3					1	4
不明	不明	(出土区不明1)					1	2
計		3	23	3	7	5	42	



第703図 遺構外出土玦状耳飾



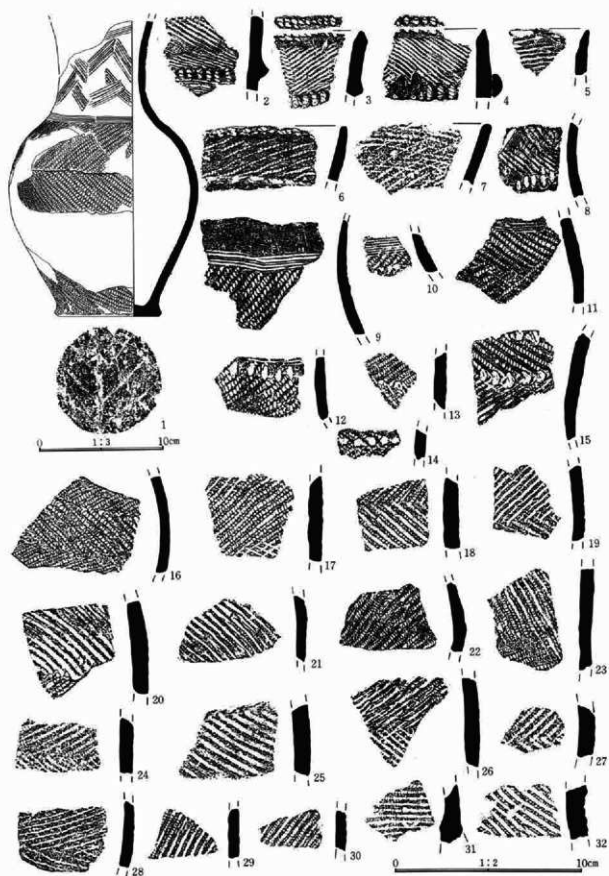
第704図 遺構外出土縄文式土器

(3) 弥生時代～古墳時代初頭の遺物
(第705～709図 PL. 117～119)

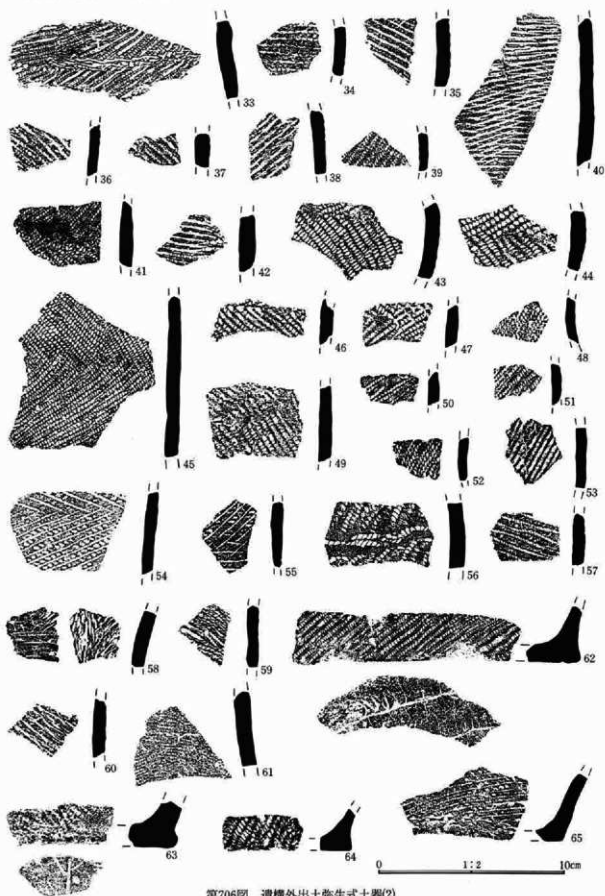
本遺跡から、後期弥生式土器が300点程出土しており、そのうち8割程の遺構に伴わないと判断されたものは遺構外出土遺物としてここで扱う。また古墳時代初頭に属する外来系土器についても取り上げたい。

第705～708図の1～128は縄文施文、第708・709図の130～160は櫛描文を施したものである。外来系土器はこれと別に第710・711図に掲げた。ほとんどが部分的な小破片であることから、文様の特徴で分類しており、特に型式毎の図示は行っていない。1は小形甕で、口縁部を欠くが器形と全体の文様構成が判明した唯一の好例である。器形は頸部が細長く直立し、最大径がやや上位にある長胴で、底部が大きく外側にやや開くのを特徴とする。全体観が細長く感じられるが、これは頸部から底部までの外面全体に施文することと不可分の関係にあるためだろう。文様は櫛描直線文を境にして頸部に櫛描山形文、胴部に羽状縄文を施すもので、縄文原形は単節である。これらの特徴からいわゆる「二軒屋式」(型式として認定するにはまだ十王台式との対比分析が不十分と思われるが、いずれ栃木県内を主分布地とする一型式として定立されるべきと考えるため、ここでは便宜的に栃木県に特徴的な後期弥生式土器の一群として扱いたい。)の範疇で捉えらえるものである。2～3は下位に隆起帯を付して複合口縁を形成するもので、非常に細かい原形付加条第1種による羽状構成の縄文を施す。4には2個1対の瘤状突起(浮文)を付す。9～12は頸部から胴上部にかけての部分で、1と同様に屈曲する位置に横位の櫛描直線文を描いて境とし、これ以下に縄文を施す。13～42は付加条第1種を用いて施文した頸部、胴部破片で、羽状縄文が多く、おそらく16のように数段の横位構成をとると思われる。原形の付加条はすべて2本で、その圧痕は軸縄が明瞭に印される場合(16～18)と付加した縄が深く印され、軸縄はわずかに見えるか

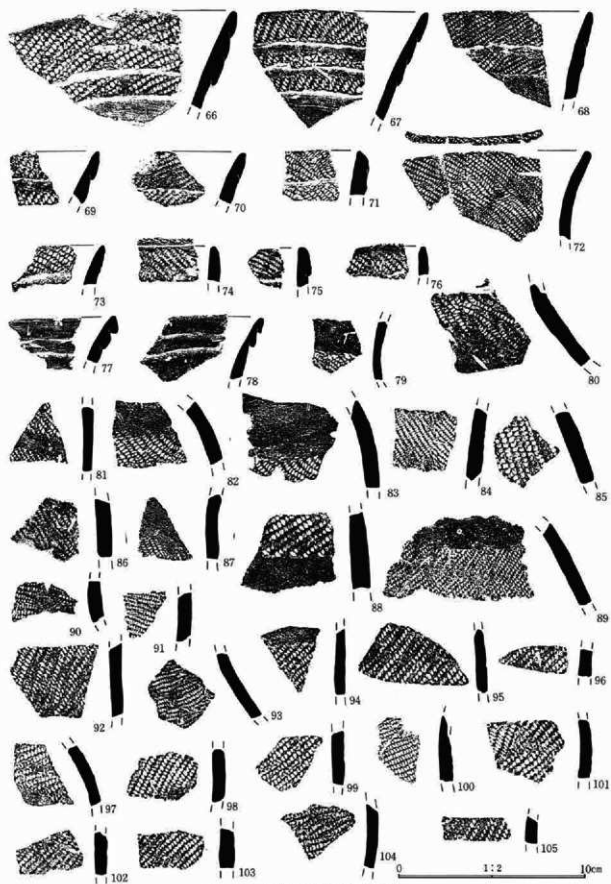
不明瞭なもの(19～21・24～42)がある。いずれも付加条と軸縄の幅がほぼ均等であるため、この高低差があまりない場合は単節縄文と見まがう部分もある(22・23)。また単節を用いた羽状縄文も見られる(1・43～49)が、少数である。なお45は付加条あるいは直前段3条の可能性がある。付加条第2種を用いたのはわずかに3点(54・55・65)であった。58は小破片で部位不明だが、細い反摺りの原形を表裏に押捺したもので類例を多く知らない。62～65の底部は外面に縄文を施しており、1と同様に外にやや張り出す形状が特徴である。第707図は単節斜縄文を施した一群である。66～71、73～76は口縁に粘土帯を装飾的に重ねて施文するもので、72は単口縁で頸部まで施文するらしい。77と78は無文であるが同系統の壺と考え、ここに図示した。頸部から胴上部にかけての部分は、縄文が横位帯状に施され無文部分を残すものが多い(79～83・87～89・94)。106～117は複節あるいは複々節の破片で、これらも無文部を残す帯状施文が見られる(106・107・113・117)。126～128は非常に細かい単節の原形を用いて単位の小さな羽状縄文を施しており、第706・707図の一群とは異質である。130～160は櫛描文を施した部分で、130～132は口縁部、133～160は頸部～胴上部にあたる。波状文か連弧文が主文様で、直線文か帯状文がこれと組み合わせる。施文具は130～156が櫛第I種で、157～160が櫛第II種である。櫛歯は134のように太く本数の少ないものは1例のみで、概ね8～10本の細かいものを用いる。最も多い櫛状具I種を用いた波状文は、すべて「回転運動を利用して描く」I種であるが、表現上の差異から大きく2類に分けられる。ひとつは波形が波長、振幅ともに大きく、単位文様同士の間隔をややあけるもの1類(130・139・142・144～148)で、他方は波形が小さく、単位文様を比較密に重ねて施文するもの2類(131・132・136・137・152)である。櫛状具第II種を用いた157～160は、スリット縦区画文と充填波状文をもつ1群として他とは分別される。これらを既知の型式と照合させると以下のようになる。付加条第1種



第705図 遺構外出土弥生式土器(1)

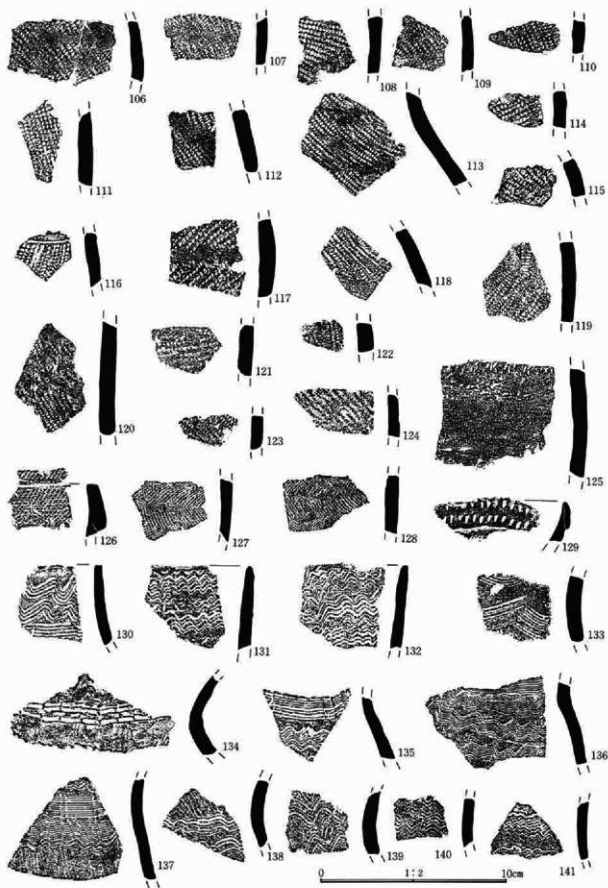


第706図 遺構外出土弥生式土器(2)

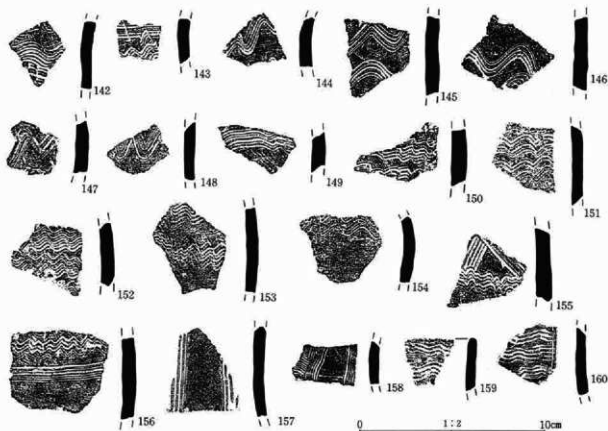


第707図 遺構外出土弥生式土器(3)

第三章 検出された遺構と遺物



第708図 遺構外出土弥生式土器(4)



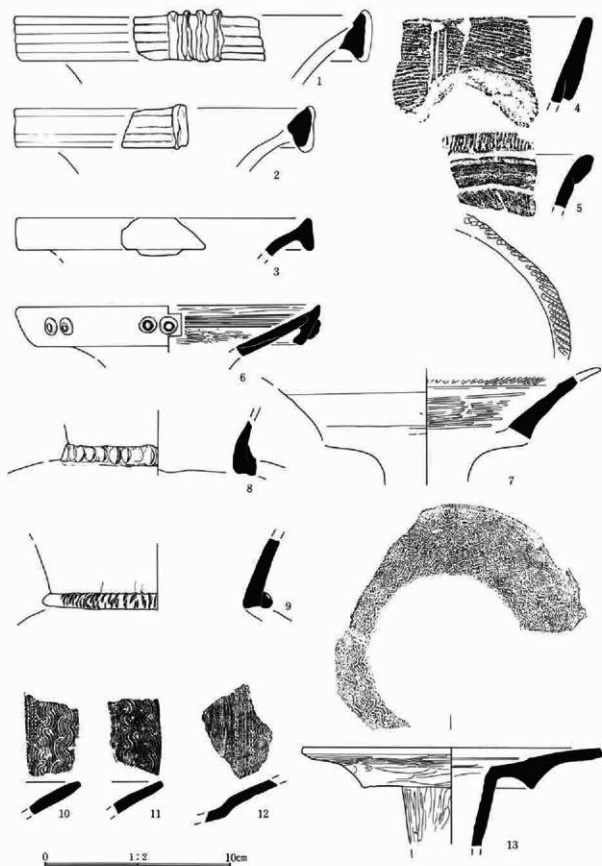
第709図 遺構外出土弥生式土器(5)

を用いた2～42・62は、主に頸部文様帯に櫛描波状文の1類としたものや連弧文133との組み合わせが考えられ、「二軒屋式」と呼称される一群に含まれるものである。また1に代表されるように43や44のように単節縄文であっても羽状のものは、これと同一に扱うべきだろう。54・55・65は羽状構成ではあるが、軸縄の太い付加条第2種であることから、157～160の櫛描文を施した頸部と組み合わせると考えられ、茨城県北部に主分布域をもつ「十王台式」の範疇に含まれよう。同じ縄文施文の土器ではあるが、66～76・79～89のように特徴ある単節斜縄文を帯状に施す一群は「赤井戸式」土器である。既に知られるように、「赤井戸式」は口縁に装飾的な粘土帯を付し、口縁から胴上位に規則的な横位縄文をもつのが特徴である。特に櫛描文がほとんど見られないこと、胴下半部は無文であることから「二軒屋式」

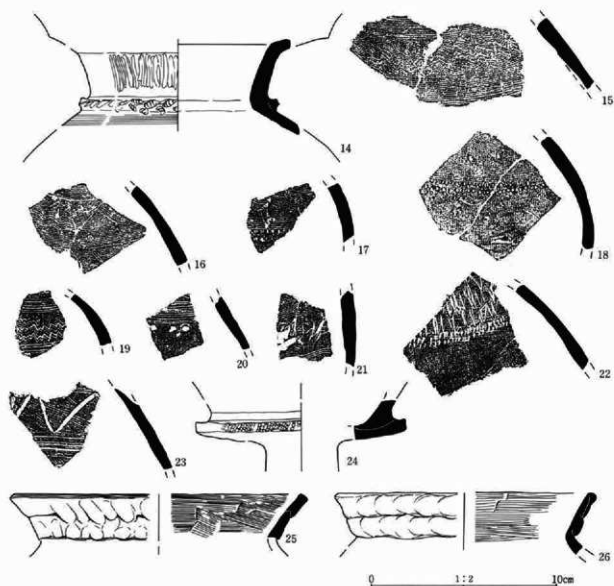
あるいは「十王台式」と峻別される。106～115や117は「赤井戸式」の縄文原体としては従来あまり注目されていなかったが、複節、複々節の例である。126～128は縄文の特徴から南関東東で間違いない。櫛描文を施したなかで、135～137のように頸部櫛状文の下位あるいは上下に波状文2類を施したものの、また胴下半が無文のものは群馬県西部に主分布域をもつ「樽式」である。ただし波状文2類であっても151・152のように部位や文様構成の不明なものについては「二軒屋式」「樽式」のいずれとも決めがたい。

第710・711図は弥生時代終末～古墳時代初期に属する外来系土器である。凹線文に櫛状浮文を付す口縁部1・2と、細かい櫛状具第Ⅱ種を用いた横位の直線文と波状文を交互に施文する胴部14～22は東海地方西部系と思われる。10～12は大きく開く口縁上面に波状文Ⅱ類a類（コンパス文）と細かい櫛状

第三章 検出された遺構と遺物



第710図 遺構外出土外来系土器(1)



第711図 遺構外出土外来系土器(2)

文を施したもので、これも東海地方西部との関連が考えられる。13はこれらと同形状で近似する文様をもつが、胎土の特徴が本地域のものとは変わらないこと、文様が波状文Ⅱ種a類であることから10～13の模倣品とも考えられる。4は東海地方東部系だろう。6は畿内系の可能性がある。3・5・7～9・23・24は系統を特定できないが、器形、胎土が同期の本地域土器とは異質である。25・26は口縁粘土帯の特徴から第707図77・78と同じ「赤井戸式」とも考えられるが、口縁の直下で「く」の字状にくびれる形状から南関東系と考えたい。

(4) 古墳時代～平安時代の遺物

(第712・713図 PL. 120)

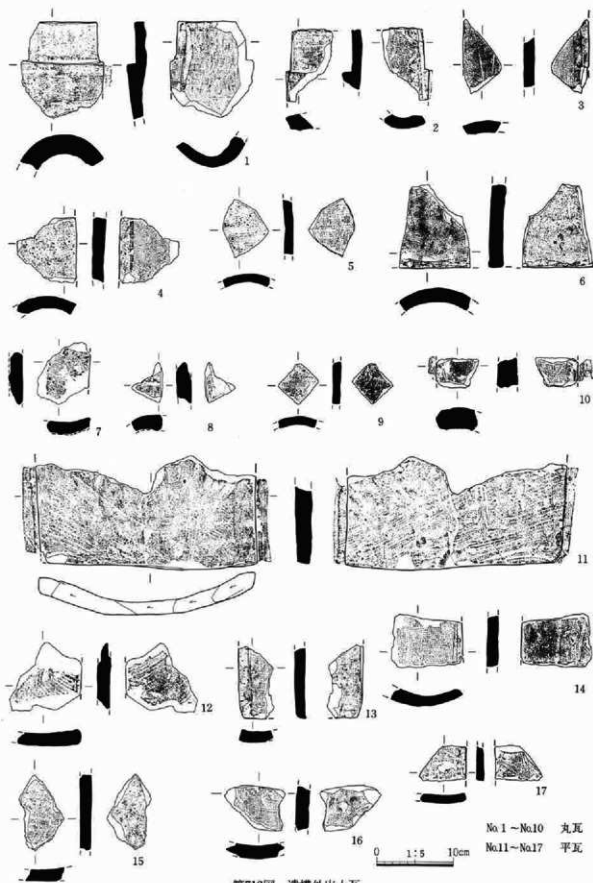
ここでは遺構に伴わない遺物のうち、一般的に出土することの少ない巡方、瓦、玉類、緑釉陶器等を取り上げた。個々の詳細については観察表及び第IV章結語を参照されたい。

(5) 中世・近世の遺物

(第714～718図 PL. 120～122)

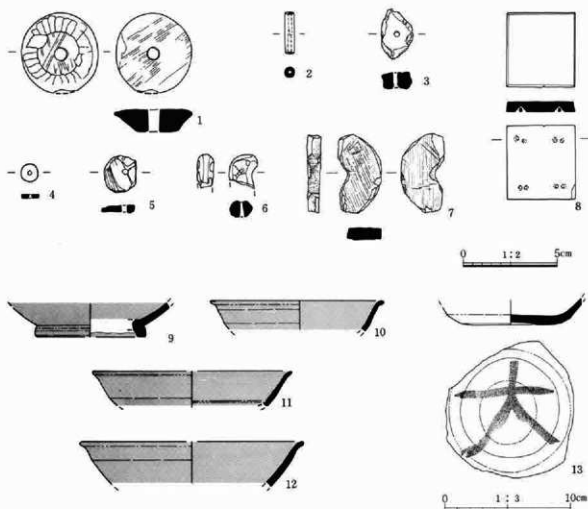
ここでは輸入・国産陶磁器、石臼、板碑、五輪塔、古銭等の中・近世遺物のうち、代表的なものを選んで掲載した。観察表に詳細を記す。

第三章 検出された遺構と遺物

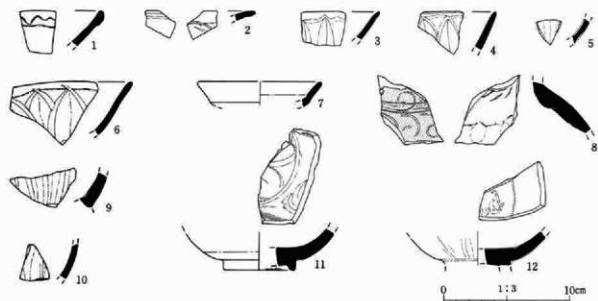


第712図 遺構外出土瓦

第13節 遺構外の遺物

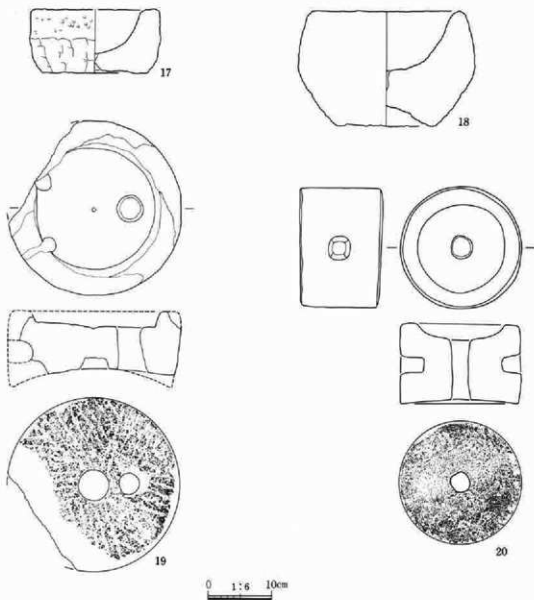
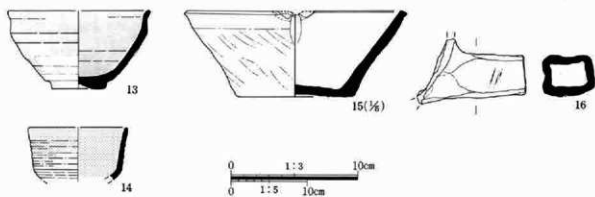


第713図 遺構外出土遺物（古墳～平安時代）



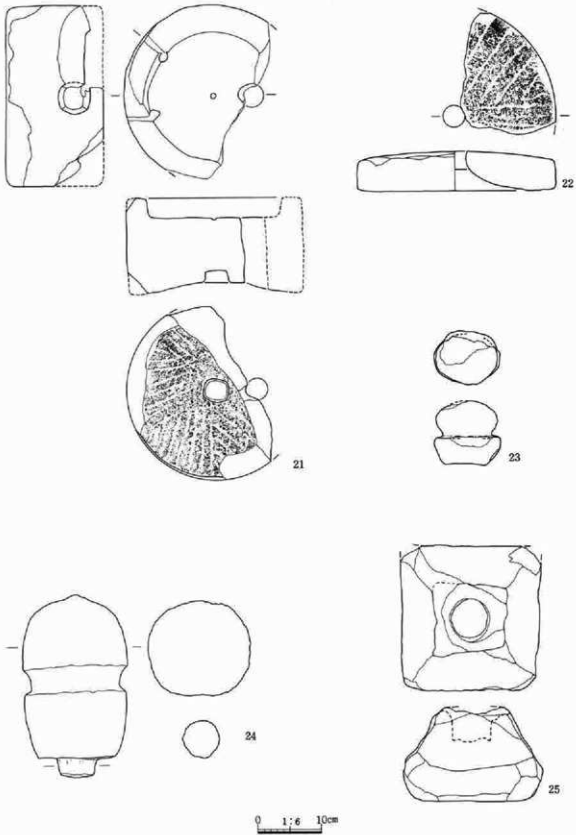
第714図 遺構外出土遺物（白磁・青磁）

第三章 検出された遺構と遺物



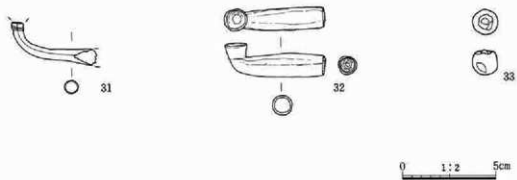
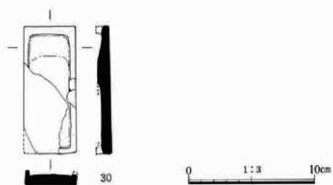
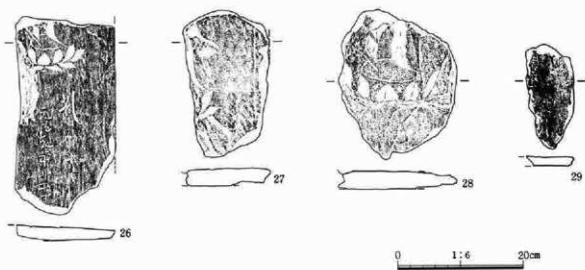
第715図 遺構外出土遺物 (中世～近世)

第13節 遺構外の遺物

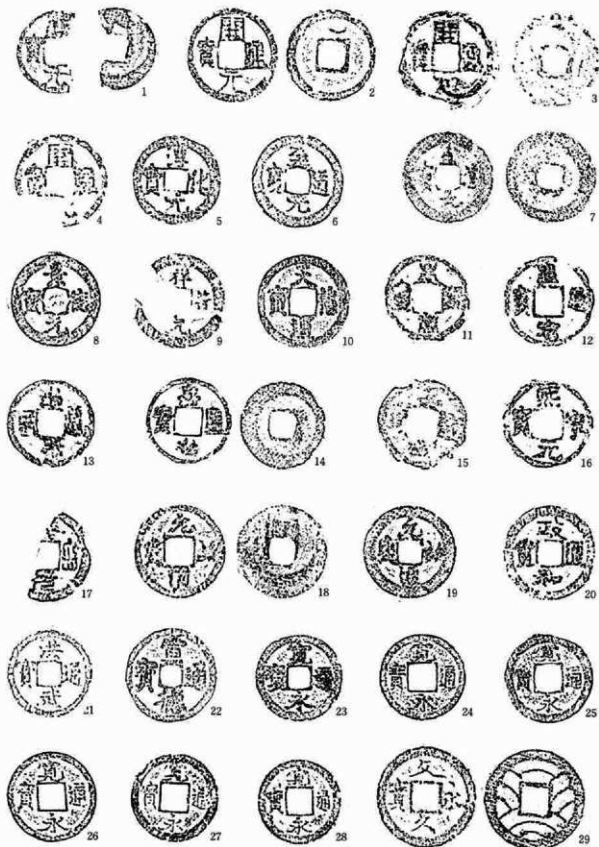


第716図 遺構外出土遺物 (中世～近世)

第三章 検出された遺構と遺物



第717図 遺構外出土遺物（中世～近世）



第718図 遺構外出土古銭



第14節 土器胎土分析

(1) 分析の目的

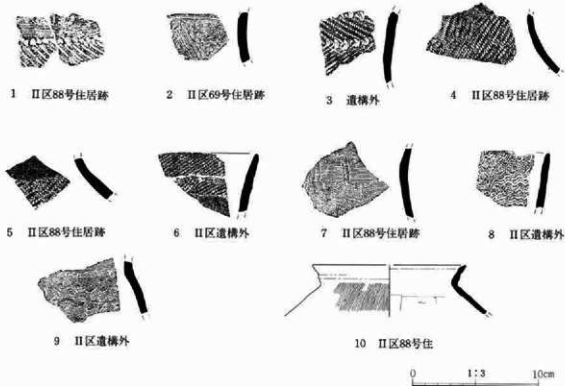
本遺跡から出土した後期弥生式土器のうち、大半は赤井戸式土器と樽式土器、二軒屋式土器で占められる。これらの各型式は、文様や器形の特徴から明確に分別されるが、胎土についても相違点がある程度指摘することが出来る。それは主に素地に含まれる岩石片や鉱物の組成に顕著に見られ、土器断面の肉眼観察によれば、二軒屋式は他の2者に比べて長石や石英等の無色、白色鉱物が著しく多く含まれる傾向が認められた。また赤井戸式と樽式には大きな差はないように思われた。ただし肉眼観察では目立つ岩石鉱物に傾注しがちで主観的な識別となる危惧がある。従ってより客観的に胎土含有物質の組成を調べ、各型式における胎土の相異を明確にすることを目的として岩石学的分析を実施することとなった。

また副次的な目的として、搬入品の存否を含めた

土器製作地同定の基礎データ作成も意図している。

(2) 分析資料について

分析対象とする土器は、出来る限り型式が判明しており、肉眼観察によってその型式の代表的胎土であると判断されたものを選択した(第719図)。また同時期における胎土の相異を明らかにするため、同時性の高い住居一括遺物(II88号住居跡出土遺物)から二軒屋式、赤井戸式、樽式の各型式と古墳時代初頭に位置付けられるS字状口縁台付壘形土器を各1点ずつ選んだ。これらの分析資料の詳細については第1表に掲げた通りである。なお土器の部位については、口縁～胴上半部に限定した。その理由として、ひとつは型式認定の大きな要素である文様がこの部分に集中しているためであるが、一方胴下半や底部あるいは脚部の接合部分には砂粒をより多く混入した素地土で補強する可能性が高いと推測されるためである。(大木紳一郎)



第719図 胎土分析資料

下淵名塚越遺跡の胎土分析

小山修司・菱田 量・谷口英嗣（パレオ・ラボ株式会社）

1. はじめに

胎土分析は土器を用いた最も基本的な分析であり古くからその有効性が指摘されている。最近の分析機器の進歩により、胎土分析は大きな進歩が認められる。特に高温焼成の須恵器や陶器の分析に有効な方法として用いられ、各窯跡のデータベース化も進み、より高い精度の資料が提供されるようになった。しかし、縄文土器・弥生土器・土師器の大部分では胎土が複雑であり、粗粒・低温焼成・産地が多地点である等の影響が大きく単純に機器を用いた分析が行えない。このような土器については、土器中の構成鉱物による胎土分析が行われている。このうち特徴的な鉱物や粒子、たとえば、滑石・黒鉛・雲母・片岩岩片が含まれている場合には地域と土器型式を特徴づける添加物が存在することが考古学的な資料の蓄積により明らかにされている。しかし大部分の土器については、その構成鉱物の資料は多くなく、1点の分析結果から産地を推定できるようなデータベースもほとんど存在しないという現状にある。今回の下淵名塚越遺跡の胎土分析では、これらの点を含めて胎土分析結果のデータベース化を進める資料となる点も配慮して分析を行った。尚、作成したプレパラート・土器片は群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

2. 分析試料と方法

分析試料は下淵名塚越遺跡出土の土器10点で、土器の記載の概要を表4にまとめて示した。胎土分析の総合的な検討をした例としては千葉県文化財センターの行った、胎土分析の基礎的研究（千葉県文化財センター：1984）がある。これによると土器胎土分析において、土器・粘土・混和材等の搬入や遺跡内の制作等を考える上で基本的な問題があげられている。それは、土器の部位・器種・時期による胎土

の差があるかという問題であり、これをぬきにしては胎土分析の考察は進まないが、結果として「同一時期のものであれば、例外はあるが部位・器種を問わず、対比材料となりうる。」という結果となっている。今回の試料もこの観点の上になつて行いが、試料No1～9は弥生時代後期から末期の時期であり、時期的にはほぼ同一とされ、次のような比較が可能な試料が選出されている。

同一住居跡・同一型式・同一器種	なし
同一住居跡・同一型式・異器種	No4-5
同一住居跡・異型式・同一器種	No1-4、No1-7 No4-7
同一住居跡・異型式・異器種	No1-5、No5-7
異住居跡・同一型式・同一器種	No5-6、No7-8
異住居跡・同一型式・異器種	No1-2、No4-6
異住居跡・異型式・同一器種	No1-8、No2-5 No2-6、No2-9
異住居跡・異型式・異器種	No1-6、No2-4 No2-7、No2-8 No5-8、No6-7 No6-8

分析方法は岩石学的な分析方法を用いたが、これらの方法には大きく2通りの方法があり、土器を粉碎し、ある一定の大きさの鉱物や岩片の組成を調べる方法と、土器を岩石のように薄片にし、中の構成粒子を調べる方法があるが、今回は鉱物同定のレベルが高いこと、基質と粒子の位置を保った状態で観察が可能なこと、およびその粒度組成が調べられること等のよい点を生かして薄片による方法をとった。また、粒子の粒数比を求めると、ポイントカウント法により300ポイント以上カウントし、比を求めた。粒子と基質の分類は漸移的で不明なものがあるが、今回の場合、試料の多くは分類が明瞭であったため、基本的に10 μ m以上の粒径を粒子とし、それ以下を基質としてとりあつた。岩片は鉱物粒子

表4 分析試料の記載

資料番号	遺跡名	出土地点	器種	部位	胎土	焼成	文様	色調	時期	型式
1	下瀬名塚越遺跡	II区88号住	甕	体上部	粗	一様な 酸化焼成	帯描波状文 横線文 付加条縄文	褐色 (5 YR 6 / 6)	弥生時代後期	二軒屋式
2	下瀬名塚越遺跡	II区69号住	壺	体上部	粗	酸化焼成	帯描山形文 横線文	にぶい褐色 (7.5 YR 6 / 4)	弥生時代後期	二軒屋式
3	下瀬名塚越遺跡	不 明	甕	体上部	やや粗	内部還元 酸化焼成	羽状構成の 付加条縄文 刺突列	黒褐色 (10 YR 3 / 1)	弥生時代後期	二軒屋式
4	下瀬名塚越遺跡	II区88号住	甕	体上部	やや粗	一様な 酸化焼成	LR単部斜縄文	褐色 (5 YR 6 / 6)	弥生時代後期	赤井戸式
5	下瀬名塚越遺跡	II区88号住	壺	体上部	やや粗	酸化焼成	斜縄文(衝節)	明赤褐色 (2.5 YR 5 / 6)	弥生時代後期	赤井戸式
6	下瀬名塚越遺跡	不 明	壺	口縁	やや粗	酸化ざみみ	LR単部斜縄文	褐色 (5 YR 7 / 6)	弥生時代後期	赤井戸式
7	下瀬名塚越遺跡	II区88号住	甕	頸部	やや粗	内面は 酸化ざみみ	帯描波状文 横状文	にぶい黄褐色 (10 YR 6 / 3)	弥生時代後期	樽式
8	下瀬名塚越遺跡	不 明	甕	口縁	やや粗	一様な 酸化焼成	帯描波状文	にぶい黄褐色 (10 YR 7 / 3)	弥生時代後期	樽式
9	下瀬名塚越遺跡	不 明	壺	体上部	粗	やや 酸化ざみみ	帯描横線 波状文 内面ミガキ	にぶい褐色 (7.5 YR 7 / 4)	弥生時代後期	樽式
10	下瀬名塚越遺跡	II区88号住	S字甕	口縁	やや粗	酸化ざみみ 硬質な焼成	斜ハケメ	器面にぶい褐色 (10 YR 7 / 3) 器壁灰色	古墳時代初期	石田川式

の集合しているものについて用いるが多結晶の石英は鉱物粒子に含めた。

3. 分析結果

各試料の分析結果を表5に示す。またそれぞれの試料についての観察結果を以下に述べる。

1. 二軒屋式・壺・体上部 (PL. 123-1)

斜長石が最も多く、次に、単結晶の石英が多くみられる。また、カリ長石（パーサイト構造および微斜長石）を含み、重鉱物や岩片が非常に少ないのが特徴的である。全体の粒径は0.6~0.4mmのものと0.1mm以下のものの2種に分かれる。粒径の大きなものはやや丸みを帯び、粒径の小さなものは角張っている傾向がある。基質に対する粒子の割合は約半分が粒子中では鉱物がほとんどを占める。

2. 二軒屋式・壺・体上部 (PL. 123-2)

斜長石が多く、単結晶および多結晶の石英も多くみられる。また、カリ長石（パーサイト構造および微斜長石）を含み、堆積岩片がわずかにみられる。全体の粒径は0.2~0.4mmのものが多く、粒子の中で石英類は長石類よりも角張っており、細粒の粒子は全体に角張っている。石英は単結晶のものが多く、粒径は0.3~0.4mmで大きいものは1mm以上である。また、多結晶で文象構造を示す石英もみられる。基質に対する粒子の割合は約半分である。基質部の粒子はやや大きい。粒子中では鉱物がほとんどを占める。

3. 二軒屋式・壺・体上部 (PL. 123-3)

斜長石・多結晶の石英が多く、単結晶の石英・累帯構造を示す斜長石を含む。また、パーサイト構造のカリ長石、さらに斜方輝石・角閃石族などの重鉱物をわずかに含む。多結晶で文象構造を示す石英が多いのが特徴的である。粒径は全体的に細かく、0.1~0.2mmくらいで破片状の粒子が多い。細粒のものは基質部の粒子の大きさに近い。胎土中の基質に対する粒子の割合は半分よりやや少ない。粒子中では

鉱物がほとんどを占める。

4. 赤井戸式・壺・体上部 (PL. 123-4)

斜長石および累帯構造の斜長石、単結晶および多結晶の石英が多いが、斜方輝石・単斜輝石・角閃石族などの重鉱物や砂岩・泥岩などの堆積岩片やデイサイト・流紋岩などの火山岩片が試料1~3に比べて多くみられる。粒径は0.2~0.4mmくらいが多い。基質の粒径がやや大きく、粒子の粒径まで漸移的に変化している様に見える。粒子の形は角張ったものと丸みを帯びたものが混在している。胎土中の基質に対する粒子の割合は半分よりやや少ない。粒子中では鉱物の割合が試料1~3に比べて少なくなり岩片の割合が35%くらいになる。

5. 赤井戸式・壺・体上部 (PL. 123-5)

斜方輝石が多く単斜輝石・角閃石族などの重鉱物が卓越し、累帯構造を示す斜長石も多い。安山岩・デイサイト・流紋岩などの火山岩片、砂岩・泥岩などの堆積岩片も比較的多く含む。粒径は0.3~0.5mmくらいが多く、粒子は全体に角張ったものが多いが、中には丸みを帯びたものもあり、両者が混在している。また、胎土中の粒子の割合が少なく、基質の割合が多い。基質は細粒であるのが特徴的である。粒子中の鉱物・岩片の割合は試料4と同程度である。

6. 赤井戸式・壺・口縁 (PL. 123-6)

斜方輝石・角閃石族・単斜輝石などの重鉱物および累帯構造を示す斜長石や多結晶の石英が多くみられ、安山岩・デイサイト・流紋岩などの火山岩片や砂岩・泥岩などの堆積岩片が含まれる。斜方輝石は自形のものが多い。雲母族も他に比べてやや多い。粒径は0.2~0.6mmのものが多く、石英以外の粒子はほとんど角張っていて、0.1mm前後の細粒のものも目立つ。基質は細粒な粘土の集塊物である。胎土中の粒子の割合は約半分を占める。粒子中の鉱物・岩片の割合は試料4・5と同程度である。

表 5 胎土分析結果
数値は百分率を示す。

試料 番号	型式	鉱物										岩石										胎土中の磁子 基質の割合		胎土中の磁子 岩片の割合		岩石の組成									
		石英	斜長石	斜長石 多結晶	カリ石	カオリン石	単斜輝石	斜方輝石	角閃石	黒雲母	Ti-Fe 酸化物	風化 珪石	火山 ガラス	玄武岩	安山岩	デイサイト	流紋岩	ハンレイ 岩	カコウ 岩	火山 岩	砂岩	チャート	石灰岩	結晶 岩	風化 岩片	土 片	磁子 基質(%)	磁子 岩片(%)	火成 岩	堆積 岩	変成 岩	土 層	その他		
1	二軒屋式	25.1	1.5	52.2	4.7	2.3	0.6	—	0.6	—	1.2	—	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2	5.8	44.5/55.5	91.2/8.8	6.7	—	—	—	32.3		
2	二軒屋式	25.8	13.1	26.3	4.4	5.8	1.3	—	4.4	0.6	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5	1.9	—	—	—	—	3.8	47.6/52.4	92.0/8.0	—	—	—	—	53.8	46.2	
3	二軒屋式	9.8	26.1	22.8	7.3	2.8	—	—	5.6	2.3	1.1	—	—	—	—	0.6	—	—	—	1.3	0.6	—	—	—	—	2.2	5.1	43.2/57.4	90.4/9.6	5.9	15.6	—	—	75.5	
4	赤井戸式	9.4	11.4	16.8	9.4	0.7	—	—	2.7	2.0	6.7	0.7	2.7	1.3	1.3	—	0.7	6.7	2.0	—	—	—	—	—	—	—	9.3	42.6/57.4	65.1/34.9	25.9	46.2	—	—	25.9	
5	赤井戸式	4.4	3.7	14.7	15.4	0.7	—	—	12.5	6.6	5.9	2.2	0.7	0.7	—	—	2.2	3.6	—	—	2.2	3.6	—	—	—	1.5	16.9	32.5/67.5	67.6/32.4	27.7	32.2	—	—	29.3	
6	赤井戸式	6.6	14.6	7.6	14.8	0.8	—	—	7.0	3.9	6.3	2.2	—	—	—	—	4.7	3.9	1.6	—	—	3.1	2.3	—	—	0.8	17.2	50.4/49.6	66.4/33.6	30.2	38.3	—	—	33.5	
7	樽式	1.3	1.9	2.6	29.1	—	—	—	30.9	1.3	5.8	—	—	—	—	—	3.6	7.8	14.1	—	—	1.3	0.6	—	—	0.6	2.6	46.0/54.0	63.5/36.5	86.0	5.3	—	—	8.7	
8	樽式	1.5	—	—	—	—	—	—	6.1	1.5	3.8	—	—	—	—	—	14.4	9.1	10.6	—	—	0.8	0.6	1.5	—	—	3.0	11.4	50.6/49.4	48.1/51.9	62.6	4.4	—	—	28.6
9	樽式	3.9	—	—	—	—	—	—	7.1	1.9	9.1	2.0	1.3	0.7	0.7	—	1.3	6.5	14.9	—	—	—	—	—	—	—	1.3	8.4	43.5/56.5	58.1/41.9	56.5	14.4	—	—	24.1
10	石田川式	2.3	0.6	14.3	53.7	—	—	—	2.3	0.6	4.6	0.6	2.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.7	35.7/64.3	85.7/14.3	53.8	3.8	—	—	42.4	

7. 樽式・壺・頸部 (PL. 123-7)

累帯構造を示す斜長石が卓越し、安山岩・デイサイト・流紋岩などの火山岩片が多い。また、斜方輝石が多くみられ、角閃石族・単斜輝石を含む。わずかが石英類や堆積岩片も含む。鉱物の粒子のまわりには基質との反応層がみられるものがあり、高温にさらされた可能性がある。粒径は0.3~0.7mmくらいが多い。粒子のうち岩片は丸みを帯びているが、それ以外は角張っている。角閃石族は破片状で、単斜輝石は自形のものが多い。基質は細粒な粘土やガラスの集塊物である。胎土中の基質に対する粒子の割合は半分よりやや少ない。粒子中の鉱物・岩片の割合は約64%と36%で試料4~6と同程度で岩片がやや多くみられる傾向である。

8. 樽式・壺・口縁 (PL. 123-8)

累帯構造を示す斜長石が多い。安山岩・デイサイト・流紋岩などの火山岩片が占める割合が他の試料に比べて大きい。また、斜方輝石・角閃石族・単斜輝石がみられる。石英は少なく多結晶のものはみられない。凝灰岩などの火山砕屑岩片や堆積岩片をわずかに含む。特徴的に火山岩片の内部に斜長石の発達したものがある。粒径は0.2~0.7mmのものが多く、粒子の形は全体に角張ったものが多い。基質は細粒な粘土とガラスの集塊物的で、全体にガラス質である。胎土中の基質に対する粒子の割合は約半分を占める。粒子中の岩片が鉱物より多く特徴的である。

9. 樽式・壺・体上部 (PL. 123-9)

累帯構造を示す斜長石が多い。試料7・8と同様に安山岩・デイサイト・流紋岩などの火山岩片が卓越する。角閃石族・斜方輝石・単斜輝石がみられるが、角閃石族は他の試料に比べてやや多い。石英は少なく多結晶のものはみられない。粒径は0.2~0.4mmのものが多く。粒子の形は石英は丸みを帯びているが、それ以外は角張っている。基質は比較的粗粒な粘土の集塊物である。粒子の割合は半分よりやや少ない。粒子中の岩片は約42%で比較的多い。

10. 石田川式・S字壺・口縁 (PL. 123-10)

累帯構造を示す斜長石が非常に多い。角閃石族・斜方輝石などがみられるが、占める割合は比較的小さい。流紋岩・デイサイトの火山岩片をわずかに含む。他の岩片は含まない。粒径は0.2~0.4mmのものが多く、全体的に細粒である。粒子の形はどの粒径のものも角張っており、あらかじめ細かく砕いた可能性もある。基質も試料1~9に比べて細粒な粘土である。胎土中の基質に対する粒子の占める割合も他の試料に比べて少ない。粒子中の鉱物の割合は大きく、約86%である。

以上の結果を全体的にみると、試料No.1~3では岩片と比較して鉱物粒子が多い。斜長石・石英・カリ長石が多く、重鉱物は少ない。また、岩片は少ないが、この中で相対的に土器片(粒子)が多くなる傾向がある。試料No.4~6では斜長石・石英が多くカリ長石は少なく、重鉱物の斜方輝石・単斜輝石・角閃石族が多い。また、安山岩・デイサイト・流紋岩の火山岩片を含み、砂岩・泥岩の岩片も比較的高い値を示している。粒子に対する岩片の量は30~35%とやや高い値を示し、火成岩片・体積岩岩片が同様に多い。試料No.7~9では、累帯構造を示す斜長石が高い値となり、重鉱物も比較的高い値を示し、安山岩・デイサイト・流紋岩の岩片が目だつて多く認められる。これは岩片の組成にもあらわれ、火成岩片が高い値を示している。試料No.10は累帯構造を示す斜長石が極端に高い値を示している。

4. 考 察

分析結果から、今回の試料は大きく4つに区分される。これらの特徴をまとめ表6に示した。この結果、同一時期に製作されたNo.1~No.9の各土器は型式別に異なり、No.1~3の二軒屋式・No.4~6の赤井戸式・No.7~9の樽式に区分される。それぞれの母岩を推定すると二軒屋式は花崗岩起源の粒子が多く、他に少量の堆積岩が含まれる。赤井戸式は火山灰・火山岩起源の粒子が多く、他に堆積岩の岩片が

表 6 分析結果の主な特徴

試料No	主要構成物	粒径(mm)	特徴的物質または特異点	全体の特徴	主な起源物質
1	斜長石、 単結晶石英	0.6~0.4	斜長石が非常に多い	No.1~3は花崗岩起源の物質を使用したと考 えられる。中でもNo.1は斜長石の特 に多い所 を選んであるようである。	花崗岩
2	斜長石、 単結晶石英	0.3~0.4	パーサイト構造のカリ長石が みられる		
3	斜長石、 多結晶石英	0.1~0.2	文象構造の多結晶石英がみら れる		
4	斜長石(累帯構造) 角閃石族、堆積岩片	0.2~0.4	重鉱物、堆積岩片	火山砕屑物と砂岩や泥岩の細かく砕かれたも のからなっている。	火山噴出物 堆積岩
5	斜方輝石、 斜長石(累帯構造)	0.3~0.5	斜方輝石多い 重鉱物、火山岩片、堆積岩片	特に、No.4はその傾向が強い。 No.5は火山灰層そのものを使用したようにみ うけられる。	
6	斜方輝石、 斜長石(累帯構造)	0.2~0.6	斜方輝石多い 重鉱物、火山岩片、堆積岩片		
7	斜長石(累帯構造) 火山岩片、斜方輝石	0.3~0.7	高温のため基質が再結晶化	火山噴出物起源の物質(特にダイサイトへ流 紋岩)を使用したと考えられる。	火山噴出物
8	火山岩片、斜方輝石 斜長石(累帯構造)	0.2~0.5	ほとんど火山砕屑物の成分か らなる		
9	斜長石(累帯構造) 火山岩片、角閃石族	0.2~0.4	ほとんど火山砕屑物の成分か らなる		
10	斜長石(累帯構造) 斜長石	0.3~0.5	累帯構造の発達した斜長石が 非常に多い	細かく砕かれたものが多い ほとんどの粒子は破片状である。	火山噴出物

認められる。樽式は火山灰・火山岩の粒子がほとんどを占めている。このように明瞭に3分され、これらのことはこの3型式の土器が異なる場所（異なる胎土）で製作されたことを示している。それぞれの位置を大局的に推定すると、全試料に変成岩が含まれていないため、南の荒川の影響は受けておらず、二軒屋式は花崗岩が多く堆積岩を少量含むことから、東側にあたる鬼怒川より東部の花崗岩分布地域と考えられ、赤井戸式は酸性の火山岩・火山灰に堆積岩が含まれることから、下淵名塚遺跡を含む利根川の北部地域（渡良瀬川近いか？）、樽式はほとんど酸性の火山岩・火山灰からなることより、利根川

上流部の山岳地帯と考えられる。また、これらのことは部位・器種による違いが認められないことを示している。Na10の土師器は火山噴出物が多く、製作地は利根川上流の山岳地帯と考えられるが、粒子がかなり破壊されている点特徴的で、どのような原因によるかは不明である。

引用文献

- (財) 千葉県文化財センター (1984) :
 自然科学的手法による遺跡・遺物の研究 3
 -土器胎土分析の基礎的研究-
 千葉県文化財センター研究紀要 8

第IV章 結 語

第1節 出土遺物について

(1) 古墳時代の遺物

須恵器の出土量は少ないが、推定産地の特徴から2点の特筆される資料がある。8号墳周堀から出土した蓋杯は、現在のところ群馬県内や近県に産地を推定出来ない。胎土や色調の特徴より陶色産に近似するものと考えたが、かつて資料を実見していただいた田辺昭三氏からは、否定的な見解をいただいている。身と蓋とはセットになるものではないようだが、同一産地から同時に持ち込まれたものである。II区117号住出土の長脚2段透かしをもつ高杯は、胎土の特徴より太田市金山周辺に産地を特定できる資料である。周辺の古墳時代集落からは、最も多く出土するもので、境町三ツ木遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985）などの報告例がある。

土師器では石田川期の器台の出土量の多さが目立つ。和泉期から鬼高期にかけては遺物の出土自体がきわめて少なくなっている。

(2) 奈良・平安時代の遺物

比企丘陵産の須恵器

境町三ツ木遺跡の報告にあるように、東毛地域には8世紀代を中心に、埼玉比企丘陵産を特徴付ける胎土に白色針状鉱物の混入した杯類が検出されるが、本遺跡からもII区37号住-7（第58図）やIII区8号住-2（第245図）のような出土例があり、その他に遺構に伴わない資料も多い。また蓋や甕類の出土も少量あった。杯の底部に見られる調整手法は8世紀代のものに限られており、上記の傾向が普遍的に見られるようだ。

型造りの土器

平安時代後半の酸化焙焼成土器杯類に、ロクロによる成形痕の認められない一群がある。口径が12cm

未満の小形品であるが、器高は3.5cm以上になり、腕に近い形状になっている。外面は下半が指頭痕状の不整面で、口縁端部に強いナデが加えられている。II区32号住-3・4（第52図）や115号住-1・2（第157図）のように底部に多量の砂が付着する事の特徴としているが、特に1号土器集積-6・7は砂の付着した後に縁端を手持ちヘラ削りしていることから、この砂の付着が成形段階のものと思定できる。砂粒の付着状態は、陶器の型造り製作時に使用する“離れ砂”と同じ物である。底部に砂粒付着が見られないものは、いずれも全面に手持ちヘラ削りが加えられたものであり、本来これらは底部に砂粒付着の見られる型造り成形の土器と判断できよう。なお同じ製作技法によるが、高台の付く器形の土器にII区115号住-6（第157図）や162号住-3（第219図）がある。115号住の例は口径がかなり大きくなっている。

これらの杯類は太田市賀茂遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984）、境町三ツ木遺跡、前橋市荒砥上川久保遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982）、大胡町天神風呂遺跡（大胡町教育委員会 1981）など、群馬県東部に出土例が偏っている。

灰釉陶器・緑釉陶器

灰釉陶器は腕・皿類を中心に出土量は豊富で、長頸壺の出土も多い。いずれも白変後期の時期のものであるが、丸石2号富期まで下るものは小破片以外にはない。完形に近い土器が1軒の住居から複数出土したのはまれで、小瓶2点と腕2点を検出したII区19号住（第38図）は特異な例である。

緑釉陶器はII区の41号住（第63図）と150号住（第200図）から2点の高台付き杯が出土した。畿内産の軟陶と呼ばれるもので、胎土や器形などの類似する2点である。その他に小破片の出土があるが、これらは硬陶である。杯類以外の器種の出土はなかった。

墨書土器

住居軒数に比して墨書の出土量は多くない。記された文字には「大」「土」「支」「子」など、一文字のものも多く、Ⅲ区49号住の「形井」（第307図-1）と記されたのが判読できたものでは唯一の二文字例である。

その他に、赤色顔料が付着する中性焰焼成の杯片も見られるが、朱墨文字の出土例はない。

瓦

出土した古代の瓦は総数で17点を数える（第712図）。Ⅶ区4号溝や12号墳からの出土例がまとまったものである。総じて調査区北側からの出土例が多く、掘立柱建物跡の検出されたⅡ区とⅢ区からの出土例は少ない。瓦当面の出土例はなく、時期決定は難しいが、製作技法や形態から、8世紀代のものが中心になっている。第712図-1・2のように顎の有る例は国分寺など出土例の限られるものであり、興味深い資料である。

瓦の分類を分担した本事業団 木津博明によれば、本遺跡出土の瓦は、新田町笠懸を中心とする東毛地方で生産されたものが大半を占めていて、吉井・藤岡方面からの搬入品はごく僅かである。

石製巡方

Ⅱ区74号住居跡から混入品として出土した石製巡方（第714図-8）は、材質に特色がある。石材の同定を行った飯島静男氏によると、近隣に産地を求められないもので、大理石に類似するが硬度が異なっている。国分寺中間遺跡に類似例がある。

(3) 中・近世の遺物

V区4号溝に見られるように、溝を中心に多量の遺物を出土している。同様の遺跡に太田市浜町屋敷内C地点（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985）の例があり、相対的な出土量の多寡はこの遺跡との比較となっている。

輸入陶磁器

出土例はいずれも磁器であり、遺構に伴うものは少ない。竜泉窯系の南宋青磁の出土が多く、8点になる。粘手の極めて良質のものがまじるが、元や明

青花の出土例はない。これは新田郡尾島町歌舞伎遺跡（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982）の傾向と似ている。

国産陶磁器

鎌倉期の陶器は表採品（第714図-8）の古瀬戸梅瓶小破片一点のみである。

Ⅶ区5号溝出土の播鉢は、卸し目がいわゆる一本引きであること、色調は橙色が強いこと、白色顔料混じりの胎土など、丹波産陶器の特徴を揃えている。関西地方では普遍的にみられるものだが、群馬県内での出土例は管見では見当たらない。

瀬戸・美濃産の陶器では、志野釉のかかった遺存状態の良い皿類の出土が目立つ。伊万里・唐津の陶磁器は少ない。このことより、一般的な傾向に比べ、18世紀以降の遺物は少ないといえよう。

器形は椀・皿類、壺・甕類他にも、花生、香炉など豊富だが、寺院の存在が想定されるような特殊な傾向は看取出来ない。

小皿

出土量は極めて多く図示したもので総数139点になる。特に溝からの出土が多く、V区4号溝では59点の図示となった。遺構に伴うものとしては溝、井戸以外からの出土はまれである。形態が多様で、細別の難しい土器群であるが、同巧の土器は同一遺構から出土している。左回転クロ使用の土器が多い。また、燈明皿として使用されたものも多い。

内耳土器

小皿に次いで図示した個体の多い土器であるが、出土量は点数からも重量からも、最も多い土器である。また、小皿以上に溝からの出土率は高い。新しい時期の特徴である底部まで達する幅広い耳部を持った土器は少なく、陶磁器類と同じ傾向を示す。

石臼

材質は粗粒安山岩が大半を占めている。一部に牛伏砂岩製のものが混じる。牛伏砂岩製のものは、三輪茂雄氏によれば、いずれも埼玉・群馬に分布する、挽き木孔をつくりつけた形態のものであるが、石材の産地が吉井町に特定できることより、西上州型と

第IV章 結 語

呼ぶべきものであろう。

上臼上面の中央に小さな窪みのあるもの(第560図-33)や上縁部に挽き手の補助穴になると思われる小孔のあるもの(第492図-39・41)、両者のあるもの(第491図-34、第715図-19、第716図-21)など、浜町屋敷内遺跡と同じ様相で、この2つの要素はセットになるものと思われる。

極端な片減りをしているものがあり、目立てをする間もなく激しく使用している。VI区5号溝-28(第503図)、VI区11溝-27(第515図)のように挽き手穴の補修例も多い。

いずれも破損しており、破損後に強い火熱を受けたものも多く、石臼特有の腐変状態があるらしい。石臼を破壊するのは、「魂抜き」のような民俗的理由と、火窯製造を防ぐ目的が考えられている。遺跡出土例から見ると、破壊の方法は上臼の上縁部を欠いた後に半割するなどかなり念入りで、儀礼的な破壊だけに限定はできないようである。

茶臼型をしたものにはVI区5号溝からの出土が多い(第502図)。

五輪塔

総数で33点の五輪塔が出土した。VI区11号溝からの出土が多い。空風輪1点、火輪5点、水輪1点、地輪3点である。年代幅は広く、VI区11号溝内の遺物であっても、軒が高く古式の様相を示す火輪(第518図-54)から、小形で雑な造りの空風輪(第518図-53)などまちまちである。

V区5号溝-37(第560図)、VII区4号溝-5(第499図)の石鉢などは、水輪の可能性もある。

板碑

出土量は多かったが、図示したのは表面に彫り込みのあるもので、総数38点を数える。VII区22号井戸の4点がまとまった出土例である。完形品は小形品VI区1号溝-9のみで、小破片が大半であった。紀年銘を持つものにIV区12号井戸「弘安十年十一月口日」(第589図)、VI区11号溝「文和三年」(第517図-49)、「元徳元年十二月」(第717図-26)、「康永」(第717図-29)がある。他の遺物と異なり鎌倉期を

含めた古い時期のものが多い。その他の文字資料にはVII区4号溝「十方」(第523図-8)がある。

古銭

古銭は遺構に伴うものが少なく、特に土坑からの出土は皆無であった。遺跡内の各区から均等に検出されており、出土状態から墓域を想定することは出来なかった。総数29点の古銭が出土したが、宋銭が16点でもっとも多い。明銭の少ないことから、13世紀を中心とする輸入陶磁器同様、本遺跡への搬入遺物の年代的傾向を示す資料となっている。

砥石

砥石の出土量の多さが、本遺跡の特徴の一つである。溝と井戸から出土した中から、図示し得たもので総数45点になる。粗粒安山岩製の荒砥と、変質流紋岩(砥沢石)製の一般的な砥石がある。砥沢石製のものには左利きの使用がわかるものも多い。

その他の遺物

鉄砲玉(第717図-33)、陶硯(第497図-1、第514図-16)、硯(第717図-30)などの出土もある。

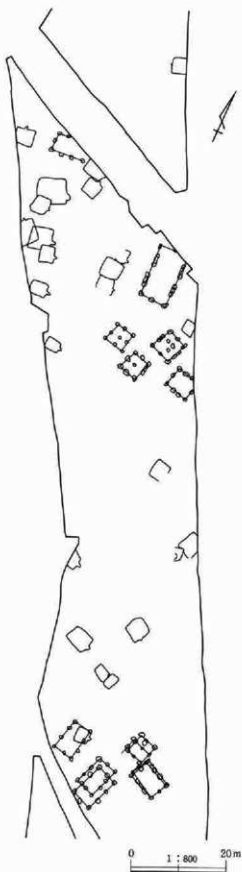
(飯田陽一)

第2節 集落の変遷

本遺跡で検出された古代の竪穴住居跡は270軒に及び、これに獨立柱建物跡13棟が加わって、4世紀～11世紀代の約800年に亘る集落跡であることが判明した。ここでは各時期毎に見られる遺構分布の特性を時間軸に並べることによって集落の変遷過程を捉えようとするものである。なお本遺跡では、特にⅡ区・Ⅲ区において顕著のように、住居跡同士の重複関係が複雑で伴出遺物の帰属が不明なものが多いため、時間的な細分や更に具体的な新旧関係は捉えられなかった。従って、同一時点での集落景観は復元できず、ここでは100年ほどを単位とした大まかな把握に止どまることを断っておきたい。

古墳時代初期の遺構として判明しているのは竪穴住居のみである。検出数は40軒弱で、分布は台地南東端に偏り、調査区の中で最も平坦な地点に占地する。竪穴住居の形状は4本主柱穴をもつ正方形が多く、いずれも単純な構造の地床炉を備えている。規模は一辺4～5mのものが主体であるが、一辺が9mに達する大形住居も全体の2割ほど存在する。最も住居跡の集中するⅡ区では2～3軒の重複が見られることから2～3世代に細分しようが、新旧関係は明らかでない。この時期の主要な墓としては前期の古墳が周溝墓が考えられるが、現在までのところ本集落址の周辺でこれと関連を持つ可能性のある墓址は、これより西方0.8キロの出口遺跡で検出された方形周溝墓1基以外には知られていない。

後続する5～7世紀代は、ほぼ300年間という長い期間に反して検出された住居軒数は15軒前後と極めて少なく、集落の主体は北あるいは西の隣接地へ移動したものと考えられよう。それに替わってこの地は墓域となり、5世紀後半から6世紀にかけて継続的に古墳が築造されている。竪穴住居はこの墓域の南側にあたる台地の南東縁辺部にもみ分布する。またここで見られる住居跡群は出土遺物の比較から、連続して営まれたのではなく、断絶する時期があったことが推察される。少なくとも調査区内では、古



第720図 8世紀の遺構

墳が築造された5世紀後半～6世紀前半代に属するものは認められない。

8世紀代では40軒程の竪穴住居跡と12棟の掘立柱建物跡が検出されている。これらの分布はI～III区に集中しており、わずかに北西部のV区へも進出している。前代の墓域であった調査区中央部には南東部でやや居住域を拡大しているが、古墳が最も密集するIV区には全く住居跡が認められないことから、この時期に至っても墓域としての観念が失われていなかったことを示唆している。また当時遺存していた墳丘や周堀自体を削平してまで住居等を構築する必要がなかったともいえる。これは、I～III区に分布する住居跡群のほぼ中央に位置する4号古墳の周囲には全く該期の遺構が見られないことから推測される。掘立柱建物跡群は2カ所に分かれて、それぞれが6～7棟で構成されており、いずれも9世紀代の竪穴住居よりも古く、また方形に近い柱穴掘り方を持つことから8世紀代に属するとしてよい。南東端に位置するII区の一帯は長方形住居と推定される建物跡のみで構成され、同時期遺構との配置関係から集落の南東縁辺部の一角を占めたと考えられる。ここでは棟方向の揃う掘立柱建物跡同士が重複しており、建て替えが行われたことが明らかである。新旧関係は不明であるが、2～3棟の構成からなる連続した2～3世代の建物群と考えられよう。一方北東半で検出された掘立柱建物跡の一帯は、「溝持ち」掘り方の柱穴で桁行5間(約11m)と一般的な集落跡に属するものとしては規模の大きい長方形建物跡とこれに従属するかのような配置を見せる3棟の納屋あるいは住居及び2棟の倉庫と推定される建物から構成される。これらはほぼ棟方向を揃え、同じ間隔をあけて構築されており、またはほぼ同時代と限定される柱穴掘り方の形状や柱間寸法の画一性から、同一世代に存在した建物群の可能性がある。その位置は集落の中央部分を占めると推定され、周囲には同時存在したと思われる竪穴住居が密集する。これらの様相から集落の中核的な役割を担った建物群、または地方行政管理組織の末端に位置する官人

層の居宅とも言い換えることができよう。この時期で取り上げた遺構は重複軒数から最低3世代に亘ることは明らかであるが、新旧関係の明らかなものが少なく同一世代の遺構が確定できないため、掘立柱建物跡と竪穴住居との位置関係、さらには平地住居や広場等の空間の所在など同一時点集落景観については明確にしえなかった。

9世紀に入ってから遺構分布は前代に引き続いて南東部のI～III区に見られるが、新たに北西部のVI～VII区にも広がりを見せるようになる。両者は300mほど離れており、その間には竪穴住居や掘立柱建物等が全く見られないことから、集落の範囲が拡大したというより、むしろ中央に広場の空間をおいて2分されたと考えられるべきだろう。これらは地形に対応して、南東部では面的に散在し、北西部では等高線に沿って南北方向に並んで分布する。検出された住居軒数は両者とも10軒前後であるが、東西を谷と斜面で挟まれた北西部の住居群はさほど大きな広がりを持つとは考えにくい。これに比べるかに広い平坦面の広がる南東部では調査区外を含めれば、相当数の住居跡が存在するものと推定される。9世紀と推定される住居跡は、重複関係から2～3世代の時期細分が想定されるが、南東部で検出された該期の住居跡約20軒を仮に世代毎に等分した場合、前代に比べてかなり疎な分布を示すことになる。これは、8世紀には比較的狭い範囲に集中していた集落居住域が全体的に拡大したか、あるいはこの時期の掘立柱建物等が全く見られないことを勘案すれば、集落の中心が移動したとも考えられる。

10世紀には全体で60軒を超える竪穴住居跡が検出されており、本調査区内に限れば最も遺構数が多い時期である。しかしこの時期の集落に一般的に伴うことの多い掘立柱建物の存在は見られない。住居跡の分布はI～III区に最も密集しており、9世紀に進出した北西部のVII区でもやや減少してはいるが存続して住居が構築されている。またそれまで分布の見られなかった古墳群の在るIV区へも新たに6軒前後のまとまりを持つ竪穴住居群が進出しているのは、

墓域觀念の喪失とも考えられ注目されるところである。竪穴住居跡の重複関係や出土土器の比較から、11世紀前半までを含めて考えると、4～5世代に亘って継続的に営まれたと想定される。

以上各時期における大まかな集落景観について、主に遺構分布の特徴を中心に記した。ここに見られた集落の動態を古墳時代初頭から平安時代までを通観してまとめると以下ようになる。

- 1 定住集落として営まれた期間は、4世紀から11世紀代で、5世紀後半～6世紀に断絶する時期がある。
- 2 住居跡の分布は集落の存在した全期間を通して調査区域の南東部に偏り、北西部へは9世紀以降に進出する。
- 3 調査区域中央部は5世紀後半～6世紀に古墳が築かれ、10世紀に至るまで住居跡は見られない。
- 4 住居跡の分布は8世紀には比較的限定された地域に集中、9世紀以降はやや範囲を広げて散在し、10世紀に至ると広い範囲に亘って増加するという傾向が伺える。
- 5 掘立柱建物跡は8世紀に出現するが、9世紀以降は見られない。

弥生時代にほとんど遺跡の存在しない本地域においては、4世紀の集落はこの地に定着した最初の農村といえる。周辺地域におけるこの時期の遺跡の分布から、早川に沿った沖積低地に面する台地縁辺部に散在して入植し、それぞれの条件のもとで集落を発展あるいは解消していったものと思われる。本遺跡では5世紀に入って途切れ墓域と化してしまうが、この時期の集落跡と推定される遺跡が隣接地ではほとんど見られないことから、4世紀の集落を営んだ人々は何等かの理由でこの地を捨てて全く別の地域に移動したと推定される。従って8世紀に入って出現した掘立柱建物に伴う集落跡はそれまでとは異なる集団による新開集落とも考えられよう。住居跡の重複関係や出土土器に時間的連続性が認められ

ることから、この時期に成立以後は途切れることなく11世紀代まで維持、発展したと考えることができる。なお住居を主とした遺構の分布がほぼ全時期に亘って南東部に偏在するのは、この地が東南方に展開する沖積地（水田可耕地）を臨む台地縁辺部に位置し、低地面からの高さが1mほどの比較的平坦な南面地形という、農耕集落としては優れた地理的条件を備えていたからであろう。集落範囲はこの地に定着して以来拡大する傾向にあり、10世紀にはおそらく台地南東縁辺部のほぼ全域が集落居住域になったと考えられる。本調査区の西側隣接地で行われた調査では、幅約500mにも亘って台地南端の平坦面及び緩傾斜面に平安時代の遺構が多く確認されており、このことを裏付けている（1978境町教育委員会「下淵名遺跡発掘調査概報」）。本遺跡で検出されなかった9世紀以後の掘立柱建物跡はおそらくこの西側地区に存在したと推定される。これはその立地や規模から淵名台地上に存するなかでも最大規模の中心的な集落であると推定される。したがって『和名抄』記載の「佐位郡淵名郷」が現在「上淵名、下淵名」の地名が残るこの地域に比定されるならば、本遺跡で検出された集落跡はその主要な部分を構成していたのは間違いないであろう。（大木幹一郎）

第3節 古墳群と埴輪

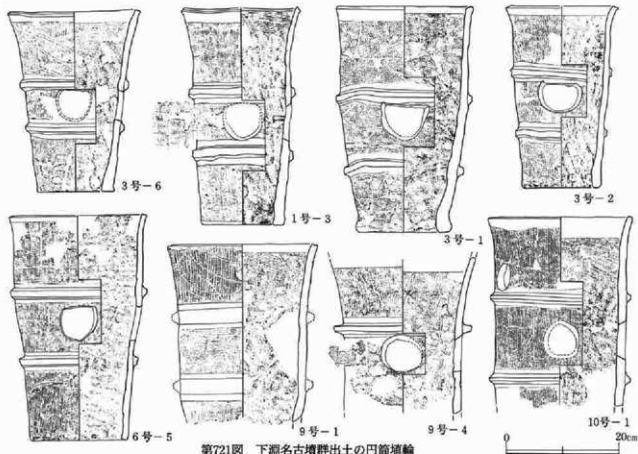
(1) 埴輪について

下瀬名古墳群の調査古墳13基のうちの6基（1・3・4・6・9・10号古墳）から埴輪が出土した。その大半は円筒埴輪であり、これに少量の朝顔形埴輪ときわめてわずかな形象埴輪が加わる。これについて、古墳の調査の項では最小限の事実記載にとどめたので、ここで円筒埴輪を中心に出土埴輪の諸特徴について概観し、合わせて、これらが提起する課題について簡単にまとめておくことにしたい。

なお、ここでの円筒埴輪の、第1段、第2段等の呼称はタガを境にして、最下段から順に数えている。それゆえ、基部をなす最下段は第1段となる。透孔の半円形は、正確な半円をなすものではなく、円の上端を水平に欠き取ったような形状に近いものをさしている（埴輪の観察表も同じ）。また埴輪の番号は挿入中の番号に対応している。¹¹⁾

1号古墳 主体をなすのは2、3に代表される一組である。高さ39cm、口径20cm、底径14cmほどの三段構成であり、高さ約10cmの基部の上に幅約2cmの粘土紐を巻き上げている。第2段に鈍い半円形の透孔が2個穿たれている。色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。全体に器厚を薄手に仕上げている点の特徴である。器面の整形は、外面が縦ハケで、そのうち第3段は縦ハケを繰り返してハケの走向を整えている。内面は口縁部がやや粗雑な横ハケで、それより下は、縦方向の指調整を粗く施すが粘土紐の積み上げ痕が明確に残ってしまっている。2、3、8、14では、外面第2段の上端部に逆U字とその下寄りに水平線を交差させた同一のヘラ描きが認められる。

3号古墳 本墳の円筒埴輪の特色を一言でいうと、バラエティーに集約される。この多様性をもたらしているのは、細部の形状、成整形の手法の微妙な差である。内外面の成整形の特徴を基準にすると、外面斜めハケ、内面第3段横ハケ・以下指調整(1)、



第721図 下瀬名古墳群出土の円筒埴輪

外面第1、2段縦ハケ、第3段斜めハケ後に縦ハケ、内面第3段横ハケ・第1、2段縦の指調整(3、7)、外面第1、2段縦ハケ、第3段斜めハケ後の縦ハケ、内面縦の指調整(2、4、15)の3つに大きく分類される。これに口縁端部の整形手法やタガの形状を加味したならば、まさに同一のものが一つとして見いだせない。

一方、そのようなバラエティーさの中で共通した点もいくつかあげられる。いずれも3段構成であり、焼成は良好で色調が淡褐色ないし淡黄褐色を主とする。器内が比較的厚手で、内面は丹念に調整され粘土紐の積み上げ痕をまったく残さない、外面の第2段から第3段にかけて赤色顔料が塗彩されること、透孔が比較的シャープな半円形であること、全体に非常に丁寧なつくりであること等である。また、第3段の外面または内面に斜めにほぼ平行する4本線のヘラ描きを有する(14点)、外面第3段に三日月形のヘラ描きを有する(3点)ことも共通項の一つとして数えられよう。

4号古墳 3号古墳の円筒埴輪の様相とは逆に全体に斉一である点が最大の特徴である。破片資料を含めて出土埴輪の大半がこれに属しており、色調が淡褐色ないし淡灰褐色を呈する。いずれも3段構成で、器壁は比較的薄手で、高さ32cm、口径20cm前後である。透孔は明瞭な半円形であり、一様に第3段から第2段の中途にかけての外面に赤色顔料が塗彩されている。外面は、第1・2段が縦ハケ、第3段が斜めハケ後に二次的に縦ハケで再調整する。内面は第3段についても横ハケを施さず、口縁端部の横ナデ以外は全体に縦を主とする指調整により丹念に面仕上げをしている。外面第2段に備中グツ形のヘラ描きが施されるものが4点(1、16、17、18)ある。

これらの一群とは異なるもので、10、12、14は厚手で、タガが発達し、胎土があらく、焼成がややあまい点でまとまっている。

6号古墳 本墳の場合も比較的斉一性を有する一群である。いずれも三段構成であり、色調は茶褐色

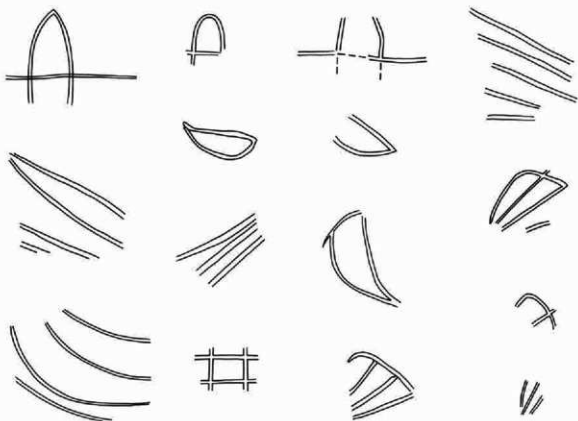
ないし暗赤褐色を呈する。焼成は極めて良好で須恵質に近い焼き上がりで、高温のための焼ヒビが目立つ。器壁は厚手で、高さ40cm、口径22cmと比較的大振りであり、第2段に半円形の透孔が2つ穿たれている。外面縦ハケ、内面口縁部横ハケ、それより下は横ナデ、不定方向の指調整等を施すが、いずれも粘土紐の積み上げ痕を明瞭に残す粗雑な仕上げである。

9号古墳 内外面の整形からみると、多種多様である。特に1は本古墳群で唯一B種横ハケを外面第2段に施す点が注意される。また、3、4、6では外面の整形として、縦の軽いヘラ削りないしヘラナデを施し、ハケ整形を使用していない。これ以外に2、5、7のように通常の縦ハケも認められる。

共通する点としては、3段構成で色調が褐色ないし黄褐色を呈し、焼成は普通かあまりよくない。口径が22~25cmと大振りであり、タガも発達している。また、第2段に2個の半円形の透孔が穿たれている。

10号古墳 全体に斉一性をうかがわせる一群である。いずれも3段構成であり、口径25~26cmと大振りであり、正面観が長方形を呈し、極めて丹念なつくりである。第2段の通常の透孔(形の明瞭におかまものが1例も存在しないが半円形が推定される)と直交して第3段に小型の円形透孔が穿たれる点が特徴的である。外面縦ハケ、内面第3段横ハケ、以下指調整あるいはハケ整形により粘土紐の積み上げ痕を完全に消している。外面は赤色顔料を塗彩する。これらは、基本的に本墳から出土する朝顔形埴輪についても共通している。

以上、本古墳群の円筒埴輪の概観から次の諸点が特色として上げられよう。まず全体に共通する点としては、3段構成であり、第2段に半円形の透孔が2つ穿たれる。体部に黒斑を有するものは1点も存在していない等が上げられよう。また、外面に赤色顔料を、器面にヘラ描きを盛んに施す点も特徴的である。外面の整形は、3号古墳の斜めハケの1例と9号古墳の横ハケの1例を除くと基本的に縦ハケであるか、もしくはこれを指向していることから、縦ハケが圧倒的に主流となっていることがわかる。



第722図 下瀬名古墳群出土円筒埴輪のヘラ描き

このような特色を念頭において本古墳群の埴輪の編年の位置づけについて考えて見よう。群馬県の地域では外面整形としていわゆるB種横ハケを主体的に有している古墳としては太田天神山古墳、藤岡市白石稲荷山古墳、伊勢崎市御富士山古墳等の5世紀中葉を中心とした時期の古墳が上げられ、これに続く5世紀第3四半期を中心とした時期の高崎市不動山古墳、同岩鼻二子山古墳、同上並榎稲荷山古墳を最終としている。これらの古墳に後出する5世紀第3四半期から第4四半期にかけての時期が推定される群馬町保渡田古墳群の井出二子山古墳の円筒埴輪を見てみると、B種横ハケが極めてわずかに認められるものの、主体は縦ハケとなっている。さらにこの二子山古墳に続く5世紀第4四半期の築造が推定される保渡田八幡塚古墳の段階になると完全に縦ハケのみとなる。同墳の円筒埴輪についてさらに詳しく見るならば、透孔は両者とも半円形であるが、二

子山の場合、細部の形態、成整形の手法等が多様性を示すのに対し、八幡塚では斉性が顕著に認められるようになる。このように見ると、下瀬名古墳群の埴輪群は、この二子山古墳から八幡塚古墳にかけての円筒埴輪の推移に極めてよく合致するものであることが理解できるところであり、このことに加えて埴輪を出土する古墳の大半がFAの降下以前に位置づけられることからするならば、これらの埴輪群が5世紀第4四半期を中心とした短期間の所産であることが理解できよう。

下瀬名古墳群における各古墳ごとの埴輪は細部でバラエティーを示すもの(3、9号)と比較的斉性を示すもの(1、4、6、10号)とが指摘できたが、と同時に複数の古墳にまたがって同一のものを見いだすことはまったくできない。このことは、ヘラ描きの各種類についても言えることである。

ここで1古墳におけるバラエティーは、埴輪の

製作地が複数にわたっていたことを示すものではなく、単一の製作地における埴輪製作が定型化する以前の段階にあったと理解するほうがより当を得たものと言えよう。1古墳の埴輪の胎土、焼成は均一（特に斉一性を示す一団に顕著）であることから、1回の同一の窯での焼成品で1古墳に樹立される埴輪の大半がまかなわれたものと推定される。

ところで、後述するするように、群馬県の地域で群集墳が成立してくるのは、下淵名古墳群と同じ5世紀後半を中心とした時期である。その普及は急激であり、各地に本古墳群と同時期の古墳群が認められる。これには必ず埴輪の樹立に伴う場合が一般であり、この時期急激に前代に増して埴輪の需要が高まったことが推測されよう。これらの古墳群に伴う埴輪については、今後詳細に比較検討を進めていかねばならないが、基本的には本古墳群の埴輪の諸特徴に近い内容を有していることが知られる。

一方、人物・動物埴輪の樹立は、現在のところ県内で最も古く逆上の事例は、保渡田古墳群の井出二子山古墳であり、これ以降、保渡田八幡塚古墳に見られるように人物・動物埴輪の大量樹立が首長墓を中心に一般化していく。⁵¹

これらの事象は、とりもなおさず、当地域における埴輪変遷上に一大画期をもたらしたものであったことが理解されることである。このことは、従来の埴輪生産体制の延長線上で理解するべきではなく、新たな体制の成立を前提にせざるをえないところである。外面整形のB種模ハケから縦ハケへの変化、人物・動物埴輪の出現がこのことを物語っている。また、この時期の大量需要に答えられたのは焼成法における密窯焼成の新たな採用であったと思われる。おそらく他地域から専門技術者が招来され、そのもとに専門的な埴輪生産体制が組織化されていったものと推測されよう。

(2) 群集墳の成立と下淵名古墳群

特定の地域を基域として選定し、そこに数世代にわたり小型古墳を密集して築造した群集墳が古墳時

代後期を理解していく上で欠かすことのできない重要な要素であることについては言をまたないところである。しかし、その残存状態が完全でなかったり、調査がそのごく一部であったりするために、その範囲の確定、構成する古墳の内容等について不確定な部分が多く、具体的な資料に即した群集墳研究は遅々として進まない。

近年の大規模開発の急速な進行の中でかつては調査のなされなかった遺跡、遺構にも調査が及ぶようになり、新たな知見が得られたり、断片的なものであった資料が厚みと広がりを加えた事例の数は計り知れない。下淵名遺跡の調査における古墳群の発見は、そのような事例の典型的なものの一つに数えられよう。群馬県の場合、いわゆる群集墳の成立は6世紀後半以降に盛んに形成されるようになるというのが従来の一般的な理解であった。この時期に築造された古墳が他の時期に比して極めて多いという点では、今でもこの理解が変わりはなく、当地域における群集墳形成の画期の一つをなしていたことは明らかである。しかし、成立時期に関しては大きく変更を迫られるようになってきている。最近では、群集墳の成立が5世紀後半の段階まで溯ることが明らかになりつつある。

下淵名古墳群をはじめとして、その形成が5世紀後半にまで溯る群集墳の存在が知られるようになったのは、ごく最近のことである。下淵名古墳群の調査と相前後して赤堀町峯岸山古墳群⁽⁴⁾、同地蔵山古墳群⁽⁵⁾、渋川市空沢古墳群⁽⁶⁾、粕川村白藤古墳群⁽⁷⁾等の調査では古墳群の全貌に近い状態が調査され、その内容が具体的に明らかにされている。これら5世紀後半に成立した群集墳では、いずれの場合も、これを構成する古墳が低墳丘の中小規模円墳（ごく少数帆立貝式古墳を含む）であることを最大の特徴としている。また、確認された主体部は、いずれの場合も箱式石棺に近い人体がぎりぎり入れるだけのスペースしかもたない堅穴式の小石椁であるという点で共通している。そのため発掘調査以前にその存在を知ることがほとんどなく、偶然に発見されるケースが大

第3節 古墳群と埴輪

半である。それゆえ、広域に面的な調査が行われるようになる以前にこれらが殆上になってこなかったのは無理もないところである。このようにして5世紀後半の群集墳の構造と個々墳の内容が明らかになってくると、従来あるいはその後調査された1～2基のこの特徴を備えた古墳の存在が知られている場合も、その周囲に同程度の規模の古墳が展開し、群集墳を形成している可能性が強いことが明らかになってきた。このように考えていくと、5世紀後半にまで遡る群集墳の存在は意外に多く、急激にしかも広範に成立したものである可能性が極めて強くなってきている。

そこで、ここでは下淵名古墳群を中心として初現期の群集墳の構造的特徴について具体的に検討し、さらにその成立の背景について若干考えてみたい。なお、初現期の群集墳としてあつかう古墳群は、次

のような内容を有するものとする。時期的には5世紀後半から末葉にかけて形成を開始した小型円墳を中心とするものであり、一部、6世紀初頭ないし前半にかかると。主体部形式として竪穴式の小石櫛を採用しているもの。また主体部が確認されない古墳についても、出土する埴輪、土器が5世紀後半を中心とした時期に位置付けられる場合は、当地域における横穴式石室の採用が6世紀初頭（陶色編年のMT15型式平行）を測らない事実から、竪穴式小石櫛あるいはこれに類する主体部形式であったとして大過ないことから、同列に扱われるものとする。

下淵名古墳群を構成しているのは、今回の調査で確認された円墳12基、方墳1基、土墳墓4基に加え4号古墳の南側に近接して埴町教育委員会で調査した円墳1基⁽⁸⁾、2、9号古墳の西側に隣接する竪穴式小石櫛1基⁽⁹⁾がある。また調査地中央部の東側に隣接

表7 下淵名古墳群調査古墳一覧

古墳名	墳形(直径:m)	周長規模:m			主体部	埴輪	土器	周区内F A	その他
		上幅	下幅	深さ					
1号	円墳(15~18)	1.25	1.0	0.1	削平	円筒			破壊が著しい
2号	円墳(17.5)	1.9	1.0	0.7	不明	なし			
3号	円墳(21.5)	3.5	2.0	0.9	不明	円筒、朝顔	土師器	○	
4号	円墳(24)	2.3	1.3	1.2	削平	円筒、形象	須恵器	○	
5号	円墳(11.5)	1.2	0.4	0.4	削平	なし			
6号	円墳(21.5)	3.0	1.5	0.85	削平	円筒、朝顔	土師器	○	
7号	円墳(10)	1.4	1.0	0.5	不明	なし	土師器、須恵器		部分的調査
8号	円墳(8.25)	1.15	0.65	0.4	竪穴式小石櫛	なし	土師器		石櫛内から刀子
9号	円墳(22)	4.0	2.5	0.8	不明	円筒		○	
10号	円墳(37)	4.5	3.5	1.1	削平	円筒、朝顔、形象		○	
11号	円墳(8)	1.2	0.4	0.4	削平	なし	土師器		
13号	円墳(28)	2.8	1.4	0.25	削平	なし			破壊が著しい
埴教委調査	円墳(18)	1.9~1.1		0.7	削平	なし	土師器、須恵器	不明	A区1号古墳

して確認される数基の円墳の痕跡も同様の内容を有することが推定されることから本古墳群に含めて考えることができる。方墳である12号古墳は、不確定要素が多くこれ以外の円墳と同列に扱えるものかどうかは断定できないことから、ここでは保留としておく。とするならば、本古墳群は、本来は15基前後以上の円墳と、5基の土壇墓ないし小石塚墓（この数もさらに上回る可能性がある）から構成されていたことがわかる。

古墳群の位置する地にはこれと同時期の住居跡は全く認められず、また古墳は比較的密集した状態で築かれていることから、確認された古墳を中心としたごく限られた範囲が墓域として設定されていたことが推定される。本古墳群は瀬名台地の南東側の縁辺部に位置している。境町の教育委員会がこれに隣接する台地の南側の縁辺部を広域に調査しているが、同期の集落は全く確認されなかった。周辺で確認されている同時期の集落としては、古墳群の西約700mの台地の南西側縁辺部に大規模に展開する出口・島海戸遺跡群が知られている。現在のところは本古墳群に関わる集落としてはこれが最も有力である。

古墳群の構成を見ると、墳丘の規模から直径20m以上のもの（3、4、6、9、10、13号古墳）と直径10m前後のもの（5、7、8、11号古墳）の2つのグループに大別され、1、2号が中間的な規模である。これに埴輪の有無を考慮すると、20m以上のグループの6基のうち5基が埴輪を有しており、残りの埴輪を有する1基もこれに近い規模である。一方、規模が10m前後の4基には埴輪をもつものは存在しない。古墳群内において相対的に墳丘規模の大きいもののみが埴輪を樹立したことがわかる。ちなみに形象埴輪を有しているのは、埴輪を持つ古墳の中では、1、2番目に大きい規模である。古墳の規模に呼応して周廻の規模も明確に差を示している。明らかに古墳群内における明瞭な相対的差異を表現しようとしていることが看取されるところである。

周廻を伴わない、すなわち墳丘を持たない土壇墓

は、古墳に付随するような形で近接して位置しており、これのみ単独で築かれているものは存在しなかった。これらは盗掘を受けているわけではなかったが、副葬品を一切伴わない点で、最も規模の小さい部類の8号古墳でも鉄製刀子1点を伴ったこととのあいだに差異が見いだされる。また、主体部の構造も、より簡易なものとなっていることは明らかである。しかし、この土壇墓の数はあまりにも少ないものであり、古墳に埋葬されなかった共同体の構成員すべてを対象として考えることは到底できない。これらについても特定の人々を対象とした墓域内に葬地を選定しえた特殊な背景を検討していく必要であろう。

本古墳群の形成は、基本的にはこれら5世紀後半に築造された、主体部を壜穴式の埋葬施設とする諸古墳をもって途絶え、6世紀の横穴式石室を主体部とする段階には直接連続しない。他地域に認められる初現期の群集墳でもこのような形成過程の特徴を示すものが多い点は注意されるところである。

次に下瀬名古墳群と相前後する時期に形成を開始する群集墳で、その全貌が比較的明確な地蔵山古墳群、白藤古墳群について見てみよう。

地蔵山古墳群は赤城山南麓端の赤堀町五目牛に所在し、通称地蔵山と称する低丘の独立丘のゆるやかな南側斜面に形成されている。確認されたかぎりでは55基が壜を寄せ合うように密集する中小規模の円墳（帆立貝式古墳1基を含む）から構成されている。このうち5世紀代に属するものは15基であり、これらに続いて6世紀から7世紀にかけて主体部を横穴式石室に変えつつ連続と形成を継続するものである。

5世紀代に属する15基はすべて円墳であり、主体部は14基で確認されたが、そのすべて壜穴式小石塚であった。残りの1基もその痕跡から同様の主体部形式であった可能性が高い。

本古墳群の場合も6基の古墳に埴輪が伴っていた。そのうち1基のみ外面整形に客体的にB種横ハケを含むが他は全て縦ハケである点で下瀬名古墳群

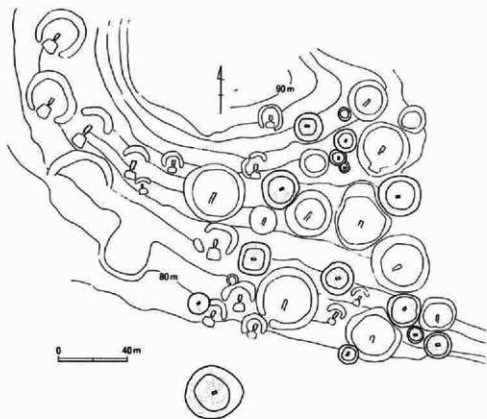
の埴輪の様相に近い。

古墳の規模は直径5m前後のもの3基(1類)、10m前後のもの7基(2類)、15m前後以上のも5基(3類)である。これに埴輪の有無および副葬品の組成を考慮して検討してみよう。埴輪を有しているのは、2類に2基、3類に4基で、1類には認められない。副葬品が出土した古墳は6基であり、2類が1基、3類が5基である。副葬品の内容は最大規模のもので鏡、直刀、鉄鏃等比較的豊富な内容が認められる以外は、直刀、鉄鏃、刀子、玉類のうちの一部からなる貧弱なものである。竪穴式小石塚の場合、盗掘を受けることは皆無に近いことから、副葬品の内容はこれが当初のものであったことは明らかである。本古墳群の場合も、下瀬名古墳群と同様に墳丘規模、埴輪、副葬品に相対的な差異を明確に表現していることが看取される。

白藤古墳群は赤城山の南麓、勢多郡粕川村膳に所

在している。古墳群の立地する付近は北から南へとゆるやかに傾斜する比較的平坦な丘陵性地形であり東および西側を小河川が開削している。確認された古墳は全部で52基であり、そのうち古墳時代前期の方形周溝墓9基、5世紀後半から6世紀初頭にかけての竪穴式の主体部を有するもしくはそのことが推測される円墳33基、横穴式石室を主体部とする円墳7基、不明3基である。横穴式石室は石室前に前庭を有する7世紀のものであり、古墳群の主体をなす5世紀代のものには直接つながらない。

33基の円墳のうち主体部が確認されたものは9基であり、うち8基は竪穴式小石塚、1基は木棺直葬である。残りの円墳は墳丘の削平により主体部を失っているが、周堀内にF Aの純埴積層が認められることや、出土する土器・埴輪の特徴、周堀の形態的特徴からこの時期に属するものとして大過ない。主体部が確認されているものは当時の地表面を掘り



第723図 赤堀町地蔵山古墳群全体図

込んで構築するもので、これらが墳丘規模の小さい部類に属していることから、他は墳頂部に構築されていたため、墳丘の削平とともに消失してしまったものと考えられよう。

墳丘の規模からすると、直径15m以下のもの15基(1類)、20m以下のもの10基(2類)、20m以上のもの7基(3類)である。最大は23m、最小は11mである。

これらのうち14基から埴輪が出土している。うち5基は外面整形にB種横ハケが認められるものであり、他は縦ハケである。後者のうちの6基から人物・動物(馬)埴輪が出土している。この時期の埴輪の推移を具体的に把握することが可能であり、興味深い。埴輪の有無と墳丘規模の相関を検討してみると、1類で2基、2類で5基、3類で6基である。1類に属する2基も直径が14.2m、13.9mと1類のなかでは大きい部類に属する。埴輪の樹立の有無が墳丘の規模の大小に相関している傾向は看取できよう。

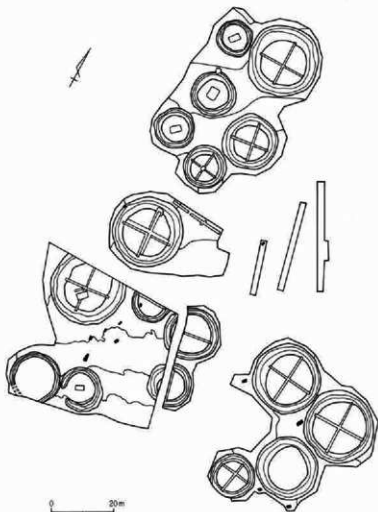
本古墳群においても古墳相互の間隙や古墳の付随的な位置を利用して、これと同時期の墳丘を伴わない堅穴式小石塚19基、土塚墓3基が発見された。これらは、古墳の分布に対応するように各処で認められており、群集墳の構成要素として定着していたことを物語っている。また、古墳のそれにくらべて極めて簡易な構造であり、その多くが、長さ1m以下で、幅が30cm前後の小規模なものである。成人一体を取納するスペースには程遠い。しかしこれらすべてを小児用とするのは短絡であり、2次的埋葬等の特殊な事情を考慮する必要がある。

白藤古墳群の全域を調査したならば、初期群集墳を構成する古墳の数は

一段と増すことであろう。しかし、これに直接続くのにふさわしい6世紀代の横穴式石室墳は存在しない可能性が強いであろう。

これまでみてきたように、群馬県の地域では、5世紀後半、とりわけその第4四半期を中心とした時期にこれまで見られなかった小型円墳が密集する群集墳の成立する状況が認められた。埴輪の特徴から見れば、基本的には、外面整形としてB種横ハケが消滅し、1次調整の縦ハケのみとなる段階、また密窯焼成が広く行われる段階にあっている。人物・動物埴輪の樹立が開始されるのもまたこの時期である。

低墳丘であり、貧弱な副葬品しか伴わない小規模



第724図 粕川村白藤古墳群全体図

(粕川村教育委員会「白藤古墳群」1989より転載)

表 8 群馬県の主要初現期群集墳

遺跡名	所在地	古墳群の概要	主体部	主な出土遺物	時期、その他
富田遺跡群	前橋市富田町	円墳5、墳丘なし石塚1	小石塚1、 他は削平	円筒(ヨコ、タテ)	5C第3～4四半紀、 6Cへ継続
西大室遺跡群	前橋市西大室町	円墳1、 墳丘なし小石塚	不明	円筒(タテ)	5C第4四半紀、7C 横穴式石室墳
茂木古墳群	勢多郡大胡町茂木	円墳3	小石塚7	円筒(タテ)、2基から小型鏡、 剣、矛、石突、玉類、滑石製 品、礫	5C後のみで断絶
白藤古墳群	勢多郡粕川村藤	円墳33、墳丘なし小石塚 19、土墳墓3	木棺直葬1、 小石塚8、他 は削平	円筒(ヨコ、タテ)、人物、馬、 2基から鉄剣、鏃、刀子、滑 石製品、玉類	5C第3四半紀～6C 初、前期周清墓群、7C 横穴式石室墳
道場遺跡群	高崎市浜川町	帆立貝1、円墳1	小石塚の痕跡	円筒(タテ)、土師器	5C第4四半紀
保渡田古墳群	群馬郡群馬町井出	円墳3、井出二子山古墳 の北側に隣接	不明	円筒、土師器	5C第4四半紀、6C に続かない
金敷平古墳群	群馬郡箕郷町金敷平	円墳3	小石塚3	刀子	5C後、6Cに続かず
行幸田山遺跡	渋川市行幸田	円墳2	削平	円筒(タテ)、土師器、鉄鏃、 朱	5C第4四半紀、前期 の方墳、周清墓、6C に続かず
空沢遺跡	渋川市行幸田	円墳33、方墳2、墳丘なし 土墳墓4	小石塚6、他 は削平	円筒(タテ)、土師器、須恵器、 剣、鉄鏃、石製模造品	5C第4四半紀、6C の横穴式石室墳に継続
上栗須遺跡	藤岡市上栗須	円墳1、墳丘なしの小石 塚1	不明	円筒(ヨコ)、家	5C第3四半紀、周清 墓群、6C以降の横穴 式石室群
上之原遺跡	富岡市下高瀬	円墳5、墳丘なしの土墳 墓2	削平	円筒(タテ、ヨコ)、土師器、 須恵器	5C第3～4四半紀、 6Cに続かない
塚岸山古墳群	佐波郡赤堀町磯	帆立貝1、円墳11、墳丘 なし小石塚2	小石塚14	円筒(タテ)、家、人物、馬、 直刀、鏃、土師器、須恵器	5C第4四半紀、6C の横穴式石室墳へ継続
地藏山古墳群	佐波郡赤堀町五日牛	円墳15	小石塚14	円筒(タテ)、人物、馬、直刀、 刀子、鏃、土師器、須恵器	5C第3～4四半紀、 6C横穴式石室墳継続
下瀬名古墳群	佐波郡境町下瀬名	円墳13、墳丘なし小石塚 5	小石塚1、他 は削平	円筒(タテ)、形象、刀子、土 師器、須恵器	5C第3四半紀、6C に継続しない
三筆古墳群	佐波郡境町上瀬名	円墳2	小石塚2	円筒(タテ)、家、直刀、鏃、 玉類、土師器	5C第4四半紀、6C に継続

主体部の数は1古墳に複数の主体部が含まれているものも含めて
いる。円筒地輪のカッコ内のタテ、ヨコは、外面形状の主体をなすも
ののみを記している。「ヨコ、タテ」とある場合は、古墳群内に横ハケ
を主体とする古墳と縦ハケを主体とする古墳が併存することを意味し
ている。古墳群の関係文献は都合で割愛した。

な古墳が群在する点を重視するならば、前代の方形周溝墓群の系譜の延長線上で理解できなくもない。しかし、以下に掲げる両者の相違点を重視する立場から、この理解はとらない。

初現期の群集墳に属する古墳はすべて円墳を採用している。5世紀前半段階までの円墳は、基本的に高塚墳であり、主体部の構造、副葬品の内容は前方後方墳、前方後円墳等の首長墓の次にランクされる支配者層のそれであり、方形周溝墓との間には厳然とした断絶が存在した。それゆえこの種の円墳の数は、前方後方墳、前方後円墳のそれに近いほどに僅少である。群集墳の成立以降もこのような位置を占める円墳は依然として築造されたのであり、二段築成の高塚墳に石棺あるいは竪穴式石室等を主体部とし、甲冑類、刀剣類、石製模造品をはじめとする豊富な副葬品を有していた。これと同一の墳形を採用することになった意義は大きいと言わねばならない。また、それ以前の段階には高塚墳のみに限定されていた埴輪、葦石も併うようになった。⁽¹¹⁾

群集墳に埋葬される被葬者層は、おそらくかつて方形周溝墓に埋葬されるような階層であったであろう。これを前方後円墳を頂点とする古墳体系に組み込む形で、その末端部分に位置付けられたものと言えよ

う。これまで見てきたように、群集墳を構成する諸古墳相互の間に明確に階層差を表現しようとする支配者層の意図が埴輪、副葬品のありかたに認められる。埴輪の設置の場合、当地域の支配者層が新たな専門技術者を他地域（畿内地域）から招来することにより、密窯を採用し、量産体制を組織化したことによってはじめて可能になった。

群集墳の成立は、単なる葬制の変化として位置付けるべきものではなく、極めて政治的意図の強いものであったことは、多くの先学の指摘してきたところであるが、当地域の初現期の群集墳の状況は、まさにこのことを如実に示していると言えよう。

5世紀後半の時期の群馬県の地域は、大規模農耕開発による生産力の飛躍的増大が進行し、それ以前の体制を打破して、各地に小地域の地域の統合を達成した地域首長層が輩出してくる時期にあった。⁽¹²⁾ このことは、当然、共同体間における、あるいは共同体内における階層分化を一段と進行させたことであろう。この変革期のなかで強固な支配を実現するべく、新たな民衆支配の原理として首長層が積極的に群集墳を採用していったものと思われる。

(右島和夫)

註

- (1) 円筒埴輪の用語については、段の呼称以外基本的には、川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』62-2・4) 1978によった。
- (2) 南栗芳昭・若狭徹「保渡田三古墳の埴輪」(第6回3県シンポジウム「埴輪の実態 普遍性と地域性」) 1985
- (3) 右島和夫「東国における埴輪製法の展開とその消滅」(『古文化談叢』20集下) 1985
- (4) 松村一昭「赤瀬村塚山古墳1、2」赤瀬村教育委員会 1976、1977
- (5) 松村一昭「赤瀬村地蔵山古墳1、2」赤瀬村教育委員会 1978、1979
- (6) 大塚昌彦・小林良光らによる空穴遺跡1～8次の報告(茨川市教育委員会)に詳しい。
- (7) 小島純一「白藤古墳群」船川村教育委員会 1989
- (8) 渡沢啓史・坂本久純・女屋和志「下関名遺跡発掘調査概報」境町教育委員会 1978
- (9) 小林敏夫「明神遺跡発掘調査報告書」境町教育委員会 1975
- (10) 小林敏夫・坂本久純「土橋・三ツ古塚・出口・島海戸遺跡発掘調査概報」境町教育委員会 1977
- (11) このことに関しては、右島和夫・徳江秀夫「群馬県の円墳」(『古代学研究』123号) 1990で述べた。
- (12) 能登 健「三ツ寺遺跡の成立とその背景」(『古代文化』42-4) 1990
- (13) 右島和夫「古墳から見た5、6世紀の上野地域」(『古代文化』42-7) 1990

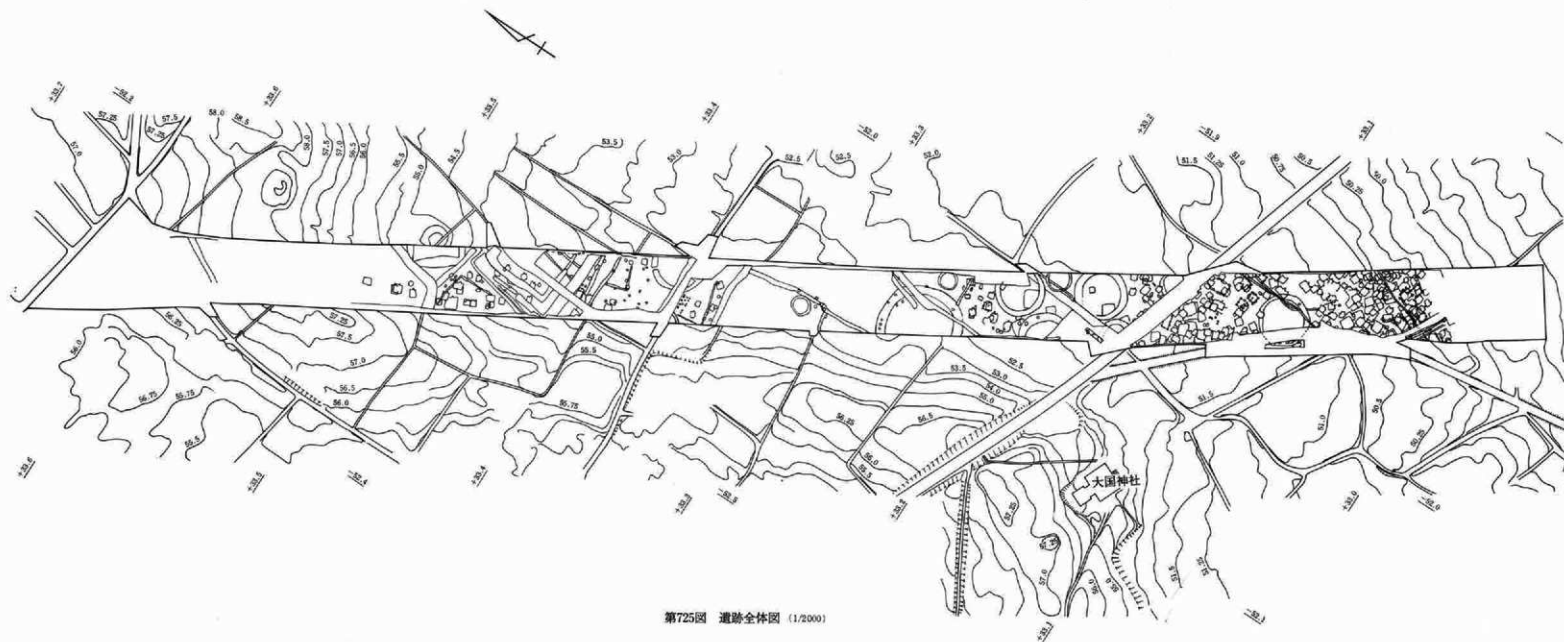
第4節 胎土分析結果について

ここでは第三章第14節に掲げた、本遺跡出土の後期弥生式土器の胎土分析結果について総括的にまとめておきたい。

分析の主な観点であった、型式に対応する胎土の異同に関しては、当初の予想通り岩石鉱物組成に明瞭な差異が現れた。そして、それぞれの岩石鉱物組成の特徴から起源物質（推定母岩）は、二軒屋式が花崗岩、赤井戸式が火山噴出物と堆積岩、樽式が火山噴出物と推定された。分析資料はそれぞれの土器型式の代表的な胎土を示すと考えられるものであり、少なくとも本遺跡においては型式毎に異なる素地を用いて製作されたことが明らかである。特に二軒屋式については、石英と長石がかなりの高比率で含まれることが他の2者と区別する大きな特徴であり、先に肉眼観察で得た推測を裏付けることとなった。また土器製作の材料は基本的にその地域で調達する事を前提として考えれば、本遺跡出土の二軒屋式土器の製作地は、花崗岩を推定母岩とする岩片や鉱物が多量に、かつ容易に入手できる地域が有力な候補地と考えられる。群馬県内でこれに該当する地域は利根川上流域か渡良瀬川上流域に限られるが、栃木県平野部を中心とする二軒屋式の分布実態と照合した場合、この二地域を製作地に比定することは難しく、やはり第三章第14節で推定したように、鬼怒川以東の地域とする見解が妥当であろう。少なくともここで得られた分析結果は、二軒屋式が本遺跡周辺地域で製作されたものではない事を明瞭に示している。一方、赤井戸式と樽式の胎土における差異は、堆積岩系岩石鉱物の有無に看取することができ、更にこの特徴によって製作地をそれぞれ利根川北側と利根川上流地域に推定している。この差異は二軒屋式と他の二者との違いほど明瞭なものではないことから、型式とは無関係の個体差による可能性も考えられ、単なる製作地域差としてのみ解釈する訳にはいかないが、両型式土器の分布実態からすれば異

なる地域で製作された可能性が高く、また土器型式として定立する限りそれは当然の事とも言える。この場合、推定される製作地に関しては、概ねそれぞれの型式の分布地域に含まれることから、大きな矛盾はないと言える。以上のことから、本遺跡周辺で製作された可能性が最も高い土器は赤井戸式であり、二軒屋式の大部分は搬入品との推定が成り立つ。また樽式については近隣地からの搬入品の可能性があると考えられよう。これは下淵名塚越遺跡に限定した僅かな分析点数によって導かれた推察であり、今後蓄積される他遺跡のデータや異なる分析方法によって検証し、再評価すべきことは言うまでもない。

(大木紳一郎)



第725図 遺跡全体図 (1/2000)

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告書 114 集

下淵名塚越遺跡
(本文編)

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年3月22日 印刷

平成3年3月29日 発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社